

大大 正正 八八 年年 六六 月 月 五.二 日 日 發印 行刷



發編 行輯· 者兼

右代表者 東京府豐多摩郡戶緣町大字下戶緣五十八二夫 早稻田大學出版部

印 即 東刷 刷 京者 所 市 牛渡 日清印刷株式會社 込 區邊 榎町 七太 番 地郎

振替東京一一二三番東京市牛込區早稻田 早 稻 田 大學 Ш 版 部

發行斯

六一〇

@·

方羈盆猶終。方二祠。自,過"八致。 言, 祠 神, 者 彌 衆、 然用 其 效 可。 睹。

寬

祠

太之

视

【校異】 諸 市申。 0) 神 の字 無し、方士言

者、

桐神を

之覽,者,而神,名太 禮馬其論語山史 則至見來究川。公 若其自觀而日,作 俎表古方封余 存。豆裹,以士禪、從。 焉珪後來祠焉巡, 幣有,用,官入,祭, 之君事,之壽天 詳子於言,宮地 得鬼於,侍,諸 酬以,神。是。祠神

縻。怠,以,無。士 歲。皆 主,則 神 禮,赤 弗厭、大有。之而如其, 祀, 諸凡星 絕方人驗候還,其人去。神六五

冀、士跡,而祠。徧、故、終、則,明祠

其怪解。孫人。五上已方凡

真。迂,無,卿 入。嶽 封 祠 士,山

遇之為公神於今則已年皆舒

自,語。其之海。四禪。官、所、他、領、官

此矣效候,求瀆其弗與名之,以,

之然。天神,蓬矣後主。祠。祠,至。歲 後終子者萊,而十他,各行,如時,

之言、言 3,

至

岩、

组、

豆珪、

之》

本 紀 終

六〇九

上命。五未,其,

山子山風公

封 禪。 焉、 其 後 令。帶,

封,親,今享祭。其。閭下而夏有破候。之,薄郊天蟹常後也、肚,加。遂。差神而 忌,祠、子、常山、五故南禪還、世動物、不

及家,祠。作至,禪、士 閭。脩 一禪,一 羊年上、 行脩。年

祠,

駒木枝 耦 駒、代、牢、具 其、宛、雒 是作馬、異 馬、及 駒 具、芬 明 焉 陽、歲 太 馬,及駒具,芬明焉陽,歲 初 る、義異 精介代。諸、焉 五 芳 年 』 虞 西 元 言行,名獨色。不有 初伐, 太、 が元年、 同言 乃,川、帝、所,乃言。以,宛, 因の 作用,用,用,勝。命,雍方,蝗 駒,駒,而, 而五 祠,大,等無 意他,者,行,以,官、畴。 詛,起, · 五禮、悉,親,木進、無。 匈丁 五字如。以,郊。耦 時。牢 奴 夫

故,木用,馬,犢熟,

大人

夜復日,祠。山至其、校泰方,其、炼、崙、於 ^是始、天上以,推、後 ^是山,黄 顯 堂 道 下 以上。帝,而,下。入。房。 高、上。帝,而,下。入。房。 作帝授,明一者歲量舉,并泰而始,以

望親。乙然。上。亦至

洞。禪。酉。益 考。

等皇增帝,十歷,二

将 朔 一 莫 至 しとなす 以上月 驗 海 なす

者也日公上程庭海午十者東東北其方燒孫還,考焉將前一莫至。 後土黄卿以壽 天多。帝日。柏高 子言,乃,黄梁 又古,治帝裁。作 蓬高柏 遣入。 朝帝明就故、秦里梁冀海 諸王庭,青朝, 之祠。裁遇。及作。 侯,有,明 靈 受, 甘都。庭、臺、計, 泉甘甘十甘 甘泉泉二泉

此に

よれ

ば 毋

其、浮、東、其、西通、天乃、黄其、甘枝泉名江、登、明歸、囘下、下、帝、明原中 山自。禮、年,中等詔,時、年。殿防內中、湖,尋潛多、道,祠、日、封、伐。《 下 則 朝 北 陽 之 上 巡 靈 天 則 朝

至,出、天巡, 之,星,旱、天鮮, 琅 樅 柱 南 春 其, 意, 旱, 夏

坐。脩。高,入,從,蓋。堂人明時,初,久養令,祠,作,以,西通。圖公堂,有,天養 高則明拜南水,中玉奉明子灣歡 皇祠。堂。祠。入。圜《有。带高。堂、封。尽奉帝。泰汶、上命《宫"一上。旁。處、泰"心山、高 祠一上。帝,日,垣,殿黄未。處。山。其潜 坐,五如,焉昆爲,四帝,曉,險-泰川灣 對流帝,帶,於,命後面時,其,不山流作焉 之於圖、是天道、無,明制敞東灣時間及,上子上壁、堂、度、上土北、作 后堂,五令、從清有,以,圖,濟欲、阯。、為 土,上年奉之樓茅,明南治古

復、使。 禹 卿, 之 故 將. 跡。卒, 焉 塞, 决 河, 河 徙,

以被越神巫。十有,越是。是校

上立。歲一效人,時一流、大學 雞帝越、後昔俗、旣 百祝世東信,滅清 越始,鬼,洞,謾。甌鬼,南 作用,而安意、王而越,無 焉以。臺,故。敬、其,越 雞,無。衰鬼,祠。人 **卜**、壇 耗。壽 皆 勇 3、字 之,天越六數言、作为 始、無

祠

作の

毋。韶,塞* 作

日,河,夏《按始神作,觀,作,僊 緱 遽、公 廣遷通使蜚人、氏以孫 甘興;有; 泉通芝 諸之天卿、廉好城故,卿 防天生城宮屬。臺,持、桂樓置。不日。 生。臺,殿' 氏室,於,置。節,觀,居,脯見。愿 芝, 若。防, 九有。內 蓝,光中. 臺、更下、候、作、令、宜、可、而、 赦。云,天 天 乃,子 漢 菜 臺 下,下,為,臺 置將神益長可為上

前招,人,延安,致,想,往,

殿,來,乃,壽則且,如,常

元寶至。上、侯至。 年, 鼎, 九 北, 暴,海 出。原至,病、上 爲五竭一望 元月石田囊 鼎,返,巡,死遇; 以,至,自,上蓬 今甘遼乃。萊 年,泉西遂焉 爲,有歷,去,奉 元司北並車 封言,邊,海子

災に 作出 無風雨 雨、 返、蓝、 甘いの

其,有獨有,其,泉等無し、報,司見星秋。 報,可見星秋 德言,其弗有 星,同,星,于星 云,陛出"三 弗" 其,下如;能于 來建。瓠,望東 年漢食氣井 冬家. 頃. 王後 郊,封復朔十 雍,禪,入,言,餘 五天焉候沿

光昭帝, 饗,明,衍,還, 信厥沒拜 星維、祝, 昭、休祠。 見,祥,泰 皇壽 帝星 敬。仍整 拜。出,日, 德

自,薦,是遣。留。城。若。其、校 Z 臨萬歲方之拜。云春 塞。里早、士、數卿、見。公 其` 星、 决沙水水、日為天孫 出 河,過,是神 毋。中 子 卿 留,洞、天怪,所大天言, を旗 二泰子朵,見,夫,子見, に鉱 日山。既芝見。遂於,神 を瓜 沈還。出,藥,大至,是人, 祠,至,毋以,人,東幸,東 泰淵 而瓠名。千,跡,萊、緱萊 去。子。乃,數,復宿氏山。 祝耀星

始后不屑,于兢韶、還畫山、兕獸 賜禪敢如禮兢。御坐有然。旄蜚 民肅遂有樂焉史明白後牛禽 百然登。望,脩、懼、朕堂、雲去、犀、及 戶自,封、依祀,弗以,羣起、封象白 牛新泰依泰任眇臣封禪,之雉盆。 一。嘉。山。震。一、維、眇 更、中。祠。屬。諸 酒與至於著。德之上表其,弗物,封、 十士於怪有非身,壽,子夜用。頗、縱 石,大梁物象薄。承、於、從、若。皆以、遠 加,夫父欲景不至是封有。至,加方, 年更而止光明。尊制禪光泰祠。奇

依いに

無し、依

々は

る、従う 義なり

ま封、加、

BL

於、士已命游及なりを持た。 上言,禪。侯,事,詔, 欣蓬泰春春日。 然、萊、山、治、山、古、 庶諸既即,諸者 幾,神無。泰侯天 遇。山。風山,有,子 之若雨下朝五 乃 將 蓋 天 宿, 載。 復可,而,子地一, 東,得方既其巡

復天蛇八

作。下。丘十

事如。歷孤

の二条。一年、一次、東京の二条を全年、村の二条を全年、村の二条を

原封頭、治之田、其、奉高 有、赦。高

聽。過,稅,博

有"赦"高

間,人及公言,見、夜持、者驗、疏、巡、令。 使也。星已具,見節數者言海人。 求。宿臣。忽一跡,一常千乃,神上,上 僊留。有。不老甚人,先,人,益怪行。石, 人,海言。見、父,大長,行,求,發,奇禮立, 以,上老上牽類數候,蓬船,方,祠、之, 千, 與、父,既 狗, 禽 丈, 名 萊, 令, 者 八 泰 數,方則見,言,獸一就,山,神言,以,神,山, 士、大、大、吾云、之至、人、海萬,齊願 傳以跡,欲、羣則東公中,數、人上 車。爲,未見臣不萊孫神然。之遂 及。僊信。巨有,見。言,卿山,無。上東

盡、土、泰其、侍有、禮、封、侍天士、四 用,禮,山,事中,玉封,泰中,子言,月 樂,天下皆奉牒,廣,山,儒至,封還, 焉子阯,禁事書丈下,者,梁禪,至。大 江皆東明子書二東皮父人奉 淮, 親, 北, 日 侯 秘, 尺 方, 护, 禮 人 高。 間,拜肅下、上,禮高。如,薦祠、殊上 一見然陰泰畢,九郊紳,地不念, 茅、衣、山道。山、天尺祠。射,主,經。諸 三上,如,丙亦子其泰牛、乙難,儒 育,黄,祭、辰。有,獨,下。一,行、卯。施、及。 爲。而,后禪、封、與則之事,令、行。方

牽擇 德,以,禪、孫禪、上欲、名,公官 拘儒於嘗皆卿儀於上也年王 於既九接、致、及、數是稍秦九制 詩以皇神怪方年。乃,上,皇十之 書不而、遷物、士至、令、卽、帝、餘望 古能頗人與之且諸無不,日,祀、儒 文辯采、蓬神言行、儒、風"得"封、射、采、而明、儒、萊、通、黄、天"智、雨上、者牛,封 不封循、士欲、帝子射遂封合事禪 敢,禪,以,高,放,以"既,牛,上,陛"不齊尚 騁事,文光世黄上、聞、草、封、下死人書 上又之此帝封公封矣必之丁周

東极崇是云室三ののる校是禮與為 不、異 能以霸,善。偃示。 山嶽 戶,不山幸。 対に 作长、盡,周、又羣 封。言、下、緱 3、神、罷、霸 日,儒 封、遷、 草 太問,聞作氏。 木の字 室,下。若非禮, 事於人諸屬太羣 葉 奉下有。登》 あ 洞。不,言,中 を弗、封諸或、 絀、字 優、下上用。事,生日, 生。 命。言、萬嶽 霸旗依於,行不不

日,於,歲、太

乃,

治。 宮 觀 名 山 神 嗣, 所, 以,

十后十瑟,禮、祀、祠、日、年、其、致爱望、除意 五土,五悲或天而民以年歌 弦始、弦、帝日、地、無間、好、既下 神河 及。用,於,禁泰皆樂而音滅。也 箜樂是不常有, 豈尚見南。 南、 此 篌,舞,塞,止.使,樂稱:有,上越, 益南故素而,乎鼓善上 自, 召,越。破,女,神公舞之,有,幸 此歌禱其鼓亂卿之下。嬖 あり 起。見,祀。瑟,五可。日,樂公臣 以 作。泰為十得古今卿李 に族な 二弦而者郊議。延气

瑟の上に琴の字あり、無きを正し 1 衣對。吾祭,乃日。 冠,日,聞。黄遂古。 黄黄帝北着 地、 帝帝家,巡"先, 已不橋朔振 **德**死,山_方,兵, 侯

洞。既。 生 祠。既 《 友 上 今 澤, 勒 澤, 其, 議, 泰 至, は 天, 有, 長, 旅來 封得為旅葬也上萬封上禪寶且選典或日。還禪議 用,鼎,用。 事。 希。上 曠 與 泰 一の澤 絕。公山。 の 字 莫。卿 先。 作作 知。諸類

臘泰休太是一,有, 間時,滿,史 夜 祀。壇,福,公有。陽。焉 三以兆,祠美有 公 歲明。祥,官光司 卿 天應,宜,寬及。奉。言, 子令因,舒晝瑄。皇 一。太此等黄玉帝 郊 祝, 地, 日, 氣 嘉 始, 見、領光神上、牲,郊 祀,域.靈屬,薦見。 及立,之天響泰

人、誅言, 使, 將太

微利,其微,使。奉。

穿 師,隨。不以,

不見。泰

を母

雍の の字 一,荆,其,。 校校 下の 無 上 星,幡爲, 及、郊の 1= 空、 桐、 伐,臘、字 0 南 間、あれいり 字前に 越, 鋒,斗告 作、独大、 秋の 名。登禱。 24に作 日,龍,泰宇 為天 牡 贫禮壇

三畫

爲。日

泰月

一,北

秋

誕,少非得。上遊,其。后被繼五山,而。兵 積。寬有,母,天線多為是上利、祠。五禧。 以。假。求、效。子氏公 使乃、妄上利則" 歲,神人文親,城、孫 乃不。主,成幸。上卿 隨、五見、人。軍 史 可來,人五緱有,候 致。言。主。利。氏物神。 於,神求。乎,城。若。河 是事,之,卿礼、雉,南 郡事其日,跡,往見。 國如"道、德問,來"遷 各迁非者卿城人

| 「「大」のでは、 | 「大」のでは、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、 | 「、

 得。乃帝、五國、山侯、封、山、封曾之獨 與斷且。山、華八、而、則封、禪、孫、時、有、 神斬、戰。黃山而,神能。申,七也漢此, 通非。且。帝首三、靈德、功十寶之 黄鬼學之山在,之登日二鼎聖書 帝神, 德, 所, 太蠻封、天, 漢, 王, 出, 者、日, 郊,者,患,常室夷居,矣、主、唯而在,漢 雍百百遊泰五、七黃亦黃與高興 上餘姓與山在,千帝、當帝神祖復常帝。歲非神東中天時上,得通之當 宿然,其一會、萊國下,萬一封、上,封孫黃 三後道,黄此中名諸上,泰禪、且,帝

黄號世天黃不龍黃山口明冢月、帝,於,因,乃帝得七帝,下也延是鬼 吾是名,抱,之上,千黄鼎黄者也史 視天其其,弓,乃餘帝既帝甘其,區, 去,子處,弓、百悉,人上,成。宋。泉後號。 妻日。日。與,姓持:龍騎。有,首也黃大 子,嗟鼎龍,仰。龍。乃、羣龍山,所帝鴻。 如乎湖、胡望、額、上、臣垂、銅,謂接。死、五 脫吾其顏黃龍去,後胡鑄寒萬葬。 罐, 誠。弓,號,帝 韻 餘。宮 韻。鼎,門、靈 雍。 耳。得。日、故。既。拔、小從。下、於者明故 乃,如,鳥後上,墮,臣上。迎,荆谷廷鴻

可, 心知,其意,而合,德,焉、鼎宜,見,於心知,其意,而合,德,焉、鼎宜,見,於

方 能神 偲, 矣

歲 議,因,有,甘 得,勝 款 視,魏 其, 较 數、請,以,黃泉鼎,勝識得,惟,夏 不尊、祭、雲從無以怪鼎,后六振 登,寶云、蓋、行、姦聞、之,鼎、土、月震 故。鼎,至"焉、上"。 天 言。大、營,中。作 巡,天長有,薦,乃,子吏、異,旁、肦 祭,子安. 應,之,以,使,吏於見。陰, 后日。公過,至"禮,使,告,衆地,巫 土, 間, 卿上中祠, 驗河鼎如錦 祈。者,大自,山迎、問。東、文鉤爲 爲,河夫射。晏鼎,巫太鏤、狀、民, 百益。皆之,溫。至。錦,守無。掊。祠。

壇降,承,考羊淪于嘗,人繫,神為,姓, 下蓋、休、之祖、伏、夏鬺也終,鼎出資 報若無休牛而商烹禹也一,哉穀, 祠。獸,疆。今 鼐《不周上收,黄一,有今 大為。合鼎鼎見德帝九帝者司年, 饗、符、兹、至、及、頌、衰、鬼牧作,一皆豐 惟路中甘熏云,宋神之寶統。日,庶受。弓山泉不自,之遭。金,鼎天聞。未 命,乘有、光虞,堂祉聖。鑄、三、地昔,有, 而矢黄潤不徂,亡則九象萬太報 帝、集,白龍、鰲、基、鼎與、鼎、天物、帝鼎 者獲。雲,變,胡自,乃,遷、皆地所興。曷太 百天之。 一百天道。 一百天之。 一百天子又刻。 一百天之。 一百天一。 一百天之。

口, 致, 决。用。足, 不見, 之長方, 既 藥 文 恶,也可。臣,予。信。安不美,不,誅,大,成, 敢,臣塞,臣方,臣,期疑言盡,文因,已 言、恐、不之臣又羡大多。及、成,樂死。 方,效死師數以門言,方見。後成而 哉,文之日,言,爲,之日,略欒悔,侯、欲。 上成藥。黄康康屬,臣而、大,恨、求、自, 日,則可。金王王、顧、嘗、敢、大、其見。媚。 文方得可康諸以往爲、悅、早。言於 成士僊成王侯、爲來、大大死方、上 食。皆人,而又耳臣,海言,爲,惜天乃, 馬掩。可河、不不、賤、中,處、人、其子遣。

九天天五憂,方,然。人。各、令、之,乎肝, 江,道士利河關。後神佩、有,陛大死。 決將將將決旗,可人其親下日,耳 四軍軍軍而旗致。尚信屬必臣,子 瀆, 印, 地居、黄自, 也肯, 印, 以, 欲, 師。誠。 間制士月金相於邪乃。客致非能, 者認將除,不過是不可。禮,之,有。脩 河御軍得,就擊上邪使,待,則求其其 溢。史大四,乃,是,使,致,通之,贵,人,方, 阜 昔 通 金 拜, 時。先, 尊, 言, 勿, 其, 人, 我, 陸禹将印,大,上驗、其於卑使者何。 隄 疏。軍 佩,為。方. 小 使,神 使者,求。愛

舒東、瘞雀五祀。等荅、帝、其、按得。二命、等,始,而、壇、后、議、也、朕明是一、元、不 議、立、從、塩、土、天有親、年、建、角、以、宜、上后祠、一、后地、司郊、冬、元、獸、長以、 上后祠一后地司郊。冬点、獸、長親、土、衣、黄土、牲、與而天光日。星, 望,祠,上,犢、宜。角太后子杂元日。二, 拜、汾黄、太於、繭史土、郊、荒符、元數、 云、光、 如、陰、於、牢、澤、栗、公、毋、雍、 の字 上雕是具中,今祠 祀、議、無 元。 0 帝,上天已愿陛官 則日, 元、日。 禮,如,子祠、丘下寬 以,建 禮今 禮寬邃盡。爲親,舒不上 郊。元.

王姫、侯、師、膠。其、る俗を巡、君、以、下、畢、不子姊、已、東、春上なり郡以、三韶、天 相 工,為,而 宮樂 上 中,為,康為,人,成 丘 縣,奉,十日,子 に作 得王王》廖故侯 相而后東嘗,上 無 祠 危、康毋、王、典書、 泰焉周絕。陽。 以后子尚文言。 作る 山是後,遠,而 法,有,康方成疑? 矣歲爲矣還。 置いた 天 周 難。過 康淫王而,將大, 、園を圓を圓 后行死業軍欒 子子存。雒 始,南其。陽, 聞。與他成同;大。 繭

作の

之人、之の字 時。時。可。佐,壽 遂。少。神 上 乃,醫 文 畫來,得,日,宮。幸、愈。君。召、言、無。成 言,來見,大神甘强神置。日,所死, 其に 然。則聞、禁君泉與君祠。上不。明 作る 常風其司神病我言,之,郡。致,年 以,肅音,命君,良、會。日,甘有,至。天 夜,然與之最已甘天泉。巫不子 天也人屬貴*大泉子及病愈病 子居。言皆者、赦、於、毋、病、而游鼎 减、室、等。從、大天是憂,使鬼水湖。 然。帷 時 之 夫 下 病 病,人,下 發 甚。 後中去,非其置。愈流病問、之根巫

後 三年 ては 神君 有 司 0 欲する 言、元、 、漢志に 所は言ひ行ひて 以, 天 る、等、宮の 無 也者其上旗者。

鬼,雲

又

嶽 在, 祀, 天 以, 之 郡。山, 爲 郡、 然儿 後-五.

各神上賜於鬼翁上其 無し 勝物欲多乃,貌,方有,年 日,不,與以,拜,云,術,所,齊 駕。至,神客少天蓋。幸。人 他、縣、 辟。作。宫禮。為自,致。夫翁 償之、受之 更の 作, 車, 不, 言, 軍, 見, 及 卒, 方, 甘及象,日,賞焉竈少見

> 人其。偽子奇飯。其,神。泉 掌後書,疑、殺、牛、方而宮, 之則 於,之,而詳,益置,中 屬,又是有,視,弗、衰、祭為, 矣作。誅、識之,知神具。臺 柏 文 其,得。也不以,室, 梁成手書,言,至,致,畫 桐 將 書,書,此,乃,天 天 柱承 軍,問,言牛為清神,地 而之,甚,腹帛居。泰 露 隱,人。怪。中。書,歲 之,果,天有以,餘諸

日の字あり、天子疑、之有、識す、いつはるなり、弗、知也、也【校異】方術、術の字無し、 り、此にては天子之を疑ひ、其の手書を識れ との意なり、故に下文に之を人に は天子自ら 其 伴 0 手 に作 問 書を識れる る、 る者 有の 字 意な

一角なり

に作るな無

は鷹の

屬

1=

應一獸,下雍以,後。 天更書濟 赐、若合之牛,蓋。肅、獲、發子以,獻、北 錫然 于以 麟、祇、一 瑞 合。牛,蓋。肅、獲、發、天 天燎,云,郊角,應,苑。 地。賜。於。祀。獸,造。有, 諸是上若,白白 侯。以帝熙。金,鹿 白薦報然焉以 金,五享,有其,其 以時。錫可明 皮, 風。時一日,年爲。

皇"受,乃於, 遷,之,上是 子以。獻北。然為 弟,償,及為 於之,其天 真常旁,子 定山邑,且 以, 王天封 續有,子禪

る、山君、山の字無し、

能,寬以金,之而,不期上禪海成、致。 得、舒、爲、矣、屬、遣、合、生、見、則、中以、物、 而受、化、居、而方則僊安不逢為而海其、去、人、事、士、隱、者、期死、萊、飲丹 上方,不之化入於通生黃僊食砂 燕求死,李丹海是蓬食。帝者器可 齊蓬也少砂求天萊巨是可則化 怪萊而君諸蓬子中棗。也見為為 迂安使、 叛藥 萊始。合大、臣見、壽、黄 之期黄死。齊等安親,則如。嘗,之,益。金, 方生,錘天為期祠。見瓜游。以壽,黃 士奠。史子黄'生竈,人,安海封而金

無し、入以主、方、入場生の三字あり、始れ、他、以為少君神、人の字無し、見。安

親、安、神產

無方,其通南、帝、日、 洞,之郊。古天

五八七

六江 年_王,王, 崩。以,孝 帝太廖 初。子 東 郎,即,王,年 位。位。為。栗 尤。為"太太 敬孝 子、子 孝 武 景、爲, 皇 之帝,十臨

七年に栗太子廢せられて臨江王と爲るや、膠東王を 后といふ、孝景四年に皇子を以て廖東王と て尤も鬼神の祀を敬む、「孝武皇 帝初めて位にい即きて孝武皇帝と爲る、孝武皇 帝初めて位に 太子と爲す、孝景は在位十六年にして崩じぬ、太子位 孝武皇帝は孝景白 皇帝の 中子なり、母を 為す、孝景 卽

祀,孝

、孝景に十三子あり、帝は其の第九

正安 年、 漢 度,薦 也,紳 興 而。之 上屬六 鄉當皆 儒望。餘 術-天歲, 招*子矣 賢封天 良,禪,下

> 廢。綰 人。竇 巡 議。趙 臧,微。太'狩 何。后 封 立,王 得治,禪,明 臧 自 改。堂, 趙 黄 殺、綰 老歷城以 等。言,服南文 所。姦不色,以,學, 與利,好事,朝為為 為事儒未諸公 召、術,就,侯,卿、 皆案、使。會草欲、

者、者 、薦、執、封、 の字 禪書には艾安に作る、 、薦を搢に作る、縉・搢・薦共に通 無し、 以下封

雍. 學 郊之 年 見、士竇 公 太 畴-孫 后 後常男明 崩 歲年 年 一。上 郊、初、徵、 孝文施

が上言するに及び、天子をして恩を下すの令を布き、一人にない。 大徳を 大を西の方京師に向 はしめたり、是れ畢 竟諸侯の太兵を西の方京師に向 はしめたり、是れ畢 竟諸侯の太兵を西の方京師に向 はしめたり、是れ畢 竟諸侯の太兵を西の方京師に向 はしめたり、是れ畢 竟諸侯の太正盛んなるに際し、而か も錯は之を治 むるに漸を以て盛んなるに際し、而か も錯は之を治 むるに漸を以て盛んなるに際し、而か も錯は之を治 むるに漸を以て盛んなるに際し、而か も錯は之を治 むるに漸を以て なり、後の主父偃

諸侯をして各、封邑を其の子弟に分たしめて、次第に活侯をして各、封邑を其の子弟に分たしめて、次第に音を配の分るゝ機は何と謀を以てせざらむやと、「四・濟南・萬川・膠東是れなり、合従、南北を従といふ、南北の國攻守同盟するをいふ、以安、天下の安寧となれり、夫れ安良の子弟に分たしめて、次第に諸侯をして各、封邑を其の子弟に分たしめて、次第に諸侯をして各、封邑を其の子弟に分たしめて、次第に諸侯をして各、封邑を其の子弟に分たしめて、次第に諸侯をして各、封邑を其の子弟に分たしめて、次第に

孝武本紀第十二

一級を賜ひ、天下の戸毎に百銭づつを下し、宮人を免諸侯王より以下民の父の後嗣たる者に至るまで各館(火)大白星(金)辰星(水)鎭星(土)の五星は逆行して太徽を守り、月は天庭の中を貫きね、」正月甲寅の日太徽を守り、月は天庭の中を貫きね、」正月甲寅の日太徽を守り、月は天庭の中を貫きね、」正月甲寅の日太徽を守り、月は天庭の中を貫きね、」正月甲寅の日太徽を賜ひ、天下の戸毎に百銭づつを下し、宮人を舒高にといる。

詔賜_諸侯王以下至||民為||父後||鶴一級5漢書 景帝紀星の右角に在り、孝景皇帝、孝景の二字衍ならむ、遺の南宮と稱する星なり、天庭、三台 三衡の稱なり、龍 侯には馬二駟、東二千石には黄金二斤、東民には戸毎 星、水は北方の辰星なり、太微、翼軫の北に在り、天子 じて、 を案するに賜。民為。父後、者爵一級」は皇太子冠の句 火は南方の炎惑、土は中央の鎮星、金は西方の大白 なり、五星、木火土金水の五星なり、木は東方の蔵星、 【字解】 日月皆食、一日に日月共に食せしにあらず、を周陽侯と爲す、是の月皇帝を陽陵に葬れり、 前にあるべきなり、恐らくは錯簡ならむ 作れりと、是なり、而して此の三字は上文太子即位 に百銭を賜はりしなり、置…陽陵、置の字一本に 遺詔には夫々等差ありて一樣に非ず、即ち諸侯王列 の下にあるべくして遺認にはあらざるなり、而し 食せしこと無し、故に食の字符なりと、圖、雷の古文 太后の弟の田蚡を封じて武安侯と爲し、其の弟の 日は朔に月は 望に食せしなり、一説に漢紀に日月の しむ、「太子位に即く、是を孝武皇帝と爲す、」三月、皇 宮 中の 事に與るとな カコ 勝 T

に丞相劉舍免官と 為る、八月の壬辰 に御史大夫綰をを襲てり、」七月、乙巳の 日に日食あり たり、」此の月復動けり、上庸の地 震は二十二日間連 續して城の垣には右庶長の爵を賜ふ、」四月、民をして大に 聚會飲

十二月時、雪日如紫五星逆行、馬の為に栗をうすつくと、不造、美食を作らざると、馬の為に栗をうすつくと、不造、美食を作らざると、馬の民は惡疫に困めり、

きて大内に屬す、「七月の辛亥に日食ありたり、「八月きて大内に屬す、「七月の辛亥に日食ありたり、「八月を大鹿と爲し、朱行を大し、秦常を太常と爲し、典容を大行と爲し、持行を行人と爲作大匠と爲し、共行を行人と爲作大匠と爲し、主饌中尉を都尉と爲し、朱作少府を將なり、「廷尉を更め命けて大理と爲し、將作少府を將す、是れ梁を分ちて五と爲し、梁王の外四侯を封ぜして、是れ梁を分ちて五と爲し、梁王の外四侯を封ぜし

楽詹事といふなり、將行、皇后宮の卿なり、大行、賓客楽詹事といふなり、將行、皇后宮の卿なり、大行、賓客と掌る官なり、世は長信宮四人の内惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の内惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の内惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の内惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の内惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の內惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の內惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の內惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の內惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の內惟明のみ桓邑侯と為りて他の三人は未だ嘗四人の內惟明のみ桓邑侯と為り、神代之人。

の私財を掌る官なり、奉常、宗廟の禮儀を掌る官なり、大内、京師の府藏を掌る官なり、治粟内史、穀貨を掌の禮を掌る官なり、秦常、宗廟の禮儀を掌る官なり、を常、宗廟の禮儀を掌る官なり、

復 大酺、五月丙 後元年、冬、夏命中大夫 動。 千石、諸侯 月丁酉赦 辰以已 庸地 日食 動二十 戌地 相、爵、 御史大夫結為派 右庶 動、其 丞 相 爵 為衞尉、 蚤食 時 月 日、壊

級を賜ふ、中二千石の秩を受くるものと諸侯の相とす、」三月の丁酉の日に天下の罪人を赦し、民に靍一【講義】 後元年、冬、中 大夫を 更め命けて衞尉と爲

四相,秋地動、 一級,天下大潦,要命諸侯丞相, 一級,天下大潦,要命諸侯丞相,

子明為濟川王子彭離為濟東 思共王·汝南王皆薨立梁孝王·城 五帝、三月、雨雹、四月、梁孝王·城 五帝、三月、雨雹、四月、梁孝王·城

し、子の定を山陽王と為し、子の不識を濟陰王と為の明を立てゝ濟川王と為し、子の彭離を濟東王と為の時を祀りて之に見ゆ、三月に雹降れり、四月に梁の時を祀りて之に見ゆ、三月に雹降れり、四月に梁に清義】中六年、二月の己卯の日に雍に行幸し、五帝

たり、居・周・横・奔を四侯に 封ず、」九月の 甲戌に日食あり

【字解】 臨江王、前の 太子業なり、四侯、前三年吳楚七國の反せむ とする や、楚の相の張尚・太傅の趙夷すること無らしむ、王聽かずして皆之を殺せり、故にすること無らしむ、王聽かずして皆之を殺せり、故に今年に至り朝廷其の 子を列侯に封ぜ しなり、即ち張尚の子當居・趙 夷吾の 子周・建徳の子横・王悍の子寿 おの子當居・趙 夷吾の 子周・建徳の子横・王悍の子寿

中三年、冬、罷、諸侯御史中丞、春、 何双王二人、率、其徒、來降、皆封 何双王二人、率、其徒、來降、皆封 后,列侯、立、皇子(方)乘、為、清河王、 后,列侯、立、皇子(方)乘、為、清河王、 一年、火、郡、諸侯御史中丞、春、 中三年、冬、罷、諸侯御史中丞、春、 中三年、冬、罷、諸侯御史中丞、春、

【講義】 中三年、冬、諸侯の御 史中丞の官を罷む、」「「「東都門外に屯營せしむ、」「皇子乘を立てゝ清河王と爲ま、」三月、はゝき星 西北に出で たり、」丞相周亞夫死す、」三月、はゝき星 西北に出で たり、」丞相周亞夫死す、」三月、はゝき星 西北に出で たり、」丞相周亞夫死に東都門外に屯營せしむ、

にはあらず、將相表に免とありて死とあらず、む、亞夫死、此の時亞 夫相を免ぜら れしのみ、死にして字解】 方乘、漢紀に方の字無し、恐らくは衎文なら

徒徒作。陽陵、者、中四年、三月、置、德陽宮、大蝗、秋、

赦せり、 夏、大いに蝗發生せり、〕秋、徒隸の陽陵を作れる者を 夏、大いに蝗發生せり、〕秋、徒隸の陽陵を作れる者を 【講義】 中四年、三月、景 帝の廟 の德 陽宮 を置く、」

故に之を諱みて廟と言はずして宮といふ、【字解】徳陽宮、景帝自らの廟なり、生前之を起す、

中五年夏立皇子舜爲常山王、

太子と為す、太子名は敵といふ、の太后を立てゝ皇后と為し、丁巳に膠東王を立てゝ侯の周亞夫を以て丞相と為す、」四月の乙巳に膠東王侯の周亞夫を以て丞相と為す、」二月の乙巳に太尉條

太子と為す、太子名は徹といふ、太子と為す、太子名は徹といふ、との字恐らくは誤あらむ、如何となれば下文に四月に膠 東王を太子とあらむ、如何となれば下文に四月に膠 東王を太子ときを以てなり、栗太子 は太子榮のこと なり、青、陶青さを以てなり、栗太子は徹といふ、

車は昌の子にあらざるなり、

表に中二年封,,昌孫左車,為,安陽侯,とあり、即ち左

て繩侯となし、故の御史大 夫周昌の子左 車を安陽侯【講義】 中元年、故の御史大 夫周帯の孫 の應を封じ

中二年、二月、匈奴入燕、遂不和明二年、三月、召临江王、來、即死。中尉而中,夏、立。皇子越爲,廣川王、子寄爲。膠東王、封。四侯、九月甲戌、日食、

越を立てゝ廣川王と爲し、皇子寄を膠東王と爲し、當て來らしむ、王卽ち中尉の 府中に自殺 せり、夏、皇子に約に背きて 和親せざる なり、」三月、臨江王を召し【講義】 中二年、二月、匈奴 燕に入りて 寇す、是れ遂

は誤ならむ、
に一大暴風ありて西方より來りて城壁を壊ったと十二丈に及ぶ、丁卯、蟜を封ぜしは表によるにして邑を起すをいふ、丁卯、蟜を封ぜしは表によるにして邑を起すをいふ、丁卯、蟜を封ぜしは表によるにして邑を起すをいふ、」丁卯の日に長公主の子の蟜を封る、「江都に大暴風ありて西方より來りて城壁を壊っる、「江都に大暴風ありて西方より來りて城壁を壊っ

守 蘭 江 江 軍 都, 不, 表, 封, 中, 京, 京, 中, 市, 市, 中, 王皆 池, 陵 侯, 邪, 丞 薨、後 故, 將 高建平侯·隴西-尉趙綰為建陵 九月、伐、馳道樹、「殖」 軍 曲 布,侯、 爲。趙 鄃侯」梁 丞 相麗嘉,西 爲、太侯、

平曲侯と爲し、趙の丞相蘇嘉を江陵侯と爲し、故の將江都の丞相程嘉を建平侯と爲し、隴西の太守渾邪を【講義】 六年、春、中尉趙綰 を封じて 建陵侯と爲し、

理布を鄃侯と爲す、「梁の孝王楚の文王皆薨じぬ、後年布を鄃侯と爲す、「梁の孝王と楚の文王となり、按するに梁の孝王の薨ぜし年は鬼表漢表共に景帝中六年と爲す、此に前六年となすは説ならむ、馳道、天子のた幸する道路 なり、御成道 のこと、殖、一本に塡に作行幸する道路 なり、御成道 のこと、殖、一本に塡に作行幸する道路 なり、御成道 のこと、殖、一本に塡に作行幸する道路 なり、御成道 のこと、殖、一本に塡に作れり、是なり、殖は種なり、已に伐りたる 樹を種うる 地方、是なり、殖は種なり、已に伐りたる 樹を種うる できました。

徹を立てゝ膠東王と為す、一六月の甲戌に天下の

雄渠、共に高祖の孫齊の悼惠王の子なり、將廬、齊王の孫なり、遂、高祖の孫幽王友の子なり、卬・辟光・賢・ 薨せる年を五年となす、此に三年となすは誤なり、 字通用せり、嘉、劉澤の子なり、表・傳・世家並に其の 襄の子なり、漢書に將閭に作れり、葢し廬閭の二字古 すべし、濞、高祖の兄仲の子なり、戊、高祖の弟楚王交 星出づれば兵革ありといふ、雒陽、雒一に淮に作る、 是なり、漢書景帝紀に正月淮陽王宮正殿災とあり、證 爲し、淮陽王餘を魯王と爲し、汝南王非を江都王と爲 て二三丈より十丈若しくは天を竟るものあり、此の 【字解】 長星、一種の妖星なり、其の光芒一直線にし す、是歳齊王の將廬と燕王の嘉と共に薨じぬ、

更以,七陽爲陽陵、復置,津關用東王、六月甲戌、赦,天下、後九月、 四年、夏、立、太子、立、皇子徹爲膠 五年、三月、作、陽陵渭橋、五月、募、近、陽陵、予、錢二十萬、江都大暴、一、五年、三月、作、陽陵渭橋、五月、募、 が、去年吳楚七國新に反せしを以て復此の制を定め 十二年に關を除きて傳を用ふること無からしめし となり、傳、津關を通ずるに必要なる割符なり、文帝 南郡に屬す、陽陵、景帝の陵なり、津關、渡し場と關所【字解】 太子、皇子 榮なり、弋陽、侯國 の名 なり、汝 趙國を邯鄲郡と為す、 歳復津關の備を置き、割符を用ひて出入せしむ、冬、 て非常に備へしなり、 を赦す、」後九月に弋陽の地を更めて陽陵と為す、」是

を募りて陽陵に徙して邑を起し、民に錢二十萬を子 五年、三月に陽陵 の渭橋 を架す、」五月に民

傳出入、多、以,趙國、爲、邯鄲 四年、夏、皇子祭を立てゝ太子と爲し、皇子

周凰珠東亞梁。晁王夫,上錯,雄 亡 軍、 卬^常 及 火,月 濞· 楚, 將 ·楚 軍 元 王、誅、大,子、之,將 陸 竇 戊·趙 嬰, 侯 西 軍 らくは缺誤 為其與之嬰止、天王楚侯謀亥太多子賢 遂 殿 6 城 西

中·濟南王辟光·蕗川王賢·廖 東王雄渠等の吳楚七國の地を削る、是に於て吳王濞·楚王戊·趙王遂·廖西王宮の大殿城室を燒きぬ、」當時晁錯事を用ひて諸侯王 兵を發して西の方京師に向ふ、天子為に晁錯を誅し 陽 國は其の進軍を止めず、遂に西して梁を圍む、上乃ち の王相與に謀反して晁錯を誅するを以て名となし、 長星ありて西方に現れたり、又天火ありて雒陽の東 封じて魏其侯と爲す、「楚の元王の子の平陸侯劉禮を の子の蓺等の謀反に與せし者を赦す、」大將軍資嬰を 大將軍資嬰・太尉周亞夫をして兵に將として吳楚七 都 皇子勝を中山王と爲し、濟北王 志を徒して 當川王と の王を誅す、六月乙亥に逃亡の軍卒及び楚の元王 族を夷げ、袁盎を吳楚に遣して諭し告ぐ、されど七 王、齊王 >楚王と為す、」皇子端を立て > 膠西王と為し、 王 餘, 三年、正月、乙巳の日に天下の 爲。 - 魯 將 廬·燕 王、玉汝志 王嘉 南 爲。 皆 罪人を赦 非, 薨。爲、王、 淮

辰,月 五 皆 御 寸、深, 之。國、 午、孝 星 一南陵 北 東 夫 派 者 北。 相 開 及 內 申 間 秋 封 相 屠 或 陶 蕭 廣 雨っきる。 逆 得 八 縣、 四四 係, 相, 北 廷 者

尺なりしといふ、」炎惑星は逆に行りて北極星に雹ふれり、大いなるは五寸ありて積ること深 と爲しぬ、 爲す、」此 り、月は北極星の間に出で、蔵星は天廷の中に逆行 るなどの變事ありき、 0) 月 は き星 」南陵及び内史設翮を置きて縣 北 1-出 7: 72 h を守 2 衡 山

り、彗星出..東北、彗星ははゝきぼし也、東北は漢紀及川長沙王、廣川王は彭祖、長沙 王は發、皆景 帝の子なに給するをいふ、えだつ、孝文太后、太后薄氏なり、廣しなり、傳は附なり著なり、名籍を著けて公家の徭役 熒惑、火星なり、北辰、北極星也、天廷、三能三衡をい天文志に 西南に 作れり、衡山、五嶽の中の南嶽なり には孫嘉に作れり 高 に武陵と作れるは恐らくは誤ならむ、二十而得、傅、 侯、功臣表及び漢書表傳には武陽侯蕭嘉に作れ によれば南陵縣は已に文帝七年に置き、內史は 此れまでは二十三歳より傅せしを二十歳よりと改 ふ、天官書の末尾に詳也、南陵內史、名臣 字解 帝九年に置け 孫係、係一に僕に作る り、又百官表によれ 、一人にて二名ありし 、叉功臣表及び蕭何 ば是歳内史を分 表及び なり、 已に 漢志 武、何陵、傳

文帝の

太后

の薄氏崩じぬ、」此の

月に

廣川王の彭祖・

沙王の

發は

皆夫れ

く其の

封國に行きぬ、」丞相

ば公家の徭役に就くことを得しむ、四月の壬午に孝

の、」天下に合して、男子二十歳に

なれ

二年、春、故の相

國蕭

何の

孫なる係を封

じて

屠嘉卒しぬ、八月に御史大夫開封侯陶青を丞相と

懍に同じ、敬み懼るゝ貌なり、郷、向ふなり、 也、勝、殘去、殺、殘暴の 人を化 して惡をなさしめず、也、勝、殘去、殺、殘暴の 人を化 して惡をなさしめず、 者,の四字ありて下句の古語と轉倒せり、世は三十年 治語子路篇の語なり、論語にては必世の上に如有..王

孝景本紀第十一

に武帝の怒に觸れて共に削り去られしなり、記し、又武帝本紀に於て其の過失を極言せり、故記し、又武帝本紀に於て其の過失を極言せり、故此は司馬遷の舊紀にあらずして褚少孫の補紀せ

子愛死故孝景得立、

難位に立つことを得たり、 本后といふ、さて孝 文皇帝の寿にな、及び其の三 后の愛幸を得るに及び、前の后は死にぬ、及び其の三 稱せし時に、前の后に三人の男兒ありき、其の後竇太 称せし時に、前の后に三人の男兒ありき、其の後竇太 本后といふ、さて孝 文皇帝の 未だ代に在りて代王と 太后といふ、さて孝 文皇帝の 未だ代に在りて代王と

双入代、與約、和親、 一級、五月、除、田 半租、為、孝 民 晉 一級、五月、除、田 半租、為、孝 民 晉 一級、五月、除、田 半租、為、孝

前後轉倒せるか、或は此の二字行文ならむ、

む、昭徳之舞、景帝が高祖の武徳の舞を采りて作りた 太史公日、孔子言、必世然後仁、 る舞の名なり、休徳、大いなる徳なり、 を妻子に及ばさいること、体、齊等なり、ヒト ありて重複す、恐らくは是れ錯簡ならむ、梁玉繩は となり、去…肉刑、下文にも亦除、肉刑、出…美人」の句 に薦む、武徳、高帝の作りし舞の名なり、文始、舜の舞 三たび重ねて醸したる醇酒なり、味厚きが故に宗廟 し功ある者、有徳、始めて天下を治めし徳ある者、酎、 り、制韶は制度の命令なり、有功、始めて天下を取り 廟を建立すべし、又諸侯王及び列侯は歳時に使者を る祭に侍べりて祭を助けしめ、請ふ之を記録に著し 諸侯は宜しく各、費を出して孝文皇帝の為に太宗の て天下に宣べ布かむと、天子制して曰く、可なりと、 して京師に詣り、天子が歳ごとに祖宗の廟に献す 一田租一の誤ならむと云へり、或は然らむ、不、帑、刑 制韶、制は帝王制度の命なり、詔は告合な は世々祖宗の廟に供養を獻ずべし、郡國の 周の舞の名なり、關梁、せきしよと橋 シと訓

去殺就 E 服封禪矣、謙讓未成於今鳴 人之 有 餘 治國, 載、徳 哉是言漢 盛 與至"孝 也、廩廩鄉改

呼豈不仁哉、

申すべけれ、 ず、嗚呼何と仁にあらずや、孝文皇帝こそ真の仁君と と雖、殊更に謙り讓りて今に至るまで未だ之を成さ なり、されど敬み懼れて正服を改め封禪するに向ふ 興りて孝文に至るまで四十 有餘載、帝德至りて盛ん 王者の一世にして仁を布く難きにあらずと、さて しむと、誠なるかな是の言や、善人已に然り、受命の して悪をなさしめず、民善に化して刑殺を用ひざら にも善人の國を治むること百年なれば殘暴の人を化 者あらば、必ず三十年にして仁政天下に布かれ、古語 【講義】 太史公曰く、孔子言へるあり、若し受命の王

(字解) 必世然後仁、以下の古語及び誠哉是言まで

洞、天子歲獻.祖宗之廟、淸著太宗之廟、天子宜.世世獻.祖宗之廟、 太宗之廟、諸侯、宜.各為.孝文皇帝、立. 太宗之廟、諸侯王·列侯使者,侍、 太宗之廟、諸侯王·列侯使者,侍、 本宗之廟、諸侯王·列侯使者,侍、 本宗之廟、古、

一日く、功は高皇帝より大いなるは莫し、徳は孝文皇 廟と爲すべし、孝文皇帝の廟は より盛なるは莫し、高皇の廟は宜しく帝者 思ひて昭德の舞を立て以て孝文皇帝の盛德を明かに せよと、是に於て丞相臣嘉等言さく、陛下永く孝道を 千石・禮官と具さに孝文皇帝の 廟を祭る 禮儀を制定 されば朕も亦甚だ之を嘉せむ、其れ丞相・列侯・中二 を獲すといふことなし、其の明は實に日月に象れ に著はして萬世に施さば、永々の末まで窮りなけむ、 る徳を明にすべし、然る後に祖・宗の功と徳とを記録 孝文皇帝の廟の爲に、昭徳の舞を作りて其の大いな 而るに其の廟樂は之に稱はず、朕甚だ之を懼る、故に きは天地と等しく、其の利澤は四海に施して之が福 り、先帝の仁惠豊に此のみならむや、朕旣に不才にし 中の美人を出して、人の世 嗣の絶 えむことを重んぜ して、而も孝文皇帝親ら之を行ひ給へり、其の までに及ぼさず、罪無き者を誅せず、肉刑を除き、宮 て盡く記憶せず、此れ 皆上古の帝王の及 ばざる所に 上物を受けず、其の利を私にせず、人を罪するに妻子 給ふ、臣嘉等の愚の及ばざる所なり、臣謹 帝者太宗 の廟と爲す み議 太祖の 徳の

山 麻 3 又中尉亞夫を車騎將軍と為し、屬國悍を 將屯將軍 天下に布き告げて 者は皆此 は七日に 服する者は十四日 大功(九ヶ月)を服する者は 哭することを得しむる勿れ、已に棺郭を擴に下せば、 夕にて各、十五たび 聲を學 人より以下の女官少使に至る迄を各、其家に歸せよ、 て被ふこと勿れ、又人の男女を徴して宮殿に臨哭せ み肉を食ふ者を禁ずること勿れ、又自ら當に喪に臨 喪服を脱ぎ、婦を娶り女を嫁せしめ神 を祀り酒を飲 しむると勿れ、又宮殿中にて當に哭すべき者は、皆且 合せよ、合至らば、出でて 哭するこ と三日に 13 T きことにあ 、而して旦夕の は其 帶は三寸に過ぐると勿れ、又車及び兵器に布も 哭すべ T の合に準じて事に從へよ、よつて此 舊 其の服 れ崩ぜば に因 は皆徒跳の 禮を省くべ ずや、崩ずとも其れ 臨哭の時にあらざれば、禁じて擅に 明に朕が意を りて改むること勿れ、又崩後は夫 を脱げよ、此の他 、繊細の 下の げよ、禮畢れば之を 如く天下の 布衣(三ヶ月)を服する者 十五日、小功 知らしめよ、霸陵 令中 何 官吏庶民に布 ぞ悲哀するこ し、又喪服 に在らざる (五ヶ月)を の介を 廢せ ع 0

少使、夫人より以下の女官に七等あり、即らたしたにして三ヶ月なり、比率、比べ準ふなり、夫人以下至二 (字解) 為し 人・良人・八子・七子・長使・少 使是なり、復土、穿ちた少使、夫人 より以下の女官に七等あり、即ち夫人・美 の麻帶なり、布、布もて被ふなり、大紅小紅、大功小功ふ、釋、服、喪服を脱ぐなり、踐、徒跣なり、経帶、喪服 葬る、群臣皆頓首して尊號を上りて孝文皇帝と曰ふ、 壙を埋むる者は**復** 在 郭は棺郭を擴に入れをさむる者、穿は擴を穿つ者、乙 細の布衣なり に同じ、大功の喪は七ヶ月、小功は五ヶ月なり、纖、纖 戦争のこと、不、終、天年を終へざるな 中國なり、兵革、兵は兵器なり、革は甲胃なり、轉じ り、離、遭ふ也、眇眇、微小の貌、方内、四 せしめ、郭を藏むる者山 る壙を埋むること、見卒、現在の兵卒なり、 り、意味なし、嘉、之、天年を卒へた 太子位に高廟に即く、丁未に號を襲ひて皇帝と曰ふ の卒一萬六千人を發し、內史の 、郎中介の張武を復 業、生業なり、服、喪服なり、臨、死の哭禮な 、喪は輕き程細布を用ふ、即ち怨麻の服 土將軍武に屬せしめよと、乙巳に を穿ちて 十將軍 と爲さしめ、近 壙を掘る者 卒一萬五千人を發 ることを嘉ぶを り、與、發聲 方の 中、即 藏郭後 0

聞けり、葢し天下の

0) 前非

T 死

武,軍、至。因,告。令紅、為,屬少,其、天中、十 六千 郭·穿·復 皆 國 使 故 下 者 皆 保 中 有 明 以 人,復 發。上 將 上,屬,內 尉 軍將 · 號日孝文皇 章 卒 發。屯 亞 意,比霸率 近 武、乙巳、葬、 萬 夫, 將 歸水 縣軍為夫 五 千人, 見卒 郎 車 陵 從 中 事不 騎 以 Ш 川、布在, 萬 藏 令,将 下

後七年、六月の己亥に、帝未 央宮に崩じぬ、 にも拘らず、天年を卒ふるとを得た ぐるに何といはん、除宗廟を保つとを得て、微眇 絶ち廢てしめて、吾が不德を重ぬれば、其れ天下 數月にわたりて寒暑に遭はしめ、人の父子を哀まし じて衞生を傷る、吾れ甚だ之に同ぜず、且つ朕既に不を惡み、死なば葬を厚くして生業を破り、喪服を重ん を畏れ、さて又年月の人しく長き間に吾が天年を 常に過失ありて先帝の遺されたる徳を辱し を以て天下の諸侯王の上に寄すること、二十有餘年 め、長幼の志を傷ひ、其の飲食を損し、鬼神の祭祀を 崩じて、又世の習の如く喪服を重んじ、人しく哭して 徳にして百姓の困難を佐け 救ふこと無し、而るに 高 なり、天地の靈と社稷の福とに頼りて、四方の中安寧 甚だ哀むべけや、近頃の世の人人は生を嘉みし 理にして物の自然なるなり、故に死ぬれ ばとて奚ぞ 生ずるものは、死あらずと云ふこと無し、死は天地 ざらむことを懼れたり、今乃ち幸に天年を以 て戦争の患あること を發し 供養することを得たり、かくて朕の て日 く、朕

なし、朕既に不

才なれ

0 1-

めむ

るは已に嘉みす

不朋

有之謂。絕,之重。既、業,時物萌宮。後 餘身,天鬼父服,不重世之生遺七 年 託,下 神 子,人,德,服,咸,自 靡。詔。年 矣于何之傷臨無以嘉然不是一六 朕 祭 長 以,以,傷,生,者 有,朕 月 獲祀,幼離、佐、生,而奚,死聞、己保、以、之寒百吾惡可。死蓋。亥 下 地 君 宗,重、志、暑姓、甚、死、甚、者、天帝 廟,吾,損。之今不厚。哀天下,崩。 上以,不其數崩,取,葬當地萬於 祉 二眇德,飲哀,又且以今之物未 之十眇也食人使朕破之理之央

稱せり、又已に匈奴と和親せり、而るに匈奴約 を以て之に報ず、是を以て佗遂に帝號を去りて臣と 煩すとなからむとを欲せり、又南越王の尉佗自立し も其衣を短くして地に曳くをを得ず、韓帳に文繡すりき、上常につむぎの衣を著、幸愛する所の慎夫人に 黄金百金は中産の をして備へ守らしめ、別に大兵を發し て武帝と爲る、然れども上尉佗が兄弟を召し貴び、德 に示して天 下の先と 為れり、又霸山の陵を治むるに るとを得ざらしめ、以て手 あつく 質素なるとを朝野 とを恐る、何ぞ新に臺を建てんやと、遂に之を立 を承けて、尚常に徳 して之を設計せしむるに、其直百金なりと、上日 り、又吳王の許り病みて朝せざりし時、帝親ら其邸に て民を利せり、或る時露臺を作らむと欲し、工匠を召 國境に入りで盗を為す、され ど帝は邊境に 山 に因 の民に便ならざる所あれば、輒ち之を弛 りて別に墳を治めず、勢力を省きて民を 民十家の資財なり、吾先帝の宮室 姓を煩 の薄くして先 帝をはづかし し苦しめむとを悪み 深く其地に入 に背き てな 3 7

> 務めて徳を以て民を化しぬ、是を以て海内般んに富 張武等の如き賄賂に遺られたる金銭を受けて發覺 みて禮義に興れり、 心を愧ぢしめ、之を獄吏に下さざりき、此の如く專ら たる時、上乃ち御手元金を發きて之を賜ひ、以て其の の中袁盎等の如き諫説すると尤も切なる者ありと 就き、わざと儿と杖とを賜ひて之を諷したり、 、常に怒を含まず假借して之を用ひき、又群臣の

雖

手元金なり、殷富、殷は盛んなり、 【字解】弛、禁制をゆるむる也、露臺、露の字一本に こと、御府、天子の御 と、稱說、漢書に諫說に作る、賂遺、まひなひにおくる 朴、手あつくして質素なると、霸陵、霸山にあるみさ むぎ、韓帳、とばりなり、文繍、あやぬひとりなり、敦、 先帝をはづかしむるをいふ、

続衣、

綈は厚繒 をいふ、羞之、羞ははづかしむるなり、德の薄くして 靈に作る、露臺は屋根なき臺なり、匠、工匠なり、大工 はぶくこと、帝、帝號なり、几杖、おしまづきとつくゑ さぎ也、墳、土を高く封じたる 墓なり、為、省、勞力を 庫なり、御 府 金銭は大子 0)

錢を欲す、故に之が賣買を許して經濟上の融通を爲野に在るを庾といふ、賣、爵、富人は爵を欲し、貧人は車馬の類なり、倉廋、米倉なり、邑に在るを倉といひ、車馬の類なり、倉廋、米倉なり、邑に在るを倉といひ、山澤の 禁制 なり、服御狗馬、衣服調度し、民に働を賣ることを得しむ

年、宮室苑囿狗 馬服御など凡て先帝 より増益すると【講義】 孝文帝代 より來り、位に即き てより二十三

貌なり、一説に元元は善なりと、

祝 細 北 意,爲,三 去。兹亦侯 爲, 柳、宗 萬 地、 河 侯, 將 騎 軍,將 內 守,軍、軍、雲 棘一劉 軍中奴 句 周 備, 將 共, 將 狐, 中 萬 胡, 軍, 為, 軍 故, 大 人 數 居, 將 張 楚 土 月;霸 軍,武,相,令 胡上居屯蘇勉,郡

亞夫を將軍と為して細柳に居らしめ、宗正の劉禮をしめ、將軍張武を北地に屯せしめ、河內郡の太守の周め、故の楚國の 相の蘇意 を將軍と為して何注に屯せ中大夫の合勉を車騎將軍 と為して 飛狐 に屯 營せし中大夫の合勉を車騎將軍 と為して 飛狐 に屯 營せし一方の三萬人 は雲中に入 りて寇す、是をもつて朝廷【講義】 後六年、冬、匈奴 の衆三萬 人は上郡に入り、「清義」

將軍と為して霸上に居らしめ、祝茲侯を棘門に軍せしめ、以て匈 奴の進入に 備ふ、數月の 後胡八皆 去りしめ、以て匈 奴の進入に 備ふ、數月の 後胡八皆 去り、配弦侯、姓は 徐名は 悍なり、棘門、秦時の宮門 なり、配弦侯、姓は 徐名は 悍なり、棘門、秦時の宮門 なり、飛延侯、姓は 徐名は 悍なり、赤龍、諸將軍の 屯營をり、渭北に在り、胡、匈奴 なり、亦能、諸將軍の 屯營を

減じ、即吏の人員を損し、米倉を發きて貧民に振は帝乃ち惠を加へて諸侯をして入貢することなからし帝乃ち惠を加へて諸侯をして入貢することなからし、議義】是蔵旱し且つ蝗發生したれば年豐ならず、

親已 道、計, 弟 典 諭。遣。但多 朕 股 使 弃, 於 稷 於 細 單等 之 葢 于 相 望 結 今 過, 便 下元元 萬 于 軟, 之民、和 反" 於 之 親。之 以"故"之"

或は寧く息はざらしむ、夫れ戎狄荒服 此の二者の答は皆朕が德薄くして遠く達すること能 を安んぜず、封畿の内は勤勞するも其の安に處らず、 はざるによれり、故に此の頃毎年の如く、匈奴しきり 布くと能はず、是を以て中國の方域外の國をして 後二年に、上日く、朕既に不明にして徳を遠 の外は其の生

3

と、累年、毎年なり

戸、西は王母、東は川下なりと、不處、安居せざるこ

、結、難、難は仇なり、怛惕、驚き懼

親しく朕と きこと冠蓋相望み、使車の往還の軼を道に結ぶに て和親已に定れること今年より始まると、 の義を結びて天下の憐み愛すべき民を全くす、かく 古の道に反りて社稷の安を計り、萬民の利を便にし に頻に使者を遣して之を慰撫せしむ、其の使者の繁 れ久しく仇を結び兵 内志を諭すこと能はずして吾が不德を重 る、此の如くして朕が意を單于に諭しき、今や單于は -E 6 安からず、未だ嘗て一日も心に忘れざるなり、故 安からむや、今朕夙に興き夜年に寝ねて天下の 勤め勞し 、四荒、戎狄荒服なり、 後二年、改元後二年なり、方外、中國の 俱に細過を棄て ゝ僧に大道に行き、兄弟 、萬民の爲に憂ひ苦み、之が爲に驚き懼 て多く更民を殺せり、邊臣兵吏又吾が を連ね、中外の國將に何を以て 一説に北は觚竹、南は北 ねたり、夫 方域 至

れり、元元之民、元元は猶喁喁の

如し、憐み愛すべき

通ず、使車のわだちなり

ず、使車のわだちなり、親與、朕、親は漢書に新に作うなり、冠蓋相望、往來頻繁なるの意なり、軼、轍と

り、即ち青帝・赤帝・白帝・黑帝・黄帝是なり、す、有ゝ年、豐年のと、五帝、四 方と中 央との天の神な

り、即ち青帝・赤帝・白帝・黑帝・黄帝是なり、趙人新垣平以、望氣、見、因、武、上、武、山、西原、亦以、夏答禮、而尚、赤、十五帝原、亦以、夏答禮、而尚、赤、十五帝原、亦以、夏答禮、而尚、赤、十五帝原、亦以、夏答禮、而尚、赤、十七年、得、玉杯、刻日、人主延壽、於、是天子始更為、元年、令、天下、大地、其歲新垣平は氣を望むといふを以て文帝に見ゆ、因って上に說きて渭陽に五帝の廟を設け立っ、周鼎を出さむと欲し、且つ當に玉英ありて見るべ

兄弟・妻子なり、

をいふ、夷…三族、夷は誅し平ぐるなり、三族は父母・常並び修まれば見ると、事覺、詐偽の行事の發覺せし常並び修まれば見ると、事覺、詐偽の行事の發覺せし常解) 玉英、玉のはなぶさなり、瑞鷹圖に玉英は五詐偽の行事覺れて三族を誅せらる、

亦夏を以て答禮す、而して色は黑を廢して赤を尚ぶ、

献ぜしめしものなり、其の刻銘に曰く人主延壽と、・七年に玉杯を得たり、是れ 新垣平が 詐りて人をし

と為す、十六年に上親ら渭陽の五帝の廟に郊見し、

て思へらく、今は水徳始めて明かなり、故に十月を歳

の事を下して丞相と相議す、丞相歴

數を推し算へ

見れむ、よつて當に正朔服色制度を改むべしと、天子

て言ふ、方今は

方に律度歴數に明かなり、魯人公孫臣

は五行の説に

是の

時に、

北平

侯の張

蒼は丞相

と為りて、

上書して終始の傳及び五行の徳の事を

陳べ

土徳の時なり、故に土徳の

應兆は

黄

見記 諱, 以, 朕 親, 祀 四 天 禮 帝 司 始 於民 祀、 有 官 幸雅、郊見 於 官 日 郊 古 故 者 議》 毋、年、 五 神

月、正は歳首なり、十月年の首なり、朔は月の の色は玄なり、故に水徳の王は黒事を尚ぶ、成紀 による所以を記載したるもの、正朔、正は正月なり、相承けて傳易するは五行の德の終りて復始まるの理 首とし 0) 方に配して陰なり、故に十月を蔵首と爲す、黑事 【字解】 律歴、律 度歴 敷なり、終始傳五徳事、帝王之に見ゆ、孟夏の四月を以て五帝に答禮せり、 親ら上帝を南郊に禮祀せり、故に此の なかれと、有司禮官皆曰く、古へは天子夏日に於て せむ、禮官等議して之を諱みて朕を以て勞すとな 形の神ありて成紀 縣に見はれて、民を害ふこと 申べ明かす、是に於て上乃ち詔を下して曰く、異しきち復魯の公孫臣 を召して 博士と為す、臣土德の事を 成紀縣に見る、天子公孫臣の言の效ありしを知り、乃 と、是に於て天子始めて雍に幸して五 蔵は是を以て豐なり、よつて朕親ら上帝諸神を ず、之を採用せざらむことを請ふと、其の明年 黄龍 て水の 異物之神、あ 色の黑事を上ぶ、公孫臣の言 十月は坤月にして 陰なり、水は北 やし 首なり、歴数の義なり、正二十 3 形の神、即ち黄龍を指 帝を郊祀し 祭を郊といふ

令,福, 之, 皆至 夫。歸, 百 官,姓 以,福,之 致,不 股,股,極 敬,與,不躬 也 聞, 不 獨,朕 官 德,美,甚 祝, 推, 推, 釐,

祠

自ら愧づ、よつて諸の祀の墠場の珪幣を敏不明を以てして人しく天下に 臨みて 幣を執りて上帝宗廟に事ふることを獲しこと今に十【講義】 十四年の春に 上詔を下して 曰く、朕犧牲珪 昔の先王は遠く施して其の報を求めず、山川を望祀 四年なり、其の日を歴たることはるかに長し、其の不 らざれば、是れ吾が不徳を重ねるなり、其れ今より 躬ら福を受け、殲り其の福を美にして百姓之に 為めにせずと、朕甚だ之を愧づ、夫れ朕が不 くに祠官の福を祝ふは皆福を朕が躬に歸して百 して己を後にせり、是れ至明の極なればなり、今 其の福を祈ら ず、賢者を尊び親戚を卑み、民を 臨みて之を撫す、朕 廣め増せよ、

名は尊ぶなり、左は中祭るに地を除ひ たる なり、福を受くること、 後祠官をし むる がなり、左は卑むなり、釐、福なり、享、受くる地を除ひたる處、まつりのには、右、賢左、戚、縣長、縣は遠なり、ハルカと訓む、墠場、神を 所 に敬を致さし むるとも、祈りて福を

年、黄 事,以"天應、傳律是, 以為,子 Ħ. 歷。時 黄 德魯北 爲,今、下,龍 其,見。事,人 見。其,水 言德事當言。公侯 成 紀非,始,與改方 張 是明,丞正今臣着 爲, 乃,罷、十議、服德,書、丞 復之,月,丞色時,陳相,召,十上,相制上終方。 魯、五黑推、度、德、始、明等

軍となして渭北にたむろせしむ、凡て車千衆・騎卒十

め、中尉周舎を衞將軍と為し、郎中令張武を車騎將

將軍を遣して隴西・北地・上郡の三箇處に屯營せ

将 大 乃,臣 賜,十 車 周 騎 舍,將 那, 將 為。軍,塞, 軍,西 地, 太自軍,北郎 北 都 將,勒,車中 地 尉 川ウラ 郡.上 武,中

爲し、朝那の要塞を攻めて北地の都尉印を殺す、上乃 軍,將止,諫軍,萬 十四年、冬、匈奴切、匈 成是不卒親軍衛 奴,侯以,聽,帝自,軍,將 匈赤,東皇欲,勞,渭軍 相謀りて邊境に入りて窓を 奴 爲。陽 遁、內 侯 后 走、史、張固、擊、兵、千令 欒相要、匈申、乘張 布,如,帝,奴,教 騎 爲、爲、帝羣令、卒爲、尉

> るなり、申、のべしく なり、約束するをいふ、要、劫な【講義】 塞、とりでなり、勞、ねぎ らふ なり、勒、治む布を將軍と為して匈奴を撃たしむ、匈奴遁れ走る、 萬あり、 り、おびやかしおさふなり、 張相如を以て大將軍と為し、成侯亦を內史と為し、欒 を劫し抑へければ、帝乃ち止まりぬ、是に於て東陽侯 と欲す、群臣之を諫めて止めむとすれども皆聽かず、 よつて太后は悲痛にして神に誓ふの言を以て固く之 べ、軍の東卒に賜ふ、帝自ら將として匈奴を撃たむ ひ兵を治めて教令を

幣、朕長、上昔甚以、帝 春、上 宗 自,不 日, 先 福,王愧,敏 廟 朕 遠,其。不十施。廣,明,四 遠,其。不 右 獲 轨 左不 增,而 年,犧 戚, 求, 諸 久, 于 牲 先。其, 祀, 撫 个= 報,墠:臨。 民,報,墠;後,望場, 歷、幣, 天 已, 祀, 珪下、縣, 事,

り、されど姦惡を爲す者止まず、其の答安んかある、是れ朕が德薄くして教の明かならざるにあらずや、吾甚だ自ら之を愧づ、故に夫れ訓導善からざれば姦吾甚だ自ら之を愧づ、故に夫れ訓導善からざれば姦妻事を構へて愚民罪に陷るなり、詩に曰く、和ぎ樂めは、是れ敎訓の未だ施さゃるによる、而して刑之に加へらる、民或は行を改めて善を爲さむと欲すれども、本の道は如何ともすべきなし、朕甚だ之を憐む、さて其の道は如何ともすべきなし、朕甚だ之を憐む、さて其の道は如何ともすべきなし、朕甚だ之を憐む、さて其の道は如何ともすべきなし、朕甚だ之を憐む、さてある、何ぞ其のいたくしくして不德なる、何と之が民る、何ぞ其のいたくしくして不徳なる、何と之が民

り、楚痛、楚は辛楚なり、いたましきこと、なり、愷悌、樂易なり、和ぎ樂むこと、不ゝ息、息は生ななり、馴道、訓導なり、純、善なり、詩、詩經小雅靑蠅篇

上日農天下之本務莫大焉、今本末,者毋以異其於,勸農之道,本末,者毋以異其於,勸農之道,本末,者毋以異其於,勸農之道,

稱身條、欲、今為不之,改人 憐、欲、今 陷。甚 在。法。為。有 不之,改大焉自,非。息、夫、行,有、詩、愧、乃 自非有。像演奠 而美 肉 氏 為,過、善教 日,愷 故。朕,刑 民之 時、 不 夫。德 馴薄,道而 而。犯,畫* 未。悌, 痛。支 施,君 姦何、衣 道 體,毋。而 子、民 冠下,新 異語。書 刻。由。刑 加、之焉、父 除,德,肌 也 也膚,朕 刑, 豈終甚,或、母、民吾安。今以,聞、子。

の罪を犯したる者なるかを知らしめて、民に、辱いは犯罪者の衣冠に畫き采服を異にして、一見彼は り、父の罪を贖ひて、父が自から新にせむことを得し 其の道由なけむ、妾願くは身を没し入れて官婢と に復び過を改めて自ら新生涯に入らむと欲すと難、 ず、刑せらるれば其の肉體復び連り付くべからず、故 くして女子五人あり、 為す、是を以て民罪を犯さず、何となれば帝德廣大 めむと、此の上書を天子に奏す、天子其の意を憐み べし、妾傷み念ふに、夫れ死ぬれば復び生くべか るを稱せり、而るに今法に罪せられて當に刑せら るにあらずと、其の少女の提繁といふ者自ら傷 當り、詔獄に捕はれて長安に徙し繋がる、太倉公男 して其の治至極したればなり、今や法に肉刑三つあ み、乃ち詔を下して曰く、蓋し聞けり、有虞氏の時 く、妾が父は吏と為りて齊の國中皆其の 廉直公平 きて、乃ち其の父に隨ひて長安に を生まざれば、かゝる緩急のこと あれど も何の んとして、其の女子を罵りて曰く、子を生めども男兒 太倉公將に行きて追捕に 至り、上書 刑 3 日

名安・勃・場なり、即ち配所のこと、子三人、其の所、遷し居らしむる所、即ち配所のこと、子三人、其の

「神経」十三年、夏、上曰く、蓋し聞き及べり、天道なりといふと雖、實は禍は人の怨むることによりて起り、福は人の德によりて與るものなりと、是に由つてり、福は人の德によりて與るものなりと、是に由つてり、福は人の德によりて與るものなりと、是に由つての非を爲すは、是れ皆宜しく朕が躬に由るなるべし、「今秘祝の官は災禍を祓はむと禱りて其の效無ければ、其の過を下に移し、以て吾が不德を彰すなり、故に百官之を觀れば禍福の起る所以知るべきなり、故に百官之を觀れば禍福の起る所以知るべきなり、故に百官之を觀れば禍福の起る所以知るべきなり、故に百官之を觀れば禍福の起る所以知るべきなり、故に百官之を聽り、若し其り、神に天下の災禍を祓はむことを禱り、若し其り、神に天下の災禍を祓はむことを禱り、若し其り、神に天下の災禍を祓はむことを禱り、若し其りといふとは、

いふのみと、禁内にて薔藤のことを爲す、故に秘祝となゝもの、國家之を諱む、故に秘といふ、一説 に 秘はの 教無ければ其の過を下に移して自ら其の責任を免

未,處法,臣到,於議, 奴. 太 擬、法,六 議》 發 於 到, 其 奇 處 皆 兵, 謀 赦、 長 南 罪,當二 病 以,遣、爲, 道, 淮 廢, 居 南 弃 危。 處 南 長 都這 使, 市、帝 宗 長、廢 廟 闡 與 母, 度、 不忍。 棘 群 祉 之, 越 臣 山 請 致。羣 匈 侯

廬江王

後十 の罪を赦して、唯庶人と為して王たることなからし に曝すべしと、されど帝は法を王に致すに忍びず、其 其の子三人を立てゝ淮南王・衡山王・廬江王と為し 到らざるに、行く途中に病みて死にぬ、上之を憐む、 郵に處らしめむとを請ふ、帝之を許す、長未だ配所に む、帝の處斷餘に輕きを以て羣臣は王を蜀 すと、羣臣議して皆曰く、長の罪は當に刑して屍を市 の奇と俱に謀反し、人を遣して閩越及び匈奴に便し 子の鹵簿に比し、自ら擅に法令を爲り、棘蒲侯の 廢て、天子の詔を聽かず、邸宅に節度無く、出入は天 82 て、其の兵を徴發して以て宗廟社稷を危くせむと欲 六年に淮南王長を追奪して諡して厲王と爲し、 六年、有司言す、淮南王の長は、先帝の 0) 嚴道

譌なり、史記漢書の淮南王の傳には邛郵に作れり、處市、刑したる屍を京中に騙すこと、邛都、都は 郵字のこと、擬、比すなり、發、徵發なり、弃ころなり、邸宅のこと、擬、比すなり、發、徵發なり、弃

北諸吏民與王反者、之八月、破濟北軍廣其王、赦濟

遺すこと甚だ厚かりき、而るに今右賢王は其の國をッパ 日に帝甘泉宮より高奴に行く、因つて太原に幸し、故 むることを禁ぜり、故に中國より物貨を 窓を爲す、帝初めて甘泉宮に幸す、六月に、帝曰く 灌嬰をして匈奴を撃たしむ、匈奴去りぬ、中尉の材官 五千を發して高奴に詣らしめよと、途に丞相 結びし約にあらざるなり、其れ邊境に在る 吏騎 盗みをなす、此の如く甚だ敷りて無道なり、是れ前に を得ざらしめ、又邊境にある官吏を踐み躙り、入りて 塞を戍り保つ所の蠻夷を騙りて其の舊處に居ること らず、又手近き要塞に往來して東卒を捕へ殺し、又要 離れて衆を將ゐて河南の降地に居るは、常の故に は前に匈奴と約して兄弟の親をなし、邊境を害 ひ、諸民の里毎に牛酒を賜ひ、晉陽中都の民に三歳の を發して衞將軍に付して長安に屯營せしむ、辛卯の 羣臣を見て皆之に賜し、功ある者を擧げて賞を行 五月に、匈奴北地に入り、進みて河南に居て 何奴に輸 あ 萬

> 在る地邑を知らして降らむ者は皆之を赦して元 を誰らしめて大逆を為しぬ、されど濟北の吏民にし司に認して曰く、濟北王は徳に背きて上に反し、吏民 倶に反せる者は皆赦せり、 軍を破りて其の王を虜にし、濟北の諸の吏民の王と 雷に復らしめ、又王の興居に與して相往來して反す て官兵未だ至らざる前に先づ自ら定まり、及び軍の む、七月辛亥の日に、帝太原より長安に 還る、迺ち 將軍と為して滎陽に至りて濟北王の反兵 と戦 はし 罷めて、棘蒲侯の陳武をして大將軍と為し、十萬 租税を免ず、帝太原に留まり游ぶこと十餘日なりき、 るとも、降る者は亦之を赦さむと、八月に、濟北 に將として往きて胡を撃たしむ、而して前侯の賀を て滎陽を襲はむと欲す、是に於て詔して丞相の兵を 濟北王の興居は帝が代に行きてそれより進みて胡を たむと欲すると聞きて、乃ち謀反を起し、兵を發し 0 兵 賊

あやまりなり、詿誤は民をあやまらしめて反亂の渦ること、三歲、漢書に歲の下に租の字あり、詿誤、詿は秦官なり、材官、騎士の材力あるもの、復、租稅を免ず秦官なり、材官、騎士の材力あるもの、復、租稅を免ず

史記第一卷 孝文本紀第十

ひて殃を加ふるを詛といふ、謾、欺くなり、抵、觸なけて言へば、言を以て神に告ぐるを祝といひ、神に請 祖、神明に告げて殃答を加へしむること、のろひ、別 橋梁の四柱の頭に作りしなり、妖言、異き言なり、祝、 誇之木、政の過失を記す板なり、是も亦美が始めて

月、初與郡國守相為銅虎符

罪にふる」をいふ、

為に銅虎符と竹使符とを作る、 九月に、初めて郡國の太守宰相に與へむが

國に至らしめ、此の符を合せて其の證となすなり、竹相に與へ置き、兵を發する時に當りて、使者をして郡 書を鐫り刻み、第一より第五に至る、其の使用方は前 して五等あり、之を二分し、右は京師に留め、左は守 如し、 一符、此の符は竹箭五枚にて作る、長さ五寸にして篆 銅虎符、銅製の虎の形の符なり、長さ六寸に

三年、十月丁酉晦、日有食之

三年、十月丁酉の 晦に、日蝕あ

行かざる者あり、此くては其の意に反すれば悉く行 けと、是に於て絳侯勃丞相を免じて其の國に就く、よ れど朕が爲に丞相を罷めて列侯を率ゐて其の國に行 かしめざるべからず、丞相は朕の重んずる所なり、 て其の封國に行かしむ、而るに或はことわりて未だ 【講義】 十一月に、上曰く、前の日に計りて列侯をし つて太尉潁陰侯嬰を以て丞相と為す、太尉の官を廢 して其の務を丞相に付く、四月に城陽王の章薨じぬ、

者

揖を梁王と爲す、 皇子の武を代王と爲し、子の參を太原王を爲し、子の >城陽王と爲し、東牟侯を立て、濟北王と爲し、

太后に幽閉せられ 幽死、推し込められて殺さる こと、即ち呂 、其の邸にて餓死せしをいふ、

來愚意而。其。過使。諫旌有、無。而。後。除。失。衆者,誹犯。知。吏。相之,也、臣。今謗 旌、 犯。知。吏。相此,抵。又 謾 民 将。不,法之 或、何,敢,有,木、治、祝以,盡,誹,所天。 勿、朕,爲、以,祝以,盡,誹聽甚誹爲即此 為温。來,情,謗 不競大上。遠取,此、逆、以,方 通治 上,遠而,妖 有, 其,相有,約 之賢 無之 道 而 今 曲 罪 民 之他結長,聞是來、之 堯が始めて五達の道に設けしなり、民に善を 進めむ

り、朕甚之を取らざるなり、故に今より後はか 之を以て上をそしる者と為す、此の如くなれば細民 すべし、又民或は初め相結び約して上を詛ふも、後に ざらしむるものなれば、從つて上は其の過失を 罪あり、是れ衆臣をして遠慮なく其の情を上に盡さ 過失をそしり異しき言を為したりとて之を罰するの を上に知らすものなれば、世を治むる道に 通 罪者あれば之を獄に聽き治むること無かれと、 逆なりと爲す、又他の事を言ふことあるも而も吏 して止むることあり、而るに更は之を聞き知り に由無きなり、此の如くしては將何を以て遠方の むる者を來す所以の具なり、而るに今は法律に の旌と誹謗の木とあり、是は民に 至りて巫は貨を前取りして其の誰を畢へず、中道 良を來すことを得んや、其れ今よりは此の 愚なる、遂に法に觸れて死することを知る無きな 進善之旌、民に善事を勸むるの幡なり、是は 上曰く、古の天下を治むる者は、 善を進め、政の過 法律 ンる T 30

と欲する者は其の幡の下に立ちて言ひ聞かすなり、

り、冷、此の詔書なり、白、明日なり、匡、正すなり、不り、冷、此の詔書なり、白、明日なり、匡、正すなり、不り、冷、此の詔書なり、白、明日なり、居、間然、寝視の間妻、繇は徭なり、ぶやくなり、えだち、惴然、寝視の間妻、繇は徭なり、がなり、が、治なり、といな、り、といいの記書なり、自、明日なり、正すなり、不り、股肱、もゝと、ひぢと、重臣をいふ、三光、日月星なり、股肱、もゝと、ひぢと、重臣をいふ、三光、日月星なり、股肱、もゝと、ひぢと、重臣をいふ、三光、日月星なり、股肱、もゝと、ひぢと、重臣をいふ、三光、日月星なり、股肱、もゝと、ひぢと、重臣をいふ、三光、日月星なり、といいの記書なり、

田,朕親率耕,以給,宗廟粢盛,正月、上日、農天下之本、其開,籍

> 為為立,少太濟朱子, 及立,上 候 濟 齊, 興 本原王子揖為梁 本虚侯為城陽王 辟 居。悼 長 趙 疆,有,惠 侯, 功 爲。 爲。 逐, 可,子, 河 王、朱 死,皇 間 趙 為。 代立,以立,侯弟,王,牟 弘,王,牟 强 逐弟 憐

子の辟彊を河間王と爲し、齊の劇郡を以て、朱虚侯を爲さむとす、上曰く、趙の幽王幽死せり、朕甚 だ 之を憐みて、已に其の長子の遂を立てゝ趙王と爲しぬ、遂憐みて、已に其の長子の遂を立てゝ趙王と爲しぬ、遂憐みて、已に其の長子の遂を立てゝ趙王と爲しぬ、遂以為さむとす、上曰く、趙の幽王幽死せり、朕甚 だ 之を【講義】 三月に、有司請ひて皇子を立てゝ 諸侯王と

蕗何 こと均しからざる時は、天之に 舊を示して其治まら ざるを誡むるなりと、而るに日蝕は歴數上朔にあ あり、是れ皆あるべからざる時にありしなり、是に由 つて上曰く、朕聞けり、天の萬民を生すや、之が為に を置きて養ひ治めしむ、人主不徳にして政を布 か之より大ならむ、朕位に即き 月晦 月晦に、日蝕あり、十二月望に、又 に有りて、其 の責天に現れたり、其 T 宗廟を保 3 3 0

縱ひ邊境の屯營戍卒を罷むること能はずと難、而も念ふ、是を以て邊境の備を設くること未だ息めず、今 め 又兵を整へ衞兵を厚くせむや、其れ衞將軍 故に寢視にも安からずして外夷の姦非あらむことを 萬民をいふ、菑、災に同じ、適、責めなり、託、寄 行志に無し、一本に日を月に作る、蒸民、蒸は衆 かりを遺し、其の餘は皆驛傳の馬に給せよと、 以て民に便にせよ、朕既に徳を遠く布くこと能はず、 羣臣も各"其の任職を飭へ、務めて徭役の費を省き、 ばざる所を正せ、朕已に此の如く思へり、因つて汝等 あ あ て其の費を省き、又太僕の現在 72 は ひ邊境の屯營戍卒を罷むること能はずと難、而も り、唯二三の執政大臣は吾が股肱 上に寄す、天下の治まるも聞るゝも朕一人 悉 り臆せずして諫むる者を學げて、朕が思慮 明白に朕に 一く 朕が過失を思ひ、知見思の及ばざる 所に至 を理め育つると能はず、上は日月星の明を累す、 不徳大なり、故に此の詔書天下に布き至らば、其 、微眇の 告げよ、又賢良方正にして能 身を以 此の文漢書文帝紀及び五 て億兆 の馬 の如し、朕は は 民 及び諸 纔に足るば の軍を罷 の任 く面 なり、 す 73 b 0)

多居。長安、邑遠、吏卒給輸費苦、上下職 列侯亦無由、教、馴其民、其令、 太子、 【講義】上曰く、朕聞けり、古より諸侯の國を建つる こと千餘歲、各、其の封地を守り、時を以て朝廷に入太子、 【講義】上曰く、朕聞けり、古より諸侯の國を建つる こと千餘歲、各、其の封地を守り、時を以て朝廷に入太子、 【講義】上曰く、朕聞けり、古より諸侯の國を建つる こと千餘歲、各、其の封地を守り、時を以て民勞り苦まず、上下職

こと千餘蔵、各、其の封地を守り、時を以て 朝廷に入りて其の實物を上る、是を以て民勞り苦まず、上下膳りて其の實物を上る、是を以て民勞り苦まず、上下膳りて其の實物を上る、是を以て民勞り苦まず、上下膳と封邑との間を往來して給輸すること、党の民を教へ導く に由なと、故に今より後列侯をして其の國に行かしめむ、但し、故に今より後列侯をして其の國に行かしめむ、但し、故に今より後列侯をして其の國に行かしめむ、但と,對大夫となりて朝廷に勤むる者及び特に恩愛を蒙りて京師に留めらるゝ者は其の太子を遣るべしと、以中財】 離欣、よろこぶなり、遺徳、漢書文帝紀に は「学解」 離欣、よろこぶなり、遺徳、漢書文帝紀に は「学解」 離欣、よろこぶなり、遺徳、漢書文帝紀に は「学解」 離欣、よろこぶなり、遺徳、漢書文帝紀に は「学解」 離欣、よろこぶなり、遺徳、漢書文帝紀に は「学解」 離欣、よろこぶなり、遺徳、漢書文帝紀に は「神教」となり、為「東、列侯の特に天子の恩愛を蒙りて 京

には食邑五百戸を、衞尉定等十人に は 食邑四百戸を十人には食邑六百戸を、淮南郡の 太守申屠嘉等十人の二千石以上の者の高帝に從へる潁川郡の太守尊等者六十八人には、皆封を益すこと各三百戸を、故の吏

故常山丞相蔡兼爲樊侯、封、淮南王舅父魁鈞爲、清郭侯、秋封、封、淮南王舅父趙兼爲周陽侯、

の丞相蔡兼を封じて樊侯と爲す、秋に至り、故の常山齊王の舅父駟鈞を淸郭侯と爲す、秋に至り、故の常山齊王の舅父趙兼を封じて 周陽侯と爲し、

【字解】 鼻父、母の兄弟なり、をぢ、

尊位,禍且及身、右丞相勃乃謝。 八或說,右丞相,曰、君本誅,諸呂、

病免、罷、左丞相平、專爲。丞相、

高す、 は講義】 或人右丞相勃に説きて 曰く、君は本諸呂を かのち病と稱してことわりて 免官を請ふ、上乃ち 世を受け、尊位に處れり、禍且に身に及ばんと、右丞 はして代王を迎へたり、今又其の功に矜りて 最上の はして代王を迎へたり、今又其の功に矜りて 最上の は、と、右丞 は、と、右丞 は、と、右丞

なりとてことわること、【字解】 矜、自ら賢とするなり、ほこる、謝病、やまひ

勃為丞相、不卒、復以、絳侯

苦、上下驩欣、靡、有、遺〕徳、今列侯歳、各守、其地、以、時入貢、民不、勞族、各守、其地、以、時入貢、民不、勞議、各守、其地、以、時入貢、民不、勞議、各等、其地、以、時入貢、民不、勞

る數ありき、の九歳已下なる者に布帛米肉 を 賜ひて、夫々定まれの九歳已下なる者に布帛米肉 を 賜ひて、夫々定まれに、天下の鰥寡孤獨窮困者及び年八十以上の 者孤兒

の、孤兒、父無きもの、 孤獨、たよりなき者、ひとりも夫無きもの、やもめ、孤獨、たよりなき者、ひとりも夫無きもの、やもを、寡は

の諸呂を誅して朕を迎ふるに方りて、朕之を疑ひ、群の諸呂を誅して朕を迎ふるに方りて、朕其の功を表はさむと欲す、而るに昌は已是を以て朕其の功を表はさむと欲す、而るに昌は已是を以て朕其の功を表はさむと欲す、而るに昌は已是を以て朕其の功を表はさむと欲す、而るに昌は已にないて、朕之を疑ひ、群の諸呂を誅して朕を迎ふるに方りて、朕之を疑ひ、群

尉・大鴻臚・宗正・大司農・少府、是なり、狐疑、うたがふなり、九卿、太常・光祿・衞尉・太僕・廷するなり、驩、歡ぶなり、循、漢書に修に作る、是なり、「全解」 塡無、塡は鎮に同じ、定むるなり、無は安ん

『に施し、諸侯四夷を塡め安んじければ、上下皆洽く『講義』 上代より來りて初めて位に即き、德惠 を 天

ぶ、よつて代より來れる功臣を修む、上曰く、大臣

天下何、天下に告ぐるの言無きの意なり、其安之、安 は食を饗くること、味、漢書に感に作る、快なり、謂

【字解】 蚤、早なり、歌享、歌は神の香を嗅ぐこと、享

を有つや、太平に治まりしこと各、千餘歳なりき、古 莫し、是れ子を

乃ち之を許す、而して其の子にのみ福を饗くること 厚にして慈仁なり、請ふ之を建てゝ太子とせむと、上 に議せむこと宜しからず、陛下の子某最も長なり、純 宗室に選ばむは、高帝の志にあらざるなり、よつて更 及び列侯の始めて國を受けたる者も、亦皆其の國祖 平ぐるや、諸侯を建て、帝者の太祖となりね、諸侯王 然り、即ち高帝は親ら士大夫を率ゐて始めて 天下を なり、其れ古の例のみにあらず、近事を以てするも亦 立つるに必ず子を以てするとは從つて來ること久遠 建てゝ太子と爲すの道を用ひたればなり、故に嗣を 來天下を有ちし者は殷周より長き は 代るべき者に餌各、一級を賜ふ、 の專なるを欲せず、因つて天下の民の當に父の後に ね、今宜しく建つべき所の者を釋てゝ更に 諸侯及び 下の大義なり、故に高帝此の制を設けて海内を撫で となりぬ、而して子孫繼ぎ嗣ぎて世々絶えず、是れ天

り、莫不長焉、漢書に不の字無し、此道、子を立つるの齒なり、閱、歷なり、秉、把なり、トル と訓む、陪、輔な は徐なり、徐々として且らく待ての意なり、春秋、年 道なり、子某、某は啓なり、即ち景帝のこと、 む、陪、輔な

封,將 軍薄昭為軟侯 将軍薄昭を封じて朝侯と為す、

下, 皇 諸 上孤兒 月,有司 鰥·寡 后 皆 孤 同 九歲已下布帛米肉各 資力 氏上為立后 請立。皇后、薄 姓、立太子母、為皇 獨·窮困·及年八十

とせむと、皇后姓は竇氏なり、上后を立てしが爲の故 皇后と爲すべからず、よつて太子の母を立てゝ皇后 后日く、諸侯王は皆漢と同姓なり、故に其の女を以て 三月に、有司皇后を立てむことを請ふ、薄太

四四四

許。純帝建。故。繼始侯,帝道, 各之,厚之而高一因,慈志更帝 嗣、受、爲 親。也 國, 世 者、皆 選。設。世 者, 大 更於 之,弗 太 以絕亦 夫,子 祖、 撫海內、 爲, 諸 其 侯 國 父,子, 某, 後,上,最 者,乃,長, 今釋 祖、及 室,非 遠。 大 義 長高宜。也孫 侯、諸

爵

正月に、有司上言して曰く、早く太子

るは宗廟を奪ぶ所以なり、請ふ太子を立て給へと、上 、朕旣に不德なり、故に上は上帝神明未だ朕の上 を建つ む、是れ實に天下を憂ふる所以にあらず、朕甚だ れ朕を以て賢者及び有徳者を忘れて子に專にすと 者を選び學げずして必ず子を建てよと日はい、 陪けなば、是れ社稷の靈及び天下の福なり、今此有徳し、若し有徳者を擧げて朕が終ふると能はざる事を 王・宗室の昆弟・有功の臣には、賢及び徳義ある者 を建てすと為んや、太子を建つべきを知ると雖、 には此の如き有徳の人あり、豊に朕にし 淮 り、吳王は朕に於ては兄なり、仁惠にして徳を好む、 天下の義理を歴たること多く、國家の大體に明かな ざる所以なりと、上曰く、楚王は季父なり、年齒高く、め太子を建つるは、宗廟社稷を重んじて天下を忘れ 下に告ぐるの言葉無し、朕固執して子を立てずとい 建てんといふは、是れ吾が不德を重ぬるなり、實に天 め 快きの志あらず、今縦博く天下の賢聖有徳の人を 取らざるなりと、有司皆固く請ひて曰く、古殷周 ふにあらず、徐々として且らく待てと、有司曰く、 3 所 て天下を禪ること能はずと雖、而かも豫め太子 南王は弟なり、徳を把りて朕を輔けたり、朕が宗室 獲け給はず、下は天下の人民 て豫め太子 未

くは 詔書を奉じて 收帑及び 諸の相坐の律令を除か思を加へ德甚だ盛にして、臣等の及ぶ所にあらず、願るなり、卿等其れ熟"之を計れと、有司皆曰く、陛下大

太天日、賢未、德、尊、正 むと 母妻子同 子,下。豫、聖 有,上宗月。 所何。建。有赚待 廟,有 産を同 治之正、天下を治むるの T 獄に 以其太德志神 請,司 沙子,之今明立言。是是人,縱法未。太日,處 なり、收帑、帑は拏に通ず、子なり、妻、天下を治むるの正道をいふ、同産、 重。安,子,之 廟之,重。而不。歌*子,蚤, 有吾,禪、能、享、上建。 稷,司不天博,天日,太流 不。日,德,下,求,下,朕子,忘、豫,也、焉、天人既所 同、 天建淵。而。下、民不以

古也德而。之有有量好之閱下, 朕 者, 日, 靈 德, 功, 為: 德, 大 天 也, 有,殷 甚。而必。天以,臣不淮體下 天周,不專子、下陪多。豫、南吳之日,下,有、取,於人之股賢哉王、王、義楚 **朕賢哉王、王、義** 國,也子其福之及諸 弟於,理,王、 莫。治 有非以,也不有,侯也除多,季 司所朕,今能德王秉兄矣父皆以爲不終義宗德,也明,也 安 長*皆 德,也明,也 焉千固,憂,忘、選是、者室以惠 於春 用。餘請、天賢舉、社若。昆 秋 陪给一國 日,下,有焉稷舉,弟朕,以,家高。

計。也之者當故心,法,之,坐。論。以十 之,何,法,更則便使以有之而。禁、二 朕 父 人,者

有以,罪、也、民上重禁。司及、使、暴,月。 司禁。之,其、從、日、犯、之,皆爲、毋、而上 皆之,是既且,朕法,相日,收罪 日,朕反,不夫聞,所坐、民帑,之善法 未,害。能、牧法、從。坐不 見於導、民,正、來、收。能、甚母 加、其、民、又而則遠所自,不妻 大便,為以,導,民矣以治,取,子犯。正惠,其、暴,不之,認如,累故其、同法,也、德熟、者正善罪。其為,議。產,已所

> 除, 帑 非 諸 相 等, 坐,所。 律 及, 也 奉,

民ば、 今法を 正道なり 上法を爲りて之を禁じ、且つ其の家族を同罪にすよと、有司皆曰く、民は自ら治むること能はず、 之を導くこと能はず、又不正の法を以 時 せ を為す、股は此の法を甚だ取らず、其れ卿等之を議 其 T の罪に連らしめ、又は其の妻子を獄に收むるこ は民態み、罪其の科に當る時は民從ふと、且つ夫むこと便なりといふ、上曰く、臊聞けり、法正し を養ひて之を善に導く者は更なり、而るに 法を犯すことを重ん 家族を同罪にして獄に收むるとは其の 是れ反つて民を害して暴を爲す者なり、何 故に此の法の從つて來ること遠ければ、 犯罪を禁ぜむ、朕は未だ其の 犯せる者は已に其の罪を論じて 所の其 十二月、上詔 、是れ暴亂を禁じて善人を率ゐる所以なり、 の父母妻子の如き家族をして同 して曰く、法は天下を治 ぜしめて後を懲さんが ること能はず、故に 所謂便な T 處分す、而る 心を煩 め

封。 相 典 率*侯 太 氏,榮 通 陳 客 襄 尉 劉 平 章、周 平 產 劉 灌 擊、兵為,與擊、上 首、勃 欲 勃, 揭、侯 身,通,先,謀。為, 將 萬 朱 奪、持,捕、奪 戶、賜。 軍 虚 呂 節,呂 趙 侯 嬰 善,侯 王 產 邑 丞 金 承,產 謀,劉 各 詔,等,等,相 呂 五 各 禄,入,太軍,陳印,北尉、朱平 千 ----以,氏。遣、 侯,F· 平,誅,嬰 千 斤, 戶 丞 益 軍身 虚 與 呂 侯 留,將

金千斤

戸と金千斤とを賜ひ、典客劉揚を封じて陽信侯と為 章・襄平侯紀通・東牟侯劉興居の三人には 邑各、二千 嬰の二人には邑各、三千戸と金二千斤とを、朱虛侯劉 萬戸に益し封じて金五千斤を賜ふ、丞相陳平・灌將 の如く各。呂氏を誅するに功ありき、よつて太尉勃を に入れり、典客劉揭は身ら趙王呂禄の印を奪へり、此 襄平侯紀通を率め、天子の節を持ち詔を承け 劉章は第一先づ呂産等を捕へたり、此時周勃は 尉周勃とは共に謀りて呂産等の軍を奪へり、朱虚 り、此呂産の不善を爲さむと欲するや、丞相陳平と太 に留りて齊を撃たず、諸侯と謀を合せて呂氏を 倶に謀りて劉氏に代らむと欲せり、され ど嬰は滎陽 矯めて灌將軍嬰をして兵に將として齊を撃たし を置きて相國と為り、呂祿は上將軍と為り、擅に に迎へしむ、皇帝詔を下して曰く、呂産は前に自ら官 金千斤を賜ふと、 壬子の日に車騎將軍薄昭をして皇太后を代 て北軍

【字解】皇太后、文帝の母の薄氏なり、

帝即位の日の夕に未央宮に入る、乃ち夜宋昌 を 拜して衞將軍と為して敵中を巡ら しむ、張武殿中異狀無きを視て還りて前殿に坐す、是に於て夜詔書を 下してと謀り、劉氏の宗廟を危くせむと欲せり、是を以てを認力。 と謀り、劉氏の宗廟を危くせむと欲せり、是を以てで、皆其の辜に伏しぬ、除今初めて 位に即く、其れ天下に赦し、民には爵一級・女子には百戸に牛一頭酒十下に赦し、民には爵一級・女子には百戸に牛一頭酒十下に赦し、民には爵一級・女子には百戸に牛一頭酒十下に赦し、民には爵一級・女子には百戸に牛一頭酒十下に赦し、官聚して飲食すること五日せよと、

四兩に處す、今詔して之を解くこと五日に及ぶ、 「字解」 清」宮、天子の幸する所、必ず先 づ 静宮令を は公卿之を奉引し、大將軍參乘し、屬車 八 十 一 乘な り、法駕は公卿在らず、鹵簿の中惟京兆尹と執金吾と して殿中を清靜せしめて、非常を慮る な り、法駕、第 二の鹵簿なり、鹵簿に大駕・法駕・小駕の別あり、大駕 長安令とのみありて奉引し、侍中參乘し、屬車三十六 長安令とのみありて奉引し、侍中參乘し、屬車三十六 長安令とのみありて奉引し、侍中參乘し、屬車三十六 長安令とのみありて奉引し、侍中參乘し、屬車三十六 長安令とのみありて奉引し、侍中參乘し、屬車三十六 長安令とのみありて本引し、侍中參乘し、屬車三十六 長安令とのみありて本引し、付中参乘し、屬車三十六 大刀に作る、輔、王者德を布き、民樂み て 會聚飲食すること、漢律に三人以上故無くして群飲すれ ば罰金 ること、漢律に三人以上故無くして群飲すれ ば罰金

曹に復して之を興ふ、『講義』 孝文皇帝、元年、十月庚戌の 朔に、故の琅邪【講義】 孝文皇帝、元年、十月庚戌の 朔に、故の琅邪【講義】 孝文皇帝、元年、十月庚戌の 朔に、故の琅邪【講義】 孝文皇帝、元年、十月庚戌の 朔に、故の琅邪【講義】 孝文皇帝、元年、十月庚戌の 朔に、故の琅邪

【字解】 作、主人の階なり、右丞相左丞相、此の 時右

后于代皇帝日、呂產自置爲相壬子、遣車騎將軍薄昭、迎皇太

以一、 傳 理をいふ、庚庚、庚は更なり、諸侯を去りて帝位に即れたるきざしなり、大横、卦兆の正しく横に現れたる 臣は南に在り、故にしかせしなり、 故に昭王兩宮の間を通ぜむとて之を作る、間、隙な 冬栗、冬は勝と通ず、そへのりなり、傳、傳車なり、驛 者に禪れり、夏啓に至りて父の衛を續ぐ、故に代王も 大なり、先君の業を大いに治めしをいふ、昔五帝は賢 に作る、陰安侯、高帝の兄の伯が妻なり、不佞、不才な 王の時、咸陽宮は渭北に在り、與樂宮は渭南に在り、 亦父の業を嗣ぐべしとの意なり、絳侯、周勃のこと、 < 者は右袒せよ劉氏の為にせむ者は左袒せよと呼は に詳なり、一呼、周勃が軍中に合して呂氏の為にせむ 以て呂氏の權力內なる北軍に入りしこと、呂后本 の車をいふ、渭橋、渭水に架したる橋なり、秦の昭 の意なり、夏啓以光、啓は夏の禹王の 子なり、光は こと、殖與、殖豫に同じ、卦兆、龜を荆にて灼きて 人を屏くるをいふ、大將軍陳武、漢書の注 に 柴武 郷南郷、郷は向ふなり、此時大臣は西に在り群 節,入,北軍、周勃が紀通の繑める天子の符節 現 b

> 子。即,百位、 欲。間。以,者。 宗 中,南還,北 宫迎 東 室 坐,軍,夜 其、大 諸 戶_ 危。 代 以, 4 削 邸 天下、場。皆 皇 居清 用。 殿. 張 宋 氏, 事,於,武, 宗 帝 廟,擅是賴,權,夜 卽 爲為 郎 賴。 爵 謀,下, 中 夕。天 將 將 為書 辜、朕 相列 令、軍、領 級·女 逆, 日, 殿撫, 央 初。侯

清めしめ、天子の法駕を奉じて皇帝を代邸に迎ふ、皇乃ち太僕の嬰と東牟侯の興居とをして先づ未央宮を

群臣禮を以て位の順によりて左右に侍る、

子の 别 陳平·太尉 b 子を養ひし者なれば、當に宗廟の祀を奉ぜ を議せむと、遂に代邸に入る、群臣從つ ふ所私ならば王は私を受けじと、太尉乃ち跪 せむと b 1 王曰く高 琅邪王・宗室の大臣・列侯・吏の二千 石 らず、故に臣謹みて請ひて陰安侯・列侯頃王の后及び て曰く、 て潤橋 「に不才なれば、宗廟に稱ふに足らず、願くは 7 الا 至 、大王は高 ひて適當の 朱虚侯 拜 重符 下皆出 b 子弘等は皆孝惠帝の實子に非ず、是れ 其 を上る、代王謝して曰く、代の上屋敷に 、太尉勃進みて曰く、 至る、群臣 劉章·東牟侯劉興居·典客劉揭等皆 周勃·大將軍陳武·御 迎 0 帝の つて願 者を計れ、寡人敢て其の任に當らじと、 宗廟に奉事せむこと重 變を觀せしむ く、言ふ所公ならば公に之 り、宋昌還りて報 長子なり、故に宜しく高帝の 而 一拜謁して臣と稱す、代王車 くは大王天子の位に即けよと て宋昌 り、昌渭河 をして先づ馳 願くは人を解けて上言 史大 なず 橋に至れば、丞 、代王よつて 夫 き役なり、寡 等と議し 張蒼·宗 て至る を言 せ 3 再 T 後嗣 む 他 より下 丞 てこ て日 て天 一相よ 拜 馳 長 ~ ft 安 か 劉 相 72 0) 世

> E L 讓 3 解せずと、遂に天子の位に即く 奉じて上つると、代王曰く、宗室・將相 等宗廟社 T して寡人より外に適當の者無しとすれば、寡人敢 べし、叉天下の諸侯萬民と雖宜しと思へ 幸に臣等の計る所を聽せ、臣謹みて天子の 大臣等に譲ること三たびし、又南 n 大王が高帝の宗廟を奉祀せむこと、最も宜 ること再びす ど群 稷の 臣皆 為に計ること、敢て忽にせず、願くは 伏 、丞相陳平等皆曰 て固 く請ふ 代王 3 、臣伏 由 1 郷ひて群臣 T ·列侯、皆議 して り、故 西 種符を 計 鄉为 3

なり なり 带、 、、、、、、 牙の相當らずして衡み入り互に控制するをい 度 すること、犬牙相接、封地の境 は漢書に喋に作る、すゝるなり、京は大なり、師は を配りて企つること、非二上此八上は唯なり、此は此 の事なり、言は常に異志あるをいふ、睫…血京師 政、苛は酷なり、三王、梁王産・趙王祿 、大衆の居る所、即ち天子の 、第一なり、此の語六韜に出づ、故に所謂 石之宗、磐石は固くして動 屬意、屬は付なり、意を付くとは此にて 上相交り接すること犬 かざるの譬、宗は首位 都なり、言は盟 ·趙王 通なり、 は意

を滅

て劉氏の

CK 涵 下を有ち

0

天下

領

土犬牙の

0)

にトす、其の卦兆に大横を得たり、其の占 乗せしめ、張武等六人傳車に乗りて長安に向ひ、高陵 り、疑ふべきこと無しと、代王乃ち笑ひて宋昌 とする所以の意を言ふ、薄昭還りて報じて曰く しむ、周勃等具に昭が為に代王を迎へて位 王乃ち太后の弟の薄昭をして往きて絳侯周勃に見え 人曰く、所謂天王とは天子のことなりと、是に於て代 と、代王曰く、寡人已に王たり、又何の王たらむと、ト 大横康々たり、余れ天王たらむ、夏の啓以て大いなり す、大王疑ふことなかれと、代王之を太后薄氏に報じ に大臣天下の民心に因りて迎へて大王を立てんと欲 王とのみなり、而して大王は又淮南王より長にし きを以て畏れしむ、方今高帝の子は獨り淮南王と大 劉興居の親あり、外には吳・楚・淮南・琅邪・齊・代の にするを得んや、方今内には朱虚侯の て計る、太后猶豫して未だ定まらず、是に於て之を龜 百姓此等の輩に使はれじ、其の して仁孝なると已に天下に聞えたり、故 今大臣假令變を爲さむと欲すと雖、天 言の如しと、乃ち宋昌に命じて 劉章·東牟侯 く権を 即け 、信な 日く 謂 電 25

王寡足,高嗣議、邪請非案 相 西人、以,帝、願。日。王 與 等鄉、不稱宗大大宗陰 侯 惠 皆讓,敢,宗 廟,王王、室 安 日,者當,廟重即。高大 侯 子。再 宜。臣三。群願。事天帝。臣 列 不拜,東 稱,伏,南。臣請。也子,長列侯 當。言,牟 計。鄉、皆楚寡位子、侯頃奉、日、侯 之,讓、伏、王、人代宜、吏王、 大者固,計、不王爲。二后 廟。弘 王、再、請、宜、传日,高千與 臣 等。居 侯奉丞代者,不奉帝,石琅謹皆

特に異 の大 りて 崩 を配りて企つること止に此度の事の 問ふ、張武等議して曰く 問ふ、張武等議して曰く、漢の大臣は皆故のしむ、代王之を左右の近侍及び郎中の命の 人,引 宗 謹,許、萬 御 寡 室奉,不民 互に盟ひて相謀りて事を興 し給ひ諸呂も亦誅したれば、新に血を し給ひ諸呂も亦誅したれば、新に血を京師に高帝・呂太后の威を畏れたるのみ、今已に高帝 志を抱き機を見て發せむとす、されど今までは 将にして兵に習ひて詐謀多し、是を以て ふるを 天 敢,以, 以て名となすと雖、其 子,忽為 願。宜。 漢の 0 天爲上,聽,宗 て往くこと 質 みに 3 は す、今や 廟 如何な あ 高帝の 王を 張 位。宜 らず、常 王等社 其の 武 寡,日,臣穆 迎 等

から

ず

、願くは大王疾と稱し

事の變化を觀察せよと、中尉の宋

昌

陳至。即。跪。之。願。稱。還。昌止。等果。毋 而上,所請。臣、報、至,而、六如,可。 武 丞 議、天言,間,代代渭使人公疑 御 相 之,子,私言。王王橋、宋乘。言。者 史 陳 逐 璽 王 宋 下,馳,丞 昌,傳 乃 代 大 平 夫 馳。符。者、昌車。至、相先、詣、命、王 入、代不、日、拜、渭以馳、長宋乃 張 尉 代王受,所太橋下之。安昌奚。 蒼 周 邸。謝。私,言,尉群皆長至。參謂, 勃 羣 日,太 公,勃 臣 迎,安 高 乘,宋 正 臣至,尉公進拜宋觀。陵張昌 劉 將 從。代乃言。日,謁。昌變,休武日, 郢

物等共に之を誅しの位に立つ、此の声 宋大此。威。意。帝、等。代丞 字 昌王以,耳非、時、張王,相 進稱迎,今止大武代陳 卽位、位 日,疾、大'已此,将,等王平 の事の詳しきは呂后さいし、謀りて代王を代と は代 群毋、王、誅、也習、議、問、太 臣往為諸特兵日,左尉 王の 位なり、 之以。名、呂、畏、多。漢、右周 議、觀實、新高謀大郞勃 皆其不啑箫节臣中等 本紀 丞相 非變,可,血,呂此皆令,使 祖陳平・太 0) 語 也中信。京太其,故張人。 中 夫。尉願。師。后。屬。高武迎。 亂

穡、衣食滋殖、 然刑罰罕用、罪人是希、民務。稼 女主稱、制、政不出房戶、天下晏

、 業を務めて、衣食の料滋、増殖せり、 苦を離るゝとを得、君臣倶に無為の治に休息せんと で、故に惠帝は垂拱して天下治まり、呂后は女子に は、故に惠帝は垂拱して天下治まり、呂后は女子に は、故に惠帝は垂拱して天下治まり、呂后は女子に は、おいる。 と、孝惠皇帝、呂后の時庶民戰國の

五穀を飲むるを穡といふ、農業のことなり、 とは庶民のとなり、無為、施設する所なくして治を致とは庶民のとなり、無為、施設する所なくして治を致ら、天下も身房戸を出でざるをいふ、豪然、晏は安なり、天下も身房戸を出でざるをいふ、豫穡、五穀を種うるを稼といひ、の太平なるをいふ、稼穡、五穀を種の言は黑し、故に黎民【字解】 黎民、黎 は黑 なり、民の首は黑し、故に黎民【字解】 黎民、黎 は黑 なり、民の首は黑し、故に黎民【字解】 黎民、黎 は黑 なり、民の首は黑し、故に黎民

孝文本紀第十

で中子を立て、代王と為し中都に都せしむ、而してて中子を立て、代王と為し中都に都せしむ、而して「講義」孝文皇帝は高祖の中の子なり、高祖十一年為。代王、都。中都、太后薄氏子、一年春、已破。陳豨軍、定、代地、立、一年春、已破。陳豨軍、定、代地、立、一年春、已破。陳豨軍、定、代地、立、一年春、已破。陳豨軍、定、代地、立、

り、故に中子といふ、【字解】 中子、高祖に八子あり、文帝は其の第四子なのは太后薄氏の産みし子なり、

(講義) 代王の位に即きて十七年は、高后の八年に以危,劉氏,大臣共誅,之,謀召立,代王,事在,呂后語中,

十人皆培兵而去

兵は武器なり、乗興車、天子の乗る車なり、少府、天子 中を掃除せしめ、以て非常に備ふ、捨、兵、掊は仆也 往きて謁者十人に諭し皆武器を仆して去らしむ、 護り曰く、此の內には天子在り、足下は何する者ぞ、 の夕未央宮に入る、謁者十人あり、戟を持して端門を り迎へ報じて曰く、宮中は謹んで掃除せりと、代王其 と、少府に含す、迺ち天子の法駕を奉じ、代王を邸よ かんと欲するかと、滕公曰く、出でて舍に就くなり を載せて宮を出づ、少帝日く、我れを送りて安くに之 武器を取り去らしむ、滕公迺ち乗輿の車を召し、少帝 の數人能め去ることを肯ぜず、宦者令張澤諭告して 者をして武器を仆して護衛を罷め去らしむ、其の内 ず、當に帝位に立つべからずと、乃ち左右の戟を執る 宮に入り、進んで少帝に謂つて曰く、足下劉氏に非 請ふ宮中の掃除を爲さんと、乃ち太僕汝陰 而して此の内に入るかと、代王迺ち太尉に謂ふ、太尉 【字解】除、宮、天子行幸の時、至る所靜室をして殿 東牟侯興居曰く、呂氏を誅する吾れ功なし、 侯滕公と

に同じ、端門、未央宮前殿の正南門なり、よ駕、乗鬼より私に賜ふべき物品を入れ置く庫なり、法駕、乗鬼

為,孝文皇帝, で分って梁の淮陽・常山王及び少帝を邸に誅し滅す、 を分って梁の淮陽・常山王及び少帝を邸に誅し滅す、

株・息・チ・無為、故・惠・帝・垂 拱、高 后、な 史 公 日、孝 惠 皇 帝、高 后 之 時、崩ず、諡して孝文皇帝と為す、 高 后 之 時、原・諡して孝文皇帝と為す、 在位世三年にして

ずるなり、傳車は驛傳の車なり、後九月、閏九月なり、 駟鈞、駟は姓、鈞は名なり、乗六乘傳、六乘の傳車に乘るをいふ、適子、嫡子に同じ、正室の生みし子をいふ、 當時律歷を廢して 閏を知らず、之れを 後九月といふ 【字解】 彊呂氏、彊は强なり、呂氏の勢力を强固にす退せしも、群臣固く請うて、然る後に之を聽許せり、 王に奉り、共に尊び立て、天子と為せり、代王数、辭 酒ち相與に共に陰かに 人をして 代王を召さしむ、代 厚なり、太后の家は薄氏にして謹良なり、且つ長を立 の世に在りて、現に高祖の子にして最も長じ、仁孝寛 思ふに齊王年少く母家又惡し、迺ち曰く代王は方今 を立つれば復呂氏の為めに淮南王を立てんと欲す、 つるは固に順なり、仁孝を天下に聞ゆるは便なりと、 をして解退せしむ、使者再び往反して然る後六 含す、大臣皆往きて謁し、天子の御璽を奉じて代 傳車に乗じ、閏九月晦日己酉の日長安に至り、代 きが故に、殆んど國家を危くし功臣を聞せり、今 母家は駟釣にして、駟釣は悪人なり、即ち齊王 大臣皆曰く 、外家たる呂

即,少将,召。者持、氏、公請,東 代日, 央 報。府。我,乘令 兵,不 天 宫 入,得 迺,安,奥,張 罷。當。宮。除。侯 去。立,前、宫、舆有,乃,謂,乃,居 謂,在,謁 宮 奉。之,車,澤 天子、滕 載諭有 謹 者 除、 顧少與 足 太尉 法 代 公 帝。亦 麾。帝太 震,日、出、去、不左日、迎、出、少兵、肯、右、足代就,帝除去、執、下 日,僕 何 持。王 往,爲。戟,即 代就常際去執下陰王,舍日、公兵、戟,非、侯 諭、者,衞。 夕 而,端 入。門,未於舍、欲。迺。宦者。劉滕

以太方王,立。齊外長適或類呂,諸

仁后,今以齊王,家,孫子言,矣而。王, 孝,家高。爲王,母恶,可。爲。齊、不、置。以,聞。薄帝,少。則,家、而立。齊悼如,所,彊。 於氏見母復駟幾。也、王惠視,立呂

天謹子家為魚危大推、王、諸即、氏, 下良最双吕駉宗臣本,高王、長、今 便,且,長。惡、氏,鈞、廟,皆言。帝,最。用。皆 迺, 立, 仁 迺, 欲、恶 亂, 日, 之, 長 賢, 事, 已<u></u> 日,立人功呂高子者,吾,夷

順,厚王南即,今以,適其之無。諸

與故寬代淮也臣、氏帝、今立。屬滅。

然、立、皆晦 謝。共二 後為往日 再 陰, 聽。天謁。已反。使。 子、奉。西然、人。代天至、後召、 王子、長乘、代 數. 璽,安.六王, 讓、上、舍、乘、代 羣代代傳王 臣王即後使 固,共大九人,

請。尊臣月辭

用ひ、吾が屬遺類なからん、諸王の最も賢なる者を 母を殺し、之を後宮に養ひ、孝惠帝の子たらしめ、立 后計を以て許りて他 の淮陽・常山王等は、皆眞の て之れを立つるに如かずと、或は曰く、齊の悼惠 て其の立てし所を其のま、置かば、即ち長じて事 の長子にして、今其の嫡子は齊王たり、根 後嗣及び諸王と為し、以て ものなれば、今皆已に諸々の呂氏を夷滅し、而 諸大臣 相共 い高祖の に陰に 人の子を 嫡長孫にして、立ちて 謀 恵帝の つて日 帝の子と名づけ、其 呂氏の權力を强固 子に く、少帝及 あらず、呂 び

、府は役所なり、節信、符節を以て信を取るなり、長中は宮殿門戸を掌る官なり、故に其の府宮中に在

辛酉の日捕へて呂祿を斬り、呂顏を答うちて殺し、人 帝、太傅酈食其を以て復左丞相と為せり、 をして燕王呂通を誅し、魯王偃を廢せしむ、壬戌の日 れば、天下の大勢は定れりと、遂に人を遣し手分して 樂衞尉呂更始を斬り、還り馳せて北軍に入り、狀を太 車に載せられ、謁者の持てる 割符に因り 馳走して長 と欲せしも、謁者肯ぜざりしかば、朱虚侯共に 呂産を殺せしかば、帝は謁者に命じ通行の割符を持 て之れを郎中府吏の 厠の中に 殺せり、朱虚侯は已に に報せしかば、太尉は起つて拜し朱虚侯を賀して て朱虚侯を慰勢せり、朱虚侯は其の割符を る者は、飢れて敢て聞ふこと能はず、呂産を逐 諸呂の男女を捕へ、少長と無く皆之れを斬れり、 、患ふる所は獨呂産のみなりしが、今已に誅した 天風 大に起り、 謁者 0)

戊辰、徙,濟川王、王、梁、立,趙幽王樂衛尉、長樂宮の門を護衞する官なり、

王の子途を立てゝ趙王と爲す、【講義】 戊辰の日、濟川王を徙して梁王とし、趙の幽子 遂、爲。趙王、

齊王、令、罷、兵、灌嬰兵亦罷、滎陽、王の子遂を立てゝ趙王と為す、王の子遂を立てゝ趙王と為す、

吹き來る風、卽ち天の論けある風なり、郎中府吏厠、申の刻にして、今の午後四時に當れり、天風、天より【字解】 訟、公なり、公言せざるをいふ、日晡時、晡は

殺、殺、起、中、千宮。言、尉、徇未 產,之,以,日餘衞;誅太 帝郎故,餔人,帝,之尉 從、欲、命。中其時入,朱迺,尚 與奪調府從逐未虛遣恐陽 節者更官擊央侯朱不侯 始,因。信,持、厠亂、產,宮,請,虛勝。恐、殿 還,節調節,中莫產門。率,侯,諸弗,門 馳, 信者勞、朱敢, 走, 遂、太謂, 呂、勝, 弗 鬭,天 見,尉 日,未,馳;得

入,馳不朱虚 北走。肯。虚 軍, 新, 朱 侯, 已, 產, 大, 廷 卒 入, 訟, 太 徘

朱

侯虚

則,侯

衞

尉

呂

復廢、笞少遂所、報、 爲。魯 殺。長、遣。患、太 左王呂皆人,獨 丞偃,顉,斬,分,呂太 相、壬使之、部,產、尉 戌人,辛悉,今 以,誅,酉捕、已,拜

帝,燕

傅

王

呂

侯逐、風產,予,急、敢、語》入。

氏に は尚諸呂に勝たざるとを く鎖して入ることを得ず、徘徊往來せり、平陽侯は ず、酒ち未央宮に入り聞を爲さんと欲せしも、殿 するとを言はず、廼ち朱虚侯を遣し謂つて曰く 人を得て未央宮 勝たざるとを恐れ、馳せて太尉に語げしも、太 呂産は呂 祿の已に北 呂産を撃ちしに、呂産は の門に入り、呂産を延中に見る、 れと、朱虚侯兵卒を 恐れ、未だ敢て公けに呂 軍を 去りしことを 知

尉。

起。

捕。諸誅、賀、

斬,呂,天

通,禄,女,定公,

呂男

其,而而,無,矣,日,

號令を下して曰く、呂氏の爲めにする者は右禮せよ、 乃ち節を持し矯めて太尉を北軍に入る、太尉亦麗寄 其語を聞き、乃ち馳せて丞相太尉に告ぐ、太尉北軍に も亦已に上將の印綬を解いて立ち去りしかば、太尉 左檀して劉氏の爲めにせり、太尉行き至り、將軍呂祿 劉氏の爲めにする者は左禮せよ と、是に於て軍中皆 に印綬を解いて典客劉揭に屬し、兵を以て太尉に授 起らんとすと、呂祿以爲らく酈兄己れを欺かずと、逐 尉をして北軍を守らしむ、足下國に之かんと欲せば、 をして 典客劉揭と先づ 呂祿に説かしめて曰く、帝太 入らんと欲して入るとを得ず、裏平侯通符節を主る、 に告じ、乃ち呂産を趣がし急に宮に入る、平陽侯頗る に主將の印綬を歸し、辭し去れ、然らずんば禍將に 、太尉之れに將として軍門に入り、行くく軍中に

侯及び四方 義に歸する蠻夷等を掌る官也、左禮、禮合せ信と為す、今の謂はゆる割符手形なり、典客、諸 【字解】 敷、責なり、尚、主なり、つか さどるなり、符は遂に北軍に將たり、 は袒に同じ、衣を脱して左の肩を露し賛成の意を表 節、古は玉を以て作り、文字を 刻し、中分して 之れを

產謀。告 軍門、令。平陽侯告,衞尉、世、入、相 國產殿門、 虚 尙 侯, 丞 尉太 軍、平 相 平、永 令朱虚 相 侯聞,之、以,呂 平迺君 監。朱

【字解】 告:[衞尉] 毋>入;[相國產殿門] 衞尉 は 宮門|呂産を殿門に入ること無からしむ、 相の命を以て 衞尉に告げ、呂産を 納るここと無から 護衞を掌る官なり、平陽侯時に御史大夫たり、蓋し丞 を監督せしめ、平陽侯をして衞尉に告げしめて、相國 ち朱虚侯を召し太尉を助く、太尉朱虚侯をして軍門 侯之を聞き、呂産の謀を以て丞相平に告ぐ、丞相平迺 然れども尚南軍は、呂産の掌中に在り、平陽

呂產不知。呂祿已去北軍、西入

しむるなり、

ば、呂祿 となるべ の姑 に當れり 玉寶器を守るも益なきなりと、 類、呂顏 は 呂 后の 妹、樊噲の 妻なれ

左 丞 相 食 其 免ぎ

講 左丞 相 麗食 其、其の職を免ぜらる、

符欲。聞。告。以。蚤。賈大八 節,入,其產灌之,壽夫,月 乃,北語,乃,嬰國。使,事,庚 令。軍。乃越與今從,見,申 持、不、馳、產,齊雖、齊相旦 節,得告,急楚欲來,國 平 矯、入。丞 入。合 行。因。產 陽 內裹相宮從。尚數計。侯 平欲,可。產,事。窑》 尉,侯尉器,得日,郎行。 諸邪 王中御 軍。尚於尉頗。呂,其不。令史

將。呂皆為太遂禍足說。太 北祿左呂。尉解。且。下呂尉 左 呂,尉解。且,下 軍亦福、氏、將、印,起、之。祿、復 已為右之屬。呂國日,令 解劉襢入典祿急帝 上氏為軍客以歸。使寄 將太劉門而爲將太與 印,尉氏,行以,酈印,尉,典 去。行。左令。兵,兄辭。守。客 太至。檀、軍授,不、去、北劉 尉将軍中太欺,不軍,揭 遂。軍中日。尉。己。然。欲。先

ひ、相國に と合從し、諸、の呂氏・かず、今行かんと欲す 齊より來り、因つて呂 産に 庚申 見えて 呂氏を誅せんと欲するを以 の旦 事を計る、郎中令曹旦、平陽侯窑御史大丰 るも尚得べきか 産を責めて日く 、其灌嬰と齊楚 、王蚤~國 **介賈壽、使**

夫の

事を

太平太

通

太侯

氏 麗商 得ず、曲周侯酈商老いて病み、其の子の寄は呂祿と仲 として此に留り、大臣諸侯の疑ふ所と爲れり、足下何 急ぎ國に之きて藩を守らず、乃ち上將と爲り、兵に將 せり、今太后崩じ帝少くして足下趙王の印綬を佩び、 の議にして事已に諸侯に布告し、諸侯皆以て宜しと き説かしめて日く、高帝と呂后と共に天下を定め、劉 善かりしかば、絳侯は乃ち丞相陳平と謀り、人をして の立つる所は九王、呂氏は三王を立つ、是れ皆大臣 を劫かさしめ、其の子寄をして往いて呂祿に紿

屬せんとせり、 其の計を信に然りとし、將印を歸し兵を以て太尉に ば、齊兵必ず罷め、大臣も安きを得て足下も枕を高う 【字解】 莫…自堅…其命、劉氏の命に隨はんと、堅く決 千里の外に王たらん、此れ萬世の利なりと、呂祿は

に請うて相國の印綬を歸し、大臣と盟つて國に之か ぞ上將の印綬を歸し、兵を以て太尉に屬せざる、梁王

巌濫れば奏して 賞罰を 行ふ、其の他郊祀大喪等の事 斷するものなきなり、太尉、四方兵事の功課を掌り、 に與る、

為便、或日,不便計猶豫未有所為便、或日,不便計猶豫未有所

めしに、或は以て便と為し、或は不便といひ、猶豫し 印を歸し、兵を以て 太尉に屬せんとのことを 報ぜし て計容易に決せざりき、 、講義】 呂祿は、人をして 呂産及び 諸呂の人々へ將

呂氏の一族は今より 身を置く 所なからんと、乃ち悉 顔大に怒りて曰く、若し上將と爲りて軍を棄てなば、 獵し、其の序を以て姑なる呂顏の許を過ぎりしに、呂 く珠玉寶器を出し、堂下に散じて曰く、他目他人の有 講義 呂祿は深く酈寄を信じ、時々共に出でて游

定、往、陳子軍自北安。呂山 王。天 治。平 寄 中 堅。軍 趙 后 皆下、說、謀、與主、其、皆王 外朝 大劉呂使呂兵命,呂祿孫名、濟 字共 臣氏禄人禄曲太氏梁皆爲川 年少王 所,目,劫,善周尉之王 潤 人產少帝太 立。高麗絳侯絳 0 事九帝商,侯酈侯列各未,弟淮 已王與令乃爾勃侯將之及陽 布呂呂其與老不羣兵國魯,王 告、氏后子丞病、得臣居。居、元武 諸立。共。寄。相其、入。莫。南長王。常

して、皆年少國に朝、名は少帝の英朝、名は少帝の英朝、名は少帝の英朝、名は少帝の英朝、 歸、萬臣與以,臣守少。侯 將世得、大兵,諸藩,而諸 各兵に將 侯 印,之安臣屬、侯,乃,足侯 し、太尉絳侯勃、軍中 時以,利足盟。太所、為,下 として に 之かずして 長安に居る、趙王祿・昭時に 當り 濟川王太・淮陽王武・常山 自ら進 兵,也,下而尉。疑,上佩。以。 んで 南北の軍に居り、皆呂氏の人 屬。呂高。之。請。足將趙爲。 太禄枕,國梁下將、王、宜 劉氏の命に堅く 尉。信。而齊王。何,兵。印,今 然,王,兵扇,不太 其,千必相歸此急。后 計,里。罷、國,將為,之、崩。 從は 欲此大印,印,大國帝

西界,待,約,

報するは、此れ呂氏の資力を益すなりと、乃ち滎陽に 氏を危うして自立せんとす、今我れ齊を破りて還 に至り、乃ち謀つて曰く、諸呂兵權を關中に擁し、劉 呂又擅に自ら官を高くし、兵を聚め威を嚴にして列 天下を治むると能はず、固大臣諸侯を特み、而して諸 し、兵に將として之れを撃たしむ、灌嬰命を奉じ滎陽 と、漢之れを聞きて、相國呂產等乃ち潁陰侯灌嬰を遣 人兵を率の入りて王たるべからざる者を誅せんとす し、暴戾至らざるなし、是れ宗廟の危き所以なり、寡 侯忠臣を刧かし、天子の も上惑亂して聽かず、今呂后崩じて帝は歳若く、未だ を王とし 立て、叉頻に三趙王を殺し、梁趙燕を滅し以て諸呂 たらしむ、孝惠帝崩じて後は呂后專ら事を用ひ、歳老 **悼惠王薨じ、孝惠帝、留侯張良をして臣を立てゝ齊王** 下を平定して諸子弟を王とし、悼惠王は齊に王たり、 【講義】 いて後は諸呂の言を聽きて擅に帝を廢し、更に帝を 齊王乃ち諸侯王に書を遺りて曰く、高祖大 、齊國を別ちて四と為し、忠臣諫を進むる 制を矯めて以て天下に號令

れの寺護の到ると寺でり、せんとす、齊王之れを聞き、乃ち兵を 西界に還し、約連合和睦して以て呂氏の變動を待ちて共に之れを誅連合和睦して、使をして齊王及び諸侯に諭さしめ、共に留り屯して、使をして齊王及び諸侯に諭さしめ、共に

發猶豫未決、

待ちて兵を發さんとし、猶豫して未だ決せず、之れに畔かんことを恐れ、灌嬰の兵の齊と合するをは絳侯朱虚等を憚り、外は齊楚の兵を畏れ、又灌嬰の【講義】 呂祿呂產等亂を 關中に 發せんとせしも、內

齊王の 宣言せしことは、載せて次節の 齊王の語中に詐りて琅邪王の兵を奪ひ、之れに幷せ將として西す、 欲す、齊王因 月丙午の日、齊王は 王兵を發せんとせし に告げしめ、兵 、朱虚侯中より大臣と之れに應ぜんとす、是に 、齊王因つて 召平を殺し、遂に兵を發して東し、相召平は乃ち反して兵を舉げ、齊王を圍まんと せられ を發して西 恐 人をして相を 誅せしめんとせ n 迺ち し、諸呂を誅して立た かに 人をして其兄

定。齊 殺。秋 臣,悼 高為惠 天 聽,齊王 趙 下,乃, 王,諸 王,薨。王,遣, 諸諸 滅。呂。孝 孝 惠 擅惠 侯 廢。崩。帝弟,王 趙 燕,帝,高 使。 悼書, 惠日, 以,更后留 王、立、用、侯王高諸又事、良、王、帝 呂,此春立,齊平

金、大教天下、千金、將相列侯郎吏、皆以、秩賜、

て金を賜ひ、天下に大赦せり、金を賜ひ、將相・列侯・郎吏に至るまで、皆秩祿に應じ、諸義』辛巳の日、高后崩ず、遺詔して諸侯王に各千

其,帝 以, 呂 爲。后, 帝,高 王 后 太 傅,已為 葬,相 以,國, 左 以, 丞 呂 相 禄, 審 女, 爲 食

の太傅と為せり、高后已に葬り、左丞相審食其を以て帝帝后と為せり、高后已に葬り、左丞相審食其を以て帝

【字解】相國、丞相に同じ、

當。居、朱 是,其 虚 時。弟 侯 也 諸 劉 皆 章 呂 用。齊, 有。 氣 事,哀 力 擅。王, 權,弟東 牟 欲、居、 為表長侯 亂,安.興

> 齊 奪。圍、使、兵、欲、令、見、朱 琅王、人,其從、發、誅、虚 王 誅、相 中 邪 語 兵,迺,侯,帝, 中王、因。相,弗與 西。陰。婦、故 兵,殺相聽,大 誅。令、呂 并,其,召八臣 諸人,祿,臣 將,相,平月 爲、呂、告、女 之。遂。迺,丙 應,而 其,陰灌 而發反午齊 立,兄 知,等, 朱 齊 西、兵,舉,齊 其、未 王 王 謀,敢, 語、東、兵,王 欲、虚 在。許、欲、欲、發、侯欲、恐、發、

朱虚侯の婦は呂祿が 女なるを以て、陰に 其の謀を知も、高祖の故大臣絳灌等を畏れて未だ敢へて發せず、も、高祖の故大臣絳灌等を畏れて未だ敢へて發せず、なり、皆齊の哀王の 弟にして、長安に 居る、是の時になり、皆齊の哀王の 弟にして、長安に 居る、是の時になり、皆齊の哀王の 弟にして、長安に 居る、是の時になり、皆齊の哀王の弟になる。

中宦者令丞、皆爲關內侯、食邑釋爲建陵侯、呂榮爲、祀兹侯、諸輔為元王偃、及封,中大謁者張

五 百 戶、
 一百 戶、
 一五 百 戶 下。
 一五 百 戶、
 一五 百 戶 下。
 一五 百 戶、
 一五 百 戶 下。
 一五 百 戶、
 一五 百 戶 下。
 一五 百 戶 下。

禄爲上將軍軍北軍呂王產居七月中高后病甚。廼令趙王呂

南軍、呂太后誠、産祿、日、高帝已之、天下、與、大臣、約日、非劉氏、王、大臣、郑平、我即崩、帝年少、大臣恐為、此、平、我即崩、帝年少、大臣恐為、人所、制、

辛巳、高后崩、遺詔賜,諸侯王各

通,肅殺,靈尊,第 平 王、之,王 禄, 等 無建父請,後、農、康立、人。人。人。人。 子 東平侯呂通 立。武 有,侯,爲,信 除,美為,趙 八人,趙、王、呂 太禄 傅 后九許、侯 王、立、使、月、之、位封、呂人、燕、追、次

除かる、八年十月呂肅王の子東平侯呂通を立て、燕といる、八年十月呂肅王の子東平侯呂通を立て、燕とは代禮之中らんと、太傅産、丞相平等曰く、武信侯呂祿、上之れを許し、祿の父康侯を追奪して趙の昭王と爲す、之れを許し、祿の父康侯を追奪して趙の昭王と爲す、上九月燕の靈王建薨ず、美人の生める子あり、太后人をして之れを殺さしめ、後を嗣ぐべき者なし、め、徒して通、弟、日、王、爲、東、平 侯、

因りて呂后は遂に腋傷を病めり、 之を卜せ しに、曰く、趙王如意祟り を爲すと、是れにの呂后の腋に據ると見しが、忽ち復見えざりしかば、の呂后の腋に據ると見しが、忽ち復見えざりしかば、を濟して還り、軹道を過ぎりしに、物の蒼犬の如きも

邪王と爲し、以て其の心を慰む、劉將軍の害を爲さんことを 恐れ、乃ち劉澤を以て琅繆る、澤は大將軍たり、太后諸呂を王として崩御の後爲る、澤は大將軍たり、太后諸呂を王として崩御の後

人,不 官 后 人,耽 以 恢 呂、產、之擅、女、徒、 有,微,超王后、王道、心 懷 不然 悲、六月、即自殺、 爲歌 詩 王后 王、趙 四 樂、太 后 章, 令。使。王 從

禮、廢、其嗣、 居 用,婦人、弃。宗 廟

其 め、六月即ち自殺せり、太后は之れを聞きて、趙王は みの餘り歌四章を爲り、樂人に命じて 之れを歌は 3 にし、微かに趙王の暴動を伺ひ、趙王は身王位に ながら、何事も自ら恋にすることを得ざりき、王愛 しが、王后をはじめ從官皆呂氏の一族にて權力を擅 ざりしかば、太后は呂産の女を以て趙王の后と為 【講義】梁王恢の 0) 婦人の故を以て、自殺して宗廟の禮を棄つと爲し、 所の姫あり、王后人をして之を毒殺せしむ、王悲 後嗣を廢して其の家を絶てり、 徙りて 趙に王たりしも、心中 あ h

に蓋を賜うて魯の元王と為す、 【講義】宣平侯張敖卒す、子偃を以て魯王と為し、敖 以 賜、諡 爲。魯 元 王、 正蓋を賜うて魯の元王と為す、

秋、太后使使告代王、欲徙王趙、

自殺なり 忠直の士を撃げよとなり、自財、財、裁と通ず、自裁は を用ひず、民體を以て長安の民の墓地に埋葬せり、 の中に在りて怨を吞んで 死せり、此に於て 王者の禮 に託して此の仇を報ぜんのみと、丁丑の日途に幽囚 之れを憐む者ぞ、呂氏は 既に 道理を絶ちて暴政を恋 寧ろ蚤く自裁せん、今我れ王と爲りて餓死す、誰れか 學げて此の弊を矯めよ、于嗟悔ゆるも及ぶべからず、 を得ざるなり、あゝ我中野に自殺す、蒼天忠直の士を る悪弊を矯むる忠臣なし、何が故に國を棄てん、已む てす、讒女は國家を聞せども上質で悟らず、我にかり 我が妃旣に我れを 妬みて、我れを誣ふるに 惡事を以 呂氏は事を用ひ權を專にして、漢の王家たる劉氏は 定せられしかば、趙王終に餓ゑて歌うて曰く、諸、の 救ひしが、其の事露顯すれば、輙ち捕へて其の罪を論 【字解】 寤、悟と通ず、さとるなり、蒼天學」直、天は いよく一危く、王侯に迫り脅して彊ひて我妃を授く、 かば、其の群臣或は窃かに食物を寄贈して其餓を 、如何ともすること能はず、唯公明なる天地神明

樂乃謂左右日、此爲我也、己丑、日食、晝晦、太后惡之、心不

我が為めに戒むるなりと、み、心中樂まず、乃ち左右の臣に謂つて曰く、此れ天み、心中樂まず、乃ち左右の臣に謂つて曰く、此れ天人。 己丑の日、日食ありて晝晦し、太后之れを惡

を戒むるものとせり、天變地異を以て為政者宜しきを得ざる為め、天之れ【字解】 日食、日蝕に 同じ、當時の俗、日蝕其の他の

二月、徙梁王恢爲趙王、

東赦。 天 侯、下 封齊 この弟 悼 呂産を以 呂 惠 十嘉 王子與居 て呂王と為 居 處 騎りか

牟

を召す、趙王至れば之れを邸中に留置して見ず、護衞せし後は、吾れ必ず之れを撃たんと、太后怒りて趙王氏の族安んぞ王たるとを得ん、太后百歳の壽を全うを太后に讒し、且つ誣ふるに罪過を以てして曰く、呂 を太后に讒し、且つ誣ふるに罪過を以てして曰く、呂しかば、呂氏の女は之を妬み怒りて王の許を去り、之 を以て后と為しいも、之を愛せずして

と為しいも、之を愛せずして他の姫を愛七年正月、太后返王友を召す、友は呂氏の

番卒をして之れを 圍み守らしめ、食物を 與へざり

民兮而于成國,我"劉 禮,託,餓嗟弃。兮妃 葬。天死。不國。上既危。 之, 報。兮, 可, 自, 曾。妬, 迫 長, 仇, 誰, 悔, 決, 不 兮, 脅。 安,丁者兮中寤,誣,王 民、丑憐寧。野我我、侯、 冢趙之,蚤,分、無。以,分、 次王呂自蒼 忠 惡,彊; 网 財。天臣 讒 氏 死。絕。為學。今女 以,理,王,直,何,亂。妃,

と能はず、天下の大權を属すること能はず、其れ之を を幽殺し、五月丙辰の日を以て常山王義を立てゝ帝 臣頓首韶を奉ぜんと、是に於て太后帝位を廢し、之れ 代へよと、群臣皆頓首して言ふ、皇太后天下齊民の為 と爲し、名を更めて弘といふ、即位元年を稱せざるは め、宗廟社稷を安んする所以を計ること甚だ深し、群 神惛亂し、皇帝の機闘として 宗廟の 祭祀を奉ずるこ して以て其の上に事へ、上下懽欣交。通じて天下治 見ゆることを得ず、呂后曰く凡そ天下の太平を有ち、 太后天下の事を制するを以てなり、 る、今皇帝の病人しうして已まず、西ち道理に惑ひ精 天の如く、其量寛くして之れを容るゝこと地の如く、 萬民の命を爲すもの、其徳大にして 之れを 蓋ふこと を聞きて他目禍の生ぜんことを恐れ、迺ち帝を永巷 づけしぞ、我れ未だ壯年ならざれば默して已まんも、 を出して曰く、皇后安んぞ吾が母を殺して我れに名 して其の皇后の子に あらざることを聞き、廼ち怨言 中に幽閉し、病甚だ篤しと稱して左右の者も帝に 権心なりて以て 百姓の心を安んじ、百姓欣然と 肚年に至らば 即ち變亂を爲さんと、呂太后之れ

【字解】 幽…之永巷中、幽は 幽囚なり、永巷は後改めて被庭といふ、宮中の長巷なり、悟亂、悟は愚なり、惑て被庭といふ、宮中の長巷なり、悟亂、悟は愚なり、惑く相等しき意なり、

置,太尉官、絳侯勃為、太尉、以, 朝侯朝を以て常山土と為す、以, 朝侯朝。為,常山王、

騎 恋、廢、之、以。肅王台弟呂產。為。 陽王と為す、 陽王と為す、 「大后日、呂王嘉、居處 陽王と為す、 「大后日、呂王嘉、居處

て侯とせしなり、解】 及諸侯丞相五人、諸侯 念を呂城侯と為す、及び諸侯の丞 の丞相中より、五 相五人を侯

命, 見, 之, 太吾, 眞, 子母, 詳,宣 者太永后母皇立。立。爲平 蓋。后巷聞。而后,為。所,有。侯, 之,目,中。而 名。子。帝、名。身。女 如,凡,言。患。我,酒,帝子,取,爲, 天,有,帝之,我出,壯為美孝 容、天病恐、未、言,或、太人,惠, 之,下,甚其壯,日,聞,子,子,皇 如,治,左為,壯,后其孝名,后 地為右亂,即,安母惠之時 上萬莫。迺、爲、能、死、崩、殺、無。 有、民、得、幽、變、殺、非、太其、子

立て

ゝ太子と爲す、孝惠帝崩じ

名づけ、其の

母を

殺し、名づ

くる所

美人の

子子

無

しが、帝年壯なるに及んで、或る

日其 太子立

11

は T 帝其權 以義,后甚。天代論,病上心 制。更之,臣民臣廟已一交百 天名,五顿計。皆祭迺,通、姓, 姓 稱。立。帝宗"皇屬。亂治。然 年,山位,社后下,能。皇事。

臣講 請立職侯呂台為呂王太后武為。臺關侯太后風大臣大山為。襄城侯子朝為、帜侯、

氏を王と爲さんとせしに、大臣には酈侯呂台を立て て呂王と爲さんと請ひしかば、太后は之れを許せり、 子武を壺關侯と為す、かくて呂后は大臣を諷して呂 王と爲し、子山を襄城侯と爲し、子朝を朝侯と爲し、 直言せざるをいふなり、 の後宮の子彊を立てゝ淮陽王と爲し、子不疑を常山 一 呂后呂氏を 王とせんと 欲して、先づ孝惠帝 後宮、奥向なり、風、諷と通ず、譬喩して諫め

後,立,建 其,成 弟 康 呂侯祿舜 (A) 高湖陵侯、續康 (本) 一章、嗣子有、罪 侯,廢,

建成康侯釋之卒す、嗣子罪ありて廢せられ、

其弟呂祿を立て、胡陵侯と爲し、康侯の後を續ぐ、 一年、常 山王薨、以 弟 襄成侯

山為常山王更名 義,其

山王と爲し、名を義と更む、 講義】二年常山王薨ず、其の 弟襄成侯山を以て常

嘉代り立ちて王と爲る、 【講義】十一月呂王台薨ず、諡して肅王と爲す、太子

侯呂忿爲品 侯、呂他為命侯、呂更三年、無事、四年、封、呂 城侯、及諸以 始,鎮 侯為為 相 其 光

臨光侯と爲し、呂代を兪侯と爲し、呂更始を贅其侯と 三年は紀すべき 事無し、四年呂顏を 封

侯, 呂 封。爲。公臣,后 武因,其不 侯、侯、少禄、齊、魯主 郎欲、王、而故治、 中 王、薨太 侯、欲、决、得,事, 女, 悼 平,延,妻、惠魯賜、令諸以,事、幸、令、 爲爲之王王、證,無 呂,王,乃,太 齊,子父為擇,迺,諸追 柳 章,宣 魯 爲、先、呂、尊、常。 侯, 乃, 相 元 用,如。 爲。平 博封。為:酈 高漸、侯事,郎 封,壽,朱侯 太 城 后,子 買,呂為虛 侯,祖四父,公 張 侯敖 魯 爲。卿 之 月 南為定以也偃元功太悼皆

候と 迺ち 漸を 公卿皆食其に因りて事を 決するに至れり、乃ち酈侯は此の故を以て呂后の寵幸を得、常に權力を恣にし、 侯と爲し、張買を南宮侯と爲す、 令、宮殿掖門を掌る官(字解) 不治事、政治 れに妻はす、齊の丞相壽を平定侯と為し、少府延を の悼惠王の子章を朱虚侯と為し、呂祿の女を以て 子偃を魯王と爲せり、魯王の父は宣平侯張敖なり、齊 の父を追奪して悼武王と為し、以て諸呂を王とする 當らず、宮中を監督せしむること郎 太 為す、魯元公主薨ず、諡を賜うて 食其 為さんとせり、四月呂后諸呂を使にせんと欲し、 為す、乃ち呂種を封じて沛侯と為し、呂平を扶柳 先づ高祖の功臣を封じ、郎中令無擇を博城侯と を以て 欲、王、呂氏、先立、徐にして急速ならざるをい 不治事、政治の 左丞 左丞相と為す、左丞相 相 平 なり、漸、漸次なり、物變動ある を以 質務に當らざるをいふ、郎 T 右 魯元太后と為し、 水 疑,孝 30 中 相と為 は 令の 爲惠 政治の實 如し、 常後 山宫 務

面目 後,臣 今日に於て 主の意に阿 祖崩じ呂后は女主、呂氏を王とせんとす、諸君縱ひ女 下、欲流陳阿, 【講義】 の呂氏を王とす、不可とする所なしと、太后喜び朝を 下を定め子弟を王とす、今太后制を稱し、兄弟及び諸 陳平・絳侯周勃に問ふに、周勃 等對へて 曰く、高祖 とするは其約束に非ざるなりと、太后悦ばず、左丞相 ずして王たる 者あらば共に 之を撃てと、今呂氏を王 く、高祖白馬を斬り血を敵り、盟つて曰く、劉氏に非 てゝ王と爲さんとし、右丞相王陵に問 りて盟ふ、其の時諸君も居りしにあらずや、今は高 む、王陵、陳平・絳侯を責めて曰く、始め高祖と血を ありて高祖に地下に見えんやと、陳平絳侯曰く、 呂后の制を稱するや、議して諸の呂氏を立 ら高祖の約束に背かんと欲するも、何の 面折廷争するは臣君に如かず、社稷を全 不如臣、主 全。日,社於 陵 稷,今無定,面 見 ひしに、王陵日 以。劉 折 應、氏之、之 廷

【字解】 刑白馬、刑は刀を以て頸を割くなり、昆弟、て之れに應ふる無し、

といふ義なり、「上地穀物は以て民人を養ふ、故に國家穀物の神なり、土地穀物は以て民人を養ふ、故に國家年、面前にて人の過失を指すを面折といひ、朝廷に於年、面前にて人の過失を指すを面折といひ、朝廷に於年、面前にて人の過失を指すを面折といふが如し、面折廷、「字解」 刑白馬、刑は刀を以て頸を割くなり、昆弟、【字解】 刑白馬、刑は刀を以て頸を割くなり、昆弟、

帝太傅、奪、之相權、王陵遂病免十一月、太后欲、廢、王陵、乃拜為

歸、

り、職を免されて歸る、帝の太傅と爲し、右丞相の權を奪ふ、王陵遂に病に罹帝の太傅と爲し、右丞相の權を奪ふ、王陵遂に病に罹

陽侯審食其為左丞相左丞相以辟

【字解】

太傅、天子を輔導する官なり、

て萬機を處理す、後左右丞相を置く、君知其解乎、解て衆事を贊同し、顧問應對を掌る、丞相、天子を輔けて衆事を赞同し、顧問應對を掌る、丞相、天子を輔け、講義」 泣、目中の涙なり、侍中、天子の 左右に 侍し とを得んと、 は理由なり、 の哭すること適ち哀し、呂氏の權此れより起れり、 くなれば、則ち太后心安く、君等は幸に禍を脱するこ 及び諸々の呂氏皆宮中に居り事を用ふること此の如 緑等を拜して大將とし、兵に將として南北軍に居 肚子無し、太后君等を畏る、君今乞うて呂台·呂産·呂 丞相迺ち辟彊の計の如くす、呂后悦び其

卽,迺, 位大

即位の元年よ り號令一 に呂后より出で、呂后制を稱 以て葬る、皇太子位に即き帝と為り高祖の廟に謁す、 迺ち天 下に 記して 大赦し、九月 0) 日を

后太后 爲帝、謁高廟、元年、號令一教天下、九月辛丑葬、太子 大赦、即位を祝する為め罪人を赦し、或は減 稱為制 一等出 朝, 昆定陳氏劉陵議弟天平非氏王欲 を行 詔書 太 使; 王 欲。 といふ 絳 后 1117 約 而。陵

するを得る所にあらず、今呂后朝に臨みて天子の事 刑するを云ふ、稱制、天子の ふ、故に稱制といふなり、 諸下,絳呂,王,侯 、制書とは制度の命をいふなり、皇后の稱 女 也 盟。 諸 子 陳 周 太 言一は 邪、今 制書といひ、二は 今 盟,丞 始 后 稱。日,左 喜。制,高 高 王,日,相吕,非,王 與 丞 罷。王,帝相

を食むに過ぎざれば、王誠に一郡を以て呂后に奉り、 史士王に説きて曰く、太后獨り孝惠帝と 魯元公主と 無からんと、是に於て齊王迺も城陽郡を上り、公主を 公主の御化粧料と為さば、呂后必ず 喜び王も必ず憂 む、三年方に長安城を築き、四年半を就し、五年六年 ち酒を齊王の邸に置き、樂飲し罷めて齊王を歸らし 王太后と爲しゝかば、呂后は喜びて之れを許せり、酒 の子あり、今王には七十餘城を有し、公主は迺ち數城 酒なることを知り、恐れて自ら思へらく、無事に長 都を脱するとを得ずと、大に心配せり、時に齊の 敢 -飲まず、伴り 醉うて去り、 問うて 其 0)

惠帝崩發喪、太后哭泣不下留事所發喪、太后哭泣不下留於を舉げて健康を祝するなり、泛、覆なり、詳、伴と通杯を舉げて健康を祝するなり、泛、覆なり、詳、伴と通いとないを主らしむ、故に公主といふ、湯沐邑、湯沐の費用に供する采地、即ち化粧料なり、一月朝賀、七年秋八月戊寅、孝十月朝賀、七年秋八月戊寅、孝十月朝賀、七年秋八月戊寅、孝

此、計、等居、將、君起、太幸。中、兵。今 不丞侯悲君子 辟 彊 后得用居業請。日說與事,南拜。帝其禍,如,北呂毋 得。用。居非請。日,君 毋,其 壯 哭。矣、此。軍。 迺,丞 則,及。 台。呂 解,獨乎、有 子太后 哀。相太吕迺,后 產·呂 太諸 呂 相 氏,如,心 皆 禄,畏,日, 安、入、爲。君何,崩。五 權 由。彊、君宫、将、等、解、哭、謂。

理由を知るか、丞相曰く何の事由ぞ、辟彊曰く孝惠帝獨り孝惠帝あり、今崩じて哭すれども悲まず、君其の彊年十五にして侍中となり、丞相に謂つて曰く、太后『韓を發す、呂后哭すれども涙下らず、留侯の子張辟【講義】 十月朝賀す、七年秋八 月戊寅の 日孝惠帝崩

不、能、治...天下、父帝の寵姫の終を全うせしむ人彘、彘は豕也、戚夫人の有樣豕の如きよりい。 瘖薬、聲を枯らして啞と爲す薬、厠中、便所の中な 恐。不恐。惠。置。人孝 能は 士 自,敢,自,亦前。之,惠 月 ず、何ぞ天下を治むることを得んとの意な 說,以 飲起,起,令.禮,以 楚 為詳泛和齊太為惠 元 不,醉。孝。卮,王,后齊與 得去。惠欲、起、怒、王、齊 脱。問。巵,俱為,迺,兄,王 長"知,齊為,壽,令,置,燕 獨 安,其王壽齊酌。上 飲。王 憂, 耽, 恠, 太王兩 坐太皆 りいふ、終 の中ない 齊齊之后起,巵如后來 與內王因, 廼, 孝献, 家前。朝。

五王,許。之王太公魯 T の如くせしに、呂后之を怒り、兩個の杯に毒酒 爲へらく齊王は兄なればとて上坐に置くと家 孝惠帝には 齊王と呂后の 字解】 に、齊王起ち孝惠帝も亦起ち杯を取りて俱 前に置かしめ、齊王をして起ちて健康を祝 恐れ、自ら起ちて帝の杯を覆へせしかば、齊王も 年 三之,郡,必,后主 年、 二年楚の元王、齊の 六 迺,尊、無為為,迺,公 年方置、公憂公食主 かば、呂后其の害孝惠帝に及ば 城築,酒,主,於,主數 長齊為是湯 就, 邸王齊 前に燕飲 諸 安 沐、王 悼惠王、皆來朝す、十月 侯城、樂太王邑、誠七 來四 飲。后、廼。太以,十 せしに、孝惠帝以 會、年罷,呂上,后 就歸后城必。郡,城 人の 半、齊喜。陽喜、上、而、 健

(書を賜ひ、追諡して合武侯と為せり、 を関ひ、追諡して合武侯と為せり、 を関ひ、追諡して合武侯と為せり、 を関ひ、追諡して合武侯と為せり、 となんと、 は一年には一年には一年に は一年には一年に は一年には一年に は一年に は一年

る頃なり、 水巷、宮中の女官の罪あるものを入るゝ獄、「字解」 永巷、宮中の女官の罪あるものを入るゝ獄、「字解」 永巷、宮中の女官の罪あるものを入るゝ獄、

耳、飲清藥、使居順中、命日、人彘、太后遂斷、戚夫人手足、去、眼、輝、

居數日、迺召孝惠帝,觀人歲孝思,不能治宗下、孝惠以此日飲為太后子、終、不聽,此,以此日飲為太后子、終,不聽,此,以此日飲為。

おす、故に病を獲たり、 まとと斷ち、眼球を披き去り、耳を輝べて 聾とし、瘖樂を 飲ませて啞とし、見、侍臣に 問う て一成夫人た ることを知り、迺ち大に見、侍臣に 問う て一成夫人た ることを知り、迺ち大に見、侍臣に 問う て一成夫人た ることを知り、迺ち大に見、侍臣に 問う て一成夫人た ることを知り、迺ち大に見、侍臣に 問う て一成夫人の 手足を斷ち、眼球を披離はずと、これより日々飲宴して淫樂に耽り、政を聽能はずと、これより日々飲宴して淫樂に耽り、政を聽能はずと、これより日々飲宴して淫樂に耽り、政を聽能はずと、これより日々飲宴して淫樂に耽り、政を聽

【字解】 輝、ふすぶなり、ふすぶはいぶすことなり、

子濞は吳王と為れ て功臣番君吳芮の子 の子子恢は梁王と為り、子友は淮南王と 高祖の 臣は 其の他劉氏の一族にあら 長沙王と為れ 弟交は 楚王と爲り、

仁復召,病、王,少使使 乃,呂 知,召,趙不并、竊者者 令。后 趙相,能、誅、聞,日,三 武,趙奉、之,太高反 王,趙不之,太高原 最。 永 后,王,趙 巷,怨: 囚 戚 戚 自,來,徵,呂不 怨、屬、相 夫 迎、未、至、后敢、戚臣建 夫人 到,長大遺,夫趙 人,及 定 平 安怒、王、人、王、侯 王,孝 而,其, 召,子趙趙 惠 周 迺, 迺, 王 欲, 趙 帝使。使。且。召。王昌 與慈人,人,亦趙年謂,王,王,

酈 乃,之,起。二 后 入。 侯 徙。犂 太月、后帝 欲。宫. 父_淮 明 殺。自 追陽孝證,王惠 聞, 晨 之, 其,出。不與 爲、友、還、獨射、得 趙 令 爲。趙 間, 居,趙 武趙王使王 孝 起 侯王已人少 惠 夏死、持、不元飲 賜是飲蚤

戚夫人を怨む、故に趙王を召し寄せ併せて之れ 昌といふ者使者に向つて謂へる樣、高帝臣に 趙王を保護せしむ、王は年猶少し、窃に聞く太后には 乃ち永巷の吏をして戚夫人を囚へし上趙王を召さし は病氣保養中なれば詔を奉すること能はずと、是に せんと欲するなるべし、臣敢て王を遣らず、且つ王に め、使者三たび往復せしも、趙王の輔相たる建平 【講義】 呂后 呂后大に怒り、酒ち人をして趙相を召さしむ、趙 は最も 戚夫 人及び其の子趙王を怨み、 屬

臣を誅するなど呂后の力に待つこと多かりき、して高祖を輔佐して、天下を一統し、謀反の疑ある大厄を免るゝことを 得たり、呂后の人と爲り は剛毅に不道理なるとを爭ひ、及び張良の 策に賴りて 廢立のりき、さ れ ど孝惠は諸大臣爭うて太子を廢するとのりき、さ れ ど孝惠は諸大臣爭うて太子を廢するとの

しめしをいふ、留侯世家を見よ、毋、無なり、留侯策、張良の策を用ひて、東園公・綺里季・夏黄公・治侯策、張良の策を用ひて、東園公・綺里季・夏黄公・治侯策、張良の策を用ひて、東園公・綺里季・夏黄公・は講義』 仁弱、なさけ深くして意志薄弱なるをいふ、

侯 呂 侯, 產, 死。后,兄兄 爲交侯、 人、皆 其子呂 次兄呂釋之為 為 台, 將 長 爲。 酈 兄 建 周 侯、 子 成 呂

兄呂釋之を建成侯と爲せり、を封じて酈侯と爲し、呂台の弟子產を交侯と爲し、次從ふ、長兄の周呂侯は國家の事に死せり、其の子呂台【講義】 呂后の兄は二人あり、皆將と爲りて 高祖に

為王高長非為漁 王、姬、爲、齊子子趙王 子、 宫。高 長 子、子 長 E 餘、 男 薄 皆 氏 恢 孝 功 淮 夫 號,年 爲 爲, 孝 臣 梁 惠 惠 南 弟 兄 子 帝,月 君吳芮 恆 也、 戚 是, 爲, 異,時 建 姬 友 母、肥 爲 爲 代 子、 高 燕 淮 如 爲 諸 意 爲。八

り、戚姫の子如意は趙王と為り、薄夫人の子恆は代王なり、是の時高祖に八子あり、長男肥は惠帝の兄なれなり、是の時高祖に八子あり、長男肥は惠帝の兄なれ長樂宮に崩ず、太子帝號を襲ぎて即位す、是れ孝惠帝【講義】 高祖には即位の十二年四月甲辰の日を以て

云々との間に入るべきが誤りて此に入りたるなり、以下は前節の太子襲號為皇帝孝惠帝也と令郡國諸侯く終始循環する天の統紀といふ義、朝以十月云々、此

呂太后者、高祖微時妃也、生孝呂后本紀第九

恵一帝女 魯一元 太后、帝及び皇女魯元太后を生めり、帝及び皇女魯元太后を生めり、帝の妃なり、孝惠帝及の皇女魯元太后を生めり、

欲立其子代太子、吕后年 長、常 留守、希見上、盆疏如意立為, 一年之、及留侯策、太子者數矣、賴大臣 后為人剛毅、佐高祖定、天下、所 后為人剛毅、佐高祖定、天下、所 后為人剛毅、佐高祖定、天下、所 一時、大臣、多。呂后力、

廢し して、高祖に見ゆるとは希にして、益、疏んぜらるゝ 戚姫より年長じて姿色衰へしかば、常に留守居の 如意を立てゝ太子に代らしめんと欲しぬ、又呂后は 我 弱なり、高祖ももへらく、我れに似ずと、常に太子を 得て寵愛し、趙の隱王如意を生む、孝惠帝人と爲り仁【講義】 漢の高祖漢王と 爲るに及び、定陶の 戚姫を 1-行くに從ひ、日夜啼泣して衷情を高祖に訴へ、 1 至れり、一方如意は戚姫と共に寵愛益 趙王と為り、幾んど太子に代らんとせしと屢な 似たりと、戚姫も寵愛せられて常に高祖の 戚姫の子如意を立てんと欲し、いふ如意は 漢の高祖漢王と為るに及び、定陶の戚姫を 「厚く」 關

の弊は下民に浸みわたりて、徒に禮儀作法にの

るに至れり、こゝに於て般の世に至りこれをうくる

講義」太史公曰く、夏の世の政は質朴のみ尚び

72

始。以 文 忠、三 之 野、公 敝 三王之 小 以产 鬼,殷夏 人 道。以, 謂,若。僿,周 黄•不,不文,循,故人之,屋•倦、繆,敝、環,救,承以, **廛**, 之, 敬, 莫, 以, 敬 若,文,之 復

承,改,周 做,反,秦 酷之 間、 可。 矣、秦 政

れば、その弊は下民に浸みわたりで禮節少く、野卑な 敬とて禮儀作法を以てし、其弊を救へり、然るに敬 神に事ふるが如きをいふ、文、尊卑の差なり、您、一本 に薄に作れり、文法にのみ習ひて少しも誠無きを 正しく神を敬するが如きをいふ、鬼、威儀多くして鬼 【字解】忠、質朴なり、野、禮節なきを、敬、進退の禮 り、これ天の終始循環する統紀を得たるものなり、 をうけをれば之を救ふに忠を以てし、秦の苛法を變 周三王の道は、循れる輪の如く、終りてまた始まるも 質朴なる風を以てせざるべからず、而して此の夏殷 みわたりて、たい表面のみかざりて少しも誠なきに くるに文とて あやもやうありて 尊卑の 差を正しく ふ、循環、まはる輪なり、天統、猶循一天叙しといふが ものにあらずや、故に漢與りて其世となるや文の弊 るに秦の始皇は政を爲すに當りて其弊を改めず、却 の、特に周と秦との間は文の弊の極りたる時なり、然 至れり、故に此の弊を救ふには、忠とて誠にて至つて つて刑法をきびしくせり、是れ 豊に間違の甚だしき し、以て其弊を救へり、然るに文の弊はまた下民に浸 もやうなきに至れり、是に於て周の世に至り之をう たまり、其有機恰も鬼神に事ふるが如く、少しもあや 人をして少しも倦まず、安んじて事に從はしめた 如

沛に歸り父老を會して宴を張りし時、自ら大風起兮 くることあれば直ちに之を補ひたり、蓋しこれ高祖 必ず百二十人を以て の詩を作り、之を教へたる百二十人の 吹奏せしめたり、而して 爾後樂を吹奏する 宮殿を以て高 定員を爲し、若し一人にても缺 一祖の原廟と為したり、又高 見童をして音 時は 祖 カラ

を追慕するの意なり

と、朝以十月車服黄屋左纛葬長陵、此句十三字は諸本亂れたるを治むること、反之正、之を正道にかへすこ【字解】 徽細、極めて徽賤なると、撥、ヲサムと訓む、 なり、先に既に沛 郷なる沛に歸りて悲み樂みたるをいふ、原廟、原は再 と為す故に黄屋といふ、天子の車の衡の 黄屋左纛 弁びに次節の末文に 錯入せるを以て今訂正す 先に立てたる沛宮を原廟といふなり、吹樂、音樂 故に左纛といふ、纛は旄牛の尾を以て作れ り、長陵は高祖の陵墓の名なり、悲樂沛、高 は天子の禮なり、天子の に廟を立つ、而し 車は黄繒を以て裏 て今又再び立つ、 左には薫を る大 祖 車服 故

を吹奏すること

孝 太 時、徙 高 王長、次燕王 帝, 王 惠、 溥 如 帝八男、長 時、徒 意 、呂后 爲太太 趙 代 一庶、齊 趙 恆、 戚 划 淮 王、次淮 龙 恢 爲。 呂 南 太 友

なり 陽王 帝と 為し、次は淮南の厲王名は長にして、次は燕王名 恢にして、呂太后の時徒して趙の共王と爲し、次は 名は如意なり、次は代王名は恆にして、後立つて孝文 腹にて卽ち齊の悼惠王名は (講義) して呂后の子なり、次は戚夫人の子にして 名は友に 爲りしが、これは薄太后の子なり、次は梁王名は 高帝は八人の男子ありき、而して長男は して、呂太后の時又徒して趙の 肥なり、次は孝惠皇帝 趙の隱王 幽

以て高祖と蜜準せり、り、かくて丙寅の 日即ち甲辰の 日より二十三日目をり、かくて丙寅の 日即ち甲辰の 日より二十三日目をるも聽かれざることを 知り、遂に亡げて 匈奴に入れ

「字解」 塞下、長城の下 なり、候伺、起居をうかがふこと、幸、ネガフと訓む、望み 願ひた ること、高祖崩、て、言ふ は同輩の人な りしとなり、快々、不平 不満て、言ふ は同輩の人な りしとなり、快々、不平 不満て、言ふ は同輩の人な りしとなり、快々、不平 不満の貌、族、一族を殘らず殺すこと、翹足、翹はアゲテとの貌、族、一族を殘らず殺すこと、翹足、翹は下ゲテとはもかりなり、

各立高祖廟以歲時洞及孝惠五年思高祖原廟高祖所教歌兒百五年思高祖之悲樂並以沛宮

一十人、皆今為。吹樂、後有、缺鄉、

發。審

矣、

陳

将*将*

蒸く其

初平灌

表せず、ひたすら秘密にしたり、時に呂后は審食其と へり、四月甲辰の日に至り、高祖は遂に長樂宮 燕王盧綰は數千騎と共に長城の下に居りて 祖の病平愈せば自ら入りて罪を謝せ に四日を經るも未だ之を發 誠。 連。定。萬,如,已。酈 兵,燕 守。此,崩。將 侯兵,燕 天 祭 言,反,鄉。此、陽,下日之,亡,以,聞,樊危。不 葬、綰 審食其も尤と思ひ、直ちに入りて呂后に申し上げ、丁 滅亡は足をあげて待つべしと、其無謀を諭しければ すと聞けり、誠にかくの如くなれば天下危からん、見 慢心を起して其命令に從はざるべし、されば 謀り 未の日を以て喪を發し、天下の罪人を大赦したり、さ せらると聞かば、必ず兵を連ね、還りて關中を攻む 地を定め居れり、此等の 守り、樊噲と周勃とは二十萬の兵に將として燕滎 て四日を經るも未だ喪を發せず、諸將を誅せんと欲 直ちに審食其を訪びて曰く、吾れ高帝既に崩ぜられ るに、酈將軍は大に驚き、以ての外の大事なりとて、 て盧綰は高祖の崩せられしことを聞き、最早入謝す し、かくて大臣内に叛き諸侯外に反する時は漢家の られよ、陣平と灌嬰とは十萬の兵に將として榮陽を るべしと、之を漏れ聞くものありて翻將軍に語りけ しも、今崩ぜられて少主に事ふるときは、彼等は必ず されど在世中は帝の威力にて鎮めたれば默して從ひ して臣と爲ること故、常に之を不滿足に思ひ居 族を殺し盡すにあらざれば、天下は到底安からざ て曰く、諸將はもと帝と同 人々にして帝崩じ諸將皆誅 番の) 民なるに、今北面

乃可。攻。帝哈 以。翘《關》崩。周 丁足。中 彰

足,中,諸

んと思

崩ぜられたり、し

かる

様子を伺ひ、高

聞*乃

高

旭

癒す らず、されば我が命も亦天命の自然に任かすの外無 以て天下を取れり、これ 天命の自然にて 我が力にあ 媛駡して 曰く、吾は下賤より 起り、三尺の劒を提げ、 を安んぜんものは必ず勃なれば、彼を太尉に任じ兵 難し、周勃は重厚にして文才に乏し、されど我が劉氏 し、陳平は才智餘りあれども一人にては大事に任 されど少し正直過ぐれば陳平を以て之を助けしむべ 任すべきものを尋ねければ、高祖は王陵よかるべし、 は曹參よかるべしといはれたり、呂后はまた、其次に ば、誰れを相國に任じて宜しきやと尋ねけるに、高祖 呂后は高祖に向ひ、陛下萬一の後、蕭相國著し死亡せ の病たるを 覺悟せし故なり、醫師還りて 後間も無く り、罷めて歸らしめたり、これ蓋し高祖は自ら其不治 しとて治療せしめず、金五十斤を診察料として賜は なれば、假合扁鵲の如き 名醫ありと雖も 何等の益な し、我はかく我が命を天命の を斥けたり、蓋し高祖が周勃を太尉になしたるは、我 ば、高祖は此後の事は汝の知る所にあらずとて之 の權を與ふべしと、呂后また重ねて其次を へたり、 是に於て 高祖忽ち醫者を 自然に任せてある 問

るものにして高祖の深謀あるを知るべし、るものにして高祖の深謀あるを知るべし、いづことも知れず飛び來りし矢なり、嫚罵、あなどりいづことも知れず飛び來りし矢なり、嫚罵、あなどりいづことも知れず飛び來りし矢なり、嫚罵、あなどりにごと、布衣、ぬのにて作りたる衣服にて賤者の着罵ること、布衣、ぬのにて作りたる衣服にて賤者の着こと、少本、自動と高祖の深謀あるを知るべし、「大人」が死後呂后の一族亂を爲すべきことを豫知せられたが死後呂后の一族亂を爲すべきことを豫知せられたること、少文、文才少きこと、

事少主、非、盡族是、天下不安、人 上病愈自入謝四月甲辰、高祖 上病愈自入謝四月甲辰、高祖 上病愈自入謝四月甲辰、高祖 上病愈自入謝四月甲辰、高祖 上病愈自入谢四月甲辰、高祖

p くみしたるものは、特別の恵を以て許したり、而して たり、よりて高祖は樊噲・周勃の二人をして兵を は歸りて具さに其反謀の端緒顯はれたることを述 共 為 發きたるもの 0) T 燕王綰を撃たしめ、燕の役人や 百姓にして謀反に らて か、病氣なりと稱して出で來らざりければ、辟陽侯 め、辟陽侯審食其をして燕王綰の許にやり、迎へて 中 漢に朝せしめたり、然るに 縮は悟られしと 共に陰かに反謀 豨のそむける時、燕王盧綰は使を豨 ありければ、高祖はその * 為したりとて、盧綰 眞偽を確 0) 0) 率る むる 所に 思ひ 事を

皇子建を立て、燕王と為し、其地を治めしめたり、「字解」辟陽侯、審食其なり、有端、端緒を見出したること、
高祖撃、布時、為、流矢所中、行道病、病、甚、呂后迎。良醫、醫入見、高祖間、醫、醫日、病可治、於是高祖した。

て醫

者は入りて

高

祖に

見えけるに、高祖は先づ我が

病は治癒すべきやと尋ねられけるに、醫者は必ず治

なりしかば、呂后は良醫を迎へて治療に盡せり、かく

より痛み始め、宮に還りて

高祖

は黥布を征伐せし時、流矢に當り、途中

後も猶ます。 一 甚だしく

民為陳豨·趙利所劫掠者皆赦 家魏公子無忌五家、赦代地吏 家魏公子無忌五家、赦代地吏

は代の地の吏民にして曾て陳豨や趙利に屬し、劫掠 に各、十家の邑を與へ、よく其墓を守護せしめたり、 陳涉、魏の安釐王や齊の湣王、及び趙の悼襄王等は皆 布を捕へ之を一都陽に於て斬れり、樊噲は又別に と北とに於て攻撃し、共に皆大に之を破り、追撃 字解】 至長安、至は還の意、即ち長安に凱旋せし一窓にせる者に對し、皆赦して其罪を問はざりけら に高祖は黥布を平定し、軍を率ゐて長安に凱旋 孫絶えて後無く 氣の毒なりと、因つて 其墓の ゐて代を平定し、陳豨を當城縣に於て斬れり、 、魏の公子無忌の墓守には五家を與 、十二月、高祖曰く、秦の始皇帝を始め、楚の隱王 て特に秦の 漢の將は別に黥布の軍を洮水といふ川の南 始皇帝の 墓守には二十家の邑を與 へたり、又高祖 はざりけり、 兵を 番 i

ば、其部

トの

は

樊噲の為めに斬

5

n

12

大將ども各"降參したり、其

降參せる人

き下さるべしと願ひけるに、高祖は豐は たれども、豊は未だ除かれず、唯陛下之を哀憐 り、沛の父兄皆頓首して曰く、沛は幸に徭役を除かれ 祖また留りて まくを張り、共に飲むこと 三日に及べ 出で、邑の西に於て牛酒を獻じ之れをねぎらへり、高 兄は永く朕等を給養すること能はざるべしと諧謔し Jt: 話して興じ樂むこと十餘日なりき、かくで高祖 與かること 無からしむべしと、沛の父兄 諸母故人と すべし、また沛中の民に限り徭役を除き、代々勞役に に比して湯沐の邑とせり、かく二邑は湯沐の邑と爲 し所なれば極めて 忘れず、然るに 其除かざるは雍 て去られたり、是に於て 沛中の人民は 一縣のこらず 日に樂みて喜びを極め、ありし昔の 為めに の邑と為し、永く之を記念して 忘れざることを示 めたれども、高祖は吾が人數は至つて多ければ、父 て歸らんとせしに、沛の父兄は別を惜み、固く之を の父兄は固く之を願ひしかば、高祖は之を許し、沛 因縁の深きものなり、されば 我は沛を以て我が湯 我に反し、魏の為めにせし故なりと、されど 至りたる 次第なれば、沛は我 舊きことなどを 我が 生長 して除 は解 と尤

ことにて、敬禮することなり、 は学解】 縦酒、ほしいまゝに 酒を 飲むことなり、筑、 (字解】 縦酒、ほしいまゝに 酒を 飲むことなり、筑、 に平ぎて海内平穩になりたること、傷懷、故郷をいた に平ぎて海内平穩になりたること、傷懷、故郷をいた の情、立と、游子、故郷を 去りて 天下に游ぶ者の義、 即ち天子直轄の地なり、復其民、沛中の民だけに徭役 即ち天子直轄の地なり、復其民、沛中の民だけに徭役 を除くこと、復は 除なり、職、喜びなり、献、牛酒を獻 を除くこと、張、幕を張ること、頓首、首垂れて地に至る すること、張、幕を張ること、頓首、首垂れて地に至る ことにて、敬禮することなり、

整王、齊湣王、趙悼襄王、皆絕無 一八、朝、陳孫當城十一月、高祖 一日、秦始皇帝、楚隱王・陳涉、魏安 一月、高祖 一月、高祖

兒 か之に加ふべき、唯今後努むべきは、治に居てかしき故郷に歸り、父老と樂むを得たり、快樂 曰く、秦政を失ひて豪傑所在に蜂起し、天下亂れしこ酣なる頃、高祖は自ら歌を作り、筑をたゝきて唱うて も放泣 自ら起ちて舞ひ、慷慨胸に くなりき、しかるに余は今や此の大亂を平げてなづと恰かも大風の吹き起りて雲の滿天に飛揚するが如 り集めて百二十人を得、之に歌を教へたり、而し 集めてほしいまくに酒を飲めり、時に沛中の ぎり、沛宮に大酒宴を張り、悉く故人父老子弟を呼 3 けるに、布敗走せり、依て別將をして之を追撃 たり、かくて高祖は軍を率めて歸り、放郷なる沛 えをして之に和し習はしめたり、而して高祖は乃ちんのみと、滿腔の豪懷を披瀝し、豫ねて集めたる小 ざることなれば、勇猛の壯土を得て四境を守ら し、且つ朕沛公となりてより四方の暴逆者を誅し、 郷を悲み思ふものなり、されば吾關中に都すと雖 數行下れり、徐ろに沛の をして之に和し習はし 、萬歳の後には吾魂魄は 猶沛 父兄に謂うて曰く、游子は、 満ち、傷懐禁する能はず、 得たり、快樂何も 高祖は 聞を 見を

撃てり、楚王交敗走して薛に逃込む、是に於て高祖自撃でり、楚王交敗走して薛に逃込む、是に於て高祖自攻めて其地を幷吞し、遂に北の大連王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立てゝ淮陽王は子の恢を立て梁王と為し、子の友を立て、後に北の方淮水を渡りて墓と

朕中、父起。守。加。爲,十老過。甄十十 6 往いて布を撃ち、子の長 自,萬兄舞。四海歌人,子沛,布二 沛歲,日,慷方,內。詩,教,弟,留,走。年 公後 游 慨 令。兮目。之縱置令十 兒。歸。大歌,酒。酒。別月 以,吾子傷 悲、懷 皆故風 誅。魂 酒發,沛 將?高 故 泣 和鄉起,酬。沛宫追。祖 暴魄 を立てゝ 習。安、兮高中、悉、之、已 逆, 猶 鄉,數 吾 行 之,得,雲礼兒,召。高擊, 淮南 有。思、雖下。高猛飛擊,得。故祖布, 天 沛, 都, 謂, 祖 士, 揚, 筑, 百 人 還 下,且關沛,乃兮威自,二父歸。會

馬太使黃 急ある際は尤も重要なる地の意、與之、容易に相手と 餘趙 畢, 趙、者、卒、利 邑_ 尉 將 軍、豨, ことが出來るとの意にて輕蔑 斬,馬,守,馬 周 軍 將 陳豨反、事陳豨傳に見えたり、所急、一旦緩しかは、諸將果して漢に降る者多かりき、 高 東邑、不 北,之,高 逆 侯 勃 郭 を知れりと、 道。蒙張敞 祖 高 下,太 典 將, 春 在, 創 那 原 齊,渡。萬 乃ち多く 金を以て 豨の 以,原、怒、攻、攻 入,將 河,餘 爲、之,城之,殘、定、擊、擊、人,代於,降、不、之,代,大、聊游 せるなり 王、是一个下,豨 地,破、城、行、等, 都。乃出。月將至。之,漢王未。 諸

普陽

「講義」 【字解】 游行、別に定りたる任務無く、恰かも立てゝ代王と爲し、以て晉陽に都せしめたり、 平ぎたるを以て、趙の山北の地を分ち、我が子の恆 すること未だ 畢らざりき、時に 豨の大將侯敞は なり、殘は殺戮すること多きことなり、原 し、罵らざるものは之を許せり、かくて争亂はすべ 怒れり、 と月餘に及び、剩へ高祖を罵りければ、高祖は非常 利は東垣を守りしが、高祖 之を攻めしも 下らざるこ し、多くの人を殺戮せり、此時豨の大將の一人なる 邑に至りしに、馬邑未だ下らざりしかば之を攻め 太尉周勃は 河を渡りて 餘人を率ゐて 將と共に之を撃たしめて 大に之を破れり、又漢の 而して城降る時馬る .して味方を掩護するをいふ、攻殘、攻は攻游行、別に定りたる任務無く、恰かも游步 + 太原より入りて代の地を定め、進んで馬 聊城縣を撃てり、漢は將軍郭蒙をして齊 年に 游行し、王黄は曲逆縣に軍し、張春は黄 高祖邯鄲に 者を出さしめて之を 在り、 而して T

皆來りて弔し送葬せり、此 太上皇標陽宮にて崩御の不幸に會せり、楚王梁王等 夏の間は、何の出來事も無く無事なりき、七月に至り りて長樂宮に朝し、漢王の機嫌を 館·荆王劉賈·楚王劉交·齊王劉肥·長沙王吳芮等皆來 邑を更めて新豐と稱したり、 放,機陽囚,更命 十年 樂 宫 十月に、淮南王黥布・梁王彭越・燕王盧 宮、 春 楚王·梁王 夏 無 の歳機陽の囚徒を赦し、酈 酈邑,日,新 事 奉何せり、此の歳春 皆步月 來,太 豐、送、上

急 豨 也。當月故為,趙 今乃與"王 封,吾,相 一樣, 甚有信代以 國陳 豨 反 代 黄 等、劫掠、伐、人 等 代相地地,國,吾 地上 民,代守。所 日, 日く 我れ彼がよく為すと無きを知れりと、又豨の將は皆 之を赦すべしと、かくて九月に至り、上自ら東に行 て豨を伐ち、邯鄲に至りし時、豨の陣形を見て喜びて し掠むるも、由來代の吏民は何の罪も無き者なれば、 兀商賣人なりしとを聞き、又喜んで曰く、吾此の

、豨は南の方邯

鄲に

據り、漳水を隔てゝ陣せず、

輩を

多, 賈 し、且つ相國に任じて代の地を守らしめたるなり、 備ふべき重要の所なれば、我は彼を封じて諸侯と なりて甚だ信用あり、且つ代の地は我が最も緩急 を飜したり、高祖之を聞いて曰く、豨は嘗て吾が使 るに今彼は代の吏民王黄等と共に反して代の地を劫 「講義」 吾 喜,九 以人知日,月金,也,其豨上 八月に至り、趙の相國陳豨、代の地にて反旗 無,不自,能,南,東 為 聞、豨 將 別, 將 降與將者之皆 阻漳潭 鄲_ 乃故,水,上 然 爲

臣、皆

て依賴すべき點無きをいふ、力、働くこと、孰與仲多、四升を容るといふ、常以、以は思と同じ、無賴、放蕩に 大人は常に やとの意なり、 今臣が爲し 下を平定して 未曾有の 大業をなしたり、先きに大人 弟仲が働くに如かずとなされたり、然るに、今臣は天 に非ず、迚も産業を治むる能はざるものと思ひ、臣の 【字解】 貴族、金持のこと、玉巵、玉にて造りたる杯、萬蔵を三呼し、大に笑ひ興じて歡樂を極めたり、 追懷して今日の成功を喜びければ、殿上の群臣は皆 は仲の力を多とせら れたれども、今臣の 成した は玉巵を捧げ、起つて め、未央宮の前殿に於て大酒宴を催したり、時に 、始め大人は常に臣を放蕩にして依頼すべきも 之に比ぶればいづれか大なるやと述べ、往時 仲の働くを多として之を褒めたれども、 たる業を仲の働に比ぶれば孰れか大なり 太上皇の長壽を祝し、且つ日 る事 高 0)

交·齊王劉肥·長沙王吳芮皆來越·燕王盧綰·荆王劉賈·楚王劉

よりて漸く天下を平定したれど、尚ほ

其除

黨の四方

を弑せんと謀り居りたりしが、高祖いよく 栢人縣 ぎれり、此の時趙國の宰相貫高等は高祖を要して之 く喜ばれたり、其後高祖は東垣に行きて 栢人縣を過 ることを述べければ、高祖も怒り解けて、却つて

て合陽侯に貶したり

棄てゝ亡げ、自ら洛陽に歸りしかば、高祖は之を廢し ば、こゝに宿泊せずして通過せり、代王の劉仲は國を

都合なりといふ意、之、ユクと訓む、行くこと、貫高謀ざるに、かゝる莊麗なる宮闕を造るは、度に過ぎて不 甚だ壯大にして 美麗なるをいふ、何々、不安の貌、過庫、武器を藏めたる庫、太倉、粟米を 貯ふる倉、壯甚、 弑、事は張耳傳に見えたり、 度、天下草創の際とて反亂未だ定らず、財政また調 りて、西と南とに無きこと顔師古の註に見えたり 【字解】闕、門なり、未央宮には東と北とのみに門あ

ざるべからず、然らざれば

決して威光を示し以て天

にあらず、必ずや雄大莊麗天下に冠たるものに なれば、區々たるみすばらしき 宮殿に 住むべきもの

あら

す、さればいよく以て 宮殿を造りて 威光を天下に と詰りければ、蕭何對へて曰く、天下亂れて未だ定ら 麗にせしは何故ぞや、常識を逸したるふるまひなり

示すべきなり、且つ天子は 四海を以て家と なすもの

だ豐ならず、重ねり、注意を要すべき時なり、

に於て宮殿を造るだに

如何と思ふに、じかも之を莊

成敗は未だ判明せざるなり、且つ戦亂の

後財政

るも未

に至りしに、何となく 胸さわぎして不安を 感

じけれ

此の際

つ如何

爭に苦み居れり、されば表面は治まりたりといふも、

なる事起りて、我は天下を失ふに至るや其

するものありて、天下は何々とし、人民は常に戦

高祖の創業の偉大なることを後世に示さん為めな 九年、趙 相 王 貫高 敖, 爲 等事發覺、夷二 平 侯是歲、徙

んと欲せしなりとて、一は天下に威重を示す為め、一 莊麗迚も陛下の宮殿に及ぶものを造る能はざらしめ らず、天下後世、宮室を造營するものをして、其規模 に造りしは蓋し此の意に外ならず、雷に これのみな 下の重きを爲すに足らざるなり、今臣の宮殿を莊麗

12

る長樂宮が落成せしかば、丞相以下の百官皆長安に 陽より長安に 至 れり、此の 時長安にては 豫て建築

安、前に見えたる咸陽なり、高祖六年に改めて長安と 邑を以て匈奴に降り、太原に反するに至りしなり、長恐れ、乃ち匈奴と約して共に漢の軍を攻め、反つて馬 多の兵を發して信を援けたり、かくて漢廷は信が屢 今又疑はれて 貴議せられしかば、誅せられ んことを 立てけり、よりて信は前に 封を遷され快々たる上に 匈奴に使をやりしを二心あるものと思ひ、信を責め りて信は使をやりて和解を求めけるに、漢廷にて敷 けるが、其秋匈奴の王冒頓大兵を率ゐて圍みたり、よ 【字解】 信謀反太原、信馬邑に都し、以て匈奴に備遷りて政務を執れり、 名づくと漢儀註に見えたり、

年、高 闕·北 東垣、 祖 蕭 闕 前

歸。動。趙。高 以,夫、下 是。下 祖 重 天 方 何, 乃, 威,子、未,治, 因,相 無。四 故 室,戰 數 義 後 為 。 因,度 。 歲 4 敗 亡,祖 栢加,麗室,日, 自,心人,也,無。且,天

魔を極めたり、高祖東垣より還り、其宮闕の甚だ 及び武器を收むる庫、栗米を貯ふる倉を建て、莊嚴 せしものを東垣に討伐したり、是より先き丞相蕭何 【講義】八年に高祖は韓王信の除黨にして漢に反窓 なるを見、怒つて蕭何に謂つて曰く、余は諸將の は長安に於て未央宮を造營し、東西に門を設け、前殿 功

雒

戟、戟を持ちたる兵、十二、十分の二なり、東西秦、齊ふ、限とは。黄河にて國と國との間を限るをいふ、持り、濁河之限、黄河の水は常に濁れり、故に濁河とい 黄 祖 水を入るゝ器、高屋の上に在りて 領水をこぼすが 典_七 のは残らず齊に屬せしむとの義なり、徒、左遷の に封ずといふに同じ、齊言者云々、齊國の語を使ふもには七十餘の城あり、故に七十餘城に封ずとは、齊國 ふ、百二、百分の二なり、建筑水、建はコ いふを得べし故に東西秦といふ、七十餘城、齊の上地は秦と相抗す、故に秦を西秦とすれば齊は東 、濁河之限、黄河の水は常に濁れり、故に濁河ととは、其下に向ふの勢易きをいふなり、饒、豐饒 自,立,同,年、往,故,謀,匈擊,趙 反,奴 城。什。自, 七日、而 二三、遂 の勢易きをいふなり、饒、豊饒な ボスと、 噲,圍,墮,反,臣 止,我,指,高主 意、 領 國 如

り、同じく太原に反したりしが、漢の軍に破られ 講義 り白 子孫に當れる 趙利といへるを 定 を受けたり、然し七日の後、漸く匈奴の園を解 為め、走りて何奴 れたれば、殺されんことを恐れ、兵を引いて匈奴 は先きに移封せられて快々たる折柄、今漢皇に 高 代王と爲せり、二月に高祖平城より趙を過ぎり、 落すもの十分の二三に及べり、かくて漢皇は平城よ L 反旗を飜したり、よりて、高祖は自ら往いて 之を撃 長 噌をして止りて代の地を 定めしめ、兄劉仲を 人曼丘臣と王黄と共に、故の趙の將にて、また趙王 が、寒氣に會ひて士卒多くシモャケにかうり、 會ひしかば、無事に歸るを得たり、かくて高 樂 祖 登に至りしに、匈奴の為めに圍まれ、非常に 宮成、丞相 地、立、兄 自,平 七年に匈奴は の地に入れり、而して其將白 城 過* 劉 角已下、徙治、長文 維陽、至、長安、一 韓王信を馬邑に攻めたり、信 立てゝ王と為し、復び 立て 土 祖 たる に 困 樊 F 0)

境を固め、西には黄河ありて他國との間を限り、北に ざれば、必ず之れに 王たらしむる 勿れ、他人を封じ、 たるや此の如く强し、故に陛下の親しき子弟にあら 西秦とすれば、齊は東秦と謂ふを得べし、夫れ齊の 秦と齊とは殆んど相抗するの、勢力あり、されば秦を 制するに至つては一なり、これに由つて之を觀れば 二十萬人を要すと雖も、その形勝の地を扼し、諸侯を 十分の二、即ち二十萬人を以て 相當ることを 得るな を譬へば、諸侯に持戟百萬人ありとするも、齊はその の外に在るが如く、亦容易に攻め入られざるなり、之 を以てすれば、恰かも諸侯の國を隔つると、遠き千里 其土地の廣きこと四方二千里もあり、故に齊の 地形 は渤海灣ありて鹽魚の利あり、國富み守り固し、且 の豐饒なる土地あり、南には泰山一帶の り、次に齊國に就いて言はんに、齊は東には琅邪 上に居りて領中の水を覆すが如く、實に易々たるな 兵を出して諸侯を 攻むるの 易き事は、恰かも高 、他より攻め入られざる便利なる地なれば、從つて 、此の如く秦は諸侯の兵百萬に對して二萬人、齊は その 地勢自ら 出でて他を攻む ること易くし 山脈ありて 即墨 徙したり、

なり、高祖また諸侯の功を論じ、諸々の列侯にソリフ 齊の近邑にても民のよく 齊の語を 使ふものは、皆齊 分の弟交を以て楚王と爲して、淮水の西に王とし と、因て以て荆王と爲して、淮水の東に王とし、又自 者しこれによつて 叛せらるれば、實に由々敷大事 の屬地とせり、蓋し父子たる故に其屬地を大にせし り、而して更らに曰く、將軍劉賈は屢、軍功 が、好し叛逆の心あるにせよ、天下を定むる際、第 りと述べければ、高祖は深く其説に感じ、賞として金 る韓王信の材勇を忌み、何のわけも無く、封を太原に を割き與へて封を行ひたり、而して の肥を立て、齊王と爲し、其七十餘城に王とし、且つ み、貶して淮陰侯となし、其地を分ちて二國となし に力を盡したる大功ある者なれば之を殺すことを惜 五百斤を興 へたり、其後十餘日を經て、高祖は 特に陽翟 ありた 都せ h

り、黄河と華山とが、帶の如く國の四境を擁するをい利なる 地を いふ、帶河山之險、河は黄河、山は華山な關中を稱して秦中といふ、形勝之國、形勢の勝れて便關中を稱して秦中といふ、形勝之國、形勢の勝れて便

王、功爲、餘高秦里地王、以、二日祖也之方 西琅 高 論。十楚有地,十矣西,千利固,有居

信,功,太典 與 原。諸 列 侯、剖、符行」封、徙韓王

を隔つるが 如き次第にて、容易に 攻め入られざるな山河險固形勝の 勢は、恰かも諸侯の國と 千里の遠き たり、弦に田肯なる者あり、高祖が計を以て韓信を捕捕へたり、且つ此の日 今を發して天下の 罪人を赦しらず、自ら出で、之を迎へしかば、高祖は直ちに之を 陳に 秦は險要に據るの故を以て、其百 り、之を譬へば假りに諸侯に持戟百萬ありとするも 來秦は形勝の國にて河山の險を帶びたり、而して 今韓信を捕へまた 關中に都して 天下を治めらる、 平の計を用ひ、偽りて雲夢に遊ぶと稱し、以て諸侯を 之を撃たんことを主張せしも、高祖は之に從はず、陳 を召し、如何せんと問はれけり、左右の臣は皆爭うて叛せりと告げたるもの ありければ、高祖は 左右の臣 を以て之れに 相當ることを 得るなり、夫れかくの如 へたるを賀し、因りて以て高祖に説いて曰く、陛下は 會合したり、楚王韓信はかくる計ありとは 六年十二月に、或る人變事を上り、楚王 分の二 即ち二萬人

能。西荆

齊言者為東北

皇心善家令言賜。金五百斤、法於是高祖乃尊太公爲太上

に其身に及ぶべければ、宜しく御考へあるべし なれば、誠に忍びざる所なりと述べられければ、高祖 とも人臣なれば、之を禮するは天下の法を亂すわけ 向ひ、帝は人主にて我は人臣なり、よしや我は父なり とじさりに歩き、いと敬禮を盡されたれば、高祖 る時は、太公自ら等を持ちて通を掃ひ、門に迎へてあ めければ、太公も尤と思はれ、其後高祖が朝せら 時は、人主の重き威權行はれずして、為めに禍も自然 拜せしむべき、若し今までの如く人臣を拜せしむる と雖も人臣なり、されば 如何でか 人主をして人臣を 高祖は太公の子なりと雖も 人主にて、太公は 父なり 天には二の日無く、土地には二人の王あると無し、今 に太公の家令は之を見て、太公に申上ぐるやう、凡そ 子たるものが、其父に對する禮の如くなしたりき、時 の太公に伺候し、その安否を伺ふと恰かも普通の人 に驚き、車より下りて太公を扶けたり、太公は高祖に 六年に至り、高祖は 五日毎に 必ず一たび父

ひたり、又深く家介の言を嘉し、金五百斤を賜と盡されたり、又深く家介の言を嘉し、金五百斤を賜

尊んで太上皇といふなり、「字解」「家令、太公の一家を取締る ものなり、筆、ハウキと訓む、箒なり、湖行、あとじさ りに 歩くとにてウキと訓む、箒なり、湖行、あとじさ りに 歩くとにてウキと訓む、箒なり、神なり、本上皇、太上は無上の義、

侯,祖 為,利 幾 王、燕 籍侯陳 幾 反、使 臧 将*将*立 羽_将,兵,太 幾 祖 恐、至、亡、項擊、攻、尉故、雒降、氏之、代、盧 反。陽。高 敗。利 舉,祖 利 幾 其 綰, 秋 通高幾走利

之を撃ち、途に燕王臧荼を生擒せり、是に於て更めてし、攻めて代の地を下しゝ故、高祖自ら兵に將として【講義】 六月天下に 大赦を 行へり、十月燕王臧荼反 者亦叛せり、高祖又自ら兵を率のて之を撃つ、利幾は 率ねて代を攻めしめたり、其の年の秋、利幾といへる 太尉盧綰を立て、燕王と爲し、丞相樊噲をして 破れて奔れり、此利幾といへるは嘗て項羽の ず、亡げて高祖 しが、項羽敗るゝに及び、自ら陳公と為りて之に隨 に降れり、高祖之を潁川に封じて諸

> 侯とせり、かして後高祖 は洛陽に至り、 利 幾を以 かっ T 恐 列

大臣に當れり、通侯籍、通侯は列侯と同じ、籍は【字解】 太尉、軍兵を總括する官にて今の我が怖心を抱き、遂に反せしなり、 ねていへば諸侯の斑に列せしめしなり、 なり、即ち利幾を以て列侯の籍に編入したるなり、重 戶籍 陸 軍

日,却不,何,子,天。人,六 行。令。人無,父 後人主 子。高 人 高 祖 高 主。也日 禮 祖 也大祖拜太土太五 驚,朝人公 無。公,日。 家一。令朝。 ----下,太臣,雖 以,扶,公如,父,王 我,太摊,此人今 說,太 公二 亂。公,等,則 臣 天 太 迎。威 也 太 天太迎威也祖公如,下公門重奈雖、日家

疑ひて各其才能を盡さしめず、且つ戦に勝つも其功 うし給へり、項羽は然らず、賢者は之をねたみ、才能 我が天下を取る理由の其一を知れども未だ其二を知 を賞せず、地を攻めて之を取るも之を與へて利を なり、彼の項羽は れよく之を用ひたり、これ我が天下を取りたる所 信に及ばず、此の三人は皆人中の英傑なり、而して我 か、戦 を盡さしむるとは我れ 蕭何に 及ばず、百萬の兵を率 百姓を撫育し、絶えず糧食を送りて軍士を養ひ、其力 見極むるとは我れ 張子房に及ばず、よく國家を鎮 制する謀をめぐらし、千里の らざるなり、夫れ見られよ、かの唯の を失ひたる所以なりと、高祖聽き終りて曰く、公等は も無く 地を略して之を降す時は、之を功として其儘をしげ くして人を愛す、然れども陛下は人をして城を攻め、 しめず、唯自らの利をのみ是れ計れり、是れ其の天 士は之をにくみ、功ある者は之を害し、賢者は之を へば必ず勝ち、攻むれば必ず取ることは我れ韓 く、陛下は傲慢にして人を悔り、項羽は情け深 其人に與へ、常に 天下の公衆と 共に其利を同 一の范増あれども之を用ふる能 外の戰爭に勝つことを 中に坐して敵を F

關中に入り、こゝに都を定めたり、即日駕を命じてき、且つ留侯張良も亦關中に都するの便を言上し、共き、且つ留侯張良も亦關中に都するの便を言上し、共永く洛陽に 都せんと 思ひしが、齊人劉敬其不可を説が、と、是に於て群臣皆其言に服せり、かくて高祖はす、これ項羽の 我が為めにとりこに せられたる所以ず、これ項羽の 我が為めにとりこに せられたる所以

高 なれば、字面に拘泥せ 1= 別して死したるにて 擒にせられ たるにあらず、然る 之を用ふ、飢餓、兵糧を送 ばりの前面に重れたるを帷といび、周圍にめぐらし 【字解】 置酒、酒宴を催すこと、狀、事狀なり、妬、ね 意、擒、トリコと訓む、捕虜となることなり、項羽 たるを嘘といふ、陣中にて軍の評定を為す時は多く たむこと、嫉、にくむこと、籌策、はかりごと、帷帳、と 一祖に説きしこと、劉敬傳に詳なり 今我に擒にせらることいふは、所謂物の ざるを ること、人傑、英雄豪傑 可とす、劉敬說、劉敬が いひやう は自

反、攻下,代地高祖自將擊之、得,六月、大赦天下,十月、燕王臧荼

策, 日, 予、之, 妬、因, 陛下失, 所侯高 帷 公 人 戰 賢, 以, 下 慢, 天 以, 諸 祖 帳知,利,勝。嫉、予、使、而、下,有。將置 之 其 此, 而。能, 之, 人, 侮, 者、天 無, 酒。 中一,所不有。與攻人,何,下,敢,雒 外籌祖不疑羽。者、然、陛以、吾列

决。未以予、功天城,項高者、隱。陽、 勝,知,失,人者、下略、羽起何、朕南 於其天功,害同,地,仁王項皆 千二,下,得之,利,所,而,陵氏言。高 里夫也地,賢也降愛、對。之其祖 之運,高而。者、項下、人,日,所情,日。

> 中人為有用如。百餘香高劉我。一之。韓萬懷。不 祖敬擒范此信之不如, 是, 說, 也, 增 吾此, 軍, 絕, 子 日及高而。所三戰、糧 駕留祖不以者必道鎮 入, 侯欲,能,取,皆勝,吾 都、勘、長、用、天人攻不家、 關上都此下,傑也如,撫 中入雅其也也取蕭百 都陽所項吾吾何姓, 關齊以羽能,不連。給。

を得た。 は如 所以は如何なるわけぞ、項氏が天下を失ひたり、而して之に謂つて曰く、諸君少しも隱高祖は洛陽の南宮に 列侯諸將を招き、大宴 何 なる理由ぞ、諸君宜 は洛 、時に高起・王陵の二人即坐に 腹臓なく 立ちて

罷,數 羽,諸 皆 君,將 吳 如故、天 歸。月,叛。侯 梅 歲家。而,漢、諸降、令,歸、侯,殺、盧 家一而、漢書 鋗 有, 功 沙 布 屬。 之,結 維劉 從 都。 大。燕 故, 定、高 入都 臨 王 武 陽。賈克江 臧 中五圍、王祖茶者、月之、驩都、趙 關. 湘. 故。 德君 下,項 陽敖 番

喬無し、而して齊王韓信はよく 楚の習俗に 慣れ居れの諸將を封せり、此の時皇帝曰く、楚の義帝はその後【講義】 高祖既に項羽を 斃したり ければ、茲に外來

なり 罷 都 かば、之を洛陽に殺せり、其年五月に至り諸兵皆戰を 臧茶・趙王張敖等には、皆以前の 故今封じて長沙王と爲しゝなり、又淮南王黥布・燕王 せしめ、衡山王吳芮を徙して長沙王と爲し、臨湘 りと、是に於て 1-T 頑强に抵抗して降らざりしが、數月の後途に ٤ 江 は洛陽に都し、諸侯は皆高祖に臣屬せり、獨り故 を以て深く其主番君の 功と為し、常に之を 德とせし 嘗て漢王に従つて 武關に入りたるの功あり、 せしめたり、此の吳芮は番君と稱し、其部下の將 還る者には同じく六年、之に禄を與ふること一年 も變へざりき、かくして天下大に定りければ、高祖 關中に在る者には めてそれと、家國へ歸れり、 劉賈とをして之を 攻圍せしめたり、王驩は 王驩は、項羽の為めに漢に叛きたる故、高祖は盧 せしめ、故の韓王信を封じて韓王と為し、陽翟に めたり、又建成侯彭越を立て、梁王と為し、定陶 韓 信を徒して整王と為し、下邳に 徭役を除くこと十二年、其本土 而して 諸侯の子にし 封土を其儘與 降りし 漢王是 始 の臨 8 都 は

【字解】復、除なり、徭役を除くなり、歸者、已に其太

水之陽紫

平定す は身を ず便 侯 3 す大王を守衞すべし、大王決して辭すること勿れと、 ならず、また其理無きを以てなり、臣等死 皆疑うて信ぜざるべし、何となれば こに至ら れに當り得んとて僻退しけり、群臣諸將皆曰く ず、況んや我 に空言虚語のみにて、其德無きものは を請へり、漢王曰く、我れ聞く帝は賢者の爲るべ 將諸宰相等、皆相共に漢王を奪び、皇帝とならんこと て尊號を有せざ のなりと、 れど漢王は となす、これ有徳の賢者にあらざれば、いかでかこ て曰く、これ諸君は予が 利ありとなすが 微賤より起 、諸將にて功有る者は輙ち地を割き、封じて王 漢王 んや、且つ大王にして尊號を有せざる時 されば帝位は賢者の所有といふべし、徒ら 0 三度譲りたる後、已むを得ずして 如き不徳の者に於てをや、いかでかこ る者は、古來末だ嘗て して暴逆の者を誅し、以て四 天下を平定す、其正 為めならん、然るを 皇帝たるを以て國家 かゝる功徳 あら 其守る所に 月諸侯及 敢 ざる を以て必 て餅する 許諾 のみ あり きも 海 び諸 は、 非

水の北に卽きたり、かくて甲午に皇帝の位に汜

なり 【字解】 帝賢者有也云々、賢者に非ざれば水の北に卽きたり、 南と爲し、川に在りては陽を北と爲す、これ川は東流 もに之に宜し、因て改めずと、甲午、徐廣日 に號して皇帝とい と稱し、其次を王と稱す、秦三王の末をうけ、漢の する能はずとの意なり、便便國家、下の便の字は衔らに空言虛語のみにて、其德無き者は此の位を維 する故北側、山は南側のみ りと、陽、北なり、 めに驅除す、自ら以為らく、德三皇五帝を兼 b る能はず、故に帝位 、皇帝、蔡邑日 く、上古の天子を皇と稱し 凡そ支那に於て、山に在りては陽を ふ、漢の高祖天命を受けて は賢者のみの所有といふべし、徒 太陽の光を受くるを以て く二月な 、其次を 帝位に登 かと、 功徳と な

成侯彭越為梁王、都定陶故韓 整風俗、徙為、楚王、都下邓立。建 皇帝曰、義帝無後、齊王韓信習。

將軍は立 級を示し、最早や戰ふも詮なきことを諭しゝかば、父 漢王は諸侯の兵を率ゐて北し、魯の父老に項羽の首 くて漢王はかへりて定陶に至り、齊王韓信の陣に馳 待つに魯公の名號を以てし、之を穀城に葬りたり、か 老も之を諒として漢に降れり、よりて漢王は項羽を り、時に魯は楚の爲めに固く守りて下らず、是に於て 殺し、首を斬ること凡そ八萬、遂に楚の地を略定せ 漢王は騎將灌嬰をして項羽を追はしめ、之を城東に り、されば残兵も益、亂れ、大敗北を招きたり、かくて 0) 初の卒は漢の軍 が楚の歌を唱ふ を聞き、漢悉く楚の を引きかへして戰ひ、大に楚軍を垓下に破りたり、項 費將軍とは左右より兵を放ちて攻め立てしに楚兵崩 合戰せしに、戰利あらずして退却しければ、孔將軍と を得たるものと思ひ、それよく敗走しければ、流石 立ち 、時に項羽の兵十萬人ばかりあり、韓信先づ之きて 項羽も如何ともなし難く、自ら圍を潰して走りた 後に在り、絳侯と柴將軍とは又その後に陣取 萬人に將とし ければ、淮陰侯これに乗じて勢を盛り返し、軍 其左に、費將軍は其 敵に當れ 右に陣し、皇帝即ち 6, 而し 部 下の 高 b 72 は

項無 為,曾 公、及,其 死、魯最後降、故以,曾公禮、葬、項籍,為,曾 公、及,其 死、魯最後降、故以,曾公禮、葬、費侯陳賀なり、柴將軍、姓名詳ならず、縱、兵を放ちて費侯陳賀なり、柴將軍、姓名詳ならず、縱、兵を放ちて費侯陳賀なり、柴將軍、姓名詳ならず、縱、兵を放ちて費侯陳賀なり、柴將軍、姓名詳ならず、縱、兵を放ちて費人。

賈・齊梁の諸侯の兵と共に皆大に垓下に會したり、漢 たり、又武王鯨布は行 者をして大司馬 たり、是に於て韓信・周般・武王等の軍は、隨河・劉 楚の 叛きて漢 攻 攻め往くとを め入りて壽 歸し、九江の兵を擧げて劉賈を周殷を召さしめたり、是に於て 於て くく城父縣を 敗戰 U を しかば、劉賈は乃ち、 指縣を圍むに及び、折 ば せ 人皆許諾し、 屠りて楚に迫 迎 周

與 王、黥布なり、布整に叛きは劉賈を指す、周殷劉賈 は劉賈を指す、周殷劉賈を迎へて之に從ふなり、武紀にあり、用張良計、これも項羽本紀にあり、迎之、之【字解】 而西、以 西に同 じ、留侯陳平計、詳に項羽本王は武王鯨布を立てゝ淮南王と爲したり、 五 王と號したり、漢王父母妻子、母、黥布なり、布楚に叛き未だ漢に 萬項 年、 自, 羽高 當。決。祖 之勝,與 將下、侯 子、母子の二字符なり 淮兵 母子の二字行なり、 居、陰共 左. 侯 將。楚

張良の 漢を撃ちて大に之を破りし 越等の兵は より齊王韓信・建成侯彭越等と相會して楚軍を撃た 羽を追撃し、夏陽縣の南に至りて軍を止めたり、それ が、俄に留侯張良と陳平等の謀を用ひ、兵を進めて項 漢王も亦兵を引いて西の方自國に歸らんり欲せし 既に成る、依て項羽は圍を解いて東に歸れり、而し したりしかば、漢軍皆歡喜して萬歳を三唱しき、かく漢楚の和成り、項王は更に漢王の父と妻とを歸へ 楚と爲さんことを以てす、漢王之を許しゝかば、弦に んとを約束し、兵を進めて固陵に至りしに、韓信・彭 T 下を中分して、鴻溝より以西の地を漢と爲し、以東を んで楚を撃てり、項羽大に恐れ、乃ち漢王と約 於て項羽屢、彭越等を撃ちければ、齊王韓信も亦進 ちたり、而して田横も亦往きて彭越に從屬せり 居り、漢と往來して楚の兵を苦しめ、楚軍の 中に立ち籠り、塹を深くして堅く守りけり、而 項王は漢王の父妻を歸して別れ去れり、漢楚の和 計を用ひ、使者を韓信・彭越等の軍に遣はし、 約束通りに來り會せず、その中に楚は 時に當りて彭越は兵を將 かば、漢王は、復たび城壁 ねて

を爲さしむる勿れといひければ、漢王も之れに從ひ、 ねぎらひ、以て士卒を安んじ、楚をして勝に乗じて事 氣弱らんことを憂ひ、强ひて漢王に請ひ、出でて軍を を安ぜしめんが為め極めて平氣を装ひしなり、かく 奴項羽我が 指を射たりと、これ蓋し味方の士卒の心 傷けたりしが毫も屈せず、乃ち足をもなりて曰く、虜 弩を伏せ、射て漢王に當てたり、漢王は射られて胸を 容るゝ能はざるの大逆無道なる行なり、汝が罪十な 公平多く、約を掌りて少しも信實ならず、これ天下に h て漢王は傷を病みて打ち臥しけるに、張良士卒の意 ふの愚を為さんやと、きめつけたり、項羽大に怒り、 をして汝を撃ち殺さしめん、何を苦みて汝と挑み戰 て逆賊なる汝を誅す、汝既に穢らはしき逆賊なり、 りて其主を殺し、已に降れる者を殺し、政を爲して不 か に常人を以て之に當らしめんや。宜しく 刑餘の罪人 、吾これを以て義兵を率る、諸侯を從へ、残酷に 勉めて出でて軍をめばりたり、されど漏み益、甚 るが、程なく創も癒えたるにより、西の方關中に ければ、馳せて成皐に入り、こゝに一時休みてあ 義帝を江南に弑せしむ、罪九なり、それ人臣と爲

 みて單身に戰ひ、以て勝負を一氣に決せんと申し

せず、壯丁は軍戰に苦しみ、老弱は運送に疲れ、い

軍、王至、病毋、彊、日、弩,何、誅、

治るべしとも見えず、この時漢王項羽と共に廣武の 間にのぞみて舌戰せり、項羽は氣象荒き故漢王を挑 漢楚の軍人しく中原に相持し、勝敗未だ決 込 に都し、韓王の地を奪ひ、梁楚の地を併せ、之に王と らんと約せり、然るに汝約に負きて我を蜀漢に王 為りて多く自ら地を取る、罪八なり、汝人をしてひそ 罪七なり、 放逐し、為めに其臣下をして叛逆して民を苦ましむ、 王とし、故主田氏・趙歇・韓廣等を惡地に遷して之を といふべし、罪六なり、汝己れに屬する諸將を善地に 王子嬰を殺す、罪五なり、新安にて許りて秦の子弟 に其財物をぬすむ、罪四なり、それのみならず秦の るに汝秦の宮室を焼き、始皇帝の墓をあばき、ひそか て暴逆を行ひ、貨財を掠むることなきを以てせり、然 に入る、罪三なり、懷王征秦諸將に約するに秦に入り なるも之を爲さず、ほしいまゝに諸侯を劫迫して關 を救ふ、趙を救はい、まさに歸りて詳に報告すべき筈 し、自ら尊位に居る、罪二なり、汝既に命を受けて ず、汝の罪一なり、汝王命と矯りて卿子冠軍宋義 し時、先づ秦に入りて關中を定むる者は之れ 責めて曰く、我れ初め汝 項羽と共に命を懷王に みけるに、漢王は痛くこれを彈ねつけ、 十萬人を防殺し、其子弟を奉わたる將を王とす、残忍 汝義帝を彭城より放逐して自ら代りて之 却つて 項 羽

H. して往い 軍 破 て韓 72 3 信に天下三分の策を説かしめ 人

信、これは韓信 【字解】 て王たる 一、王、俱、桃 之 罷、人。 るを勸めたることにて淮陰侯傳に詳なり、は韓信に漢に反し、楚と連和し天下を三分 邊、近なり、近く境を接すること、使自は承知せざりき、 爲 めに自ら守らしむること、武渉

二、項之受,戰。間轉相 項命漢而饟持。 羽 矯 羽。懷 王 語。漢 未 已。殺。負、王、數、項王決。 救, 卿 約。日,項 王 項 丁 趙,子王,先,羽,欲,羽、壯, 當。冠我,入,日,與相苦。詳 還軍,於定始漢與軍 報。而。蜀關與王臨。旅。、

自,漢。中,項獨廣

尊,罪者、羽身,武弱、漢

無平,人使地,出故六,秦又掘,約,而, 道。主。臣、人,并,逐。主。項子疆始入。擅。 罪約,而陰王義令羽弟,殺。皇秦却 十不弑、弑、梁、帝,臣皆新秦,帝,無、諸 也信其義楚彭下、王安降冢。暴侯 吾天主,帝,多,城。争,諸二王私,掠兵,以,下殺。江自,自,叛,将,十子收,項入。 義所、已、南、予、都、逆、善萬嬰、其羽 兵。不。降。罪罪之罪地王,罪財燒罪 從。容、為,九,八,奪。七,而,其五,物,秦,三, 諸大政,夫項韓項從將,詐罪宮懷 侯, 逆不爲, 羽王, 羽逐, 罪院四, 室, 王

老楚

軍破則恐使肝台人武涉往說緩立韓信為齊王項羽聞龍且

を率るて汜水を渡りて漢軍を攻めたり、さて漢軍は、 韓信韓信不聽、 楚軍の士卒半分程河を渡りし頃を見計ひ、急に楚軍 じ、人をして五六日間楚軍に恥辱を與へ、楚軍をおび を撃ちて之を下せり、此の間漢果して戰を楚軍曹答 つになるべしと、乃ち東に行きて陳留の外黄睢黄等 彭越を誅して梁の地を定め、復び将軍(春海侯) 任務は漢の兵をして東方に攻め入ること能はざらし 挑むも深く用心して決して之れと戰ふ勿れ、只君の き出さんとしたり、果して大司馬曹答は大に怒り、兵 に挑みしも、曹谷は固く項羽の命を守りて應戰せず、 つて曰く、君は堅く成阜の城を守れ、假令漢より戰を 歩も城より出で ざりき、是に 於て漢軍は一計を案 ればそれにて充分なり、我は十五日の間には 漢の四年項羽は乃ち春海侯大司馬曹答に謂 2 必ず

漢王乃ち其諫を用ひ、張良を遣り、韓信に齊王の印綬 5 信の請を容れ、立て、齊王と為し、且つ韓信をして自 以て齊の假王とせよと、漢王大に怒り、自ら韓信を 權威輕し、故に假王と爲りて齊民に臨まざれば、恐ら 韓信は巳に齊を破りたりければ、人をして漢王に こうに其天險を擁して楚軍を防ぎたり、一方漢 死したり、かくて項羽は睢陽に至り、海春候が己 欣とは敗戰の責に任じて皆汜水の畔に自ら首はね を授け、立て、齊王と為せり、此時項羽は、部下 めんと欲す、此時留候張良漢王を諫めて曰く、今は くは齊國を鎮安すると能はざらん、大王宜 しく臣を くも楚と對等の權威無かるべからず、而して今臣は はしめて曰く、齊は楚に近ければ、之を治むる者は 還りしと聞き、園を解いて全軍悉く險阻の地に走り、 鍾離昧を滎陽の東に圍みけるが、項王が ずとし、兵を引いて還りたり、時に漢軍は方に楚の 物等を分捕 命に叛き戦うて敗れたるとを聞き、乃ち事容易なら を撃ちて大に之を破り、悉く楚軍 領地の為に自ら齊國を守らしむるに如かずと、 りしたり、此戰に於て大司馬曹谷と長 の蓄へたる金玉 兵を引いて の勇 れの 0) 137 謂 將

漢、往、來、 地一紀一整糧」とあるより見れば、往來は漢にのみ往來 て漢楚兩軍に通じ、所謂うちまた り、韓信用蒯通計、韓信蒯通の計を用ひて齊を破 龍且を殺したり、是に於て齊王田廣は彭 とに取れるが然し項 王の命を奉じて齊王に説きしこと 酈生傳に見えた 解】淮陰、淮陰侯韓信なり、酈生説齊王、酈生漢往來して楚の兵を苦め其の糧食を絶ちたり、 |為、楚とあるより見れば、往來とは彭越が中立し苦楚兵、田儋傳に彭越是時居。|梁地、中立且為」は淮陰侯傳にあり、犇、ハシルと訓む、走るなり、 しが、其騎馬の將灌嬰は撃ちて大に楚軍を破 此時に當りて彭越は兵に將として梁の地に居 羽本紀に是時彭 と欲すと聞き、則 たしめたり、韓信乃ち之れ 的態 越 度を持 5 復反、下二梁 越の 龍且·周 したる 軍に走 蘭

たることなり、

咎.年

旦,項

守。乃

成謂

阜,海若,春

漢侯

挑大戰司 愼,馬 楚阻離春自金渡日楚陳日勿 劉。玉 漢大 軍留、必、與 韓昧。侯 欲輕信於破泥貨擊司楚外攻不既崇乃水路之馬軍黄 定、戰, 文,不、既、荣乃水、路,之,馬軍之、爲、破、陽、引、上、大大、怒、不 梁,無* 睢 地,令~ 假齊,東兵,項司破,度。出,陽,復得 而。齊,邊。險鍾海皆國。半、六挑。擊、五

綰と劉賈とをして、兵二萬人騎士數百人を率ゐ、白馬 城壘を高くし、城濠を深くして自衞するの 利なると の鄭忠、其不可を説き、漢王をして交戰を止めしめ、 武城の南に陣し、復び楚と戰はんと欲せり、此時郎中 軍を得て之を指揮するに 至りし故、軍勢復た大に 耳をして北し、益、趙の地の兵を召集し、別に韓信 を説きしかば、漢王は其説に從ひたり、而して別に盧 ふに至れり、乃ち兵を引き河に臨んで南に向ひ、小 に入り、其軍を奪うて之を從へたり、而して改め 漢王自ら使者と僞稱し、早朝馳せて張耳・韓信 て東の方齊を撃たしめたり、かくて漢王は 韓信の

(字解) 跳、逃なり、走るをいふ、玉門、北の門を玉門 津を渡つて楚の地に攻め入らしめ、而して 親ら彭越

復た楚の軍を燕郭縣の西に破り、遂に復た梁

の地十二 と共にな

餘城を降服せしめたり、

淮 といふ、 麗生, 住說, 齊王田廣、廣、叛, 楚 八章, 東、未, 渡, 平原, 漢王

計,與
遂,漢 密、項 欲、聞、齊、 則是學,能河生 居。王梁、廣 將 且 周 地。犇%嬰

【講義】 淮陰侯韓信已に漢王の命を受けて東の方齊 韓信は范陽の辯士蒯通が計を用ひ、遂に襲うて齊王 は楚に叛きて漢と和し、共に項羽を撃ちたり、此の時 を撃ち破りしかば、齊王田廣は配生が 配生をして往きて齊 王田廣に説 かしめしかば、田 を攻めしが、未だ平原の渡し場を渡らざるに、漢王 りと思ひ、之を烹殺して東の方高密縣に走り、楚に通 じたり、一方項羽は韓信已に河北の兵を擧げ、齊趙を 己れを欺きた 廣

の時彭越は睢水を渡り、楚の項聲醉公の軍と下邳に b 王が宛に在ることを聞き、果して兵を引いて南征 し、黥布と共に行く~~諸郡の兵を收容せり、項羽漢と必然なりと、漢王 其計 に從ひ、軍を宛葉の 間に出 故、自 「氣を養ふとなれば、復び楚と戰ふも楚軍を破力も弱くなるなり、然るに漢の軍 は充分休養 然れども漢は城壁を固くして興に戰はざりき、是 するに 其計に從ひ、軍を宛葉の 至 る、勢力 n せ

地

餘

梁越騎其王。南復韓軍, 復 數計,使、欲振、信,乃, 擊,百,使高。復引。東,使 萬破,渡,盧壘,戰、兵,擊,張 白綰深。郎臨。齊,耳, 楚 軍,馬劉塹,中河漢北。 城, 津,賈,勿,鄭南 燕 郭、入,將。與思響。得,收, 西、楚、卒 戰、乃,軍、韓兵, 遂 地 二 漢 說, 小 信, 趙, 復 與萬 王 止修軍,地。 下。彭 人聽,漢武則使

と能より、とことで成皇を閨めり、漢王支ふることを引いて西攻し、滎陽を拔き周苛・樅公を誅し、韓王を引いて西攻し、滎陽を拔き周苛・樅公を誅し、韓王 3 して漢王復た成皐に軍することを聞き、乃ち復【講義】 項羽已に彭越を 破りて之を走 らせたり 能 はず、逃走して獨り滕公と共に車に乗り、成皇の + で、北の方河 り、疾騙して修武に宿し、

正庸よ、 し、又漢にくみし、更に背きて楚に從ひ、韓信の爲めし、又漢にくみし、更に背きて楚に從ひ、韓信の爲めし、又漢にくみし、更に背きて楚に從ひ、韓信の爲め

在一定、果引、兵南、漢堅壁不,與戰下邳、彭越波,惟水、與項聲薛公,以兵東、擊,彭越大破,楚軍、項羽乃,兵東、擊,彭越波,惟水、與項聲薛公,以兵東、擊,彭越波,惟水、與項聲薛公,以東,成阜、

歸せんことを願ひ、其許可を得て歸途に就きしが、未 勘めたりしが、今や我一が赤心を疑は を に怒り、老年といふを辭 疑へり、是の時亞父は項羽に遂に滎陽を下すとを 彭城に至らずして死せり、これ憤慨の結果疽背に 傷し、之を離間 せしめたり、是に於て項羽は 金四萬斤 柄とし骸骨を賜うて卒伍 を與へて以 るゝを知りて大 亞

を漢と爲すの意なり、間疏、間 はへだつること、疏は【字解】 割滎陽云々、滎陽を 割きて楚に 與へ其以西生ぜし爲めなり、

うとんずること、 餘 人 皆 乃被。食,乘,甲,乃, 呼,乃 與 楚夜 之。駕。因,出。城。祚。四女 騎 出, 東。爲,面。子, 門,觀、漢、擊,東 遁、以,王、之,門。 令,故,誑、將二 令故,脏,将

周

苛·魏

豹·樅

與。周 苛·樅 守城, 卒 因, 殺。 相 魏 謂 日、反國之王 者、杰 在, 城 難。中、

背と を 不安心なりとて遂に魏豹を殺したり、 城中に在 王の諸將にして b しかば、漢王は其隙に乗じ、數十騎と共に城の西門よ ればなり、かくて楚軍は城の東門に集りて紀信を觀 萬歲と呼びたり、これ蓋し楚人は 漢王降ると思ひた で、許りて漢王と爲りて楚軍を誑かしければ、楚軍 ば、將軍紀信は乃ち漢王の駕に乗りて城の東門を出 り、楚の軍は之を見て四方より攻撃を始めたりけれ 將軍紀信の計を用ひ、乃ち夜 黐かに二 千餘人の女子 、我等は反國 東門より出し、此の女子には皆甲冑を着けさ 遁れ出づることを得たり、當時漢王は 樅公と 漢王の 6 魏豹とをして滎陽城を守らしめしが、漢 たり 軍糧 漢王に從つて脱出せざる者は皆滎陽 然るには たる魏豹とは共に 道を絶たれ 周苛·樅公等 たり、そこで漢 は相談 城を守ること 御史大夫周 て日 せたた

道王、 陳餘·趙王歇其明年、立張耳為 陳餘·趙王歇其明年、立張耳為 東京,

【講義】 三年に魏王 豹漢王に謁 見し、暇を告げて國に歸り、親の病 氣を見舞へり、かくて 國に歸るや、即に聽かざりき、依つて漢王將軍韓信を遣し、撃つて大に恋かざりき、依つて漢王將軍韓信を遣し、撃つて大に之を破り、遂に魏 の地を定め、三郡を 置けり、即ちに之を破り、遂に魏 の地を定め、三郡を 置けり、即ちに之を破り、遂に魏 の地を定め、三郡を 置けり、即ちに之を破り、遂に魏の地を定め、三郡を置し、撃つて大に之を破り、遂に魏の地を定め、三郡を置し、撃つて大正を破り、遂に東の方井陘を下りて趙を撃たしめければ、二將は陳徐と趙王 歇とを斬れ り、其明年に漢王は張 工・道王と爲せり、

【講義】 漢王滎陽の 南に陣し、甬道を築いて之を黄河についかせ、以て敷倉に蓋へたる米を取りて粮食に供し、以て項羽と相對陣すると一年以上に及べり、正を包圍せり、是に於て漢王和を 請ひ、滎陽を割き、果の缺乏を告ぐるに至りたり、かくて項 羽は遂に漢郷の缺乏を告ぐるに至りたり、かくて項 羽は遂に漢郷の缺乏を告ぐるに至りたり、かくて項 羽は遂に漢東の間項羽は屢・漢の甬道を侵奪せし故、漢の軍は兵此の間項羽は屢・漢の甬道を侵奪せし故、漢の軍は兵地の間項羽は屢・漢の甬道を侵奪せし故、漢の軍は兵にはし、との條件を提議せしも、

子をして機陽を守らしめ、又諸侯の子にて關中に ず天下を取ることを得んと、是に於て隨何命を奉じ 制し、之が進軍を防遏すると數月なるを得ば、我れ必 引いて章邯の都廢丘に灌ぎければ、廢丘遂に降り、章 を行ひ、罪人を放還して恩徳を示したり、尋ぎて 3 から り、楚因つて龍且をして往いて布を撃たしめたり、是 のて下邑縣に居りし故、漢王は呂侯の軍に身を寄せ、 「記事」の「」」 る者をは、皆機陽に集めて太子の守衛と為し、又水を より先き漢王の彭城に破れて西するや、行く一人我 て往きて九江王黥布に説けり、黥布果して楚に叛け 必ず留りて黥布を撃つならん、かくて項羽の軍を をして兵を舉げて楚に叛かしめよ、かく せば項羽 を得ず、敗後に獨り一子孝惠を得たるのみなり ば、六月に至り立てゝ太子と爲し、而して特に大赦 家族を求めしめしが、家族も亦既に亡げて相求む かと 自殺せり、因て廢丘の名を改めて槐里と稱せり、 の陣に使せしめ、随何に謂うて曰く、君能く黥 地を過ぎで虞に至り、謁者隨何をして九江 散兵を收めて碭に軍 せり、かくて 漢王は西の の兄周呂侯、漢の為めに兵を率

間に破りたり、

雍王章 邯の都 する所、乘塞、乘は守なり、塞は保砦な【字解】 隨何說九江王布、事黥布傳 に詳な り、廢丘、間に破りたり、

魯より胡陵に出で、蕭縣に至り、漢王と大に彭城縣の郡、唯水の上に於て合戰し、大に漢の軍を破り、多くその士卒を殺しゝかば、為めに睢水は死屍をり、多くその士卒を殺しゝかば、為めに睢水は死屍をり、多くその士卒を殺しゝかば、為めに睢水は死屍をの戰項羽は遂に漢王の父と妻とを捕虜とせしかば、常に之を軍中に置き以て入質とせり、」是の時に當り、本土の職項別は遂に漢王の父と妻とを捕虜とせしかば、古書に還り、書王欣も亦亡げて楚の軍に入りたり、

これは異する時の禮なり、泰襄、其死を發表するをいりて自ら言ふた遮といふ、袒、衣の袖 を脱す ること、りて自ら言ふた遮といふ、袒、衣の袖 を脱す ること、て教化を掌れり、董公は その一人 なり、遮、道に横は

蕭之,切。欲、陽、立、廣、齊陽、是, 乃,五、遂、項榮,其皆田 時 漢引,諸破、羽 子 子 降。榮 大。兵,侯,之、雕。廣,女,楚、敗、王 戰。去,兵,而。聞,爲、齊楚走。北 齊,遂擊漢,齊人因,平 城、從、入、漢、東、王、叛、焚原。齊、 魯彭漢既齊之燒平田 出城王已 王 田 其原,榮 項以連及樂城民與 東胡 睢陵。羽故,齊,楚。弟 郭,殺、戰, 水至、聞、得、兵、城横係之、城

楚,侯沛,之,上, 塞 見,置。不大。 王 楚 之,流、破, 欣 疆, 軍 乃, 漢, 亡,漢中取,軍, 入, 敗, 以, 漢 楚、還,為、王, 殺。 皆 質:父 去,當,母來, 漢,是妻,唯 復 時_子• 爲當

れり、平の なるを以て、急に漢に向ふこと能はず、故に遂に齊羽は漢王の東征を 聞くと雖も、旣に 齊の兵と交戦 為せり、是に於て齊王田廣楚に城陽に叛けり、時に T 「講義」 の弟に田横といふ者あり、榮の 女美人を虜にせしかば、齊人怒つ じ、五諸侯の兵を脅威 破つて後漢を撃たん 齊は皆楚に り、項羽之を聞 原縣 田祭 是の時に當り、項 は興 の民田祭を捕へ とせしかば、齊人怒つて楚に叛けり、田降れり、楚因て其の城郭を焼き、その に城陽に戰うて大敗 と決心せり、漢王は此の き、乃ち兵を引いて齊を去り、 て遂に彭 王は て之を殺し 北の 子廣 城 方齊 を立て、齊王 し、平原 たり、是 を撃 間 縣 5 H 3

き、更に南の方平陰津を渡つて雒陽に至りたり、 を下し、殷王を虜にせり、漢王是に於て河内郡を置 り渡りしが、此の時魏王豹、兵を將るて之に從ひ河内 りに漢の社稷を立てしめたり、三月に漢王は臨晉よ 王は厚く之を待遇したり、二月に秦の社稷を除き、代 攬する爲めなり、此の時張耳來りて謁見せしかば、漢 赦を行ひ罪人を放免せり、又關中を出でて陝に至り 計れり、」正川に雍王の弟章平を虜にせり、」漢王は大 獵とて獵することも許し、以て人望を博することを 時、關外の父老を慰撫して還れり、是れ又民心を收

老董 發。 大事,告,遂

> 漢。以, 下, 願。 關 從。諸侯王、擊楚 兵收三河

之殺義帝,

義帝の殺されたることを以てしたり、漢王之を聞き、 袖を脱して大に哭し、途に義帝の為めに其喪を發表 (字解) 堂々として項羽に向つて宣戰したり、 項羽を誅せんと欲すと、かく漢王は 大義名分 を唱へ り、願くは諸侯王に從ひて、楚の義帝を殺したる逆 東・河内の三河の兵を收め、南の方江漢に浮びて下 は素服する禮なり)、我悉く關内の兵を發し、河南・河 ら帝の爲めに喪を發したり、諸侯皆素服せよ、(喪中 殺さしむ、これ大逆無道と謂ふべし、よりて寡人親か たり、然るに今項羽は之を江南に放ち、人をして之を 告げて曰く、天下共に義帝を立て、北面して之に事へ し、喪に臨むこと三日の後、使者を發し、偏く諸侯に の一人なる董公といへる者、漢王を遮り止め、説くに 漢王兵を率ゐて新城に至りけるに、其三老 三老、秦の制、一郷には三老といふものあ

定せしめ、更に將軍薛歐・王吸をして武關を出で南陽連へしめたり、楚の項羽之を聞き、兵を發して之を陽連へしめたり、楚の項羽之を聞き、兵を發して之を陽理に防ぎしかば、漢の兵進むことを得ざりき、楚は又故の吳の令鄭昌を以て韓王と爲し以て漢の兵の援助を得て太公と呂后とを沛より

聽、使 者。韓外。北 封、王、置、地 萬諸 韓 上 王, 園 河 南郡郡渭 池、 將 信, 翟 正故郡,信,郡,隴昌 月秦降為關西不王

きに徙されたる故の趙王歇を代より迎へ、復び立て **禁之を諾し、陳はに兵を奥へ、撃つて常山王張耳を破** 説かしめ、其兵を請うて張耳を撃たんとせり、齊の田 れば、彭越は却つて大に角の軍を破りたり、又陳徐は 又彭越に將軍の印を與へ、梁の 地に據りて楚に反せ と爲し以て田榮を斥けければ、田榮大に怒り、因つて たり、又項羽は川榮を怨み、齊の將田都を立て、齊王 吳芮と臨江王共敖 に申しつけ、帝を江南に 殺さしめ を見、追べに帝に叛き去れり、項羽乃ち 項羽が己れを王とせざるを怨み、夏說をして田榮に 自立して齊王となり、田都を殺して楚に反し、更らに りしかば、張耳亡げて漢王に歸せり、よりて陳徐 て出立させたり、帝の群臣どもは帝の勢衰へた めたり、楚因つて蕭公角をして彭越を撃たしめけ 額かに衡山 は嚮

たるを以てなり、 怒り、北の方齊を撃てり、これ齊王田榮が陳徐を助け 八月、漢王用。韓信之計、從故道 て代王と爲せり、而して項王は此の事を聞いて大に て趙王と爲せり、趙王は因つて陳餘の功を賞し、立て

略:定院西·北地·上郡、令将军薛以迎太公吕后於沛、楚聞之、强 兵距之陽夏不得前、令故吳令 等昌為,韓王、距漢兵、 略陽走。雍定。引。廢兵 ひしが、復敗れて廢丘に走れり、漢王遂に雍の地を定 陳倉縣に迎撃し、敗戰して後退し、止つて好時縣 り、而して別に諸將を遣し、隴西北地上郡の三 め、東の方咸陽に至り、兵を引いて雅王を廢丘 道縣より還つて雍王章 邯を襲撃せしかば、章邯之を 【講義】 八月に至り、漢王は遂に韓信の謀を用ひ、故 兵,丘、敗、雍 雍 王,遂上,邯, 廢 丘雅,好而地,時 地,時、東文語 將,咸敗。倉. 【字解】 棧道、閣道をいふ 險絶の處 は行き難きを以陣し、以て項羽と天下を爭ふに如かずと勸めたり、 至らば、復兵を用ふること能はざるべければ、等ろ の機會に於て、策を決して彼等を用ひ、東に向うて出 し、若し天下既に 打つて出 定つて人皆自ら土に安ずるに でなば、 必ず大功を 此

]1]

の上流に都を構へたり、よりて帝も之に從はざる

らずと、乃ち義帝を長沙郡の郴縣に徙し、帝を促

彭城より他へ徙 さんと欲し、人をして義 帝に謂はし項羽は親ら關を 出でて國 に就きしが、同時に義帝を「職義」 此の時に當り て項羽 の行動如何とりとし 羽趙亡。陳夏之,楚反。榮 大_王、歸、餘。說,陳 令 楚 怒, 怒,趙漢兵,說,餘蕭 予、因, 北王 迎、擊,田 彭自 怨。公 擊,因,趙破、榮.項角,越立、 齊,立,王常請,羽擊,將 陳歇,山兵,之彭軍,齊 餘,於王擊。弗,越,即,王, 爲、代、張、張、王、彭 令 殺、代 復 耳, 耳, 已, 越 反、田 王,立、張齊也、大、梁,都, 項為耳予令破地而

り諸將は各封邑の令を受け終りたる故、戯水の下よらしめ、梅鋗を十萬戸の邑に封ぜり、かくて四月に至 を徙して遼東に王と為したり、然るに韓廣は之 り、成安君陳僚を河間の三縣に封じて 南皮城に居 せざりしかば、臧茶は廣を攻めて之を無終に 1: 都せしめ、而して故の燕 殺し

は諸 れり、又亡げずして從ひ居る士卒も、皆歌うて東に歸鄭に至るころ、諸將及び士卒の多く は道より亡げ歸 づる意無きを示せり、これ東するには 此棧道によら盗兵の之に襲ふに備へ、亦項 初に對 し東に伐つて出 より あげて東に歸るを望み居れば、この機會を逸せず、其 75 らんとを思へり、時に韓信は漢王に説いて曰く、項 ざる可からざるを以てなり、かくて都と定めたる南 の兵卒にて己れを慕ひて從ふ者數萬人を率る、 萬人をして漢王に從は しめたり、漢王は楚人と諸侯【講義】 漢王は己れ の國に 行きける 「項王は卒三 るなり、且つ軍吏士卒は皆山 h なり、且つ軍吏士卒は皆山東の人にて、日夜踵を南鄭の邊鄙に居るは、是れ罪人と等しく遷され 将の功有る 者を善地に王とし、而して大王のみ 蝕中に入り、去つて棧道を燒き棚ひ、以て諸侯の 杜育

封。遼 爲。吳 或 皮。 派 芮, 廣 安 爲 都 衡 聽、 薊、故 陳 臨 十萬戶、四月、兵 臧 都也 茶攻 王、都江 河 燕 料、燕 王 間 韓 之, 縣 廣 將 戲 終。王、茶,君

天下の約に後れて先づ關中に入ること能はざりしをも己れをして沛公と共に西の方嗣に入らしむることをして關中に王たら しめよと、項羽は懷 王が初めよをして關中に王たら しめよと、項羽は懷 王が初めよ 「議義」 項羽は人をして秦を滅したる巓末を懷王に「講義」 項羽は人をして秦を滅したる巓末を懷王に

吳芮を衝山王と為して 料に都せしめ、燕の 王とし、趙の相張耳を常山王と為して襄國に都せし 殷王と為して朝歌に都せしむ、又趙歌 を封じたり、即ち章邯を雍王と為して廢丘に都せし 南鄭に都せしめ、而して關中を三分し、秦の降將三 せて九郡の王と為り彭城に都せり、且つ約に負き 斷じて我等を指揮命合する資格なき者なり、由來天 て我が主となり天下の約を主ることを得んや、彼は所に係り、致て攻伐の功ある者にあらず、故に何を以 の柱國共敖を臨江王と為して江陵に め、當陽君黥布を九江王と爲して六に都せしめ、懷王 を河南王と爲して洛陽に都せしめ、趙の將司馬 王と爲して高奴に めて流公を立て、漢王と為し、巴蜀漢中に 下を定めたるものは諸將軍と籍となり、懐王の め、司馬欣を塞王と爲して標陽に都せしめ、董翳 至り、項羽は自立して西楚の霸王と爲り、梁楚の し、而して質は其命令を用ひざりけり、かくて正 せし所にあらずと、乃ち懐王を伴り奪んで義帝 怨み、乃ち曰く、懷王なる者は我が家の項梁が立てし 都せしめたり、楚の將瑕丘 都せしめ、 を徙して代に 王とし 將臧茶を 公公 ili 月に 關知 3 印を 地併 更 為 翟

屠り焼き、通過する所に 項 を誅せり、かくて項羽 することを得たり、而して歸るや否や立ろに曹無傷 沛公は樊噲と なりと雖何を以てかく怒るとを為さ 0) 12 力に 左司馬曹無傷が言によるなり、然らざれば せしかば、秦人は大に失望せり、然れども皆項 何せんと欲 伯のこの斡旋に會ひ、沛公を進撃 を謝せり、項 恐れ、一人として敢て其の命に服せざる 張良との庇護を以て漸く我が軍に歸還 し、走せて鴻門に行き、項 方沛公は 羽日く、事此 は關中に入りて 咸陽の宮殿を てあらゆ 親ら下除騎を從 に至れるは、こ る暴虐と亂暴 んやと、かく 初に 見え T n 項 初の を恋

、之を撃つは不義なりとあるをいふ、以 破らざれば公、豊敢て入らん 使. 以文渝項羽、項羽本紀に、項伯曰 怨。人? 還, 羽本紀鴻門の 報。 不懷 會の 令"懷 條に ふ、以樊噲張い あり、明明 與王 沛 良、功 公如 故・あ

河翟司立。王、都、立、義 下,非、乃,俱 秦巴彭為。帝諸 王、馬 有。日,西 城。西實。將 都,王、都、欣,三 蜀 功懷 都。高"為,將,漢 負* 楚,不 及。伐 歌洛奴塞章 中約霸用。籍何,者 王, 邯, 都, 更, 王, 其 也,以,吾,北省 将,都。爲。南'立,王,命,乃,得。家,救。 伴,主,項 櫟 鄭沛梁正 雍 將,瑕 尊。約,梁 徙。司丘、陽、王、三公、楚、月、 王,馬申 都。分。為。地項 懷本所 代。卬,陽,翳,廢" 關漢九羽王,定立下, 趙為為為是中,王郡自為天耳約

議せしなり、而して 亞父范増も 亦項王に沛公を 傷は、 に往きて張良に見えて善後の策を講じ、且つ 張良必ず戰死するとを知り、之を活さんと欲し ると明なり、此の時項伯は沛公收戰 は兵數に於て項羽に劣り居りし故、一戰 し、互に虚勢を張りて敵を威嚇せんとせり、然 りと號し、沛公の兵は十萬なりしが、亦二十萬 り、此時項羽の兵は正味四十 て其士氣を鼓 指揮して沛公を討たんと決心し、直に士卒を饗應 べきとを割 と爲さんとする考へなりと告げしめたり、これ曹無 子嬰を宰相となし、あらゆる珍寶を悉く己れの所 王怒つて沛公を 攻めんとす と聞き、人をして項羽 て文を以て項羽を諭して其怒をなだめたり、項羽は 言はしめて曰く、沛公は關中の地に王と爲り、秦王 黥布等をして 進んで 、項別に頼りて封邑を求めんと欲し、かく沛公を を平定せ 戲に至れり、是の時沛公の左司馬曹無傷、項 めたり、されば項羽はいよく親ら兵を 舞し、明 攻めて函谷關を破らしめ、十二月中 しことを閉 朝黎明を期して合戦せん 萬人なりしが、百萬人な きて大に怒り、直 せば其親友な せば以類 人と號 撃つ 沛公 ち 0

观公良不百日亞嬰言無二大入 項從因,敵、萬、合父爲,項傷月怒。關 羽,百以,會,沛戰,勸相羽間,中使關 日,餘文,項公,是項珍日,項逐黥 此騎,識。伯兵時羽寶沛王至。布閉 驅,項欲。十項擊。盡。公怒。戲。等。聞。 公、之。羽,活。萬羽,沛"有。欲、欲、沛攻沛 左鴻頂張號兵公,之,王改公、破公 司門羽良,二四方欲關沛左函 見。乃。夜十十變。以。中。公。司谷 曹謝、止、往、萬、萬士、求、令、使、馬關、關 項沛見力號。旦封,子人,曹十中,

へしく、若し秦の政治の事を誹謗する時は、三族を誅 く、父老等は秦の苛酷 なる法律政治に 苦しみしこと は講義】 がくて沛公は諸縣の父老と豪傑を召して曰

日く、我が軍は食ふ栗米多く有りて乏しからざれば、 きを争うて牛羊及び酒食の類を持ちて沛公の軍をも 條を告諭せしめたり、是に於工秦の民大に喜び、皆先て秦の役人と共に遍く 諸縣の鄕邑 に至り、叙上の箇 て秦の役人と共に逼く 諸縣の郷邑 に至り、叙上の箇公かくの 如くして秦の父 老を慰め、一面には人をし く業務に從事すべし、凡を吾が來る所以は、汝等父老 除去すべし、故に汝諸の役人等は、皆安心して故 にこの三條のみを制定し、其他總べての秦の法律 け、又は人の家財を盗む者は罪に當つべし、我は唯 なるぞ、即ち人を殺す者は死刑に處すべし、人を 汝父老等と約束すべし、我が法律は僅かに三條 をれば、我は當さに此の關中に王となるべし、依 戮せられ、經書を相對して話す時は、**奔死**の てなしたり、されど沛公は謙譲して之を受けずして つ我還りて霸上に軍する所以は、諸侯の至るを待ち 侵 0) 今諸侯と先づ關中に入る者は之に王たらんと約束し らるゝなど、虐政に泣きしと久しかりき、而して て約束を履行し、關中に王とならんが為めなりと、沛 為めに害を除くものにて、父老の家財を聞暴にも 掠むるにあらざれば、決して恐るゝこと勿れ、且 刑に 0) T 傷 今 如

哈張良諫、乃封、秦重寶財物府 吏、遂西入、咸陽、欲、止、宮休舍、樊

良共に沛公を諫めしかば、沛公乃ち其の諫を容れ、秦 て日 といふ者ありたれども、沛公は之れに耳を貸さずし 傍に於て降れり、されば諸將は直ちに之を誅戮せん 封じて天子の位を去りしことを示 を以て數ふるもの り、以て休息せんと欲せり、これ蓋し秦の財寶婦 遂に西の方咸陽に り、頸に組をかけて以て自殺せんと欲するの意を示 し、皇帝の印璽と、わりふと使者の信を表する節とを て霸上に至れり、是に於て秦王子嬰は素車白馬 て衆議を容るべきを以てせられたり、且つ人既に く、初め懐王我を選んで遣さるゝや、能く寛大に るに係らず之を教すは不祥なりとて、乃ち秦王 更に委し之を監視せしめて、親ら兵を引いて 漢の元年十月、沛公は兵を率あ、諸侯に先ち 入りたり、而して秦の宮殿中に止 あるが為めなり、是に し、以て朝道亭の 於て樊噌張 女千 に乗

霸上に軍せり、の重寶財物の府庫を 封じて一切手に觸れず、還りて

【字解】 王子嬰、二世の兄の子なり、素車白馬、素車は何の飾も無き車なり、白馬は白毛の馬也、二者共には何の飾も無き車なり、白馬は白毛の馬也、二者共には何の飾も無き車なり、白馬は白毛の馬也、二者共に良の時に用ふ、今子嬰は降参の折なれば、喪に擬して之を用ひしなり、組、禮記 内則の注疏に、薄く廣きを之を作り、上下相重 ぬるものなり、象を竹節に取る、故を作り、上下相重 ぬるものなり、象を竹節に取る、故を作り、上下相重 ぬるものなり、象を竹節に取る、故を作り、上下相重 ぬるものなり、象を竹節に取る、故を作り、上下相重 ぬるものなり、象を竹節に取る、故を作り、上下相重 ぬるものなり、象を竹節に取る、故を作り、上下相重 ぬるものなり、楽を竹節に取る、故が為めなり、樊噲張良諫、この事 留侯 世家に 見え たが為めなり、樊噲張良諫、この事 留侯 世家に 見え たが為めなり、樊噲張良諫、この事 留侯 世家に 見え た

市、吾與諸侯、約、先入、關者王之、

市、吾與諸侯、約、先入、關者王之、

市、吾與諸縣父老豪傑、日、父老苦秦

大破之、乘勝遂破之、

敵をして我れに多くの兵ある 如く疑はしめ、以て其 き、因つて不意に武關を攻めて之を破り、又秦軍と藍 計を用ひ、酈食其及び陸賈をして往いて秦將に説 たり、然るに秦の相趙高既に二世を殺して權を擅 ら代はりて上將軍となるに及び、諸將軍黥布等皆項 宋義と北の方趙を救ひたりしが、項羽宋義を殺し自 將章邯は旣に軍を以て項羽に趙に下れり、初め項 【講義】 するに及び、人をして 特に 沛公の せしめたりしが、此使者未だ歸來せざるに先だち、秦 襲を防 に属したり、而して項羽更に秦の將王離を鉅鹿に の家財を掠奪せし の南に交戰せり、此の戰、沛公は益。旗幟を林立し、 て關中を分ちて共に王たらんことを以てせり、さ め、啗はすに利を以てし、先づ其心を動かさしめ置 沛公は之を以て許と為して應ぜず、乃ち張良の 、又章即を降すに及び、諸將皆悉く項羽に附從 沛公は魏人審昌といへる者を遣りて秦に使 ぎたり、沛公は めず、又人民を虜とすること勿 又諸兵の過ぐ る所は毫も人 軍に來らしめ、約

て大勝を薄したり、で大に之を破り、勝に乗じて追撃し、遂に之を撃破して大に之を破り、勝に乗じて追撃し、遂に之を撃破し、かくて沛公は藍田にある秦兵の氣力解け怠りたるにからしめしかば、秦人は痛く沛公の仁惠を喜びたり、

ふ、千戸、千の戸敷のある邑、

を主る小更なり、乗、登るなり、城に上りて守るをいった。通称なりしが、後に司屬の官名となれり、陳恢、廐内る頃をいふ、舍人、元は寵を得て常に左右に待る者の「民【字解】 更、改むること、黎明、黎は頃なり、天明に至 | 又

意,兵又秦乃。來,侯皆殺。初,時 旗 與 用。欲。皆 宋項 將 屬、 咯張 約、附、破、義。羽 邯 幟,秦 諸, 軍 以。良 分。及。秦 代。與 戰利,計,王,趙於因,使關高 爲宋 以,昌弘 將 所 大過於 義 軍,使。 E 降秦 中。已。離。將 北 沛殺軍軍,叛項公二降。諸趙,羽 降語 趙,羽。者 將 |刻 = 關,買求以,世,章 益 及於未 張破往為使那黥 項趙來 疑之。說。許人意諸布羽

ば、沛公は即夜兵を引いて他の道より、還り、旗さしり、されば夙く宛を攻めて之を下すべしと勸めけれれが軍を挟撃ちにせん、これ誠に危き道に居る者な下さざる時は、秦兵は前より、宛の軍は後より、共に下さざる時は、秦兵は前より、宛の軍は後より、共に下さざる時は、秦兵は前より、宛の軍は後より、共に下さざる時は、秦兵は前より、宛の軍は後より、共に下さざる時は、秦兵は前より、宛の軍は後より、武良と議義】 沛公は宛を攻めず、兵を引いて西せり、張良【講義】 沛公は宛を攻めず、兵を引いて西せり、張良

とすれば後には强き宛の軍控へ居るとなれば、足下

めば、足下の兵士死傷する者必ず多からん、さればと 思ひ、由りて城に上りて必死に守り居れり、然るに足 あり、其の上人民は衆く、積み貯へたる粟米は多し、 其地に王たらん そを約束すと 聞けり、今足下留りて 係はらず第一に咸陽に入る能はざる次第なれば、足 下前には旣に多くの日數を費して宛を攻めたるにもず是下の後に隨ふべし(後より追撃する意 惟ふに足 て宛の全く下らざる時兵を引きて去れば宛の軍は 下毎日々々ある限りの日を盡して踏み止りて之を攻 也)宛は大郡の都にて、是より郡中に連り、大城數十 宛を守れり、(實は攻むるなれども鮮合上かくいへる 知り、自ら到ねて死せんとしけるを、含人の陳恢と り、こうに於て南陽の太守は迎も守ると能 もの く、臣は足下が懷王と先 づ秦都咸陽に 攻め入る者は れよとて、乃ち城壁を踰え、沛公の警所に行きて へる者急に之を止めて曰く、死するは早し、啊く して役人や人民は自ら降るときは必ず殺されんと を更め、天明に至るころ、宛城を三重に 遂に懐王との約束は反古になるべく、又歸ら 取 はざるを b 圍 必 8)

入關、而、

兵張

尚*良

衆,諫,

距,日, 險。沛 南陽郡の太守齮は走りて城を保ち、且つ宛の大城を に、沛公の 戰うて之を破り、南陽郡を攻め 渡場を絶ち切りて南し、これと浴陽の東に 、軍中一騎兵を收めて、南陽郡の太守齮と犨縣の ば、沛公は北して之を平陰縣に 阻なる要地 軍利あらざりき、依りて還りて陽城に 馬印は將 に河を渡りて め取 取れり、こゝに於 攻め 關に入らんと

はどし兩足を差し延ばすをいふ、長揖、兩手を組み合に坐し兩足を差し延ばすをいふ、長揖、兩手を組み合に坐し兩足を差し延ばすをいふ、長揖、兩手を組み合に坐し兩足を差し延ばすをいふ、長揖、兩手を組み合に坐し兩足を差し延ばすをいふ、長揖、兩手を組み合 雖、欲、急、 公引、兵、 監門、門番なり、踞床、寝 臺の如きものゝ上

必,城人也、之。日,恢多,今自,連今臣日、引,足以城足聞,死 從,此。今 下多,今前引,足 日, 匝 他, 危 南 則兵,下爲,數下足未陽。還,也,宛,失去。盡,降,十留,下晚,守更於,宛 宛,日,必、人守、約、也、欲、旗 宛,先,乃,自 宛 止,死、民 뺂, 計。之必、攻、故衆、宛、入、踰、剄、黎、莫、約、隨、士、皆積大成城、其明 莫, 約, 隨。士, 皆 若後足死 堅 蓄 郡 陽見,合 圍。夜 者沛人 下,傷 守。多。之 引,在, 降,有,後者乘,吏都王公陳 城,兵,前。

戰,陽河渡,轅,潁 祭 又 封,酈 走,犨,城。津,河,當,陽,陽。戰,未。商,積保東收。南,入,是,屠。二曲拔,爲。粟城,破軍戰,關。時。之,世遇。西將、乃 中,雒;沛 趙、因,使東與 張使大泰 陳 陽、公 别 南 良。者。破"將 騎,東.乃,將 軍 逐 斬, 之, 楊 與 北司 兵,其, 略。以,楊 南 收馬 陽,利,平,印韓徇、熊守還,陰,方,地,南走 戰 走。白

へる者あり、門番に謂つていへるやう、諸將此の 保城,破事中 沛公は西して高陽を過ぎける時配食其とい 宛, 略, 馬 地を 至絕。欲、轘攻、之,馬。開 南

者を 過ぐ ひ、又曲遇里の東に戰ひて大に之を破れり、楊熊は 楊熊攻め來りければ、更らに西して之と白馬城 公は 案内せり、よりて食其は沛公に説く所ありければ、沛 をつくろひ、偏にさきの無禮 あるべからずと戒めければ、沛公は急に立ちて衣服 らず、されば雨足を延べながら長者を見るが如きと 必ず無道の秦を誅せんと欲せば、傲慢無禮なる可か こま ながら食其に面會したり とか りて滎陽 其弟酈商を將軍 を得たり、そこで沛公は酈食其を以て廣野君となし、 開封縣 0) H 遣り、斬りて以て軍 其説を容れ、陳留を襲ひ、秦にて積み貯へたる栗 方顧陽を攻めて 求めしに許されたり、此時沛公 ぬきて揖禮をなしゝまゝにていへるやう、足下 て兩足 るに大人長者なりと、 にゆけり、よりて二世は敗軍の罪を責め、 を攻めたりしが、開封未だ抜けざるに、秦將 を延ばし、二 と爲し、陳留の兵を奉るて共にとも 之を屠り、張良の 、食其は禮拜せず、只兩手を 人の侍女をして足を洗は 庸の に徇へしめたり、沛公は 乃ち沛公に見えて説か を割 人のみなり、吾今沛 して食其を上 は床上に腰うち 言を用ひて遂 使 せ

造り、西して秦の地を攻略せしめたり、沛公旣に西地されば、之を大將として遺はすべしと論じければ、こらず、獨り沛公は心寬く量大にして、特に惠み深き人らず、獨り沛公は心寬く量大にして、特に惠み深き人らず、獨り沛公は心寬く量大にして、特に惠み深き人方が、獨り沛公は心寬く量大にして、特に惠み深き人大將と為し、征討するも毫も人民を侵し暴虐を施す大將と為し、征討するも毫も人民を侵し暴虐を施す

に派遣せらる、是に於て 故の陳王及び 項梁の部下

合せ、共に昌邑を攻めたりしが、未だ之を拔くこと能の兵と爲し、且つ魏の將皇欣、魏の司徒武蒲が軍とを軍に遭遇せしかば、その兵四千人許 りを奪ひ て麾下可いて西に轉じけるに、圖らず將軍彭越に 昌 邑縣に可に會ひたり、因て彭越と共に秦軍を攻めしも、戰亦可兵と爲し、且つ魏の 二軍を破 れり、因て沛公は兵を里の二縣に攻め入れり、秦の軍壁を挟んで之を防ぎ、兵にして四散せる 者を收容し、先づ 碭郡より成陽杠兵にして四散せる 者を收容し、先づ 碭郡より成陽杠

は勇なり、雷霆の如くすばやくして荒きをいふ、滑は【字解】 奮、憤激するなり、傈悍滑賊、傈は疾なり、悍

能なり、賊なり、殘忍なるをいふ、無遺類、一族殘す所 と称せり、扶義、仁義を保有する事、今不可遺今の字と称せり、扶義、仁義を保有する事、今不可遺今の字と称せり、扶義、仁義を保有する事、今不可遺今の字と称せり、扶義、仁義を保有する事、今不可遺今の字と称せり、扶義、仁義を保有する事、今不可遺今の字と称せり、既なり、殘忍なるをいふ、無遺類、一族殘す所能なり、賊なり、殘忍なるをいふ、無遺類、一族殘す所能なり、賊なり、殘忍なるをいふ、無遺類、一族殘す所能は官の名、兵を掌る、

侯、攻、公軍、成地、遣、不毋、兄者、前。 奪。秦,引,楚。陽、收,卒。可,侵苦、扶,陳 軍,兵,軍・與、陳不,遣、暴、其義,王 許,獨,宜,主。而,項 西。出• 杠 王 不利、湿 項沛 遇,兵•里 項 可。久。西。梁 撃·秦 王·軍 梁, 羽. 公. 下, 矣 彭 四 散而、素、今 越 誠。秦 離•夾。卒,遣,寬項 餘 人栗邑大•壁,乃,沛大,羽并,遇,因,破•破,道,公,長原 得,父 之,,则與之·魏、陽西,者,任,有,不至 軍之,則與之·魏、陽西,者,任,有,不至 其之,則與之·魏、陽西,者,任,有,不至 其。與武俱。沛二至。略,可,今·往,父長 兄,更

攻。昌邑、昌邑未拔、

諸の は率先して關に攻め入る事を望む者無かりき、獨り 兵の逃ぐるを追撃し、其の勢ひ猛烈なりければ、諸將時に當りて秦の兵殊の外强く、常に勝に乗じ、諸侯の ず、故に此度は惠深き人を遣り、仁義を扶持 攻めし時、すべての人民を一族殘らず院殺せり、 願へり、此の時懐王の諸老將皆日 憤然として沛公と共に西の方關に攻め入らんことを する者は長く其地に王たらしむべしといへり、是の 沛公をして西の方地を攻略して函谷關に入らし に陳王項梁皆為に敗 なし、且つ楚は屢、進んで地を攻 暴虐に苦しむこと 久しければ、今惠み 深き人を得 し、秦の父兄に怨論するに如かず、秦の 初め懷王諸将と約し、先づ關中に入りて秦を平定 霆の如く、傈悍にして且つ殘忍なり、管て襄城 のみは秦が項梁 過ぐる所は、皆殘滅せざる 懷王 は項羽等をして北の方趙 の軍を破り 死せり、再び前 轍を踏むべか なく、毫も仁義の く、項羽の人と為 たるを遺恨と為し、 め取るを事とし、 父兄其 を救は 他

秦の二世

三年に、楚の

懐王

項

梁の軍

大敗

ふ所の河北の軍なり、との時に當りて、趙は趙 歇立ちで王と為り居たりした渡りて北の方趙の國を撃ちて大に 之を破りたり、を渡りて北の方趙の國を撃ちて大に 之を破りたり、最早楚の地の兵は憂 ふるに足らず と為し、乃ち黃河

為、懷徒、爲、封、羽、破、次王共長爲、軍、恐、 徒為封羽、破秦 將, 乃, 父 安 走 自。徒』世 范以,呂侯、安將,盱三增,宋青,號、侯、之、台、年、 爲。義,爲。爲。將,以,都,楚, 末為令 魯 懷 彭 碭浦 將,上尹,公,郡,公,城。王 北將趙呂兵為并見 教。軍數臣,封。陽呂項 趙,頂請,爲,項郡,臣 梁, 羽,救,司羽,長,項軍

じ、碭郡の兵に將たらしめたり、又項羽を長安侯に 王即ち宋義を以て上將軍と為し、項羽を次將と為し、 を合尹と為せり、此の時趙王屢、救を請ひしかば、懐 じ、號して魯公と為し、呂臣を司徒と為し、其父呂 臣と項羽との軍を併 、而して沛公を以て陽郡の長と為し、武安侯 を見て大に 恐れ 殘城人、入、怨、逐、者、地、飞 町台より 滅無原關素北江入,且,遺悍懷破,諸之關。楚類猾王,項幣當,與 朝となし、自ら之に將 徒り 城

不聽、秦益。章 那兵夜衛枚擊項項梁再破秦軍、有馬色、宋義諫 沛公は項羽と共に西の方地を攻略して雍丘縣下に至 亦守り固くして未だ俄に下すこと能はざりき、依て 城に環繞して敵の るが、此の時秦軍は黄河の水を引いて溝を襲ち、之を 後秦軍は敗卒を收めて復び軍を整へ、濮陽を守りた 軍 を東阿縣に救ひ、大に秦軍を破れり、此の時齊王は り、秦軍と戦うて大に之を破り、秦將李由を斬り、還 月 て楚王と爲し、盱台に治して此處を都と爲し、項梁自 と聞き、因て楚の懷王の孫 を攻めしめければ、二人は攻めて之を屠り、進で濮 を追撃せり、項梁は 率のて齊に歸りしが、楚の軍のみ獨り敗走せる秦 の後、兵を引いて北の方元父を攻め、且つ齊王田榮 武信君と號せり、さて項梁は盱台に居ること數 の東に陣し、再び秦軍と戰うて之を破りたり、其 て楚の軍去つて定 陶縣を攻めた りしが、定陶も 進入を防ぎ以て守を固うせり、是 又沛公と項羽とをして別に城 名は 心といへる者を立

之是足,已項鉅之憂,破,羽 足,已項與憂,破,羽、呂 せり、時に沛公は項羽と共に、外黄を去りて陳留を 大に之を定陶に破りたり、此の役武信君項梁は戰死 章邯の兵を増し、夜枚を街んで不意に頂梁を襲撃し、 故、宋義之を諫めしも聽く氣色なかりき、かくて秦は 【講義】 項梁再び秦の軍を破つて驕慢の色ありける め居たりしが、項梁の死せしことを聞き、兵を引いて 項 は彭城の西に陣し、而して沛公は陽に軍せり、さて 将軍臣と共に東に退き、呂臣は彭城の東に軍し、項 項 軍。將 渡、梁、彭 河,軍,城, 爲北 所謂 則,西= 東。 王、擊,以秦, 麓, 爲 तेर्व 趙,爲,公. 河北之軍也 大. 楚, 軍、軍、梁, 死、 將 王破地。豫章 彭 城,引,公 東 兵,與

長を引いて碭を攻め、三日にして碭を取れり、因つて兵を引いて碭を攻め、三日にして碭を取れり、因つて長を引いて碭を攻め、三日にして碭を取れり、因つて上を放き、更らに軍を豐に還して雍齒と對陣せり、とあり從ふべし、審君は傳詳ならず、秦嘉は項羽本紀とあり、從東、東より追討するをいふ、

台,立,盡,梁_將 項 聞, 父,項 楚,召,月十梁 項 後 盆、梁 別餘 人, 在 薛 從 東號、懷 將,項 沛 沛 阿,武 王居观公 破。信孫薛已還,卒 秦君、心,聞。拔。引。五 軍,居為陳襄兵,千百齊,數楚王城,攻人餘, 軍月王、定還豐五往 歸、北,治、死、項從、大見、楚攻,肝,因,梁項夫之,

者莊賈の爲めに殺され、其死は紛ふ方なく 拔き、還りて之を項梁に報じたり、此の時項梁 率め、還りて再び豐を攻めたり、沛公はかくして 之に與へ、其軍勢を增益せり、因て沛公は此等の兵 卒五千人と、七大夫の筒を有する者十人を將とし へて往いて項梁に見えたり、是に於て項梁は、沛公に 將を召して薛城に居れり、時恰も陳 從ふこと月餘に及べり、而して 項羽は既に Ŧ. 陳沙 確 定 は 菰 划战 項 训

是時秦將章邯從陳別將司馬尼,將兵北定,楚地,屬明,至一人,攻下邑,拔之,薨。明,兵攻陽三人,攻下邑,拔之,薨。明,兵攻陽三人,攻下邑,拔之、還,軍豐、 景駒を立てゝ假王と為し、留縣に在りと聞き、乃ち往 河公とは、兵を引きて西し、司馬尼と蕭の西に戰ひて に沛公の軍を攻めんとせり、是に於て東陽の審君と 又別將司馬尼をして 兵を引きて北し、楚の地を定め 是の時秦の將章邯は陳王を破 きて之に從ひ、兵を請うて以て豐を攻めんと欲せり、 に應じたることを怨み、東陽の審君及び秦嘉の二人、 是, 在。留、乃往從之、欲請兵以 【講義】 沛公は雍齒と豐の子弟とが己れに叛きて魏 めたり、よりて司馬尼は 將章邯、從一陳 相を屠り り勢に乗じて追討し、 て陽に至り、將 攻。豐、

日に及びたり、沛公は出でて共に戦つて之を破り、部 公が豐に據れりと聞き、兵を率ゐて豐を圍むこと二 為王、項氏起。吳、 西至戲而還、燕·趙·齊·魏、皆自 秦二世二年、陳涉之將周章 章 立。軍

邯に破られて 歸還せり、此の歲陳涉 の將武臣といふの軍は、西の方戲といふ川迄攻め入りしが、秦の將章 者自立して趙王と爲り、韓廣自立して燕王と爲り、田 客の二世皇帝の二年、陳沙が麾下の將周章を外二世皇帝の二年、陳沙が麾下の將周章

【字解】 監、守の配下にて郡を監するを掌る者なり、馬某之を追撃し、遂に壯を捕へて之を殺したり、 兵を引いて薛に行きたり、泗川の 守將名は 肚といふ 將名は雍齒といふ 者、沛公に薛に破られ走りて戚に至れり、沛公の左司 命じて豐 を守らしめ、自ら は

未,軍。 父 使。方

沛。引,及。下,齒梁略。攻•沛 兵,魏且,今徙地,方•公改,据,屠,下,也周,等、遗,之,豐,魏,今市未,军, 不即,雅魏魏,使;戰、亢 能反。齒以,地人。陳 取為雅齒,已謂、王沛魏不爲。定雅使 公守、欲、侯、者 齒、魏 與 馬、 選、沛 市 豐、 局 市 。 之,公 公 不,城 故 市,來

沛公は薛より還りて元父に軍し方與 至

n

諸、の 捧げたり、これ黄帝 を祈り、性を殺 爲し、廟を立て る者なし、是に於て衆 りて承諾せず、而し こと勿れと、ともくに請ひけり、 等介の適任者を卜筮に問ひしに最も吉祥なる者は劉 兆ありと、故に將來必ず尊貴の人と爲るべし、且つ吾 によれば、劉季は種々不可思議の く誅滅されんことを恐れ、ことごとく劉季に譲れり、 が身の安全をの 3 者は赤帝の子なるの せり、これ曾で殺したる大蛇は白帝の子にして、殺す 季にして、何人も之に及ぶもの無し、劉季敢て辭する さて既に主領たる今も定りたることなれば、是に しと、 父兄も亦皆劉季に請うで曰く、 せし事成就 は五兵を好み始 りて福祥を求 るに蕭何 >黄帝を祠り、蚩尤を庭に祭りて して其血を取り、之を鼓 み圖 せざる時は、秦爲めに一類 て衆も亦敢て は阪泉に 故 る方なれば、若し合と為りて己 ・曹参等は皆文官にして自 强ひて 劉季 事によ めしなり、又旗幟は皆赤と bh 戦ひて天下を定 て武器を作 りて、赤を貴びた 然かも 珍らしき瑞 今と為らんと欲す を立てゝ沛の今と 然かも劉季屢、讓 吾等平生聞く所 に塗りて りた る者な め 族悉 るな ら我 12 福 3

於て少年にて才能優れ 攻めて之を取り、還りて豐縣を守れり、 千人を得、之を收めて きは、皆沛公の爲めに計り、縣内の子弟を招集し 一隊と為し、胡陵方輿の たる役 人蕭何·曹叁。樊 噌の てニ 縣を 如

懶は 住し 字解 故に 羊豕を殺し、其血を以て鼓に塗るを費といふ、旗骸 黄帝の時の人、五兵を好み、始め て武器を造 天下を統一 も家屋も升車も 武器 て同種族 意なり、黄帝、黄帝は數多の漢人種を率わて支那に移 薄は薄劣なり、種族、種は類なり、一種一類、残らずの をして地に塗れしむるを に就きて自ら安するなり、塗地、一朝戦に敗れて肝腦 尊ぶことなり、 人なるを以て、之を祠 んで逃亡せるものをいふ、保劉李、保は安なり、 之を祭りて福 たる第一の酋長なり、彼は幾多の部落を征服 旗じるしなり、 諸亡在外者、秦の虐政、賦役の煩多なるに苦 の安全を保ち、領地を擴張したり、其他文字 し、漢人種に を祈るなり、愛鼓、愛は祭なり、牛 上赤、上は貴なり尊なり、赤色を も各創造し、遂に阪泉に戦ひ りて福 ありては第 いふ、能薄、能は才能なり を求めたるなり、蚩尤、 たるべき りたり、

思ひ、乃ち樊噲を遣りて先づ劉季を召ばしめたり、此 命も亦安全なるべしと説きけるに、沛の今も尤もと 五百人を擁し、その强大を以て沛中の子弟を脅威 集めよ、必ず四五百人は得らるべし、而し 逃亡せるもの甚だ多し、願くは君先づ此の輩 命をきかざるべし、由來我が沛には秦の虐政に苦み、 を執れり、是に於て劉 劉季に從ひて沛に來りたるに縣令は蕭曹の言に從ひ 時劉季は既に數百人の部下あ ば、衆敢て君の命に服從せざる者無く、併せて君 五百人を得ば、君の勢力强大となる、かくて君此 垣を越えて逃 何・曹参等を誅せんと欲せしかば、蕭曹は恐れ 、或は變事の内より起り反つ の子弟を率 に君が秦の為にするならんと恐れ、敢て君の し、劉季が く、君は秦の役人でありながら、今之に叛 を司れる曹参と主吏の 門を閉 れ出で、身を劉季に寄せて自安の ゐて陳沙に應ぜん ち固く守りて劉季を入れず、剩 季は帛に文を書いて之を矢に かく多数の りたり、かくて樊噲は て殺され 部 蕭何とは と欲 下を率る て君郎 するも んことを 、共に令 ーを呼び て水 て城 の生 に四 0) 四 3 せ 付け を愛 堪へざる人ならば、一朝變事の起りし際、別機宜 8 子弟を完全に保護 を失して大敗を招き、父老子弟をし まざるべからず、今大將を置 起る時なれば、一縣たりとも大將を置くには之 せり、劉季辭して曰く、今や天下方に聞れ、音侯並び を迎へたり、而して劉 子弟を率るて共に市の今を殺し、城門を開きて劉季 と無しに終るべしと喩しければ、父老は共言に從ひ 守するときは、父子ともく、屠り殺され、何も為すこ 侯に應ぜば、則ち家室完かるべし、若し然らずして固 にて合と爲るべき者を選んで之を合と爲し、以て諸 必ず沛を屠るべ の命の為 下秦の虐政に苦しむ こと久し、されば今 父老等は沛 の惨事に遭遇 のにあらず、願くは更に相推薦して適任者を選ば 此の事た して解するにあらず、自ら才能薄劣にして、父兄 に向け めに城 るや せし て射、沛の父老に告げて日 し、よりて今共に合と談し、子弟 を守らること雖も、諸侯並び起 すること能はざるを知ればなり 頗る大事 むるに至るべし、我れ敢て自ら身 季を推して沛の命と為せんと

くも

不幸にして共任に

をい

て肝腦地

澄る

たるを後悔

、俄に城

0)

沛縣

0 獄

く、今や天

9

しして、軽々に為すべ

3

りき、是に 講 陵皆於蛇沛立。吉、佐、父 と共に兵を斬 方為是白庭季,於當老 と號したり 自ら沛中の民 與,收,少帝,而,為是貴,皆 還,沛、年、子。黨、沛劉且、日、 に起 虐 政 守。子豪毅。鼓公季卜平 13 郡 に秦の二世 豐,弟吏者。旗祠,數、筮、生 ば沛 縣 0) 如,赤 幟 黃 讓,之,所 民は 縣の 蕭帝,皆帝,衆莫;聞, で自を 皇帝 皆多 千 曹子,赤祭、莫、如、劉 長ひ、陳勝は 應ぜんとせり、時 多く其長東を殺し 多く其長東を殺し 人, 樊 故 由。 蚩。 敢, 劉 季。 攻, 噲上, 所, 尤, 為, 季, 諸, 國 吳 胡等,赤,殺、於乃,最。珍 廣

、雲氣、顔師古の説

に四方常に大雲あり、五色具は

厭、壓なり、鎮なり、威を以て壓し

鏡むるな

み、 氣 心に喜び、前途を祝福したり、沛中の子弟等も此の雲 ば、常に遇ふことを得るなりと、高祖之を聞きて獨り に、呂后答へていへるやう、季の居る上には常に五色 の雲棚引き合へり、故に其の雲を便りとして尋ねれ 祖を搜索し、常に之をさがし當てたり、高祖之を怪 間に隱れたり、而して呂后は此の場合人とともに高 疑ひ、逃亡して芒碭二縣の界なる山澤に在る巖石の 瑞兆を得て自負し居る折柄なれば、此の始皇の出馬 に從はんと欲する者頗る多かりき、 を聞きて心安んぜず、自ら災禍の身に及ばんことを 子の瑞氣あり、これ我家の不祥なりと、因て東に游幸 の話を傳聞して高祖 威を以て之を鎮壓せんとせり、當時高祖は種々の 、如何にして我が居處を知り得たるやと尋ねける 子 故。 秦の始皇帝常に日く、東南の 弟、或、 從。 (或聞之、多、欲、附者矣、 の偉人なることを知り、高祖 角に當りて天

弟, 日, 以, 殺, 陳, 秦, 恐, 君 沛, 其 而, 二 季已聽,可。 を望 城, 來, 城 數 得 んで之を得たりとあり、 王,世、號、元 不為無 沛, 數 長 應。 令。 吏, 涉 樊 元年 百 百 願。吏 掾 以,爲、 後 人,哈,人, 秋、陳 矣、 今 應式 張 召,因, 君 主 切。召、欲、隶、諸背。 陳 恐、於, 共, 是. 劉 楚、 吏 涉流冷 勝等 諸 蕭 劉 有,樊 何·曹 郡 起,斯、至, 季 縣 参、 乃,從。之 恐 衆 不者,子乃,欲。多, 城,閉影劉

て雨ふらず、其下に賢人の隱るゝあり、故に呂后雲氣

數里にして醉ひ來って 倒れ臥したり、少し遅れて後 斬り殺せり、かくて徑 之を聽かず、壯士た 宜しけれと述べければ、高祖 えずなりぬ、後れたる人、暫くして高祖の處に至りし 老嫗なりと為し、之を答たんとしたるに、嫗は忽ち見 故に悲しむなりと答へたり、其人馬鹿なことをいふ 横りて居りしが、今赤帝の子が通り之を斬り殺せり、 と答へたり、よりて又何故に殺されたるやと尋ねた に、老嫗は或人我が子を 殺したるに よりて悲むなり に、一人の老編ありて夜中も憚らず聲を擧げて悲み より來りし人、彼の あらんとて、親ら進み行きて剣を抜き、撃ちて大蛇を り喜びて自負したり、是より 遇ひし事柄を詳しく告げたり、高祖は、之を聞きて獨 に、高祖も丁度眠を覺したる處なりければ、途中にて るに、我が子は白帝の子にて、化して大蛇となり道に て居たり、其人老嫗に向ひ何故に悲むかと問ひたる すく高祖を畏れ敬ひたり、 るやう ありて徑に横り居れば、引き返すこそ 3 大蛇の殺されたる所に至りたる ものが行くに何の畏る 開けたれ 諸々の從ふ者は日にま は酔うて居ることとて ば高祖は叉行くこと う事か

(字解) 竹皮為冠、應邵の 説に竹の始生の皮を以て 「字解」 竹皮為冠、應邵の 説に竹の始生の皮を以て

疑。於。 間= 秦 呂 始 皇帝常 因,東 后與 置。原際の 日、季所,居 求、常二 有天子 得。澤、茂、高 即, 之自,氣 祖

以,道。嫗子,嫗醉,斬。醉。報。徑。士等中。 嫗,今日,故。夜因,蛇,日,日,澤願,皆 爲。爲。吾。哭。哭。臥、蛇壯前。中。從去、飲。 不,赤子、之,人後遂士有,令者吾。 誠,帝,白人問,人分,行,大一十亦 欲、子、帝、曰、何、來、爲。何、蛇 人。餘 從,解 答,新,子 嫗 哭。至。雨, 畏。當、行 人 之,之,也子嫗蛇,徑乃,徑前。高 逝,所 嫗 故。化,何 日,所。開,前。願,行 祖 因,哭、爲、爲、人有、行、拔、還、前被、徒徒、 忽,人,蛇,見,殺,一數劍,高者酒,中日, 不乃當。殺吾老里擊,祖還。夜壯公

> 心。至 獨,高 THE P 加 自 覺。 負、後 諸,人 從,告, 者高

分に 見 去るべしと、然るに人夫中の肚子にて高祖 は乃ち是なり、當時秦の始皇帝は墳 作らしめたり、而して時々之を冠するのみか、貴き 為め、常に求盗をして薛に行き、冠 解放して日く、貴公等は皆去るべし、吾も亦これ 豐縣の西に當る澤中に止りて酒を飲み、斷然人 夫ども多くは途中にて逃げ去りしかば、高祖以 多くの人夫を引き連れて翻山に赴きけり、 為め、數多の人夫を募りしかば、高祖 講義 をして前に進 ことを願ふ者十餘 く、酈山に到る頃には必ず皆逃げ去るべしと、依 益 高 なが 畏。祖 及びても常に之を冠れり、世に 之, 乃, 人 高祖亭の長たる時、筍の皮を以て冠を作る 、夜澤中 ませしに、その者 の小徑を通 人あり V り、かくて りけるとき、一 工に 墓を配 は縣介の 謂ふ所の 高祖 命じ に従 酒 日。祖。

父處, 不可言,高祖乃謝曰,誠如,父言,不可言,高祖乃謝曰,誠如,父言,

には、君の故を以て貴を得るなり、君が相の貴きこと 質に言ふべからずと、高祖乃ち謝して曰く、誠に翁の 質に言ふべからずと、高祖乃ち謝して曰く、誠に翁の でに王たるの貴に至りしかば、弦に 老翁の舊事を追 下に王たるの貴に至りしかば、弦に 老翁の舊事を追 下に王たるの貴に至りしかば、弦に 老翁の舊事を追 を必ずと、高祖は後に天 では、君の故を以て貴を得るなり、君が相の貴きこと

夫人及び兒子は、君の故を以て貴を得るといふ義、今、似君、似は漢書に以に作れり、從ふべし、言ふ心は今元の二子なり、餔、養ふの訓あり、顏師古の説に與魯元の二子なり、餔、養ふの訓あり、顏師古の説に與【字解】 告歸、休暇を請ひて 歸ること、兩子、孝惠と

高祖為亭長乃以竹皮為冠、一京,自度此至皆止之時時冠之、及貴以。亭長為縣送徒酈山、徒多道,

るとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどるとを好み、既に相したる人幾多なるを知らざれどると述べけない。

いふ、竟酒後、酒宴終りて後諸客田づるも獨り後れて 郷の義、重客、貴重の客にて俗にいふ珍客に同じ、主吏、 高の義、重客、貴重の客にて俗にいふ珍客に同じ、主吏、 高の義、重客、貴重の客にて俗にいふ珍客に同じ、主吏、 高いなり、大夫、客の尊き者の總稱なり、易、アナドルと訓なり、大夫、客の尊き者の總稱なり、易、アナドルと訓なり、大夫、客の尊き者の總稱なり、易、アナドルと訓なり、大夫、客の尊き者の總稱なり、場には自己、名詞の義、重なの義、重なの義、正義、一覧、の義、正義、「一覧」といる。

為箕帚妾、箕は塵とり、帚は掃也、ふき掃除する召使坐に在ること、息女、息は生なり、生む所の女をいふ、 奇、異なり、常人に異るをいふ、公主、天子の娘の稱、 と為せよといふにして、妻にしてくれとの謙解なり、 高 加 者夫人嬰兒、皆似」君、君相 為亭長時心 八天下貴人、令相兩子一、大天下貴人、大人所以貴者乃此八天下貴人、令相兩子一、大人所以貴者乃此 及。 因, 之,田、呂 相。 老 貴, 日, 問, 客去, 此, 子, 呂 父

居たるが、此時會費を集むるとを掌りけるが、諸大夫の合と別懇の間柄なりしが、嘗て人を殺したる為、其の合と別懇の間柄なりしが、嘗て人を殺したる為、其の合と別懇の間柄なりしが、嘗て人を殺したる為、其の合と別懇の間柄なりしが、嘗て人を殺したる為、其の命と別懇の間柄なりしが、嘗て人を殺したる為、其の命と別懇の間柄なりにが、當て人を殺したる為、其の命と別懇の問題を集むるとを掌りけるが、諸大夫

にり

向

て固く高祖を留めたり、高祖も其意を悟り、酒宴

客散するも後れて出ですありしかば、呂公は高祖

ひて曰ひけるやう、臣は少壯の頃より人相を觀

銭も所持せざりしなり、かくて受付は名刺を呂公に やう、余は會費金萬錢を持ち來れりと、而して實は 無く宴は開かれ既に関と覺しき頃、呂公は目クバ ず、途に自ら上座に坐して屈すること無かりき、間 もとより諸客を侮りをる事とて 毫も之を意に介せ 何も成し遂げたること無しと罵りけり、然し高祖は れば、此の祝宴に列せんと思ひ、名刺を通じて日 亭の長と為り、素より諸役人を 輕蔑して居 た折柄 ざるものは、之を堂下に坐せしむべしと、時 高 公は好んで人相を 觀る人なり けるが、今面のあたり 宴を開くに就いては、諸 、せしに驚き、自ら起ちて之を門に迎へたり、此の じ其旨を報告しければ、呂公は此の巨額の會費を 合して日へるやう、今般縣 丁重に取り扱ひ、引き入れて堂に坐せしめたり、 之を見て片腹痛く思ひ、劉季はもと法螺吹きで、 の狀貌 を觀で其常人にあらざるを知り、尊重し 君に於て會費 命の 金干 に高祖 錢 に足ら T 呂

息日、嗟乎大丈夫當如此也、

暮、折券、券は今の通帳の 縦(に拜觀し、喟然として嘆息して曰く、嗟乎大丈夫政府の命にて咸 陽に役せしが、秦の始 皇帝の行列を たりて他日の重報を得んが為めなり、かくて高祖は裂き、酒債を打棄て、少しも催促せざりき、これ恩を 五日間も留り、大に散財するを以て、兩家にては必ず 棄つること、弃責、責は債と通じ酒の借金をいふ、繇、 て信すべからず、酤、買ふなり、讎、售なり、歲竟、歲の を知り、歳暮には兩家とも高祖に與へた通帳を引き すこと屢なりしが、其たび毎に武負と王媼とは、高 たる者當に必ず此の如くならざるべからずと、 の兩店にて酒を貸りて飲みたり、而して醉ひて打臥 一倍の價を賣りて 利益を博したり、然し 酔臥の節常 の上に龍あるを見て大に之を怪みたり、而して高 龍あるを見るに及び、其尋常の人に非らざると は王媼・武負兩家にて酒を買うて飲む毎に、必ず四 貰、除なり、除は貸なり、其上常有龍、神話に 高祖は斯く酒を好みしかば、常に王媼。武 如きものなり、折は破りて

し故、之を縱觀といふなり、喟然、嘆息の聲、許さざりしが、此の時は 之を許し拜觀 を縱にせしめ役なり、縱觀、常時車駕の出づるときは人民の拜觀を

敬、公 錢, 乃, 之, 進, 有, 客, 單之, 者, 謁 給, 堂 令, 重 因, 父, 引, 好, 入, 爲, 下, 諸客家, 人 坐上坐無所調酒闌呂公 言 少成 家。人 沛。吕 人,公日,見,大。賀 焉、 爲,日,賀、沛 亭,進 高 錢 **松**,* 日,祖别狀 令、避, 因, 吏仇,聞,從, 公諸固、因,門、持、諸錢、吏聞、從,因,客。多,重,呂一吏,坐、主、令。之

龍、廣雅に鱗あるを蛟龍といふとあり、

高祖為人、隆準而龍顏美鬚髯、
高祖為人、隆準而龍顏美鬚髯、
一京施、意豁如也、常有、大度不事。
一家人生產作業及壯試為支為人。
「四八八亭長、廷中吏無所不,狎侮、
四八八亭長、廷中吏無所不,狎侮、

【字解】 隆準、隆は高きと、準は鼻なり、龍顔、其顔の貌龍に似て頸長く鼻高きなり、鬚髯、頤に在るを髪といひ、頰に 在るを 髯といふ、即ち口ひげのこと、太子、ホクロなり、仁、慈愛心の深きこと、施、物を惠むこと、豁如、心サッパリとして物に拘 泥せぬこと、大度、度量の六なること、生産作業、生産 は生活に闘すること、作業は業務に闘すること、四字にて家事の義なり、試為吏、試に用ひられて寅に補 せらるゝこと、栗東の法に十 里毎に一 亭あり、十亭毎に一郷あり、亭、秦の法に十 里毎に一 亭あり、十亭毎に一郷あり、喜人、神楽の法に十 里毎に一 亭あり、十亭毎に一郷あり、海水、水は 上の 誤なり、延中、猶役 所と いふが如り、泗水、水は 上の 誤なり、延中、猶役 所と いふが如り、泗水、水は 上の 誤なり、延中、猶役 所と いふが如り、泗水、水は 上の 誤なり、延中、猶役 所と いふが如り、泗水、水は 上の 誤なり、延伸、猶役 所と いふが如り、泗水、水は 上の 誤なり、延中、猶役 所と いふが如り、

たいこれに叛くを怨めるもそは難いかな、彼、自ら動 を立し、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚ほ覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚ほ覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚ほ覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚ほ覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚は覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚は覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚は覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚は覺悟 でして、身は東城に死しぬ、死に臨みても尚は覺悟 でして、身は東城に死しる、死に臨みても尚は覺悟 でして、身は東城に死しる、死に臨みても尚は覺悟

五諸侯、韓・趙・魏・燕・齊、功伐、伐も亦功也、勳也、(イ五諸侯、韓・趙・魏・燕・齊、功伐、伐も亦功也、勳也、(八下解) 周生、漢 時の儒者姓周 なる者、重瞳子、一眼に認らず哉、

劉媼嘗息,大澤之陂,夢與神遇、字季、父日,太公,母日,劉媼,其先高祖、沛豐邑中陽里人,姓劉氏、高祖本紀第八

【講義】 漢の高祖は沛縣 豊邑の中陽 里の人にして、智能を到といひ字を季といへり、父を太弘と云ひ、母を創媼と云ふ、是より先 き劉媼嘗て大なる 澤の堤に休息してうたゝねしけるが、闘ら ず神と出遇ひ たる夢息してうたゝねしけるが、闘ら ず神と出遇ひ たる夢息してうたゝねしけるが、闘らず神と出遇ひ たる夢息してうたゝねしけるが、闘らず神と出遇ひ たる夢見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高見たり、其後間も無く媼は身重になれるが、やがて高

國,以,私王背。不王將、尺相。秦羽、蓋。 力智、侯、關、終、侯、五寸、與、失。豈征、而叛、懐。近政諸乘。並、其其 寸,與。失。豈。重 不己. 楚, 古由, 侯, 勢。爭, 政, 苗 城營,師難放以羽滅起不陳裔,又 矣逐來出秦隴可,涉 下,謂自,義未、號,分畝勝,首,何,項五霸矜音。嘗爲烈力鄉縣 矜,帝,曹,爲,裂,之 數難,與,羽。 寤、年 王 功 而 有,霸 天 中 然 豪 而 卒 之 伐 自 也 王 下,三 羽 傑 不亡業奮、立及位而年非。鑫 自,其欲,其怨,羽雖,封。遂,有,起。夫、子、

不,乃,渺,引, 亡我非用兵

時勢に 王侯を封じ、政命皆己れより出で、號して霸王諸侯の兵を督して强秦を滅し、天下の土を分割 流寓者の身を以て尺寸の封土あるにもあらず、唯、 幾千、殆んど數ふるに勝ふべからず、然るに項羽は一起してより、豪傑 蜂起し、相ひ與に 幷び爭ふ者、幾百 なり、拘泥する勿れ、一夫れ暴秦政道を失ひ が興起の驟なるを驚嘆するの端緒に利用したるまで と、」(兩眸子云々は傳中の無き所を補足 にてもあるならん耶、何ぞ彼 も亦兩眸子なりきと、然らば子羽は豊 とあり、虞舜の目は蓋し兩眸子なりきと、又聞く一 講義】太史公曰く、吾、嘗て之を周生より聞け ことが関こ皆きて居らず、楚を懐ひて東に歸り、して且つ盛なるは近古以來未だ嘗てあらざるなり、」 、其位に居ること終を全うせずと雖も、興起の驟に に彼が關に背きて居らず、楚を懐ひて東に を放逐して自 乗じて田圃の中より起り、僅々三年にし 立するの無道を爲すに及びて、諸 が興起 豆に虞舜の後胤 、陳沙鼠を 霸王と

之

陽侯に封ず、項王秦始皇の十五年己己を以て主ル、寛衍侯に、楊喜を赤泉侯に、楊武を吳防侯に、呂勝を涅 料に邑萬戶に購ふと、吾、若舊友の爲めに恩を施 ずと城を守るの を持し、城兵に示して其 軍徒に之を攻むる の不利な 漢乃ち天下の兵を引き之 を屠らん と欲せしが、其國 已に死し 内の地を分で五と為し、呂馬童を中水侯に、王翳を杜 勝、及び楊武は各、其手或は足等の一體を得たり 人、其結局、郎中騎の楊喜・騎司馬の呂馬童・郎中の呂 相蹂踐して項王を爭ひ、同志打にて相ひ殺す者數十 名せんと競ひかいる、王翳先づ其頭を取りしが、餘騎 んと、乃ち自ら刎て死す、漢の將士之を見て我こそ功 れ項王なりと、項王乃ち曰く、吾、聞く漢我頭を千金 人共に其體を會接するに皆僞なし、故に項王の領土 五年十二月に死す、死する時年三十一なりき、項王 、馬童後より續く王翳に項王を指し示して曰く、 を守り主君の爲に死するの習俗なるが故に、 一楚の地皆漢に降りしも、唯、魯のみ下らず 復た益なきを諭しゝかば、魯の父兄 呼 掛けたるに、馬童愧ぢて面を背け 已に死せる るを知り、乃ち項王の頭 その疑ふべから

> を皆項氏なり、漢より姓劉氏を賜はる、 と為し、其死するに及び て魯最も後に下る、故に の支屬も漢王皆誅 せずして 之を存す、乃ち項伯を封 の支屬も漢王皆誅 せずして 之を存す、乃ち項伯を封 の支屬も漢王皆誅 せずして 之を存す、乃ち項伯を封 の支属も漢王皆誅 せずして 之に泣きて去る、諸の項氏 を満し、其死する に及び て魯最も後に下る、故に をおいる

太史公日、吾聞之周生日、舜目

誅。之。禮。公、乃 死心 の地也、鳥江亭の長船を議装して待ち、項王に謂つて 乃ち鳥江を東に渡らんと欲す、此を渡れ 節、 及降節、 、江東は天下に於ては小なれども、地方千里、民 萬人、亦王た 是に於て項 封章 武 侯、皆 懷 項 伯, るに足れり、願くは大王急に渡 王南 最。 走し 項 後 初 侯 屬、漢 下、故 て長江の北岸に 侯、桃 發。以哀,魯 ば即ち江東 皆 侯·平 爲。父 氏, 泣,公,鲁 不 兄 1-其 7 Ŧ 8 は 0 n る漢の騎司 馬呂馬童を顧みて曰く、若は吾舊友に

持して漢の追兵と接戰す、最後の奮闘いよく 當り、情に於て之を殺すに忍びず、因つて之を長者な 當る所敵なく、嘗て一 の、いよく一江を渡るとなりては、心中忽ち慙愧を覺 る君に賜與すと、遂に雖を亭長に贈れり、乃ち從騎 の長者なるを知れり、吾れ此馬に騎れると已に五年 えて一變したるなり、乃ち亭長に謂つて曰く、吾は君 やと、蓋し項王、漢軍の烈しき追撃に、苦戰奮闘の極、 れ、今臣 なしと、然るに項王笑ひつゝ欝謝して曰く、今天我 皆馬を下らしめ、主從徒歩となりて引返し、短 足自ら縁故深き江東に引かれて此まで來れるもの も亦身に十餘創を被り、今は是れまでなりと、 して、項王一人の撃殺する所、猶數百人に上れり、 之を言はざるも、籍に於ては獨り心に愧ぢざらん すとも、我れ何の面目にて之を見ん、縱合彼れ 我と倶に還るなし、縱合江東の父兄、憐んで我 子弟八千人と此江を渡つて西せり、而し す、我れ何ぞ 0) み船 渡ることをせん、且つ八年前、籍 あり、漢の軍追至るとも渡るべきやう 日に千里を行けり、今吾最 後に を王 日に 東

くは諸君 末だ嘗て敗北せず、遂に霸として天下を有つ、然るに 吾、兵を起しゝより今に至るまで八歲、身戰場を經た ンて 苦 を分ちて四 敵旗を薙ぎ仆し 今最後に於て此に困むことは、此れ天の我を亡すに る七十餘度、當る所の 千人、項王自ら脱し難 為 項王丘上より遙 のみ、而して漢の軍 して諸君 て、我戦 1 h て我戰の罪に非ざる實證 2 漢 を嘗め に彼 の軍を 分れ 十八騎を 左すれ の罪にはあらず、今日固より死を決せり に及ば 0 の為めに敵圍を突き破り、敵將を斬り落し 0 い臨淮 隊 突かし 為めに決戰し、必ず三たび之に勝たん、而 ば大 將を打 處とな となし る、乃ち兵を引い 、諸君をして天の すのみ に指して其騎に謂 澤中に陷り、彷徨時 む、且の豫め之を突破 0) 雲霞の如く、之を圍むこと數重、 東城縣に至る、今や從兵愈、減じ 四四 るを期す、是に於て 取らんと、四 者は破れ、撃つ所の者は服 きを度り、其騎に謂つて日 而 面に嚮は を知らしめんと、乃ち其騎 して漢の騎 て東 我を亡すにて、決し 面 しむ、 つて日 0 を費し 1= O) 騎をして馳し 轉 項王其 追ふ者は敷 せば此 く、吾、公の 隊各"七騎 けれ 、具に Ш 3 東

歌、旅、其馬の 漢軍 三と爲し、再び之を圍む、項王乃ち馳せて復 里、項王已に圍を破り、其騎と會して三處となる 大呼 ナ **分虞兮にても** れど之を呼ぶに名の如くす、故に斯く云ふならん、虞 < 點檢するに兩騎を失へるのみ、乃ち其 都尉を斬り、士卒八九十人を殺 0) 3 如、疑問中に比較の意を含む解、吾言信か、信ならざ 父は農夫、 らして之を叱すれば、赤泉侯 字解 追書)楊喜、漢の騎將 ル)也、平明、夜の全く明放れたる頃、田父給日、田シミナゲク、歌數関、関の音ケツ、乾(ヤム)北、新 軍惑ひて項王の 、何如と、騎皆伏して曰く、誠に大王の かの意 皆披靡 i て馳 の毛色にて名とす、雕は蒼白の馬(ア 楚歌、楚國の 下る は悲嘆のでとし、忧慨は慷慨 知 るべし、常幸從、幸は寵幸、名騅、是れ 勢疾 遂に漢の 在る所を 風 たり 音度にて 0 一將を斬る、是の 俄に 、項王を追 知らず、乃ち軍 が人馬辟易 し、再び 歌ふ、名虞、處は姓な 至 るが ふ、項王 騎 其騎を ごとく すること数 に謂つて日 と同じ、 0 た漢の を分ち 時赤泉 シゲ)、悲 如 一目を瞋 聚 四 面 カ 7 7 (1)

盡く、漢の軍及び諸侯の兵之を圍むと數重、夜間漢のて之に據る、垓下は沛の鉸縣の邑名なり、兵少く食【講義】 項王固陵の役後、東南に退却し、垓下に壁し

餘人のみ、九江の陰陵縣に至りて迷ひて道を失ひ、一 軍始めて之を覺り、騎將灌嬰に五千騎を以て追は に紛れて重圍を突破し、南に出でて馳走す、平明 りて騎す、麾下の壯士騎從する者八百餘人、直に夜 能く面を上げ得る者なかりき、是に於て項王馬に 歌あり、項王落淚數行、左右の臣も 亦皆泣き、一人 なり、反覆して之を歌ふこと數回、處氏も之に和し 奈何にすべき、虞や虞や又、若を奈何にすべきと謂ふ疲れて復た走る 能はず、雕の走る能 はざる、噫、之を 詩を作る、本文載する所の如し、其意は動かざる者は 農夫に遭ひて之を問ひたるに、農夫欺いて曰く、左せ めたり、項王淮水を渡るとき騎の能く屬從する者百 るに時運我に利ならずして連戰皆敗れ、駿足の雕も 山、我力之を拔く、至大なる者は世、我氣之を蓋ふ、然 に愛して之に騎る、是に於て項王悲嘆慷慨して自ら は虞氏、常に寵を得て隨從す、駿馬あり名は雕、王常 り、即ち起ちて夜間帳中に入りて決飲す、美姫あり きことよと、心中最早事の復た為すべからざるを知 軍四面皆楚歌す、 きて曰く、漢皆已に我楚を略取せるか、何ぞ楚人の 其聲遠近相ひ聞ゆ、項王乃ち大に

を分つの一大決心を以て之を待たば、今立に其兵を固より宜なり、然らば君 王能く彼等 と興に共に天下 じて曰く、請ふ今、兵を進發せんと、韓信は齊より往 國に與へんと、使者至れば韓信・彭越皆果 を撃て、楚破るれば、陳より以東海岸に至る迄は齊干 使者を發し、韓信・彭越に告げて 曰く、力を幷せて 楚 す、蓋し漢楚興亡の略は此一策に定まれり、是に於て 鬩して戦はし めば楚は敗り 易きなりと、漢王善と稱 穀城に至るまで黄河に際して彭越に與へ、各、自ら奮 くまで齊の舊地を丼せて盡く韓信に與へ、睢陽以北 致すべきなり、故に君王に,して能く陳州以東海に 心必ず悦ばずして且つ疑ふ所あらん、其至らざるは んとするに至れるも、二人未だ確たる分地あらず、 る、日も亦久し、而して今や楚の兵將に殆んど破滅せ んと、子房對へて曰く、信越漢 致せり、爾後の事深く憂ふべし、之を爲すと奈何にせ の字)に謂つて曰く、諸侯我約に從はずして此敗戰を び壁中に入り塹壕を深くして自ら守禦す、張子房(良 會せず、而して楚軍反擊して大に漢軍を破 (韓信)に與へ、睢陽より以北穀城に至るまでは彭相 の為めに其力を盡せ して悦び報 る、漢王再

合す、來つて項王を攻むるなり、江方面の大兵を擧げて劉賈・彭越に 隨ひ 皆垓下に會楚に叛き、先づ舒の衆を以て六縣(縣名)を屠破し、九父縣を屠り、東に轉じて垓下に至る、又大司馬周殷もき、劉賈の軍は九江壽春より 同時に 淮を渡り西北城

項 几 王 面 諸 軍 皆 侯 兵、圍 壁。垓下、兵 楚 數 少食 夜 盡、漢 闡 **有欠** 抗; 漢 漢 軍

漢彭與知、下,其對,子漢越 王越韓也令不识易王之 與、傅。越。日,使,信。君可。至,楚 海、日、善、各、睢王立。固、兵諸入,不 相與并。於,自,陽能,致。宜,且,侯 齊力,是為以自也君破不深楚王擊,乃戰,北陳郎王信從、塹,擊, 雕楚,發則至以不能,越約而漢陽楚使楚、穀東能、與未爲自軍, 以破"者,易"城。傅等事共。有,之,守"大 自,告,败,以,海、未、分,分 奈 謂,破。 彭至陳韓也與盡,可天地何張之,

> 皆舒, 父, 齊越 會。屠,至。往,皆 核 六, 核 劉 報, 下, 學, 下, 賈, 日, 項 江,司 壽進 王-兵,馬 隨,周 春 劉殷竝韓 贾 叛 新 行 ,信 彭 楚 屠 , 乃 越 以 城 從 ,

し漢楚興亡の決は此一言に定まれり、漢の五年、漢王を養ひて自ら患を遺すものなりと、漢王之を聽す、蓋今小信を守り其東 歸を釋して撃 たずば、此れ所謂虎らば此機を逸せずし て遂に之を取 らんには如かず、 半を有して諸侯皆 之に附從す、而して楚は兵力疲れす、然るに張良・陳平の二人說いて曰く、漢、天下の大解きて東歸の途に就 きたれば、漢も亦西 歸せんと欲【講義】 項王已に漢と分 割を約し、兵を引き 交戰を 食糧盡く、此れ天楚を亡すの時なること知るべし、然 とせり、漢軍復た發して固陵に至りしも信越の め、韓信・彭越と日を期 項王を追ひ淮陽陽夏縣の南に し、共に會して楚軍を撃 至つて姑

く此の和平を致す所以なり、故に號して平國君と為と、項王之を請はしめしも、項王容易に許諾せず、漢王後に侯とを請はしめしも、項王容易に許諾せず、漢王後に侯公の功を賞し封地を賜りて平國君と為すらく、天下を中公を遣りて鴻溝以西の地を漢と為し、以東を楚と為さんと、項王之を許し、即ち漢王の父と妻とを歸し、媾和と、項王之を許し、即ち漢王の父と妻とを歸し、媾和と、項王之を許し、漢王の號を唱へたり、漢王大に侯公会く成りければ、軍皆萬歳を唱へたり、漢王大に侯公会と聞ふべし、漢王の號を平國と賜へるは、其の言に古と明ふべし、漢王の號を平國と賜へるは、其の言に古と明ふべし、漢王の號を平國君と為すると、天下を中公を遺して爾後復た肯て進見せざりきと云ふ、亦奇身を匿して爾後復た肯て進見せざりきと云ふ、亦奇身を匿して爾後復た肯て進見せざりきと云ふ、亦奇身を匿して爾後復た肯て進見せざりきと云ふ、亦奇身を匿して爾後復た肯て進見せざりきと云ふ、亦奇り、居處する所其の辯國を傾くるの力あり、是れ能なり、居處する所其の辯國を傾くるの力あり、是れ能なり、居處するとは、其下の神と、

れども長史翳なきに非ずや、故に講義之を削る、鍾離く行也、下文に照らして明なり、且つ前にも長史欣あり、故且降待二大王、且は姑(シバラク)也、貨賂、金錢り、故且降待二大王、且は姑(シバラク)也、貨賂、金錢り、故且降待二大王、且は姑(シバラク)也、貨路、金錢り、故且降待二大王、且は姑(シバラク)也、貨路、金錢

其辯舌の雄を形容す、平國の字義を解釋するに非ず、如しと雖、古文往々此類多し、尤むるに足らず、所、居如しと雖、古文往々此類多し、尤むるに足らず、所、居如しと雖、古文往々此類多し、尤むるに足らず、所、居以 一般 一方 大公呂后を歸すをいふ、故に母子二字符の以 一方 東南流する者、(今の河南開封府內)、即歸漢王 「神子」

下、欲、大西 此五 食 謂、其 期、軍、與淮 年、 養,機。盡,大 此。 約、乃 自。遂、天 王 良陳 遺、取。亡、諸 擊,陰 引,兵解 忠,之,楚,也、今之 追。 侯 皆附之、楚 釋。時 漢 信 而東 南-漢,所。因,罷炎天

悉く ならず、此より以東、梁の 10 説て曰く らざりしが、已に降れば、項王其降人の遅きを怒り、 其東北なる外黄縣城を攻む、外黄數日 就かんと深く注意し、乃ち東行して先づ陳留縣及び 本彭越を誅して梁の地を平定し、還って復た將軍 進するを得しめざれば足れり、我れ 十五日にして必 8 3 楚の糧食を絶 めて之を阬殺 人武渉に往きて韓信に 説かしめ和 るを以て、姑く降つて大王の救を待てるなり、然る 大王至りて叉皆之を阬殺 本年甫めて十三歳なる者あり、自ら往きて項王 歸する者あらんや、是れ唯我外責に於て然るのみ 、慎んで與に戰ふこと勿れ、漢軍を此に 聴かざりき、是の時彭越復た反して梁の 、將軍謹んで成阜を守れ、漢軍挑 城内 、項王龍且が 0 、彭越强ひて我外黄を劫し、外黄其暴に恐れ 男子十五歳以上の者をして城東に至らし せんと欲す、時に外黄の今の含人の見 つ、項王、海春侯大司馬曹咎に謂つて日 且を殺す、韓信因りて自立 軍破る と聞きて、心に恐れ、肝台 地十餘城あ せば、百姓豊に心を大王 を求めたれど、韓 戰せんと 欲すと れども、必ず皆 を經 牽制し して齊王と 地を下し、 れども下 て東

軍の大敗せるを聞 是の 貨を 挑む 漢軍 梁に恩ありしを以て項 の獄掾、長史欣も亦故の標陽の にて皆自ら頭を 進んで川の半に至るころ、漢兵急に之を撃ちて大に 共言 楚軍を破り、盡く 楚國の 漢軍能く罵る者を遣り五六日を連ねて楚を辱し ありては、漢兵果して幾回となく楚軍に向 るを聞き、畏怖して盡く險阻に走れり、然れども當時 も漢軍楚の を出して城東の汜水を渡し、漢軍の壁を衝かん るに、大司馬曹答激怒の極、途に耐 項王東して院陽に至れば、梁の諸城此 るより皆等ひて項王に下り 大王を恐れ 時に當りて項王睢陽 、楚軍初めは項王の命を嚴守して出でざりしが、 は 鹵獲 を然りとし、外黄の院殺せらるべ 般に兵勢盛にして糧食多く ら頸を割きて斃れぬ、大司馬谷は故の斬っせり、大司馬答及び長史欣は汜水の岸 鐘崩昧 て降伏 割きて斃れぬ を滎陽の東に圍みしが を承諾する者なか 、急に兵を引きて 王は之を信任 其地 にあり、成阜 ぬ、然るに 方人民 より 獄吏にて、兩人嘗で項 忍する能はす るべ したるなりき、 き者を赦せり、 西に還る、時し 成阜 にて海春侯が 事を傳聞され 、項王の しと、項王 は之に反 の方面に つて戦を る 2 至

士、國 皆王西,乃漢陸兵至軍 所君、呼、許、者、與王賈、盛、漢方 の楚を撃たんと欲すと聞き、乃ち龍男王漢將韓信の已に悉く河北を取 居。匿、萬之,爲。漢復,說。食軍 項王 傾, 弗 歲, 即, 漢, 約, 使, 項 多。畏, 鍾 國,肯,漢歸、鴻中。侯王、項楚,離 故。復,王漢溝分。公,請,王。盡,昧。 0 號。見。乃王,而天往。太兵走。於 悉く 爲。日封。父東、下。說。公、罷。險榮 平此。侯母者,割,項項食阻。陽 國天公妻為鴻王王絕是東 君、下、爲、子、楚、溝項弗漢時 項 辯平軍項以王聽。遣、漢王 いを

つて成皇 伏 漢王 に中つ、漢王胷に傷き、 走

じて漕運するなり、匈匈、人心安んぜざる貌、挑戦、士さにかへつての意、罷…轉漕、罷は疲、轉漕は各地に轉當、一栝羹、栝は杯と同じ、祇益、禍耳、祇は適也、まず、とは口氣同じからず、翁は俗語のオヤデに に之を烹んとすることを示す、若翁而翁、若而幷にナ物、今太公を俎上に置くは牲肉に比するなり、以て將 卒を用ひず獨身相 ンデと訓じ、我俗語のオマへ 漢人縣名を以て其胡人 ひ戦ふ、樓煩、本來、雁門の縣名、蓋 或は 豆の 糧 得豪の キサマのごとし 俎) は性肉を 類、積 の音 汝

趙,項 破,淮 且,王 楚陰 欲. 聞* 軍,侯 殺,與擊淮 戰,楚,陰 且, 騎 乃侯 人を呼ぶなり、 將 信灌 且資河 因, 嬰 自擊,往,北, 立,之,擊,破, 爲,大之,齊

絕。侯 旴,齊 故項之,男黄從、我、挑馬 且美王外子不将十戰曹降,日,黄年下,軍五候,咎 楚,弗台,王, 糧,聽。人 待。彭令,十數乃日。勿。等項是,武 日東必與日,王 時 涉。聞。 越舍五 王,彊人、已已元行。誅、戰,謹,乃彭 大劫。兒 上,降、擊、彭 毋。守、謂,越 王外年詣,項陳越,令成海復,淮 至,黄,十 城王 留定,得旱,春反。陰 三東怒,外梁東則侯下。侯則 又 外 往,欲、悉,黄,地,而,漢大梁,淮 炕: 恐。說, C , 外 復 , 已 欲 司 地 , 陰

如何に

定まるべ

り、其

き、河

し相ひ距

ざれば、之を殺

之に從ふ、漢楚の爭 起りしより、一 みならず、却つて彼を激して我禍を益すのみと、項王、 料理せんとする者は 殺さんとするを、季父項伯諫止して曰く、天下の事は は、幸に我れにも一杯の羹を分てと、項王怒つて之を 吾翁は即ち若の翁、必ず而の翁を烹んと一欲するなら 降らざれば吾れ太 公を烹んと、然るに を絶つ、項王殆ど困却し、高俎を軍中に造り拘留せる 字恐くは衍ならんとい の答に曰く、吾れ項羽と倶に北面して懷王の臣とな 太公を其上に置きて漢王に示し、告げて曰く、今急に の地に反き、撃てば走り、還れ き、共に澗に臨んで對持し相守ること數月、(數月 て還り廣武に至る、廣武に兩山あり、澗水其 して敖倉の糧食に就く、是の時項王巳に東海を定め 命を受けて曰く、約して兄弟 を渡りて復た成皐を取り、滎陽の隣地廣 ると百歩、漢は西山に城き、楚は東山に城 し漢王 きか未だ知 一家の利害を顧みるものに を苦しめんとするも益なきの ふ)是の時に當り彭越數、梁 るべからず、且つ天 ば起り、以て楚の 勝一負、久しく相 たらんと、然らば 意外にも漢王 間を横絶 武に 糧食 あら T 庫 を み、願 之を責む、項王怒りて一戰せんと欲す、漢王聽かず、 武間の水上に臨んで語る、漢王、項王の十罪を数へ 探問はしむれば、徐人にあらで項王なり、漢王大に 出でざりき、漢王人をして嚮の一 敢て發せず、遂に走還りて壁に入り、敢て再び陣外に 大喝して叱すれば、樓煩目眩して敢て視ず、手戰 樓煩又も之を射んと弓を挽けるを、項王目を瞋らし に怒り乃ち自ら甲を被り戟を持ちて立合ひたるに、 度迄駈合せたれども、樓煩いつも之を射殺す、項王大 をして 負せん、力を鬪はすと能はすと、項王之を羞ぢ壯 漢王 笑って 之を謝絶し せん、徒に國民の父子を苦しむるを爲すなきなりと、 んぜざる所以の者は、徒に我兩人の事を以てする に決闘を申込みて しみ、老弱は漕運の使役に疲る、是に於て項王、漢王 ひ持して未だ決せ、ず、丁壯は兵役に服して戰鬪 の騎射を巧にする樓煩と呼做す者あり、楚の壯土 、是に於て項王漢王に會見 くは衆人を用ひず漢王と一 壁を出でゝ一騎打を試みしむ、漢軍中に胡 曰く、天下何々然

て日

く、吾は寧ろ智にて

騎打して

勝負を

とし

て其業に

に苦

を求め、相ひ與に東西廣

騎の何者なるか

壁具煩王楚士,吾、下不不欲、大挑出寧。之 漢乃乃 聽,王即"項項數"漢王 出寧。之漢 敢,敢,射怒,戰挑關,民 王之,王也、伏、項相。漢 伏、項相、漢 弩、王 與 王 射、怒、臨、大、王 中、欲、廣、、使、發、目,持、輒、騎力、漢 漢一武、於、人、遂、叱、戟、射射、項王 間。是間。走。之,挑殺者王笑。徒而項問、還,樓戰之,樓令、謝、苦 戰漢 王語、王之、入、煩樓項煩壯日、天

傷、走入,成皇、

し之を鞏縣に拒ぎて進むを得ざらしむ、時に彭越睢を抜き、勢に乗じて西せんと欲したるも、漢、兵を出稍々成阜を出でて王に從ふとを得たり、楚遂に成阜 壁を築きて止り、別に劉賈に二萬の兵を將ゐ白馬 中鄭忠漢王に説くに猶早きを以てす、乃ち河内に 王の虚に乗じ河南に渡りて復戦はんとしたるに、郎 て彭越を撃つ、漢王已に韓信の兵を得たるを以て、項 の修武に屯せる張耳韓信が軍に依る、諸將之を聞き、 獨り滕公と城北の玉門より出で、黄河を渡つて河内四年項王東より兵を 進めて成 皐を圍む、漢王逃れて 東して之を撃破し、彭越を走らす、漢王則ち兵を引 る)を撃ち、楚の將軍薛公を殺しいかば項王自ら東し 水(本文の河誤る)を渡りて楚の下邳(本文の東阿 は滎陽の西、維陽の東、泡水と河との間にあり、 く兵を收めて、再び河南に入りて成阜を保守す、成 走り、隨何の力によりて九江王布を味方とし、行く行 講義】漢王の滎陽を出づる、南、宛と葉との 渡つて彭越を佐け、楚の糧秣を焼かしめたり、

紀信日 らん なり、 喜んで皆萬歳を呼ぶ、然るに此れと同時に 被る者二千人、楚兵以て漢兵と為し、四面より之を撃 叛きて虜にせられたる者なり、周帯・樅公因りて謀 を焼殺 楚軍毫も覺らざりき、項王黄屋車より出づる 公・魏豹に滎陽を留守せしむ、魏豹は是より先き漢 るに漢王にあらず、怪みて漢王安に在るか 日く、城中食糧盡き、漢王降ると、楚軍之を信じ、大に つ、紀信、王の黄屋の車に乗り、左纛を建てゝ出で て、項王の行動是れより拙し、而して滎陽 十騎の 一夜にまぎれて女子を滎陽の東門より 出す、甲冑を 、項王之に謂つて日 を殺す、既にして楚、滎陽城を下し、周苛 日く、反國の王は與に城を守り難しと、乃ち共に 一急なり、漢の將紀信、漢王に説いて曰 、大王其間隙に乗じて脱出すべしと、是に於て漢 臣請ふ大王の爲めに楚を誑して王と爲りて降 す、漢王の出づるとき、王御史大夫周苛及び 小勢 漢王 死にき、是れ にて城の西門より出でて成皐に走る、 は已に脱出せりと、項王大に怒つて信 く、公我將と為らば、我れ公を 全く陳平が計 に陷り く、事已に急 の攻 と問へば、 を生擒に 漢王も亦 72 者を見 は T

> み 若は しめらるゝに連殺して紀信の壯烈と列記したるの を殺せる以下は後日の事に係れども、其榮陽を守ら 王 上將軍とし (オマヘ)こそ速に 怒つて周帯を烹、弁に樅公を殺し 畢竟漢の敵として對抗し得る者にあらずと、項 萬戶に封むんと、周 漢に降らずば、漢今者を虜にせん、 一节罵 ね、(周帯等魏豹 T 日 <

幢にて車衡の左に建つ、不…極降」漢、趣 也 黄繒を蓋裏と為す車、帝王の車なり、傅二左纛、傅は附**** なり、疽、骨に附する癰、癰は淺く疽 とは、封衛位官を解して卒伍 故に致仕を請ふに骸骨を賜へと曰ふ、卒伍 栗、栗は穀類、太牢具、牛羊豕を合せ具ふる 「字解」 、蘇音タウ又トク、オニガシラと訓ず、乗與 一歸…卒伍、臣は已に一身を奉じて 甬道、章邯等鉅鹿を圍むの 0) 身分に歸せ は深し、黄屋車、 條に解 には速、 君 んと謂ふ に歸せん 美饌、願、放倉 す、敖、 に事ふ、 0 毛羽

江王布行收兵復入保成皇漢王之出,榮陽、南走宛葉得九

より河に接屬し、以て敖倉の米穀を取る、然るに漢のの生命なれば漢王尤も意を用ひ、甬道を築きて榮陽の西北、河の一支流(汴)に臨んで敖山あり、秦以來陽の西北、河の一支流(汴)に臨んで敖山あり、秦以來「漢に背けり、漢は榮陽に踏止り持久の計を爲す、榮「漢王の彭城に敗るゝ、諸侯皆再び楚に與し」

伍の身に歸せんと、項王引止めもせで 直に其願 用ひん、君王自ら之を為せ、願くは骸骨を賜はりて卒 大に怒つて曰く、天下の事は大に定れり、安ぞ吾輩を の漢と私あるを疑ひ、稍く たり、使者怒り歸つて之を項王に告じ、項王乃ち范 去り、更めて粗惡の料理を出して項王の使者に食 使者を見、伴り驚いて曰く、吾は亞父の使者と以為 に觀よ、漢の勢力技倆は與し易きのみ、畏るゝに足らさんと欲したるに、歷陽侯范増曰く、彭城以來の戰鬪 属く、范増憤恨の極、行いて未だ彭城に達せざる るに、さはなくて項王の使者なるかと、俄に其膳 め太牢の美騰を備へ、更に命じ之を擧げて其使 なり、一日、媾和の議を以て項王の使者來る、陳平 ず、今釋して取らざれば後日必ず之を悔いんと、項王 進めんと欲するの狀を為さしめ、而して自ら出 の謀計を用ひて項王と范堉とを離間す、其計頗る妙 乃ち范増と嚴しく滎陽を攻圍す、漢王之を患ひ、陳 陽以西の地を割きて漢と爲さん と求む、項王之を聽 て漢王食糧缺乏し、恐 項王幾囘となく甬道を侵奪し れて遂に和を項王に請ひ、榮 其權を奪ふに至れり、范增 3

りし 將ゐて梁の下邑にあり、漢王微行して之に就き、稍 時、呂后の兄、周呂侯名は澤といふ者、漢の為め兵を ぜしかば、項王之を質として常に軍中に置けり、是の 其士卒の散亡せる者を收めて西して河南の滎陽に 反 滕公夏侯嬰は躍下り、之を拾取りて車に載す、是の 載行く、然るに楚の騎兵追來つて漢王急迫すれば、厄 と呂后とを求めたれども相遇はず、太公呂后の方に きやと、是に於て父子遂に難を脱るゝを得、更に太公 らざるに至るとも、父母たる者奈何んぞ之を棄 きと三囘に及べり、嬰曰く、危急の極、車の驅るべ 介物とて、兩兒を車下に突落す、其度毎に車を御する が、兎角する間に男(後に孝惠帝)女(後に魯元公主 て漢王の家族を取らしめんとせり、漢王巳 に 沛に至 る、諸敗軍之を聞き皆來り會す、時に漢 ても審食其を供とし、微行して漢王を求め居たるに、 二人の子に路上にて行逢ひたれば、乃ち喜んで 車に も亦之に心付き、人をして漢王を追ひ T 西走せんと、沛を指して馳せて行く、然るに此 つて楚軍に遇ふ、楚軍は之を伴ひ歸って項王に報 も家族は早くも逃走せて相ひ見るを つゝ沛に往 相 得ざりし 1、 蕭何 へつべ カコ 如

役に服する義務あり、之を傅 弱末、傅、當時男兒二十三歳より五十五に至るまで兵だ侯に封せられず、所謂追書なり、下邑、梁の縣名、老 其、食の音異、周呂侯、周呂は封名、名は澤、但、當時魯は其食邑、元は諡、太公呂后、漢王の父及び后、審 東南より來る楚軍を逢迎す、即ち楚兵の面 趙齊衡山と爲す者、當を得た 【字解】 り、然れども田横も亦是れ 救ひ、漢王を追ひて滎陽に至る、勝利は則ち勝 過ぎて西する能はざりき、項王の齊を去りて れり、故に楚軍の進路は一時此地方に停止し、滎陽を 滎陽の南、京縣索亭の間に戰ふに及びて 漢叉楚を破 より起り、毎戦勝に乗じて漢兵の敗走を逐然りしが 亦關中の未だ傅せざる者を發し悉く滎陽の軍に るを言ふ、家室、家族、魯元、漢王の女、呂后の生む所、 するを得て、兄田榮の子廣を立てゝ齊王とせり、 寸に滿たざるを罷癃(病身者 めし 排擠(オシオトス)也、逢三迎楚軍ご は、漢 五諸侯、注家異説多く、紛々定らず、但、韓魏 の軍復た大に振ふ、是の役楚軍は彭城 に因りて 齊を楚より回 るに似たり、為一差川の と謂ふ、但、長け六尺二 とし て取らず、故 父及び后、密食 に吹付く 西北の風、 彭城 到ら を

收濟 彭 故, 戰, 楚 中,祭行 祭 起, 於 南 敗 城 軍 常 詣 間。 乘。 敗。 北京 與 救,以,漢 振。關

萬人を率るて南の方曲阜より胡陵に出で本國を望ん時に諸將をして留りて齊を撃たしめ、其身は 精兵三なれば、餘人にありては驚愕措く所を知らざ る場合なれば、餘人にありては驚愕措く所を知らざ る場合なれば、餘人にありては驚愕措く所を知らざ る場合と、東して楚を撃つ、楚已に張良に誑 され、國內空虚し、東して楚を撃つ、楚已に張良に誑 され、國內空虚し、東して楚を撃つ、楚日に張良に誑 され、國內空虚

死 り、屋宇を吹きまくり、沙石を吹き揚げ、天地冥 程に、遂に楚軍に水中に 北岸に至る、漢の兵壓迫にた 穀泗 となれば、楚軍大に亂れ、隊伍壌散 漢軍を破る、漢軍皆潰走し、相ひ隨つて城下を流 T して白晝晦闇と爲り、且つ其風向楚軍に吹き付くる もなし、然るに是の時、不思議や大風西北よりし 楚兵遂に漢王を圍むと三重、漢王今は逃出づ べ 入りたれば、唯水為めに堰か び多く漢卒を殺す、 のと落行く、楚軍又族く追撃して靈壁縣の東、唯 T で に上れり、其殘卒は皆南走して山中に 疾風 、王乃ち西、蕭縣より泗水に沿ひ、晨に漢軍を襲撃し ひつ 馳還 郷里の沛を過ぎ、先年以來殘置きた を出でゝ數十騎と遁去ると 1 水に入りたれば、項王漢卒を殺すこと十 の如く東を指して彭城に殺到し、日中 舞ひつ、項王の已に近きにあるを覺らざりき、 3 城中の寳貨美人を收め、日に置酒高 四月漢の 大軍皆已に彭城に入り、憚る所 其數實に又十餘萬人、皆睢水 擠 れて一時流れず されぬ、項王此處に へず次第に後下り を得た せり、漢王乃ち九 り、王は る家族を收 逃込ま な 1= 此足 會して かと き術 て起 水 h · 除萬 大に て再 す 3 0) 8

を 人の 3 ば 5 關 決戦するの意なく、專ら北進して齊を撃ちき、齊を撃 大王に失ひ 民之に憤激 T T つに営 -B) 緩と 齊梁 を出 滅す ん)と共に楚を滅せんと欲すと、此言大年 至 賴 項王と雖も全く信ぜざる を得ず、此故に西 欲するの 兵 め でて其 を引 る布 たり、項王勝に乗じて進み、遂に齊の城郭 利を失ひ走つて平原に至りしが、平原の 3 D り兵を九江王王布に徴し 0 る所多か し、北方を以て急とし、敢て其兵を西 反書を項王に遺りて日 て捕虜とし、齊を徇へて北、渤 に、田榮も臨淄を發し兵を將ゐて會戰 72 は疾と稱して往かず、一 し、相ひ聚りて楚に叛けり、是に於て田榮 乃ちち 一兵を東せしめずと、良叉私 で至らしめ るは 二年の春、項王遂に進んで北の方城陽 b 降卒をば皆之を防殺し、老弱婦 項 約 開中の (1) 王 され 如く に書を遺 ば畏服 地 せ かば を得 ば b 、項王此 たるに、味方の < 即時停 すると思ひの T T 前約 部將に僅に 日 < 海に至るまで 趙 に好意 止 0 漢王 如く L よりて (梁の L 實 T て漢 面 0) せり 數千 敢 を せ 女を を以 室屋 民 隨 な 誤 職 布 以 h 3 n 75 7 な

漢二年冬、冬は春の誤、會戰、彼我進來りて合戰す、燒失」職、職を失ふとは敢て兵を動すを云ふ、謙辭なり、は縣名、當時の合、皆 公と 稱す、角は其人の名、漢王 1 王、其字削るべし、資…除兵、除に兵をは平陸、醜地、醜惡の地、即ち偏陬硗确 12 途中にて撃殺したるなり、江南と云 3 下と云ふ類 見ゆ、鴻門の如き亦其地なり、 字解 頗 は 0) -0) 不陸、醜地、 一将軍の旌麾の下を云ふと、亦通ず、上游、水の 地、趣一義帝一行、趣は促也、江中、高紀 給して之を助くるを資といふ、扞蔽、猶ほ藩屛の 3 弟 俘虜にする、亡卒、逃亡の兵卒 るを撃殺したるなり、三齊、右は即墨、中は臨淄、 かば、項王還るを得ず、留りて横と連戰 而して其義同じからず、江中と云へば船にて 倔强にして未だ容易に下すこと能 H 横 平ぐる也、係虜、係は紫也 戯下、戯は戯水 禦(フセグ)也、三秦、雍、塞、翟、蕭公角、 、或は云ふ、戯は塵の假借 0) 亡卒を收 項 め数萬 不够 下は許 阪院确 人を得 西に至れ へば桃に 、放に戯下 資せよ、物を人 U) 7. には江 は 地、其故主趙 さり 城 ること前 下、洛 陽 到着 南 E 3 ふ、虜 行 とは を洛 上流 1-反 せ 3

ימ

て四

せしむ、」陳徐陰に張同夏說二人をして齊王田祭に を卽墨に殺しぬ、榮因りて自立して齊王と爲り、而し 走る、然るに齊王市は項王の命に負くを畏れ、逃亡し とに不承諾を唱へ、因りて齊を以て楚に反し、國に て膠東に往き國に就きたれば、田榮怒りて追撃し、 ける田都を迎撃つ、田都爲めに入る能はずして楚に 齊王と爲すと聞き、大に怒りて齊王の の田祭、項羽の齊王市を膠東に徙して 茶之を無終に撃殺し、其地を拜せて之に 封遼東に行かしめんとしたるに、廣聽かざるを以て、 り、祭又彭越に將軍の印を與へて梁に於て 楚に 軍功無しとて、項王其國に往かしめず、之を伴ひ ふ之を殺す者は九江王布なりと、(黥布傳)」韓王成 今は畏るゝに足らずとなし、乃ち陰に衡 の方濟北王田安をも撃殺して途に三齊に弁せ王 」燕王臧荼國に就き、因りて舊主韓廣 めて曰く、項別天下の主宰として其為す所不公 敖に介して、追ひて之を江中に撃殺せしむ、或は 至りしが、廢して侯となし、程なく又之を殺せ 7 稍, 々に背叛する有様となりた 膠東 を逐ひて新 王たり、 Ill 1-將田都を 王芮、 れば、項 徙 るこ 以來復た幾日 故主趙王の 地 平

彭城に

迎へて趙に返す、趙王因りて陳餘 張耳走つて漢に歸す、陳餘乃ち故の趙王歇 許し、兵を趙に遣る、陳餘も悉く其封三縣の兵 復せん、請ふ其國を以て齊の藩屏たらんと、齊王之を 以て不可なりと為す、聞く大王新に兵を起して且つ 侯背叛すること期の如し、而して其最も畏る べき者 撃たしめしが、彭越反つて角等を敗れり、項王の東歸 と爲して漢兵の東侵を拒ぎ、蕭縣 む、(高祖紀と合せず、蓋し史公約略之を言ふなり) し、齊と協力して常山を撃ち、大に之を破る、常山王 に兵を以てせよ、請ふ率のて以て常山を撃ち、趙王を 項羽が不義に顕從せずと、願くは大王餘に は漢なり、然るに是の時漢張良に韓の くと聞きて大に怒り、乃ち故の吳縣の冷鄭昌 王、漢王の皆已に關中を幷せ、又東方齊趙の己れ て、代王と爲す、是の時漢、兵を東に還し、三秦を定 に王とし、而して其羣臣諸將を善地に王とせり、 も亦甚だし、今、盡く齊趙韓魏燕の放王を徙して醜 如きをば之を逐ひて北の方、代に居く ぞ、席未だ媛ならざるに の功を賞し 0) **今**角等に彭 放地を徇へし 、四方騷 を代より 資助する を韓

王称意欲東、失。張擊,昌,齊項陳趙 由,疾,而,與又職,良,彭為,趙,羽餘,王 此不北賴以、欲、徇、越、韓叛、聞、爲、歇、 怨、往、擊、并齊得、韓、彭王、之漢代於 布,使、齊,滅、梁、關乃越以大。王 也将,徵、楚,反中,遺,敗、距,怒、皆是反 漢將、兵,楚書,如、項蕭漢,乃已時 之數九以,遺,約,王公令以,幷、漢趙 千江此,項即,書,角蕭故、關還,趙 至人,王故王止,日,等,公吳中,定王 冬行,布無日,不漢漢角令且。三因, 項項布西齊敢,王使、等。鄭東秦,立、

去つて其封國に就き、頂 ち 地方千里にして必ず水の上流に5 ち先づ人を以て義帝に白さし め 因,齊、聚、徇、院、殺、戰、羽 是れ 如きはか 留,亡而齊,田之,田遂。 連卒,叛。至、榮、遂、榮北 帝 者の 戰得之北降北不至。 西楚には儼として義帝の 者急に帝を促して行く 沙の居に 未, 數於,海卒,燒勝,城 柳りあら 月、諸 項王も 能、萬是多、係夷。走陽 に徙 ずと、遂に護送使 下、人,田所廣。齊,至。田 一も出で め 反。榮,殘其城平榮 居れり 0 西屯 城弟滅。老郭原。亦 今の湖 り、然らばい 、其群臣勢 楚 楚に 往くこ 陽田齊弱室平將 在に るあ 項橫人婦 屋,原,兵, T 0 **町**7者 王收,相。女,皆民會

梅でなる 200 て關 ざりし 3 に見えた 都す、今の濟南府長淸縣の こと、 當初 封じ 不和より 0) 在 3 に入らざり 秦の滅 封ぜり b 時 功多きを以て るを聞 H T 張耳に劣らざるを聞き居り るが ば封 に至りても、 の諸王を徙 > 燕王と為す、薊 然る後、自ら立ちて西楚の霸王 泗水 る、故に安を立てゝ濟北王と爲す、博 は す、即墨に都す、今の せ から 如 將印を棄でゝ去れ 楚に從つて趙を救ひ、其儘义從つて を立て、齊王となす、其故 る齊王建の孫 く、數、項梁に負きたるのみ ふとき濟北 因 n も、項羽 ・数・佛・東郡・郡・曾稽・東陽・吳の 天 9 ざり 之を十萬 津 T 兵を率ね楚に從つて秦を撃 て、新に其將相 府 南 西南に き、どの 内 皮 素常其賢に に都す、齋王田市を徙し 0) を 戶 數 、田安は、項 あり 繞 数城を下 侯 るを以て項羽に從つ 萊州府 あり、 ぐる三縣 成安君陳餘 1= 、又番君 封ぜり、項 かば、此 0 田榮は已に 0 從軍 て趙に功あ 初の 都 3 内に の地 芮 臨 なら 號 兵 の部 は張耳 蓝 頃 あ 3 其 h 關 河 都 T

九郡に一 上は皆 項王 王とし、彭 から 關中 城 在 に都 庫中 す、今 0 事に 0 係 徐州 3 府 是れ 以

吳芮、鄱の音ハ、即郡 南郡、時に未だ河南 南郡、時に未だ河南 天、關下、あかり 帝と 、號、し 為し、吳を東楚と為し、彭城 雖、無、功、此言暗に義帝 ス、身の屋室内にあらざるを言 字解 ず、放 王、周 称せ て翻 發難時、難 に特に霸王と日ふ、 末の楚國、 んか |君といふ、番君將梅鋗、番はの音ハ、即鄱陽、吳芮初め鄱畷 四寒、東に函 上に義 南郡 解、講 一、或 版圖廣大、故に江 申 は亂をいふ、暴露、サ 帝あり 名は は 谷、南に武闘 あらず 又 0 云ふ韓生、 假立 陽 媾 地方を西楚と為す、 に作 郡 瑕丘 な と称せ ふ、暴の 0) る、 の字は衔なり、翻君 には本縣名、先下。河 に 和也、瑕丘 るを言ふ 字 沐猴、獼猴 、西に散開 上陵地方 鄱 は 0 们 音 ラ 2 介た か諸 パク、義 同 * 放弑 じ、西 b サ 南楚 北 Ŧ 侯 に蕭 IV

漢 項 年四 出之國、使人徒義 月、諸 侯 患

混

馬欣は故機陽の獄掾とし 區分は、章邯を立てゝ雍王と爲し咸陽以西に王とす 等に賣りて以て漢王東出の路を距塞せん とせり して關中の地をば三分して秦の降將を王とし恩を彼 難、故に秦の遷謫者皆蜀 も測り難し、是れ亦甚だ心に恐るゝ所、項王范增乃ち なりしが、先きに に王とす、平陽に都す、瑕丘の申陽は趙 、機陽に都す、今の西安府臨潼縣是れ 、欣を立てゝ塞王と為 >翟王と爲し、上郡に王とす、高 都す、今の西安府興平縣是れなり、邯の長史司 なしと、 これが為め諸侯我を信ぜず遂に背反す び漢中の三郡に王た は本邯に物め なりと、故に沛公を立てゝ漢王と為し、 < 曲 より、魏王豹を徙 乃ち幸强 、巴蜀の地、道路險惡 我にあり、是れ亦甚だ心に र्गा 南の の語 に居る、彼を此に葬り去るに て 楚に降伏せし て嘗て項梁に思あり 地を下し 5 し咸陽以東黄 を為し して西魏王と為し め、南鄭に都す、而 T 楚軍 奴 日く めた 7 河以 思 相張耳 な 都す 、巴蜀 交通 鉅 り、瞬 也 3 る者 西に 鹿 所、 河 今 P な 0) 8 と為す、無終に都す、今の薊州王 都す、今の荆州府是れなり、燕王韓廣を徙して遼東 因りて其地を與へ敖を立てゝ臨江王 b 王に從つて關中に入る、故に芮を立てゝ衡山王 將臧荼は楚に從ひ趙を救ひ其儘從て關 し長沙郡 吳芮は蠻夷百越の衆を率ゐて諸侯の軍を と為す、六に都す、今の廬州府六安州是れ して其功常に軍中に冠たり、故に布を立て の順徳府是れより、常陽君黥布は項梁以丞楚 てゝ常山王と爲し、趙の地に王とす、襄國 より賢名あり、又項王に從つて關に入る、故に耳 歇を徙して代王と爲す、代に都す、趙の相、張耳は す、朝歌 數囘の功あり、故に立てゝ殷王と爲し、 今の開封府禹州是れより、趙の將司馬卬河內 は從來の都城に因り潁川郡に王として陽翟に都す 河南王と爲し、三川郡に王とす、 救ふ者を河上に迎へ 、義帝の に都す、今の衛輝府洪縣の の地に王とす、邾に都す、今の黄州府是れ 柱國共敖は兵を率の南郡を撃つて功多し たる功あり、放に申陽

より、

都す

*

立

將

輔け

2

73

なれば

董翳

を立て

王とす

の延安府是れ

廢丘

からないでは違約

雅陽

1=

都す、韓王

を

立

T

1

東北に

あ

り、趙

Ŧ

河内に王

を定め、

如くは

陰に謀つて日

亦關中の

地

田縣是

n

なり、

入る、故に

と為す、江陵に

なり、 此言尤も項王の意を害せり、項王乃ち天下平定 を彭城に遣り關中平定の事を懷王に報命せ らず、其天下を得ざるも亦宜なり、項王咸陽より使者 怒つて其人を烹殺す、項王纔に成功した るばか りに みと、衣冠は美なれども、衣冠する者の下卑なるを謂 を譏つて日 ふなり、今吾れ果して其然るを知ると、項王之を聞き るが如し、誰か其榮を知る者ぞと、嚮 まざれば、東歸を欲するの外ま こゝに都し天下に霸として諸侯に號合すべし て、富貴を鄕人に誇らんとす、是れ已に帝王の かるに項王にありては、目 T 忍貪婪なる大に沛公と異なり、天下を得ざる も亦宜 一く、封侯の事は約の如くせよと、即ち先づ咸陽に入 て焦土の荒涼れるを見、心には郷土を懐思して休 四面塞絶、形勢堅固なるに、地味も亦肥饒な 、富貴にして故郷に歸らざれば錦繡を衣て夜行す T 破る者は其地に王とせんとの約を謂 八或は項王に説きて曰く、關 其 質貨 く、世人言ふ、楚人は沐猴にて衣冠 人と婦 女とを收めて東歸 には秦の宮室皆焼亡殘破 12 餘念 中は 0) せ 山 なし、項王 んと 説者、陰に 河を阻隔し کم す、其 器に するの ٤, 0 形 殘

3 は も為し難し、然らば之を王とせんか、先づ秦を破 解したることなれば、今更故なくして之を除く とを疑ひて之を忌めども、 すことうなれり、然るに爱に最も其處置 王とすべきにあらずやと、諸將其己れに利なる 以上は、當然吾輩の實功ある者に其地を分ちて 帝の如き何の功勞なしと雖も、名義の故 天下を定めたる者は、皆將相諸君と某との力なり E 公なり、項王及び范増は沛公の他 1 T 野外に暴露すること三年の苦辛を嘗め、秦を滅して 然るに實際身に甲を被り剣 彼等に謂つて曰く、天下初めて大亂を發する時 と欲し、其策として先づ諸侯の霽相 空名を與へたるに過ぎず、而 式 其地 3 たれば、乃ち天下を分つて諸將 何の異議あるべき、一同解 、假りに周末諸侯の子孫を立てゝ以て秦を伐 として、先づ懷王に尊號 べからず、與ふれば危險此上なし、然れども與 に王とせんとの約あれば關中形勝 業に已にか を奉りて を執り、其事に首として をそろへて、善しと賛成 して項王自 がを立て 日天下を有せ 鴻門 義 を王とせり ch 0) と盟主たる ら王た に苦むは沛 〉侯王 の地 會見に和 S. を與 てり る者 h 之を 便宜 n

霸封。環賢棄,楚、榮、羽。田王都, 十封、有粉、擊、者故安建、爲、 王、萬三功印,秦,數、立、下。孫齊 九戶縣,於去。以,負,安,濟田 郡。侯。番、趙。不故,項爲。北、安、都、 都。項君,聞。從,不梁濟數項臨 彭王、将其入,封、又北城,羽蓝 城自梅在關成不王引力故 問消 立。銷。南然、安肯、都、其渡、秦 後 為功皮素。君將,搏兵,河,所 平、 子嬰 を引 西多。故。聞,陳兵,陽。降、救,滅、 楚,故,因,其餘、從,田項趙,齊

公,乃,日,又增分,分,與年身發,自,如, 爲。日。巴惡疑,天其籍滅。被,難,王約 王、蜀。道 約 公 立。而 力 定、執、假、王、尊。 王,亦險。恐。之。諸王,也天、銳,立。諸懷 巴關秦諸有。將,之,義。下,首、諸將王, 蜀中之侯、天荡。諸帝者事,侯、相,爲。 漢地遷叛,下,侯將雖皆暴後,謂,義 中也人之業。王、皆無將露以,日、帝、 都、故。皆乃,已,項日,功相於"伐,天項 南立,居、陰、講王善故諸野、秦,下王 鄭。沛蜀。謀,解。范乃當。君、三然。初、欲。

馬韓上耳,王郡河司尉爲禄属漢而。 卬。王故。嬖河都。都。馬董櫟;陽王。三 定,成立臣東高櫟欣,翳陽,以項分。 河因,申也都,奴陽為者獄西王關 内,故陽,先平徙,立,塞本,掾都,乃,中, 數都為下。陽。魏董王、勸。嘗。廢立、王、 有,都、河河瑕王翳,王、章有,丘章秦 功陽南南丘豹為為咸郡,德長郡,降 故翟王郡申爲翟陽降於史爲縣, 立,趙、都、迎、陽、西王、以楚、項欣、雍以、 卯,將 雒,楚,者 魏 王,東 故,梁,者 王,距 爲。司陽河張王、上至立都故王、塞、 至,軍中、度の音タク、測度(ハカル)也、間至,軍中、間中、に孔ある玉、玉斗、玉にて作れる酒器、脱、身、衆中心に孔ある玉、玉斗、玉にて作れる酒器、脱、身、衆中心に孔ある玉、玉斗、玉にて作れる酒器、脱、身、衆中心に孔ある玉、玉斗、玉にて作れる酒器、脱、身、衆中心に孔ある玉、玉斗、玉に大本を誤るを恐るなり、何んとなれば枝葉に拘して大本を誤るを恐るなり、何んとなれば枝葉に拘して大本を誤るを恐る

の大なるものは、微細の謹を顧るを用ひず、禮の大な

り謹慎を要とし、禮は相ひ譲るを本とす、然れども

るものは、微小の譲を解するに及ばず、之を略して

可

【字解】大行不、顧、細謹、大禮不、辭、小讓、行は固よに獻じ、玉斗一對は再拜して大將軍の足下に奉せしに獻じ、玉斗一對は再拜して大將軍の足下に奉せしてっ。第三日く、前五は四人。第三日と、東王曰と、神改、東王曰く、沛公は何處に在るかと、良曰く、實を上に置けるに、亞父は玉斗を下に置きたるのみなら上に置けるに、亞父は玉斗を下に置きたるのみなら上に置けるに、亞父は玉斗を下に置きたるのみなら上に霸上に歸り、立。に曹無傷を誅殺せり、「中を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其俘下を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其俘下を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其俘下を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其俘下を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其俘下を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其俘下を奪ふ者は必ず沛公ならん、見よ、今に我々は其管を受けて大將軍の足下に奉せしに獻じ、玉斗一對は再拜して大將軍の足下に奉せして財政、大行不、顧、細謹、大禮不、解、小讓、行は固よ

ア)、 智責(タッシャム)、過は過失、唉、音キ、恨嘆の聲(アず、栝杓は曲物にて酒を酌む器、杯の類、督、過、督はは少問(シバラク)也、不、勝二栝杓、酒を飲むに勝へ

猴。誰。日。皆肥說。不秦居。乙、而,知。富以,饒項滅。降數 王子嬰燒秦宮京 冠、之,貴、燒、可、王。耳、者、不、殘都。日、 收走 都。日,其 人,果,說歸,破以,關 貨 致,然,者故又。霸,中 寶 婦 日,鄉。心。項 阻 山 河,而 室,屠, 繡,欲、秦, 四 東、火 塞、人 ____ 地、或、月

沛 樊噲・夏侯嬰・斬彊・紀信等の四人と走る、此四人は皆 後日の責恐るべし、故に乃ち張良を留めて項王に謝 躇して曰く、今、席を立出づるとき、辭 徒歩にて劍盾を持して從走る、元來本道 は其儘殘し置き、己れのみ身を脱して馬に騎り、僅に めに代り献ぜよと、 ひて之を差出す機會を失ひ敢て獻ぜざりき、公、我為 じ、玉斗は亞父に與へんと欲したるなるが、其怒 禮物として何物を持參せられたるかと、沛公曰く、我 せしむることとせり、張良沛公に問ふ、大王來 と爲り、我は せずとかや 公逐 るは の軍は鴻門にあり、沛公の軍は霸上にあり T 壁 南に折 に解せずして逃去る、然れども徒 拘泥して餅し去ることを爲さんと、是に於て に於て 對、玉斗 魚類肉類と爲れる場合にあらずや 今は如何なる場合ぞ、人は方に庖刀爼板 、大行は細謹を顧みず、大禮 れ以て 不都 對を持參せり、白璧は項王に獻 あらず、沛公の去るや百餘の 良謹諾と對ふ、是の時に當つて 合なるべ 霸上に至る也 し、之を為すこと奈何 せずして出 るに沛公は今 は は 小讓 鴻門より 逃去らば 其距 3 、何ぞ 從騎 な

意ふに當時の飲、今と少しく異なりと辯ぜり、更衣或は厠に行き竟に去りて主人知らざる老 を度りて乃ち入れと、言畢りて馳去り、少時にして軍ば、暫時にして達すべし、君、我等が軍中に 到る頃合 刻を度りて宴席に入り、謝 公の未だ去らざるに項羽、陳平をして已に ば、餘り久しきに過ぐるに、項羽范増の疑はざるも怪 況や提路を取りた 此の如く迅速なるは驚くべきも、昨夜項伯が と聞きては容易の路程にあらず、而 中に達せり、我國人(日本人)の耳にて二十里の 取つて行くこととせり、沛公張良 鴻門の南なる酈 しむ、不問に置けるにはあらざるなり、さて張良 しむべきなれど、古人は已に漢人の宴會、 張良に至る迄出でて宴席を虚くしたる時刻より言 る路なる んで臣良をして白璧一對を奉じ再拜して大王の足下 て曰く、 、格杓に堪へかね、親しく大王に解する能はず、謹 、此間道より吾軍に至るは二十里 を思 は 山(い) い、必ずしも怪しむに足らざるべ るに於てをや、又沛公樊噲は勿論 下より世陽に道して斜に間 て日 に別るゝ時、 く、沛公酩町 て沛公の歸陣 に過ぎざれ 中坐に多く る者あり 之を召 往復せ や沛 即:離 は 道 時

入過。公步侯則。公諾不王何,乃,爼 沛二謂,走。嬰置。軍、當、敢、玉操、令、我 公十張從斬車在是獻斗日張為 已里良酈。疆騎,霸時。公一我良,魚 去,耳、日、山、紀脱、上項為雙、持。留、肉 間,度。從。下信身,相。王、我欲自謝。何, 至。我此道。等獨,去。軍人獻。與"璧良辭"。 軍至道芷四騎四在之。一問,為 中軍至。陽之人與十鴻張父。雙,日,於 張中吾間持樊里門良會欲大是 良公軍行劒噲沛下日其獻王遂 入,乃,不,沛盾,夏公沛謹,怒.項來"去,

事情に 無為項而上已聞。軍、王、使謝、 傷、之、王、破、亞至、大足足臣日、 虜、天之、父、軍王下、下、良、沛 E 其 一都尉の 儘逃 3、10年をして之を召ばし、 矣下,日,受矣有,項玉奉。公 沛者。唉玉項意王斗白不 公必、豎斗,王。督目,一璧 至, 沛子置, 則, 過, 沛雙、 軍公,不之,受之,公再雙,杓; 立也足,地璧,脱安拜,再不 に走還 珠 吾 與 拔 置。身,在 奉 拜 能 ば、沛斯 殺、屬謀、劍,之,獨,良大獻。辭。 斯か 曹令奪,撞,坐去,日,將大謹,

噲日く、臣今死ですら避け申さぬ、 巵酒の二杯三杯、 壮の狀を見、呼んで曰く、壯士、尚ほ能く飲むかと、樊 を學ぐる能はざるが如く多く、人を刑罰することは 安んぞ解するに足らんや、然れども巵酒は兎も角、臣 賞もあらず、却つて小人の説を信聽し、有功の人を誅 苦して功の高きこと此の如し、然るに未だ封侯 變とに備ふるに過ぎず、豈に他意あらんや、沛公の勞 も敢て其身に近づくる所あらず、秦の宮室 を 封閉 とせんと、今沛公先づ秦を破り咸陽に入り、一貨一物 と約して曰く、先づ秦を破り咸陽に入る者は之を王 其煩に勝へざるを恐る ゝ が如く勤む、故に天下皆之 れ秦王虎狼の如き心を以て、人を殺戮するとは其數 一言、大王の省察を請はざるべからざるものあり、夫 下に覆せ、爼板として豚肩を載せ、劍を抜いて庖刀と 秦の繼續者のみ、失禮ながら大王の爲めに 取らざる せんとせらるゝは道を得たりと謂ふ て退いて霸上に宿陣し、以て大王の來着を待てり、故 將を遣り關を守れることは、他盗の出入 と非常の 叛けるなり、(秦を借りて項羽に 諷する) 懐王 、肉を切りつゝ、類ふくらして之を食ふ、項王其勇 べきか、畢竟亡

市公司出、項王使都尉陳平召, 市公、市公司、中省出、未辭也、為 之奈何、樊噲曰、大行不顧細謹, 大禮不辭,小讓、如今人方為,和謹, されども沛

公の身は今や風前

の燈火

75

9

坐、大有未、入、王、近。先,先,天 有,與一來,封"破,破,下 樊王,功 故。閉。秦,秦,皆 封非 不。之 招。從,取,人,侯 常 遣。宮入、入、叛,不知 室, 咸咸還陽。陽 也、勞 將, 之、懷 守机 而,苦。關,軍,毫 者、王 聽。而 者、霸 毛。王 與 細功備。上不之諸說,高。他以,敢,今將 有,續以,耳 公應、竊、欲、如。盜、待。有,沛 起, 日、爲、誅此, 出 大 所 公

に樊 して再び起上り、立ちながら之を飲む、項王又呼ぶ、臣一斗入れの卮酒を與ふ、噲は難有く存ずると一禮なりと、項王曰く、壯士、之に卮酒を賜へと、言下に其 看無かるべからず、之に豚肩を賜へと、臣下又之を與 何為る者ぞと、張良曰く、沛公の倍乘者樊噲と申すけ片膝立直して身構へながら呼んで 曰く、客は是れしは言を侯たず、萬夫不當の項王すら劍に 手を 髪逆立ちし、眦こととくく裂けたり、項莊輩肝膽の を側でゝ矢庭に衞士等を撞仆して遂に入り、帷を掻止めて納れざらん欲しゝも、噲物ともせず、擁する盾工軍門に入る、軍門の左右に立てる交戟の衞士、之を 公と死生を同じうせんと、即時に剣を帶び后を 上げ西向に突立ち、大の眼を瞋らして項王を視る、 く、此れ迫れり、一息の猶豫を許さず、臣請ふ入 何如と、良曰く、甚だ急なり、今や項莊劒を妆 噲を見る、噲、張良を見るや直に問 是に於て へたるも、 ふ、舞ふと雖も真意は沛公の身上に 噲毫も困却したる氣色もなく、持來た 張良起ちて從騎の待ち居たる軍門に 故意にせるにや、生なる豚肩を與ふ、然る ふ、今日 ある らし、 n る盾 至 h 樊 頭

な、住撃つことを得ざることめり、 とはと剣を抜き起つて舞出しぬ、項伯之を夏蔽する いつも巧に其間に立入りて身を以て沛公を翼蔽する いつも巧に其間に立入りて身を以いて項莊と相ひ列んで らずと心付きければ亦劍を抜いて項莊と相ひ列んで らばと剣を抜き起つて舞出しぬ、項伯之を見、只事な 出けれども劍舞せんと、項王諾と許せしかば、項莊然

翼蔽、鳥の翼にて雛を蔽ふが如き態を爲す、 は、若入前爲、壽、若は爾汝(ナンヂ)、俗に オマ ~、 にと解〕 今:將軍與ऽ臣有ы卻、卻は隙也、亞父、亞は次 を缺き、端尖れり、古人佩びて飾となし且つ結べる紐を缺き、端尖れり、古人佩びて飾となし且つ結べる紐を缺き、端尖れり、古人佩びて飾となし且つ結べる紐を缺き、端尖れり、古人佩びて飾とない。ことを得ざるに苦めり、

也,者'曰,於,

噲項今是

日,莊日張

此。拔,之良

迫、劒,事至,

矣、舞、何軍臣其如,門。請,意良見

と飲まる 宴席に入りて壽し畢つて曰く、君王久振りにて沛公 撃殺せ、然らずして彼を生還せしめなば、久しからず 辭を述べ畢らば、請ひて劍舞に事寄せ、沛公を其座に して決断に乏し、汝宴席に入り前んで盃を獻じて一祝 び、謂つて曰く、君王(項羽を指す)の人柄、情に脆く 范増堪へかね、座を起出でて、項羽の從弟項莊を召 ども項王は默然として毫も之に應ずる氣色もなし、 決と同音なる故、速に決斷せよとの謎なりし也、され 佩びたる玉玦を擧げて合圖するを數囘、是 れは 玦は す、亞父とは餘人にあらず、即ち范増の敬稱なり、沛 即日沛公を留めて酒宴を聞くことゝなりね、其席た して汝等は彼の俘虜とならんと、項莊實にもと領き、 公は之に對して北向して坐し、張良は其側に 西向し る、項王と項伯は東向して坐し、亞父は南向して坐 みならず、久々の會見誠に以て喜悦の至りなりとて、 告をなせり、然らざれば籍の君を疑ふ何を以 て侍坐せり、范増沛公を除くに好機逸すべから 如きに至るべきと、項羽より却て辯解に出で 、宴中畏ろしき眼光にて項王にめくばせし、腰間 ゝに、軍陣中是れといふべき慰もなければ、 たるの 7 此 0)

なるべけれと、沛公の分疏も順にして明白、項伯の言なるべけれと、沛公の分疏も順にして明白、項伯の言ななべけれと、沛公の分疏も順にして明白、項伯の言ななべけれと、沛公の分疏も順にして明白、項伯の言ななべけれと、沛公の分疏も順にして明白、項伯の言

 意を告げ

<

を釋

3

3

親

しき縁故

出 B

でて項伯

少時にして日く

せば

地

72

說

350

Z

int

ば、公豊に容易に入るを得んや、沛公は大功 夜中に僻し去つて其軍中に至り、沛公の言を落ちな 可なりと、沛公曰く、承知せりと、是に於 背かざるとを言はれよと、項伯之を許諾し、沛公に謂 伯、某の為めに將軍に向つて某の敢て 從來の 夜に將軍の到るを待てり、豊に敢て反せんや、 所以は、戦亂の今日、他の盗賊 を指す)を待受けたり、將を遣り函谷を守らしめた 庫は一切之を封じて手を觸れ 不義ならん、大功あるに因りて之を好遇せんこそ道 はざるべからず、今、人大功あるに反って之を撃つは かも私する所あらず、吏員民口 公先づ關中を破り秦の巢窟を覆したるにあらざれ る事情已むを得ざるに出でた 日早朝鴻門へ参陣せられて一 く、此事勿論某よりも申すべきも、君に於 告げ、更に自己の意を以て之に言ひて日 酒を項伯に進 いて曰く、某關 の好みを結ばんとまで懇談を表 め て共壽 しめず の出入と非常の 中に入りて は明に簿冊 言謝せられざれば不 るの を 、以て將軍 祝 み、斯くし て項伯再び 金銀財物 に記 南 に將 りと調 變に備 くは 7 る 羽

反。與以近,婚見。事。臣。沛 沛 於,可,也 乎非遣,籍,姻,沛之流 公,是不,項 願, 言,項 蚤;伯 常 將, 吏 日 公,張 也守、民,吾。沛良 報來伯自,許伯 復。來,諾。具。日關,封。入,公出,君 王夜潮。謂。言。夜者府關。奉。要爲。君。 因,去,項沛臣 望。備,庫,秋巵項我少 言。至。王、公、之、将他而豪。酒。伯,呼、長 日,軍沛日,不軍盗待,不爲,項入良 中公旦 敢,至,心将敢,壽,伯 具。日,日倍,量出軍,有,約。即,得,長 不以,諾、不、德、敢、入、所所爲、入。兄於

光 破關中公量敢入乎、今人有,

獨り 合 告じ、意外の事とて、沛公大に驚きて日 を送れる者なり、今沛公危急の事あるに、之を棄てゝ 張良肯はずして曰く、僕は韓王の命にて沛公が一れば、沛公に従つて俱に死するは無益なりと、然 張良に會見し委曲に項羽が沛公に對する事件を告 きを慮り、夜中に馳せて沛公の軍陣 沛公に従つて其軍中にあ げざるべからずと、乃ち幕中に入りて委細を沛公 季父なるが、素と韓の張良に親善なりき、是の 、良を呼出し伴去らんと欲して曰く、君は韓の 如何に處すべきとて、殆ど為す所を知らず、張 策を畫せる者は誰なりしぞと、沛公曰く、郷生 逃去るは不義なり、 對へず、却て問ふ、大王の爲めに此關門守 楚の左尹の官に居れる項伯なる者は 如何ありても之を沛公に りし かば、項伯良 に往き、私 く、斯かる 項 良 西 臣 張 3 羽 征 な 1-

それ急に撃つて之を失ふ勿れと慫慂せり、天子の氣なり、此度の罪過のあるこそ好機なれ、將軍天子の氣なり、此度の罪過のあるこそ好機なれ、將軍るに、其狀龍虎を爲し、其色五彩を成すと、是れ 即 ちなに、本是れ人望を得ん野心にて其目的たる 小にあらは、本是れ人望を得ん野心にて其目的たる 小にあらながら、寸毫も取る所なく、一人も近幸 する 所なきながら、寸毫も取る所なく、一人も近幸 する 所なき

【字解】 函谷關、漢書に至。函 谷 關。に作る、關は、舊 新二あり、舊は弘農の衡山嶺にあり、新は河南の穀城 にあめ、項羽が入れるは即ち舊關、戲西、戲は水名、北 にあめ、項羽が入れるは即ち舊關、戲西、戲は水名、北 名、霸上、地名、霸水の西、霸水も 亦北流 して 渭に合 名、霸上、地名、霸水の西、霸水も 亦北流 して 渭に合 す、其志不」在」小、天下を取らん 大望あるを 言ふ、五 ず、書赤黄白黑、采は彩に同じ、

善、楚、 良,項 具,伯 留 左 告,乃侯 以夜張 項 事,馳。良。伯。 欲。之意張者 呼流良 項 張 公,是,羽, 良,軍。時季 與私。從,父 俱.見,沛也 去表。

此、人、居、萬、四為、有、欲、曹 關。山在,十 擊,爲,其 擊,之, 龍志財東霸萬破頭虎,不物時上、在,市郊成、在,無,食,范新公大 勿能失。虎、 公,大.使,人, 於 小所 增 豐, 軍,怒,子 采,此, 吾 說非鴻 當,日,嬰, 取,財 不 天子氣 貨, 門是,且 婦 項 女好,羽赤海、美、号、公、 相、相 女 時。日 項饗。 羽,士 所 姬,沛 兵 兵卒,盡,公

講義

項羽

は是れより行くく

涿

て關を守衞し、直に入るを得ず、又沛公劉邦已に に向つて進發す、已に到れば一隊の兵 秦の地を略取平 也氣,幸,今公十 なりし 居 が謀主なる居巢の范増、羽に説いて曰く、 後に切迫せり、豊に危險の なく而も烈火の如く怒れる彼に撃たるゝは、一 b は る間 ば 初が兵は四十萬にて新豐の鴻門に陣 1-よし、吾れ明朝士卒を饗し慰勞を畢りなば、直に爲め して曰く、さてく憎むべきは沛丕が所爲なるかな、 に歸せしめたりと、項羽之を聞き、重ねて大に怒を發 の民望を收め、又咸陽府庫中の珍寶は悉く己が所有 E T は せしめて、遂に關中に入りて戲西に到れり、時に沛 n 撃つて沛公が軍を破摧せんと、是の時に當つて、項 たらん野心ありて、降王子嬰を其相たらしめ 項羽に密告せしめて日く、沛公は關中豐富の 十萬人、少しく隔りて鴻門の西南な 霸上に陣したりしが、未だ項羽と會見する を得ざ に先ちて武闘より入り威陽を破れりと 、怒ること甚しく、黥布等の猛將に命じ關門を撃 其兵數項羽が軍の四分の一なるに、勇猛天下 る時は、財貨を貪り美人を好んで、不埒至極 に、沛公が左司馬の官、曹無傷といふ者、人を以 に、今財物山を成し、婦女林の如き關中に 至りならずや、特に項 せり、沛公が兵 る霸上に 沛公山 て秦 入り 地に 夜 1-庫

せ

吾等を俘虜として東歸せん、然らば吾等の 虐待せら 不穩の狀あり、山東の諸將微に其謀計を聞き項羽に 卒は戰勝の勢を賴み、多年の欝憤を霽すは此時と、多 たる者、數年前まで秦の為めに或は絲使或は屯戍に 劇を惹起せり、其故を尋ぬるに、現在山東諸侯の東卒 窃に計りて曰く、秦の吏卒我に降れりと雖も 其數尚 告げたれば、項羽乃ち當陽君黥布及び蒲將軍を召し、 されば秦の東卒等多くは窃に相ひ語りて曰く、章將 くは彼等を奴隷同様に使役して輕しく之を折辱す、 は之を輕侮し其待遇無法の事多か りき、然るに時勢 徴發せられて秦中を經過したるに、當時秦中の東卒 「講義」 變、今や秦軍諸侯に降伏する蓮命となり、諸侯の吏 合なれども、若しも破ると能はざるときは、諸侯は 妻子を誅殺せん、當に之を如何すべきと、其議頗 >は一層甚だしきのみならず、秦は必ず蓋く吾父 く關內に進入して秦を破らば、我等にも極めて好 等は己に吾等を欺きて諸侯に降れ 大軍已に新安に到着したるが、爰に一大慘 り、諸侯の軍今

元年十一月の事なりとす、
一年十一月の事なりとす、
の郷里なる關中に至りて後ち、我命令に聽從 せ ざる
ことあらんか、事實に危險なり、然らば未だ關に入ら
ざるに先ち悉く之を擊殺して唯、章邯及 び 其長史の
於、都尉の翳のみを生存せしめて之と秦に入 る を得
欣、都尉の翳のみを生存せしめて之と秦に入 る を得
欣、都尉の翳のみを生存せしめて之と秦に入 る を得
亦とすと、是に於て楚軍夜に乗じ、秦卒を襲ひて其二
十餘萬人を新安縣城の南方に阬殺 せ り、是れを漢の
元年十一月の事なりとす、

(モシ)なり、(モシ)なり、 異時、猶ほ他日と言はんがごとし、過去將來【字解】 異時、猶ほ他日と言はんがごとし、過去將來

項 關、不得入又聞沛公 行略。定秦地[至]。函谷 邃. 羽 大。 怒、使、當 戲 西流 陽 君 石剧、有、兵守、 公軍,霸 等擊場。 公左司 項

く、善しと、項羽乃ち邯の使者に許諾の意を傳へて、許せんと欲す、可否何如と、軍吏齊しく賛成して曰 雍王と爲して楚の軍中に留置し、其長史の欣を 上將 邯と與に洹水の南方、殷都の 墟に於て會見すべきを べり、而して我に於ても糧食少ければ、吾は其請を聽 謀議して曰く、彼已に大敗し約を請ふもの 再度に及 に見えしめて降伏を約せんとす、項羽軍吏を 召して 破れり、是に於て章邯愈、恐れ、再び使者を以て 總軍を引率して秦軍を鄴西の汙水上に撃ち大に之を と戰ひ兩度まで之を破りたれば、項羽其機を逸せず、 め、途に西進して新安縣に到著せり、 軍とし、章邯が軍を率ゐて討秦同盟軍の を説きて慨然たりき、項羽之を憐み乃ち之を立てゝ す、章邯約の如く其地に至りて已に盟ひ畢れば、項 一戸津より渡過して澤南の一處に軍せしめ、秦軍 見えて流涕し、親しく為に趙高の姦邪專恋の事 將軍 命じ 晝夜を通じ 先導たらし 兵を引 項羽

の盤庚が都城の墟、北家と名く、い始成、候は軍候にて官名、始成は其人の名、殷墟、殷字解】 狐疑、狐性疑多し、故に疑惑を狐疑とい ふ、字解】

至,軍,以,誅、不,降,卒奴秦 秦 能、諸 計,告,吾 多,廣 軍 中,侯 父 諸 侯竊使降 中。日,項 今 不、秦、羽、母 中, 侯 言,之,諸 妻 虜 能, 日, 輕, 侯 吏子, 吾入, 章 折 諸 卒 項 章 聽,吏 邯 羽 諸 屬,關一將 長 必。尚。乃 辱、侯、 危。衆。召。將 破,軍 秦,吏 而 不 其 黥微東泰等東卒布聞泰大。許卒乘。 院素 欣·都 多,使 布·蒲 如" 心 無 尉 其必善吾秦,勝,狀成 擊 翳和 般,服、將計、盡。即意屬,吏多。及"過"

面して孤と稱せざる、此事、身鉄質に伏し 榮、孰れか是れ辱、請ふ之を熟思せよと、 ひ、妻子を併せて大戮となるに比視せば、孰れか是れ て重刑に遇

鉄は斧、質は人を斬る椹、妻子為、僇、僇は戮と同じ、自稱して孤といふ、身伏…鉄質、其身要斬の刑に遭ふ、南面稱、孤、君主の座位は北にありて南面す、王公は 便なればなり、内部、郤は隙也、政府の我と隙ある者、寨をつくる、故に此名あり、楡は胡駒の突衝を防ぐに 院にす、楡中地、秦の上郡に在り、蒙恬楡樹を 植ゑて 子の括も其號を承く、白起括を射殺し、降卒四十萬を は疾には、これに見ゆ之と混ずる勿れ、疾妒、疾に故道縣あり高祖紀に見ゆ之と混ずる勿れ、疾妒、疾 2 は嫉と通ず、北院馬服、趙將の趙奢、馬服君と號す、其 所、皆司馬の官ありて之を司る、故に其外門を司馬門 【字解】譲章邯、譲は責也、司馬門、宮垣兵衞の 呼ぶ、放道、故はモトと訓ず、前來の道路、咸陽の西 在

夜引兵度,三戶軍潭京 欲約約未成項羽使, 章邯狐疑、陰使,候始兵 上南,與秦戰 成使項羽

【講義】 たるも、章邯は本、秦の名將なれば項羽遽に信ぜず、 始て孤疑を懷き、陰に其軍候名は始成といふ者をし 之を許すに如かずと思惟しけん、約の未だ 先づ之を撃破し其膽を奪ひ其心事を確めたる上にて て項羽が軍中に使者たらしめて、降を約せんと求め 斯く內外三人より忠告を受けたれば、章邯 成立せざ

陷し を嫉 13 るに と數千里なりき、 B を討ちて馬服君が軍四 h 餘 を脱 趙 h 勿論なり、然らば勝にも敗にも、吾輩は終に彼が きやう無し h 邯 こと明 功 其末路は死を賜りしにあらずや、蒙恬 、南の方、 も亦章邯に書を遺りて曰く カジ 高 事を國內に T 妬すべ 軍に到 72 多き、秦限 、敵地を略取したること殆んど算し 別路より の方戎狄を逐除け、以て楡中の地を開拓せ から 追 難し、願くは將軍之を熟計せよと、時に趙將陳 りし なれ は 故に、其過 ば 楚を征し し、戦勝つ能はざれば、死罪を免れ b も路已に異なるを以て及ばざりき、欣、章 んことを慮り、敢 、今我軍 走れ 擅にし、彼が 、「いに報告して曰く 、欣危懼 秦の ある地 而も其結局 り、趙高果して人をし 薄 、戦能く勝つとも T あ を以て盡く之を封ずること能 恩此に至れ して章邯 十萬を阬殺 郡郢の二都を取 3 に及 下にある者何事 は陽周縣 7 、昔、白起 が軍 來時の h 、趙高丞相を以て で法律を假りて之 る所以は し、其他敵 に走還 、趙高必 道路 1-り、北 難 秦の て斬ら て之を追 何ぞ か せり、欣又 も為す 0 9 城 0 す 將 ざるは 將 出 き、而 方 を 吾功 れた るこ 2 2 T 、趙 攻 為

誅戮の しては 孤特 せられ 外に居ること久しくし 隱蔽 を以 兵は十萬を以て數ふるに至れ 1 之を知れり、 2 並 を誅除 秦を亡すものなることは、 に彼は國法を假 此 をし て共に秦を攻め らずや、將軍何 對しては亡國の將となり、內外援 けれども、今日の形勢となり、百事急迫して、最早 に起る者、愈、多きを加ふ、彼の丞 ること已に三 獨 0 L て主君 立して永久存在せんこと 、姦邪に妨 ん、豊に危か 如 禍を脱れんと欲す て更に將軍 難 する方法を取ればなり、今、将軍も秦の けれ 然るに今將軍の境遇 しからば功あ ば、二世の己を誅罰せんことを恐る 明を蔽ひ 歲 り将軍を誅して敗戰の げら ぞ兵鋒を轉じ 、其地を分ち に代らしめて以て自己が蒙る 其 らずや れて直 間戦敗に因りて喪失せ T 、其籠遇を保ち來 、丞相を始 るな 、且つ此次 智者愚者を問 るも談せら 諫す り、而 7 7 り、夫れ 諸侯と合從し、相約 を求むる 72 3 方に王とな 和高 な め 能 る、内、 0) n T 3 將軍 內 はず、外 大亂 責を塞ぎ 山東 は n は 隙 四面皆敵、 出征し るこ 素常諂諛 なきも誅 主君 0) 3 0) 將 多きこ 1 と久 諸侯 所 1= ~3 2 、南 0

以,恐、多、失、之,者、開、竟、阬、書,願、 塞。二彼,以,今功榆賜,馬日,將 責,世,趙十將多,中,死,服,白軍 使,誅高萬,軍秦地,蒙攻 起 孰 功,可* 為,計、戰 人,之,素,數,爲,不數恬城 更故談而秦能千爲略秦之 代、欲日諸將盡、里秦地 將、陳 能、 將以,久。侯三封、竟將、不南餘、勝、戰 軍法,今並歲因,斬,北可,征,亦不 以,誅事起,矣以,陽逐、勝,鄢。遺,免、勝。 脱,将急,滋,所法,周,或計,郢章於高 其軍,亦盆亡誅。何之人,而。北郡。死,必。

> 妻地與常諫愚亦禍, 子 南諸 存。外智、誅、夫、 豊為。皆無*將 爲面侯 僇,稱為不亡知功 乎、孤、從、哀、國、之、亦居、此、約、哉、將、今誅、外、 且,人。 孰,共_將 孤 將 與攻軍特 軍 身秦,何,獨內 之內 伏。分,不立不亡。郤 鈇、王、還、而、能、秦,有。 質其兵、欲。直無,功

【講義】 ば、二世皇帝、使者を以て之を責譲せしむ 戦せざるに、秦軍兵氣沮喪し、退却數囘に及 んことを恐れ、其長史司馬欣をして事情を分疏 せり、項 召見せず、是れにて彼が章邯を信ぜざる 請はしめ 留りて召を待つこと三日に及べる 羽漳水の 時に んが為め上京せしむ、欣成陽に到り 秦の章邯 南岸に陣して之と對持の章邯澹は鉅鹿の南方棘 方棘 原の も、丞相は 、邯罪を 地 1=

の弊 にして、敢て兵士を其外に縱ちて秦軍と鋒を接する 餘所に壘壁を連ねたるも、僅に其壁を保守するのみ 碎 然として恐怖せざるはなし、是に於て 項羽已に秦軍 ものなかりき、項羽の秦軍を撃つに及びて、他の諸將 軍も趙の厄急を聞きて、鉅鹿城下に赴援したる者、十 こと質に諸侯の軍に冠絶.せり、元來燕齊代等諸侯の に投じて死したり、是の時に當つて楚兵の鋭勇なる を殺し、王離を捕虜にす、沙間は楚に降らず自ら火中 示 せり、是に於て全軍疾風の勢を以て途中の秦軍を するのみと決して一點歸還の心無きとを其士卒に んで其軍と遭遇し、相戦ふこと九囘にして、彼れ 破して北進し、鉅鹿城下に到達すれば直に王雕を 拂ひ、唯、三日分の糧食を携帯するのみ、斯し | 盡く膝行して前み、一人の敢て仰首して彼を正 九天に震動す、其壯絕悽絕なる、望觀の人々惴々 處を出發するからは 壁上より秦楚兩軍の戰狀を望觀するに、楚 賴める甬道を絶ち、大に之を破りて 其將蘇 、諸侯の將を召見したるに、陣門に入れば恐懼 一以て十に當らざる者なく、大呼 必死の覺悟を以て秦車に の戦 角 カラ 突

> 視し得る者なかりき、楚の上將軍なる項 に属せり、 りて始めて諸侯の上將軍となり、諸侯の軍皆其指 羽は 是 1= 揮 由

ふ、轅はナガエと訓ず、俗に梶棒と謂ふ、膝行而前、膝を列べて陣と為し、車轅相向ふ、故に陣門を轅門とい 其兵を出す、惴恐、惴音ズキ、亦恐なり、轅門、軍行民の住む家屋、甬道、前節に解す、縱兵、陣を離れ民の住む家屋、甬道、前節に解す、縱兵、陣を離れて字解】 釜飯、飯はコシキ、俗に井籠と謂ふ、廬舎、 頭にて歩みて前方に出づ、 と謂ふ、廬舍、庶 車 T

陽、郡、未、章 留、章 戰、郡 高 郡 秦 軍。 敢,信出,之 馬恐軍門使數 心、長 故 道 逍 却。二 長 史 日 高 欣 趙 欣,世軍。 請使。漳 高使、還。高 用、人、走、不事、人。南、事、追、其 見、至、讓、相 於之,軍有成章持

るに用ふるにより借りて 小柱と邪柱とは他 抵 抗の 意となす、報命、君上とは他の材を支持す

下,時。王 戰。於,日,河,陳 將。名 離,絕,是糧,皆除卒聞。羽 涉其至以流復。二諸 餘冠。間甬則,示、船,請,萬、侯、殺、 壁 諸 不 道, 圍 士 破, 兵, 渡, 乃 卿 莫。侯。降,大。王卒。釜項河,遣。子 敢,諸楚,破。離,必 甑,羽 救。當冠 縱。侯自,之,與死。燒,乃鉅傷軍, 兵,軍燒殺。秦無。廬悉,鹿,君威 及收款縣軍一舍,引,戰蒲震。 楚 鉅 當,角,遇。還 持。兵,少,將 楚 擊。鹿是,廣九心三渡。利軍,國

屬。由,無,秦侯、不、秦,焉、是、不、軍,軍一諸 始。膝項無。以,將 為一行。初不。當,皆諸而召人十、從, 侯前見人楚 上莫諸惴 兵、上 敢,侯,恐,呼觀。 將 軍,仰*將,於,聲楚,諸視、入,是動,戰 侯項轅已天土皆羽門破諸無

當陽君及び蒲將軍を遣して二萬の士卒を將ゐて黃の內に震ひ、名聲は諸侯の國に聞ゆ、乃ち先づ部將 通じて其渡船を河水に沈め、叉陣中用ひたる釜甑等 全軍を舉げて自ら之を引率し、黄河を渡れば各一 羽に請求し來りたれば、項羽遂に意を決し、乃ち楚の て楚軍勝利少く、趙の將、陳除よりも重ねて接兵を を渡りて鉅鹿の圍を救援せしめしも、敵軍盛强にし 具は之を破壊し 項羽已に卿子冠軍宋 、宿陣に充てたる民家は 義を誅殺し勢 威 隊に

どに 稷 飢 す に怖 鹽 此 5 0 5 3 を斬落 1= 1h 0 3 參謁 T 寒を 委屬 3 ると、是の より還り 0) 臣 、楚國 で居 は 反抗 依 1 奔 撃に かっ 6 かせら 且 1= せ 3 走 恤 は 6 は 披 たれ あ 3 す あらずと言 \$5 8 我 其 强 2 る者 露 來れ 1-建 て一己の私事 心 りとも謂 時に Ŧ 此 國 (趙を 國 而して今を軍 * ば、此 反 立 8 72 度宋義 兵 內旨 內 加 、彼 なく 8 ば、次將項羽 るなり、 亂 共同 當 新 取 0 3 たるは なく を以 0 カラ 人數 1-3 3 ひ出 、徒に其子の ふべ T 齊 帳 破 は は 諸大 就 しと密謀 敗 て項 3 必 T を出拂に かっ き場合、 の内 を営む L 將 項羽 い し、吾 中に出し 然 司 h れば國家 n 7 口 將 羽 何 は早天を冒し の勢なり、 に於て 72 誰 に仰 斯か 0 を揃 を通 を立 60 か んの 3 家 ば 一人と づれ 出 然 元 王 なれ 3 か て事 1= せ U T 世 3 0 T 疲敝 坐する も項 將士 に毫 安危 T T 內 b T 7 刀に > 趙 其子 當 3 楚國 誅 假 取 彼 * 形 1= て上 て彼是 8 は 鋫 宋 宋 之を も席 待 5 然 今將 は 0 0 かせし 告げ 送別 1: 義 懸 n 義 實 1-0 威力 將 車 軍 先立 0 は 卒 2 將 に安 て乗 7 軍 反 秦 8 け 12 頭 重 無 社 0 7 軍 75 置 0) せ 8

年十 楚を使 に報 に齊 る當陽君 まゝ項羽をして上將軍たらしむ、 きて b 遠 告 0 慮 ___ 月の はせし 者 國 は ・蒲將軍等も皆項羽に從屬 とし 境 後 72 事に係る、是に於て一 むい 內 日 3 S 0 彭城に至りて、宋義 なり、さて已に宋義を殺 懐王何の異議もなく諸將 は 追及 為 め 未だ公然懐 びて之を殺さ ならずと、至急人を走ら E 0) 飛誅戮の 時 是れ秦 せ 卿 可 8 子 が崩末 57 冠 0) 0) 二世 軍 定 9 斯 め 1-を を生か 3 懷 72 屬 0) から T 3 せ

會、芋菽、菽、 たば 7 帳、徇、意 奇 を容ると、 る、漢書 恤、 其私、 糧食、 麗に 中、上 一人として抵抗する者なし、註に日 712 掃除 b 因 徇は には 0 無鹽 趙 然らば半 、恤は哀恤に 趙國 はは L 0) 食、趙の 72 半菽に作る、其註 豆、芋と豆とを雑 、縣名、今の 居 也 、其勢、其 る如くに兵士を 、私事にば 帳 菽とは ても 食 內 なり 山東泰安 五 たよる、 かり力を入る 合 就 ゆき、帰境内 フ 1 0 一人も残さず出 叉 3 豆 半 T 一府に 、新造之趙、今立の 7 7 は ハレ 食の あ b く意、 國 .0) 2 H 高、 しと訓 、名、半 りに せる 內 其 大

に素といふ大敵を控へたればこそ、齊と別に事を構や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今楚は前や、田榮は實に道理の分からぬ强情者なり、今世は前の大震と呼吸を持ている場合に対している。

勢を以てして、基礎未だ堅固ならざる趙を攻むるこ 其の疲敝を待受くるなりと言ふ、夫れ秦の强盛なる せて秦を攻むることをせず、延氣にも我は斯くして 引いて河を渡り、趙の食糧にたよりつゝ趙と力を に、何ぞや、獨り酒宴の盛會に日を暮して、更に兵を やうく~空腹を凌ぎ、軍中現糧無しと云ふ場合なる 送つて一歩も前進せずとは何事ぞ、且つ今や 歳饑る り漏すに至れり、日く我々上下內外力を合せ秦 なりければ、項羽は積日の不平と憎怨を遂に其口よ 衣食の供給不充分なるより、皆飢と凍に苦める折り宴會を開けり、時に天寒く大雨降續き、宿陣の士卒は 以なり)さて宋義は襄を送るとて、遠く軍を離れて、 するまでに宋義と懇親なりしなり、他日項初の宋義 て庶民貧困に陷り、我兵卒は憐れにも芋と豆とにて めんと一日の猶豫を許さいる時、空しく逗留に日を ど、宋義の行爲も實際情理を得ず、是れ亦禍を取る所 が齊と謀つて楚に反けりと云へるは、造事の樣なれ み居れるなるべし、然るに其の齊は宋義の子を相と 齊の西境なる無鹽迄往きて、其處に 送別の盛大なる 、ざるなれ、豊に心に釋然たらむ、項羽の意も深くこ

待受けてつけこむ意、鼓行、勢好く進軍する、必能、罷は渡、兵力の弱る意、我承其敵、我軍は其疾內面と、內外を重く視れば容易に解し得らるゝ 3 獣のやうなれども、 殺すこと、破も殺し 故なり、實は大小を極、輕く視て、庭は外面 の解しにくきは 十之庭不可、然 除く意、庭はアブ、蟣蝨はシラミ、宋州のラー りる、必撃、本は其疲敵

首時課宋晨率國不彊造乃兵裁, 立。諸反。義,朝。而家、安、何、之日,渡,軍 楚,將楚頭,上狗安席,敝,趙,承,河,無。 者。皆楚出,将其危、埽、之、其、其、因,見 將偕王令,軍私,在境承勢敝,趙,糧 軍、服、陰、軍宋非、此、內,且、必、夫、食、乃 家莫。令中義一社一而國學。以與飲 也敢,羽,日,即,稷舉事,兵趙,秦趙

今枝誅,宋其之今屬,新趙之幷,高

梧之,義帳臣。不於破學。彊,力,會

皆當與中項恤將王而攻攻不

珠、日、是、齊斬、羽士軍、坐。秦新秦、引。

留。凍無乃非

項羽を青二才の癖に何を知つて居るかと卑下したる吾には及ばずと、自分は老功者の積りにて高く止り、 なく を測りて謀策を運らすに至つては、失敬ながら君は 來甲冑に身を堅め槍太刀を手に執つて戰場に働くこ 合せ居るなり、敵を畏れて徒に躊躇するにあらず、元 勝負さするが得策なりとの考より、ワザ と 進發を見 とは、吾固より君に及ばざれど、坐ながら勢を察し敵 及ばず、我は直に軍兵を引きて關中へ勇進せば、苦も を待受け之に乗ぜば何の苦もなく勝利を得 0) 稍 れば、兵力は今日と違ひ必ず疲勞せん、味方は其弱味 を攻めて、戰勝たば我々與國の不幸なるに似たるも、 んも、徒にこゝに力を費すは得策に 平げたる と憎く思ひ、因つて軍中に令して曰く も勝つに至るまでには餘程の手傷を受くべき筈な 庭を搏 、若し又秦の趙に勝たざる時は、固より顧慮するに にて論じたり、且つ宋義は、羽を上 秦軍を破りても關中の秦を覆さねば天下の飢を 秦の根本を拔取らん、されば吾先づ秦と趙とに もの つが如く、之を破るは左程困難にあらざら にあらず、然らば趙の秦軍を撃つは あらず、今秦、趙 将に反抗 、猛暴なる虎 5 るべ いする 4

あ 破れば粮も出來、通路も開く、下文に を守護する章邯を先づ破るまでの間の事 が、項羽の見込は鉅鹿の南に居て我を遮り も三日にては鉅鹿に達し能はずと云ふ者 何も安陽出發の時と見るに及ばず、或はそ 順なれど、鉅鹿との距離は餘り遠くして、下文の項別 らずと云ふ、宋州の安陽は河の南、且つ子を送 楚軍の未だ河を渡らざると撞着し、又下文 3 云ふ、然し三日分の兵粮云々は渡河の際のことにて、 が三日分の兵粮を齎して出立したる事情と合はずと が其子の齊に行くを送つて無鹽に至るにも路順 北の安陽とする説とあり、相州の安陽は河の北にて、 【字解】 する説と、宋州楚丘 8 る為め三日分の粮食にて城下へ着 、張耳傳の 安陽、相州の安陽(今の河南彰徳府安陽)と 内には、 (今の山東曹州府曹縣 一ト先づ章邯を破つて後 きたるやう思談 至則圍 れにして あら て、邯を るの 南

なれるなり、) るにはあらず、又後日義帝(懐王)を弑する一因にも

軍の意、 (字解)、司徒、夏周以來の官名にて戸部の長官、漢に至り大司農といへる職に同じ、今尹、周の諸侯の卿は至り大司農といへる職に同じ、今尹、周の諸侯の卿は至り大司農といへる職に同じ、今尹、周の諸侯の卿は至り大司農といへる職に同じ、今尹、周の諸侯の卿は至り大司農といへる職に同じ、今尹、周の諸侯の卿は至の意、東京の意、

に之に 其地に逗留して、一箇月半を過すも出立の 氣色な酸して安陽まで進軍したれども、如何なる 考なるか 趙に在る秦軍は盛にて、關中に居る秦は機強、盛を取 之を破らんこと必定なりと、然るに朱義は、いと鷹揚 内より之に應じて合戰に及ばい、秦軍如何に强きも 兵を引きて黄河を打渡り、味方は敵の外を撃ち、趙は と、趙の難儀は察するに除りあり、然らば一日も早く う、承る所によれば、今や秦軍趙王を鉅鹿城に圍む し、次將の項羽は待遠き思に堪へかね、宋義に申すや に止り、蟣蝨は皮毛の内面に喰込み居 其手にて打殺されず、何んとなれば感 も蟣蝨を除かねば牛の患は去れりと謂はれず、 對へて、否、否、牛の頭を打殺し 7 る故なり、今 は皮毛の も牛の戦

前楚滅亡の

頃、今尹

0

顯

魯公の封餌を(羽

から 立 死

参照)

)授け

新に彼を取

成程と感じ、宋義を召

の才物なりしかば、大に之を悦ぶ、且つ彼 だ合戰に及ばざる先に、既に其敗 りしが、數日を出ですして武信君 が、懐王に謁見せる折に、過日宋義の臣と出遇ひ こと、實に兵法に明通せる者と謂ふべしと云ふ き)之に武安侯なる封號を授けて碭郡の兵に將 をば介尹とせり、是等は皆楚國 ひたる齊の使者高陵、君顯は其後楚軍 上は一時其地に於ての役割なるが、實際 君梁が軍の 別に司徒の 臣が兩軍を合弁し てント 後 、初め宋義が齊に使する 職 て試に事 て次將とし、范増をば末將と 其陣所に因 れど當時碭 に在 漢 より魯公の禮を以 將 必敗を論ぜりとの 官稱を授け 軍 りし程の 舊來の職名 0 の軍果して敗 北の徴を を謀 職に置き、項 て自身は つて碭 b は叉郡名 、其父 者なりし たるに 中に在 0 見拔 を用 經歷は、 0) 其 、餘程 、懷王 る、未 72 しし時 途中 軍務 羽 事 b 長 呂 0 3 かっ h 73 3 72 將 害 外の 躍 全く に見ゆる宋義が進 なるを見ては其怨の 0 不 たるは何 U 3 より言へば、項梁戦死の上はそれに代 如 禍は已に此一節に 尊稱す、 8 救援する事となれり、而 せり T 3 適中し いづれ 其副將なる且つ功勞ある我より他にあるまじと思 は項梁の 部 名譽なり、而して彼今我上に立ちて昨日 して上将となり、己は次将とされた 居たるに疑なし、然るに何の く、懐王は我家の立つる所と云ひたる項羽 下た 事叉大不平の 旭 、斯く役割も定りて、これより河 0) 頭を斬落し 日 りし 72 0) 0) 然し宋義が間もなく項羽の も宋義の支配に屬したれは、宋義 3 昇 為 功なること論なし、高祖本 め るが 諸將より鄭子冠軍と崇め呼ば 事に由 かといへば、我が 軍の遅 如く、 72 事なり、而して其宋義 胚胎するなり、元來此 深 るなり 、軍中にては彼を聊子冠 きも勿論なり n して他の楚に味 延に對する等 るにて 、爭論が 功勞もなき宋義 、彼の名譽 季父の必敗を 原因にて殺 北 年紀中に るは、全く意想 る者は、其姓 刀に斃れ の趙

が斯く

され

カジ

0

話に、彼は武信

遇

0

役割は如何

といふに、

む、以

し、(沛公の陣地は碭縣な

度

見 0

190

3

意中

方せ

3

0)

籠

城

0)

軍

72

3 2

3

h

こは

なり、又沛公劉邦

遂に

ŧ

で季父 -

n

は

季父の

より 北の 除は大將なりしが、これは城中に入らずして、別に數 し居るなど 取次がざるべからず、又東南の齊楚より 軍と呼びしは、是等鉅鹿城内の兵と陳餘が兵の 士卒を以て鉅鹿の北方に 陣取れり、其頃世に 其兵 間 等の 兩將に之を圍ませ、己は離れて其 ざるべ 注意實に周到せり、さて又趙に於て 陣所まで特に甬道を築いて米穀 舟にて西南より來るもの からざるが為めなり、章郎 鹿の 城に逃込 めり、章邯は を攻城の を輸 の陣 は 0) 味 河 所

る道 ざればなり、鉅鹿、郡名、今の 直隸にあり、甬道、輜重といふに是時陳餘は鉅鹿の北に居て未だ城内に入ら 將の語ある為めに此處にも紛れて入れるなり、何故【字解】 渡河、河は黄河、陳餘爲將、後の行に陳餘爲と趙軍を指したるものなり、 を送るに敵の 路、甬の音勇、粟、穀類 分捕を恐れ雨 側に墻壁を築きて通 行す

軍,恐、 自,從, 將,肝, 號為將與敗居。王齊武 死せる位なりしかば、懐王 軍,計,徵,數 るも心許なく思ひけ 爲。末 日,使 安 者 將項 事,此,日 宋 さて、楚軍は定陶 侯 義 高 可。軍 救,羽,而 將,以,臣, 趙、爲、大調、果、論、陵 楊浦 諸。魯 說知、敗、武 君 郡、公,司 は肝台の都に細 顯 兵 為。徒 別 公、之,兵,兵信 將為因矣未君在初皆次置、王戰之楚宋 在,初、陽。以, 一冊台よ 郡,其 將,以,召。而 り、項 屬。 軍 軍義 獨り 西 范為宋先。必見。所,封。呂 0) 義。增,上義,見、敗,楚遇,爲,青,

留守 城

定

陶、懷

臣,王

羽·呂

名、即ち雍丘、古の 祀國、今の河南開封府祀縣治、外の直隸に屬す、定陶、今の山東曹州 にあり、離丘、縣城陽といふ、必ずしも誤とすべからず、濮陽、縣名、今 黄、縣名、今の杞縣の東、陳留、漢の郡名、今の河南の て其季父を呼ぶに直に其名を以てする筈なければ、 ど、鄭(卽ち成)は周代の國名、後城の陽に遷る、故に 初は西に、沛公は又其西の遙離れたる碭縣に陣せり、と諸共に東方に引上げ來りて、呂臣は彭城の東に、項 將は相謀るやう、今や武信君の大敗戰により士卒心 中の に恐怖を懷けば、此城攻は無效なり、暫く退却して時 陽國なるが為め、或は濟陰の城陽を成陽の誤となせ す、今の山東曹州にあり、今の山東宮州も亦漢代の城 機を待つこと然るべしと、乃ち楚の一將呂臣が軍隊 を攻めしが、籠城堅固にて容易に下すこと能はず、雨 戦歿せり、時に別軍の沛公項羽も外黃を去りて 陳留 って大に之を定陶に破り、流石の項梁も免れかねて 【字解】。城陽、縣名、又成陽に作る、漢の濟陰郡に屬 、項梁軍破、項羽は季父を呼び、沛公が羽 兵を悉く繰出して章邯が軍 に 増員し、楚軍を せり、 して其 言に違はず、秦は

と、佛、音唐、縣名、今の江蘇徐州にあり、項羽曰、懷王者吾家項梁)所」立、も此と同じく誤なり項梁の字は誤にて武信君と呼ぶべきなり、高紀中の

築計画 謂河北之軍 卒 王 離·涉 數 萬 道, 人而 而輸 圍、 軍 渡河擊趙大破山、梁軍、則以為楚山 也、 . 鉅鹿、章 之 栗、陳 鉅 鉅鹿之 (陳餘 鹿 城= 餘、邯 北為軍章 爲 將 将*南。令:张 之,地, 所

此頃趙敬は趙王となり、張耳は其相となりしが、此敗終を轉じて黄河を渡り趙を撃つて又大に 之を破る、れば、楚の叛兵を以て憂ふるに足らずと為し、乃ち兵【講義】 秦の章邯最早項梁が軍を破り梁をも殺した

外破。秦败。君,黄,之,果。公平、攻。定悉,徐。曰。 破、士 沛 公·項 東、呂 西流公軍過 攻。 卒 陶。起。行。然。 陳 羽 留, 項 相。 兵,卽,日, 與 陳 梁 益。免、臣 城東、項羽、 章 留 死, 邯 疾,武 E, 沛 堅 守、不 公·項 項 楚 軍。引,梁、能、羽軍、及、軍、彭兵、軍下、去、大。禍、必、

大に秦軍を破つて其將李由を討取る、是れは 李斯の一人に秦軍を破つて其將李由を討取る、是れは 李斯のの東にて秦軍を撃破す、秦軍は却きて濮陽城に入る、の東にて秦軍を撃破す、秦軍は却きて濮陽城に入る、 でるより再び西に轉じ、遠く地を略して雍丘に至り、 でるより再び西に轉じ、遠く地を略して雍丘に至り、 でるより再び西に東陽本由を討取る、是れは 李斯の 一人に別に成陽城を攻め

然斬面なれ 御身の為めに寒心すと云ひたるも、項梁は聽入れず、 定なり、今味方の士卒は少しく情氣を生じたる樣見 將軍慢心し、士卒惰氣を生ずる軍勢の敗北するは必 子なりきと云ふ、それより二人は引返して程近 迫れることなれば公は徐々と行かれよ、さすれば生 あり、彼の軍は敗北すること疑なし、其敗北も目前に 義乃ち曰く、拙者先日武信君の軍につきて論ずる所 信君にも遇はるゝ積りなるかと問へば、然りと答ふ、 高陵君名は顯に出遇ひぬ、義は之に向ひ、公は我が ひに彼を使者として遺せり、宋義途中にて齊の使者 數を増加し來る、今後の成行き如何あらんか、吾實に 受けらる、、將驕ると言はず、又少しく惰るといへ 且つ宋義を五月蠅く は遠慮したるなり)それに引替へ秦の軍兵日々に其 黄を攻む、外黄未だ下らざるに、武信君項梁 一の勝利に重ねて秦軍を破る、且つ項羽等の李由 して西南(本文の西北は誤)定陶に來り項羽 に る報告にも接し、益、秦軍を輕んじ、心の驕は 別條はなからん、者し急ぎ行かれなば禍難 見ゆ、宋義といる者乃ち之を諫めて、戦勝ち 思ひけん、齊に用事のあるを幸 東阿 カラ を

の山東にあり、與齊田祭司馬龍且軍救東阿、與は為な【字解】居數月、斯くして數箇月の後、亢父、縣名、今なす事の屢、見ゆるは、其濫觴實に此にあるなり、 其まゝ趙に留る、田榮乃ち兄の子の市を立てゝ王と 出兵を承諾せざりき、此後、齊は常に楚の背後の患を ればなり、此時趙にても田角田間を殺して齊に賣付 忍びずと申送れり、田儋傳にては此事を懷王の言と れ窮困して我に依る者なれば、情として之を殺すに んといふ、項梁は、田假は我同志の國王にて君に逐は 楚は假を殺し、趙は田角兄弟を殺すならば、兵を出さ 促し、倶に西進せんとせり、然るに田祭が言ふには、 を追ふ途中より數度使者を齊に走らせて其出兵を催 し、己は其相となる、項梁は最早秦軍を東阿に破り之 付けて儲を取る意、即ち齊の要求通り 田角兄弟を殺 り、司馬は武官、東阿、縣名、今の山東にあり、與國、同 す、蓋し、名義は懷王、意は項梁より出でたるも け利益を取らんとせざりしを以て、田榮怒りて 遂に 仲間の國、與は黨與、市於齊、市はあきなひする、賣 走る前趙に教を求める為めに往きた 角は趙に 遁込む、角の弟の田間は齊 るが、これも の將にて のな 兄

して其援兵を得るにたとふ、

弗 矣、勝、秦、破。下、秦 陶 秦 而 有。秦 項 軍、未 使 入,屠,項 軍,未,濮之,梁 斬,下,陽,西,使, 李去,沛破,沛 者 軍,梁,項起, 乃,兵 騎 將 李去,沛山,西公 使,日。宋 益。 色、 陵 驕 由,西公秦公還,略,項軍,及 羽 益。卒 宋 東 義,臣情義等使為者,乃,又 等 阿_ 情。戰輕,再。未,破,定收,陽, 信齊、梁

津の如き寒村でもと解したりとて、其地は楚の し、若し三戸津とすれば雖字何の要かある、縱合三戸戸は語氣よりも文理よりも民戸の數と解するは正 名の解尤も有力なれども、此三 地

從,項 殺。使: 楚,間,我梁田 以,不、日,假,齊 兵, 殺。假、殺、欲 西 田 間,田 乃,榮 發,田窮、發、日, 兵,角來,兵,楚

は故齊王田健の弟假を立てゝ王とせしが、田榮之に を破つて章邯を走らす、田僚の敗死したる時、齊にて 其司馬龍且の軍を北進せしめて之を救ひ、大に秦軍 を引纒めて東阿に逃げたるに、又章邯に圍まれて危 反って章邯の逆襲に因つて敗死す、其弟の は魏王答が秦の將章邯に圍まれたるを救ひ に進みて亢父縣を攻む、然るに是れより先齊王 平なりしかば、東阿の圍の解くる に及び祭は直 陷る、當時亢父に在りし項梁は之を聞きて先づ 斯くして数箇月を經、項梁軍兵を引い 歸り假を放逐せり、假は楚に遁込み、假 田榮餘兵 たる て西 田儋

集より飛立ちたるが如き反將の先を爭ひて君 られて大計を誤る勿れと云ふ、是に於て てらるべき事と思ふに由るのみ、請ふ、こゝに熟考せ するは何故なるか、實に項氏は代々楚國 し、今君江東より起りたるに、舊楚國領內群蜂の紛然 り濟せしこと如何に考ふるも久しく續くべき道理な 後胤を主君に立てず、匹夫の分際を以て自ら王とな 體に入れり、たとひ一國滅亡して三家村に れば楚の南公が豫言にも、楚國の秦に對する限は骨 ぞ、楚人今日に至りても皆氣の毒に思ひ居るなり、 六國にても多少彼に對して討たるべき名義のなきに に今陳勝は首として旗を楚國に揚げながら、楚王の て後日秦を亡す者は楚國に疑ひなしと云へり、然る られて途に老死して返らざるが如きは何んたる哀 なし、懐王が彼の為めに欺かれて其國に入り、拘留 り、何となれば秦の六國を滅したるは無殘とはい しもあらざれど、楚に於ては毫もこれといふべき罪 めに説けるやう、陳勝の失敗はもとより當然 き、此度南方よりはるか~項梁を尋ね往きて、彼が 家筋なれば、君に於ては必ず能く舊主の 0) 項梁至極 なればと 子孫を立 將軍た の事な 附從 其 3 n 為 b

將、長者の陳嬰を楚の上柱國と爲して、之を五 なり、既に王あり、宰相なかる 諡を取つて直に心を楚の懷王と呼べり、頗る奇なる とを聞出したれば、之を立てゝ主君と崇め、 年六月の事なりき、 事ら討伐の事に任ず、懐王の立てるは、秦の二世の二 て此に居らしむ、而して項梁自身は武信君と號し に封じ、懐王の都をば臨淮の盱台と定 居れるを以て、つまり其の望に從ふ便宜 稱呼なれども、

是れ楚人の今に深く故懐王 れる名は心といふ者其頃人に傭はれ羊を飼ひ居 言を尤とし、楚王の血統を求 めたるに、懐王の べから ず、乃ち東陽 め に出でた 陳嬰を附 * 其祖 哀慕 縣 孫 E るこ 3 0) V 地 7

の三説あり、其後項羽三戸津を渡つて 章邯を破り秦本り未だ孰れか是なるを知らず、阜陵は九江に屬す、不反、故國に歸還せずに死す、南公、道士、或は陰陽家不反、故國に歸還せずに死す、南公、道士、或は陰陽家不反、故國に歸還せずに死す、南公、道士、或は陰陽家不反、故國に歸還せずに死す、南公、道士、或は陰陽家不反、故國に私と、差の三大姓、昭屈景三氏としたると、との集國、即夏桀の奔れる地、漢紀には増は阜陸人と

て梁に隨從す、 で梁に隨從す、善後の計縣に兵を起し、亦薛 へ 往き 巻に召集して、善後の計策に就いて會議せり、時に沛 聞きしかば、項羽の歸還を幸ひ、諸手の別將を薛の本

夫秦滅,六國、楚最無罪自懷王 奇計、往說,項梁日、陳勝敗固當、 居鄛人范增、年七十、素居家、好,

縦横家の餘流にて奇計を好める傑物なり

に及びたれども家居して

て仕官せず、戦國

部下の軍吏に對して曰く、陳王天下に先んじて大事遊で、黥布及び蒲將軍の二人も各、手勢を引き來つて進す、黥布及び蒲將軍の二人も各、手勢を引き來つて進す、黥布及び蒲將軍の二人も各、手勢を引き來つて進す、黥布及び蒲將軍の二人も各、手勢を引き來つて進す、黥布及び蒲將軍の二人も各、手勢を引き來つて進す、黥布及び蒲將軍の二人も各、手勢を引き來つて

將に 告せり、此頃に至り梁は陳王の確實に戰死したるを 堪へず、已に之を攻拔くや悉く其城兵を防殺せり、 堅固に籠城して容易に降伏せざるが為め、項羽怒に は項羽を別軍として河南の襄城を攻めしむ、襄城 石 は最早疑はるゝ) 羽本軍に還り來て此旨を 項梁に が初陣に此殘忍の行為を演じたるは彼の大業の成否 たれば項梁兵を引いて薛邑まで 退却し、こゝにて雞 に餘樊君は戰死し、朱雞石も敗軍して胡陵に遁歸り 雞石・餘獎君二人に命じ進んで邯と合戰せしむ、然る 縣まで到來せりとの報告に接したれば、別手の將、朱 嘉が降兵を丼せて削陵に陣し、間もなく之を引い を進めて秦嘉を撃てるに、嘉敗れて北走す、梁之を追景駒を立てたるは大逆無道、見逃し難しと、乃ち其兵 日間戰ひたれども遂に戰死して其軍兵は降伏し、景 が敗軍の罪を鳴らして誅殺す、是れより先き項梁 3 て泗水の上流胡陵迄至りたる時、嘉は引返して一 梁の地方に脱走したるも亦死せり、項梁已に秦 西進せんとする折しも、秦の名將章邯が 軍の 至りなるに、今、秦嘉は之に背きて無遠慮 、不幸一戰に利を失ひ行跡不明な るは實 1= 栗 7 氣

吏は勿論、衆人皆尤もと承引せり、是に於て項梁と和 軍吏に諭すやう、此度江東より起れる項氏は代々將 説諭にいたく感じ入り、王の稱號を見合せつくるの 聞 度 親せしのみならず、二萬の軍を擧げて 梁の配下とな ことべしく指名されざるが為めなりと、陳嬰は此 も逃落ちて生命はたすかり易し、是れ平生世間より 成就の日には少くも封侯の榮を得べく、失敗に終る 日の禍難恐るべし、されば獨立するなどは見合はせ などといふ勿體もなき名稱を得るは家の不吉にて後 汝 ば不可なり、然らば我々は項氏の如き名族に倚賴 の家筋、楚國中誰知らぬ者もなし、今我々は大事を 、他の有力者に隨從するに如くはなし、斯くせば事 かず、然るに時節とはいへ、何の縁故もなく卒然王も汝陳氏の先代に高貴の位に昇れる人のありしを げんとするに、第一 から 事を爲せば秦を亡すことは必せりといへば、軍 婦となりてより歳久しきとなれど、途に一 將たる者は相當の 人物を得ざ

の更を命史と曰ひ、丞の更を丞史と曰ふ、長者、有德【字解】 東陽、縣名、今の安徽泗州内にあり、命史、命

起と嬰が項梁に屬する所以を説くものなれど、嬰が

ることとせり、こくまでは綱領にて以下は陳嬰が興

項梁使者を以て與に連合和親を約し打つれて西上す

に東陽を下し、淮水以南には秦に味方するものなし、

項梁大江を渡つて聞けば、陳嬰とい ふ者已

以て團體の規模を大ならしめんと、各地蜂起の 之を聞き我もくと味方して隨從する者二萬人に及 と、陳嬰が德望、二萬人の推戴にて起れるとは頗 はいへ、項梁項籍の自から勸誘し八千人にて起 と至く異様に青帽揃として目新しく 起れり、精兵 ては滿足せず、嬰が名號を王として其格式に崇敬し、 べり、此意外の盛況より少年等は頭や長位の 名稱に 年等は聴入れず、遂に强ひて立てゝ其長とせり、縣 當の 公の筆の敏なるを見るべし、さて、此陳嬰といふ者は 忽ち以、兵屬||項梁|の一句にて再び本題に歸著す、 母の賢夫人にて識見の非凡、當時の事情に 隔あり、 り他にあるべからずと、此旨を嬰に願出づ、嬰は一も るや東陽縣の少年等縣合を殺して聚合する者が 兀來淮南東陽縣の合史、或は獄史ともいふ、平素 人に及び、其長を立てんとせしが、是れといふべき適 一もなく 慎にて縣內長者と呼べり、然るに陳勝舉兵の め、暫くこうに百八十九言を費したるなり、然るに 人を得る能はず、乃ち長者と呼ばれたる陳嬰よ 然るに陳嬰の母は嬰に諭して日ふやう、 斯かる重任には當り難しと謝絶せ しも、少 切な 軍隊 我は 3 懸 3 7 内 から

家の から を失ひ、又廣陵に居ては秦兵來攻の恐あるより を 支へさせむ工夫なり、さすがの項梁も之を真に受け 歸服せしむる能はざる内に陳勝秦軍の 為めに其郷土を味方させんが為め歸郷したる を徇ふ、其頃(於是)廣陵の人召平といふもの陳 自ら會稽の守となり、籍は其副將となり、管下の諸縣 辨じか な参つた使者なりと許り、項梁を拜して 陳王 沙汰に驚きしも、彼もしれ者、少しも周章でず、京 は勿論、其他の者も此一言にて皆屈伏せり、項梁は て忘れたるにも取落したるにもあらずと云ふ、當 、更に梁に向つて、江東は最早平定に及びたれ 軍中に逃込みしのみ、然るに彼は上柱國の官 江を渡つて吳中に來り、我こそは陳王の仰を豪り 行跡不明となり、 の嚴命なりと云ふ、是れ自分を目指し來る秦兵を 時も早く軍兵を引き西進して秦を撃て、是れ 喪儀に君を何々の掛とせり、しか の官を授く、實は陳勝が敗死して召平身の倚依 ねたり、此れ此度君を任用せぬ所以なり、決 自己より申出で 秦軍又廣陵へも攻寄せむとい たる るに君は其事 為めに敗走し が未だ 前

り、 でははち至急八千人の精兵を引き、大江を渡って 上方指して進發せり、項羽が末路において江 東子弟 云すなはち至急八千人の精兵を引き、大江を渡って 上すなはち至急八千人の精兵を引き、大江を渡って 上

の放て起って抗致する者もなし、百人を撃殺せる故、府廳を舉げて其勢に怖伏し、一人中に大力無雙の項籍は劍を揮つて 飛込み、矢庭に小っ

《字解》 會稽守通謂梁曰、通は郡守の名、姓は殷である、又通謂、梁曰とあるが、漢書の籍傳には、項梁の語にて、事實甚だ異れり、未だ孰れか是なるを知らず、にて、事實甚だ異れり、未だ孰れか是なるを知らず、にて、事實甚だ異れり、未だ孰れか是なるを知らず、下、北西の地方を指して江西と呼ぶ、之に對して江を隔でゝ北西の地方を指して江西と呼ぶ、向籍、胸の音でゝ北西の地方を指して江西と呼ぶ、向籍、胸の音でゝ北西の地方を指して江西と呼ぶ、向籍、胸の音でゝ北西の地方を指して江西と呼ぶ、衛行、僧は、京、動、目而使、之也と、めくばせす、數十百人、百以下或は八十九十に至る、故に數十百と云ふ、僧伏、僧は或は八十九十に至る、故に數十百と云ふ、僧伏、僧は或と失ふこと、

得たり、乃ち之を組織して又吳中の重立てる人物をを諭説し、遂に吳中の軍兵を擧げて八千人の精兵を

その大中小の將校として、それん~手配に及べり、

人の折角其選に與らむと思ひ居たるに曾て音

三六一

驚,項 可。日,坐、誡、莫、擾 梁 行。諾、日、籍,知。 亂、持、矣、梁 請,持。其 籍。守、於、召。召。劒、處, 府 頭,是二籍,籍,居, 入、使、外、籍 拔, 臾, 命, 梁之, 劒, 梁, 召, 復, 耳,

勢より察するも最早天、秦を亡すの 相談するやう、 亂となる、其九月會稽郡守の殷通 ば 制 機に先んじて事を為せば 秦の二世の を人に受くと、一歩二歩の先後 今は一 今や江西地 刻の猶豫を許さぬ時 方は皆反旗を翻 能く人 時運となれる也、 は を制御し、後

方に現出づ、郡守の屬僚大に驚き 騷擾譬へん方なきげ、又その會稽郡守の印緩を取つて我身に帶び、表の

は籍に目くばせして、ヤレと一喝すれば、籍は 答ふ、梁は因で籍を呼入れ、一言二言の應答の 來るやう仰付けられて如何と云へば、郡守は るに、幸、姓は居合せたり、彼を召されて桓楚を伴 き、再び室内に入來て郡守と對坐し、只今表を尋ね 籍に注意し劒を持つて室外に扣へて沙汰を待た し彼は拙者の姪籍と懇意の者なれば籍のみはその身にて諸人其居處を知る者なきには閉口せりし を知れるかと存すと云ひて室を立出で、何事 ば、項梁此事を利用して郡守に向 手 を以て逃亡し、澤中に身を匿して 3 は委細承知は致せしもの」、目下桓楚は逃亡 此 剣を引扱き郡守の頭を 及びたるは其 使ひ 人 軍兵を の大野心家なるを知らずして此機 T 其指揮を委任 功名を自己 命數の盡きたる處 て旗揚 せんと、蓋し郡守は二人 收め げ ん野心な せ せ ひ、仰の趣き拙 行跡不明の り、梁其頭 此 みはその 就 頃桓 ては 承知 を提 世 其 折 かっ 君 所 12 項 カコ 75

資客子弟の材能 其事に主として力を盡す、指圖役、陰、裏面に、其能、吳縣、大繇役、官の大工事に人民が夫役に出る、主辦、

奇、掩、籍秦 秦始皇帝游。會稽波浙江、梁與籍俱觀籍日、彼可取而代也、梁籍俱觀籍日、彼可取而代也、梁籍俱觀籍日、彼可取而代也、梁泰始皇帝游。會稽、沒以此,然為此,

の形容、

伴合ひて其行列を觀る、儀仗の美々しく供廻のに向ひて浙江を渡り吳中に立寄れる途中、梁と一稽山に游び石を立てゝ秦の功德を頭し、それよ ふな、一族生命がなきぞと叱れり、しかしこれにて梁んと言へば、項梁愕き羽が口を掩ひて、馬鹿な事を言 るに籍は思はず語を漏して、彼奴、奪取つて代り 秦の始皇帝は其三十七年の冬、有名なる會 くれ 盛な り北 羽と

> 八尺餘、長は身の長、扛鼎、扛音江、舉と訓ず、說文に塘江、今一省の名となる、族矣、一族誅滅せられん、長【字解】 會稽、山名、今の浙江紹興府の南、浙江、即錢も之に對しては皆一目置きて憚れり、 の長八尺有餘の大の男、鼎を擧ぐる怪力ある上に、才な、是れ擧兵の一年前の事にて項籍方に二十三歲、身 は非常なる重量ある銅器故、扛鼎といへは大力無雙 横尉對學也とありて物を横木で擔ぎ學ぐること、鼎 氣の敏鋭人にすぐれたれば、

> 吳中の名門貴族の子弟 者にあらず、末頼 制

意、竟學、竟は終までやり遂ぐ、にも斯くいふ、學書、書は書法、去學劒、去とは罷むる

るなり) 其後項梁は又殺人罪を犯し、復讐の虞あるよるに非ず、後に至りて二獄掾の事見えて此に、照應すなるを得たり、(此事はた、梁が經歷のみにて書きたなるを得たり、(此事はた、梁が經歷のみにて書きたなるを得たり、(此事はた、梁が經歷のみにて書きたるに非ず、後に至りて二獄掾の事見えて此に、照應するなり)其後項梁は又殺人罪を犯し、復讐の虞あるよ

得て 吳中は 吳中人士の愈、彼に服せる所以なれど、梁に於てもこ れにて其地方人の材能の大小高下を能く 事 でたるものにて、梁が羽振は實に素晴し、故に吳中よ叢なりき、然るにその人々はいづれ、も梁が下手に出 なりし故、其繁華は勿論、東南に於ける賢士大夫の いふ隱藝を持ちてあれば、裏面に於て巧に之れては迚も覺束なきが為めなり、然るに梁には は h 9 大夫役の出づる時、又は大喪儀のある時の如き、たたなものにて、梁が羽振は實に素晴し、故に吳中 其 複雑にて人數も衆きことなれば、尋常人の手腕 T いつも他の依賴を以て其指圖役となれり、是等は 出入の人々、及び其地の若者共を其向きくに 地 て使ふ處より、混雑もなく手落ちもなし、これ に安んじかね、途に籍と遠く吳中に 即ち古の吳都にて、秦代には會稽郡 巧に之を運用 胸中に知り 避 難 せり、 首府 淵

籍兵法,籍大喜、略知,其意又不, 足學,學,萬人敵,於是項梁乃教, 足學,學,萬人敵,於是項梁乃教, 足學,學,萬人敵,於是項梁乃教,

斯~書きたるなり、この項氏は代々楚 殺すと 將王翦に戮されたる者なり、尤も始皇本紀には 燕自 楚の將軍項燕にて、始皇本紀中にも見ゆる如く、秦の 互錯綜して叙述し去るなり、此項梁の父は戰國末の りするも別が傳記よりするも大切なる 人物故、史公 又その興起も全く項梁に依れり、故に梁は 歴史上よ 父なる項梁に養育せられたるものなるらし、而して らざるも、羽が幼少の時已に世を去り、羽は全く其 東より起れる時は二十四歳なりき、其父の名は 詳な 其 の項縣に き、斯く項氏の先代は楚國にての門閥なりしに、 季父は項梁と特筆提起して、以下羽と梁とを交 あれども、王翦に撃破せられて 項籍は下相縣人にて字は羽とい ひ、初て江 知行所ありたるを以 て項を姓氏とした の將軍にて汝 の事なれば

秦は其楚を滅し、剩へ梁には父の仇、初には祖父の仇なれば、彼等の他日楚國を表榜し秦に對して 旗揚したるも偶然ならず、さて項籍の少年時代には、彼は最たるも偶然ならず、さて項籍の少年時代には、彼は最大を当してもしらふべき術を學びたしと云ふ、梁乃ち父親してあしらふべき術を學びたしと云ふ、梁乃ち父親してあしらふべき術を學びたしと云ふ、梁乃ち父親してあしらふべき術を學びたしと云ふ、梁乃ち父親に奥義を極めて學び遂げんとするにも あらざり 神に奥義を極めて學び遂げんとするにも あらざり

む、季父、伯仲叔季は兄弟の順序なる故、從父の順序む、季父、伯仲叔季は兄弟の順序なる故、從父の順序の上額子淵を蔥淵と呼ぶ例もあれば差支はなからあり、本書の中にも他に子羽と書ける所屢。見ゆ、しあり、本書の中にも他に子羽と書ける所屢。見ゆ、しあり、本書の中にも他に子羽と書ける所屢。見ゆ、しなり、本学の、本学の、伯仲叔季は兄弟の順序なる故、從父の順序を表す。

明あり、故に名をいはず、 ぶ、酅、邑の名なり、不、名、賢にして先見の

て紀文に別つ、 れ前篇と倶に後人の附入 に 係る、故に格を下し らざる所あるを指摘して答へたるものなり、是 對し、表を上りて秦の過失と賈誼の論中に 是な 饗語中には寧ろ非とする所あらざるかとの問に 此の篇は東漢の明帝が班固に始皇紀の

項 羽 本 紀 第

家中に とする際に及びて忽ち四五年間の空隙を生ず、 なる説の如きも唐虞三代及び秦と連續して本紀 る 川の間隙なく書き來り、秦より漢に移らん は帝位に即きたる者にあらず、然るに之を に其間先づ諸侯の盟主たるは楚にて、其義 項羽の家にて立つる所、而して諸侯の上將 置くべき者なりと索隱に見えて、頗る尤 列したるは不穩當なり、宜しく降して世

> 呼びて題目を設けたるにて明に知らる」なり、 立てたるにあらざる意も項羽本紀と彼の姓字を とて又彼を歴代帝王の一人とまで認めて本紀 するも、編輯の順序より言ふも 蓋し不當には の封鸖を受けたるなり、故に太史公が秦漢の際 は確にて、漢の高帝さへ初は彼の指揮を奉じ、 項別なり、総合名目は霸王なる 軍 らざらん、結尾の論贊中にも其意を漏せり、 に項羽本紀を挿入したるは、當時の實情より も、一時天下の實權は全く も項羽なり、秦を滅し 王侯を封 彼の も、時 日は短 3 ありしと 8 さり 0) 8

學,姓,也,劒,項項 楚,年 項 籍 又不成,我世世為 者、下相 也、字 羽、初

んばあらざるなり、子嬰は其の死生の 義備はれだ嘗て其の決行を健氣なりとし其の志を憐まず讀む毎に子嬰が趙高を車裂せし所に 至りて、未誼の論紀季の明にも及ばざる なり、吾れ秦紀を

は始 は母 て五 而 は値なり、アタルと訓む、位は帝王の位 字)を生じ、火(母)は土(子)を生じ、土(母)は と為す 周皇の亡びた りと謂 (子)を生じ、金(母)は水(子)を生ずるが如し、直 るに秦の水德が周の木德に代はりしは是れ母 皇の 行の は呂 に代はらずといふ、而して周を火徳と為す 0 妃となる 代りし 相生にて生ずるを母といひ 一徳の君にして帝王の ふべ 、即ち水(母)は木(子)を生じ、木(母)は火 不韋の 運行 がたるをいふ、仁不、代、母秦直…其位、孝明皇帝、東漢の明帝なり、周歷已移、 なり、前に見ゆ ものにし T 時已に孕めり、故 幸 子が母に代は 姬 の子なり、而 て五連に反 次序の 、呂政、始皇のこと、 るを順とな 、出づる 意 せ T り、故に秦 幸姬 なり、さ 6 を子 母は

宗廟 に傳は、 を指す、僅の間天子と爲り、孤獨に り、司馬遷、此の三字衍文ならむ、一日之孤、子 避けてしかいふ、雍、ふさ 刀なり、嚴王、楚の莊王のこと、班固明帝の諱 鸞は鈴なり、刀環に鈴ありて其の聲節 を頸に繋けて自殺の意を示すと、茅旌鸞刀、共に 天子なり、沛公を指す、素車、喪車なり、嬰ニ組、 人、趙高を指す、偸安、ぬすみやすんず、日日齋かなる印綬なり、黄屋、黄色の裏の 車蓋なり、 ざりしとの意なり、期、滅亡の期なり、華紱、花や ども、些の好惡を辨ぜず、恰も六畜 にて至るの る、佐攻驅除、天下を驅滅するをいふ、距之、二なり、狼狐は弓矢を主り、參伐は斬艾の事を は其 て廟に詣らざりしをいふ、權、謀なり、眞人、眞の し、不、威不、伐、胡亥に帝王の威なくんば伐たれ せる語なり、頭首面目は人にして能 の器なり、茅旌は茅にて為りたる旌、戀刀は れる者多きをいふ、狼狐參伐、共に星の 名なり、施 意なり、人頭畜鳴、胡亥の愚闇を形容 計於後 王、秦の制度官職 ぐなり、爛、たいるな して佐け無き 0) く言語す 鳴 1-りる < から 8 如

級を佩び、黄屋を車にし、百司 を 従へ、將に七廟子嬰は次を度りて嗣ぐことを得、玉冠を冠り、華 を決し、竟に猾臣趙高を誅して二 偸み安んじ、獨り能く長く と莫し、乃ち子嬰は齋に五日間を費して日日を 國に居ると雖、猶存在することを得ざりしなり、 は以て其の滅亡の期を促せり、故に形勢便益の らざれば虚く亡びざりしならむを、天子の威と 屠り、眞の天子既に霸水の上に翔る、是に於て子 ることを得ず、食事も未だ咽に下るに及ばず、酒 の二子と權謀を作り、近く に乗れば、忽ちにし に謁せむとす、されど趙高の陰謀あらむことを 暴惡とは遂に留むることを得ざる に至り、 し、寧ろ天子の威あらざれば伐たれず、惡も篤 語すれども好惡を辨ぜざると畜類の鳴けるが如 も未だ唇を濡すに及ばざるに、楚兵已に ならずや、彼の言へるとは て末だ至らず、さて趙高 0 死後は 賓客婚姻未だ盡く 相いたは て其の守を失はずといふこ ·齊宫 念ひ、又却き慮りて其 、頭は の如き小人が非位 0 人にして能 世の為 戶牖 の間 關中を く言 賊を 殘虐 事

起し 東亂 嬰は るは復壅ぐべからず、魚の爛れた たり、故に春秋之を賢として名いはざりき、 季は都邑を以て齊に入りしかば後に其族を存 べしと、是れ所謂時變に通せざるの言なり、昔紀 り、而るに賈誼は復子嬰を責め を責むるは誤れるかな、世俗に秦 りと雖 如く崩れ瓦の如くに解けた 秦の衰微は久しき以前よ の配は未だ當に絶つべからざるなりと、され 庸主の才ありて僅に忠誠の輔佐を得しめば、山 からざるなり、而るに賈誼曰く べからず、勢の敵すべからざるは如何ともすべ を迎ふ、莊王舎を退くこと七里なりと、河の決す 肉袒して左に茅旌を執り右に鸞刀を執りて莊 以て帝者に歸服す、昔時鄭伯楚の 頸に嬰けて自殺の意を示し 其の るゝと雖、秦の地は全くして有つべく、宗廟 、復其の巧を陳ぶる所無けむ、而 亥嗣ぎて之を極 敵すべからざるを知り、 むと、實に其の理を得た り積りて、天下は土 、天子の印章を奉じ、 り、假令周旦の材 、向に子嬰をして て秦の地全うす 喪車 る 莊王に破られ の始皇罪悪 は復全くす 1-るに子 て組を あ

備、健、至、季可。得、俗其、解、絕、地、才可・ 以全,其傳巧,雖也可, 其 於 鄭,所理,秦,而,有,秦 全,得 憐. 嬰, 春 謂 矣 始 以, 周 之 其, 車 秋 不, 復 皇 責. 旦 積 積 皇責。且 有。佐, 通、责、起。 一之 衰 材 趙名時小罪日 天 廟 東 變子,惡,之無下者云,胡孤,所土也、秦玄誤,復崩 死 高,吾 之 生 祀、亂、庸 未讀者 之 嘗,秦 不紀,紀地極哉陳瓦當,之之

序は五人 鄜山の工事末だ畢らざるに復阿房官・皇既に歿し、胡亥嗣ぐ、胡亥は極めて そ天下を有つを貴しと為す所は意を恣にし欲 て始皇の策を成し遂げむとす、其の言にいふ、凡 て天下を驅滅し、遂に始皇帝と稱するに至る、始 神は圖錄を授け、狼狐星・參伐星の氣に據り蹈み に施せり、蓋し聖人の威靈を得たる者か、故に 及の加はざる所無く、政令を制作して 之を後王 族親戚を養育し、三十七年の在位間に天下に り、天下を幷兼し、私情を極め欲望を縦にして宗 然れども、其の身諸侯を以て十三歳に天子と 徳の母が反つて周の木徳の子に代りて其の は生ずるに母に代るを定めとす、而るに秦の 聞せり、且つ始皇は殘忍暴虐の君たりしなり、 むるに在るなりと、大臣の中に先君の 、周歴已に移りて周室滅亡せり、さて帝王の 所を罷めむと欲するに至れば、斯 行の運行に從ふものとす、即ち出づる し、佞臣趙高を任用す、寔に痛まし 孝明皇帝十七年、十月十五 愚鈍 を作り、以 3 為し と去 なり、 水 河

享くること三年、宜春に葬る、此の時趙高は丞 相・安武侯と爲る、二世生れて十二年にして立 む、始皇生れて十三年にして立つ、二世皇帝國 饗くること二十七年、酈邑に葬る、二世皇帝を生 君に賜ひ、以て周の祭祀を奉承せしむ、始皇國 をして東周を誅せしめ、盡く其の國土を秦に入 と相謀りて秦を弱めむとす、秦乃ち相國呂不韋 骨肉を厚くし、惠を民に布く、此の時東周と諸侯 の功臣を調査して夫々恩賞を賜ひ、徳を施すに 王生れて三十二年にして立つ、立ちて 二年にし を開く、孝文王生れて五十三年にして立つ、莊襄 年にして立つ、立ちて四年に初めて田間に阡陌 武王生れて十九年にして立つ、立ちて三年にし て太原の地を取る、元年に國中に大赦す、又先王 て渭水の水三日間赤かりき、昭襄王生れて十九 、されど秦は其の祭祀を絶たず、陽人の地を周

右秦の襄公より二世に至るまで六百一十歳

【字解】 西時、時は神靈を祭る處なり、まつりのなり、

には、秦は其の地西方に在り、故に西時といふ、 素をいふ、聚、猶村落の如し、伏、伏日なり、蠱、熱 書悪氣なり、志、誌と通ず、致、霸、はたがしらの 稱號を賜ふこと、著人、著は宁なり、宁 は 門屏の 間の稱、宁人は即ち宦者のことなり、暈、熱 には衰公に作れり、是なり、康景、行文なり、僖公 には衰公に作れり、是なり、康景、行文なり、僖公 には衰公に作れり、是なり、康景、行文なり、僖公 には衰公に作れり、是なり、康景、行文なり、僖公 で、秦に僖公無し、索隱は上の景公の注 に一作ニ 西、秦に僖公無し、索隱は上の景公の注 に一作ニ 西、秦に僖公無し、索隱は上の景公の注 に一作ニ で、五家を一組と為すこと、嬰兒、赤子なり、阡 、所、阡は南北の路なり、陌は東西の路なり、骨肉、 親族なり、陽人、地名なり、

見る、懐公晉より來り、國を享くること四年、樂 寢に居る、悼公の陵の南に葬る、其の元年に彗星 十年に彗星見る、躁公國を享くること十四年、受 城雍に葬る、刺襲公を生む、刺襲公國を享くること十五年、僖公の西 と二十四年、入里に葬る、躁公懐公を生む、其の 生む、惠公國を享くること十年、車里に葬る、悼 夷公國を享けずして死にぬ、左宮に葬る、惠公を る、丘里の南に葬る、畢公を生む、畢公國を饗く む、懐公自殺す、蕭靈公は昭子の子なり、涇陽に 圉氏に葬る、靈公を生む、諸臣反して 懐公を 圍 ること三十六年、車里の北に葬る、夷公を生む、 生む、景公國を享くること四十年、雍の高寢に居 に葬る、桓公を生む、桓公國を享くること二十七 享くること五年、雍の高寢に居る、康公の陵の 高寢に居る、竘社に葬る、共公を生む、共公國を 居る、國を享くること十年、悼公の陵の西に葬 り、康公を生む、康公國を享くると十二年、雍 の太寢に居る、義里丘の北に葬る、景公を 稱號を賜ふ、雍に葬る、繆公は著人に學 南

を為すことを行ひ、十年に戸籍を為りて五家を 享くること二年、出公自殺す、強に葬る、献公國 章丞相と爲る、さて獻公立ちて七年に初 る嬰兒ありて曰く、秦は且に王たらむとすと く、惠文王生れて十九年にして立つ、立ちて二 と三年、遊陽に葬る、始皇帝を生む、此の時呂 壽陵に葬る、莊襄王を生む、莊襄王國を享くるこ る、昭襄王國を享くること五十六年、造陽に 王を生む、悼武王國を享くること四年、永陵に 恵文王國を饗くると二十七年、公陵に葬る、悼武 惠文王を生む、其の十三年に始めて咸陽に都す、 む、孝公國を享くること二十四年、弟圉に葬る、 を享くること二十三年、囂圉に葬る、孝 こと十三年、陵圉に葬る、出公を生む、出公國を の七年に百姓初めて劒を帶ぶ、惠公國を享くる る、簡 にして初めて銅鏡を發行す、此の時新 る、孝文王を生む、孝文王國を享くること一年、 と十五年、僖公の陵の西に葬る、惠公を生む 組と為す、孝公立ちて十六年の冬に桃李華さ 公を生む、簡公晉より來り、國を享くるこ に生れた 公を生 めて

國,秦布,赦。年二 使。惠,脩 相 於 先 民 東 功 地, 臣,施。 德, 饗。人,盡,侯 厚,元

右立。相 **歲**, 塞公至二世六百一 絕。國 其,不 國,地,入、謀、骨 年。爲。皇帝,三賜。其、秦,肉,大

伐てり、終公國を享くること三十九年、天子穆公 て閏月を誌す、成公國を享くること四年、雍の と十二年、陽宮に居る、陽に葬る、宣公の時初 門に磔にして熱毒惡氣を禦ぐ、宣公國を享く 初めて伏日を置き、伏祠社を作りて狗を邑の る、三人の庶兄出子を殺したる罪に伏す、德公立 生む、出子國を纏くると六年、西陵に居る、庶兄 居る、死にて衙に葬る、武公・德公・出子の三人を 公を生む、憲公國を饗くるを十二年、西の新邑に 祠る、襄公を西垂に葬る、文公を生む、文公立 る、宣公・成公・繆公を生む、陽に葬る、徳公の と二十年、平陽の封宮に居る、宜陽聚の東南に の弗忌・威累・参父の三人賊を率めて出子を鄙行 る、静公を生む、静公國を饗けずして死にぬ、 て西垂の宮に居り、五十年にして死に、西垂に に居る、陽に葬る、此の時齋は山戎と孤竹國 て死にね、襄公の時初めて西時を作りて白帝 賊ふ、衙に葬る、武公立つ、武公國を饗くるこ 、徳公國を享くること二年、雍の大鄭宮に 襄公立ちて國を享くること十二年に 四 憲

王武十年年圍雅出享公享悼子 享、王七始、葬、生、獻公國,其、國、公、子 國,享年都,弟孝公享十七十西也 五國,葬成園、公,享國,三年五生。居, 十四公陽生孝國,二年百年簡涇 六年陵惠惠公二年葬。姓葬、公陽 年 葬。生 文 文 享。十 出 陵 初。僖 简 享。 葬,永悼王王,國,三公圉,帶,公公國, 茝。陵武饗、其、二年自生、劒、西。從、十 陽昭王,國,十十葬殺出惠生。晉年 生。襄悼二三四囂。葬。公、公惠來。葬。

裹孝而水王有,十六十章三壽孝 王文立。赤生新九年年相,年陵文 生王立三十生。年局為常難。生王, 三生四日九嬰而桃戶公茝雅孝 十五年昭年兄立。李籍,立,陽襄文 二十初襄而日,立,冬相七生王,王 年。三為王立。秦二華。伍。年始莊享 而年,出,生、立,且,年惠孝初,皇襄國, 立。而開,十三王。初,文公行,帝,王一 立,立,阡九年草行,王立,爲。呂享。年 二 莊 陌, 年, 渭 武 錢, 生, 十 市, 不 國, 葬,

すこと非なりしを以てなり、是れ二世の過なり、已上すと天子と為り、富は天下を有ちながら、其の身戮殺こと天子と為り、富は天下を有ちながら、其の身戮殺こと天子と為り、富は天下を有ちながら、其の身戮殺こと、
まの、民心已に 安ければ、天下に逆行の 臣ありと雖、必み、民心已に 安ければ、天下に逆行の 臣ありと雖、必み、民心已に 安ければ、天下に逆行の 臣ありと雖、必

「字解」 領、頸なり、くび、寒、凍なり、ヨいエと訓む、 に、海輿」民、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 となければ此の五字無し、二世宗廟を壊し、 に、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、一本に此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作 に、となければ此の五字無きを是と為す、更始作、復作

立つることなり、別に更めて作る意にあらず、紀、經

理を

弗灵忌 邑、死、葬、 公、憲 靜 出 西 子 垂 四重,生文 ·威 一事國, 一个。 衍_ 累 國, 六 製製 + = 年、 父, 居。 庶長 公·德 武公 人 年、居 年、初 葬。文 西 而 式, 陵、庶 率, , 公·出 死章 公 垂. 立, 西 生。 憲 長,子,新

み、唯天下

ば四海

内皆喜悦して

を得しめ

望をし

T

疏通す

も其

0

ども

しく窮苦

實

1:

至

相

上下の

,、公侯 、是を以

如

1-

應

に任さし、前に一

世

め、臣主

も便

とし、饑ゑた

せざる者

立

つ、天下皆領を

始皇の

政を失

V

n

軌

反

房宮

民

を分ちて功臣

0

喪中

天下を禮し

人を

除去

財幣を散じ

なるを

以てな

知れ

下主下治民此,智,主,唯海以,修、後, 相弗多。刻更循,而之恐。之威行,使 遁、收事深始而暴心有办德。各天 蒙恤吏賞作重亂則變皆與慎下 罪,然。弗罰阿之之不雖讙天其之 者後能不房以奸軌有然下身,人 衆,奸紀當,宮,無止,之狡各天塞,皆 刑偽百賦繁,道矣臣猾自,下萬得 戮 並 姓 歛 刑, 壤 二 無 之 安 集, 民 自, 正子、民、助下以,王而賢,易。親。以相

起、困無嚴,宗世以、民樂。矣之新以

上而天吏與行。其離,處四而節,其

窮。度誅。廟不飾。無。其即望,更持,

傾。富。易矣雖牧見天不動。處,下望 非,有,與一故。有,民始下藉,也窮至。於 也"天爲。日,逆之終響,公是,苦於道 是下,非,安行道、之應,侯以,之衆而 二身此民之務變,者之陳實庶天 世不。之可,臣在。知。其尊,涉成人下 之免謂與必安。存民奮。不不懷。苦。 過於也行無。之,亡危。臂,用。安。自,之, 也数貴義響而之也於湯其危自, 殺,為,而應已機,故大武位之君 者天危之天是,先澤之故心,卿

三王の天下を建つるや、名分稱號顯かに 美にして功も未だ遽に傾き危く なるの患あらざりしなり、故にして上世の遺事を計り、殷周の治迹に竝び、以て其政故に其亡ぶること立ちて 待つべきなり、若し始皇をして上世の遺事を計り、殷周の治迹に竝び、以て其政故に其亡ぶること立ちて 待つべきなり、若し始皇をの政道を改め易へず、依然として 暴虐を以て 國是との政道を改め易へず、依然として 暴虐を以て 國是と

客なり、貪鄙はむさぼりやぶさかなること、禁...文書、といふ、虚、心、心を空しくす、即ち始皇の天子と為り、無華、兵は兵器なり、革は甲冑なり、轉じて戰爭のむ、兵革、兵は兵器なり、革は甲冑なり、轉じて戰爭のた。といふ、虚、心、心を空しくす、即ち始皇の天子と為りといふ、虚、心、心を空しくす、即ち始皇の天子と為りといふ、虚、心、心を空しくす、即ち始皇の天子と為りし道程は如何なりしかを詮索せぬとなり、貪鄙、鄙はし道程は如何なりしかを詮索せぬとなり、貪鄙、鄙はし道程は如何なりしかを詮索せぬとなり、貪鄙、鄙はし道程は如何なりしかを登っていること、禁...文書、答なり、貪鄙はむさぼりやぶさかなること、禁...文書、答言、資鄙は此の上に滅...周祀..の句あ動事業長久なり、

百家の書を焼きしをいふ、天下始、天下の魁の意なり、

少財之囹臣正。主二也甘觀 事,幣,罪,圉,之先以,以,使,而後,帝 糟其,秦糠,政,二 一世, 此、糟 心,有,言,而庸勞 勞 佐,振各、免。建,之 寒。立、者。天 國,過,憂。 民 反,刑 主 其, 戮, 立, 裂, 海 之 之 之 行而 易,整数利。下 君,地,内 除 窮 鄉 急,困 爲、整、程、莫、 里去。以,分,之 禮。民,患, 任、仁,新 發,收 褐,不 忠也主而引野鄉之饑領臣使資者而 帑天以,稿 省,輕。廩,汙 下,封。素 刑,賦,散。穢虚。功而

南

貴、下、先王順始、許道 道,

待。也不戰權,夫力,立借。孤改、國,此、幷。而私 權,夫、力,立,

冀ひ、心を虚くして上を仰がざるなし、故に此の時に

當りて天子の威を 守り功臣の功を 定むべきなり、

迹、使、獨是。而言。兼後權、信、以、秦而其、王、取者、仁禁、功

其,之,道 周

未,制 王,有,所 天 與 有,御,計,之,以,下,守 碩 其,上 故,取,其,不 政,世 後 雖 有, 淫 驕 之之

主迹。使

危 之 患 也 故

り、夫れ幷せ無ねる者は許力を高しとし、安んじ定む

る者は順なる權力を貴ぶ

ものなり、此れ天下を取る

て秦は戰國の時期を離れて天下に王たり、然るに其 と守るとは其の術を同じくせざるを言へるなり、 書を禁じて刑法を酷しくし、詐力を先にして仁義を を信ぜず、士民に親まず、王道を廢て、私權を立て、 り客なる心を懷き、自ら奮ひ起すの智を行ひて、功臣 れ安危の本は一に係りて此に在り、而るに秦王は

後にし、暴く虐ぐるとを以て天下を治むる魁と為せ

周 祀を 滅し 顯 、海内を対せ、諸侯を兼ね 美 功 業 長 久;王

> 面して天下に王たり、是にて上に天子といふ者あり、 にして振はず、あれどもなきが如し、五宝も亦既 よつて元元の民は其性命を安んずるとを得んことを して、戦争休まず、士民罷敝せり、かゝる時に秦は南 以て政事を行ひ、彊きは弱きを侵し、衆きは寡きを暴 して、令を天下に布く者無し、是を以て諸侯は武力を 何ぞや、曰く、近古に王者無きを久し、、周室は卑 天下の士は斐然として草の風に偃すが如く靡ける 面 して帝と稱し、以て四海を養ふ、是の時に當 1=

乘之權、兵車

T. 乗を

之下作。後八 笑、難,以,州, 異,者,而六 也,何,七合,朝。區 廟 為。同是區 墮,家、列,之 身 百 地 殺 不死。函,有施,人爲餘 而 之 手宫年 攻 為二 矣、 守天夫然*招*

勢

是れ仁義を天下に施さずして、 堕ち身は を宮と為し 侯を招きて、同列 る雍州の小地と千乘 彼れ陳渉が如き一夫が難を は又六國の比にあらず、即ち H 人の と異なればなり、日上第一篇なり、 陳涉と六國との比 、其の て、其の勢力當 手に死にて 天下 後始 の諸侯を朝せしめたること、凡 皇に の兵 権と 至り六合を家となし、殺函 るべからざりしなり、而 較 は 、攻むると守るとの時に笑れたるは何ぞや、 を以て、他の八州 起したりとて、七廟 已に 其 前述 人の昔は 0) 如 圓 そ百 0 R

懷。定。不既南

安心,元

元

守,命,子

而

貪切,虚,

心,之

於

矣、

王威,莫。也、秦衆、於矣、是、養、秦 出 暴。天 周 者 四 得 3 面。寡,下。室 大祖の廟 何,海, 是,卑 兵 天 也 0) 危而之王。革以,微。日, 仰,民天不 諸 昭三穆となり、 之 五 近 夫、陳渉を指す、七廟、天子の 上,冀、下、休、侯霸 侯, 八州、 古 在。當。得。是。士 力 南 旣 之 九州 此安上民政级無然面。 0) 彊、令 此。之其,有。罷 王 鄉,稱。 時。性天敝。侵。不者 風。帝、 3 今弱,行、久。若。以, 除

而語,矣、

となし縄を穏 きには非ず、 算きに非ず、鋤鍬又は棘の して言ふに足らざるの わて、漁陽より轉じて秦を攻む、木を斬りて兵器 れて散りんくになりたる卒を率ね、五六百の す、足を軍列の間に 踊みて、 歌畝の中より勃起 に及ばず、仲尼・墨翟の賢、陶朱・猗頓の の豪俊途に 、竿を掲げて旗と為す、其れ陳沙は此の 天下は 如くに應じ、糧を擔ひて景の如くに從ふ、是より山 て新開地 へり、此の 前 時の 始皇既に沒し 位は齊・楚・燕・趙・韓・魏 諸士に及ぶに非ざる 漁陽を成りし衆は九國の師に當るべ に係け 時陳涉起 遷されたる あらず、雍州の 起ちて秦の一族を亡しぬ、且 72 慮 たれども、 輩なり、而 る程の n 9 り、陳沙は 柄の戟は 徒なり、其の才能 軍を行り兵を用 貧家に生れ、下衆 地殺函 然り也、而して るに 其の餘威 曲戟長 n 天下の豪傑 たなり 富あるに非 固は依然 如く微弱に 劒 衆を將 より利い 君 は 2 其成 中人 より つ夫 と為 3 3 牖下夷 郎

者、即ち に作れ 温、ふ 地を守ること、抗、當るなり、郷 なり、適成、 利きなり、句戟、刃の曲り は ふ、自若、依然なり、棘科、棘は刺ある なり、贏、糧、贏は擔ふなり、景從、影の如く從ふをい 戶の樞に はまどなり、樞は戸のくるゝなり、破れ紙を懲となし 量らしめば、年を同じくして語るべからざる 敗 人なり、倔起、猶勃起の如し、什伯、陳涉世家には阡 り、陶朱、范蠡のこと、猗頓、魯人なり、共に富者なり して陳沙 戟 人は異に 古 ぶなり、 の柄 むなり、行伍、軍列なり、行は二十五人、伍 り、阡陌は猶畎畝の如し、轉、 下衆下 縄を係けたるとて貧家のことなり、此様、此 殊俗、蠻夷なり、纏牖繩樞、響はか 變 なり、棘を伐 と長所を度り强大を較べ權威を比べ 氓なり、 6 適は謫と通ず、適成は 功 郎なり、仲尼、孔子なり、墨翟、墨子な 動事 即ち民なり、民熱は使役せらる h 業は相 -[たるほこなり、長鍬、鍛は劒 作り 反せ 時、前 72 り、試 流刑にせ 6 漁陽より きの 戟 木の名なり、矜 の柄なり 15 山東の 時 めな なり、累、 轉 武 b 力を は五 國 陌 3

足,尼徙。壅。秦 徒,繩。既二 之 樞、 之 賢 能 之餘 子 威 陶 不 朱 及, 毗。振, 隸於於 中 人之殊 頓 非、人。俗。 之 之富有。而陳 中。躡?仲遷 涉、

長,反,之遠成。優,楚固下、俊雲攻。率。 累也土虚 棘,燕 自非、遂集、秦、罷 之 大、試也行衆、比使然軍非 矜*趙 若,小並。響,斬,散 大, 試。也 行 非韓 也弱起,應,木,之 抗烈 而 陳也 贏,為。卒, 用 錟 魏 而 涉雍亡。糧兵將 量, 東成 兵 於於宋 何 秦 之州 之 衞 敗 九 而 揭,數 力,之 則國,異道 戟中 位、之族,景。华,百 國 矣從為為之 非 非地 與 長山 變 之 可,陳功 尊。殺 且。山 旗、衆, 及師識之 同,涉業鄉 也君於函 深 夫,東,天 適。銀濟之天豪下 轉 す、百越の りて天下を鞭ちて 奴を却くると七百餘里、胡人は 諸侯を亡し、天子の位 續ぎ、長き策を振りて天下を治め、東西 講義】始皇に至るに及び、六世 の方長城を築きて國 、百越の君は首を俛れ頸を繋ぎて降り、振ふ、即ち南の方百越の 地を取りて 桂 吏に委ね 君は首を使れ 、南方已に平定 秦の に即 境を守らし 法 1= きて六へ したれば、次に蒙恬 順は を取りて 是れ 合を制 0 む、其 む、是に因 より 遺し 桂林 二周 御し、杖 敢て南 命を 0 72 を呑み 象郡 武 る功 りて 威 獄 烈を 方に 四 を執 2 海 T

> め、其の鋒及び鏑を鎔解して金人十二を造り、以ち豪傑俊秀を殺し、天下の兵器を收め、之を咸陽 は き兵器を陳ねて關門の出入を 以 **廢し、百家の言を焚きて人民を愚にし、名ある** 下りて馬を牧はず、士は て天下已に 下の民を弱めむとす、 る T 金城千里にして子孫帝王と爲りて ぬ谿に臨みて なり、是に於て四 要害の處を守り、忠信ある臣と精鋭 、黄河に傍ひて 定まれば、始皇の 固 めと為す、且つ良將と 海 池を造り、億丈の 其の 靜 敢て 諡となり 後華山を斬り開きて 心には自ら 弓を引きて怨に 誰何す、此の 72 れば、先王 萬世 城に據り、 勁き弩 に傳ふるこ 關中の U) 如くに 卒とは 城 0) 報 2 城 固 道 底 3" * 午11 天 集

映、肥えてあぶらづきたること、收=要害、新書には收 の上に北の字あり、要害は 形勢険しくして 我に在り の上に北の字あり、要書は 形勢険しくして 我に在り の上に北の字あり、要書は 形勢険しくして 我に在り の上に北の字あり、要書は 形勢険しくして 我に在り の上に北の字あり、では書と為るべき地をいふ、 徐尚、詳ならず、蘇秦、傳あり、杜赫、周人なり、香明、 東周の臣、後に 秦楚韓に 仕ふ、周最、最は軍に作るを 東に仕ふ、昭滑、昭は陳涉世家に邵に作り、戰國策・新 秦に仕ふ、昭滑、昭は陳涉世家に邵に作り、戰國策・新 秦に仕ふ、昭滑、昭は陳涉世家に邵に作り、戰國策・新 秦に仕ふ、昭滑、昭は陳涉世家に邵に作り、戰國策・新 秦に仕ふ、昭滑、昭は陳涉世家に邵に作り、戰國策・新 秦に仕。昭滑、昭は陳涉世家に邵に作り、戰國策・新 東は荷文ならむ、鏃、やじりなり、養所・樂教・吳起・孫 は行文ならむ、鏃、やじりなり、強人なり、強後、魏 は行文ならむ、鏃、やじりなり、強、此の二字恐らく は行文ならむと、本に相なり、近近、此の二字恐らく は行文ならむと、本に相なり、近近、此の二字恐らく は行文ならむと、本に相なり、流血楯を漂はすとは はたいよはすなり、歯は楯なり、流血楯を漂はすとは

三年、故にいふ、「「淺、孝文は王 在位 一年、莊襄王は如く易きをいふ、「「淺、孝文は王 在位 一年、莊襄王は

萬 朋 b 天 高 杜 楚・齊・趙・宋・衞・中山の九國の衆を幷したり、是に於 士を重んじ、合從を約して連衡を離ち、以て韓・魏・燕 して忠信あり、心寛に厚くして人を愛し、賢を尊び 楚に春申君 亡する者を追ひかけ、背走する者を逐ひつめ、 h 0 じ、又吳起・孫臏・帶佗・兒良・王廖・田忌・廉頗・趙 昭滑・樓緩・霍景・蘇厲・樂毅の て韓・魏・趙・燕・齊・楚の六國の士に寧越・徐尚 秦に獻ぜり、秦は尚餘 の衆と 師 ありて其 赫の屬ありて合從の謀を為し、又齊明・周最 の效力を失ひ盟利自ら解け、各、争ひて地を割 下の諸侯は已に困憊せり、是に於て諸侯の 險を恃みて關を開きて 敵を引き入る、されど 、是の 故に秦は矢を亡ひ鏃を棄つるの費無きに、而 は其の 招 時に當り、齊に孟嘗君あり、趙に平原君 を以 き、合從して交を 險阨 あり、魏に信陵君あり、此四 兵を指 T 沃 函谷關を叩きて秦を攻む、秦人其の 0 れて逡巡として敢て進まざるな +: 揮す、常に秦より十倍の地と百 力ありて其 地 も惜 結び、相與に 徒あり まずして、天下の 弊を正 て其の 君は皆明知 一團と為れ 合從 ·陳軫 ·蘇秦· 斬 意を通 あり らり伏 名 かっ 九 3 國 3 は T 1= 0

> りき かず 許 及びては國を享くること日淺くして國家何事 ひ、弱國は臣となりて入朝す、其の後孝文王 1= せ 如くし、河山を四分五裂す、よつて彊國は降 なり、秦已に諸侯の軍を粉碎 因り便宜を計りて天下を割 たる屍 は百萬 に達 し、其 0 流 くこと屠 した 3 > ÚI. れば、自らの は精乳 幸 肉 3 伏 な 割 す

拱、手、拱は兩手の大指を相挂へ他の四指を形横に長し、故に六國皆秦に服從するを連 り、下文の九國の師の秦に ふ、惠王武王、陳渉世家には武王の下に T 衡、衡は横なり、六國と秦とは東西に 邊境なり、八荒は八方のはてなり、商君、商鞅なり、 ろに入れて くゝるなり、其の 抱く也、雍州、孝公の都の在 (字解) てまくなり、收め取るの 敬すること、こまぬ 遺冊、連衡の策なり、撃、拔くなり、 故に昭王の **黎函、殺は山の名なり、** 二字あるを是となす、故 < 、拱手とは 容易なるをいふ、囊括、ふ 迫まりしは る地なり、席卷、むしろに 意上に同じ、八荒、荒は へ他の四指を組み合し 函は 事を爲さ 涵 在りて其の地 昭王 破るなり、膏 昭王の時 谷關なり、擁、 いる 0 事

良王 已.無多 國 陳 秦 於,韓 叩,其 之 兵、常四, 徒、 徒、形。昭 是.魏 杜 關, 之 師、逡 赫 矢 而 秦。矣 其,滑 國 楚·齊·趙· 变。以, 意,樓 忌·廉 鏃, 巡秦 遁·秦 屬、 之 有,是。 + 緩·翟 倍 吳 爲 之 逃·而 起·孫 之, 有。寧 散。 頗 之 趙 謀、齊 開業 景·蘇 地, 約 解,天 奢 臏 越 關,百 不 帶 徐 厲·樂 敢, 萬 之 明·周 延, 進、敵、之朋、佗秦九衆、制、兒 尙 做,割,諸 之 蘇 毅 追。地,侯

きて 四 室の微を窺ひ、天下を席にて卷き、字内を包み擧げ、の地を抱へて都を其の中に置き、君臣固く守りて周 講 故 國 まし、守戰の具を修めて萬一に備ふ、外には東西 は法度を立て上下を正し、農耕紡織を務めて民を富 3 莊 秦を弱めむことを謀り、之が は 南 國 ~利 秦 き霸業を承け續き、遺されたる連 を連ねて諸侯を の下心あり、是の時に當りて商鞅之を輔佐し、 海をふくろに入れて括り、八荒を拜せ吞まむとす 方は 西河 0) 肥 請乘逐 腴 王、享、國 服,便 の地を 秦の孝公は殺山 の外を取れり、孝公既に没して惠王武 、彊大となるに恐れ 漢中を兼ね、西の方は巴蜀を破り、東の 割き、北の方は要害の郡を收む、 國 闘はしむ、是に於て 秦人は手を拱 日 の死行 浅, 朝 為 おぢけて、會合盟約 函谷の 延非分 國 流 めには 及裂。 衡の策に因りて、 固に 珍らしき器物 無 孝河 據り、雍州 事,文 國等 方は 諸侯 王は 0)

因

彊

T

審之,也野 時 當 是,諺 世。以,日, 之參。君前 宜,以。子,事 去人為之 事,國,不, 就 有,察。觀 序盛之,後 安。變 衰 矣、化 之古之 理,驗。師

曠

日

長

祉

稷

頓て後の 講 人事を参へ、盛衰する所以を察し、權勢の宜しきを明 、故に久しく日を重 巳上第三篇なり、 、先づ上古の法を觀て之を當世に試み驗し、之に後の事の手本なりと、是を以て君子の國を治む 取捨するに 事の手 諺に を重ねて 長引くも 其の國家安寧な順序を立て、變化するに時勢に適應 日く 前の 事を 忘れざるは、之が、

字 野諺、卑い .15 作 るべ 近の し、曠日、 ことわざなり、有、時、有の 、人しき日なり、

孝 守,殽。 函 窺。 之 固。 室,擁, 雅 席 州 卷。之

此,趙、交,美盟、之南,惠拱,備,之,并天 四有相之而地,兼王手,外内吞下,君平與地,謀、收、漢武而連立,八包 者。原為。以,弱。要中,王取。衡。法荒, 一、致、秦、害 西,昭。西 而度,之 有,當,天不之學,王。河關。務,心內, 知春是,下爱帮,巴 蒙之諸 耕 而申 珍諸蜀,故外,侯,織,是,括 時。之 東,業,孝於,修,時。四 魏齊士器侯 信有,有,合重恐 割。因,公是守 商 從寶懼。膏。 遺既秦 加 厚,陵 嘗 締。肥 會 腴 册;没。人 之 佐。意

重」足而立、左右の足を重ねて立つ、是れ亦謹慎の貌、低、耳而聽、正聽せざるなり、仄聞なり、謹慎の貌、【字解】 知化、時勢の變化を知ること、拂、匡すなり、 5 3 口 かっ ざるなり、天下已に聞るれども、奸惡上に聞えざり 30) を排みて言はざらしむ、是を以て三主は ば、尚太平なりと思へり、豊に哀しからずや、 道を失ふも、忠臣は敢て諫めず、智士は敢て謀 天下を治

^

兵,怨 嚴,附,伯。 道,望,刑,而征 而而而而 得,姓法,外,五 暴,飾、之 海 諸 千 稷 存、侯 畔、振、故、從、天矣、及、秦其、下 絕。故。其,之 削。服。下

之,安 危之 統失 故 去。不遠。長 觀

從ふ、其の地を削らるいも内堅く守り外强者に附き 其の勢の彊き時は暴虐を禁じ反亂を誅して天下服 り、五序、五は新書に王に作れり、是なり、王序とは【字解】 雍蔽、ふさぎおほふなり、飾ゝ法、飾は整ふ 【字解】雍蔽、ふさぎおほふなり、飾、法、飾は整の本源は相去ること已に遠きなり、 從ふを以て其の國家は長く。存在することを得るな す、其の弱きに至りては、五伯代りて征伐し諸侯之に ふことを知れり、故に公卿大夫士を置き、以て法を飾、は講義』 先生は上の 明を 塞ぎおほふことの、國を傷 滅亡せしなり、此に由つて 之を觀れば 安寧と危殆と り、されど秦は本末並に道を失へば、長久ならずして 道を得たりしが 故に 千餘歳の 後までも 絶えざるな て海内之に畔けり、故に周王の相續する次序は を以て天下振ひ懼れ、其の衰ふるに及ぶや、百姓怨み り、而るに秦の盛なるや、法を繁くし刑を嚴しくする 刑を設けて強酸の弊を防ぐ、故に天下治まるなり、 其の 周

王

相續する次序なり、統、本源なり、

険阻の要素の犯し難きを見るや、必ず其の軍を退け、 大家きを收め疲れたるを扶けて、大國の君に命令を ち、弱きを收め疲れたるを扶けて、大國の君に命令を ち、弱きを收め疲れたるを扶けて、大國の君に命令を 者にあらずとなす、而るに子嬰は貴きこと天子とな り、富は天下を有ちながら、其の身擒と為りしは、是 り、富は天下を有ちながら、其の身擒と為りしは、是 り、面して二世又之を受け次ぎ、始皇の行為に因りて の原因は遠く始皇の時より兆せり、即ち始皇は己を の原因は遠く始皇の時より兆せり、即ち始皇は己を の原因は遠く始皇の時より兆せり、即ち始皇は己を の原因は遠く始皇の時より兆せり、即ち始皇は己を して親むべき臣無く、危く弱にして輔佐の任無し、此 して親むべき臣無く、危く弱にして輔佐の任無し、此 して親むべき臣無く、危く弱にして輔佐の任無し、此 の如く三主私欲に惑ひて身を終るまで悟らざりしか ば、其の亡びたること尤もならずや、

ず、とりこ、救、敗非、敗亡を救ふの循善からざるをいと、扶、罷、扶は助くるなり、罷は疲れなり、禽、擒と通狭道なり、安土、新書に、案士に作れり、兵士を勞ふこく。卑、軍壁なり、とりで、阨、「字解」 軍、屯營すること、壘、軍壁なり、とりで、阨、

の士をして耳を傾けて聽き、左右の足を重ねて立ち、の變化を知れる 士無きに非ず、然れども 此等の人々の變化を知れる 士無きに非ず、然れども 此等の人々の過化を知る。

るとも、其の地形低くして 秦を攻むるに 利便ならざ の秦よりも足らざるならむや、諸侯の智勇秦より勝 も進むこと能はざるなり、秦乃ち諸侯の軍を引き入 戦はむとし、之が為に關を開けば、百萬の徒逃 通じたり、然るに秦の險阻なる 遂に 總壌れとなりぬ、此の め は其の軍を指塵し、賢相 りき、其 0) 如きは豊に勇力智慧 固めに 困んで一 侯 0) n 弘

以待,其似,收,弱,扶,器,以令,大國之君,不是,不是,不得,意於海內,貴為 在,以,是,是,不是,不得,意於海內,貴為 度以,重,過,世受之、因而不改、秦 度以重,過,一世受之、因而不改、秦 度以重,過,一世受之、因而不改、秦 方,一世受之、因而不改、秦 方,一世受之、因而不改、秦 方,一世受之、因而不改、秦 方,一世受之、因而不改、秦 方,一世受之、因而不改、秦 方,一世受之、因而不改、秦

を畏れて地を獻じ、之を利するなり、故に彼等は秦の其の軍の名は秦を亡すと宣言すれども、其の實は秦ば、其の変も未だ親まず、其の下民も未だ附隨せず、は、其の変も未だ親まず、其の下民も未だ附隨せず、は、其の変も未だ親まず、其の下民も未だ附隨せず、は、其の変も未だ親まず、其の下民も未だ附隨せず、は、其の変も未だ親まず、其の下民も未だ附隨せず、は、其の変も未だ親まず、其の下民も未だ附隨せず、は、其の軍の名は秦を亡すと宣言すれども大城を幷合し、険し、諸義』秦は元來小邑なれども大城を幷合し、険し、諸義』秦は元來小邑なれども大城を幷合し、険し、諸義』秦は元來小邑なれども大城を幷合し、険し、

べく、宗廟の祭祀とても 未だ遽に 絶つべからざりしけの材ありて 僅の 忠誠の輔佐を得しめば、假令山東はの材ありて 僅の 忠誠の輔佐を得しめば、假令山東をに之を寤らざりき、若し 子嬰をして 凡庸の君主だ

大弓なり、機は銀の柄なり、白挺、挺は杖なり、銀際、銀はけはしきとりでなり、中兵、甲冑兵器なり、銀際、銀はけはしきとりでなり、中兵、甲冑兵器なり、銀際、銀は大弓なり、海門、縣の名なり、青の阿山に在して行くこと、閩、閉づるなり、長戟、長柄のほこなり、強き、大弓なり、海門、縣の名なり、青の陝西省楡林府神木大弓なり、海門、縣の名なり、清の陝西省楡林府神木大弓なり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は柴竹を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は東行を以て作りたるかきなり、まがき、ませがき、藩籬は東行を以て作りた。

北《入、然》位、幷、哉 形不利,勢不便 或 戰而 困 列,力,其, 也、 而 餘 良 邃_ 於 壤、 将、攻。 阻 行,秦,然 其,矣,也 險、 而 勇 開。 也、 關, 力 師, 智 百 慧不足哉、逃 進、秦 相、 之 通素 世 嘗, 其 一賢 乃 同意 心,賢力 逃,延,謀,智

なり、且つ天下の諸侯或る 時は心を 同じくし力を拝り以來始皇に 至るまで 二十餘君の間、常に諸侯の强が以來始皇に 至るまで 二十餘君の間、常に諸侯の强ば、四方塞がりて自然の城壁を為せる國なり、繆公よば、四方塞がりて自然の城壁を為せる國なり、繆公よば、四方塞がりて自然の城壁を為せる國なり、繆公よば、四方塞がの間と為せる場合と演せる。

將諸曾。彊阻 奮。然,繕。 使,可市。而 侯無弩,險,挺臂,陳 並。藩 見。於東 不 不 望、大。涉 射、楚 守、屋、呼、以‡據。而不及險 嬰,於外.征、起、籬 章 豪 之 艱師梁 於,深,不 俊 矣謀。邯 梁,食。 横弓 其,因,相 地 之嬰上,以,立,是入。闆,行、戟"亂材、立、羣三秦山戰。長天之之 甲 可,材 軍 使東於戟下兵衆章大溫不秦鉏數 遂。臣 得不之之 有,中 寤,不。衆,邯,擾。門。刺,人、櫌。百,之。

宗廟之祀未當絕也、

彊き 器を はりて勢を示し、弓戟の如き立派なる兵器を用ひず、の散亂せる衆僅に數百を率ゐ、臂を奮ひ大いに呼ば 是に於て山東大いに亂れ、諸侯竝び起ち、豪傑俊义相障礙物無く、全く無人の境を行くに任すの觀ありき、 も守らず、關所も橋梁も闖さず、長き戟もて刺さず、くしてほしいまゝに行くに當り、秦人は險阻の地を 唯有り合せの鋤鍬白杖の類を持ち、糧食を攜へざれ よりて或は反せむとす、其の羣臣の信あらざること に將として東征せしむ、章邯乃ち三軍の衆を率る、 立ちて、共に秦に嚮はむとす、秦よつて章郎をして兵 し得ず、遂に鴻門に戰ふに曾つて藩籬ともなるべき ば到る所の民家を望みて つ船著場關所を繕ひ、險しき要塞に立て籠り、甲 て天下を一統し、山東をも合して三十餘郡を有ち、 弩もて射ず、楚の師の深く秦の地に入るも撃退 修めて之れを守れり、然れど陳浩が漁陽の て封土を要求し、以て其の上の意を謀 賈生の温 過秦論に曰く、秦は諸侯を 食を奪ひ、天下に憚る所無

侯、秦 竟 滅 矣、後 五 年、天 下 定 於 為 西 楚 霸 王、主、命 分,天 下,王 諸 雍 王·塞 王·翟 王、號 曰,三 秦、項 羽

【講義】 項羽秦の後を滅して、各"其の地を分ちて三と為し、名づけて雍王・塞王・翟王といふ、之を號して三秦といふ、項羽乃ち西楚の霸王と為り、天下に合するの命を主り、天下を分ちて 諸侯を 夫れんく王と為り、 といふ、之を號して は 美に於て秦竟に滅びぬ、後五年にして天下漢に定す、是に於て秦竟に滅びぬ、後五年にして天下漢に定す、是に於て秦竟に滅びぬ、後五年にして天下漢に定れる。

走成台是,自,以家,的是在房,也 於唐處之際,受,土,與姓,及,殷 夏 之間,微散,至,周之衰,秦 興,邑,于 之間,微散,至,周之衰,秦 興,邑,于 之間,微散,至,周之衰,秦 興,邑,于

生推言之也、

賈

【字解】 鑑食、鑑の桑葉を食ふが如く、段々と他國のに功勳ありて 土を受け姓を 賜はれり、其の後殷夏のに功勳ありて 土を受け姓を 賜はれり、其の後殷夏のは事、其の地は三王よりも廣し、而るに五帝三王と同號なるを羞と 思へり、故に始皇は自ら 其の功は五帝に続を成すに 至れり、故に始皇は自ら 其の功は五帝に続なるを羞と 思へり、故に自ら始皇帝と 稱して萬世號なるを羞と 思へり、故に自ら始皇帝と 稱して萬世に傳へむとす、而るに二世一王にして滅びぬ、是れ其の原因無くんばあらず、幸に賈生已に之を推論せり、今之を左に記して贊に代ふ、今之を左に記して贊に代ふ、

日、秦弁、兼諸侯、山東三十餘郡、

號なるをいふ、賈生、賈誼なり、

傳あり、推言

即ち過秦論のことなり、

地を奪ひ取ること、体、齊なり、等なり、五帝三王と

同

学院、「 とびり、たれぎぬ、握坐は とばりを 引き廻したる坐にして即ち 天子の 御坐なり、韓は單帳なり、公、 を下と呼ぶ、此時已に二世を無視す、便、宜なり、猶適 と下と呼ぶ、此時已に二世を無視す、便、宜なり、猶適 と下と呼ぶ、此時已に二世を無視す、便、宜なり、猶適 と下と呼ぶ、此時已に二世を無視す、便、宜なり、猶適 と下と呼ぶ、此時已に二世を無視す、便、宜なり、猶適

還,旁。白軍、沛馬 還, 公破, 子嬰爲素王四 約 小公 遂入。天 降。子 從霸上 秦軍、 殺。居、入,子月成 關。逐 餘、 陽-封。 諸 侯。宫 秦諸 兵 府朝以上將庫,道組,使流流 至、項

は軍敗るれば皆喪服と同じくす、帜、地名なり、從長、関東の諸侯を合從したる長なり、 は軍敗るれば皆喪服と同じくす、帜、地名なり、從長、は軍敗るれば皆喪服と同じくす、帜、地名なり、近、子嬰及び秦の諸公子宗族を殺し、遂に 咸陽城を屠りて襲及び秦の諸公子宗族を殺し、遂に 咸陽城を屠りてとず、とするの意なり、自馬素車、皆喪人の服なり、古は軍敗るれば皆喪服と同じくす、帜、地名なり、從長、関東の諸侯を合從したる長なり、原、頸以、組、自殺は軍政るれば皆喪服と同じくす、帜、地名なり、從長、関東の諸侯を合從したる長なり、

世 沫 と難 自 空名を以て依然として 帝と稱するは 不可なり、宜し たりき、而るに始皇天下に君と なりてより 帝と稱せ きて進む、二世途に自殺す、閻樂咸陽に歸りて二世を 天下の爲に足下を誅せむとす、足下如何に多言する 公子の如く さず、二世又日 許さず、二 n く王と爲り故の如く なりてこそ 適當なれと、乃ち二 り、今や六國復自立し、秦の地益 ば と嬰をして齋し當に廟見して 玉璽を受くべか を誅せし狀景を告げ、且つ曰く、さて秦は元來王 せる由を報ず、趙高乃ち悉く諸大臣公子を召し、二 決の計を爲よと、二世曰く、丞相に言ふべきことあ の屍は人民を の兄の子の公子 、子嬰齋すること五日、其子二人と謀りて日 、臣敢て之を丞相に取次すまじと、其の手兵を 3 、見るを得 F 、吾願くは一郡を得て其王とならむと、樂之を 畔け 世叉ヨく ならむと、閻樂日く、臣命を丞相に受け、 3 { べきや否やと、樂日 用ひて なり 、願くは妻子と俱に人民と為りて諸 嬰を立て、秦王と爲す、而して二 、願くは 、今の 杜南の宜春苑中に葬る、趙高 期に 萬戶侯 及び 、小となれ 72 く不可なりと、二 ては足 らむと、樂叉許 り、因つて F 8 く、丞 其 國 廳 n

> 咸陽に徇へたり、 廟見せむことを請ふこと數次に及ぶ、子嬰態 相 し、高が家の父母兄弟妻子に り、王何ぞ 行かざると、子嬰篴に高を 齋宮に 刺し殺 ず、高途に自ら齋宮に行きて曰く、宗廟の む、來らば之を殺さむと、果して高は人をして子嬰に ち病と 稱して 行かざれば 丞相必ず 我が齋宮に來ら 欲するの企ならむ、我彼が裏を搔きて之を殺さむ、乃 せ廟に見え の宗室を滅して關中に王たらむとすと、今我に齎さ 我を立てた を誅せむとを恐れ、乃ち心にも無きに、表面義を以 高 は二世 る也、我仄 を望夷宮に殺したるを以て、群 むとするは、此れ廟中にて 我を殺さむと に聞くに趙高既に楚と約 至るまで 皆之を誅して 事は 臣 かう 重 と行 大な 叉高 か T

に設けたる衛士の居る舎なり、格、たゝかふなり、幄占夢、夢を占ふ博士なり、三世乃薦ニ於皇夷宮、李斯傳には二世行人を上林に射殺したるによりて皇夷宮に遷さるとあり、此の紀と異なり、責譲、譲も責むなり、憲、宗族なり、載、戴くなり、劫…樂母、樂に二心あらむことを恐る、故に 其の母を 人質にす、周鷹、宮の外周ことを恐る、故に 其の母を 人質にす、周鷹、宮の外周には二世行人を上林に射殺したるによりて望夷宮にといる。

之を追は

むしるに

に大賊

南

りと為

日く、汝何ぞ早く我に

下に言は

さり

の近侍を召す、左右皆

御 坐の

宮庭

分明

となりて

皆已に誅

日く

、足下は驕り恣

、故に天下共

事を

怖れ

に在 祀

b

せ

る左

鯵馬

<

0)

其

0

敢 0

盗賦

更に

が宗族に及ば

閣

樂及び其

0)

かっ

ぬこと、言、鹿者、者の

字恐

侯自。益,下也畏。陰馬鹿,曰。不八八 而,及高,中,以為馬聽,月前。項高諸阿,馬,也,乃已章 羽,前。言順問,二先。亥 萬 關 助, 人,侯以民,康、居,率、大 侯 燕 以 趙 羽,前,言,順。問,二 廣數應趙左世設。 齊邯 其,氏,楚等,秦衆,盡,韓軍將 言者高右笑驗。高 關以或左日,持款欲 將 使 西 畔* 獻、亂, 吏立,上等,毋,羣應,爲,書,鉅能,臣 私。沛吏立,上 高_粉*諸王、請、鹿、爲、皆因、言、謂、世。臣、

力に怖れて 國 とを請ふに至れり、其の間燕・趙・齊・楚・韓・魏等 * 諸の鹿といひし 者に 刑法を中て嵌めて處斷す、故に力に怖れ ずして 鹿なりといふ者あり、高因つて陰に 萬咸 前 後に至り羣臣皆高を畏るゝやうになれり、さて高は ざるなり、故に人をして私に高に氣脈を通ぜしむ、 氐 0) V 高 かて 其 も、羣臣の己の意に從はざらむことを恐れ、乃ち先づ は皆 鉅 軍 むと言へり、而るに其の後楚の項羽は秦將の に關東の羣盗は鼠賊にして能く大事を爲すこと 恐れて馬なりと言つて之に阿り が心中を計り兼ねて默する者あり、或は高 鹿を謂つて馬と為すと、之を左右に問ふ、左 日 0) 杰 人を將ゐて已に武關をほふりて其の 一く秦の官吏に畔きて諸侯に 内應す、諸侯よつて 其の は數、却けらる」を以て、上書して援兵を益 鹿の く、此は馬なりと、二世笑ひて曰く、丞相誤 意中を試験せむと思ひ、鹿を持ちて二世に 獨立して王と爲る、故に函谷關より以東 下に捕虜となして前進するに及び、章邯等 衆を率わて 西の方秦に嚮ふ、殊に沛公は二 順ひ、或は 勢當るべから 右 高 カラ E 献じ は 3 或 てる から

は冤器なり、監門之養、門番の供養なり、蒙、薄なり、なり、亭水、停水なり、築重、築は 牆隄を 固むる 杵なり、香は鍬なり、脛母」毛、脛は はぎなり、毒目なく旅り、話は鍬なり、脛母」毛、脛は はぎなり、毒目なく旅行するを以て脛に毛の生ぜざるをいふ、肆、ほしいままなり、處、居るなり、徇、遍く示すなり、君、猶卿と云まなり、處、居るなり、徇、過く示すなり、君、猶卿と云まが如し、緒、物事の 起始なり、夫夏、地名なり、河、九河又盡なり、と聞いるとなり、と問いるとなり、と問いるとなり、

国む、楚の上將軍項羽楚の卒を率ゐて往き鉅鹿を救置む、楚の上將軍項羽 将,,楚 卒、往 救,鉅 鹿、上 將 軍 項 羽 將,,楚 卒、往 救,鉅 鹿、一一 年、章 邯等其の配下の卒を率ゐて鉅鹿を

本で之を殺したり、 「講義」多、趙高途に丞相と為り、李斯の罪を取り調を、道高後、成相、竟案、李斯、殺、之、

夏、章邯等戰數却、二世使人人讓

【講義】 夏、章邯等諸侯と戰ひて數、擊退せらる、二と命亦誅せられむと、此の時項羽急に秦軍を撃ちてとも亦誅せられむ、功無くとも亦誅せられむとして追ひ捕へしめしかど及ばず、欣此に見えず、又其の言ふ所を信ぜず、欣よって恐れてとも亦誅せられむとして追ひ捕へしめしかど及ばず、欣とす亦誅せられむと、世の時項羽急に秦軍を撃ちて王離を捕虜とせり、是に於て邯等も亦遂に手兵を率るて諸侯に降りぬ。

天下 來りた なり、 極 き、其 を韓子に聞 戍 海内を制御することを得るに 持ち、脛に毛を生ぜざるまでに勞働せり、其の 停水を切り開き、之を海に放ち、又自ら牆杵及 なり、さて又禹は龍門山を鑿ち大夏を通じて、九河 居りて之を經驗 の主は貴きこと、天子たり、而るに h へず、飯を土製の飯匣に食ひ、水を瓦器にて啜りたり 、故に願くは 衞漕轉を減じ め、上は明法を重んじ、下は敢て非違を爲さずして 捕虜の とを造りて吾が萬乘の君たる號名を充たさ 何ぞ法律を待つ必要あらむや、今朕は を有つに貴しと爲す所は我が意を 而るに其實無 るまゝに へ素の 賦 0) 税大にして其 勞力と雖 けり、日く、堯舜は椽を為るに山より不り 多 風 暫 3 、門番 省か て削 し以て遍く は く阿房宮の造作を中止し、四邊の し、故に吾是より千乘 此 れむことをと、 皆是れ の供養と雖、此より り刻まず、茅茨の屋根を剪り より酷し の誅求の 戍衞 百姓に示せり、此 在りと、 からざるなり、 親ら窮苦の實地に 酷 なるとに因 一世日 の 肆 さて彼 作 薄から 萬乘 事 駕 にし欲を 0 び鍬 勞苦は 0 、吾之 困苦 虞夏 るなな 0 如 凡そ ざる 整

> 3 辱められむやと、自殺す、斯は卒に囚はれて五刑に就 と劫とは日 去疾斯劫を獄吏に下して、他罪を以て調べ責む 0 ゆること無く、次は朕 たるを章はせり、 境を安んじ、其餘力を以て宮室を作りて 下已に定まりぬれ 欲す、且つ先帝は諸侯より起りて天下を策ね給ひ むとする所を罷めむと 欲す、是れ 3 なり、此の 、而るに君 を觀つらむ、今朕位に即きて二年の間、羣盗並 < 如くむば何を以て其の位に在らむやと、 は之を禁ずること能はず、又先帝 、將軍丞相の 而 ば、外に出でて四夷を攘ひ、以て邊 して W) 為に忠誠 君は 身分に 先帝の 上は 一努力 して何ぞ獄吏輩 功 を 先帝の恩に報 業の 其の意を得 端絡 び起 あ

埋、土製の飯匣なり、啜: 土形 をいふ、茅莢不、朝、茅はかやなり、夾は茅を次第して 為るに山より伐り取りたるまゝにして削 果は取るなり、椽は たるきなり、刮は り、轉は車輸 (字解) 蓋ふなり、ふくこと、翦は 成漕轉、成は なり、韓子 丁、韓の公子非なり、采橡不、刮、邊境を守ること、漕は舟運な 、啜はす 切 b 整ふるなり 削るなり、椽を 7 るなり り刻 まざる

造,何,子御,欲,凡,脛,決,養,不之,者,苦, 於親海主所、西河不翦,韓減賦 法。處、內,重。爲、毛亭、觳,飯。子、省、稅, 矣明貴。臣水,於土日,四大 朕, 窮 夫、法,有,房放,此,塘,堯 尊, 苦 虞下、天之之,禹、啜、舜、戍 萬 萬之 乘,實夏不下,勞,海、鑿,土采 毋。以,之敢,者不身龍形椽。 屬,其,徇,主為,得,烈,自,門,雖 充。實 百 貴非,肆於持。通監 刮。日,房 吾,吾,姓。爲,以,意,此,築大門 號欲尚天制極矣重夏,之莠聞作

不,劫,股,所,並,有,室,已。名, 辱吏盡為起緒以定見 伐た 劫共 る所甚だ衆 て、關 む 已に楚地の むとす、秦是に 1 進み 時無し、よつて右丞相去疾・左丞 中の兵卒の發して 殺、責力,上、不 朕 得,攘、帝 し、然れ 諫 斯他何,贵能、即,意,四 めて曰く 盗を平 卒罪,以,以,禁、位而夷,諸囚。去在。報、又二君以,侯 於て兵を發して 十げしと 關 其の勢猶未だ止まず 就疾位先欲年 東の 觀。安。兼。 東の 雖、東 五 劫下、帝。罷、之先邊 羣 方に出で 盗並 刑。日,去次。先間 帝、境,下 誅撃し 方の び起り 將疾不帝羣 功作。天 盜 相斯。 相斯為之盜業宮下

將

つて せ 章邯 5 は北 此 1 の方河、 T 楚 地 を渡りて趙王 0) 盗の名將 主歌等を分 鉅 死 鹿

る郡丞の別稱なり、【字解】 戲、邑の名なり、少府、秦官なり、邊境に當到せり、殺されしにあらず、長史、秦官なり、邊境に當殺…章曹陽、陳涉世家によれば周章は澠池に走りて自殺を掌るもの、酈山徒、酈山の 囚徒及び 家産奴なり、「八多難せり、

後公卿希得朝見、 一世常居禁中與高決。 一世常居禁中與高決。 一世常居禁中與高決。 一世常居禁中與高決。 一世常居禁中與高決。 一與 後公卿希得朝見、 一

> 稱する所以は、常に禁中に在りて 纔に 其の兆朕を示是れ羣臣に陛下の 短所を 示すなり、そも天子の朕と 二世常に禁中に居り、高ど諸事を決せり、故に其の後して、臣下には固より聲だも聞かしめずと、是に於て 廷にて事を決し給ふぞ、其の事にして若し誤 3 説を進めざりき、今陛 1 【字解】 富.於春秋、春秋は年なり、餘年の多きを財は公卿と雖朝見することを得ること稀なり、 給へり、年少なれ 制 御 し給ひしと久し、故 は權威從つて輕し、何ぞ公卿と朝 下は 少壯にして初めて位 1 群 臣 敢て 非違を あらば、 為 卽

の多きに譬ふ、故に春秋に富むとは年少のことなり、 不,聞,聲、一本に不の字無し、 茶 野、一本に不の字無し、 将 軍 馮 劫、進 諫 日、關 東 羣 盗 姐 斯・ 起、秦 發、兵 誅 撃、所、殺 亡、甚 衆、然。 避 不,止、盗 多、皆 以、戍・漕・轉 作 事。 2 **。

趙高二世

説きて日

先帝

の天下に

臨

なり、 にありて賓を導き贄を進め事を受くることを掌る官 の意なり、謁 者、 謁は 請ふなり 白すなり、謁者は 宮中

武 兵,田 儋、臣、 爲,自 稽 郡。齊 王,沛公起,

は兵を會稽郡に舉げて、天下漸く多事ならむとす、 王と為り、田儋は齊王と為り、沛公は沛に起り、項梁 冬、陳 是歲武臣は自立して趙王と為り、魏答は魏 涉所造 周 撃及, 邯大章之, 矣日, 驚, 等二點 盗血 必 酈 盗 與 世山、已奉

> 鹿郡魏盗,遣章, 乃咎,殺長軍, 北渡,港城河、整城河、整城河、整城河、 史 盗,破,董, 項 名 歇。將 梁,佐,陽。定章 等,已定 於死。陶郡,世鉅章滅。擊。益 滅。擊。益、

徒及び家産奴夥多なり、請ふ 之を赦し 兵器を授 いふ、少府の章邯曰く、群盗己に至りて其の兵力衆 に達す、二世大いに驚きて羣臣と謀りて奈何せむと を放ち、章邯をして之に將として周章の軍を撃ち 群盗を撃たしめむと、二世乃ち天下に大赦して囚 將として西の方戲に 至りて 秦に迫る、其兵五六 T 彊し、今近縣の兵を發するも力及ばじ、酈山 二年、冬に至り陳渉が遣しゝ周章等は

け 0)

破

益、長史の司馬欣・董翳をして章邯を佐けて盗を撃 りて之を走らしめ、遂に周章を曹陽に殺せり、二

む、陳勝を城父に殺し、項梁を定陶に破り、魏答を

足 を蹶み張る勇士となり、食、飼ふなり、芻藁、まぐさなの土を還すこと、材士、騎士の名手と脚力强くして弩 ること益、酷しくして骨身に切り刻むが如し、 ゑし所の穀を食ふことを得ざるなり、凡て法を用 ち來らしむ。よつて成陽三百里の を京師に轉輸せしむ、而して 材士は皆自ら らざるを度り、令を下して郡縣を調査し、菽菜 復、土、土を穿ちて家を為し、既に成りて其 内の百姓 糧食を 元は其 0 2 種

以,秦,相 皆 將,張 七 反不立殺,徇、楚,月者,可,爲,其,地,勝成 勝自立、成卒陳 勝。侯守山數,王、尉東 合 也、 令 郡 爲。勝 從、承縣楚 等 世者西反少王、反怒,使、鄉以、年、居、故、 西反少 下東名。應、苦、陳、荆,吏、方。為、陳秦、遣、地。後、來、伐、涉。吏、諸為 來、伐、涉。吏語為

發して漁陽を守りしなり、張楚、楚國を張大にせむと

勝

閭

其軍の名を秦を伐つと爲すもの勝げて數ふべからざ相立ちて侯王と爲り、其に合從して西の方秦に嚮ひ、 尉・合・丞を殺し、秦に反して陳渉に呼應し、夫々自ら縣の少年にして秦の酷吏に苦しむ者、皆其郡縣の守・ 【講義】 方。使 す、よつて今頃は郡の守尉が方に逐ひ捕へて 盡く得 是れ取るに足らぬ 群盗にして 反亂者と見るべから を る者ありと奏聞す、二世自ら、太平なりと思へる時な 3 1-反し張楚と稱す、而して勝自ら立て楚王と爲る、勝陳 0 れば、之を聞きて大いに怒り謁者を獄吏に下し つらむ、故に憂ふること勿れと、上大いに 「字解」 成卒、成は守るなり、此の時陳 罪を糾さしむ、後に使者の なり、時に謁者が東方に使して歸り、東方に反亂す 問ふ、對へて曰く、 居り諸將を遣して諸の 逐 捕。至" 七月、漁陽を 今盡得、不足憂、上悅、 上問、對日、羣盗、郡守 、 仰の如く少々は優しけれども、 成る 卒の陳勝等故の荆の地 地を徇へしむ、時に山東郡 來るあり、上東方の事情 悦ぶ 尉 其

昆弟、昆は兄なり、闕廷、朝廷なり、賓贊、賓は擯と通侍なり、三郎、中郎・外郎・議郎、是なり、杜、地名なり、 り、モシと訓む、連逮、逮は 及ぶ なり、少近、少年の近なり、中事、宮中の事なり、鞅々、快々と通ず、即、若なくなり、ノブと訓む、爭、天位を 爭ふ なり、小賤、卑賤【字解】 遵用、遵一本に尊に作る、是なり、申、のべし こと、賓贊は賓を輔け贄を進むるの禮なり、廊廟、廟で、賓客を導くこと、贊は進むなり、贄を執りて進む 堂なり、取」容、意見の容れられんことに腐心するこ

作。弗 酈 堂,咸 就。此、未、陽、月、則、離、就、朝、二、則、離、就、朝二 則酈就,朝 是事上,从爱 夷,學《今 事,釋,作,房日,過,阿者。宮,先 皇。也、房復、爲。帝計、復宮、土,室爲

刻三菽粟 多。咸

咸陽の朝廷が餘り 手狹なるが 為に、阿房宮を營みし【講義】 四月、二世還りて 咸陽に 至る、曰く、先帝は 崩御に會ひぬ、故に其の作ることを罷めて、曩に穿ち 於て狗馬禽獸の飼養すべき者多し、故に其の食物の 咸陽に屯衞することを為して射術を教へしむ、是に 脚力强くして弩を蹶み張る勇士五萬人を蓋く徴し すること始皇の計の如くし、先帝の にするなりと、復阿房宮を作る、二世は外四夷を れば、是れ先帝の事を撃げて過ちたりしことを明か 畢りぬ、今にして 阿 たる土を酈山に復して酈山の工事は大いに果取りて なり、而して 其室堂を作るに 未だ成就せざるに上の |房宮を彼のま、釋て、落成せざ 騎士の名手又は

今高の 疑 振 0 と雖、其 臣多く快々として樂まず、特に外貌を以て臣に從ふ 稱へ擧げ、上位に据ゑて宮中の事を管らしむ、故 臣は 皆天下に 於て 代々名譽ありし 貴顯の人々に 何にせむと、高曰く、臣固より此の事を陛下に奏せ 亦 之を貴くし、貧しきは 1-ることを得べ 3 て、功勞を積 として未だ其の機 吏 しと、乃ち誅戮を大臣及び諸公子に行ひ、罪過ありと 決すべ ば、明 時に因 必ず 手数を省き、直 ふことなかれ、若 ふべく、 尚 彊 如きは素より卑賤なり、而るに 我と天 くし 主は羣臣以 の心中は し、願くは 、下は上の つて郡縣 7 みて世々子孫に し、今の時は文事を師とせず、專ら 位を爭は 順 集り ならず に之を誅すれば、上は勢威を 質は の守尉の罪ある者は之を取り調 會を 得ざり 外の餘民を收め撃げて、賤 平生不可とする所の者を除 し羣臣にして興に謀るに及ばざ 陛下途に 之を富まし、遠く疏き者は之を T む 服せざるなり、今上出 國 か 、若 安 ゝる 有様 か 時勢に從ひて臣 し此の變あらば しなり 相傳ふると久遠なり、 らむと、二世日 1= さて 陛下幸い臣 ては諸 先帝 游 天下 之を 公子 0) きは に大 言 武 ,此 力 を 3 3

は之が 從は を失はず、又上の 5 とせられ 0) と謂 嘗て鮮介を失はざりき、それに 何ぞや 我を不臣 弟三人皆涕 に天に呼ばはりて、ア、天命なる哉吾れ罪なしと、兄 死なむと、使者日 んばあらず、又廟堂の位に 0) 公子は不忠の 1-公子は杜に b れば、東を遣して法を れたり、二世乃ち使者をして將閭に言ひ渡して曰く 5 有無の如きは知らず、惟書を奉けて命の儘に 囚 及 禮に吾未だ嘗て賓を輔け贄を進む ふを以で少年近侍の官と中郎外郎議 むとする ぼ むことに腐心し、人民は其の ふとは、願くは はれ、其 為に振 、大官は T を流 誅戮せらる、公子將閭の 、朝廷に立つことを得る者無し、而 の罪を議せらるゝに因りて のみと、 臣なり、故 恐れ、群臣 唯 < 命を受けて賓客と應對するに、 劒を拔 、臣は 吾が犯せる罪を 秩に 將閭乃ち 執行せしむと、將閭曰く 以に其の 朝廷の謀に與らざれ きで自殺す、是に於て宗室 離れ 吾未だ嘗て敢て 0) 諫むる者は上を誹 天に まじとて 罪 法 死刑に相當すべ 仰ぎ 0) 聞きて而 兄弟三人は内宮 るの 嚴酷 郎 此 意見 三たび 禮 とに 周旋 に從 n 3 るに震 U) 0) まで連 、朝廷 る者 大い 後 なり み後 て六 未 は 0 すい

誹自吾閱者辭,失、從、將日、議、 高 講 世 趙 膀、殺、無。乃 日。也 節,賓 閭 公 其, 大宗罪仰。臣、何,也、贊。日,子、罪, 吏、室昆天不謂、受。也關不獨 途持振弟大得不命,廊廷 禄, 恐, 三 呼, 與, 臣, 應 廟 之 罪 遼 取, 羣人天謀願, 對之禮 當。世 申 容,臣皆者奉聞,吾位吾死使 黔,辣流、三、書,罪,未,吾未吏使, 布く、こゝに T 還 首、者、涕、日、從、而嘗、未嘗、致、令、 る 是に 振。以,拔,天,事。死,敢,嘗,敢,法,將 於恐為劍,乎將使失敢,不焉閭

列石、因明白矣、臣昧死請制日、一大臣德、昧死言、臣請具刻部書。

從ふ、 となけむと、春の頃二世東の方郡縣を行る、李斯之に 為りし所なり、今朕號を嗣ぎて二世皇帝と稱す、而る 明かにせり、其詔に曰く、金石の刻文は盡く始皇帝の ば、即ち弱きことを見して、天下の民を臣として養 伏せしめたりき、今朕晏然として 天下を 巡行せざれ 縣を巡行して 彊きことを示し、武威を以て 海内を屈 なるも、今や世移れり、故に始皇帝と稱せざれば、久 大臣從者の名を 著して、先帝が 成功の盛んなる徳を り、盡く始皇が立てし刻石に二世の詔を刻み、其旁に めて位に 講義 金石の刻解に始皇帝の時には單に皇帝と稱して可 の後の人は 碣石に到り、之より海に傍ひて南の方會稽に至 即き、人民未だ集り附かざるなり、先帝は郡 二世趙高と謀りて曰く、朕は年少くして初 後嗣の皇帝が之を爲りしものと思

みたるなり、めに始皇の立てし刻石に二世の詔を刻く、可なりと、故に始皇の立てし刻石に二世の詔を刻此の由を明白にせむ、臣奪昧死して請ふと、制して曰て申す、臣等願くは只今の詔書を具に刻石に刻みて、らずと、丞相臣斯同じく 臣去病御史 大夫臣德昧死し

帝と稱するをいふ、として養ふこと、襲、號、帝號を嗣ぐなり、即ち二世皇つくること、晏然、安然に同じ、見、示すなり、臣畜、臣【字解】 威服、武威を以て屈伏せしむるなり、おどし【字解】 威服、武威を以て屈伏せしむるなり、おどし

此くては始皇帝の成功の 盛徳を稱ふる 所以にあ

お、又羣臣をして議して始皇の廟を算ばしむ、羣臣皆 也、薦を悉く備へて、此より以上なるものなからしめ に至ると雖、代々の昭穆を 践に毀つが 如き例に入ら にをると雖、代々の昭穆を 践に毀つが 如き例に入ら にをると雖、代々の昭穆を 践に毀つが 如き例に入ら し、薦を悉く備へて、此より以上なるものなからしめ で、必先王の廟は或は西雍に在り、或は咸陽に在りて な、又先王の廟は或は西雍に在り、或は咸陽に在りて で、文先王の廟のみを祠る べし、而して襄公より 巳下代 で、として之を尊び、以て帝者の祖廟と為さむと、是歳皇 として之を尊び、以て帝者の祖廟と為さむと、是歳皇 として之を尊び、以て帝者の祖廟と為さむと、是歳皇 として之を尊び、以て帝者の祖廟と為さむと、是歳皇 として之を尊び、以て帝者の祖廟と為さむと、是歳皇 として之を尊び、以て帝者の祖廟と為さむと、是歳皇

雅は咸陽の西に在り、故にいふ、世り、極廟、至極尊き廟なり、貢職、職も貢なり、西雅、

遠金刻、先刻海世行。以位 德,也石、盡、帝、石、南、東、即示、黔世丞如、刻始成石至,行、見。彊、首與 皇功旁會郡弱,威 趙 相 不。帝、盛 著。稽縣,毋水服集 為、稱、所德,大而李以海附、謀 斯·臣 臣內先 爲,焉 臣盡,斯 者,皇也皇從刻,從,畜,不,帝,今帝者,始到,天 去疾御史 巡 御稱其襲。日、名、皇、碣下、然、行。少、史成於、號、金以,所、石、春、不、郡初、大功、久而石、章、立、竝、二巡縣,即,

は發掘 の患ありて大事去りなむ、故 に之を

せら れぬ、而して之を他に泄さむことを恐れ、家中の に防がざるべからず、已にして先帝の 棺

は

埋藏

匠 神道を閉ち、又外部の神道門の の埋藏に與りし者を閉ぢ込めて復出づる者無から 門扇を下して盡く

計すること、宮觀、宮殿門觀なり、百官、百官の位次なり、三泉、三重の泉なり、所謂九泉に象れるなり、下とり、三泉、三重の泉なり、所謂九泉に象れるなり、下とり、三泉、三重の泉なり、所謂九泉に象れるなり、下と 、滅、御府なり、 御府の珍什の意なり、人魚、魚の名

棺椁を なり、其の形人に似て皮は鮫より堅く、項上に穴あり 神道なり、 棹を埋藏すること、大事畢、大事去るの意なり、羨、已下、下すとは 棺椁を下し 葬を終へしをいふ、藏、 之より氣を呼吸す、其の肉は食ふべからずといふ、

一世 皇 中 令、任,事、二,事、二, 世十 下,一、韶,趙 增。高

> 下當廟、職,始五 頓 禮,始 言, 日,臣,古議, ---通 者、 萬世、天 尊 始 世 不 廟, 廟、諸 祀 廟.禮,已儀王,貢

進 祠。 軼獨,或、增。皇,大首, 以,毁奉。在、犧爲、夫、 復 尊。所、酌,西 牲,極 廟、 稱、始置、祠、维禮 皇,凡,始或、咸,四 皇、在、備、海 為南 廟,咸 世之 自,陽以,內 襄天加,皆 子,先獻。 祖 以,公

始皇のたまやのいけにへ及び山川百祀の禮 中 命と為 り、任ぜられて國事を用ふ、二 元年、二世の年二十一なり、趙 世韶 を下 を増さし 高郎

無。中知、葬出、之、理、海、輒、之、椁、七、復、羡、之、既、焉二以、機、射、令、宫十出、下、藏、已、不、世人相、之、匠、觀餘 者、 外,重。下。宜,日,魚,灌 以,作,百 胡亥位を 嗣ぎて に葬る、此の酈山 樹。羨。卽。或。皆先膏,輸。水 官 草門,泄流木,盡,大 令。帝,爲。上。 從。後燭,具為,矢 二世 には 所。惟 皇帝と爲る、 穿,徙, 葬るべ 近观城, く其 九月 者滿致

皆棺 終了 大 1-後 消滅 人 ぎて ば直に之を 射殺さし むることとなし、又水銀を流發する弩矢を 作らしめ、穿ちて 電穸に近づく者あ 物を御府より徒して之に滿し、工匠をして機械に 冢 及 0) 3 板を下にし、其の上に樟を安置すべく設計し、又其 T 宮にして子無き者を出すは宜し T 從はしめむと、是に於て殉死する者甚だ衆かりき、 魚 中に宮殿門觀及び 水の出づる所まで掘り下げて所謂九泉に象り、 あ び、天下の 輸らしめ、上には 天文を具へ、下には 百川江河 を埋 先帝 せり せざることを度れるなり、二世皇帝曰く、先帝の り、之を使役して三重の の膏を以て 坑内を照す 燈燭と 山に深 一般に 滅する 0) 、或人の説に 葬送は旣に已に棺椁を三泉の下に下して 大海を作り、機械を以て水銀を是等に灌 徒刑の送られ き坑を掘 所を 知らしめざるなり、若し之を他 百官の位次を作り、珍奇なる器 知れり、此埋藏の b 言ふ、初め 72 り、其 て此に詣れ 泉を穿つ、其底 始皇の 後天下を弁 工匠の機を作るや、 からざれば、皆死 為す、是れ久しく 初めて 場處は尤 る者七十 地理を布き、 は深 位 1-あら 3

敎 なり、さて趙高は嘗て胡亥に書及び 子の胡亥趙高及び幸愛せられし所の宦者五六人の こと生ける時の 御する所の地方の官民食を上り、又百官事を奏する 故の愛幸せられたる 宦者をして之に参乗せしむ、通 為に、諸公子及び天下に變事あらむことを恐れ、乃ち 丘の平臺にて崩じぬ、丞相李斯上崩じて外に在 ざりしなり、而るに 七月の丙寅の日に 始皇は途に沙 を行ふ所に在りて、未だ扶蘇に遣す使者の手に授け 親書は已に嚴封して中車府の今の趙高が天子の符璽 知りたるにや親書を爲りて 公子の 扶蘇に 賜ひ て日 ど上の病益、甚しければ、上も亦死の近づきけむとを 傍ひ西に向ひて 高を寵せり、高因つて 公子胡亥丞相李斯と 陰 ことを嫌ふ、羣臣も亦敢て死の事を言ふ者莫し、され 其 、發喪と同時に咸陽に歸り會して吾を葬れと、此 へたりし故の を秘密にして喪を發せず、棺を鰮凉車中に載せ、 の奏事を裁可す、而して上の死を知れる者は獨 平 師傅たりしなり、故に胡亥は 如くすれば、同乗の 原津に至りて病む、始皇死を言ふ 宦者轀涼車中よ 獄律令法 に謀 の事を 私 るが 帝の

氣酷 を聞さしむ、行きて直道に從つて咸陽に歸り、始めて 扈從の車毎に一石の腐魚を載せしめて其の屍の臭み る轀涼車は行きて 遂に井陘より九原に至る、此時暑 の詳細は李斯の傳中に在り、さて始皇の屍を載 て、責むるに罪狀を以てし、且つ其に死を賜ふ、此 丘にて受けたりと為し、公子胡亥を立て、太子と為 去り、而して更に許りて し、更に又別書を譌作して公子扶蘇及び蒙恬に賜 喪を發す、 しくして 轀涼車為に臭し、よつて 從官に認 丞相李斯が始皇の 遺詔 せた を沙

海人なり、極書、天子の御璽を捺したる書なり、 を開けば涼し、故に此の名なり、數、責むなり、鮑魚、 翰なり、轀涼車、車に窓隔ありて之を閉づれば溫く之 【字解】蛟龍、蛟は龍の一種なり、みづち、入海者、 腐魚なり、

月、葬始皇酈山始皇初即位突太子胡亥襲位為二世皇帝九 酈山及并天下天下 徒送詣

て始皇の封じたる親書の公子扶蘇に賜へる者を破

子斯私教官其事。幸秘、在崩 更皇,扶陰幸,胡者奏如。宦之,外。於 蘇謀。之,亥五 事,故,者 不恐沙 書,韶,者,破高書六獨 發。諸 宦 麥 乘。喪。公 賜。沙而。去。乃及。人,子,者 丘更始與獄知胡輒所棺,子臺 立。詐。皇。公律上,亥從,至。載、及。丞 子,爲,所,子令死,趙 轀上, 轀天相 蘇 丞封。胡法、趙高涼 胡 食,凉 蒙亥,相 書。亥事。高及車百 車 有為 恬為斯賜,丞胡故所,中官 中。變 數太受命人相亥嘗幸可奏。故乃崩。

> 發喪、 無臭,所認,從官,令,重載,一石鮑 事臭,乃認,從官,令,車載,一石鮑 魚,以亂,其臭,行從,直道,至,咸陽 魚,以亂,其臭,行從,直道,至,咸陽

1-て之を射殺さむとし、現邪の 持ち來らしめ、自ら連弩を以て大魚の と、是に於て海に入る者をして巨魚を捕ふ 惡神を除かむと欲せば海に出でて大魚蛟 あり、當に之を除き去れば善神來るべし、而し 記すること謹み の出づるを以て 目を以て見るべからず、之を得んと欲せば大 見る、之を占夢博士に問ふ、博士日 至るも、大魚を見ず、尚進みて之界に至る よつて射で一魚を殺したり、此れより 始皇夢に海神と戰ひ、其の 其の兆候と為すべし、今陛 備はれり、 而るに此の 海岸より 北の 出 るを るの を得 下 出 祈禱 T 此

し示すこと、江栗、縣の名なり、譴、責めなり、鮫魚、さ

事,已子死而射,至,連令此,蛟 夢始 所,封,扶事,病、殺、榮弩,入、惡 龍,博 未在,蘇上,始 一成候海神為土夢 魚,山大者。當候、日,與 日,病 皇 益、惡、遂。弗魚,齎。除。今水 車與 者。府、喪甚。言。並、見、出。捕、去、上七令。會、乃死,海、至、射、巨而、禱 神、神 令, 會, 乃死, 海至, 射, 巨而, 禱趙 咸爲, 羣西, 之之, 魚, 善祠 西之之,魚、善祠可如,至,景、自具、神備;見、人 月 高。陽。璽臣 書,莫平見,琅而,可謹以,狀, 寅、始 葬、賜、敢、原 巨 邪 自,致、而、大 璽, 書公言, 津魚, 北以, 乃有, 魚占

72 質を 字内を幷合するや、萬の政事を兼ね聽きしかば、遠き 六合の中、其の恩澤を被ると數限り無し、さて皇帝 多力を負みて驕 其情を隱すと無きなり、從來夫婦の たる者を殺し盡したれば、世を亂 り、是に於て正義の武威を以て六王を誅し、暴く悖 は我國に來りて 邊境を侵して、遂に天下に じて合從を事とし、其の行ふ も近きも畢く清く 治まりぬ、萬の物を 運らし理め事 ら秦に反き、貪り戻りおごりたけくして、數多の民衆 入して、死者に倍きて貞正ならざる者往 の女に淫しながら其の過を飾りて義理堅 に意思を疏通し、善きも惡きも面前に陳べ たり、此の如く 聽し、婦は子ある ば男女共に潔白 、内には許り謀れることを無きが如く飾り、外 あて自ら强となし、あらくし 考へ驗べて、各、其の名を記載し、貴きも賤きも 道を り、數、軍隊を動し、又陰に密使を 帝の聖徳は廣大にして細密なれ 防ぎ隔てゝ、淫泆の にして に夫死 誠實となれ 所常にひがみた にた へたげて恋に行 す賊徒は りとて直 道廢れ り、即 風を 々ありき、 禍を起 て夫は 遂に滅亡 き者なり に他家に 列べて、 禁止 る事 ち夫が 他 他室 12 0) n

世敬みて大聖の法を奉くれば、世を 得らるれども、海上常に 責められむとを恐れ、乃ち許りて曰く、蓬來山 稽より還りて吳を過ぎ、江 續くべけむ、是に於て從臣等大聖の功烈を唱へ、請 完全にして 極無かるべく、舟車傾か 濯ぎたれば、天下其風を承けて、大いなる法を蒙り被 母とするとを得ずとしたれば女は皆廉潔清淨に化 の夫を棄てゝ逃げて他家に嫁入したる時は子は之を て此石に 島に至ることを得ざりしなり、願くは ふ、徐市等は海上に出でて に傍ひて北の めて命に順はずと云ふと莫く、人民正しく清くして、 間遂に之を得ず、其の費巨萬を用ひたれば、始皇 皆則を同じくするを樂み、嘉びて太平に安んず、後 り、上下皆法度軌範に選ひ、和ぎ安んじ、厚く勉め たれ るなり、此の如く大聖の治方は 惡しき風俗を洗ひ の女に淫し ば男は之を畏れ 刻みて、大い 方琅邪に至る、此にて 12. るときは妻は之を殺すも罪無 なる銘を後世に照し示すと て夫たるべ 大鮫 乗縣より大江を渡り 神薬を求むれども五六歳 魚に苦めらる ずして 太平打 治むる常の法 方士徐市等に れば U

史記第一卷 秦始皇本紀第六

射,大譴,入,並。石。極,則,勉。風,母:罪 與一鮫乃海海光興嘉、莫、蒙、咸男男 俱。魚。詐。求。上。垂、舟 保、不、被、化、秉、女 見所,日,神北、休不太順、休廉義 藥,至。銘,傾。平,令、經,清、程,數 琅 還,從 後 黔 皆 大 妻 歲,邪.過、臣敬。首 29 治 弩,得 可 不方 吳,誦、奉。脩度濯淡淡、寄 至,得得 從,烈,法,潔,軌俗,嫁,程, 天子、殺 請,常多,市乘刻。治樂、安 善為恐等渡此無同義承得無

ておごそかなり、見 下を巡りて周ん を追 下り 律 治迹を根本より原ね、 大 て碑文を刻みて秦徳を稱へ述ぶ、其文に曰く、皇帝 りて大禹を祭る、會稽山より南海を、望む處に る、浙江に臨まむとして水波荒れたれば る、少子の胡亥帝に愛せらるゝを以て慕ひて * いなる功烈は宇内を平げて統一せり、而して 百二十里にして狭中より渡り、遂に會稽 り、さて其 ひ敍ぶ、さて大聖 至り、處舜の靈を九疑山に祀り、大江に語ふ、上之を許して同伴す、翌十一月に て籍柯を觀、江渚を渡り、 定し、 相 明 李斯之に **傳ふべく長久なり、惟れ** かっ 地方の習俗を宣べ省るに、人民皆 原ね、其の徳の 未だ 責任 1: 舊 典を布陳 始皇帝の 月癸丑 統 を別ち、以て せざる前 右 し、初めっ 國に 覽る、遂に此の 丹陽を過ぎ、 丞 高く明かなり 皇 日 相 帝の功を唱 臨むや、治 0) 不 て法式 六國の 馮去 卅七年親 西に溯 .0) 法 山 錢 浮 行 をを立 め 石 上 唐 CK 3 從 T 稽 を 6 其 1: 3 1-流 は - [0) 0) 天 TL 登 至

史記第一卷 秦始皇本紀第六

思し、良、久しくして曰く、山鬼は固より一歳の事をとい、良、久しくして曰く、山鬼は固より、墓か彼方の山よりを見き人下り來りて壁を持ちて使者の行く前を遮りて曰く、吾が為に此の壁を滈池君に遺れよと、而しりて曰く、吾が為に此の壁を滈池君に遺れよと、而しきて去りぬ、使者壁を捧げ、途中にありし次第を具に申上ぐ、始皇不機嫌の 態にて 一言をも發せずして沈申上ぐ、始皇不機嫌の 態にて 一言をも發せずして沈中上ぐ、始皇不機嫌の 態にて 一言をも發せずして沈中上ぐ、始皇不機嫌の 態にて 一言をも發せずして沈中上ぐ、始皇不機嫌の 態にて 一言をも發せずして沈明ない。良、久しくして曰く、山鬼は固より一歳の事を

知るに過ぎず、今年は已に秋なれば残り少し、今年驗知るに過ぎず、今年は已に秋なれば、退きて獨し、さすれば事吾が身に係れば樂觀すべからずと、御り、さすれば事吾が身に係れば樂觀すべからずと、御り、さすれば事吾が身に係れば樂觀すべからずと、御いて下はしめしに、卦に巡游すれば 吉なりとい ふをに、沈めた りし壁なり けり、是に於て始皇益。之を畏に、沈めた りし壁なり けり、是に於て始皇益。之を畏に、沈めた りし壁なり けり、是に於て始皇益。之を畏れて下はしめしに、卦に巡游すれば 吉なりとい ふをれて下はしめしに、卦に巡游すれば 吉なりとい ふをれて下はしめしに、卦に巡游すれば 吉なりとい ふを、得たり、是歳北河の楡中に三萬家を移住せ しめ、各、都長に鶴一級を賜ふ、

り、御府、寶物を主る官なり、游徙、巡游のこと、鶴一とは祖龍を指す、即ち始皇を指す、山鬼、華山の神な君、滈池は池の名にして長安の西南に在り、滈池の君君、滈池は池の名にして長安の西南に在り、滈池の君君、滈池は池の名にして長安の西南に在り、滈池の君君、高池は池の名にして長安の西南に在り、高池の君君、高池は池の名にして長安の西南に在り、高池の君君、高池は池の名にして長安の西南に在り、高池の君は君の象なり、即ち始皇を指す、山鬼、華山の神な神なり、有人、「神神」を表している。

級、秦鶴二十級中の最下等の公士なり、常の士卒と異

三十六年、炎惑星心宿に留まりて移らず、墜

と、始皇之を聽き入れざるのみならず、怒りて扶蘇をと、始皇之を聽き入れざるのみならず、怒りて扶蘇をし、論、罪を轉嫁せむとて、甲より乙、乙より丙と云相告引、罪を轉嫁せむとて、甲より乙、乙より丙と云は逃ること、院、宗世しめたり、廉は察なり、話言、話は妖に同じ、奇怪の言なり、廉也ある。こと、院、穴埋なり、謫、罪人なり、邊、邊境なり、誦法、となへのつとるなり、繩、糾すなり、

【字解】 熒惑、星の名なり、守、留まりて移らざることの東郡に下るありて地に至りて人毎に 糾問せしむ、むと、始皇之を聞き、御史をして人毎に 糾問せしむ、り、此の事ありてより始皇快々として樂まず、是に於り、此の事ありてより始皇快々として樂まず、是に於り、此の事ありてより始皇快々として樂まず、是に於り、此の事ありてはらしめて、之を樂人に 傳へて謌ひたる名所の詩を作らしめて、之を樂人に 傳へて謌ひたる名所の詩を作らしめて、之を樂人に 傳へて謌ひれる名所の詩を作らしめて、之を樂人に 傳へて謌ひ上つ奏せしめて、其の憂鬱を慰めむとす、

り、行所、游…天下、天下を游歷したる名所の詩の意なと、心、二十八宿の一なり、逐問、八毎に 糾問すること、婚銷、やきとらかすなり、仙眞八、仙八と眞八となり、行所、游…天下、天下を游歷したる名所の詩の意な

者問其故因忽不見置其壁去、 道、有人持、壁、遮使者、日、為、吾遺 秋、使者從、關東、夜過、華陰平舒

上察之、始皇怒使,扶蘇北監,皆重,法繩之、臣恐天下不安、 於上郡、

豪恬

奇藥を求めんとせし者も、唯巨萬の錢を費した りて何の報告も為さずと、又徐市等の海上に出でて上らず、且つ今聞く所によれば、方士の韓衆は已に去 及び諸子百家の書を收めて、盡く之を燒き去てゝ、悉 びて恩賞を賜ふこと甚だ厚かりき、而るに今我を誹 みにて、是も亦不死の薬を求め來らず、故に世上に 煉して不死の薬を製せむと稱すれど、未だ嘗て之を ると日々聞ゆるな なす者なりとの評判あるにや、此悪評を吾に相告ぐ ては彼等は皆姦惡の徒にして徒に利を貪るとを事と 太平を興さむと欲したりき、而るに方士は薬品を烹 く文學方術の士を 召すこと 甚だ衆く、吾れ之を以て 怒りて曰く、吾れ前に 天下の書の用に 中らざる經書 【講義】 始皇は侯生盧生の 亡げたるを聞き、大いに り、別けて 盧生等は 吾之を特に算

段々罪を他に轉嫁して自ら其の罪を言ひ逃れむと て甲は乙が云ひしといひ、乙は丙が云ひしと白して、嚴しく諸生を悉く取調べしむ、諸生は之を傳へ聞き だ安んぜずして或は秦を覆す者出で來らむとを氣遣 糾さむとなし給ふ、此の如くんば臣は天下の民心未 り、而るに今上は何事によらず法律を重んじて之を 且つ彼の諸生等は皆孔子の聖教を唱へ法れる者な 尚未だ集り來らざれば、今遽に安心すべき時に非ず、 諫めて曰く、天下初めて定まれりと雖、遠方の人民は を出して邊境に徙す、是に於て始皇の長子扶蘇父を 知らしめて、後の罪を犯す者を懲す、始皇又益、罪人 を生ながら咸陽に穴埋になし、天下をして逼く之を す、よつて法禁を犯せる者四百六十餘人を捕へ、皆之 惑し亂す者あるを知れり、是に於て更に御史をして らむと、由つて人を市中に派して密に之を探り問 生の威陽に在る者にして吾を誹らざる者は殆どなか ふなり、願くは上之を察して 法の峻嚴を 弛べ給へよ に仁恵を施したる者すら猶其れ此の如くなれば、諸 りて吾が不德を重ねて天下に吹聽せり、吾れかほど めしに、果して或る者は奇怪の言を爲して人民を

の忠良の士なり、然るに此れ 亦忌み嫌は るゝとを畏めて百二十斤を以て 日夜の程度と 為し、其の程度を終了せざれば夜半を過ぐるも休息することを得度を終了せざれば夜半を過ぐるも休息することを得度を終了せざれば夜半を過ぐるも休息することを得さる に至る、其の權勢を貪ること此の如きに至りては、未だ以て仙人の不死の薬を求め、又眞人たらむとは、未だ以て仙人の不死の薬を求め、又眞人たらむとは、未だ以て仙人の不死の薬を求め、又眞人たらむとは、未だ以て仙人の不死の薬を求め、又眞人たらむとは、未だ以て仙人の不死の薬を求め、又眞人たらむとは、未だ以て仙人の不死の薬を求め、又眞人たらむと

始皇聞亡,乃大怒曰、吾前收天

長知,六傳於,使重。吾。得不士學 相是人,吾,尊、藥、報、欲、方 之,十 以,餘告使廉不賜徒徐練、循、不 懲人引。御問。德。之姦市。以 後,皆乃史或也甚利等。求甚用。益、院自,悉、爲、諸厚、相費、奇衆。者, 發,之,除,案 跃生,今告,以,藥,欲。盡,謫,咸犯。問。言,在,乃日。巨、今以,去, 徒。陽、禁,諸以咸誹 初 聞。萬,聞,與之, 生, 亂, 陽. 謗。廬計、韓 邊,使,者 始天四 諸 黔者我,生終。衆、平,召、 方。皇、下。百生首,吾、以,等不去。方

えざるなり、是に於て侯生と 盧生とは 相興に謀りて に於てして、未だ以て 仙術を専にせ むとするの の政事を聽き、羣臣が決事を受くることは皆咸陽宮 始皇は三 過, 日 一得無 驕、 禄、莫 方、伏 驗,謾 風見

曰く、始皇の人と為りは天性强情なる上にねぢけも

莫く、 前 能 5 勢 10 り、之に因つて上は己れの過を聞かざれば、日々驕 さず、徒に素餐して敢て 忠を盡すことを爲さいるな 過を諫むる者無く、さればとて秩禄に離ることを為 諸 ぶりて放縦となり、下は上の威を讎れて屈伏し、謾 為さむと樂めり、是に於て天下皆罪を畏れて上 0 知する者は 三百人の多きに 至りて、此等は皆國家 死罪 はざるなり、 殿にす、よつて博士七十人ありと雖、たい其員数に 侯 りて萬の事を して民に醫 して始皇は刑法によりて死罪に處し以て其の權威 たる事を受けて、徒に上位に倚り具はるのみなり 獄吏に任すれば、獄吏は皇帝の 親幸を得て 益、法 一のみにあらず丞相及び諸々の大臣も皆已に決定 大いなるは古より己に及ぶ者無しと思へり、專 るのみにして其の説は用ひられざるなり、 、欲する所は從はざること莫ければ、此の如き權 より起りて一天下を料合し、思ふ所は得ざること 1= 表面の體裁を取り繕ふに至る、又秦法嚴 處 せ 術の心得ありとも之を無業となすこと らるればなり、又星氣を候ひて吉凶 如何となれば、醫薬に效験無けれ 親ら 用ひむとするの 風 あり、 其 ば直 獨 0 罪死、始皇帝幸、梁山宫、從山上 見、丞相、丞相、後損、車騎、始皇怒 是時、詔捕、諸時在、旁者、皆殺之、 自是後、莫知、行之所在、 自是後、莫知、行之所在、 自是後、莫知、行之所在、

に車騎を減少せり、始皇曰く、吾れ其の 眞人たらむと、下事騎を減少せり、始皇帝の 行きて幸する所は 其の處を知り徙らしめず、皇帝の 行きて幸する所は 其の處を知り徙らしめず、皇帝の 行きて幸する所は 其の處を知り徙らしめず、皇帝の 行きて幸する所は 其の處を知り亡めず、若し之を言ふ者あらば死罪に處せむと、始皇帝或る時梁山宮に 行幸し、山上より 丞相の供廻り皇帝或る時梁山宮に 行幸し、山上より 丞相の供廻りと、宮中の人の或る者之を丞相に告げければ、丞相後る、宮中の人の或る者之を丞相に告げければ、丞相後る、宮中の人の或る者之を丞相に告げければ、丞相後る、宮中の人の或る者之を丞相に告げければ、丞相後る、宮中の人の或る者之を丞相に告げければ、丞相後る、宮中の人の或る者之を丞相に告げければ、丞相後

中の者の吾が語を泄らしたる為めなりと、之を取り中の者の吾が語を泄らしたる為めなりと、之を取りで諸人の彼の時帝の旁に在りし者を悉く捕へて之を殺したり、是より後は行幸の所を知ること莫し、深解」 宮觀、宮殿樓觀なり、甬道、天子 の御 成道の兩側に牆を築きて、外人をして 天子を 見せしめざるやうにしたる 道なり、帷帳、幕なり、とばり、案署、案やうにしたる 道なり、帷帳、幕なり、とばり、案署、案やうにしたる 道なり、権限、幕なり、とばり、案署、案の、死刑 なり、中人、宮中の人なり、上、次を取り中の者の吾が語を泄らしたる為めなりと、之を取り中の者の吾が語を泄らしたる為めなりと、之を取り中の者の吾が語を泄らしたる為めなりと、之を取り、案署、、取り調べなり、

聽,事, 十任。意天侯 人特備員 得,性欲剛 生 廬 羣 從, 戾, 生以自,相 臣 弗用、丞相諸 得 親 幸,博 士 雖

所,長,濡、知。 藥、殆可得也、 居宫、母、令、人知然後不死 入火不蒸、陵* 、陵、雲氣、與、天地、公神、眞人者、入水、水 之 久

臣之を知る時は、人主は常に君臣の關係を思ひて俗 眞人の域に 至るべし、且つ 叉人主の居る 分にならざれば 好結果を得まじ、故に 方術の中に 是れ或は物の之を害する者有るに似たり、熟、考ふる 草奇薬を求むれど未だ嘗て仙者に出遇はざるなり、 に臣等のみ之を求む るとも、陛下に於ても 仙人の氣 も熟けず、雲氣を陵ぎて天地と倶に長久なるもの也 氣と同化せるを以て水に しといへり、悪しき 氣分無ければ心中恬然 主は時々微行を為して鬱結せる惡しき氣分を退 絆さい 盧生始皇に説きて 曰く、臣等命を承けて神 れて其の心に 害あらむ、眞人といふは 入るも濡はず、火に入る 所に 3 して人 天地

鬼、辟は退くなり、悪鬼は悪しき氣分なり、眞人、道家なり、微行、人に知れぬやう隱れて行くこと、辟"悪ふ、奇樂、不死の樂なり、類、似るなり、方中、方は方術』を解】 芝、神草なり、之を食へば神仙となるとい然る後に不死の樂は殆ど得べからむと、 稱、害...於神、神は心なり、恬淡、無欲なること、の語、道の極致に達して 天地の 氣と同化せるものゝ る所の宮は、人をして知らしむること勿からしめて、 仙術を學ぶこと 能はざるべし、故に願くは 陛下の居 名利に汲々として止まる所を知らず、此くては終に ること能はず、臣等をして仙人を求めしむる旁、世の 而るに今陛下は天下を 治め て、未だ無欲の域に達

人不辨朕 署。相連、惟 里 內宮 連、帷 世代行所幸有言其思明,二百七十、復道五 乃令 咸 慕真人自謂 陽之旁二 甬 道,百

造りて相連結せしめたれば、其の狀馳騁するが如し、は六尺なり、五百歩は三千尺なり、周馳、廊下を周く

り、おもてごてんのこと、阿房、地名なり、五百歩、歩

朝宮、羣臣の

参朝する 宮なり、即ち正 寝な

家を麗邑に五萬家 を雲陽に徙して、皆賦稅を免じて 皆此に至らしめしなり、さて宮殿の多くなりしと 關 役夫と爲す、而して麗山を築くには北山の石を發掘 中にては三百を以で數ふべく、關外にては四百餘を 阿房宮と謂へり、さて宮刑・徒刑七十餘萬人を分ちて b 繇役に從事せしめざること十歳ならしむ、 る大規 て營室星に至れるに象りしなり、さて阿房宮はかり 連結せしめて、天の紫宮 下を造りて阿房より渭水を渡りて之を咸陽の宮殿に は此の阿房宮を作る役夫と為し、一は麗山を作る なり、唯宮を阿房に作れるを以て、天下の人皆之を >秦の東門と為す、因つて又 役夫の勞を思ひ三萬 て計ふべし、是に於て石を東海上の胸界の中に立 、此阿房宮を造るには蜀荆の地の木材を輸送して、 、落成せば更に善き名を擇びて之に名けむと思ひ 模の設計なりしかど未だ頓に落成せざりしな 後の十七星が天の川を渡り

> 五萬家、是れ皆隱宮徒 刑の役夫と 爲りて功ありし者輸送すること、朐、東海 中に在る 島の名なり、三萬家 宮刑に同じ、男勢を去られたる罪人、北山石棹、義門 度るなり、漢は天の川なり、營室、星の名なり、隱宮、 を渡り越えて營室星に至るを閣道といふ、絶漢、絶は 上下二重の廊下なり、屬、連絡するなり、天極閣道、天 闕、門觀なり、中央闕きて道を成す、故にいふ、復道、 故にいふ、閣道、樓と樓との間の通じ難き處に木を架 の家族なり、復、賦税を発すること、不い事、繇役に從 の讀書記に「棹字疑行」とあり、今此の説に從ふ、寫、 極は天の 事せしめざること、 梁を作りて渡らしむ 紫宮後の 十七星なり、此の十七星が天の川 る道 なり、即ち 廊下のこと、

鬼辟真人至人主所居而人臣中人主時為微行以辟恶鬼恶鬼恶鬼,独有,以辟恶鬼恶鬼恶鬼,

石,分,宫、之。阿以,爲。直。建。五作。乃 作,隱作。房象。復抵。五十前 營 天道,南丈、丈殿,作。鎬 宫,宫 徒阿未極自山旗,上。阿 宫,刑,房。成,閣阿表,周可,房。宫, 荆或者故成道房南馳以東 天欲絕渡山為。坐。西 地,作。七 下 更漢, 渭, 之 閣 萬 謂,擇,抵。屬。顚。道,人, 林 至,發。萬之,令營之,以,自,下、步苑 關北人阿名室咸為殿可南 中。山、乃。房名之也陽。闕、下以。北先。也、

造る

前に先づ之が前殿

する宮殿を渭南

の上

林

苑

中に營み作る、而

房に作る、其設計の

なる、東西五百歩南北五

く、殿下には五丈の

旗を 一十丈 を阿

建つべく、殿外には

り廊下傳ひに

南山に 宮

至

此の 直に 他の

宮殿を表し、又上下二重の廊

棚木を架して

殿に通ずる廊下を造り、

せり、宮廷を壯にせざるべけむやと、乃ち群臣の

は連絡して帝王の都となれりと、朕已に天下をに都し、武王は鎬に都したり、是を以て豐を鎬と

統

まにして其の規模狹小なり、吾聞けり、周の文王

人口夥多なるに宮廷は先王の造營せられた

九原より雲陽に至るまでの道路開通せ

るを

増築せむと欲し

には

以て始皇

は宮殿を

講

皆 因,石,計 復、徙、東 不言 海 事、萬上百、十家,朐。關 歲麗界外。 邑。中。四 以,百 五 萬為餘 家,秦,於, 雲東是 陽。門、立,

通ず、死罪を犯して上言すること、道、古、道は言ふな辟は避くなり、禁令を犯さぬこと、昧死、昧は冒と 嚳・帝堯・虞舜是也、三代、夏殷周是なり、異時、往時な卿なり、輔拂、拂は殉に同じ、五帝、黄帝・帝顓頊・帝 じ、田常、齊の田成子なり、簡公を弑す、六卿、晉の六 枝輔、枝葉となりて本幹を佐くること、即ち輔佐に同 を以て事を掌らしむ、僕は主るなり、他時、昔時なり、右の大臣なり、古は武を重んず、故に射を善くする者 り、古道を唱へ言ふこと、非、誹るなり、夸、ほこるな 通ずる者之に任ず、秩六百石なり、僕射、秦官なり、左 字解 又若し士にして法令を學ばむと欲せば今の官吏を師 として實際の學を習ふべしといふ、始皇此の言を是 となし制して斯の言は可なれば之を發布すべしと、 一の刑 書なり、是等は皆四民の必須の書なるを以てなり 一發布して三十日間に書物を焼かざる者あらば、入 中に去らざる所のものは醫薬の書とト筮及び種樹 ら之を檢學せざる者あらば、同罪にせむ、又此禁令 游學、故郷を去りて遠く學問する士なり、辟、禁、 1-置酒、酒宴なり、博士、秦官なり、學識古今に 處し且つ城旦の刑を加へむ、然れども書籍

に棄つること、族、一族を殺す刑なり、黥、入墨の刑な まぜ合すこと、奔市、刑の名なり、殺して其の屍を 尉、郡守郡尉の役所なり、雜、經書・儒家類・諸子類を の門下生なり、造、誇、造は成す、謗はそしりなり、職、 り、城旦、徒刑なり、毎旦出でて築城の役に從ふ、よつ り、異、取、取は李斯傳に趣に作る、是なり、羣下、多く 三十五年、除道、道、九原抵雲陽、 て此の名あり、四歳の刑なり、種樹之書、農書なり、 つかさどるなり、百家語、儒家及び諸子の書なり、守

聖山煙谷直通之、

めたり、 に至る、其の間山を掘り谷に堙めて直に之を通せし 三十五年、道路を開き治めて九原より雲陽

【字解】除道、除は開き治むるなり、道は道路なり、 堙、うづむなり、 道、從なり、ヨリと訓む、抵、至るなり、塹、掘るなり、

之宮廷小吾聞周文王都豐、大

所に安んずべきなり、故に百姓は家に在るときは農 所を善とし 虚言を飾りて其の實を聞し、人々皆其 して、其 是を以て諸侯並び れたる時、 斯尚更めて昧死して 言す、古昔天下 り、人民の心を惑はし働すを以て能事となす、 手本とせず遠き古の道を學び、以て當世の とを欲せり、而 群雄割據して諸侯相攻伐する際には、皆 天下を幷せ有ちて 業を 厚く 愚儒 避けざるべからず、然るに、今の諸 途より出づるととなりぬ 事なり 力め、士は現今の 0 游學の名 の語は皆古事 知 循 8 誰ありて之を能く統 U 何 る所に非ず、且つ越の言 7 上の 萬世 T ぞ今の るに今や天下已に定まりて、法律命令 其 士を招 建 作りて各、自ら都合よきとを主 1-黒白を の方針を 傳ふべ 立した 世 を例證して當時の きて各、其 法律政令を學び習ひ の法となすに足らむ 區別 き大功を る所を誹 異にせし 、是を以て上下各、其 して紛る 一するもの莫か 0 國 の散りんへに亂 生は現代 へることは夏般 建て なり、 n 0) 0 事を惡 私 り、今や皇帝 互に 强からむこ 現代の事 給 に學べ 今陛 ッ、丞相 B る、固 して禁制 相爭 りき、 口し、 F 3 を は

なく て敢て詩經書經 り、徒黨の 等は各 又博士の官の職る所は兎に角として其の他の者に 臣依つて之が嚴禁法を申し上げむ、凡を歷史官の藏 にも拘らず之を 異にするを以て高 ては流 を舉げむに、今政 びて相與に 四 む、又官吏にして以上の禁令を犯せる者 も子類も雑へて之を焼き棄てむ、又 る者あらば、悉く郡の守・尉の役所に持参させて經書 する所の からざる時に於て之を禁止するこそ 至極便利なれ のて朝廷を誹謗することを事とす、かゝる輩 て詩書を談論する者あらば棄市の 海 制度を以 巻に論議し、君主に誇 全く一 石に口に出さず心の中に非とし 書籍 結合は の學べる所を以 法教 に定 て今 は秦の 心を出 まれ より諸子百家に至るまでの 0) 嚴禁せざれば、君主 下に成らむ、是を以て其の 合の朝より下ると聞きては、則 政 しと為し、且つ幾 6 記錄以 世 令を誹 る人を謝 而 るを以て て之を論議 るに私に 外は皆之を焼き棄てむ る者 る者 あら 刑 遠慮な 名譽と為し 多の 學べ の勢力は上 に處せむ、又古 あ 、朝廷 6 、出ては遠 る古道 門下生を率 族を く相對 書を藏す 未だ甚し 知 1-0) ち彼 りな あ 隆 3 h 例

定し、四方のえびすを逐ひ遣りければ、日月の照す所ざりき、而るに陛下の御心明聖なるにより、海內を平の徳を稱へ述べて曰く、昔時は秦の地域 千里に過ぎみて帝の長久を祝す、僕射の 周青臣 進み出でて皇帝【講義】 始皇帝咸 陽宮に酒宴を開く、博士七十人前

已に ず、各、其の観る所を以て の政を復びせず、三代も亦必ず先代の む、丞相李期日く、古を稽ふるに五帝は各、其の 取捨に困りて其の議を群臣に下して可否を決せ しは忠臣に非ずと、かゝる反對說出 入るやうに褒めそやして、陛下の過失を 重ねむと 所にあらず、而るに今青臣は又陛下の面前にて 事々に古を師とせずして能く長久なる者は、聞ける 六卿の如き不忠の臣ありて 皇室を覆さむとするも、 室の枝葉輔佐と爲せり、今陛下は海内を有つに、子弟 たるや、其の間一千餘歲、子弟功臣を封じて でて曰く、臣聞けることあり、殷周の二代の天下 を封ぜずして猶匹夫と爲す、若し卒に齊の田常晉の なりと、始皇之を悅ぶ、時に博士の齊人淳于越進 よりの帝王多しと雖、陛下の武威仁徳には及ばざる を以て群縣と為し の患無くして之を萬世に傳ふることを得べし、上古 々其の執る所の 輔弼する者無くむば、何を以て相救はむや、凡て もの全く相反するには非ず、時勢 たれば、人人自ら安樂と為り、 せずと云ふと莫く、又諸侯の 其の 世を治め來りぬ、是れ でしかば皇 制度に因襲 前 3

設けたる三十四縣を指す、

北假の地を取らしめ、其の中に 關所を築きて戎狄の 逐ひ、楡中より以東の黄河に傍ひたる地を陰山に屬 して遣り守らしむ、又西北に兵を用ひて匈奴を斥け 林・象郡・南海と為して、罪過によりて流さる」者を 壻及び買人を徴發して

嶺南の地を攻め取 人を逐ひ、罪人を徙して之を新設の三十四縣に充た と為す、又蒙恬をして河を渡 して初めて三十四縣と爲し、河上に城を築きて要塞 三十三年、諸の 昔時 逃げ亡せ りて高闕山 たりし ・陶山・及び らしめ、桂 人の

は山陸に棲み、其の性强し、故にいふ、一説に地名な の困窮して、其の妻の生家に厄介となる者なり、陸 り、亭障、行人を誰何する りと、適、滴と通ず、罪過に 梁、嶺南の地方をいふ、此處の住民は蠻風にして多く めたり、 とりでなり、高闕、山の名なり、 逋亡、逃げ亡すること、贅壻、妻子ある 所、關所なり、初縣、初 よりて流さるゝ者なり、 陶山、陽山の誤な もの めて

令を布き民に神を祠ることを禁止す

出。

講義 明星、彗星なり、

長 城 及南越 10 年、適治 地, 獄 吏不直

前 時 始 調刑に處して長城及び南越の地を築か 講義 為太 皇 秦 置 地 三十四年、獄を典る官吏の不正を働 過* 里

所 平定 戰 爭 之 爲

明

聖.

海

内,

放

夷,

田作ることなり、儀矩、後世ののりなり、なり、農事を務むるをいふ、其業、紡織の業なり、田、

死之藥、因使"韓終侯公石生、求"仙人不

【講奏】 碣石の碑を 建て終りたるに 因り、韓終侯の公石生をして碣石上に 至り仙 人不死の 薬を求 めし

上る、其書に曰く、秦を亡さ む者は胡な らむと、是れ二世の胡亥を指したるに、始皇之を悟らず、專ら北胡の事なりと速斷し、乃ち將軍蒙 恬をし て兵三十萬人を發して北の方胡を撃た しめたり、是成又河南の地を 軽取す、

縣_

還り、使命が鬼神の事に係るを以て、因つて錄圖書を

り咸陽に入る、燕人の盧 生使して海島に入りてより

始皇帝碣石より北

方の邊

境を巡り、上

郡

產、震,定、外、人,女、黎、拉、修、庶 郭,威,勞,逆, 決,德賞、文、 通,并、及、復, 來,其,無, 川 外田、莫、不、安、所、羣臣 誦、 典業、事各有、序、惠被、諸 無、孫、天下咸撫、男樂、其 防, 夷*初,肥* 一肥。秦土 平,域, 墮,皇 阻,地 勢 其,既城奮功

庶民の心皆秦に歸服す、仁惠を施すに功等を論じ、賞 は暴逆を絶ち盡し、其の文德は古の罪無きに復りて、 無道の徒を誅し、反逆を爲す者は息み亡ぶ、其の武德 盧生をして碣石 山上の仙人羨門高 を求めしむ、乃ち 、講義】三十二年、始皇帝遼西の碣石に行き、燕人の に秦宇なりと、是なるが如し、黎庶、人民なり、繇、役む、殄、殺し盡すなり、庶心、庶民の心なり、秦平、一説非なり、誓、衍文なり、遠城郭決通隄防、此の七字恐ら非なり、誓、衍文なり、遠城郭決通隄防、此の七字恐らは下文の誓の字を連續して 羨門高 誓を二人と爲す、 なり、エダチと訓む、撫、安んずるなり、其晴、晴は田 り、羨門高、仙人の 名なり、封禪書には 羨門子高とい【字解】 碣石、特立したる石山なり、遼西の海濱に在 ひ、漢書郊祀志には羨門高と爲す、而して集解正義に

と莫し、故に群臣皇帝の功烈を唱へ、請ひて此の石に

刻み、後世ののりを垂れあらはすなりと、

亂れず、恩惠は諸の産物にまで被りければ、蠻夷の者

ことを樂み、女は 紡織の業 を修め、事各。順序ありて 人民勢役の困無く、天下皆安んず、男は農事を務むる 險阻の地を平げ去る、かくて地勢旣に定まりぬれば、

も久しく並び來りて 田作り、其の所 に安んぜざるこ

侯の舊城郭を毀ち壞し、河川のふさがりを切り通し、

めて天下を一統して 泰平と為す、是に於 て關東の諸

至る、皇帝武威を奮ひて、其

の徳は諸侯を弁合し、初

賜は牛馬にまで及び、恩澤は霑ひて土地をも肥すに

碑を碣石門に刻む、其の辭に曰く、遂に軍勢を出

り、カヘッテと訓む、道、猶從の如し、ヨリと訓む、「字解」 東觀、猶東游の如し、遠、及 ぶなり、朝陽、山東なり、暢、伸なり、ノブと訓む、禽滅、禽は擒と通ず、大王、韓魏趙齊楚燕の王なり、闡拜、闡は開くなり、萬害、當は災なり、優…戎兵、偃 は伏 すなり、戎兵は武器害、當は災なり、優…戎兵、偃 は伏 すなり、戎兵は武器害、當は劉綦反にしてチなり、旗 疑の韻に協ふ、備器、常育は銅綦反にしてチなり、旗 疑の韻に協ふ、備器、常育は銅綦反にしてチなり、旗 疑の韻に協ふ、備器、常育は銅綦反にしてチなり、旗 疑の報に協ふ、備器、常育は銅綦反にしてチなり、旗 疑の如し、ヨリと訓む、

三十年、無事、

【講義】三十年、記すべき事無し、

三十一年、十二月、更名臘日嘉

平

【講義】 三十一年、十二 月に臘を改 め名けて嘉平と

後第三の戌の日に百神を祭ることなり、嘉平、殷の舊【字解】臘、周の祭の名にも一に大蜡ともいふ、冬至

場。計首里六石米二羊、始皇為、場。行成陽、與武士四人。俱夜出、後。為 龍光 見。客、武士聖。殺盗、關之。。 一大索二十日、米石、千六百、中大索二十日、米石、千六百、治皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱始皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱始皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱始皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱然皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱然皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱然皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱然皇帝咸陽の市中に微行を為さむとて武士四人と俱後皇帝成陽の市中に微行を為さむとて武士四人と明本、「神」十六百銭なりしといふ、

行,器, 内,息。極,內,念。 咸 視 外 永,禽 偃汉滅 聽 誅 章 不 戎 嫌 至 息, 旗、 王, 疑 兵, 彊 明 作立 皇 闡*武 職 觀 常 聖 帝 并,威 臣 職 首 之。嘉。既。改。遵。大明。天旁。初、廣琅德,定。化,分。義,德,下,暢,與,麗 下,暢, 麗 經 祗後 遠 各、昭二 嗣 知,設。 理。害 上聖循。同。所,備宇絕 咸 四

黨人、

下皆章旗あり、官職に在る者は皆其の分に遵正し、大義を立て作し、明かに常用の器具を設正し、大義を立て作し、明かに常用の器具を設正し、大義を立て作し、明かに常用の器具を設 **肚麗にして、從臣皆帝徳を思ひて、治道を原ぬることに之罘山に登りて、山東より臨み觀る、其の眺望廣大** 目既に定まりぬれば、後に 嗣ぐべき 者は其業にした を古に視ぶるに超然として勝れたる所あり、常の 各、其の行ふべき所を盡し、事々に嫌ひ疑ふとあるな を以て群臣皇帝の徳を嘉び、謹みて大聖の功烈を唱 がひて、長く皇帝の成し遺されたる治蹟を承けむ、 し、民は化を善に改められ、遠近法度を同じくす、 用ひざるを示せり、皇帝 徳を明かにし、字内を治め を開き丼せて、災害絶え息 方のはてを振ひ動し、六國の王を擒にして滅し、天下 理 至りて明かなり、聖帝の法初めて興りて、字内を清め 、請ひて此の之界に刻銘せし所以なりと、此より引 め、外は暴亂强大の徒を誅し、武威逼く伸べて、 其 東游の銘に日 、遠方 を覽省み、東 かに常用の器具を設け、上 みて永く兵器を伏せて 海の一 れ二十九年、皇帝 隅に及び、 ひて、 復

衆,辟.侯, 請。宇刻、縣 法,經 暴,行 振 之 緯。 輝。發。戾 石中、表。承 垂,順,永,周,于聖學 下,首,達。師,厭、永,周,莫。奮。虐 定。不 式= 羣 則、極, 服。德, 臣 施、滅、誅 誦、矣 或 功,哉、 明 信

れ二 此の時に當りて 皇帝東土に游び、巡りて 之罘山 【講義】 b T で原ね念ひ、其のは湯海に臨み給る 一十九年、時中春に ば能く世を治め給ひ、法度を建て定めて、大小の 著しく題し、外諸侯 之罘山に登りて石に かにするに義理を以てす、而るに六國 臨み給ふ、從臣嘉び觀て、皇帝の大いなる 本始を追ひ唱ふ、さて皇帝 ありて、陽春 を敷 刻む、其の餠に曰く へて大いに文采 の和氣方に起 は大聖 に登 るる、

> げ、義 常の法たらしむと、 の功を唱へ、皇帝に請ひて刻み、表して後世に 久の儀則と爲す、大いなる め、普く明かなる法を施し、天下を正し整へ、以て永 云 れば、其の威光逼 人として聖憶に承け順はざる者真し、故 絶滅し、庶民を救ひ助け、周く四 ふこと莫し、此くして疆大にして暴亂なる者を烹 に六國を征討するの師を發し、我が 殺して已まざるなり、是に於て皇帝衆庶を哀みて、 て に依りて徹賊を誅し、信に據りて德政を行ひ 僻み、貪り戻りて厭くことを知 く四方に達して、諸侯皆賓服せずと 哉皇帝の徳、宇内中國 方のはてまでを定 武徳を奮ひ揚 1 人民 垂 群臣 の民 T 其 H

「字解」 臨照、照は上に居 て下に臨む敬語なり、海、教海なり、原念、たづねおもふなり、体烈、大いなる功なり、肥胖、同は邪なり、辟は僻なり、威憚、威光、女果仁惠なり、同辟、同は邪なり、辟は僻なり、威憚、威光なり、振烹減、烹は煎なり、滅絶すること、字、まは、京、文果仁惠なり、混った。 と、字解」 にして中國のこと、聖意、意は億に叶ふ、

をして悉く湘山の樹を伐らしめて其の山を赭くせせしなりと、始皇帝東土より還るに彭城を過ぐ、齋戒祈信講義】 始皇帝東土より 還るに彭城を過ぐ、齋戒祈信講義】 始皇帝東土より 還るに彭城を過ぐ、齋戒祈【講義】 始皇帝東土より 還るに彭城を過ぐ、齋戒祈【講義】 始皇帝東土より 還るに彭城を過ぐ、齋戒祈【講義】 始皇帝東土より 還るに彭城を過ぐ、齋戒祈【講義】 始皇帝東土より 還るに彭城を過ぐ、齋戒祈

【字解】 陽武、縣の名なり、盗、張良を指す、本傳に詳に布介して大いに之を索むること十日間に及べり、に至り、盗に驚さる、之を求 むれども 得ざれば、天下に至り、盗に驚さる、之を求 むれども 得ざれば、天下

職し暴し、殘害殺伐することを止めざりき、而るに殖 金石に刻銘して自ら 其の徳を頭し て紀識となせり、 金石に刻銘して自ら 其の徳を頭し て紀識となせり、 金石に刻銘して自ら 其の徳を頭し て紀識となせり、 からず法度の明 かならざるとを 知れば、鬼神の威を でって、遠方の民を欺き服せしめたり、其の表面は四 でるに諸侯倍き叛きて、法令 天下に行 はれざりしな がらでは使き叛きて、法令 天下に行 はれざりしな がらでは徳を行ひて 民を惠み、尊號は大 いに成りて皇 帝と稱し給ふ、是に於 て群臣相與に 皇帝の功徳を唱 帝と稱し給ふ、是に於 て群臣相與に 皇帝の功徳を唱 でとを金石に刻みて表經と為すと、

經、表して後世ののりとなるべきもの、はか、其の質別侯より卑くして封邑無きものなり、隗なり、其の質別侯より卑くして封邑無きものなり、隗【字解】 列侯、諸侯なり、倫侯、倫は類なり、諸侯の類へ之を金石に刻みて表經と爲すと、

有三神山名日。蓬萊·方丈·瀛洲、既已、齊人徐市等上書言、海中

悉之於是遣。徐市、發·童男女數 不之於是遣。徐市、發·童男女數

海に入りて仙人を求めしむ、と、是に於て徐市を して童の男女数千 人を出發させて童の男女と共に至りて之を求めむことを得しめよぶ強いに、 はの外に三の神山あり、其の名を蓬萊・方丈・していふ、海中に三の神山あり、其の名を蓬萊・方丈・していふ、海中に三の神山あり、其の名を蓬萊・方丈・は、 は りぬ、齊人の徐市等上書

物動作を慎むこと、「深に入りて仙人を求めしむ、一は自のいみ なり、飲食なり、朝市の市に非ず、芾と福と音相通ず、齋戒、齋は齊り、朝市の市に非ず、芾と福と音相通ず、齋戒、齋は齊ない。

得乃西南渡淮水之衡山南郡。周鼎泗水使千人没水水之,弗

り、六合、天地四方なり、其字、其の居なり、のこと、六親、父母兄 弟妻子なり、驩欣、よろこびなての國々なり、兵革、刄 物と甲冑となり、轉じて軍旅ての國々なり、兵革、刄 物と甲冑となり、轉じて軍旅

侯 乃 維、 相 侯 上 趙 侯 建 武 王 成 嬰・ 王 撫。秦 亂。各、日, 綰 守,古五 信 侯 離 東王 其, 之 大 卿 列 侯 土,兼 趙 至,有,于天 亥·倫 不對帝夫李 馮 侯 止域,者、楊斯獨或、地穆鄉 母 通 天 琅下, 擇 侯 武 丞 刻,朝。不從。王 昌 侯 武王列 金或過與戊相 名, 賁·倫 石。否。千 議。五 侯 隗 為。 侯 皇 武 成 以相里於大 林 自,侵,諸海夫丞倫侯 城帝,

從して 此の 倫侯 は千里に過ぎず、諸侯は各、其の封むられた 隗林・王綰・卿の李斯・王戊・五大 夫の趙嬰・楊樛等扈 てゝ皇帝と爲り給ひぬ、是に於て東土を撫恤し、今や【講義】 さて秦王は既に天下を兼ね有ちて、名を立 を守りて、或は朝し或はしかせず、互に の建成侯趙亥・昌武侯成・武信侯馮 琅邪に來れり、列侯の 與に海上に議して曰く、古の 武城侯王雕·通武侯王賁· 帝王は 相侵して世 母擇・丞相の る 其の 所 領 域 地

するは是れ即ち皇帝なり、 へ、河川 定に を渡り山野を經 教命を終 72 ば、 へて遠 H 0 如く 月 0) めぐり、以て 又遠く 時宜に ふ者無く 照 9 所 蠻夷 應 の風俗 百姓を憂へ恤 C 悉く其 車 て事 0) 3 正 主旨 て通 處 寇賊 の思無く

所

無し、蓋し其の功勳は 方は北戸を盡し、東の方は東海を有ち、北の方は大夏 を知りて之に戻らざら 其の居に安んぜりと、 及び、物として其の徳を を過ぎけ 領土を稽ふるに、六合の内西 え、民安寧にして軍 り、此の如く人迹 欣びて教命を承 旅 五帝を蔽ひ、恩澤は牛馬にまで を用 むとす、さて 受けずと 0 ひず 0 至 方は流沙を沙り る所皆臣たらざる者 いふこと莫く、各々 け、盡く國の 又日若に皇帝の 相 T 法

【字解】 陵水、陵一に凌に作る、 專なり、揖、志、揖 を琅邪臺と となり、經、常なり、次行 じ、本事、農事なり、末、商 は海畔に在 邪山のことにして下の 琅邪臺は臺の名なり、琅邪山 9 平ぐなり、紀、理まるなり、卒士、士卒といる >量、制立的 、僻遠に在る幽陰の地をいふ、即ち戎狄のこ 琅邪、山 りて其の形臺の いふ、復、賦税を免ずることなり、端平、正 は收むなり、器械、分 の名なり、琅邪臺、上の にするなり、匡飭、正し整ふなり、 、次第行列なり 猶歷 賣なり、摶、心、薄は古文の 如し、故に琅邪山のこと 3 カラ 如し 車權衡度 、河川を渡 、遠邇、遠近な 琅邪 臺 量 るこ に同 は 琅

* 論

敦忠に

して事業常あるなり、さて又日若 者まで、專ら肅み莊ならむこと

幽

陰

0)

戎

狄の

となく力を盡して敢て怠り荒

むこと莫く、近きは勿

者は容れられず、皆貞正忠良ならむことを務め、

なれば、尊卑貴賤其の次弟行列を聞し 方を巡視して民の疾苦を臨察し、朝野 が如し、さて又日若に皇帝の聰明を言

踰えず、姦邪

細大

0

事情に

明

カコ

事を調ふるに時を以てしたれば、諸の産物は繁く殖

を誅し害毒を除

き、國

利を興

民福を致

仁德を 稽ふるに、四方僻

遠の

國

々を有ち定

易なり、又政理整ひて分明なること繪畫

稽ふるに、常に四

0)

邪悪なき

方伯は其の職を分掌して諸の處理すべきこと常に平

の避くる所を知りて罪を犯さ

いるなり

明白なるもののみを以て 法を定むれ

を定むるに疑は

しきは之を除

ば、民皆其 きて追窮せず、 みて朝夕怠たらず、罪

皆 諸誅事遠 尊 產 邇 亂,業 務。卑 除*有,辟 貞 大流法 繁 貴 相 夏,沙,式,保,殖。害,常隱良,賤人南,六終。黔與。皇專,細不 者海,土教,革,時,極,忠,荒,容,方,當,辟之

後なり、隔、一本に融に作る、是なり、 で、五大夫、秦雷の第九位なり、即ち山川を祭ること、樹下、松樹の下なり、此にては何の樹なるかること、樹下、松樹の下なり、此にては何の樹なるか不明なれども、藝文類聚に漢官儀を引きて松樹と為不明なれば、當に點首とすべきなり、梁父、山の名なり、修休明、大明なり、長利、長 久の國 利なり、訓經、教訓禮、依明、大明なり、長利、長 久の國 利なり、訓經、教訓禮、依明、大明なり、長利、長 久の國 利なり、訓經、教訓禮、後なり、隔、一本に融に作る、是なり、

去、 成山、登。之 罘、立、石、頌、秦 德、焉 而 成山、登。之 罘、立、石、頌、秦 德、焉 而 、是 乃 並。勃海,以 東、過,黃・腄、窮。

たへ然る後に去れり、進みて之界山に登る、此にて又石を立てゝ秦徳をた進み、黄・腄二縣に過ぎり、成山の絶頂を登り極め、尙【講義】 泰山梁父に封禪してより勃海に傍ひて東に

、山の名なり、第、絶頂に

匡 莫。日 摶。上。乃 東。合端 德 歲 黔 南, 飭。不。月,心。農,臨、撫。同。平。意,作。首 異得所揖除,于東父法日,琅三 俗,意,照、志,末,海。土,子,度,維、邪 以聖萬二省和十 皇帝 陵,應,舟器黔 立。琅樂 水, 時. 輿, 械 首 經,動,所一是之 率仁之、六石,邪 地,事,载。量,富、功、憂、是、皆、同、普勒 士,義,紀年刻,臺事顯以,皇颈下 憂是。皆同。普 頌、下. 恤。維、終、書、天 勞。已。白。明。帝 黔皇其文之本大道人作。德,十节乃 首,帝、命,字、下、事、畢、理、事、始、明、二、徙。

施于後嗣、化及、無窮、遵奉遣詔、咸承、聖志、貴賤分明、男女禮順、咸承、聖志、貴賤分明、男女禮順、東隆、教誨、訓經宣達、遠近畢理、

方の民を巡視し、今弦の泰山に登りて周く東方の極大の民を巡視し、今弦の泰山に登りて周く東方の極いにより、魯の諸の儒生と議し、銘を石に刻みては梁父山に禪して山川を祀りぬ、さて泰山に立てたる時暴に風雨に遇ひければ松樹の下に休息して雨宿よって遂に泰山に上り、石を立て天を祭りて下る、下本為本、制度を作り、法典を明にし、臣下之を修め整る石に銘を刻めり、其の辭に曰く、皇帝の天位に臨みる石に銘を刻めり、其の辭に曰く、皇帝の天位に臨みる石に銘を刻めり、其の辭に曰く、皇帝の天位に臨みる石に銘を別めり、其の辭に曰く、皇帝の天位に臨みる石に銘をが出度を作り、法典を明にし、臣下之を修め整ふ、爾來二十有六年にして初めて天下を拜合して諸な、爾來二十有六年にして初めて天下を拜合して諸な、爾來二十有六年にして初めて天下を拜合して諸な、爾來二十有六年にして初めて天下を持合して諸ない。

男女の禮亂れず、夫々其の職事に慎み遵ふ、昭に朝廷 す 治 といる 帝の遺詔を選奉して永久に之を承けて重く戒むべし と無し、故に其の聖德の化は無窮に及び、後世の者皇 の内外を融和し、清淨にして後嗣に施さずと云ふこ て、皆聖天子の志を一承け體す、貴賤の別分明にして、 く寐ね、長久の國利を建て設け、專ら教育訓誨を隆に て、治世に居ても懈ること無く、朝は夙に起き夜 らしむ、皇帝の T の大業を本づけ原ねて謹みて其の功徳を唱ふ、 までをも覽給ふ、由つて從臣等は其の帝迹を思 、教訓禮儀を宣べ達したれば、遠近の民畢く理まり 後世に垂れ、後世をして順ひ承けて革むるこ きを得て、皆法式とすべき有り、大義大いに明に むるの道天地の氣 御躬聖なれば、既に天下を平げ の運行に適ひ、諸 物の産出 と勿

永,

重,

大山に登りて土を積みて壇を作り天を祭ることな秦徳。の下に接すべしと、今は本文のまゝにす、封はとの三字は衍文なり、又與"魯諸儒生」の五字は頌"禪望,祭山川、之事、一説に〔立、石〕と議刻、石の〔議〕禪望,祭山川、之事、一説に〔立、石〕と議刻、石原、秦徳、議、封

級,甬。極 道, 廟 馳 自 道 道,咸 通 陽 酈"宫, 屬、山。為、 之作,極關象 廟 泉,象, 賜史 前 爵 殿,極_ 築*自

又西南に行きて雞頭山を出で、又東し【講義】二十七年、始皇帝西の方隴西の 都より之を連絡せしむ、是蔵役夫に しを以てなり、而して此 角道、地 えんせし 開く、叉甘泉宮の 改命して極 して還れり、是歲信宮を渭 前殿を作 ふ、是れ其 の極 動はり置い 南に作り、已にし の宮殿 の北地を 爵一 T 山に通 の天 囘 築 級を 中の きで咸陽 極 賜ひ すい T 1= 地

せるない 、是は天子の通御 道、天子の通御する 外に牆 に外人 の見えざるやう 道なり、御成 道の

1

八

年、始皇

東方,

郡縣上

劉了,

不順。皆祗。周,賓飭。日,五雨乃頌。曜 解,承有,誦,覽、服、二皇大暴。遂秦山。 親,十帝夫、至、上、德、立, 功 東 於勿,法 德,極,巡,有臨禪、休、泰議、石, 遠六位梁於山封與 治 從 興*帝義 道臣方、年作、父樹立、禪。魯、 思。黎和,制,刻。下。石,望 運 休 明 行。迹。民,并、明。所、因,封。祭。儒 建,既垂、諸 本,登,天法,立,封,祠 設,平,于產原,兹,下,臣石其,祀。川,議,長天後得事泰問,下其,樹,下,之刻, 利,下,世。宜,業,山。不。脩辭。爲。風事,石,

頭髪の黑きことを以て民の稱となす、酺、布なり、王明髪の黑きことを以て民の稱となす、酺、布なり、王僧を高すなり、諸侯の國を建つるは是れ頓て戰鬪のなり、異意、謀反心なり、立」國是樹」兵、立は建なり、なり、異意、謀反心なり、治・龍西・北地・漢中・巴・蜀・黔・南・漁陽・右北平・遼西・遼東・代・鉅鹿・邯鄲・上黨・上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東・代・鉅鹿・邯鄲・上黨・上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東・代・鉅鹿・邯鄲・上黨・中・長沙・內史、是なり、黔首、黔は黎なり、後屬、後世の一族【字解】 塡、鎮に同じ、定むるなり、後屬、後世の一族【字解】 塡、鎮に同じ、定むるなり、後屬、後世の一族

道、上と下との二重に造りたる廊下なり、周閣、周廻城のことなり、寫放、寫は轍ぶなり、放は致すなり、複 字、李斯小篆を作りて古篆を廢せしをいふ、蟹、及ぶ 徳天下に布き衆人集りて飲酒すること。天下兵、天下 日く「日南之北戸、猶二日北之南戸」也、」とあるにて知 に見ゆ、又吳都賦に「開」北戶」以向」日、」とあり、劉逵 り、衛石、重量なり、軌、車轍なり、わだちなり、同三文 るべし、塞、とりでなり、此にては有名なる萬里の長 なり、北嚮戶、嚮の字行文なり、北戸は地名なり、爾 十斤を石と爲す、千石は十二萬斤なり、廷宮、宮庭な 今の史記には此文無し、千不、石は衡の名なり、百二 尺、皆夷秋服、凡十二人、見一方臨洮、」とあり、而るに 書五行志には史記を引きて「有二大人、長五丈、足履六 鍾は鐘と通ず、つりがねなり、鑢は處と通ず、つりが の兵器なり、銷、鎔解するなり、とらかすなり、鍾鏃 し得るやうに作りたる宮殿なり、 ねを懸くるもの、金人、銅を鑄て造りた る像なり、漢

雞頭山過。囘中焉作,信宮渭南、二十七年、始皇巡,隴西北地、出

得諸侯美人鍾鼓以充入之、 陽北阪上南臨渭自雅門以東、 每被諸侯、寫放其宮室、作之咸 等。被,諸侯、寫放其宮室、作之咸

議を聽許せらるべしと、始皇乃ち其の議を羣臣 王と爲し、これ等の地方を治めしめむ、唯上幸に此 を鎮むること難 去ること頗る遠し、故に 之が為に王を 置かざれ て天下初めて一統しぬ、而して燕齊荆の地は咸陽を られ、諸侯の國は皆郡縣 と能はざりき、今や海内陛下の御魂に するに 至り其 一の封ぜ 撃すると仇讎の の李斯は之に反對して議して曰く、昔周の文王武 て諮詢す、羣臣は皆之を以て便なりと為す、獨廷 る の一族次第に王室に疏く遠ざかりて互に 丞相王綰等又奏聞して言ふ、諸侯悉く 所の子弟同姓は甚だ衆かりき、然るに後 り、され かっ 如くし、諸侯も亦更るか、相誅伐 るべし、因つて請ふ諸子を立 ど周の天子は此等を の制を布 かれて秩序已に定 よりて一統せ 制し止むる ば之 てン 破れ 相

求めむとすること、何と難きことにあらずや、廷尉の 樹立するに異ならず、此くして尚天下の安寧休息 ものは是れ侯王有りしを以てなり、今や我が宗廟 鎔解して鐘虡及び金人十二を鑄造す、其の重さ各千 下共に巳に戰鬪に苦みて上下皆休寧ならざる所以 天下に於て謀反を起さむとするの意を持つ者無から まりね、諸子及び功臣には別に賞として公の 其 軌を同一にし、書は小篆を作りて文字を一定にせり、 石あり、之を宮庭の中に安置し、以て天下に兵を用ひ 群飲せしむ、又天下の兵器を收めて之を咸陽に聚め、 を更め名けて點首と稱し、天下に合して大いに歡樂 十六郡と為し、郡毎に守・尉・監の重なる官を置く、民 反對意見さもあるべしと、是に於て天下を分ちて三 神靈の冥助に む、これこそ尤も安寧の術なれ、因つて諸侯を置かむ 以て重く之に賜はれば、皆甚だ滿足して制御し易く ざることを示せり、叉法度衡石丈尺を均一にし、車は こと甚だ以て便ならずと、始皇之を親裁して曰く、 て又復國を立て王を置かば、是れ新に の領域は、東の方は海に至りて遠く朝鮮に 頼りて、天下初めて定れり、然るに今に まで及 賦

と、合、適ふなり、と、合、適ふなり、数に六を以て數の極となす、長深、勁く酷しきこり、故に六を以て數の極となす、長深、勁く酷しきこ為、紀、六は大陰の數なり、紀は極なり、水德は陰な

賞為止諸衆、議、羣諸地丞

皇日、天下共善、 東、大川、 、大川、 東、大川、 、大川、 、大

5 ば衣服・旄 者は絶對 にして人情を含める温 和なる執 文に依りて決し 2 天子は六馬に乗る、又黄河 0 其 にして假借する所 、是れ皆水徳の始な 而して國事を執 水 常數に適合する所なり、 0) + 徳の 徳が 從 の制も亦六尺となす、又六尺を一歩と為し、 に赦さいるに至れり、 U 旌·節旗 水に 朔を 始 と爲し、符叉は T なりと、又 水 用 して陰に属すれ 、切り刻む 德 0) 72 ふ、已に水徳を以て天 るに 無く、久しきに亙 類は皆黑色を算び らずむばあるべ るを以て此 年の始めを改め つよく から 法冠に至る まで皆六寸と を改め名づ 、故に法を 如くにして少しも恩惠 手 ば、従つて り計ひ無し、是れ畢 酷 0 如 しくして悉く からず、 執行 りて罪を犯 けて徳水と く制定せ 用ふ、又數 て朝賀、 下に王 五行 するに速 故 する 0) 72 1-な す は 方 20 n

服する地方なり、夷服、五服 なり、陛下、秦より以來の天子の 0 帝、黄帝・帝顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜、是なり 字解 前 服の外 結、王綰なり、劫、馮劫なり、斯、李斯なり、五 にあり 、侯は候なり、斥候 0) 要服荒服を總 敬稱なり、陛 して 、侯服、五服 王事 72 は 階 3 稱

上皇、天子の父の 1 頭 以 亦士卒を進まし 注 h 水 朕、我なり、上古は君 今の事に通晓せる者なり、味死、味は猶 b 3 おくりな也、傅、次第也、所、不、勝、火 1: 1-群臣の天子に奏する 者敢て直に天子 を指さず、陛 り、天子には必ず近臣 けた て往 達するの意なり、殘賊、殘は傷 在 に注けたるもの なり、旄旌節旗、旄は幢なり、指塵 に克たざるなり、故に秦 皇、天子の父の尊號にして之を以て初となす。 人民を傷害する者をいふ、博士、秦官の名なり て、軍 る者を呼びて之と言ふ、是れ卑 0 北方の色は黑なり、故に 來する證 るもの、旌は旄首に折羽を注けたるもの、是れ 制、竿頭に龍頭を附け 将の建つるものなり、上、黒、水徳は北方に 意なり、上書又は 語と爲る、 むるに 符なり、毛を なり、旗は熊虎の 為る、後世之に因つて改めず、太臣俱に朕と稱せり、秦に至り始 0 用ふ 陛 側 の徳を水と 3 1-其の口 編みて竹節に象りて竿 は 奏聞に用ふる 九 黒を尚 ふなり、賊は害 たなり、節は王命 ちて警戒 に用ふるはたな 賤に因りて尊貴 より整件の 徳を指す、火は 爲す、自、 ぶなり、以六 冒の 畫け せ 語なり、 如し、死 3 3 あ 尾 かなな は 用ふ b 72

思 名。而 急法、久者不赦, 毅 和 戾 河, 興 深 德 尺、六 合五德之數於是 決於 爲、爲、符 步、法 法_水 德 削。之 旗、皆 始, 剛

と雖陛下の治には及ばざるなり、故に臣 等は謹みて及び夷服あり、これ等の諸侯は或は來 朝し或はしかせざる者あり、されど天子 は之を制御 すること能はせざる者あり、されど天子 は之を制御 すること能はせざる者を誅戮し、天下を平げ定め、海內を郡縣の制にする者を誅戮し、天下を平げ定め、海內を郡縣の制に対る者を誅戮し、天下を平げ定め、海內を郡縣の制に対る者を誅戮し、天下を平げ定め、海內を郡縣の制に対め、天下に布く所の法合は一統の手より出づ、此の如きは上古より以來未だ嘗て有らざる所にして五帝如きは上古より以來未だ嘗て有らざる所にして五帝との治には及ばざるなり、故に臣 等は謹みて

1= 今周に代りて王たれば、其の して思へらく、周は火徳を以て王たりき、而 h 法 ば、朕は此の制を取らざるなり、故に今より以後 によりて諡を作れり、此の如きは子が父 も諡無し、中古には號ありて死ぬれば其 爲す、皇帝制して曰く、朕聞けり、太古に りといふ、是に於て父の莊襄王を追奪して太上皇と 0 0 せらるべしと、王日く、秦皇にては古の帝號其のまゝ 5 を除き、朕をば始皇帝と爲よ、而して後の世續 他は汝等の決議の如くにせよ、由つて制して可な 帝位の號を采り皇と帝とを合して皇帝といへ、其 命を制と 傳へむと、始皇又 五行の徳の終始 數へて二世三世と稱して萬世に至るまで之を無窮 、臣が君の行跡を評することにて甚以て理無 れば不可なり、故に其の泰を去りて皇を著け上古 死罪を犯して陛下に尊號を上りて泰皇とせむ、又 泰皇氏最も貴かりき、是に由つて臣等は恐れなが 天皇氏あり、次に 地皇氏あり、次に 秦皇氏あり、 為し、王命を詔と為し、天子は自ら朕と稱 如くせむと案を立てたり、 徳は克た する次第を ざる所 は號 して 行為 者 さて古 あ 周 12.

有。天皇、有。地皇、有。秦皇、秦皇、最高、秦皇、有。 有。天皇、有。地皇、有。秦皇、秦皇、秦皇、有。天子、帝。 有。天皇、有。地皇、有。秦皇、秦皇、秦皇、秦皇、有。天子、海内、爲。郡縣、法令由。 一統、自。上古、以來未。嘗有、五帝、一統、自。上古、以來未。嘗有、五帝、此、不不,不不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古所不及、臣等謹與。博士、議、日、古

て來りて秦に對して弓を引かざるべしと約盟せしざるを得ざるに至れり、即ち趙王は其の相李牧をしむとこひねがへり、しかるにさはなくて益、之を用ひむとこひねがへり、しかるにさはなくて益、之を用ひむとこひねがへり、しかるにさはなくて益、之を用ひむるを得ざるに至れり、即ち趙王はと納れ印信を致して史等に合して曰く、昔時韓王地を納れ印信を致して史等に合して曰く、昔時韓王地を納れ印信を致して史等に合して曰く、昔時韓王地を納れ印信を致して史等に合して曰く、諸義】秦始めて天下を幷合したれば、丞相及び御【講義】秦始めて天下を幷合したれば、丞相及び御

我が ことを恐れ、乃ち陰に荆軻をして賊をなさしめて我 國 以て兵革を興して暴亂の諸侯を誅せるは、是れ全く と爲し、遂に其の地を平定せり、又燕王は昏愚に **叉齊王は其の相の后勝が計を用ひて秦の使を拒絕し** を撃たむとす、是の故に我が兵吏其の國を誅滅せり、 國政を聞せり、其の太子丹我が軍の其の國に入らむ を撃ちぬ、故に我れ兵を發して誅して其の王を 約せり、然るに間も無く其の約にそむきて我が南郡 又楚王は靑陽以西の地を獻じて我に畔かざることを を謀れり、故に我が兵吏之を誅して遂に之を破りぬ、 王と爲り燕と兵を丼せて秦軍に抗しぬ、故に 誅し、其の王を生得せり、趙の公子嘉乃ち自立し を撃げ撃ちて之を滅せり、又魏王は始めて約して秦 む、故に其の質子を歸へしぬ、然るに間も無く盟 むきて我に太原に反せり、故に我れ 兵を興して之を て其の地を一平定せり、此の如く寡人は少々の 亂を爲さむと欲せり、故に我が兵 吏其の王を虜に 歸服せり、然るに 間も無く韓趙と 我を襲はむこと 宗廟の神靈の 一皆其の一 冥助に頼らずんばあらず、さて六 伏して我に降り、天下始めて大い 我れ兵 て代 捕

地を平定し、又東して越の君を降し、此に會稽郡を置

五月、天下大酺、

に、五月に天下に今して歡樂して大いに飲酒せしれば、五月に天下に今して歡樂して大いに飲酒せしれば、五月に天下に今して歡樂して大いに飲酒せしれば、五月に天下に今日である。

人合聚歡樂して飲酒するをいふ、【字解】 酺、布なり、王徳 天下に徧く 布きたる時、衆

軍 て其の西方の境界を守備して、秦に通ぜざらしむ、秦 に天下を一統せり、 獨齊あるのみ、故に齊王建は其の相后勝と兵を 發, 遂に齊王建を得たり、是に於て六國盡く亡び、秦卒 將軍王賁をして燕の南より齊を攻めしめて之に勝 兵、守.其 十六年、齊 賁、從.燕 二十六年、六國の 西 南 界。王 中にて 秦に亡されざるは 相 王 使 后 建,将 勝 使。后

定。擊。之,與擊公我。約幾,兵,而其,我,荊韓滅、子太盟。息,誅。倍 太 盟 息 誅 倍 韓 原故兵之,約五王 南王 之,嘉 趙 故。歸、革、虜。與與其趙其,趙 郡,獻、謀、魏乃 納、天 青襲,王自與,其趙 地,下, 秦始、立、兵,質、王王、魏秦約、爲、誅、子,使。寡合 秦,始,立、兵,質+王 王、發、陽 璽,丞 合 兵,以 亂,誅,西,兵服代之,已,其人 從,請,相 其,得,已,吏入,王,得而相以畔,爲,御太其,而,誅,秦,故,其,倍,李爲,秦,藩,史,子王,畔,遂,已,擧,王,盟,牧,善,故,臣日, 逐約。破而兵,趙反來。庶興、已異

る、是蔵大いに雪ふりて深る二尺五寸に及ぶ、

殺、荆,於 將 平 彊,其,大 奥廣荊王秦 破滩淮 起,地,梁之,二大 項 荆軍昌平君死、項燕遂自 燕 擊,年、荆,秦 平 年、王翦 君,王 為游,取,荆至,陳 魏引 復 王、郢以召。降。反、陳、南、王、盡, 攻秦荆 至東東東、灌水

彊ひて之を起たしめ、軍に將として楚を撃たしむ、王く魏の地を取れり、二十三年、秦王復王翦を召し出しれ壞れたれば、魏王の假降らむことを請ふ、因つて盡溝の水を引きて大梁城 中に灌 ぎ入る、大梁城遂に崩溝の水を引きて大梁城 中に灌 ぎ入る、大梁城遂に崩潰・

※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、 ※南、淮一本に江に作る、是なり、

君、置、會稽郡、二十五年、大與兵使王賁將攻。二十五年、大與兵使王賁將攻。二十五年、大與兵使王賁將攻。二十五年、大與兵使王賁將攻。

虜と爲す、一方南方に向へる王翦は遂に 楚の江南の燕王喜を捕虜と爲す、還つて代を攻め、又代王嘉を捕兵に將として遠く東の 方燕の遼東を 攻めしむ、王賁、兵に將として遠く東の 方燕の遼東を 攻めしむ、王賁をして【講義】 二十五年、大いに兵を興す、即ち王賁をして

河內軍 を刺 に陣す、是蔵大いに饑う、二十年、燕の太子丹は秦兵 嘉は其の宗族數百人を率あて 代の地に行き、自ら立 の母太后崩じぬ、趙王已に秦に捕はれしを以て、公子 にせり、而して其の歸還は太原上郡よりせり、始皇帝 朝辛勝をして燕を 攻めしむ、燕代共に 兵を發して秦 王之を覺りて之を撃ち軻 も無く其の國に至ら の燕を伐たむとして已に中山に屯營せるを聞 ちて代王と爲る、而して東の 時、母方の家 す、さて秦王の邯鄲城に行くや、昔時王 乗じて尚兵を引きて燕を 攻めむと欲し、中山に屯營 翦は上地 T ーを撃つ、秦軍燕を易水の 趙都 一剤を攻む、是の時王朝未だ盡く燕薊を取らず、由つ さし 地を取りて之を平定し、東陽に趙王を捕ふ、勢に の邯鄲城を圍みたり、十九年、王翦羌瘣等盡 む、軻威陽に至り地圖を披きて匕首現る、秦 十八 將となり、羌瘣も亦趙を伐つ、端和途 の軍に將として井陘山より下り、楊端 7 年、大い 仇怨あ むことを思へ、荆軻をして秦王 に兵を興して趙を攻む、 らし諸人を捕へて皆之を阬埋に行くや、昔時王が趙に生れし の體を解きて衆に徇 西に破れり、二十一年、王 方燕と兵 を合して上谷 卽 進み 和は ち 新

首を得たり、是に於て燕王逃れ て益 を貰ひ、歸國して其の老を養ひた て其の地に王たり、王翦軍中にて病に罹りければ、暇 の太子軍を破 で卒を發して王翦の軍に至らしめて之を援 りて燕都 の薊 て東の 6 城を取り、太子丹の 方遼東を收め

此に 院、坎なり、あなうめにすると、始皇帝母太后崩、此の河内、河内の軍なり、邯鄲城、趙の都なり、嘗、昔なり、 り、且つ年表及び王翦傳には二十一年王賁撃をとあ を發して王翦が燕の薊城を攻むるを援けしむとあ 太后薨と書すべきものならむ、王賁攻、薊、王賁は 時秦王未だ帝と稱せず、且つ前後書して秦王と爲す 國して老を養ふこと、 ればなり、謝、病、疾病 翦の子なり、薊は荆の誤ならむ、何となれば下文に 【字解】上地、上都上縣の軍なり、井陘、山の名なり、 限りて始皇帝と書すべからず、恐らくは秦王 反、昌 の為に暇を貰ふこと、老歸、歸 徒於野大雨雪

深一

鄭

一平君

講義 新鄭反す、昌平君 之に坐して 楚の郢に徙

安を虜にし、盡く韓の地を秦に納る、秦其の地を郡と て假に守たらしむ、是歳初めて合して男子に年を さしむ、魏より地を秦に獻ず、秦其の地を麗邑 、九月に卒を發して韓の南陽の地を受け、內 十七年、南陽の假守たる內史騰は韓を攻めて韓 て潁川と名づく、是蔵亦地震す、華陽太后卒し 太原に至りて狼孟を取る、是蔵地震 兵を興

諸,兵,應常端下,八

王,太軍、年、

乃

子

之子开

翦之

鄲」引,羌 趙,地 十

歸、東、取,發。之代 軻,使、十王、率、歸、怨 收,燕,卒,西、發,以荆年東遼 斯龍二兵,徇,軻,燕,與 其 宗 東城,王十擊。而刺。太燕 數帝 得。翦,一秦 使秦子合。百 母 軍,王王,丹兵,人,太秦翦秦患軍、之。后 上代崩災 丹破, 黄草 辛王秦 燕、攻、破、勝、覺、兵、谷。自趙、太 謝、首、太煎、燕、攻、之、至、大。立、公原 燕,體國,饑,爲,子 老王軍。盆水燕解。恐二代嘉

者を復す、是の時天下に大旱打ち續きの、即ち六月よ り八月に至りて始めて雨降りしなり、

記録して假合後世秀才出づるとも官に仕ふることを に遷すなり、籍、其門、籍は録すなり、其の一族の者を芒山に葬りしなり、臨、衆人の喪哭なり、遷、蜀の房陵 字解】死、鴆毒を飲みて死にしなり、葬、洛陽 の北

て非を留む、非雲陽に毒殺せらる、韓王遂に秦に臣た平定したり、是蔵韓非秦に使す、秦は李斯の謀を用ひ 破りて其の將軍を殺す、桓齮遂に平陽武城の二地 四年、趙の軍を平陽に攻む、宜安城を奪取し、趙軍 彗星東方に見れたり、十月に將軍桓齮又趙を攻む、 を殺し、首十萬を一斬る、王河南に行きぬ、是歳正 を

動、其、年、內陽以、史 以,史獻、南

十三年、桓齮趙の平陽を攻め、趙の將の扈輒

二年、文信

侯不

韋

人臨流

者、晉

奪。人、

を持合せむと欲し一時東帝と稱せしことありき、後を持合せむと欲し一時東帝と稱せしことありき、後 と対合せむと欲し一時東帝と稱せしことありき、後 と対合の謀なり、諸侯可」蓋、諸侯を蓋くして との配下に致す可しとの意なり、亢禮、亢は高ぶるなり、臣高ぶりて君と對常たらむとするなり、蜂準、高鼻なり、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名なり、響食、輕蔑して虐ぐること、上文の虎狼に應じて食とせしなり、布衣、士庶人の仕へざる者の稱なり、響に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に布の衣を著くるを以て名づく、尉、秦官の名り、常に称の太尉著しくは大將軍の比なり、皆弁、三將 の兵を合併すること、斗食、一日に一斗の栗の秩を受くる賤吏の稱なり、鄴安陽、安陽は横楊の誤なら、

下不,臨、遷勿。奪、育、自今以來操、門,視此秋復、嫪毐舍人遷、蜀者、門,視此秋復、嫪毐舍人遷、蜀者、門,現此、秋復、嫪毐舍人遷、蜀者、

其

胸を備 得べしと、秦王其の計に從ふ、これ 恐る む、我は元より布衣たり、然るに我を遇 を 狼の 對 失ふに過ぎずして、諸侯を を聞さしむべし、此に T 出でむとなり、 與に久しく游ぶべか なば、天下の人皆虜の 自ら我に下れ ては人の下になることを恥 は、高鼻にして長目、鷙鳥の如く前方に突き出でた にせり、線嘗て秦王を評して曰く、秦王の人と爲り 之を覺りて强ひて之を止めて秦國 、敵國の重臣に賂ひ 0 取るの志を得れば亦人を輕蔑して殘虐 等の禮を執りて、衣服食飲に至るまで皆繚 所以なり、故に願 ンは 君 如き心にして 厭き足るこ へて其 と臣との 衆 0 の聲は豺の り、誠に秦王をして志を天下に得し 此 侯が合從の 如し、されど如何に彊大なりと雖、但 れ書日 < らずとて亡げ去ら て其 如く取り扱はれむ、かゝる人と 要する金額は僅 は大王は財物を愛むと無 智伯・夫差・湣王の亡びた 如く、 盡して の秦を伐たむとする 約を結び と思はざれば、若し とを知らず、窮約 恩愛の 秦の より尉繚を見るに 0) 、象つて不意 尉と爲し、卒に 情に乏しく虎 するに常 配下となすを むとす、秦王 三十萬 にすべけ と同 くし に身 天下 に居 0 金を b 8 1-

> に桓齮 朝别 の斗食以 王翦・桓齮・楊端和の三人鄴を攻 翦の L の計策を用ふ、而して て軍に n 將 將軍と為る て関與橑楊を攻む、後皆幷せて一軍と為す、 下の 72 從はしめ るや、軍 功無き者を歸へし、十人の中に二人を の精鋭を貴び、十八日にして軍中 て鄴及び安陽を取りしなり、 李斯其 の事に與る、十一 めて九 城を取る、王 後

T

推

非は其の名なり、尉繚、兵學者なり、以,秦之强,諸侯、なり、恐、威壓なり、おどすなり、韓非、韓の公子なり、 【字解】 方、方今なり、當 なり、夫差は吳の君 韓魏、以圍 王之所,以亡,也、智伯は晉の六卿の筆頭なり、戰國策同盟して秦に當ると、翁、あつまるなり、智伯夫差湣 視 諸侯の上當に視の字あるべし、太平御 南宮なり、索、捜し出すなり、モトムと 0 に「昔者六晉之時、智氏最 風聞なり、倍、反なり、 盟して秦に當ると、翁、あつまるなり、智伯夫差湣の字あり、視は比なり、合從、韓魏 趙燕楚、齊の六國 知る所なり、湣王は齊の 』趙襄子于晉陽、而身死國亡、 にして越王 ソム 時なり、 强、滅n破范·中行氏、又帥n 君なり かと 勾 訓む、甘泉宮、咸陽の 暖 マサニと訓む、名、 1-末に當りて天下 為,天下笑、是 敗 覽之を引きて 訓む、客、説客 られ しと人

下,

り迎へて威揚に入れ、夏十まで、秦に倍かむことを恐るゝなりと、秦 して て日 謀れり、時に大梁の兵學者の尉線來 りて秦大患を免れむとし、公子の韓非と秦を弱め 1= を取 ふの に於て李斯上 1= 國 大王は母太后を雍に遷せるの悪しき風聞 く、今秦の彊大を以て諸侯に比ぶるに、譬へば郡 韓を下さしむ、韓王之を憂ひて、如何にもし りて他の諸侯を恐さむと請ふ、是に於て李斯を 令を止めたり、 中に居る説 かむことを恐るうなりと、秦王乃ち太后を雍 へて咸陽に入れ、復甘泉宮に居らしむ、秦王大 秦は當時天下を幷せ取るを以て事となす、 齊人の茅焦といへる者來りて秦王に說 書して其の非を說く、王 客を索めて之を國外に逐はしむ、 、李斯因のて秦王に説きて先 、此の 一事に由 乃ち説 むことを

車裂して梟首したるものにして、梟首して車裂した 車に繋けて雙方に引裂く刑なり、共に極刑なり、之は の徒刑なり、其の勞役は薪を取りて宗 るに非ず、徇、遍く示すなり、トナフと訓む、鬼薪、今 車、 故に此の名あり、家、住ふなり、 裂、梟は首を木に縣けて晒すこと、車裂は體を雨 廟に給するな

氏,四 彗 月 寒 星 東有死者楊 見完 北方,從,斗

以 南八十日、

間見れたり、 れ、又北方に 將軍 楊端和魏の 四月に至るも寒 見る、而して北斗星より南の方は八十日 行氏を攻む、是歳彗星 西方に見 を寒 凍嚴しくして 死する者あ

爲。年 相 軍,國 齊 呂 趙不 來,章 置坐 酒、廖 免,桓

十年、相國の呂不韋嫪毐の亂に

關係ありと

之大下,請,說,居,王名下,齊 字解】 是蕨齊趙の二君來りたれば置 て罪せられて其の官を免ぜらる、桓齮 恐為人 彊*梁、韓、先。乃甘"乃 諸人韓取,止泉迎。諸事、茅 坐、罪するなり 韓,逐,宮太侯而 焦 侯、尉。王 譬,繚,患。以,客,大后,聞,大說, **家如来**,之,恐,令,索於之,王 秦 而郡說,與他李逐,雍山,有,王山,縣秦韓國,斯客,而此。遷,石、王非於,因,李入、倍。秦太意,君日、謀。是一說,斯咸秦太方。 置酒 酒して之を饗應し 此。臣,以。弱,使。秦上陽。也后,以, 乃但秦秦斯,王書。復秦之天

等毒と 文君とに命じて卒を發して 嫪毐を攻 を、秦王之を前知せしなり、由つて相國の昌平君 發して、將に雍の斬年宮 用ひて縣卒・衞卒・官騎及 せられたり、 を帶ぶ、此の時長信侯の毒謀反を作し る、王直に國中に布合して毒を生なが に及ぶ、首を斬りし者には皆飮を賜ひ、又宦者にし 場に加はれる者にも亦餌 成陽の都に戰ひて大勝し、首を斬 魏の垣・蒲陽の二 そは毒が王の御璽と太后の璽とを偽 を攻めて聞を為 び戎霍の 城を攻む、四 の日に王冠 一級を賜ふ、毒等敗 君公の含人をも徴 めしむ、昌 ら捕 たれども發覺 鴻 月に秦王出 さむとせし ること數百 を行ひ 72 る者 れ走 平 と昌 て劒 君 b で

> はし 國 b 3 1 0 0 あらば之に錢百萬 遷したる者四千餘家あり、此等は皆蜀の房陵に住 、由つて二十人を車裂の刑に處し、其の首を晒 舍人の罪の 人に之を示し、且つ其の宗族を残らず滅し、及び其 竭及び中大夫命の齊等凡て二十人を盡く生捕れ 與へむと、是に於て毒等衞尉 めたり 輕き者を徒 を賜ひ、之を殺さば 刑と為す、又位を奪ひ の竭・内史の肆・佐戈 五十萬の て蜀 L T

を守る者、衞尉・內史・佐弋・中大夫合、皆秦官なり、梟虎なり、巓年宮、雍に在り、宦者、男勢を去られて宮門り、璽は印信なり、天子の璽は白玉にして其の鈕は螭 服·飲食 偽り用ふるなり、タムと訓む、御璽、御は進むなり、衣 冠禮也、禮記には年二十而冠とあり、 語にして自ら其本朝の君を尊びて稱すべき也、 惠文王昭襄王共に二十二歳にして冠禮を行へり、矯、 らくは秦史の元文を未だ改易せざるものならむ、冠、 に今太史公秦王を稱して上と為すは謬に似たり、恐 (字解) 十二なり、秦は必しも周禮に據らざる者にや、先の ・車馬等凡て天子に進む 上、秦王を指す、按ずるに上は尊者を尊 る物に添ふる語な 而るに秦王今年 3 m

令。 嫪涛 馳 いふ、重馬、重は大なり、重馬は獪肥馬 事封為,長信侯子,之 以河西太 獵、 、恣毒、事 河魚大上、河水溢れて魚の平地に上りしを 無,大 室 本郡,更為 山陽 **毐**, 決。 國、於 と云ふに 服 苑 同じ、 地, 毒- 囿

字解】 苑囿、苑は禽獸を養ふ所なり、囿は苑に垣あ

事、政事なり、

九年、彗星見、或竟天、

【字解】 竟、窮るなり、ワタルと訓む、ことあり、

走、皆 咸 國 欲及 矯、王 攻。 王,冠、魏, 攻。如 陽事率衛 在心 帶,垣。 御 中,首,君亦數昌 璽 國 陽。四 宫, 騎 長 及 拜。百<u>文</u>君。 晋 者, 百文為我 翟 雅 强 王 君 太信 月上 侯 翟,后, 璽, 声 晉, 卒, 知, 公, 化, 宿, 及, 文, 全, 發, 亂, 雍, 它, 声, 令, 人, 縣, 而, 已 者, 戰, 相, 齊, 聲, 暫, 敗

【字解】 壽陵、本趙邑なりしが、當時秦の領有たりし、「字解」 壽陵、本趙邑なりしが、當時秦の領有たりし、其君角、其なり、故」衞、衞を拔か むと欲す の意なり、其君角、其

慶都、還兵、攻、及、彗星復見。西方、将軍鰲死、以、攻、龍・孤・七年、彗星先出。東方、見、北方、五七年、彗星先出。東方、見、北方、五七年、彗星先出。東方、見、北方、五

十六日、夏太后死、

じぬ、 と年、彗星先 づ東方 に出で、次 に北方 に見屋都の三地を攻めて還 れる兵を以て 復汲を攻む、彗慶都の三地を攻めて還 れる兵を以て 復汲を攻む、彗星復西方に見るゝ こと十六日 に及ぶ、是蔵夏太后薨

【字解】彗星、はゝきぼし、汲、年表には及に作れり、

夏太后、莊襄王の母なり、

部 反 观 屯 留 軍 吏 皆 斬 死 遷 其 趙 反 死 屯 留 軍 吏 皆 斬 死 遷 其 趙 反 死 屯 留 蒲 華 吏 皆 斬 死 遷 其

河魚大上、輕車重馬、東就食、

酸, 天天下疫、百姓內、栗千石、拜 級,

爵

の歳に 取り立てたり、 なれる太子は出でて其の國に歸れり、十月の庚寅の 取る、將軍王齮死にぬ、十月に將軍豪驁魏氏の暢有詭首三萬級を斬る、三年、豪驁韓を攻めて其の十三城を 氣候の變態なるにや、是蔵天下に惡疫流行せり、秦是 **暘有詭を扱き取りたれば三月に至りて其の軍退きた** を攻む、是巌五穀寶らずして大いに饑ゑたり、四年、 講義」二年、麃公兵卒を率ゐて卷を攻め、善戰して 、秦の質子は趙より歸り、趙より秦に來りて質子と に蝗蟲東方より飛び來りて秦の天を蔽ふ、かゝる 始めて百姓の栗千石を獻納したる者を公士に

やりやまひ、内、納なり、上納なり、イル、と訓む、欝なす蟲なり、いなご、いなむしなり、疫、惡病なり、は 月、表には七月に作れり、是なり、蝗、稻を食ひて災を 【字解】 將、率のるなり、罷、止むなり、退くなり、十 級、秦鶴の最下級の公士なり、

> 五 長平·雍丘·山 年、將 城初置東郡多雷、 軍 驁 陽城、皆拔之、取二 攻魏、定酸 東流 虚

【講義】五年、將軍蒙驁魏を攻めて其の酸棗の地を 凡て二十城を奪ひ取り、初めて此に東郡を設置せり、 平定し、又燕虚・長平・雍丘・山陽の諸城をも皆拔きて 此の冬雷鳴ありたり、

阻,其山,以保,魏之河内, 郡,其君角、率,其支屬、徙居 陵,秦出,兵、五國兵罷、拔海 六年、韓·魏·趙·衞·楚 屬、徙居野

對すれば、五國の兵懼れて退きぬ、秦兵勢に乗じて衞 を抜かむとして東郡に肉迫す、衞君其 て其の壽陵の邑を取る、秦是に於て兵を出して之に を知り、其の支屬を率ゐて徙りて野王の地に居り、野 講義」六年、韓・魏・趙・衞・楚の五國、共に秦を撃ち の敵に

子に非ず、呂不韋傳に詳なり、呂不韋姬、姬、は婦

は二十六年の條を見るべし、莊襄王子、實は莊襄王の【字解】 始皇帝、第一世の皇帝といふに同じ、詳しきしたれば、元年に將軍豪驁撃ちて之を平定せり、 **拜合し、宛を越えて楚の郢を有ちて南郡を置き、北の** 下を拜吞せむと欲し、李斯を含人と爲し、蒙驁•王齮•信侯と號し、天下より 賓客游説の士 を招き寄せて天 當時は秦の領域廣まりて、南の方は已に巴蜀漢中を 莊襄王死にぬ、因つて政代り立ちて秦王と爲る、是の 昭王の四十八年正月邯鄲に生れたり、生るゝに及び を悦びて妻と為し始皇を生みしなり、始皇帝は秦の きたれば國政は一に大臣に委任せり、是の厳晉陽反 を置けり、又呂不韋を丞相と為し、十萬戶に封じて文 有し、東の方は滎陽に至り東西二周を滅して三川郡 方は上郡以東を收めて、河東・太原・上黨の三郡を弁 て政と名づけたり、姓は趙氏なり、年十三歳の時父の まだ若かりし時秦の爲に趙に人質となりて其都の 公等を將軍と為せり、王年少くして初めて位に即 に居たりき、其折呂不韋の家に居りし美女を見、之 秦の始皇帝は秦の莊襄王 の子なり、莊襄王

歸。軍 三年、蒙驁攻韓、取、十三城、王二年、麃公將、卒攻卷、斬首三 罷、秦, 月庚 寅、蝗 歸, 趙、趙、趙 赐有 攻魏 **詭**三 氏, 明 來,出,月 萬 有

趙城為趙氏、

【字解】 以、國為、姓、司馬遷常に姓氏を混合せり、此時始めて姓を嬴と賜はりたり、即ち徐氏・郯氏・彦庶氏・終黎氏・蓮奄氏・莱裘氏・將梁氏・黄氏・江氏・修魚氏・終黎氏・蓮奄氏・ 薬裘氏・將梁氏・黄氏・江氏・修魚氏・終黎氏・蓮世られて 時めきしこ とありしかば、一次が趙城に封世られて 時めきしこ とありしかば、一次の者趙氏を冒せし〉ことありき、

人名にして終黎・嘉裘は邑名なり、に姓と爲すと雄、其の擧ぐる所悉く國に非ず、即ち蜚廉はに姓と爲すとは其の實は氏なり、而して國を以て姓、字解』以、國爲、姓、司馬遷常に姓氏を混合せり、此

秦始皇本紀第六

襄王爲秦質子於趙見呂不韋秦始皇帝者秦莊襄王子也莊

初, 整, 士, 萬周, 東置, 秦, 王名, 四 欲、戶置、太南地、死為、十 上矣并。代,姓、年 委、熙。并,日,川 國公天文 郡。黨北。巴立。趙正 呂 擊事等 郡,收入蜀 為。氏月,生。 下,信 東上漢 李侯、不 秦年 定、大為。 生。始 招 至。郡中,王,十 韋 之,臣,將 斯 軍為致為榮以越當三腳 相, 陽, 東, 宛, 是 歲 賓 鄲.秦 舍 封,滅,有,有,之莊及。昭十二河郢時。襄生。王 年 人。客 元少家游游

卒しぬ、子の政立つ、是を秦の始皇帝と為す、敗し、其の軍を解きて去りぬ、五月丙午の日に莊襄王五國の精兵に破られ 河内より 河外に退卻し、遂に大

房。三十六郡、號為。始皇帝、始皇帝、五十一年而崩、子胡亥立、是 秦、趙高毅。二世、立。子以。 秦、趙高毅。二世、立。子以。 秦、趙高毅。二世、立。子以。 秦、趙高毅。二世、立。子以。 秦、五十一年而崩、子胡亥立、是 秦、五十一年而崩、子胡亥立、是 秦、五十二年、諸侯竝起叛。 秦、五十二年、帝、始皇帝、始皇 秦、始皇帝、始皇帝、始皇帝、始皇

始皇本紀中、

一年當に五十年に作るべし、 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位 「字解」五十一年、始皇十三年にして位に即き、在位

氏·黄 氏·終 分。太 氏·秦氏、然上、 封美公 黎 以國為姓、有。徐 公日、秦之先、為 三 氏·運 秦、修 奄 氏·菟 以,魚 氏·白 氏。郯氏、其後 裘 誠 氏·將 冥 父# 氏 其

卽 5 庶 民 に自由を興 へて之 を愛撫するの

魏,蒙界祀,其、呂東 功莊 臣,襄 德,元 罪 民王

盂高 整,至,使,祀,不周, 取。都攻,大蒙以,章,君 文. 三 汲. 趙, 梁. 鰲, 陽 誅. 與 上十拔。定初,伐,人之,諸厚。年。黨,七之,太置,韓,地,盡,侯骨大 初城,攻原,三 韓賜、入、謀、肉、 三川獻周其秦而 置。四趙, 太月、榆年郡,成君。國,秦布,人,原日次蒙二皇奉秦、使惠,修郡,食新鰲年。鞏,其不相於先 四城攻使秦祭絕。國

將 河 襄 外 王 忌 卒、鰲 卒、 政解。國, 立。而兵, 是,去、擊。 爲。五秦。 秦 秦月、丙 卻。

布く、東周の君諸侯と秦を亡さむと謀る、秦之を知臣に夫々恩賞を與へ、厚德を骨肉に施 し恩惠 を民【講義】 莊襄王元年に 大いに罪 人を赦し、先王の一帝、 人の地を周君の後に賜ひて其祭祀を繼がしむ、蒙驁國を秦に入る、されど其の周祀を絶 たしめずして陽相國の呂不韋をして東周の君を 誅せしめ、盡く其の 乾上黨を攻め、初て太原郡を置く、魏の將無忌は 汲の二地を攻めて之を拔き、又趙の楡次・新城・狼孟 趙を攻めしめて太原を平定す、三年に蒙驁魏の 至る、因つて初めて三川郡を置く、二年に蒙驁をして 帝,莊 を攻めて三十七城を取る、四月に日蝕あり、四年に王 を請ふ、是に於て秦の をして韓を伐たしむ、韓は成阜・鞏の二地を献じて和 ・楚・魏の五國の兵を率ねて秦を撃つ、秦の蒙驁 領域は 東の方魏の大梁にまで 高都 午於

從、合從なり、三十六城、城の字恐らくは衎ならむ、周首廣、斬首と捕虜となり、西周君、西周の武公なり、 紀 ふ、來賓、來朝して賓服するをいふ、郊見、天を祀りて なり、河橋、黄河に架する橋なり、負黍、亭の名な として來りて弔餅を呈して喪事に與らしめたり 著けて入りて弔辭を申す、諸侯は皆其 て唐太后と稱し、昭襄王と合葬す、韓王衰経の喪服王卒しぬ、子の孝文王立つ、孝文王母の唐八子を尊 り見えて天下に王た るを告ぐ、五十六年の秋 に委ねて其 韓王入朝す、魏も亦勢の趨く所を察して遂に國を秦 軍摎をして魏を伐たしむ、摎魏を伐ちて吳城を取る、 字解 には之無し、器九鼎、器は實器なり、九鼎は夏殷 に鑄て、各九州の物を象りし 九枚の 傳はれる天子の クサスと訓む、流..死河、死は尸なり、河は汾河、稱なり、即ち士 分の仲 間の意なり、軍、戰ふな に來りて 黄金を貢 士伍、餌ある者の罪によりて之を奪はれた 令を聽く、五十四 がしめ、之にて九つの鼎を 寶器なり、即ち夏の b 年に昭 後れ なり、故に九鼎とい たり、 禹 の將相を使者 の時九州 秦よつて將 喪服を 荆山 雅 3 よ 0) 周 【字解】

先王、父の昭王を指す、衰経、衰等あり、而して八子は秩千石に 臣 きて、昭儀より以下其の秩百石に至 り、唐は姓にして八子は妾媵の號なり、即ち皇后を除 は首と腰とに著くる麻なり、視、其 帝に見えむとするをいふ、唐八子、孝文王の生 文 元 親 年、赦 衰經、衰は貴布の喪服なり、経 苑 囿 して中更の官に比す 孝 の事 日 るまで凡て十四 先 文 に與るなり、 王 卒;除* 母

三日 朔に即位の式を擧げ、三日の辛丑に卒しぬ、在位僅に を弛めて民を撫す、孝文王父の喪を除 「講義」 夫恩賞を 與 間 なりき、子の莊襄王立つ、 修。先王功臣、先王は昭王を指す、昭王 孝文王元年に罪人 へ、又親戚を ほ めてあつくし、苑囿 を赦し、先王の き、十 功臣 月己 0)

禁 夫

臣に夫々恩賞を與ふること、弛,,苑園

、苑囿

の禁を

弛 功 弔 經、太 卒、上 魏 秦 初、年、秦 祠、入、后、子、帝、委、使、亡、周 王 视、弔 而 孝 於 國、摎、五、民 受、 罪,西 受。獻、西 東。獻,其, 亡,歸,邑 器 君, 自, 於 九 鼎 周-城 賓、入心 Ŧi. 秦一十 萬,受, 見、朝、後、周 3

密城に遷さる、張唐鄭を攻めて之を拔く、十 五十年の十月に武安君白 起罪あらて士伍と

皆

其王 葬,立,

五

年

四

王

郊

秋年韓來

尊。六

子、照為、寒

王

是に於て周室初めて亡びたり、五十三年に天下の諸 に亡げぬ、而して西周の寶器九鼎は幷に秦に入れり、 奔る、其後二月餘を經て晉軍を攻めて首六千を斬る、 む、五十二年に周の民秦に從ふことを愧むて東の方 とを獻す、秦王其の獻物を受け、武公を西周に歸らし めしむ、西周の武公走り來りて自ら秦に歸服し、頓首 し、天下の鋭兵を奉ゐて伊闕を出でて西の方秦を攻 九萬人に達す、西周の武公秦に背き、諸侯と合從を約 斬る、又趙を攻めて二十餘縣を取り、斬首捕虜合し 將軍摎は韓を攻めて陽城の負黍亭を取り、首 四萬を陽と名づく、是厳始めて黄河に橋を架す、五十一年に り、張唐王齕遂に汾城を攻め取る、齕は即ち唐に從 晉楚の軍敗れて 死尸を 汾河 に流すと 二萬人に及べ 拔かれざるを以て、去りて還つて汾城の張唐の軍に 罪ありて遂に死を賜ふ、王齕趙の なからしむ、是に於 め、秦をして再び韓の陽城に通ずることを得ること て趙の寧新中の邑を拔く、秦乃ち寧 新中を更めて安 一月に盆、兵卒を發して汾城の て其の罪を受け、盡く其の邑三十六と其の民三萬 て秦も亦將軍摎をして西周 旁に 邯 戦ふ、 戦を攻むれ 武 安君 を攻 ども 白 起

聽,伐,十

令,魏,三 五,取,年,天

城,

王

入。魏

其

の歳の十月なり、歳首

の十月に區別せり、

卿となれる者、中更、秦官の名、十月、秦の歳首なり、【字解】 免臣、免官の臣、客卿、他國より來り仕へて

後に九月と書す、葉陽、一に華陽に作る、公子悝、

乾代りて將と為る、其の歳の十月に將軍張唐魏を攻 馬 攻 の正月に益、兵卒を發して陵を佐けしかど、陵の は兵に將として趙の武安皮牢を伐ちて之を拔き、 ず、秦軍分れて三軍と爲る、武安君趙より歸る、王齕 て秦更に武安君白起をして之を援けしむ、白起大學 あらず、故に還りて之を斬罪に處せり、 の十月に五大夫の陵は趙の邯鄲を攻む、四十九年 、正月に兵漸く罷みぬれば、復上黨を守備す、其の 梗は北の方太原を平定して盡く韓の上黨を領有 、此の時蔡尉が要塞を捐てゝ守備せざりしかば戰 て撃ちて大に趙を長平に破り、趙の四十餘萬人を かっ の作戰の善からざりしかば、之を免す、由つて王 殺せり、四十八年の蔵首に韓は垣と雅城とを獻 むとし、未だ行付か 、趙も亦兵を發して秦軍を撃ちて相距ぐ、是に於 に降れり、秦因 死 2 つて 年に 即即

得天萬四將通下西萬軍 更,汾首,去,君十爲,五 名,城,六 還,白 安 双,廖安郎千、趙,攻陽、從,晉 奔。起月。伍、 周, 汾,有,益、 於,出,背,取,韓,初,唐楚軍罪發。陰是即秦二取,作,拔,流,二死。卒,密秦闕,與十陽河寧死,月齕。軍張 新河。餘改治汾中,二攻,邯城 橋, 使 攻, 將 秦, 諸 餘 新 城 縣,負,五 秦,侯 城, 攻自 黍十 李 萬 令。約。首 晋 鄲,旁、鄭,起 缪*秦,從,廣 新 人軍,不 拔,有, 首,年中,攻斯、拔、安之,罪 攻, 毋, 将, 九

黨。盡。安三八於距。降。死,十之,首,年 其,有,皮軍,年長秦趙四城,四 十韓,年,武十平,使秦十葉十 四武因、七陽五 月上拔。安月 五黨,之,君韓十安攻军君年十白 大正司歸獻餘君趙,秦悝五 夫月馬王垣萬白趙攻出大年攻 陵兵梗。齕。雍,盡。起,發。韓,之。夫,攻、韓, 文。能、北、將、秦 殺、擊、兵、上 國 賁 韓 拔。 趙、復定、伐軍之、大擊、黨、未、攻南九 邯 守。太 趙 分。四 破。秦,上 至。韓,郡。城, 鄲,上原,武為,十趙,相黨而取。取。斬。

改。免。年、 魏,王 正 爲。齕"月 蔡代。盆

三十五年に韓・魏・楚の三國を佐けて 燕を伐つ、初めて南陽郡を置く、三十六年に客卿の竈兵に 將と なりて 南陽郡を置く、三十六年に中東の胡傷趙の閼與を攻むれども之を取ると能はざりき、四十年に悼太子魏に於て死にぬ、歸りて 世陽に 葬る、四十一年の 夏魏を攻めて 邢丘・懐を取る、四十二年に安國君を太子と為す、正月に宣太后薨じぬ、並陽の酈山に葬る、九月に穰侯出でて其封地の じぬ、並陽の酈山に葬る、九月に穰侯出でて其封地の に行く、四十三年に 武安君自起韓を攻めて 邢丘・懐を取る、四十二年に韓・魏・楚の三國を佐けて 燕を伐つ、初め 三十五年に韓・魏・楚の三國を佐一郡と爲し、南陽の発官の臣を選 斯。軍 戰 四 を攻めて之を取る、四十 めて十城を取る、葉陽 之,張不,十 為し、南陽の発官の臣を遷して之に居らしむ、 三十 唐善,九 四年に秦は魏に 五年に五大 捐,其卒, 大夫の 庸の 弗,十 佐,守,月 陵, 賁 地を與 は又、韓の は 還,將 陵, 韓

を斬ること十五萬の多きに達す、是に於て 魏又南陽攻江南を取り、又芒卵を華陽に撃ちて之を破り、首な敗走し、魏は三縣を秦に入れて和平を請ふ、三十三年に客卿の胡傷兵に將となり、魏の 卷・蔡陽・長社をす、三十年に蜀郡の守の張若といふ者伐ちて 巫郡及び江南を取り、又芒卵を養房、三十一年に 自起は魏び江南を取り、又芒卵を養房、三十一年に 自起は魏び江南を取り、至明を華陽に撃ちて之を破り、三十二年に客卿の胡傷兵に將となり、魏の 巻・蔡陽・長社をす、三十年に蜀郡の守の張若といふ者伐ちて 巫郡及ず、三十年に蜀郡の守の張若といふ者伐ちて 巫郡及ず、三十年に蜀郡の守の張若といふ者伐ちて 巫郡及ず、三十年に蜀郡の守の張若といふ者伐ちて 巫郡及前す、王楚王と襄陵に會す、自起を封じて武安君と為朝す、王楚王と襄陵に會す、自起を封じて武安君と為

の孟卯なり、華陽、亭の名なり、れるをいふ、蜀守若、蜀郡の守の張若なり、芒卯、魏將り、野、楚の都なり、楚王走、楚の頃襄王の陳に亡げ走り、郢、楚の都なり、楚王走、楚の頃襄王の陳に亡げ走尉斯離、尉は都尉なり、斯離は名なり、大梁、魏の都な

年、佐韓 爲。魏,死趙,予,三 十六 穰 魏 郡、南 関で 與不能 侯二 那 年、客 葬。芷 免 伐燕 臣,與 取八八 卿 太 年 籠" 居。韓,之上上 攻,齊, 十年、悼 中 更 庸 年、夏 取。 胡 剛 攻:壽, 攻子 郡,五

五

b 3 取 年に城陽君入朝し、又東周の君來朝す、秦往年魏より 行く、二十一年に司馬錯魏 3 性を鄧に魏冉を陶に「封じて各、諸侯たらしむ、十七 る、魏冉病を以て宰相を免せらる、公子市を宛に公子 東の安邑を獻じて和を請ふ、秦安邑の魏民を出 講義】十六年に左更の司馬錯魏邑の軹及び鄧を取 行く n 九年に昭王は西帝と稱し、齊の湣王は東帝と稱すい りたる垣の地を改めて蒲坂皮氏と為す、王宜陽郡 たれば、司馬錯復垣・河雅・決橋を攻めて之を取る、 5 八十八年に蒲坂皮氏復魏 に 歸して故の垣とな ね、二十年に王漢中郡に行き、又上郡の北 月餘の後皆帝號を去りて復王と爲る、呂禮來 秦に歸服す、齊の師宋を破りしかば、宋王 逃れ、遂に魏の溫に死にぬ、是巌漢中郡守任 の河内 を攻めしか 河 河 奔

爲す、是に於て楚の頃襄王亡げて陳に

走る、周

君來

て之に遷す、白起趙を攻めて代の光復城を取る、又司十七年に司馬針男を取る、八司 河 其 は 中を攻めしめて之を拔く、二十八年に を赦して新明邑に遷せり、穰侯魏冉後宰相と爲る、 新城に會し、魏王と新明邑に會す、明二十六年に罪人 相 2 會し、韓の釐王と新城に會す、二十四年に楚の頃襄王 に齊を伐ちて之を濟西に破る、王魏の昭王と宜陽に 陽 至る、燕趙之を救ひしかば秦軍退却す、是歳魏 住せしむ、二十九年に大良造の白起は楚 那に會し、又穣に會す、秦魏の安城を取りて大梁 楚を攻めて鄢鄧を取り、罪人を赦し に會す、二十三年に都尉の斯雕と三晉及び燕と俱 東を分ちて九縣と為す、楚王と宛に會し、趙王と中 後へ秦民を募りて河東へ移住させ、之に恩賞 公士といふ館を賜ひ、又罪人を赦して之に遷した 、涇陽君宛に封ぜらる、二十二年に蒙武齊を伐つ、 都の野を取り、更に東して竟陵 位を退く、二十五年に趙の二城を抜き、王韓 * 大良造 攻め T 此の を 兩地 。由復字 南 とし

歳楚に粟五萬石を予ふ、十三年に向壽は韓を伐ちでの官を免ぜられしかば、穰侯魏冉代りて相と爲る、是 趙之を禮遇せざれば、還りて秦に行き、遂に秦に死に は 四年に左更の白起は韓魏を伊闕に攻め、首を斬るこ 武始の地を取り、左更の白起は新城を攻め、五大夫の ぬ、由つて屍を整に歸して葬る、十二年に樓緩亦丞相 て和解す、彗星亦見 て還る、秦是に於て韓魏に河北及び封陵の地を與へ 魏·趙·宋·中山 遠す、又楚を攻めて宛を取れり、 は出亡して魏に奔り、任鄙は漢中の郡守と爲る、十 れたるを以て樓緩を丞相と為す、十一年に齊。韓・ 大良造の白起は魏を攻めて 垣を取り、復之を返十四萬人、公孫喜を虜にして五城を抜きぬ、十五 の五國聯合して秦を攻め、鹽氏に至り る、楚の懐王出奔して趙に行く む、薛文は金受が丞相 の官を奪

新市唐昧、皆楚の地名なり、中山、國の名なり、金受、なり、上庸、韓の地名なり、蒲坂、魏の地名なり、新城なり、上庸、韓の地名なり、萧坂、魏の地名なり、黄棘、楚の地名る、故にいふ、彗星、はいきばしなり、良死、天命を終る、故にいふ、彗星、はいきばしなり、良死、天命を終る、故にいふ、彗星、はいきばしなり、最死、天命を終る、故にいふ、彗星、はいきばしなり、蜀の嚴道縣に 封 ぜら

秦の丞相の名なり、免、免官なり、即ち丞相の宮を奪と、今は正義の説に、後ふ、齊・韓・魏・趙・宋・中山・五と、今は正義の説に從ふ、齊・韓・魏・趙・宋・中山・五と、今は正義の説に從ふ、齊・韓・魏・趙・宋・中山・五と、今は正義の説に從ふ、齊・韓・魏・趙・宋・中山・五と、今は正義の説に発いる、一説に秦の丞相に金受といふ者此紀はれしをいふ、一説に秦の丞相に金受といふ者此紀はれしをいふ、一説に秦の丞相に金受といふ者此紀はれしをいふ、一説に秦の丞相に金受といふ者此紀はれしをいる。

亡,左萬緩受,和。而 二左 之,年十更,奔,更,石,免,還,彗 攻,大四白魏白十穰之,星 還。宋 楚,良萬起任起、三侯秦見,與山取,造,廣、攻,鄙、攻,年。魏郎楚,韓五 韓為、新向,冉 宛, 白公 死懷 城,壽、爲。歸,王 魏,漢 河 攻,喜,於中,五伐,相、葬,走,北攻, 魏,拔,伊守、大韓、予,十之,及秦,年 取,五闕十夫,取、楚二趙封至,齊 垣,城,斬。四 年.趙陵,鹽 禮、武粟 復十首,年出始,五樓不以,氏。魏

の公公 來りて秦に 亡げて齊に 唐 を攻めて新市の地を取らしむ、此の時齊は章子 く、同年宰相樗里子卒しぬ、八年に將軍羊戎をして日蝕ありて晝も尚晦かりき、七年に新城を伐ちて と二萬人に及ぶ、涇陽君齊に至りて人質と爲る、是歲錯行きて之を定む、庶長奠は楚を伐ちて 首を斬るこ の地を與ふ、六年に蜀侯の煇反亂を企てしかば、司馬る、五年に魏の哀王應亭に來朝せしかば、復之に蒲坂 庸の地を與ふ、四年に魏の蒲坂を取る、是蔵又彗星見 に王冠禮を行ふ、是蔵楚の懷王と黃棘に會し、楚に き、悼武王后は子無きを以て出でて復魏に歸る、三 文后にまで及ぶ、由つて皆天命を終ること能はざ 公子等と反逆を爲して皆誅せらる、而して 味を取らしむ、趙は中山國を破りしかば中山公孫喜を韓は暴薦をして共に楚の方城を攻 り、其の將景快を殺 子長 魏に之く、二年に彗星見る、庶長壯と と同 相たり、庶長奥は楚を攻め 至り、つひに齊に死にぬ、魏の 時に諸侯と爲る、九 しぬ、十年に整の 年 び子勁は中山 其の 其の 大臣 嘗 3 諸 酵さとの 拔

燕に人質となりて彼の 氏なり、 魏惠王、惠王は哀王の誤なり、歸したれば位に立つことを得 宣太后と號す、武王の死ぬ さて昭 は 0 時 死 昭 * 聞

八孟公昧。喜,楚,梅質焦坂,五與, 趙韓、取,里於長六年楚 朝,城,嘗子 秦殺君勁破使新子齊與年魏 秦其。薛。韓,中暴。市,卒。日伐,蜀王 將 文 公 山, 蔦, 齊、八 食, 楚, 侯 來 留景來,子其共使年書,新輝朝年 之,快,相,長君攻章使晦。首,反應 薛十秦爲,亡,楚,子,將七二章司 文年。與諸竟方魏。軍年萬馬復坂, 以,楚, 攻, 侯, 死, 城, 使, 羊, 拔, 涇 錯, 與, 彗 金懷楚,九齊取公戎,新陽定魏星 受"王取,年。魏唐、孫攻、城,君蜀,蒲見、

號、為、取、絕、孟 武六長 周 甘南 魏,臏,說, 王 萬 封,室,茂。公 女,八皆 涉,伐,死 有, 河,宜 王、爲、月、至、力、 大好城。陽;恨、人 后、武 官。戲,武 王,襄,無。王 死。母、子、死、王 力 時、楚 立。族、與 土 任 以 人、異 孟 任 逐年、其。容 力 立,昭人異 太宜使通。 說,說。鄙 子 陽, 王羊弟,武墨。鳥 來 斯·茂 爲,氏,是,王鼎,獲朝、首,庶

娶りて后と爲しゝかど子無し、故に異母弟を立つ、是 伐 0 王 渡りて韓の武遂の邑に城く、魏の太子來朝す、さて ばなり、四年に宜陽を拔き首を斬ると六萬人、黄河 1-は 為 めて丞相の官を置く、韓里疾と甘茂と左右の丞相と 室を滅して己れ天下を取らむとするの下心な 1 者卒しぬ、韓里疾去りて韓に相たり、武王甘茂に謂 でて魏に之く、 しを以て孟説の一族を處刑 月に武王死にぬ、孟説と俱にしてかいる災害。鼎を撃げんとして過ちて膝蓋骨を断ち、之が 任鄙・烏獲・孟說等皆大官に任ぜらる、王嘗て は大力あるを以て力競べの戲を好 韓の三川の地を通過し周の王室の模様をうか たしむ、是れ宜陽を陷れなば三川の路自ら通ずれ 其の秋に至り甘茂と庶長の封とをして韓の宜陽を ん、此れだに出來なば死ぬるとも恨まじと、是れ周 曰く、寡人豫てより思へるとあり、そは戎車を牽わ る、去年魏に行きし張儀は彼の國に於て死にぬ、三 韓の襄王と臨晉城外に會す、是歲南公揚といふ 又我の義渠・丹・犂を伐つ、二年に した めり、故に り、放 孟說 初

ちて戎の義渠の二十五城を取る、十一年 に 韓里疾魏章を取り、又伐ちて趙の將軍泥といふ者を敗り、又伐 0) す、三年に韓 の公子通蜀に封ぜらる、燕の君其位を其 ること 討伐して趙の中都と西陽との二地を奪 に相たり、九年に司馬錯蜀を伐ちて之を滅したり、又 て首を斬ること八萬二千に達せり、八年に を虜にし、趙の公子渴・韓の太子與の軍をも敗り、 と與に韓の修魚に戰はしむ、秦軍勝を得て韓將申差 秦を攻む、秦是に於て庶長の疾とい 燕・齊の五箇國合從して匈奴の兵を りて魏の相と爲る、五年に惠文王游び 焦を攻めて之を降し、又韓を岸門に敗りて首を斬 ふ者に譲る、十二年に惠文王は梁王と臨晉に會し、 韓の太子蒼來りて人質となる、是歳伐ちて韓の石 至る、七年に樂池秦に入りて相 楚に相たり、十三年に庶長章は楚を 丹陽に撃 疾は趙を攻めて趙の將の莊を虜にし、張儀は の屈匄を虜にし、首を斬ると八萬に達す、又禁 萬に及ぶ、此の時其の將の犀首敗走せり 太子來 朝 と為 是の ふ者をして五國 も併せ率 歲張 3 て戎地 ひ取る、十年 臣の子之と 、韓·趙·魏 張儀復秦 十の共に 0 秦を去 北河 凡 韓 相 郡 0

に此の五字上文の降之の下に在るべしと、丹犂、戎の邑、韓の邑名なり、其將、韓將なり、其將犀首走、一説【字解】 齧桑、魏の地名なり、北河、戎の地名なり、修 を助けて北方燕を攻めしむ、十四年に秦軍楚を伐 即ち陳壯のことなり、賓從、服從に同じ、 二國の名なり、相壯、相は宰相なり、壯は其の名なり、 て召陵を取る、是巌戎の丹犂二國蜀に臣伏す、蜀の 武王立つ、韓魏齊楚越の五國皆來りて服從す の壯蜀侯を殺して秦に來り降る、惠文王卒し を助けて東方齊を攻め 漢 を設置す、楚は韓の雍氏を圍む、秦は庶長 中 を攻め地 を取 ると六百 しめ、又別に到滿をし 里に及 ぶ、因 大族をし つて 漢 E 子 宰 ち

伐。 蜀, 里 疾·甘 相, 壯, ·丹·犂、二 張 年、與魏 儀 爲 魏 章、皆 惠 東 置, 派 張 梅*

U 般には清祀 祖先 ひ、周 を祭る禮 夏

義伐中九首,申秦秦五三二 渠,取,都年,八差,使,韓年年年 二韓西司萬敗,庶趙王韓張 十石陽馬二趙長魏游魏儀 五章,十錯千公疾,燕至太與流域,伐。年、伐。八子與齊北子齊北子齊北子齊北子齊北子齊北子齊北子齊。十敗、韓、蜀,年、湯、戰、帥、河、來楚、魏の地 趙、太滅、張韓、修匈七朝、大 年,将,子之,儀太魚奴,年張臣 **棒** 泥,蒼 伐,復 子 虜 共 樂,儀 會。 里伐乘水取。相。奂"其攻"池。相。器"蜡 疾取、質地秦斯將秦相魏桑

王相,十助、漢萬楚,莊,王君其、攻 立。壯四韓,中又於張會、讓、將 殺。年 而 郡, 攻, 丹 儀 臨其 犀 魏蜀伐,東,楚楚,陽。相,晉。臣,首降。 齊侯,楚,攻、圍、漢廣、楚、庶子走、之, 楚來,取。齊,雍中,其,十長之公敗, 降。召到氏,取,将、三疾十子 越 皆 惠陵,满、楚地,屈年攻、二 通 賓王丹助。使六匄。庶趙,年封門 從、卒、犂、魏、庶百斬、長廣王於斬、 子,臣,攻,長里首,章趙,與蜀首, 武蜀燕疾,置。八擊,將梁燕

更、儀、戊夏曲十降、取、萬 爲、伐,午陽、沃,五之,汾 義 縣, 十陰 年_ 年、張 出。爲。年。君 氏, 與 其王,初,爲,年 臘、臣、縣、相、魏 十更義素 魏、三年四使,四 會。九 少 歸、納、應。年 梁,魏上 年。張 月 日,焦 郡

行ふ、四年に天子文王武王に祭りたる肉を願ち賜 年に天子賀す、三年に王蔵二十になりしか ば冠禮 人の公孫行とい 齊の威王魏の惠王始めて王號を 惠文王元年に楚韓 へる者犀首の官より大良造と為 趙蜀 の四 國 稱す、五年に陰 來朝せり、二

取。魏

人,韓

行 變更して夏陽といふ、十二年に秦初め 東 元年と 3 F び 1-秦 1= 革, 3 せられたるを以て秦の臣と爲る、又少梁 曲 會見す、 0 、六年に魏より ふ、十三年四月戊午の日 戎の義渠の地を縣と為す、 に宰相たり、魏又上郡の十五縣を 爲る、是歲張儀をし す、八年に魏又河西の 、汾陰と皮氏との二地 め、其の住民を 沃 將の龍賈を虜にし、 の二地を魏に歸す、義渠の君其の地 為す、是れ改 又魏の焦城を圍みて之を 元 出 て魏 0 地を納る 初 7 の陝の地を伐ちて之 を を め 年 魏に與ふ、十 奪取 な 襲に取りたる 斬るこ 地 公子がれ b 、九年に 降す 秦に納る、 魏の て臘祭 四年に一 八萬の多 惠 河 ちて之を取 所の と戦 0) を 年 E 更 0) 地 名を緊 ひて めて 亦 張

訓む、文武、文王武王なり、齊魏ふなり、年二十にして冠するは 應、國の名なり、焦、魏の地惠王なり、犀首、官名なり 、國の名なり、焦、魏の地名 君 の字は 汾陰·皮氏、一 E 0) 誤 なり、冠、冠禮を行 、齊の 一地の名なり、 カン 0) 威王 ムリスと 國名な

亡,孝因,公 其傅 以, 怨.人 鞅,治,黥,鞅,及,黥,

り、たま~太子法禁を犯せり、鞅曰く、さて 法の行秦の為に新法を施すや、其の法一向に行はれざる なて子の惠文君立つ、是の歳に秦衞鞅を誅す、鞅の初め 年に衞鞅魏を撃ちて魏の公子卬を虜にす、秦鞅を商【講義】 二十一年に齊の軍魏を馬陵に 敗る、二十二 ずとて其のおもり役を墨刑にす、是に於て 天下其の 天下に示すべし、されど太子をば墨刑に爲すべから ず吾が立てたる法を行はむとせば先づ太子を刑して はれざるは貴族を處刑せざるに原因せる なり、君必 に封じて列侯と為し、商君と號す、二十四年に晉と鴈 の峻嚴なるに懼れて大いに行はれ、秦人よって治 戰ひて其の將の魏錯といふ を虜にす、孝公卒し

> りと為し、之を捕へて車裂きにして偏く秦國に示し はずして亡じ、怨める者其の亡げたるを以て謀反せ 室の人々多く鞅を怨む、鞅由つて此に止まること能 まれり、しかるに孝公卒して太子の立つ に及び て宗

師、おもり役なり、車裂、體を兩車に繋ぎ、之を雙方に不ゝ當…遠至…鴈門」也ら鯨、墨刑なり、いれずみ也、傅聲悞也、又下云敗…韓岸門、蓋一地也、蕁秦與…韓魏,戰 晉戰…鴈門、表には二十三年に在り、鴈門は岸門の誤【字解】 商君、商の地に封ず、故にいふ、二十四年與以 引き裂く刑なり、徇、徧く示すなり、トナフと訓む、 子 惠 なり、索隱日く「紀年云、奥」魏戰二岸門、此云:鴈門、恐 致文 文[君]元年、楚韓 人犀 年 天 武、子 賀、三 更為作為 年 造、六年、魏 王超、四人 來朝、 魏年年納際天

秦、七年、公子

首

大良

く天子に謁見せしむ、 の少官をして師を率めて諸侯を逢澤の地に會して悉 ば、二十年に諸侯皆之を奉賀せり、是に於て秦は 廢したればなり、十九年に天子伯の る、十四年に始めて賦税の法を定む、是れ井田の 開き始めて井田の法を廢す、河東の地よ り洛水 を渡 きて之を司らしむ、凡て四十一縣あり、田地 郷黨村落を幷合して大縣と為し、縣ごとに一合を置 き、秦櫟陽より徒りて之に都す、是に於て諸の小さき 良造と爲り、兵に將として魏都の安邑を圍みて 之を 年に魏と元里の地に戰ひて勝てり、 中に詳なり、七年に魏の惠王と杜平の地に會合す、 みしが、施行後三年を經て百姓之を便利なりとす、 つて鞅を拜して左庶長と爲す、此の事は にして之を勸む、孝公此を善しとなす、しかるに甘 農業を奬勵し、外には戰死したるものゝ賞罰を明 、十二年に咸陽の都を作りて高大なる樓門を築 鞅の立案したる法を採用したり、百姓初は 之を 人は之に反對して相與に之を爭ふ、孝公 0) 法を變じ新に刑律を修 餌號を賜ひ しか 十年に 衞鞅大 商君傳の に阡陌を 內

【字解】 作、祭祀に供へたる肉なり、ひもろぎなり、献稼、農業なり、商君語中、商君傳の語中なり、有、功、おり、冀闕、冀は高大なり、闕は門觀なり、卽ち宮門外に二つの臺を設けて上に樓觀を作れるもの、聚、村落に二つの臺を設けて上に樓觀を作れるもの、聚、村落、世、為古、四の字三の誤ならむ、阡陌、南北の道を阡縣と爲す、四の字三の誤ならむ、阡陌、南北の道を阡原と爲す、四の字三の誤ならむ、阡陌、南北の道を阡原と為す、四の字三の誤ならむ、阡陌、南北の道を阡上いひ、東西の道を陌といふ、賦、賦稅なり、ひもろぎなり、【字解】 作、祭祀に供へたる肉なり、ひもろぎなり、

日。為惠法秦文 戰為年、原列衞 列 鴈 施。君 門。 侯、號、 其 是 歲、誅 將魏 级子 卯.封.鞅, 馬陵二十二 衞 孝公卒、子四年、與晉 子 君必然、鞅 、鞅之 初

介下れるを聞き、西の 上下れるを聞き、西の方秦に入り宦官の 景監を介し、を圍み、西の方は戎の獂王を斬れり、衞鞅は孝公の土地を分たむと、是に於て兵を出して 東の方は陜

政事を行ふをいふ、僻、遠ざかるなり、サカリテと訓む、夷翟、翟は秋に同じ、振、教ふなり、岐雍、岐山と雍州となり、以、河為、界、河は即ち龍門河なり、三晉、韓元を、東翟、子、政、はぎなり、衞鞅、商鞅のことなり、景監、宦官の名なり、 沿ふ也、洛、水の名なり、力政、兵力を以て相攻伐して宋・魯・鄒・滕・薛・郎等の國なり、鄭、縣の名なり、濱、 宋・魯・鄒・滕・薛・邸等の國なり、鄭、縣の名なり、濱、にして哀侯にあらず、淮泗、二水の名なり、小國十餘、るに此の時燕は文公にして悼公にあらず、韓は懿侯 【字解】 河山、龍門河と華山となり、燕悼韓哀、按ずて孝公に見えむことを求めたり、

弗之變。年 然,賞法,天 相"罰。脩,子 與孝 争,公内。胙; 之,善務,三 卒,之,耕年。 用,甘稼,衞 鞅,龍外。鞅 法,杜 勸。說, 百擊戰孝

> 子子致洛,四并。年良魏七鞅,姓 少伯,十十諸,作造、戰、年為苦 官。二四一小為將元與率,十年縣鄉咸兵里魏 左 之, 庶 師,年初為、聚。陽。圍有,惠 長 其,年 會。諸爲。田、集、築、魏、功、王 諸侯賦。開。爲。冀安十會。事。百 侯, 畢, 十 阡 大 闕, 邑, 年 杜 在, 姓 逢賀、九陌、縣、秦降、衞平。商便 澤秦年東縣。徙、之,鞅八 君、之, 朝、使、天地、一都、十為、年、語乃天公子渡、令、之、二大與中、拜、

二年に天子祭肉を秦に頒つ、三年 衞鞅

意常痛於心賓客羣臣有能出, 一意、常痛於心賓客羣臣有能出, 一意、常,是、乃出兵東圍、陝城西斯, 一、是、乃出兵東圍、陝城西斯, 一、大是、乃出兵東圍、陝城西斯, 一、大是、乃出兵東圍、陝城西斯,

なるは莫し、其の後我が父獻公位に即き給ひてより、 にひまなかりき、故に其の間に三晉は我が先君が廣 雷號を賜ひ、諸侯皆賀せり、此の如く穆公が後嗣の する者あらば、吾は之を尊びて顯官に任じ、又之と秦 臣の中に能く を念ひて常に心中安からざるなり、由つて し、穆公の政令を修めむと思ひ給へり、しかるに事 行ひ、且つ東の方を伐ちて穆公の故き土地を取り かたほとりの亂を鎮め平げ都を機陽に徙して政治を に會ひ、國家は內憂ありて未だ外に出でて事を成す に其後厲公躁公簡公出子の世に至りて安寧ならざる に業を開けること甚だ光輝ありて善美なり 門河を以て晉秦の界と為し、西の方戎狄に霸たり の間 だ成らざるに世を去り給ひしかば、寡人先君の意思 て畏れざるに至れり、我が國家の醜態之れより大い めたまへる河西の地を攻め奪ひ、諸侯は皆秦を卑み の地を廣め有てること千里に及べり、故に天子伯の なき者を救ひ、戰士を招致して其の功賞を明にし、 より起り、徳を修め武を行ひ、晉の亂を平げて龍 國中に下して曰く、昔我が先世穆公は 奇妙なる計略を出して我が國家を彊 岐山雍州 き、而る

は兩己相戾る模様ありて其の色は黑と青となり、職職なり、離は至一人を指す、雨、アメフラスと訓む、離職と、始皇一人を指す、雨、アメフラスと訓む、離職、るまで正に十七歳と為す、上の七の字符文ならむ、即ち間王邑を秦に獻ぜしより始皇九年に至り親ら政を執高ま、始皇一人を指す、雨、アメフラスと訓む、離職、あまで正に十七年なり、此の間は太后嫪毐攝政せり、るまで正に十七年なり、此の間は太后嫪毐攝政せり、高まで近に十七年なり、此の間は太后嫪毐攝政せり、高まで近に十七年なり、此の間は太后嫪毐攝政せり、離職、大勢を卑した。

黔以與侯齊孝 中,北秦並,威克周有,接淮楚 公 元 室、上界,泗宣 年 微。郡。魏、之魏 河 諸 楚、築。間。惠 燕 侯、自,長 小 以 東 漢 城, 國 悼 政,中自,十韓 彊 爭南鄉餘 國 哀 相有。濱楚趙 與 併。巴洛魏 成

務漸く衰へたり、故に晉復彊大となりて河西の地を り数、君を易ふるを以て君臣の義そ むきみだれ て國 母を殺して之を淵の旁に沈めたり、さて秦は 献公を河西の地より迎へて 之を立て、出子及び其 子立つ、出子二年に 蜀を伐ちて南鄭を取る、惠公卒し 庶長の改といふもの靈公の子 往年よ

り、「字解」 庶長、秦の官名なり、乖亂、そむきみ だる な

等ひね、

花,十八一八歲 國 周,四 獻 公元 合,太 年 歲 而,史

【字解】

從死、殉死なり、合而別、合は周秦同祖

默公卒、子孝公立、年已二十一 少梁、廣、其將公孫座二十四年 賀以,黼黻二十三年、與,魏晉、戰 年。戰,

く、周は故秦國と祖を同じくして秦未だ別に 封ぜらり、二年に櫟陽に城を築く、四年正月庚寅の日に孝公り、二年に櫟陽に城を築く、四年正月庚寅の日に孝公【講義】 獻公元年に死者に從ふの制度を 禁止した 歲矣、 花冬期に殴く、十八年に機陽に於て黄金を雨らす、二 合 T 四年に獻公卒しぬ、子の孝公立つ、年已に二十一歳に 魏晉と少梁に戰ひて、其の將の公孫痙を虜にす、二十 天子秦の大勝を賀するに黼黻を賜へり、二十三年に れざりしが、襄公に至りて始めて列して 諸侯と為り なりね、 別れたり、向後凡を五百歲を經ば周秦復合併せむ、 一年に晉と石門に戰ひ、首を斬ること六萬に達す、 併して十七歳にして霸王出でむと、十六年に

臣よつて太子昭子の子を立つ、是を靈公と爲す、靈公さて懷公の太子を昭子といふ、昭子早く死にたり、大大臣と俱に懷公の宮を包圍しければ懷公自殺 しぬ、大臣と俱に懷公の宮を包圍しければ懷公自殺 しぬ、其伐ちて渭水の南にまで至る、十四年に躁公卒しぬ、其

【字解】 賂、財物を遺るなり、『南、渭水の南の地なと繞る壕を掘るなり、河旁、黄河の近旁なり、大荔、國を繞る壕を掘るなり、河旁、黄河の近旁なり、大荔、國の名なり、與『趙韓魏、趙韓魏の三氏自ら分配せしをの名なり、南鄭、楚の屬地なり、清美、表の京とより、

子なり、一十三年に秦籍姑に城を築く、此の歳靈公卒しぬ、子の子を順公立つことを得ざるを以て、靈公の季父の 悼子を

となり、而るに吳世家には「乃長」、晉定公二とありてつ血を歃らしめしをいふ、卽ち吳を盟主となしゝこ し、等、長、長は盟主の地位なり、先、吳、吳王をして先齊師に敗られしなり、故に敗の字ャプラルと訓むべ の左傳に | 吳敗||齊師「吳齊の兩世家及び春秋哀公十年悼公の十二年に卒したり、 據るに、吳と魯と齊の南方を伐ちて反つて 十四年にして卒しぬ、子の厲共公立つ、さて

此の紀と同じからず、

其,武 公渠,開分,取。其,年

卒 子, 年. 躁 其,來,躁 弟,伐李 公二年、 鄭

自ら之を分配す、二十五年に晉の智開其の となす、晉は武成の地を取る、二十四年に晉 伐ちて其の王城を取る、二十一年に初めて 頻陽を縣年に黄河の旁に城壕を掘る、又兵二萬を以て 大茘を 勝にす、三十四年に日輪蝕せり、厲共公卒 しぬい と奔り來る、三十三年に戎の義渠を伐ちて其の王 り、即ち趙韓魏の三氏智伯を殺し、其の國を三分し 躁公立つ、躁公二年に南鄭謀反す、十三年に義渠來り 河の旁に城壕を掘る、又長ここ 腐共公二年に蜀人來りて財物を 遺る、十六 領邑 に内の 0 あ

仇を同じうせむことを誓ひしなり、 せしなり、此の時秦の哀公無衣三章を賦し、出兵して 國將に亡びんとす、故に七日間飲食せずして哭泣

惠 趙 に晉の六卿の中の中行氏と范氏と倶 に 晉に反く、晉【講義】 惠公元年に孔子魯の宰相の事 を 行ふ、五年 惠公立十年卒子悼公立、趙簡子文之、范中行氏亡奔齊 年、孔子行。魯相 事,五 齊氏

中行氏亡げて齊に奔る、惠公立ちて十年にして卒し 是に於て智氏と趙簡子とをして之を攻めしむ、范氏 ね、子の悼公立つ、

氏となり、 【字解】 相事、宰相の事なり、中行范氏、中行氏と范

子立.其兄陽: 生為悼公六年吳

及九年、晉定公與。吳王夫差盟、 第一五、九年、晉定公與。吳王夫差盟、 第一五、千二年、齊田常弑、簡公、立其子 秦中公、常相、之、十三年、楚滅、陳、 秦中公、常相、之、十三年、楚滅、陳、 秦中公、常相、之、十三年、楚滅、陳、 秦中公、常相、之、十三年、楚滅、陳、 秦中公、常相、之、十三年、楚滅、陳、 晉の定公卒に吳王夫差をして先づ血を歃らしむ、是定公と吳王夫差と黄池に會して盟主の地位を 爭ふ、 【講義】 十二年に齊の田常簡公を弑して其の弟の 平公を立 12 年に異と魯と齊の南方を伐ちて反つて齊の師に敗ら る、齊人悼公を弑して其の子簡公を立つ、九年に晉の を弑して孺子の兄の陽生を立つ、是を悼公と為す、六 於て吳益、彊大となりて遂に中國を陵ぐに至れり、 悼公二年に齊の臣の田乞といふ者其君孺子

て、自ら之が相と為る、十三年に楚陳を滅す、秦の悼

是以久秦晉不相攻、晉公室卑、而六卿彊、欲、內相攻

魏趙の三氏晉を三分して獨立す、之を三晉といふ、
・一八年の役より始皇の天下を統一するまで、外しく十八年の役より始皇の天下を統一するまで、外しく秦晉の間に相攻むることなかりしなり、
「中国」 卑、勢力の衰へたるをいふ、六卿、六人の大秦晉の間に相攻むることなかりしなり、
「字解」 卑、勢力の衰へたるをいふ、六卿、六人の大秦晉の間に相攻むることなかりしなり、

大夫申包胥來告急、七日不食、伐、楚、楚王亡奔。隨、吳遂入野、楚三十一年、吳王闔閭、與、伍子胥

州江陵縣に當る、日夜哭泣、楚の昭王出でて隨國に奔【字解】 隨、國名なり、郢、楚の都なり、清の湖北省荆

再夜哭泣、於是秦乃發,五百乘, 得復入野、哀公立、三十六年卒、 太子夷公夷公蚤死不得立立。 太子夷公夷公蚤死不得立立。 東公子是為惠公、

【講義】 三十一年に吳王闔閭は伍子胥と謀りて楚を別に入城す、楚の大夫申包胥は秦に來りて 異泣しての急を告げ、七日間飲食せず庭牆に依つて 異泣しての急を告げ、七日間飲食せず庭牆に依つて 異泣しての急を告げ、七日間飲食せず庭牆に依つて 異泣しての兵を發して楚を救ひ、吳の師を軍祥の地に敗る、吳の兵を發して楚を救ひ、吳の師を軍祥の地に敗る、吳の立ちて三十六年にして卒しぬ、太子夷公あり、夷公公立ちて三十六年にして卒しぬ、太子夷公あり、夷公公立ちて三十六年にして卒しぬ、太子夷公あり、夷公公立ちて三十六年にして卒しぬ、太子夷公あり、夷公司、との一次とを入立されば立つことを得ざりき、故に夷公の子とを立つ、是を惠公と為す。

是の時晉の悼公は諸侯の盟主たり、十八年に 至り晉 年に楚い靈王彊大となりて諸侯を申の地に會して其 を以て、其後嗣の世となりなば歸らむとすと、三十九 者の言を信じて小子を誅せむとす、小子之を畏るゝ たるぞと、對へて曰く、秦公無道なり、故に容易に讒 こと此の如し、しかるに何の故に自ら其の國を亡げ る物貨千乗の多きあり、晉の平公曰く、后子の富める られむことを恐れて晉に出奔す、此の時車に載せた 弟に后子鍼といへる者あり、景公に寵愛せられて且 君を弑して自立す、是を靈公と爲す、さて景公の同母 年に景公晉に行き平公と同盟して善鄰の宜を結ぶ、 て遂に涇水を渡り棫林に至りて引き 還せり、二十七 つ富めり、或る人之を景公にそしり告ぐ、后子鍼誅 て卒しぬ、子の哀公立つ、晉に走れる后子鍼復秦に 盟主と爲り、齊の慶封を殺す、景公立ちて四十年に にして復之に背けり、三十六年に 楚の公子圍其の 秦を伐つて之を敗る、秦軍敗走す、晉兵之を追擊し 、彊大となりたれば、諸侯を會合し之を率る

【字解】 櫟、晉の地名なり、盟主、同盟の主宰者なり、

來り歸る、

は墨公に作れり、 のことなり、後世、後嗣の代をいふ、哀公、始皇本紀に口いふこと、そしるなり、車重、重は車に載する 貨物り、景公母弟、下の此の四字恐くは衍文ならむ、潜、悪り、景公母弟、「極林、秦の地名なり、母弟、同母の弟な

東京 公八年、楚公子 奔疾、弑靈王 一面自立、是為平王、十一年、楚平王 來求、秦女為。不正、十一年、楚平王 を 女 所。自娶之、十五年、楚平王 と為さ、十一年に楚の平王使を秦にら立つ、是を平王と為す、十一年に楚の平王使を秦にら之を娶りて妃と為す、十五年に楚の平王遂に太子建を誅せむとせしかば建は亡げて鄭に行き、伍子胥建を誅せむとせしかば建は亡げて鄭に行き、伍子胥建を誅せむとせしかば建は亡げて鄭に行き、伍子胥建を誅せむとせしかば建は亡げて鄭に行き、伍子胥

立二十七年卒子景公立、

【講義】 桓公三年に晉軍我が一將を敗る、十年に 整の莊王は鄭を服從せしめ、又北の 方晉兵を河上に敗めて立ち、秦の桓公と黄河を夾みて盟ふ、歸るとき秦めて立ち、秦の桓公と黄河を夾みて盟ふ、歸るとき秦は盟に反きて翟と謀を合して晉を撃つ、二十六年に を追撃し涇水に至りて還る、桓公立ち て 二十七年に を追撃し涇水に至りて還る、桓公立ち て 二十七年に

電、數會,諸侯、率以伐秦、敗秦軍、 一一五年、救,鄭敗,晉兵于傑,是時十五年、救,鄭敗,晉兵于傑,是時 一一五年、救,鄭敗,晉兵于傑,是時 一一五年、救,鄭敗,晉兵于傑,是時 一一五年、救,鄭敗,晉兵于傑,是時

厲父を弑す、十五年に秦鄭を救ひて晉兵を櫟に敗る、【講義】 景公四年に晉の欒書は中行偃と倶に其の君

公齊,靈欲何,重母•王、公平 林。秦 待,以,千弟·景 子 公 封, 彊。其, 自, 乘, 富、公, 圍 盟, 還, 走, 亡,晋,或,母弑,已 會後 景 子 公諸世,對,平譖,弟 復 其,而十 立,侯,乃日,公之,后君,背,七 歸。四于歸。秦日。恐、子 而之。年之, 公后誅,鍼2自,三 申三 年為一十 無子,乃有,立,十公 卒盟九 道。富奔。寵是,六如。涇, 子,主、年、畏、如、晋、景、爲、年、晋、至、 哀殺、楚、誅、此、車公・靈楚、與核業

會逐歸、晉、康公立、十二年卒、子

【講義】 康公二年に、秦又晉を武城に伐ちて 令狐のに秦又晉を伐ちて羈馬を取る、次で河曲に 戰ひて大に秦又晉を伐ちて羈馬を取る、次で河曲に 戰ひて大いに晉軍を敗る、晉人は隨會が秦に在りて 亂を爲さいに晉軍を敗る、晉人は隨會が秦に在りて 亂を爲さいに晉軍を敗る、晉人は隨會が秦に在りて 亂を爲さいに晉軍を康方に引き入れたり、會是に於て遂に 晉を害ふの謀を會に合せしむ、魏讎餘由つて 佯り反昏を害ふの謀を會に合せしむ、愈讎餘由つて 佯り反 して會を味方に引き入れたり、會是に於て遂に 晉を書ふの謀を會に合せしむ、愈雖餘由つて 佯り反 して會を味方に引き入れたり、會是に於て遂に 晉を書ふの謀を會に合せしむ、會是に於て遂に 受いる ひょう

二年、楚莊王彊、北、兵至、淮、問、周、共公二年、晉趙穿弑、其君靈公、 三年、楚莊王彊、北、兵至、淮、問、周、 北、五年、晉趙穿弑、其君靈公、 北、五年、晉趙。安弑、其君靈公、

むとす、共公立ちて五年にして卒しぬ、子の 桓公立して維邑に至り、周の鼎の輕重を問ひて 天下を取ら年に楚の莊王其の國彊大となりければ、兵を北に發年に楚の莊王其の國彊大となりければ、兵を北に發

師狐使雍之是,繆敗、晉隨秦、卒、爲、公、隨立,會,出言,康子 會襄來也襄公四來公迎在、公康十

曾の襄公も亦卒したりき、襄公の弟に雍といふ者あ つ、是を康公と爲す、康公元年、去年繆公の卒せし時、講義』 繆公の子四十人あり、其の太子罃代り て立

> 公六年の左傳を按するに公子雅の母は杜祁なり、杜 す、秦の師敗れて隨會は遂に秦に來り奔れり、 て雍を迎へしむ、秦護衞兵を附けて令狐に至る、此の 即ち甥なり、雍の母は秦の女なり、故にいふ、春秋文 時晉は已に襄公の子を立て > 反って秦の師を擊退 の趙盾雍を立てむと欲し、隨會をして秦に來らしめ 此は秦の甥なり、故に秦に在りて。電卿と爲る、晉 秦出、出は男子が姊妹の子を呼ぶの稱なり、

天子 益、三國,十 天子召公過をして金鼓を贈りて繆公を賀せ しめ たと千里に及び、遂に西戎のはたがしらとなれり、周の 「講義」 を伐つ、勝ちて國を益すこと十二、地を開き領するこ 使一二、開 三十七年に、秦由 過,地,用, 賀产由 余の謀を用ひて 繆里 公,遂。謀, 以霸、伐,金西戎 西戎 の王 鼓,戎、王,

從 三百三 人 東。之 死 七 服。詩, 之名,十九 疆君中日,七年 晉,子秦奄人,繆 君 西、日、人息。霸。秦、哀、仲 公 秦 之 戎繆之,行良夷公為織。臣 雍 從 然。廣、作、虎、子 不。地,歌,亦 輿 死 爲。益。黄在、氏,者

諸侯盟主,亦宜哉,死而弃民收, 遺德垂法,况奪,之善人良臣百 姓所,哀者,乎是以知,秦不能,復 难所,哀者,乎是以知,秦不能,復 死正,也、

【講 遺 終公を評して曰く、秦の終公は地を廣め國を益し、東 るを哀みて、之が為に黄鳥の詩を作りて歌へり、君子 亦殉死者の中にありき、秦人其の善良の 大夫を喪 人あり、其の名を奄息・仲行・鍼虎といふ、此の三人も に從ふもの百七十七人あり、秦の良臣に子興氏の T 5 n 方は彊大の晉を屈服せしめ、西方は戎夷に霸たり、然 るや、生前已に徳を施したるに、尚後世にまで 其の死ぬる時に多くの民を弃て其の良臣をも收 ども諸侯の盟主と為らざること亦宜なるかな、即 し法を垂れたりき、況んや百姓が惜み哀 倶に死に從はしめしこと是れなり、且つ先王の 三十九年に繆公卒して、雅に葬りぬ、其 む 所の 0 崩 死

秦本紀第五

がために喪を發して三日間哭泣の禮を爲し、軍に誓で答と、そこでという、晉人皆固く城守して敢て出でて戰るに仕反したり、晉人皆固く城守して敢て出でて戰るに仕反したり、晉人皆固く城守して敢て出でて戰るに仕反したり、晉人皆固く城守して敢て出でて戰るに仕反したり、晉人皆固く城守して敢て出でて戰るに任反したり、晉人皆固く城守して敢れた王官と部との二地を奪取し、以て往年殽にて敗れた王官と部との二地を奪取し、以て往年殽にて敗れた王官と部との二地を奪取し、以て往年殽にといる。

ひて曰く、嗟士卒等能く我が言ふところを 聽きてから、然るに余は申ねぐ~往年蹇叔百里僕 の 謀を用ひら、然るに余は申ねぐ~往年蹇叔百里僕 の 謀を用ひら、然るに余は申ねぐ~往年蹇叔百里僕 の 謀を用ひら、然るに余は申ねぐ~往年蹇叔百里僕 の 謀を用ひら、然るに余は申ねぐ~往年蹇叔百里僕 の 謀を用ひられらと謂ふべし、故に卒に孟明が晉に克ちし 慶 を得れりと謂ふべし、故に卒に孟明が晉に克ちし 慶 を得たりしなりと、

周、備はるなり、孟明之慶、孟明が晉に克ちしよろこすなり、即ち必死の覺悟なり、天官部、俱に地名なり、都中尸は往年報の敗陣に戰死したる軍士の屍なり、能に作るべし、白頭のさまなり、髪白くなれば更に黄色に作るべし、白頭のさまなり、麦白くなれば更に黄色に作るべし、白頭のさまなり、麦白くなれば更に黄色に作るべし、白頭のさまなり、麦白くなれば更に黄色に作るべし、白頭のさまなり、麦白くなれば更に黄色に作るべし、白頭のさまなり、麦白くなれば更に黄色に作るべし、白頭のきを示されば、即ち必死の覺悟なり、玉明が晉に克ちしよろことである。

王女樂を受けて大いに悅び、其の歲の暮るゝまで 還 に内史廖をして女樂二八を以て戎王に遺らしむ、戎 を測りて由余を求めしむ、由余途に戎 を 去りて秦に 女樂に耽れるを以て數、之を諫む、されど之を聽かざ さいるなり、是に於て秦由余を歸す、由余歸れば戎王 互に取り交して快食し、充分由余に安心させ、然る後 之を怪みて必ず由余を疑はむ、君臣閒隙あらば乃ち くして、其の歸國の期を失はしめよ、此くせば戎王は の間を疏遠にし、久しく留めて彼の地に遣ること 志を奪へ、一方由余は此の地にて厚く遇して 戎王と を伐つの形勢を問ふ、 降る、繆公賓客の禮を以て之を厚遇し、而して後に戎 るなり、繆公之を察して又數、人をして戎王のすきま に戎の地形と其の兵勢とを問ひて、盡く之を察す、後 公曰く、善しと、因つて由余と曲席して坐し、食器を 房にすべし、且つ 戎王樂を好みて 政事に怠らむと の安心出來ざる所なり、 音曲を聞くまじ、君試みに彼に女樂を遺りて 其の 、戎王は僻遠幽陰の處に居れば、未だ中國 今由 くに賢者なり、

人、取、王官及部、以報、殺之役、晉使、將、兵伐、晉、渡、河焚、船、大敗、晉、连、州、大敗、晉、三十六年、繆公復益厚、孟明等、

秦乃歸,由余,由余數諫不聽,終太之形,如人,即要由余,由余數諫不聽,終之形,然之形, 而說之,終 年 不還,於是工

は、若又人をして之を爲らしめしかば、亦民を苦しして代り立つ、繆公是の歳復孟明視等をして兵に將して代り立つ、繆公是の歳復孟明視等をして兵に將として音を代たしむ、彭衙に合戰し、秦軍利あらずして兵を引きて歸る、戎王由余をして秦に使せしむ、由なと以て、由余をして秦に遣はして其の國情を觀察せしめしなり、秦の繆公よつて宮室及び倉庫に蓄積せしめしなり、秦の繆公よつて宮室及び倉庫に蓄積せしめしなり、秦の繆公よつて宮室及び倉庫に蓄積したる財物を示す、由余之を觀で曰く、若し鬼神をして之を爲らしめしかば、亦民を苦しして之を爲らしめしかば、亦民を苦しして之を爲らしめしかば、亦民を苦しして之を爲らしめしかば、亦民を苦し

廖に問ひて曰く、孤聞けり、鄰國に聖人あるは其の敵 れぞ真に聖人の治なりと、是に於て終公退きて內史 ば僅 是を以て一國の政を行ふは、恰も一身を治むるが如 上を怨み望み、上下交ると、軍ひ怨みて相篡ひ く、如何にして治まりしか其の理を知らざるなり、 下をあひしらひ、下はまごころを以て其の上に事ふ、 り、即ち上たる者は清きすなほなる徳を含みて其 **禮樂法度を恃むを以てなり、夫れ戎夷は之 と 反對** 殺し、遂に其の宗家を滅すに至れることは此の詩 も亦つかれ極まれば仁義を施し吳るゝものなりとて を作為せしより、身親ら之を行ひて民に先だちしか むるに難からずやと、由余笑ひて曰く、此れあるが故 に何を以て治むることを爲すや、此れ無く むば 亦治 制 中國亂るゝなり、夫れ上古の聖人黃帝の禮樂法 度無きに能くも其の民を治むるものかなと怪みて たりけむと、終公其の言に感じ、戎狄は元より禮樂 々にみだれおごり、法度の威を特みて下を責め、下 ひて曰く、中國は詩書禮樂法度を以て政を爲すに、 少しく **始まれり、其後世に及びては上たる者**

せり、勿れと、遂に三人の官秩を元通りにして愈、之を厚遇勿れと、遂に三人の官秩を元通りにして愈、之を厚遇其れ此より心を盡して此の恥を雪ぐことに怠ることすれ此より心を曇めたり、卿等には何の罪も無し、卿等

書るなり、雪、恥、雪は除くなり、洗ふなり、ツ、グとど、とは怨みの甚しきをいふ、我君、秦の繆公を指す、我には怨みの甚しきをいふ、我君、秦の繆公を指す、我には怨みの甚しきをいふ、我君、秦の繆公を指す、我には怨みの甚しきをいふ、我君、秦の繆公を指す、我になるの謂なり、雪の襄公今父の喪中に在りて兵を發せむが父の謂なり、素服、喪服なり、進、遏なり、生を發せむが父の謂なり、素服、喪服なり、洗ふなり、ツ、グと著るなり、雪、取、雪は除くなり、洗ふなり、ツ、グと著るなり、雪、取、雪は除くなり、洗ふなり、ツ、グと著るなり、雪、水、雪は除くなり、洗ふなり、ツ、グと著るなり、雪、水、雪は除くなり、洗ふなり、ツ、グと著るなり、雪、水、雪は除くなり、洗ふなり、ツ、グと

年 に與 軍 日く、寡人の兵を に獻じて曰く、大國の の一を発れ るのみと、二老退きて其の子に謂つて曰く、汝が軍勢 を狙むに非らず、此の とをして特たらしむ、兵の出發する日に、百里僕 て將に之を周に賣らむ の還ること遅からば、父子の對面叶ふまじ、故に哭す に至る、鄭の商人の するを見て必ず殺さるゝか廣にせらるゝか二 は無禮なり、敗れずして何をか待たむと、秦兵滑 の春、秦兵遂に東に進み、晉の地を通過するを變更 ぬるの禮をなさいりしかば、周の王孫滿曰く て周の王城の北門を過ぐ、此の時甲を巻き兵器を との二人は 敗れなば、必殺山の狹道に於てならむと、三十二 哭するは何ぞやと、二老曰く、臣等强ひて君の り、而して臣等は已に老いたり、今別れて子等 0) ずと恐れ なり、 子の孟明視と蹇叔の子の 軍に向ひて哭泣す、繆公聞きて怒りて 吾は已に決心せりと、途に兵を 發するに 、因つて決意して其の 度の軍行には臣 が子等も往 將に鄭を誅せむとするを聞 高といへるもの十二牛を牽 として滑國 臨み卿等之を狙みて吾が に至る、秦兵の 西乞術と白乙丙 牛を秦兵 軍 <

さし 體に入れり、故に願くは此の三人を秦に歸らしめて、 の繆公の女なり、よつて囚れたる秦の三將の 晉軍秦の三將を虜にして歸る、さて 文公の夫人は に秦兵を破る、秦軍敗績して一人の脱るこもの 之を著け、兵を發して秦兵を殺道に遮りて撃ち、大い 獨なるを侮りて、喪中に乗じて ざるに會す、よつて太子襄公怒りて曰く、秦は我が孤 り、而して此の時は恰も晉の文公卒して尚未 鄭との間に介在せる小國にして當時は晉の附庸 くとも勝つこと能ふまじと、遂に滑を滅す、滑は るに、鄭已に覺りて之が防備をなせりと聞く、假合徃 むと、秦の三將相謂つて曰く、今將に鄭を襲はむとす て哭して曰く、寡人百里溪蹇 に至るとき繆公喪服を著て郊外に迎へ、三人に向 我父をして此の度の大敗を口實として自ら快く烹殺 公に請ひて曰く、父繆公が此 れ看過すべからざるなりと、途に喪服を墨 して臣をして牛十二頭を以て秦の軍士をねぎらは か ば、鄭 めよと、晉君之を許して秦の三將を歸す、三將 の君は謹 みて已に守禦の備を修め 叔の言を の三人を怨めること骨 我が滑を破れ 用ひざるを以 為 0 周 T 3

愈 雪。辱,日。將 快,髓:請。 を襲ひて、古來利を得た にば を賣る者あ 問ふ、對へて日 我れ之が嚮道た 耻,三,孤、至、烹、願、日, 鄭厚。母、子,以,繆、之,令,繆之,念、三不,公晉此。公 れば 遂 子 用。素 君 三 之 、何ぞ我が國 を主れり、故に 復,何,百服,許,人,怨 る者希なり、且 三罪,里郊之,歸,此, 者 人,乎。溪、迎、歸、令、三 人にして り千里を 官子蹇嚮。秦我人, 叔 秩,其,权,三三君,入, 亦 鄭 人に 我 如。悉。言,人、將,得於 故,心,以,哭,三自,骨

り、鄭人をして秦の終公に言はしめて曰く、今鄭を亡

秦即故臣,也、怒、百子發。繆人有《溪 兵 败,哭,子 二 日,里 西 兵,公 不,得,對 逐必耳,與老孤,傒,乞使。日,有,利,日, 東於二往,日,發蹇術,百子以,者經濟 更。我。老臣臣兵,叔,及。里不。我,且,數 晉 阨 退 老 非 而 二 白 傒,知,情,人 國, 地,矣謂,遲,敢,子、人乙子也告。賣、千 過,三其、還,沮、沮、哭、丙、孟吾鄭鄭,里 周,十子恐君、哭之,将明已者。庸;而 北三日,不軍,吾繆兵,視決乎知,襲 門,年,汝,相軍軍,公行,蹇矣不我,人, 周,春軍見一行。何,聞,日叔,遂可國希,

滅し 聞きて曰く、 たり、我が兄弟多け 一國を滅 に留めむ、其のときは 梁は我が母の生家なり、而るに秦これ 年に齊の桓公卒しぬ、二十年に秦の繆 す、十二年に晉の公子圉晉 れば、若し君の死後には秦必 晉かろべ 君病むと 亦か

に同じ、死を諱みていふなり、城濮、衞の地なり、清の

城

【字解】 梁我母家、子圉の母は梁伯の女なり、故に、を城濮に敗れり、 しめて重耳を入れて 君と爲さむ と欲す、晉之を許し十四年の春に至り、秦は 人を遣して 晉の大臣に告げたれど も後には 之を受く、繆公益。重耳を厚遇す、二 周に入れ、王の弟の帶を殺す、二十八年に晉の文公楚 む、秦の繆公兵に將として晉の文公を助けて襄王 周王人をして弟の難を晉と秦とに告げて救を求め 率ゐて周王を伐つ、王出奔して鄭に居る、二 して子圉を殺さしむ、子圉は是の時已に懷公と たれば、秦人をして重耳を晉に送らしむ、二 楚 立ちて晉君と爲る、是を文公と爲す、文公立ちて人 n まること能はず、乃ち亡げて晉に歸る、二十三年に なり、其の歳の秋に、周の襄公の弟の帯は に るを怨み、之に反對せむとて乃ち晉の公子重耳を 惠公卒しぬ、子圉立ちて君と 3 んべ他の子を立てむと、子圉之を案じて 迎へて、故の子圉の妻を妻す、重耳初めは辭退し 爲る、秦は圉が亡 一月に重 十五年 翟の兵を 秦 げ 耳

一夜を明かすこと、我同姓、

地

【字解】 齋宿、齋戒して東の方龍門河に至れり、 地を献じ、太子圉をして秦に質たらしむ、秦是に於て 月に至り晉君夷吾を歸す、夷 吾前約の 通り其河西の し、更めて上舎に徙し舎きて七年の饗應を饋る、十 らずと、乃ち晉君と後事を盟ひて之を歸さむとを許 服を著け跣となり 哀戚の意 を見して曰く、妾が兄弟 は兄弟の故を以て之を憂ふ、我れ其れ許さいるべか 思へり、然るに今天子は晉君の為に命乞をなし、夫人 曰く我れ戰場に於て晉君を虜としたるは大功なりと 相救ふと能はずして遂に君の命を辱めたりと、終公 公の夫人たり、夫人弟の贄とせらるゝを聞き、直に喪 なりと、乃ち爲に晉君の命乞を爲す、夷吾の姊も亦繆 すと、周の天子之を聞きて曰く、晉は我同姓の諸侯 謹慎せよ、吾れ將に晉君を贄として上帝を祠らむと り歸る、國中に合を布きて皆齋戒して一夜を 圉に其の長女を 妻したり、是の時秦の 領土は已に 是に於て繆公は晉の惠公 て韓原よ 明して

> 具はれるをいふ、質、人しちなり、宗女、長女なり、 上舎、客舎なり、饋、おくるなり、七年、牢は牛羊豕のなり、跳ははだしなり、皆哀戚の意を見す所以なり、 喪服なり、経は麻を首と腰とに著く、是れ亦喪中の禮 周の 成王の弟な の祖を唐叔虞といふ、叔虞 、衰経跳、衰は線に同じ、貨布の 刨

君病、日、梁我 十八年、齊桓公 創意 亦 型君百歲後秦必留 一年、晉公子圉聞 雷 一年、晉公子圉聞 晉 、 一年、秦滅之、 楚 怨 三 更-君 ,年立百 他,歲, 以去惠故,乃公 子、後、秦 卒、圉

食ひて酒を飲まざれば人を傷ふと、乃ち皆酒を賜ひに人を害せず、且つ吾れ聞けることあり、善馬の肉を から h 急を見て亦皆鋒を推し列べ死を爭ひて曩に馬を食ひ 皆從軍せむことを求めて之に從ふ、從つて繆公の危 て之を赦したりき、三百人の者秦が晉を撃つと聞 て赦されと徳に報いしなり、 T 皆之を法に處せむとす、繆公曰く、君子は畜類 逐に繆公を脱れ 來りて晉軍を冒 さて此の三百人とは、初め繆公其の善馬を亡 山の下の野人等共に此の善馬を得て其 肉を食ひ 百餘人あり、役人馬の後を逐 しめて反つて晉君を生ながら得た 撃つ、晉軍其の園を解く、是 助 けられた る三百人は、真 ひて之を の肉を 先に 0)

親なり、即ち深 泥に足を 踏み込みて苦むなどの親なを期して勝敗を賭くることなり、驚、馬の重きに苦むり、雍、秦の都なり、相望、引き續くことなり、絳、晉のり、雍、秦の都なり、相望、引き續くことなり、絳、晉の東、穰は豐作なり、更事は彼此代るが、あることな更事、穰は豐作なり、更事は彼此代るが、あることな更事、穰は豐作なり、祖望、引き續くことなり、節を財と賭して、即ち深 泥に足を 踏み込みて苦むなどの親なり、即ち深 泥に足を 踏み込みて苦むなどの親ない。

吾,而 乃 以 救 之,夷 子 齌 於, 爲以,乃吾聞,宿。是 饋。與 質,夷 之一 功、辱、衰"姚、之,吾 一四日 日。將-公晉。以,廣 君經亦 七君 今 牢, 盟. 天 命,跣、爲, 許,子 繆 日,繆 我 歸,為二 妾,公, 君,君, 同 公 地,月之,請、日,兄夫使歸、更夫我弟人 姓,洞,以,爲上、歸、 以,宗 爲 太晉舍人得不夫 蕭 晉 女,子君上是,晉能人晉周,於是,圉,夷舍憂,君,相聞,君,天國

怨に報

いんとて繆公に説きて曰く、與ふること勿れ、

魃して穀實らず、秦に來りて粟を請ふ、丕豹舊十二年に齊の 管仲と隰朋 と死にぬ、十三年

に晉早が

しと、晉君之に從ふ、十五年に兵を興して將に秦を攻日く、秦の削ゑれるしまし に於て百里傒と公孫支との言を用ひて、卒に晉に粟罪を君に得れれまる」と 軍を賭して秦と勝利を爭ふ、晉の 壬戌の日晉の 惠公夷吾と韓の地に 合戰す、晉君 まで引き續きしといふ、翌十四年には秦國饑饉す、 陸には車を以て轉じ、秦の雍都より晉の絳都に を與ふ、而して之を運搬するに河には船を以て 罪を君に得たれ、其の百姓には何の罪かあらむと、是 ば、彼の飢ゑたる時には此れより栗を與へずんばあ ち 麾下の軍勢と馳 豹をして將たらしめ、自ら往きて晉の軍を撃つ、九月 め つて亦栗を晉に請ふ、晉の惠公之を羣臣に謀る、號 3 1-其 深泥に踏み込みて體 むとす、秦の終公も之に對せむとて兵を發し べからずと、公又百里僕に問ふ、僕曰く、夷吾こそ 0 問 たれば繆公傷つく、是の 能 飢 、秦の飢ゑたるに乗じて之を伐たば大功ある ふ、支日 はずして、反つて晉軍に圍まる、晉軍繆公を擊 えたるに乗じて之を伐てと、終公之を公 く、饑饉と豊穣とは彼此更々ある事な せて之を追撃す、されど晉君を 自由を失ふ、繆公之を見 時前に岐山の 軍潰えて還る 下にて終公 時馬 其 T 其 至 丕 射华因 3 n

重耳を たることを以て丕鄭が離間せしと疑ひて、乃ち夷 らしめて呂郤の二人を召す、呂郤等其の秦に 調和せること明かなりと、遂に丕豹の請を せざれば、先づ其の君を退くべきなり、何の に言って 丕鄭を殺さしむ、丕鄭の りといふ、繆公之を許し、人をして丕鄭と俱に 9、呂甥・郤・芮、呂甥と郤稱と冀芮との三大夫なり、字解】 葵丘、地名なり、淸の河南省衞輝府考城縣な を怨み、又秦に奔りて繆公に説きて曰く、晉の君 て忠良の大臣を用ふるを見るに、此れ其れ晉室の 而して晉に隱して陰に豹を用ひたり、 勸む、繆公曰く、百姓まことに其の君を便なりと にして百姓親しまざれば、今に於て之を の大臣を誅せむや、君能く其の邪惡の へて之を晉に入れむこと 至ら 子丕豹父の殺さ 0 虚 大臣 聽かざり 故 召さ 伐つ 晉に 極 C

間、離間なり、なかたがひなり、

粟、管不一种

說,朋步

君與使十其於雍支,百百支因, 弃。晉。丕五飢。晉相言。姓。里日。其,其,惠豹。年。伐。晉望。卒。何。溪。飢飢。 應 軍、公 將、與、之、君 至、與、罪、溪 穰、而 下 與 夷 自,兵,可、謀、絳、之。於,曰、更 伐 馳、秦 吾 往,将。有、之,十 粟,是 夷 事 之、 追,爭,合 擊、攻、大 羣 四 以,用。吾、耳 之,利,戰之,秦,功臣年船,百得,不公不還,於九繆晉號,秦漕里罪,可,問,能而韓,月公君射。飢,車、溪於不公 壬 發、從,日,請,轉、公 得馬地 鷙晉戌-兵,之因,粟,自,孫其。問,支

吕·郤, 便力 可說,夷 皆實。因,河已請,將 急. 召。 呂· 部· 部· 欲與重繆 西,立, 繆 ·吕·郤 公 甥·郤·芮 城,而 許。 耳,今 公而,使謀殺。丕 等之,呂、廷、徳、郤 鄭,等 使, 都之 背* 里 鄭,西, 秦,晉 克,謝、八 鄭,丕 約 與 也 鄭, 則 願,而 有心不更 不 丕 鄭 間,鄭 入重 君殺、欲、聞、約、秦 豹 奔。乃。歸, 以里夷 何親、秦言,召、耳,利,克,吾,恐、與、至,立。

其調也、不聽、而陰用、豹、故能誅,其大臣、能誅,其大臣、能誅,其大臣、此

0 者として秦に謝せしむ、而るに前約に背きて 八 きて秦に與へむと、至りて已に立ちて後に、不 立つとを得ば、謝恩として晉の に往かしめて己を育に入れむとを請はしむ、繆公之 所の奚齊を立つ、奚齊の臣里克其君奚齊を殺す、時に しむ、夷吾繆公に謂つて曰く、誠に本國に歸りて位 を許して百里僕をして兵に將として夷吾を晉に送ら 是に於て曩に少梁に出奔せし所の公子夷吾は人を秦 荀息は卓子を立つ、里克又卓子及び荀息を殺したり、 會す、此の歳に晉の獻公卒しぬ、よつて驪姫の生みし 城を與 82 災に罹らむかと恐る、因つて繆公と謀りて日 秦の 夷吾を欲せずして 質は重耳を欲せしなり、 、丕鄭秦に在りて此のことを聞きて自らも 約に背き、又里克を殺せるは、是れ皆呂 九年に京 へざるなり、且つ丕鄭の不在中 齊の桓公盟主となりて諸侯を葵丘 なり、放に願くは君 河西 に在る八 利を食は に里克 河 鄭 を 亦 そ 西 使

し時も蹇叔义臣を止めたり、臣も亦 虞君の臣を用し時も蹇叔义臣を止めたり、臣も亦 虞君の難に遭へり、此のことを以てするも蹇叔の賢なることを知るべしと、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎と、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎と、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎と、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎と、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎と、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎と、是に於て繆公人をして 幣帛を厚くして蹇叔を迎んしめて上大夫と爲しぬ、

聽姬作亂太子申生死新城重秋,繆公自將伐,晉戰於河曲,晉

耳·夷吾出犇、

九年、齊桓公會諸侯於葵丘、晉克殺、奚齊、荀息、夷吾使人。清秦、求、章、於是繆公許之使,及齊、其臣里。

幣迎。蹇叔以爲。上大夫、是以知。其賢於是繆公使。人。厚、用,其言,得脫、一、不用、及。虞君難、

に還されたしと、楚人之を許して秦に與ふ、是の時百 枚の黒毛の牝羊の皮を獻上すべければ百里僕を當方 **勝臣の百里僕は亡げて御地に在りと聞く、願くは五** を恐れ、乃ち先づ人をして楚に謂はしめて曰く、吾が 欲す、されど 直接に交渉しては楚人 の賢人なるとを聞き、重く財を投じて之を贖はむと れば、之を以て秦の繆公の夫人の為に秦に往かしめ て其勝臣たらしむ、百里傒秦を亡げて宛に走る、楚の て虞人に賂ひせし故なり、晉既に百里傒を虜にし の大夫の百里僕とを虜にす、是れ晉が壁と馬とを以 至る、五年に晉の獻公は虞と號とを滅し、虞の君と其 **姉なり、其の歳に齊の桓公は楚を伐ちて邵陵にまで** 之に勝つ、四年に婦を晉に迎ふ、是れ晉の太子申生の 人之を捕へて楚朝に引く、秦の繆公後にて百里俊 繆公元年に公自ら將として茅津の戎を伐ち の興 へざらむと

變に誅せられ ざることを得たり、其の後虞君に事 牛を好めり、臣元來牛を養ふに得意なれば、之に求め 知に事へんと欲す、しかるに蹇叔は臣の仕官を止 大いに困却して食を驚人に乞ひしことありき、此ふ其の先見の明あるを例證せむ、臣嘗て齊に游歷 蹇叔又臣を止め て仕へざら たり、其れより途に共に周に行く、時に周の王子頽 たり、是に由つて臣は 時蹇叔は臣を引き取りて養ひたり、臣因りて齊君 て之に國政を授け、號して五鞍大夫といふ、百里溪之 こと三日間に及ぶ、繆公其の説を聞きて大いに悦び が罪にあらずと、固く請ひ問ふ、是に於て國事を語 奉るべけむやと、繆公曰く、卿は亡國の臣と稱すれ て用ひられむとす、頽亦臣を用ひむとするに及びて り、蹇叔は賢者なれども、世人之を知ること無し、請 を譲りて曰く、臣の才は臣が友の蹇叔に如かざるな も、虞君の卿を用ひざりしかば亡びたるなり、 日く、臣は元より亡國の臣なれば、何ぞ君の問に 目を釋きて與に國 事を語り問ふ、百里傒之を謝 0) 年は已に七十餘歳の老年なりき、繆公其 彼の齊の難に脱るここと しむ、臣兹を去りて頽 是れ卵 3 0 0) る

近、長子は宣公、中子は成公、少子は穆公といふ、長子跋の時立ち、立ちて二年にして 卒しぬ、子三 人を生

「字解」 初伏、伏は三伏の節なり、周の時には此の節になり、故に陰氣、將に起らむとすれども殘陽にかけてなり、故に此の時を金氣伏藏の節となす、金はかけてなり、故に此の時を金氣伏藏の節となす、金はかけてなり、故に此の時を金氣伏藏の節となす、金はかけてなり、故に此の時を金氣伏藏の節となす、金はかけてなり、故に此の時を金氣伏藏の節となす、金は所謂三伏なり、盡、熱毒惡氣なり、

宣公元年、衞燕伐周、出惠王、立、三公元年、衞燕伐周、出惠王、四年、作。密時、與晉戰、一九人、奠立、立、其弟成公、

る祭壇なり、 一本では、 一本には、 一本では、 一本では

成公元年、梁伯芮伯來朝、齊桓及山戎を伐ちて孤竹國に次る、是れ山戎が燕を侵桓公山戎を伐ちて孤竹國に次る、是れ山戎が燕を侵桓公山戎を伐ちて孤竹國に次る、是れ山戎が燕を侵桓公山戎を伐ちて孤竹國に次る、是れ山戎が燕を侵したるを救ひしなり、成公立ちて四年にして卒しぬ、上たるを救ひしなり、成公立ちて四年にして卒しぬ、子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の繆公子七人あれども立つべき者莫し、故に其の弟の怨公子といる。

訓む、特に三日以上宿するを次といふ、孤竹、國の名【字解】 山戎、北狄のことなり、次、宿なり、ヤドルと

を立つ、

せら 寸 て天を鄜時に祠る、此時に雍に 都を奠め んとて之を 公卒しの、薙の平陽に葬る、此の時初めて人を以て死 は野に於て諸侯のはたがしらとなりね、二十年 は霍魏耿を滅す、齊の雍廩は無知及び管至父等を殺 至父・連稱等は其君襄公を殺して公孫無知を立つ、晉 二地を縣となす、又小號を滅す、十三年に の高渠眯其の君昭公を殺す、十年に邽・冀の戎を伐ち 宮に居る、三年に三父等を誅して其の 戲氏を伐ちて華山の下にまで至る、還りて平陽の しなり、三父等復故の太子武公を立つ、武公元年に 平陽に封ぜらる、而して武公の弟の德公を立つ、徳 7 、是れ三父等が出子を殺せるを以てなり、此の 1: げて初めて之を縣となす、十一年に初めて杜・鄭 、十九年に晉の曲沃は始めて晉侯と爲る、齊の 年に初めて雅城の 齊の桓公を立つ、是に於て齊と晉とは彊國 子一人あり、名を白といふ、白は後嗣と爲らずし 從はしむ、其の死に從ふ者六十六人ありきと、武 に吉なり て立ち、立ちて六年にして復三父等に かっ ば、其の後益、强大となりて次 大鄭宮 に居り、、、後三百年を以 罪三族に及ば 齊人の管 桓公 年鄭 しと為 淮 封 彭 0)

第に領土を東方に擴げ馬を龍門河に飲ふに至れり、海に領土を東方に擴げ馬を龍門河に飲ふに至れり、馬於河」、飲は馬に水を飲ますなり、東、平ぐ也、高馬於河」、飲は馬に水を飲ますなり、成師 曲沃に居る、故に曲沃の桓叔と號す、以、人從、死、殉死のこと、犧、いけにへなり、牢、牛羊豕の三牲具はるを一牢といふ、飲にになり、牢、牛羊豕の三牲具はるを一牢といふ、飲にになり、牢、牛羊豕の三牲具はるを一牢といふ、飲にになり、牢、牛羊豕の三牲具はるを一牢といふ、飲にになり、牢、牛羊豕の三牲具はるを一牢といふ、飲にになり、牢、牛羊豕の三牲具はるを一牢といふ、飲いは龍門河なり、西方の秦 强大となりて次 第に其の領土を東方に擴げ馬を龍門河に飲ふに至れり、

や大庶長の弗忌と威壘の三父とは太子を廢して 魯姫子といふ、魯姫子又出子を生む、寧公の 武公の 母弟 徳公あり 德公

【字解】 蕩祉、西戎の邑出子を立てゝ君と爲す、 す、蓋し成湯の胤なり、 、西戎の邑の名なり、其の君を亳王

十君以,封伐,乃子三

連

謙於 牢, 年, 立, 十 雍, 桓 國, 至 晋。等。小 河。祠。初,封,六平公十父滅。殺。虢。 時。雅陽有,初於年而魏君三 下,城,立,子以,鄠营,立,耿桑襄 居大其一人,二曲齊,齊、公,齊 雍鄭弟人從十沃桓雍 後宫德名,死年始、公、廩、立、管 子以,公,日,從武為,齊殺,公至 孫犧德白死公晉晉無孫父 公白者卒、侯、爲、知 馬。百元不,六葬。齊。彊管知,稱

殺せしむ、出子は生 出子六 年に三父等復共に謀りて人をし れて五歳 0

竫公子立、是為。寧公、

を寧公と為す、
本等公と為す、西山に 葬る、舜公の子 立つ、是為す、舜公の長子を太 子と為す、是れ 文公の孫なり、為、四十八年に文公の太子卒しぬ、諡を賜ひて舜公とふ、四十八年に文公の太子卒しぬ、諡を賜ひて舜公と、「講義」 文公二十七 年に南山の大 梓樹を伐りしに、「講義」 文公二十七 年に南山の大 梓樹を伐りしに、

十二年にして卒しぬ、西山に葬る、子三人を生む、長之を取る、さて寧公は生れて十歳にして立ち、立ちての公子翬其の 君隱公を弑す、十二年に 蕩氏を伐ちての公子翬其の 君隱公を弑す、十二年に 蕩氏を伐ちての公子翬其の 君隱公を弑す、十二年に 蕩氏を伐ちての公子翬其の 君隱公を弑す、平年に 遺氏を伐ちての公子翬其の 君の亳王と戰 [講義] 寧公二年に、公徙りて平陽に居る、同年兵を

所なり、鄽畤、鄽の地に設けたる祭壇なり、三牢、牛羊【字解】 西垂宮、西陲 に在る宮 なり、會、二水の合ふ

地至岐岐以東獻之周、
老、大、是文公遂收周餘民有之、
者、十六年、文公遂收周餘民有之、
大、是文公遂收周餘民有之、

に献じたり、 はご至るまで領有す、而して岐より東の方は之を周まで戎王に支配せられし者を收めて之を有ち、地はまで戎王に支配せられし者を收めて之を有ち、地はまで戎王に支配せられし者を收めて之を有ち、地はまで戎王に東北する者多し、十六年に文公兵を率ゐて戎と伐つ、戎敗れ走る、是に於て文公遂に周の遺民が今と伐つ、戎敗れ走る、是に於て文公遂に周の遺民が今と伐つ、武武が、

に岐に居る所の民を餘民といふ、る民なり、卽ち周王岐周より東の方雒邑に徙れり、故る民なり、卽ち周王岐周より東の方雒邑に徙れり、故

十九年、得陳寶、二十年、法初有

三族之罪、

て刑法に三族の罪を設けたり、 一十年に初め

四十八年文公太子卒,赐二四十八年文公太子卒,赐二二二十七年伐,南山大梓,豐大特,公孫公、安太子卒,赐二二二十七年伐,南山大梓,豐大特,

兵を以るて 黄毛の牛牡羊各三を用ひて上帝を西時に祠れり、 つて諸侯と使聘享の禮を交換し、乃ち赤馬黑鬣の駒 封餌す、襄公是に於て始めて一 を侵し奪へり、而るに秦能く我を攻めて逐ひ退けた 以西の地を賜ふ、王曰く、西戎無道にして我岐豐の地 いなりとして之を封じて諸侯と為し、之に眩より 、よつて其地を有つべしと、與に誓ひて之を諸侯 周 0 平王 を雒邑に送る、平王襄公の 國の大名となりね、 功を

號ならむ、周に豐王無し、一説に幽王なり といへど 【字解】 大父、祖父に同じ、豐王、疑らく は是 戎王の 、幽王の后は申后にして繆嬴に非ず、且つ周王には 吉、卽營邑、之、十年、初為,郎時、用 後 之會、日、昔周 三字。 卒獲為論 年_伐,居,戎, 巴力 獵。 我加 四年、至洪文 **卜居之、占** 先秦嬴於

日,此。渭*公

たるとを得たりと、乃ち之に居らむとをトひしに、其 秦嬴を此處に邑居せし めたりき、それより 卒に諸侯 會台する地に至りて曰く、昔時周の孝王は我が先 十年に初めて鄜の地に祭壇を設けて 三年を用ひた の占言に吉なりといふ、よつて宮を營みて之に居る、 文公兵七百人を率 ゐて東に獵す、四年に汧渭二水 襄公文公を生む、文公元年に西陲の宮に居る、三年に 【講義】 襄公十二年に戎を伐ち岐に至りて卒しぬ、

いる、

靈を祭る處をいふ、秦は西方に 國するを以て西時と

時、時は止なり、神靈の依り止まる所なり、即ち神

て麓の黒きもの、駒は小馬なり、羝羊、牡羊なり、 て恭儉慈惠の禮を竭すことなり、駵駒、駵は赤馬 夫をして訪問せしむるなり、享は宴享なり、酒宴を俱

皆周厲王周宣王周幽王周平王と 周の字を冠らせり、

には周の字無し、周王にあらざること明なり、以、 のるなり、使·聘·享、使は使節を遣すなり、聘は大

是卽,侵、侯、兵,周秦、與數、用、歲丘、嬴、 有,奪,賜,送,避,襄 申 欺,褒 餘世 侯諸 其,我,之周犬公 姒,復父, 與 地,岐 岐。平 戎,将,伐,侯,廢。歸。 王, 難, 兵。周, 諸
平東, 救, 殺、侯 與.豐 太世 以 東数殺侯子、父, 誓之 西 封 地,之王徒。周,幽叛,立、七之, 地,封、雒 戰。王,之。褒 之,能,日,襄邑。甚。郿"西 姒,春戎 子,周,人。 公。襄力。山,戎 攻, 戎 之公逐無爲、公有、下犬爲、幽所,圍禮,於、戎、道、諸以,功、而戎適、王廣、犬

三人を生 を救ひて戰甚だ力め 燧燧を擧げて 諸侯を欺 けり、諸侯 是に 於て 之に 叛を立てゝ嫡嗣と爲し、又褒姒の笑を買はむとして數、 り立つ、襄公元年に妹の繆嬴を戎の豐王の妻と爲す、 為る、莊公立ちて四十四年にして卒しぬ、太子襄公代 敢て復我が邑に入らじと、遂に將に西戎を撃たむと我が祖父の仲を殺せり、我れ戎王を殺すに非ざれば 言を用ひて 太子宜臼 を廢て、褒姒が生みし所の伯咒で戎復世父 を歸し來る、七年の 春周の幽王は褒姒 撃ちて利あらず、途に戎人に虜とせらる、一歳餘に 襄公二年に西戎來り し、其の後嗣は弟の襄公に譲る、是に於て襄公太子と 言を用ひて 太子宜臼 下に 、西戎犬戎は申侯と倶に 殺したり、而るに秦の襄公は兵に將と 生む、其の長男は世 避くることを得て東の 莊公は其の故の領地 ぬ、大功あり、周是に由つて犬 て犬丘の世父を圍む、世父之を 父なり、世 周を伐ちで幽王を酈 0 方雒邑に徙れり、 西の犬丘に居る、 父日 して 周 服

垂, 其, 西公其, 立, 大之叛, 仲 大先戎。昆長,二夫族,之立。伯, 夫,大破,弟者十誅,周,西三 駱、之,五日,三西宣 地於人,莊年或,王反,周,立, 大是與公、死。西郎王厲三 丘,復兵周,於或 位室王 并,予,七宣戎,殺,乃滅,無卒, 有,秦千王有,秦以,犬道,生 之,仲,人,乃子仲,秦丘,諸秦 爲、後使。召。五秦仲,大侯仲, 西及战,莊人仲為。駱或泰

無道なり、よつて諸侯或は叛く者あり、西戎も亦王室ぬ、公伯秦仲を生む、秦仲立ちて三年にして周の厲王しぬ、秦侯公伯 を生む、公伯立ち て三年にし て卒し 侯を生む、秦侯・ 年に

> 西 位に 先人大駱の領せし犬丘とを莊公に予へて之を幷せ に於て宣王復秦仲が立ちてより後に領せし地と其 善く奮鬪して遂に之を破りて其の仇を報じたり、 て西戎を伐たしむ、莊公等兄弟は父の弔合 戰なれふ、周の宣王莊公等兄弟五人を召し 兵七千人を興 戎に死にたり、秦仲に五人の子あり、其長を莊公と 一我反つて秦仲を殺す、秦仲立 に即くや、秦仲を大夫 丘の 大駱 0 と為 族を滅 して西戎を誅伐せしむ、 ちて二十三年に

為りて子の成を生みて已に適子となれるあり、是に 妻と爲し、適子成を生 久しく事無きを得たりき、今我復女を大略 とりを保 居りし者の女が西戎の胥軒の妻と爲りて中潏を生 於て申侯孝王に言って曰く、若し我が先人の酈山に 駱の適嗣と爲さむ と欲す、時に申侯の女 大駱の妻と しに、馬大いにふえませり、孝王由つて非子を以て大 ふ、孝王非子を召して 馬を汧水渭水の間 に主らしめ 善く之を養ひ育てり、犬丘の人此 由を周の孝王に言 趙氏を冒す、非子は犬丘に居て馬及び畜類を好み に寵幸せらるゝを以て、惡來の子孫も皆趙城の姓 儿大駱を生む、大駱非子を生む、此時造父が周の て親み常 て女防といふ、女防旁阜を生む、旁阜太儿を生む、太 ならず、是に由つて西戎皆周に服して王は 有せり、西垂も其の故を以て周と和睦 悪水革は蜚廉の子なり、早く死にぬ、子有り 姻戚上周に歸服して其の西方のほ めり、故に申と駱とは婚を重 に與へて して 和 め 7

天下に王たることを優せずして西戎の心を和げた略の適子たることを優せずして西戎の心を和げたとり、今其の子孫亦朕が為に馬を養ひふやしぬ、と賜ひき、今其の子孫亦朕が為に馬を養ひふやしぬ、と賜ひき、今其の子孫亦朕が為に馬を養ひふやしぬ、に邑せしめむといふ、是を以て北を入ちて附庸と為して之を秦是を以て朕も亦之に土をみちて附庸と為して之を秦とりて朕も亦之に土をみちて附庸と為して之を秦といる、今其の大路と申と天下に王たることを優せずして西戎の心を和げ

【字解】 蚤死、早死なり、豪、冒すなり、養息、やしなひふやすなり、渋渭、二水の名なり、蕃息、ふえますなり、適嗣、嫡嗣に同じ、よつぎなり、務息、ふえますなり、適嗣、嫡嗣に同じ、よつぎなり、務息、ふえますなが先人の酈山に住まひし者の女をいふ、胥軒、中衍のが先人の酈山に住まひし者の女をいふ、胥軒、中衍のいふ、附庸、方五十里に滿たざる小國なり、諸侯に附いふ、附庸、方五十里に滿たざる小國なり、諸侯に附いふ、改にいふ、邑山之秦、邑はむらをさたらしむるをいふ、之は非子を指す、秦は地名なり、

秦嬴生秦侯秦侯立十年卒、生

使命を果したるとを報告する也、石棺を得たるとを 報するに非ず、故に報にて句を切るべし、處父、畫廠 の八駿の内の四駿なり、穆天子傳を案するに 驥の上 に赤の字を脱す、又溫は盗の誤なり、一説に溫を盗と に赤の字を脱す、又溫は盗の誤なり、一説に溫を盗と は淺き青色、驊駵は花の如き赤色、縣耳は耳の色の綠 は凌き青色、驊駵は花の如き赤色、縣耳は耳の色の綠 なるものなり、西巡狩、繆王十七年に西の方崑崙丘に 至りしをいふ、樂、西王母に見えて樂みしをいふ、歌、 一上、太 几 生。大 路、大 路 生。非 子、以。 一上、太 几 生。大 路、大 路 生。非 子、以。 子 居。犬 丘、好。馬 及、畜、善、養。息 之、 ・造父 之 寵、皆 蒙。趙 城 姓 趙 氏、非 子 居。犬 丘、好。馬 及 畜、善、養。息 之、。 ・ 造父 之 寵、皆 蒙。趙 城 姓 趙 氏、非 子 居。犬 丘、好。馬 及 畜、善、養。息 之、。

命ずる所にして其子孫の盛大となるべき豫言なり、

にぬ、途に其の因縁深き霍太山に葬りぬ、蜚廉

6

しめむと、處父とは蜚廉の號なれば蜚

前

に北方に使し

て其禍を逃

れしは、是れ畢竟天

が般

死

紂王の靈を招きて之に報じたり、此の壇を

得たり、其の銘に曰く、上帝處父をして殷

れば、報ずる所無し

、是に於て祭壇

を霍太山に設

け

作る時

棺を

與らしめず、汝に

石棺を賜ひて汝

の子孫

3

光華

73

使

をも幷せ殺したり、此より先 き父の蜚廉 は紂の為にを以て般の紂王に事ふ、周の武王の紂を伐つや、惡來蜚廉亦善く走る、故に 父子倶に其のも ちまへの體力む、惡來大力ありて手もて虎兕をも裂くといふ、父の方のほとりを領有す、中潏蜚廉を生む、蜚廉惡來を生

して北方に在りしかば、還り來るも殷王旣に亡び

至。造父、別居、趙、趙、衰其後也、趙氏、自、蜚廉生、季勝、以下五世、以趙城、封、造父、造父族由、此為。

中行の支孫

を中るといふ、西

戎に

在りて西

溫驪・驊駵・縣耳の四馬 を得て王に獻ず、繆王西方に高き馬使ひなれば周の繆王に事へて愛幸せられ、驥 0) 0 季勝を生みてより已下五世にして造父に至る、 0 り、日々に千里を長驅して周に歸ることを得て れしなり、 は蜚廉の子惡來より起り、趙は惡來の 封ず、造父の一族此に由つて趙氏となる、さて蜚廉 虚に乗じて徐の偃王亂 を作す、造父 繆王の御者とな 巡狩し、西王母に見えて樂みて歸ることを忘る、其の む、孟增は周の成王に事へて愛幸せらる、是を宅 には悪來の外に復子あり、季勝といふ、季勝 為す、阜狼衡 父を生む、衡父造 父を生む、造父は名 子孫なり、故に趙と秦とは其の祖を同じくして、秦 時に別れて趙城に居りて趙氏起る、趙衰は即ち其 衛を平げぬ、終王其功を嘉して趙城を以て造父を を得て王に獻ず、繆王西方に 弟季勝より分 偃王 阜狼 造父

とあり、證すべし、壇、紂王を 祭る壇 なり、而報、報は五百五十一に史 記を 引きて「時飛廉爲」紂使『北方』」 通ず、西垂は西方のほとりなり、材力、生れ 有ち たる通ず、西垂は西方のほとりなり、材力、生れ 有ち たる【字解】 其玄孫、中衍の ひこまご 也、西垂、垂は陲と

者多く世に時めきて途に諸侯と爲りぬ、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、の子孫或る者は中國に在り、或る者は夷狄に住せり、

為らしめて之に妻を與ふ、帝大戊より後は、中行の子孫遂に世々功ありて殷の國を輔佐せり、故に嬴姓の者多く世に時めきて遂に諸侯と為りぬ、と、歎辭なり、ア、と訓む、賛、佐なり、タスクと訓む、香、歎辭なり、ア、と訓む、賛、佐なり、タスクと訓む、李、歎辭なり、ア、と訓む、賛、佐なり、タスクと訓む、喜、となり、ゴレと訓む、孟戲中行、名と號となり、二人に非ず、致、召すなり、人に非ず、致、召すなり、人に非ず、致、召すなり、一人に非ず、致、召すなり、一人に非ず、致、召すなり、

有,之,而孟

佐,戊

國、故。

以

中 衍

之

多,後

下 戲 之,中

御、昌昌、二、生、服、拜大、贊、以、當、子日、子是、受、出、禹、取、夏孫若二為、佐、乃、功、 使、衍、桀,桀或、木、人,柘舜,妻、其、 御鳥於之在,實一,翳調之吉,身鳴時中費日,舜馴姚遂人條去,國氏,大賜,鳥姓 致。言大夏,或其廉、姓,獸,之 使、帝廉、歸、在、玄實。嬴志鳥玉 御、太玄商夷孫鳥氏、獸女、後 顯。遂而。戊孫,爲、狄日,俗大多,大嗣 遂世妻、聞、日、湯、費費氏、費馴費

其の卵を機上に隕せり、女脩此の卵を呑みしに 身内の美女を妻す、大費之を拜し受く、大費舜を佐 大いに世に興る者あらむとすとて、乃ち費に帝舜の す、故に其れ汝に黑き旌旒を賜ふ、汝の子孫には將に 能く子を輔けしを以てなりと、帝舜曰く、ア、汝費、 其の功巳に成就せり、帝舜禹に玄き圭を錫ふ、禹圭をとなれり、大費は 禹と倶に洪水を 平げ土地を開きて 能く禹を輔けて功をなさしめたり、予れ汝の功を嘉 受けて曰く、予れ獨能く之を成せるに非ず、亦大費の 女華といふ、女華大費を生む、此の時は已に帝舜の して子の大業を生めり、大業少典國の女を娶る、 脩といへる者あり、女脩嘗て機を織りしに、 り、一を大廉といふ、是れ鳥俗氏なり、二を若木 ふ、是れ費氏なり、若木の玄孫を費昌といふ、其 栢翳と爲す、舜之に姓を嬴氏と賜ふ、大費に子二 鳥獸を調へ馴す、鳥獸之に從ひて能く馴れ服す、 て其の先祖の 世系を尋 たた 82 に顓頊の 孫 懐胎

祀,周,苗,射,帝,封,太 君、其、山、比、後、東

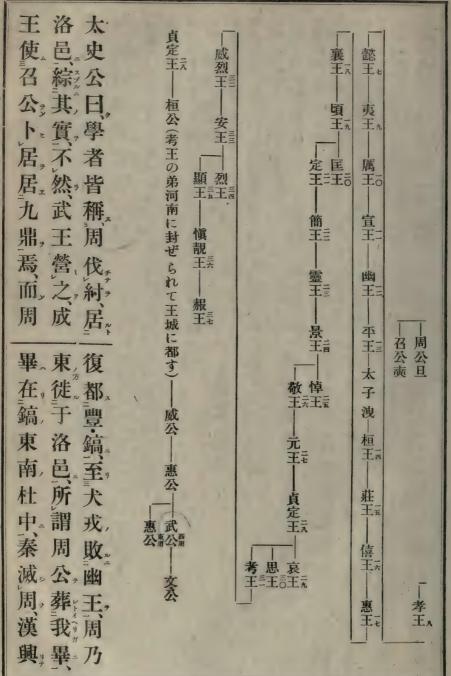
其事實を綜合して考ふるに然らざるなり、即ち武王てより後は洛邑に居りしものゝ如く稱せり、されど【講義】 太史公曰く、從來の學者は皆問が紂を伐ち な れども、間も無く周は復豐鎬に都を遷せり、後に犬戎 をトひて洛邑に九鼎を居るしめて殷の頑民を徙 の時に洛邑を營み城き、成王の時に召公をして居 -7. h れば畢は鎬京の東南の 成王の時既に鎬に都せしことは成王が周公薨ずれ 幽王を敗るに至りて、東の方洛邑に徙りしなり、其 孝武帝は將に 太山に山祭 せむとして、東方に巡狩 我が畢に葬れと謂へりしによりて明かなり、何と て河南に至り、周の 秦周を滅し、漢興りて九十有餘載に至り、時の天 へる者を三十里の地に封じ、號して周の子南君 後裔を捜し出し、其の子 甘棠の林の中に在ればな

> と曰ひ、之を列侯に比べて周の祖先の祭祀をなさし めたり、

我の字を子の字に作れり、杜、甘棠なり、一本に記なり、周公葬…我畢、是れ成王の語なり、尚書周官据なり、すゑ置くなり、鼎を据うるは都を奠むる 作る、苗裔、遠き子孫なり、 【字解】 ト、居、居城をうらなふこと、居、九鼎、居は 一本に社に

紀第 五.

成。已女生、脩、秦 亦成。華、子、女之 帝女大脩先本 錫,華 業,織"帝 日。日。禹典女裔,
杏:非。平。之脩孫,
爾予、水子,吞日, 費能,土,日,之,女



题,其君,於周,周君·王赧卒、周民 周,公於黑狐,後七歲,秦莊襄王 周,公於黑狐,後七歲,秦莊襄王 越,東西周,東西周皆入,于秦周 既不,祀、

をして先づ手近なる 無からしむ、是に於て秦の れより T の精鋭 0) 公は秦に奔りて頓 盡く其 秦をして負黍より陽城に 諸侯 西 五十九 0 周 と攻守同盟して秦に當らむことを約し 0 秦 領色三十六と人口三萬とを秦に獻ず、秦 8 師を率ねて伊闕を出でて秦を攻 恐れて・ 年 に秦は韓の陽城 首して其 西周を攻めしむ 之に倍き、齊・楚・燕。韓・魏・趙 昭 王大いに怒りて將軍 通ずることを得る の秦に反 きし罪を受 の負っ 西 素を取 周忽ち敗れ 3

> 公 周 其 百六十七年にして遂に盡き果てゝ宗廟を祀る主だも 周 3 於て彼 3 * を 0 0 に至れ 滅したれば、東西の周の領域は皆秦に入れり、 遷す、後七蔵にして秦の莊襄王は遂 九鼎及び貴重なる實器を取りて西周 欲せずして遂に 献上 赧王と倶に卒しぬ、而 0 物を受 文武の建設し け て武公 東方に たる周祚も凡て三十七主 を周に歸す、 して西 亡げたり、是 周 0 是の 民 の文公 は 1: 於て 東西 秦 歲 周 * 民 0 君 是 兩 思 12 武

鋭師、精鋭の軍 者は六國なり、上 (字解) 73 周 を從といひ、東西を横といふ、戰國の時南北に國 b 君 0 ツキ 民なり、 武公と赧王となり、 倍、そむくなり、從、 ラ の軍 と訓 西周公、武公の太子の文公なり 六國 師な む 同盟し 周 b の世 西周 して秦に當るを合從とい 倶に 系左 合從連横の從なり、南 西周に居れ 0 如 周民 する 北

帝嚳 露 公叔 弃(后稷) 궲 類 古公亶父 不空 季 歷 公劉 文王 武 成王= 差弗 毀喻 昭 E 穆 公非 共王太 高 屋

秦王旦焉爲王聽東方之變秦王也重公東公東公東,是周常不失,重國之交也秦

還 秦の己を輕んぜんとを思ひて途中より其の行を引き 下に强國といはるゝ 事を聽かしめんと、此の如くいへば秦王必ず公を重 に言ふに若かず、即ち臣請 欲するの時なり、故に公急に 秦王に見えて 下の如く なり、今秦は三晉 るや重んずるやは未だ行かざる中は知るべからざる 時周其の相國をして秦に行きて一交を通せしむ、相國 て、周は是を以て秦の変を取る所以なり、且つ現今天 h せり、客あつて相國に謂つて曰く、秦の公を輕んず ぜん、公を重んぜば是れ 五十八年に三 晉力を協して秦を の兵を受けて其の は秦のみにあらず、東方に齊の 秦は周を重 ふ王の為 に東方三晉の戀 國情を知ら んずるとにし 防ぐ、 むと 此

>秦、周は之を以て変を秦に得るをいふ、周聚、周最に指す、三晉は秦より東方に位す、故にいふ、周以取 ことなり、三國、三晉に同じ、東方之變、東方は三晉をんずるをしょ。第二十人 交を 同じ、重國、循强國といふが如し、 んずるをいふ、還二其行一、相國の一行を途中より還す【字解】 三晉、韓魏趙なり、秦之輕、秦の 相國 をかろ んじ、丼せて周を信じて兵を發して三晉を攻めたり、 失はざること)なるべしと、是に於て秦は相國を重 收めたれば、是れ周 固 より 在 3 あ b は常に秦齊二强國の交誼を 而 して 公子 周 聚

周 周,陽 銳 五 城_ 師,恐 西 出责倍。九 周, 秦 伊 年. 昭 秦取韓 闕, 與 秦怒、攻、諸頓使秦侯 萬、秦 令, 約。陽, 猴, 猴, 猴, 猴, 猴, 首,將 秦受。軍受,罪、摎 其、盡、攻、得、天 黍、獻、獻、西 通、下、西

しければ、周君を勸めて秦に入れし公は必ず罪せら善ければ周君必ず之を以て公の功とせん、若し交惡ず喜ばん、是れ公に因つて周は秦の変を得るなり、交

王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざるこそ王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざるこそれは必ず東の方齊に合はん、是れ秦の兵力は周に弊なば必ず東の方齊に合はん、是れ秦の兵力は周に弊なば必ず東の方齊に合はん、是れ秦の兵力は周に弊なば必ず東の方齊に合はん、是れ秦の兵力は周に弊なば必ず東の方齊に合はん、是れ秦の兵力は周に弊なば必ず東の方齊に合はすこととなるべし、然れば秦は天下に王たること能はじ、今天下の諸侯は即つて秦を下に王たること能はじ、今天下の諸侯は即つて秦をとれるに秦之を知らずして周を攻めんとするは是れ秦は天下と與に弊えて、教命天下に行はれざらむと東は下と戦に撃るて、教命天下に行はれば、其の實は上に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざること王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざること王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざること王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざること王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざること王に謂って曰く、王の為に計れば、周を攻めざること

ふ、聲、名に同じ、 《字解》 秦攻、周、秦 將に周 を攻め むと欲するをい

秦欲知三國之情公不如急見謂相國日秦之輕重、未可知也、國之秦以秦之輕重、未可知也、不如急見,

に周を攻めむとす、而して周の周最秦

在 威を示せよと、秦果して兵を出す、馬犯又梁王に謂 守らむと宣言す、而して其の 實は九鼎 るには若かざるなりと、梁王曰く、善しと、遂に卒を じて、後日事を舉ぐるも且に信ぜざらむとす、今周 む、而るに今王の卒をして周に在らしめて、秦兵境上 るに都合惡し、放に T たむとするなり、王試みに兵を境上に出して梁に兵 するなり、馬犯因つて叉秦王に謂つて曰く、梁の卒を して周 に在 りと聞き、直に之を引き還さば 諸侯皆疑心を生 る卒をして周の爲に城を築かしめて事端を隱匿す むとせしが、今周王の病癒えたれば、九鼎を搬出 日く、曩に王に約して周王の病める間に九鼎を入 しと、梁王曰く、善しと、遂に犯に卒を與 せるは周を守らむとするには非ずして將 て犯 に城かしむ、 の身上に就きて謀 後日可なる時あるを待ちて復 ることあつて之を援 を取らむと欲 15 へて周を 周を伐 3

は謀なり、犯の身の上を謀りて九鼎を入れたる報にり、謂"梁王"、詐言を以て 梁王に謂ふなり、圖」犯、圖と魏とが華陽にて結びたる盟約なり、馬犯、周の臣な【字解】 華陽約、華陽は魏の地名なり、華陽の約は秦【字解】

なり、マサニと訓む、匿、隱すなり、 問を守ると宣言すなり、不サニと訓む、匿、疑心を生ずるをいふ、且、務まなり、而して其の實は然らざるなり、觀、之、觀は示すなり、一して其の實は然らざるなり、觀、之、觀は示なり、而して其の實は然らざるなり、觀、之、觀は示なり、不サニと訓む、匿、隱すなり、

恶, 勸, 周君,入秦者必有,罪矣、 歷, 本后養地,秦王必喜,是公功,交秦交,交善,周君必以爲,公功,交秦交,交善,周君必以爲,公功,交人,不,若,譽,秦王必喜,是公有,四十五年,周君之,秦、客謂,周最,四十五年,周君之,秦、客謂,周最,四十五年,周君之,秦、客謂,周最,四十五年,周君之,秦、客謂,周最,四十五年,周君之,秦、客謂,周最,四十五年,周君之,秦、客謂,周最,四十五年,周君之,秦、客谓,周最,四十五年,周君之,秦、客谓,周最,四十五年,周君之,秦、客谓,周最,四十五年,周君之,秦

さむと申し出 づるに若か ざるなり、かくせば秦王必ずるに因って周の應の地を以て太后の湯沐の邑と爲子周最に謂つて曰く、公秦王の孝を譽め、其の孝に處子周最に謂つて曰く、公秦王の孝を譽め、其の孝に處

こと無からむには如かざるなりと、こと無からむには如かざるなりと、からないで、前功盡く弃てられむ、故に公病と稱して出づるたび、前功盡く弃てられむ、故に公病と稱して出づるたび、前の事と過ぎ、韓に背兵に將として伊闕の塞を出で て 兩周を過ぎ、韓に背兵に將として伊闕の塞を出で て 兩周を過ぎ、韓に背

請以九鼎自入於王王受九鼎門用王病、若死則犯必死矣犯問君曰、請令梁城周乃謂梁王四十二年、秦破華陽約、馬犯謂。

講義 城 則 かしめむと、乃ち許言を以て梁王に謂つて曰く、周 馬 ふ先づ 犯周君 背きたれば周其れ 病む、而して强兵隣邑に迫まれり、王若し死なば ち敗れん、犯も亦必ず死を免れざるべし、よ 四十二年に秦は魏の華陽の 周の九鼎を以て自ら 王に入れん、王九鼎 に謂つて曰く、秦既に華陽の 危からん、請ふ 梁をして周 約を破りぬ、周 約を破

す、梁若し破れなば、周は危からむ、君何ぞ速に 人を將として伊闕の塞を出でて魏の都の梁を攻めむと及び離石の地を略取せるは、是れ皆自起の力なり、彼及び離石の地を略取せるは、是れ皆自起の力なり、彼及び離石の地を略取せるは、是れ皆自起の力なり、彼人講義』 三十四年に蘇厲周君に謂つて 曰く、近頃秦【講義】 三十四年に蘇厲周君に謂つて 曰く、近頃秦

弃てむと戒めたりきとな も中らずんば前に百發百中したる所の功一時に盡く 撥り矢は鉤らむ、此の如くなりては汝如何に 名人たに息めずんば、子の氣力は少時にして衰へ倦み、弓は を扑し、北の方趙の藺・離石を取れるは公の功多くし りとも射損じ無しといふ べからず、若し一發たりと て恰も養由基の百發百中せるが如し、しかるに今又 百發百中し、觀る者は皆之を善しと褒む、此の好時期 るなり、夫れ柳の葉を去ること百歩にして之を射て、 なり、左右の觀る者數千人皆善く射るといふ、其の中 1 つて弓を釋て劒を溢つて曰く、客は何を以て 能く我 1 んと云ふにはあらず、子に射の心得を教へんとす の左手を張り支へ右手を屈めて筈を持つことを教 て始めて射を教ふべしと、養由基之を聞き答め、怒 射を数へんとするかと、客答へて曰く、吾は子に射 夫ありて養由基の旁に立ちて曰く、善し其の腕前 の葉を百歩を隔てゝ之を射るに百發して百中する といへる弓の名人あり、其の一例を擧げむに、細き を説くには下の如く言ふべし、そは昔し、楚に養由 して白起を説きて其の前進を阻まざるや、其 り、今公の韓魏を破り師武 0)

對する勢の挫くること、といふ、告楚病、韓兵の弊れ弱りしを楚に告ぐるなり、見行、已は止むなり、行は東周に行きて甲と粟とり、已行、已は止むなり、行は東周に行きて甲と粟となり、韓相國、公仲侈なり、楚病、楚の兵の弊れ弱りし

韓に 甲兵と むや三箇月にして陷れんとせしに、今五箇 せば、周の國政を以て悉く子に聽さむと、代是に於て 周に徹すると勿らしめむ、又能く君の為に 之を患へ給ふ、臣行きて能く韓をして甲兵と の君恐れて蘇代を召して此事を告ぐ、代曰く、王何ぞ **雍氏の地を圍ましむ、是れ此の如くすれば韓は** は東周を困め の邑を得んと、周君曰く、子まことに能く此 の地を関む、韓果して甲兵と栗とを東周に後す、 弊れ弱りしことを楚に告ぐると同じきなり 證なり、しかるに今相國は甲兵と栗とを 行き相國の公仲侈に見えて曰く、 取ること能はざるなり、是れ楚の兵 栗とを東周に徴すればなり、楚是に於て雍氏 西周と東周と已に仇あり、故に むとて其臣成君に謂つて楚をして韓 此 の事の楚に聞ゆるならば、是れ 楚の 西 周 韓の 月 雍氏 周 0 高都 *

を周 に借らざればなり、

南君於使人,秦 河,於不,君,往,而秦出,將。故。 攻周兵,以,令

かざらむ、周君若し秦に入らずんば秦必ず敢て河を此の時周君は韓兵の南陽に在るを口實として秦に往 カラ の君を召すは、是れ將に王の南陽を攻めむとして之 せず、故に人をして韓王に謂はしめて曰く、秦の 蹴えて南陽を攻めざらむと、 【講義】 秦、西周の君を召す、西周の君往くことを欲国 [2] 出して之が防備をなさいるや、王、南陽に出兵せば 郷導たらしめむとするなり、王何ぞ速に兵を南陽 西周

於秦、韓兵の南陽に在ることを口實として秦に往 悪、往、心中往くことを欲せざるな り、為 辭、 かっ

盡。以,國東矣。德、多。周, 東 周 東名器 說 與 韓 西 而, 重 西寶日、戰,周王西韓 之實、必可以, 西周、或為, 西周、或为, 西周、或为为, 西周、或为为为。

て東周を伐たざるをいふ、可…以德…東周、恩德を【字解】 案>兵、案は按なり、おさふなり、兵をお寶を盡して韓に歸せしめむと、 ば、一は以て恩徳を東周に施すべく、一は以て西周 國なれば名高き器物貴重の珍寶多し、今王兵を 講義 て出でて唯四周を助くるのみにして東周を伐たずん 東周の爲に韓王に説きて曰く、西周はもとの天子 東周と 西周と戦ふ 、韓王西周を救ふ、或る・ かへ

赧 謂成君、楚圍雅氏、韓徵甲 に施すべしとの意なり、

東周

都なり、解除すべからざるをいふ、言、コ、ニと訓む、郢、楚の解除すべからざるをいふ、言、コ、ニと訓む、郢、楚の當時の諸侯皆此の如くいへり、不可解、周秦の關係のを拜呑せむと欲す、而して外面周に睦じくせり、故に

を管す、絶、周、兩周の間を横に渡るをいふ、信東周、なり、周君、東周の武公なり、不、令、下文の七十二字との周、東西の周なり、借、之不、借、借は貸す是れ周は地を韓に受けて命を秦に聽けるなりと、 て巧辭を以て周をして地を受けざらしむること勿れ 亦之を敢て受けずんばあらず、秦も亦必ず人を遣し ふるは將に周を秦に疑はしめむとするに在り、周も いひ、又人をして秦に謂つて韓の强ひて周に地を與 疑ひ又周を信ぜざらむ、是れ韓は伐たれざるなりと とをして楚に行かしめざるや、さすれば秦必ず楚を てなり、此の時に當り公何ぞ周に地を與へ又質と使 T 謂って曰く、君何ぞ人をして韓公叔に謂って 秦の敢 ざれば秦に畏る、是に於て史脈一策を案じて周君 んとす、周恐れて之を借さむとすれば韓に 周の地を横絶して韓を伐たむとするは東周を信じ いはしめざるや、此の如く韓と秦とを説かしめば、 東西 兩周 0) 間に 借りて將に韓を伐 畏れ、借

解、解は巧解なり、聽…於秦、命を秦に聽けると同樣な東の字戰國策に於に作る、贋使、人質と使者となり、

との意なり、即ち秦をして楚を疑ひ周を信ぜざら

なり、資、給し與ふるなり、左成、楚の臣なり、 、庶子、妾腹 0 子なり、適、嫡と通ず、司馬蘭、楚の 臣

不。者解。秦.周 周。八 周 楚 共を出す、而して楚は周の 断を攻む、楚行きて韓を救

> 故に を疑 との楚の為にするよりも甚しと言ふ者は、皆是 周 て楚に親しみ、必ず野に入り來らむと、 善として事々に周を善しとせば、周は遂に秦を絶ち ずして之を善とし、又秦に親まずとも亦つ、に之を 如 は せむとして と秦とは其の地元來相近ければ、秦は常に周を弁 皆周秦々々といへり、是に由て周も亦周秦の 3 入らむ、此れ秦が周を取るの精妙なる計たるなり 7 周 足の禍に 關係の 王の爲に計らば、周が秦に ひて秦に入らしめんと 疑は カラ 解除すべからざるを知りて、早晩必ず秦 外面は周に睦じ あらずや、今説客の周が秦の為にするこ 周 必ず楚を懼れて却つて秦に憑らむ、是 兵せ と疑 欲する者なり、而し くせり、故に當時 ひ給ふぞ、王に 親しむとも之を疑は の諸侯 此の て今 n 吞 周 周

周為秦之禍也、何ぞ周が秦の為にすると疑ひ給ふぞ、以、思ふなり、將、伐、之、周を伐たんとするなり、何以、と解」宜陽、韓の地名なり、教、之、韓を救ふなり、 當 む、是れ即ち楚の禍なりとの 諸侯の語 周 老の禍なりとの意なり、謂,周秦,也、を疑ひなば周必ず楚を懼れて秦に入ら り、周 と秦との 地 相 近 秦常

を伐たんとす、蘇代周の為に楚王に説きて曰く、王

以て秦の為にすることと疑ふ、故に楚將

周

時周

に兵を出す、而して楚は周

の宜 爲

之太王看,都,立,立,四 子, 日, 五, 君_知 不派庶如。子 周。赧 成如。子西日,以,毋周, 地, 適 武 立。公公 周 果、微。周 周 立、告、也、不、答、答、系、如、是、答、如、是、爲 馬 共 治。子, 翦 ,是、爲。謂, 赧 答,請請公請楚 死、徙,延。定

【字解】 東西周、平王より後の西周は豊鎬にし公子咎を立てゝ太子と爲しぬ、 T 西周 ざるなりと、よつて此の謀の如くし して之を賀せむに地を獻上せむと請はし 請ひ問ひ、其の公子答に意あるを知らば 先づ周の君に誰をか立てんと欲するかと其の内意 敗し、且つ周と楚との交際を益、疏からし ことは不可なり、周若し聽かずんば是れ公の 智略 と、左成曰く、始より太子に地を與へて請はんとする 答に與へて太子と為さむと請ふには如かざる ふことに就きては種々の謀あれども、地を以て公子 王に謂つて曰く、今公子答を周の太子と爲さむと請 ども嫡として立つべき者無し、故 に居て東周と號す、而して赧王は徙りて西周に都す、 豫め朝に含ませ置きたる楚の微意を以て直 武公の共太子死にね、後には五人の庶子 公は河南に 西に分れて天下を治む、即 居て西 周 と號し、少子惠公は洛邑 1= 楚の司馬翦は楚 たるに周果 其の むる め ち ん、故 時始 楚を 如

傾靚王立ちて六年にして崩じぬ、子の赧王延立つ 四十 年に 顯王崩じて子の慎靚 王定立 つ、 は洛陽なり、西周武公、戰國策には東周武 周は洛陽なり、顯王より後の**西**

史記第一

周本紀第四

間は河

南に

T

周

公

1-

作 東 て東

歲 合。史 儋、見、秦獻 別別五 覇王者出焉、 百載復合、合十 周 與秦 國

後別れたり、別れて五百載にして復合はん、合ひて十 史儋秦の獻公に見えて曰く、始め周と秦國 と合ひて 年にして崩じぬ、子の烈王喜立つ、烈王二年に周の太 是の歳に盗人楚の聲王を殺しぬ、安王立ちて二十六 七年にして霸王たる者出でんと、 講義 二十四年に威烈王崩じて子の安王騎立つ、

昭王の五十二年に西周の君臣二十六城を獻じて秦に 周に事へて未だ諸侯に封ぜられざ りしをいふ、別と らなり、始皇を指す、 入りしまで凡て五百十六年なりき、霸王、諸侯のかし | 百載、大數を擧げたるなり、襄公諸侯と爲りてより秦の襄公始めて封ぜられて諸侯となりしをいふ、 始周興、秦合而別、始め合ふとは秦の先祖 から

年、烈王崩、弟扁立、是為顯王、

其、秦、 秦周 Ŧi. 九 後 惠 惠 年。王 致。年_

三十三年に秦の惠王を賀す、三十五年に文武の 胙を 秦の孝公に賜ふ、二十五年に秦の孝公諸侯を のはたがしらと稱す、九年に文王武王に祭りし胙を為す、顯王の五年に秦の獻公を賀す、是の蔵獻公諸侯 【講義】 十年に烈王崩じて弟の 扁立つ、是を顯王と 其の後韓魏齊趙の諸侯皆自ら王と爲る、 秦の惠王に賜ふ、四十四年に秦の惠王自ら王と稱す、 ね、二十六年に周より秦の孝公に伯の稱號を賜ふ、 周に會

【字解】 文武胙、文武は文王武王なり、胙は祭に供

殺して自立す、是を考王と為す、此の哀・思・考の三王王立ちて五箇月にして少弟の鬼は思王を攻めて之をの叔は哀王を襲ひ殺して自立す。是を思王と爲す、思疾立つ、是を哀王と爲す、哀王立ちて三箇月にして弟

傳に考ふる所なきなり、澤、周の地名なり、三晉、韓・博・王子朝の諸侯に告げしむる語に「穆后及太子壽傳に王子朝の諸侯に告げしむる語に「穆后及太子壽傳に王子朝の諸侯に告げしむる語に「穆后及太子壽傳に王子朝の諸侯に告げしむる語に「穆后及太子壽は壽なり、春秋昭公十五年の左傳に「六月乙丑王太子は皆定王の子なり、

名代立、威公卒、子惠公代立、乃 沒續周公之官職、桓公卒、子威 以續周公之官職、桓公卒、子威 以續、周公之官職、桓公卒、子威 以續、周公之官職、桓公卒、子威 以表、一五年崩、子威烈王午立、

> 命韓魏趙爲諸侯、 惠公威烈王二十三年九鼎震、 惠公威烈王二十三年九鼎震、

氏に命じて諸侯と爲す、民に命じて諸侯と爲す、神の九鼎鳴動す、韓魏趙の三號す、威烈王二十三年に周の九鼎鳴動す、韓魏趙の三郎な、威公卒して子の惠公代り立つ、惠公其の少子と輩の対しの左り、桓公卒して子の 威公代の考王其の弟を河南に封じて是を桓公 と 為し、以ての考王其の弟を河南に封じて、子の威烈王午立つ、初【講義】 十五年に考王崩じて、子の威烈王午立つ、初【講義】 十五年に考王崩じて、子の威烈王午立つ、初

原に執る、名は掲といふ、河南に居城す、電、地名なり、東周惠公、名は班といふ、采を電に食み政を洛陽に執る、故に東周といふ、悪公は父の號を襲ひしなり、震、鳴動なり、 一十四年崩、子安王騎立、是歳、 一十四年崩、子安王騎立、是歳、 一十四年崩、子安王崎立、是歳、

王、王、弟、去有。立。王孔而思叔疾其定仁子 定王 殺,入, 其敬 立、卒、君元四簡王十公 襲。立。地,王 之自 王 殺,是, 公,周二十十十 是,五 哀 爲,十 年八三年 哀八 王, 而 年、定 一九年年、燕 **王此三王** 第嵬攻殺 自 嵬潭立。王 王 文,是,立,崩,智定崩,楚齊殺,爲,三長伯,王子,滅,田 思思月,子分,介元陳,常

王の十三年に晉其の君厲公を殺して子周を周より へ、立てゝ悼公と爲す、十四年に簡王崩じて子の靈王 二十一年に定王 崩じて子 の簡王夷立 つ、簡 迎

に入れぬ、三十九年に齊の田常其の君簡品ば敬王晉に奔れり、十七年に晉の定公遂 のて敬王を周に入れしかば、子朝は臣と為り、諸侯 に晉人の敬王を周に入れて位に即かしめんと 其 n 1 周に城を築きぬ、十六年に子朝の徒復亂を起した ずして周の澤の地に居れり、四年に至り晉諸侯 や、子朝は已に自ら立ちたれば敬王は入ること能は 朝を攻めて丐を立つ、是を敬王と為す、さて敬王 を攻めて之を殺しぬ、猛は悼王のことなり、晉人は子 又國人は長子の猛を立て、王と為す、子朝よっ も丐を王位に立てんと欲して 子朝の黨と爭ふ、弦に と欲す、而るに此の蔵景王會。崩じたれば、子丐の 1-0 至り景王は其の長庶子の子朝を愛して之を立てん の地を分ち有てり、二十八年に定王崩じて 長子去 敬王崩じて子の元王仁立つ、元王八年にして崩 十一年に楚陳を滅す、此の歳孔子卒しぬ、四十二年 入れぬ、三十九年に齊の田常其の君簡公を殺しぬ、 十八年に穆后と太子壽と早く卒したれば、二十年 しね、二十七年に靈王崩じて子の景王貴立つ、 心立つ、靈王の二十四年に齊の崔杼其 、子の定王介立つ、定王十六年に三晉智伯を滅し に敬王を周 する 元 て猛 n は 年

年、楚莊王卒

に達の主王本」。、 にきの主王本」。、 にきの主王本」。 にきの主王本」。 にきの主王本」。 にきの主王が明宝を覆して天下を奪はんとするの下心なり、定王 周宝を覆して天下を奪はんとするの下心なり、定王 周宝を覆して天下を奪はんとするの下心なり、定王 西宝を覆して天下を奪はんとするの下心なり、定王 西宝を覆して天下を奪はんとするの下心なり、定王 のまた、 の

「でいる」、投込、群、巻の世家に洋なり、「でいる」、投込、群、巻の世家に洋なり、大い名、次は軍隊の二日以上宿營することにいふ、ヤドルと訓む、洛は洛水のほとりなり、問ことにいふ、ヤドルと訓む、洛は洛水のほとりなり、問ことにいふ、ヤドルと訓む、洛は洛水のほとりなり、問ことの式なり、次、洛、次は軍隊の二日以上宿營することをの東王卒しぬ、

帝の九鼎の小大輕重を問ふは周室を覆さんとするの 下心なり、設以、解、楚の世家に詳なり、 一十一年定王崩、子簡王夷立、 一十一年定王崩、子簡王夷立、

陽、河北なり、書諱、魯の春秋に書して諱 みしなり、たがしらなり、河内地、楊樊・溫原・攢茅の田なり、河格式によりて異れり、鬯は香酒なり、伯、霸に同じ、は主に同じ、諸侯の天子に見ゆる時に執る所の玉なり、は字解】 急、叔帶の王と爲りしことなり、珪鬯、珪は「字解」 急、叔帶の王と爲りしことなり、珪鬯、珪は

弟瑜立是為定王、 等崩,子匡王班立、匡王六年崩, 襄王崩、子頃王壬臣立、頃王六 事,,子匡王班立、匡王六年崩,

立つ、是を定王と爲す、正崩じぬ、子の匡王班立つ、匡王六年にして崩 じぬ、弟の瑜王崩じぬ、子の頃王壬臣立つ、頃王六年に して 崩 じて 開 じる、とを定王と爲す。

王凰鄭,鄭伯降,已而復之十六 次洛,使人問,九鼎王使王孫滿, 次洛,使人問,九鼎王使王孫滿, 定王元年、楚莊王伐陸渾之戎、

即ち叔隗なり、【字解】降、招き下すなり、其女、翟の國君の女なり、ふ、是れ從ふ可からずと、王亦聽かざりき、

しかば此の難起れり、されど是の時に當りて 我れ若く、吾れ昔上數、王を 諫めたれども、王從ひ 給はざり帥ゐて來り責め、王の大夫の譚伯 を 殺 せ り、富辰曰六年に至り王は翟后を黜けたり、是に於 て 翟人兵を六年に至り王は翟后を黜けたり、是に於 て 翟人兵を (講義) 王は富辰の諫を用ひず遂に翟の叔隗を娶り

し出でて敵に當らずんば、王我を以て諫の用ひられ兵を率ゐて翟の難に討死せり、初め惠后 は 其の子の 兵を率ゐて翟の難に討死せり、初め惠后 は 其の子の 以て、翟人は遂に容易に周に入りたるなり、襄王敵すべからざるを知り、乃ち鄭に出奔す、鄭人王を氾の地 に居らしむ、是に於て子帶立ちて王と為り、襄王敵すに居らしむ、是に於て子帶立ちて王と為り、襄王敵すけたる所の翟后を娶りて與に溫に居れり、

の手兵なり、開、誘ひて道案内するをいふ、でで窓を防がずんばの意なり、懟、怨むなり、其屬、其しなり、誅、責むなり、譚伯、周の大夫なり、不と出、出しなり、誅、責むなり、譚伯、周の大夫なり、不と出、出しなり、誅、責むなり、譚伯、周の大夫なり、祖后はたる所の翟后を娶りて與に溫に居れり、

晉、二十年、晉文公召、襄王、襄王、州、王而誅、叔帶、襄王乃賜。晉文公召、襄王、乃賜。晉文公召、襄王、乃賜。晉文公

み質を與へて父に質を與へざりしを怨みとせり 於て襄王は其の大夫の游孫と伯服とをして鄭に往 不可なること無からむやと、され ど王聽き入れざり 伯服を囚へたるなり、王よりて怒りて翟の兵を以て M T 鄭に叛きて衞に 弟の叔帶は齊より周 講義 滑を衞に復へさしめむことを請ふ、鄭人二大夫を を伐たむとす、富辰諫めて曰く、凡そ我が周の都を て今又襄王が衛に滑を與へたるを怨みとす、故に の時、父の厲公與りて力ありしに、惠王は虢公にの の怨を以て大いなる功を弃てむとし給ふは、乃ち へて還さいるなり、是れ鄭の文公は、昔し惠王の 方洛陽に徙しゝ時は晉鄭の二國に是れ依り、子 亂にも又鄭の力によりて 平定せり、而るに今少 九年に齊の 服從 1= したるを怨みて之を伐つ、是に 桓公卒しぬ、十二年に王の異母 復歸す、十三年に鄭は滑人

古

は、東徙、都を東の洛陽に徙しゝをいふ、 一子ことあれば伯服の上に游孫の二字を脱せしなら、服、周の二大夫なり、囚』伯服、左傳僖公二十四年に「執っ服、周の二大夫なり、囚』伯服、左傳僖公二十四年に「執っ とかっきなり、囚』伯服、左傳僖公二十四年に「執っ」とあれば伯服の上に游孫の二字を脱せしなり、游孫伯後之に叛きて衞に服す、故に之を伐ちしなり、游孫伯後之に叛きて衞に服す、故に之をいふ、

今此の親しき鄭を奔てゝ彼の疏き翟を親まむとし給桓・莊・惠の四王は皆鄭の功勞を受け たり、而るに王王命に從ひて功を樹てたるを德と為し、將に其の 女王命に從ひて功を樹てたるを德と為し、將に其の 女怪 講義》 十五年に王は鄭の罪を問はんとて罹の兵を【講義》 十五年に王は鄭の罪を問はんとて罹の兵を

卒。舅氏、宋 之 命, 辭, 嘉、以,國乃,禮。高 禮, 在、暖。若、有 勳,焉 毋, 陪 還、逆、臣 逆、臣節司
朕、敢。春也 卿, 命。辭、秋,有,管王來,天 仲 日,承,子仲,

卿之

而

採らむとす、朕が命に逆ふことなかれと、されど管仲 ありて、何れも皆上卿の禮遇を承けり、若し春秋を て曰く、臣は賤しき役人なり、齊には已に天子の命を 桓公は其の臣管仲をして戎を周に平げしめ、隰朋を 日く、伯舅の使臣、余れ汝が武勳を嘉して上卿の禮を 王何を以て之を禮せむとするや、陪臣敢て辭すと、王 て聘享の時となし、二子の來りて王命を承くる 時は 受けて其の守臣となれる二人の國子と高子との在る て我を晉に平げしむ、襄王管仲の武功を大なりと 、上卿を以て管仲を禮遇せむとす、管仲之を辭し 叔帶の衛に戎翟中國に侵入したれば、齊の

> 伯舅の使臣のことなり、伯舅とは天子が異姓の諸侯 故に諸侯の臣を陪臣といふ、またけらいなり、舅氏、 は重なり、諸侯の臣は天子より見れば二重の臣なり、 り、節..春秋、節は時なり、春秋の二季を聘享の時とな なり、有司、役人なり、天子之二守、天子の命を受けて【字解】 上卿、三卿の上位なり、即ち執政大臣のこと を算稱する語なり、乃、汝なり、 すの意なり、來、國高二子の來朝するをいふ、陪臣、陪 齊の守臣となれる 二人なり、國高、國子と高子とな

怨孫歸九惠伯子。年 襄王 帶 叉文 使 周怒、怨、公游復

賜濟桓公爲伯、

3 附くものは 編く舞へり、鄭號の二君之を聞きて 大い 鄭の櫟の地に遷り居りね、是に於て五大夫は釐王の を伐つ、是によつて惠王溫に犇りしなり、王已にして 五. の大臣の園を奪ひて囿と爲しぬ、故に大夫の邊伯等 莊 崩じぬ、子の惠王閬立つ、惠王二年に王溫に奔る、初 王三年に齊の桓公始めて諸侯に長たり、五年に釐王 弟類を立て、王と爲す、而して其の舞樂は、樂に舞の 8 殺し、復惠王を朝に入れて位に即かしむ、惠王十年 怒る、惠王の四年に 鄭君と號君と俱に伐つ て王頽 人相俱に亂を起し、謀りて燕衞の師を召して惠王 王に寵せられたり、惠王の位に即くに及び、王は其 莊王姫妃姚氏をかたより 愛して子の 類を生む、種 桓公に餌を賜ひて伯と為す、 十五年に莊王崩じぬ、子の釐王胡齊立つ、釐

の、多くは草果を樹う、囿は苑の外園に垣のあるもたより愛するなり、園囿、園は苑に籓を設けたるも、室解】 霸、諸侯の長なり、はたがしらのこと、嬖、か

ふ、伯、霸に同じ、なり、編舞、樂に舞のある所のもの を周く舞ふ をいぬり、編舞、樂に舞のある所のもの を周く舞ふ をい國・邊伯・詹父・子禽・祝跪なり、犇、奔るなり、櫟、地名の、多くは禽獸を飼育 す、共にソノと 訓 む、五人、蔦

生叔 三年 王欲誅叔帶叔帶奉齊、 襄 王 母、五 帶、有麗 叔 帶 蚤死、後 與成 於 翟謀, 崩、子襄王鄭立、 惠 母, 伐。襄 畏。惠之,后

齊桓公使。管仲平。戎于周、使。濕田。本語とは己れの地位を奪はれんことを畏れたり、三年に至いふ、惠后叔帶を生みて惠王に寵せらる、よつて襄王は己れの地位を奪はれんことを畏れたり、三年に至正の母蚤〈死にたれば惠王後妃を迎ふ、之を惠后と王の母蚤〈死にたれば惠王後妃を迎ふ、之を惠后と王の母蚤〈死にたれば惠王崩じぬ、子の襄王鄭立つ、襄【講義】二十五年に惠王崩じぬ、子の襄王鄭立つ、襄

字解】怨、一説に怨は宛の誤なり、宛は鄭の大夫なーーギュー

めて桓公を立つ、十三年に王親ら鄭を伐つ、鄭王師と【講義】 八年に魯の子允公子輩をして隱公を殺さし 年に桓王崩じて子の莊王佗立つ、莊王四年 は莊王を殺し 桓王の肩を射て傷つく、桓王去り歸る、 て莊王の弟の王子克を立て

0)

子克、莊王の弟なり、しなり、是れ桓公五年の 、魯の子允が公子輩をして隱公を 左傳にある繻葛の役なり、王郎桓王、桓王の肩を射て傷け

鄭燕故惠莊王釐十 衞、大王、王 崩。王 櫟節,夫卽。嬖。子,三 年. 立、伐。邊位、姬惠年、莊
整惠伯奪、姚美王齊、王 王、等其、生、閬、桓崩、惠五大子、立、公子、王人臣、頹、惠始、釐。 王,王,等其,生。閬。桓 年。頹,王人臣,頹,惠 鄭為、犇、作、園、頹王霸、王與王、溫、亂,以,有、二五胡 就樂。已。謀。為。龍年年齊君及居。召。囿。及。初。釐立。

宜日を立つ、是を平王と爲して周の祀を奉ぜしむ、平 に於て諸侯乃ち申侯につきて共に故の幽王の太子の 后を廢し太子を去つるや、申候怒りて網・西夷・犬戎 用ひ、且つ申后を廢し太子を去てたればなり、王の申 佞巧智にして善くへつらひ利を好む、而るに 王之を む、國人皆王を怨む、何となれば石父の人と為りは となり、天下の政權は諸侯の旗頭に由つて左右せら 王立ちて都を東の方雅邑に遷して戎狄の寇を辟けた **燧火を擧げて諸侯の兵を徴せども、諸侯は之を信ぜ** の兵と與に幽王を攻めたり、幽王寇の至れる を以て る」なり、 は弱きを拝合す、就中齊・楚・秦・晉の諸國始 り、此の平王の時に周室衰微し權威無く、諸侯の强き ずして至らざるなり、申侯遂に幽王を驪山の 下に殺 、褒姒を廣にし、盡く周の財寶を取りて去りぬ、是 幽王は號石父を卿と為して政事を行 めて强大 は 便

む、方伯、一方の諸侯の長なり、はたがしらなり、の父なり、繒、國の名なり、賂、財實なり、タカラと訓と、諛、へつらふなり、申侯、申國の君なり、卽ち申后【字解】 佞巧、便佞巧智なり、卽ちへつらひ上手のこ

平平王崩太子洩父蚤死立,其一四十九年、魯隱公即,位、五十一

【字解】 蚤死、蚤は早と通ず、蚤死は平王の崩ぜざる林を立つ、是を桓王と爲す、平王崩じぬ、太子の洩父早く死に けれ ば洩父の子の『講義』 四十九年に魯の隱公位 に 卽く、五十一年に

前に早く死にしをいふ、

因也、 易許田、許田天子之用。事太山 易,許田、許田天子之用。事太山 是一種王平王孫也、桓王三年鄭莊

る田にして天子の太山を祭る時に用ふる 所の 田な近き鄭の茄とを易ふ、さて此の許田とは 許の地に在始めて來朝せしに、桓王は之に禮せざりき、五年に至始めて來朝せしに、桓王は之に禮せざりき、五年に至始めて來朝せしに、桓王は之に禮せざりき、五年に至

端に著けたる薪を燃すことなり、此は窓

墨, 从, 其後不信, 諸侯益亦不寇、褒姒乃大笑、幽王說之為數。 五則學, 烽火, 諸侯悉至至而無

【講義】褒姒は性笑ふことを好まざるなり、幽王は、大き、ととなしね、而るに幽王故無くしてとなりない。 ことを物足らず思ひ、如何にもして其の笑はむことをった。 ことなしね、而るに幽王故無くして烽燧大鼓を設けて豫め諸侯と相約して、窓の來るあれば烽火を擧げ大鼓を撃ちて、其の兵を徵すこととなしね、而るに幽王故無くして烽火を擧げければ、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればば、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればば、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればば、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればば、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればば、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればば、諸侯之を實となして悉く來り援けむとす、來ればなるやうになれり、

伯。彊、戎奉、故、去、王、王侯王皆幽 炬火を燃して窓の れるを知らす為めに晝間 幷。寇,周"幽於,驪"學。怒,用。怨。王 祀,王,是山,烽 與 之,石 諸 下火,繒 又父 廣 徵 西 廢 為 石 之王子侯 來れる 褒兵夷申人父, 時。立;宜乃 に用ふるなり、燈は夜間に 周東。白,即,姒。兵大后,佞 を知らすなり、のろしなり、 始室遷、是,申 盡,莫。戎、去。巧,卿、 大衰于爲疾取、至、攻、太,善,用、政微維平而周。遂幽子,諛、事, 政微雅 平 由。諸邑、王、共、路。殺、王、也、好、國 方侯、辟,以、立。而幽 组织 申 利,人

六七

周本紀第四

よつて之を執へて戮殺せしめむとす、夫婦の者之婦にして是の孤と矢房とを賣る者ありといふ、宣 りて之を奈何ともすべき無しと、 伯服を太子と 褒姒を見て之を愛し、子の伯服を生む、是に於て竟に れたる所の女子は元褒國より出でし 72 聞き逃亡せむとする途次に、郷に後宮の童妾 むとするや遠き昔より旣に此の如く 成れり、今に至 を褒姒と爲すと、幽王の三年に當り、王後宮に行きて て褒國 を聞き、不関に思ひて之を拾ひ上げ、夫婦は遂に亡げ 后及び太子宜臼を廢し、改めて褒姒を后妃と爲し、 て其 の君罪あり、よつて童妾の弃てたる所の女子を王 る所の れて褒君の 周國を亡さむと、是に於て宣王之を聞 に奔れ て謠 女子を奔てたり、 あやしき見の路に出でたるを見、其の夜啼 為し ひて日 り、此の棄子長じて美女となれり、時に 罪を贖はんと請ふ、さて此 ゝなり、太史伯陽曰く、周室を禍 、山桑 而 の弧箕木の矢房を なり、よつて是 の弃てら くに を の弃て 者之を りて せ

なり、 服、箕は木の名なり、服は矢房なり、是器、檿弧箕服 孕、は 其 其 笄、簪をさすこと、女子許嫁して後に簪をさすなり、 だかなり、課、さわぎ呼はるなり、玄電、蜥蜴のことな り、戮、罪するなり、郷、向なり、妖子、妖は一に天に作 けかはることなり、女子は七歳に り、既鹹、既は盡なり、コ なり、厲王之末、厲王の強に出奔せし蔵を指す、裸、は 陳ぶなり、策告、策文を以て龍に告ぐるなり、憤、ひつ く所の沫なり、是れ龍の精氣なり、布、幣、幣帛をしき ことなり、二君、二人の る、天は幼少なり、褒人、褒國の君なり、贖、あがなふ の地の出來事を記せり、故に此の史記は古記錄 の名と為す、史記、當時諸侯の國 て生れたる美女を褒人より幽王に納れ らむなり、麋狐、麋は山桑なり、狐は弓なり、箕 先君なりの意なり、様、龍 ŀ ぐクと訓 して に史官 む、幽 かっ は 犯 るを以て は齒の抜 3 て各 な 0

姒不好笑幽王

嬖愛、嬖ほかたよりい つくしむなり、褒姒、

姒は夏と同姓なり、神

龍の沫より化

ざるなり、厲王是に於て婦人をして裸に して之に向て之を觀るに、龍の沫庭中に流れて除ひ去る べからとなかりき、而るに厲王の末に至りて此の櫝を 發き めむとせしなり、しかるに沫は化して蜥蜴と為りひさわぎ呼ばしむ、蓋し不淨を以て之を 厭ひ去ら 沫のみ残れり、よつて之を憤に滅めたり、夏の亡びし 是れ夫無くして子を生みたるものなれば、不祥を懼 歯の盡く抜け變らざる者之に遭へり、既にし て此の 愈、王の後宮に入り込めり、此の時後宮の童妾の未だ に傳へて、夏殷周の三代の頃は敢て之を發き見るこ 時は此の器を殷に傳へ、殷の亡びし時は此の器を周 ね、策文を以て龍に告げければ、龍うせて其の吐きし とトひしに、乃ち吉なりき、是に於て幣帛を布き ず、よつて其の吐く所の沫を請ひ受けて 之を藏めむ むと三者孰れか吉なるかをトひしに、何れも吉なら 君なりと、夏帝之を殺さむと之を去てむと之を止め 童妾は笄して孕みぬ、蓋し蜥蜴の精に感じたるなり、 夏帝の庭に止まり、自ら言つて曰く、余は褒國の二 日 、昔し夏后氏の衰へしより後に、二つの 周は將に滅亡せむとすと、さて其の 神龍ありて 記 陳

帝夏夏史褒之族伯三 卜,帝,后 伯 姒,欲 女。服,年 殺,庭氏陽為廢而幽幽 水の 之,而之讀。后,申爲。王王 土、即ち夏の桀王般の サニ代之季、ア名なり、竭、涸るゝなり、三代之季、ア、水源なり、流、潤といるの意なり、原、水源なり、流、潤といるのでは、カサルと訓む 極なり、數 與言。衰、史以,后,后、欲、嬖禄。去,日,也、記,伯并。後廢、愛、等 之,余、有,日。服,去;幽太褒 與,褒二,周、爲,太王子,姒, 始 止之神亡太子得太褒 きかか 之,二龍矣子,宜褒子,姒 てモナを 莫。君、止。昔周、白、姒、母、生。 吉,夏於自,太以,愛。申子, す、夏な在、

> は崩れたり、 て亡びんと、案の如く是の年に三川の水は涸れ、岐山 るに天命の弃つる所のものは其の數の極を過ぎずし れ十年を過ぎざらむ、是れ十は數の極なればなり、而 崩れ河涸るゝ時は、是れ國家滅亡の徴候なり、川水涸 必ず山川に依つて立つなり、而して其の依る 所の がれり、川源塞がれば水必ず涸るゝなり、夫れ國家 亦夏商二代の末季の王の如し、而して 其の川源又塞 て夏亡び、黄河の水涸れて商亡びたり、今周王の徳も せずして何をか待たむや、昔し伊洛の二川の水涸 ず、從つて民其の財用に乏し、此の如くんば國は滅亡 なり、若し土中に水の潤ふこと無ければ萬物生育 して山崩れむ、若し此の如くんば國の亡びんこと其 るれば山は必ず崩るゝものなれば、今度幾年を 經 ち國必ず亡ぶ、其の理次の ことによりて萬物生育し、民之を用ふることを得 如し、夫れ土中に水の

いふべきをかく婉曲にいへるは恭敬の意より 出づ、父、周の太史なり、民之亂」之、實は「王之亂」之也」と西省西安府に屬す、三川、淫・渭・洛の三川 なり、伯陽、「字解」 西周、鎬京なり、武王以來の都 なり、今の陝

戎 募るべきにあらずと、宣王聽かず、卒に民を數へて新 徴集せむとて民數を太原に計へ むとす、仲山甫之を 失ひて兵勢頓に手薄となりにければ、更に新兵を めて曰く、 兵に大敗す、宣王既に南國より参加した 來り窓するに遭ひしを以てなり、而して 王師 九年に至り王千畝といふ地に戰ふ、是れ 人君たる者は親ら民の數を計へて兵を を聽かず、遂に 親耕せざりき、 3 軍 兵

天地叉は先祖の祭祀に供ふる所の穀を作るを禮とな【字解】 籍、籍田 なり、籍は 借る なり、天 子 は 親ら兵を徴集せり、 借りて田を耕すなり、故に之を籍田といふ、而して 後なりといふ、料、兵、料は數ふなり、兵の數を計へて 大敗なり、姜氏戎、西戎の別種なり、堯の時の四岳 の千畝は地名なり、前の千畝と同じからず、敗績、文公、虢は國の名なり、文公は諡なり、戰二千千畝、侯は百畝なり、千畝、籍田のことなり、上に詳なり、 廣きは千畝なり、よつて天子の籍田を千畝と稱す、 、故に唯鍬入れの禮を爲すのみに止め、後は民力を 、然るに天子は政事を親裁すれば田を耕すに暇無 其

亡,待,也

伊

洛

竭流而

所

演,

民

亡、財 土

原

必

陰。

而

111

原

必竭。

夫:代

國、之

而亡。民原失,於陽不陽立。四商何,用。必其是伏失,甫幽十 新兵 を徴集するをいふ、 其,日,王 塞,所,有,而 地 序,周 不 片。 將 年、 能、 若。 將 上 年、 西 不 塞、填浆震 出。過、亡、陰、其、矣、 今 亡,也,三 夫。陽川 周, 迫。序,夫。 夏乏水失實而 民天川 图 亂、地 震,不 河用。演作在,是能、之,之震, 竭,不,而陰陽蒸也氣。伯

と為して國人を退かしむ、是に於て太子竟 に 難を脱者に於てをや、乃ち其の子を以て王の太子 の 身代り者に於てをや、乃ち其の子を以て王の太子 の 身代り者に於てをや、乃ち其の子を以て王の太子 の 身代りと為して紹みず、假

は諸侯を指す、險、危險の中に在るをいふ、む、王、厲王を指す、以下同じ、懟、怨むなり、事ゝ君、君む、王、厲王を指す、以下同じ、懟、怨むなり、事ゝ君、君、之之解】 太子靜、宣王なり、驟、數なり、シバく、と訓

召公周公二相行,政,號曰,共和十四年,厲王死,于彘,太子, 新長,於召公家,二相乃共立,之, 輔之,修政,法,文武成康之遺風、 輔之,修政,法,文武成康之遺風、 諸侯復宗周、

に代りて國政を行ふ、號して共和といふ、二相の共和【講義】 厲王彘に出奔せしを以て召公周公の二相王

籍於千畝號文 弗。聽三 敗績 九年 公練明、宣王不够 於太 戎、宣 也、宣王不聽、卒 戰 原、仲 王 旣 畝. ウシナと 山 南 師 甫

田を千畝に親耕せざりしかば、虢の文公之を 諫めて【講義】 宣王の十二年に魯の武公來 り 朝す、宣王籍

助なり、最後に据ゑて「カ」と訓むに 同じ、即ち、其能の地なり、沃は肥えたる地 なり、其與能幾何、與は語り、隰は低くしでしめりけある地なり、衍は下く平なち公卿以下のことなり、原隰衍沃、原は廣 平の 地 ないて之に任ず、故にいふ、修」之、之は前文 を 承く、即以て之に任ず、故にいふ、修」之、之は前文 を 承く、即 六十歳以上の老人の稱なり、艾 は 五十歳以上の者 法の書を 即ち樂官の長なり、史は太史なり、此の二人は陰陽禮 正の道をつくすをいふ、瞽史、此の瞽は樂太師なり、語、他人の褒貶の語言を傳へ誦するをいふ、盡、規、規めくらなり、誦は箴諫の語をそらんずるをいふ、傳 外幾何與」の文に同じ 稱なり、此にては師傅のことなり、師傅は耆艾の者を 掌りて其の義を王に数ふるなり、耆艾、耆は は箴 語をそら h ずる をいふ、傳 0

乃相與 乃相與畔、襲<u>厲王厲王</u>王不<u>聽、於是國莫</u>敢出 上厲王出, 本於

口を防ぎしかば、國人敢て言を出す者無かりき、され 王遂に召公の言を聽 かず して相變らず民の

> ど三年の後民の怨恨破裂し、相興に畔 ふ、厲王逐に彘の地に出奔せり、 والاز T 厲王

を襲

子、怒、夫、太王、聞、厲太况、事、子、王之、王之、王、子、王、乃太子。王、光、置、子、王、乃太元。王、者、其、從、圍、子 乎,乃以其子代王太 微而不,譬慰怨而不 公之 怒。

我を以て諫の用ひられざるを讐として怨み且つ怒り 吾れ國人の請をいれて王の太子を殺 王之に從ひ給はざりしを以て此の大難に及べり、今 王を諫めて利を専らにするの害を力説 さむとす、召公其の家臣に謂って曰く、昔し吾れ る、國人之を聞き知りて召公の家を圍みて太子を殺 ・ 歳の亂に厲王の太子の靜は召公の家に匿。 3 せり、 ば、王は其 而るに

に山川あるが如し

、土地に山川あ

るが故に財物始め

て是より出づるなり、

又猶土地に

原隰行沃

あ

3

如

しめ、瞽史をして陰陽禮法の義を教誨せしめ、師傅を 盡さし 朦をして筬諫の語を諷誦せしめ、 任し りて擾亂の憂無きなり、夫れ民の口有あるは、猶 り、是を以て政事能く行はれて些しも悖らず、世治 如くして而る後に王は之を取捨選擇して之を行 して以上の事を修めて己を補佐せしむる の褒貶の語言を傳誦せしめ、近臣をし を以て上の玩物を諫めしめ、庶人をし をして での臣をして詩を獻じて政の得失を言は 故に水を治む に叛亂を企て て書を上りて諫 しむ、故に天子の政を聽くや、公卿より上士に至るま め、腹をして公卿上士の獻じたる詩を賦せしめ、 て能く其の思想を吐露せしめて怨恨の弊無から の災無からしむ、民を治むる者は、民の自由に放 樂曲 め、親戚をして己が足らざる所を察して を作りて和平の氣を調べ る者は、水を決して能く流通せ 、天下を騷擾せしむるに 至らむ、是の め め、樂太師をして箴戒の文を上 百工をして其の しめ、史官をし て規正の道を て自由 L なり、此の め、樂師 に他人 補は ふなな 地 -

> む、此の 思想を吐露するが故に民の善敗始めて是より起るな むやと、 防げば、民の怨恨益、積りて何日しか爆發 を成就して實行せむとす、而るに若し之が なり、夫れ民は之を心に慮りて之を口に宣べ、 の者に備へなば、民の財物衣食を豐に り、故に天子は民の善とする所を行ひて民 づるなり、故に民の口あるや、其の 土地に原隰 如くむば、其れ如何ぞ久しく安寧を保つべ 術沃あ るが故に衣食始 日より自由 する所以 めて是 0) 口を壅ぎ 期 遂に 敗 に其 來ら の道 る所 り出 H

(字解) 使、此の字以下の四十三字に係るなり、列士、上士な 賦、腹は眸子無きめくらなり、賦は公卿上士の獻じ 箴は戒めなり、樂太師は箴戒の文を上 史、史官なり、師箴、師は樂太師なり、樂師 り、瞽、めくらなり、樂師は瞽を用ふ、故に樂師 なり、ツ を瞽といふ、獻、典、典は曲の誤 て流れしむるなり、宣、放つなり、 る詩を賦するをい ヒュと訓む、為、水、為は治むるなり、導、通じ 彰、防ぐなり、壅、ふさがるなり、潰、壞 ふ、朦誦、朦は眸子あ な 自由にさす b 、曲は樂曲なり、 to 3 が視 をいふ、腹、 の長なり、 力無き のこと 72

たり、 ひ、喜びて召公に告げて日 はずと、 く、吾能く謗り を止

てしらすこと、弭、止むなり、王を怨む情を目に見あはせて怨みの情を表すなり、王を怨む情を目に 之を召して謗る者を監察せしむるなり、以、目、目をへて其の神靈を承け、見聞せざることを察知す、故に なり、ほこりあなどるなり、誘、そしるな 修傲、侈は奢侈なり、おごりなり、傲は傲慢 巫、衞國の巫なり、巫はみこなり、巫は神 1= 政

人、獻。公民,如。防。公 傳書,卿,者之、水,日, 語。師、至"宣"是,水是、 箴於之,故。壅,鄣。 臣、瞍》列使、爲,而之, 盡,賦。士言、水,潰。也 規,朦園、故。者傷。防。 親誦。詩,天決、人,民 戚、百 瞽、子, 之, 必 之 補。工、獻、聽、使、多。口, 察。諫、典,政,導,民 甚、

史、使、為、亦於召

口,而,財於,食是口 酌。瞽 其。宣、用是於,乎也、 焉史 與之,衣乎 是出,猶 是,教 能,於食,與平猶土 以,海。 者行。生、其、之 幾 何,成也善,口有。有。行、艾 之 夫。而 原 山 行。民備。宣、隰川之,虚,败。言,衍。也、若。之,所也、沃,财 民 壅,於以 善 也用 之 其心產敗衣於,有過

も甚しきなり、川ふさがりて一時に水の 防ぐも亦此の如し、即ち上を怨み恨むることの極 なり、さて民の口を防ぐことの危 誇りの止みたるには非らず、王の强ひて 之を防ぎし 召公王の言を聞き又諫めて曰く、是れ を傷め害ふこと必ず 莫大なり、民の口 きは水を 潰え次する 防ぐ 民

て、独且つ大難の來らむことを懼るゝにあらずや、故に后稷と文王とは能く周 道の基を成して、以て今日に后稷と文王とは能く周 道の基を成して、以て今日王にして之を 行ひ給はい、其れ歸服する 者鮮少とな事有する者にても、猶之を盜と稱するなり、而るに今王にして之を 行ひ給はい、其れ歸服する 者鮮少となりなむ、榮公若し引き 續きて重く 用ひらるれば周は必ず衰へ敗れむと、厲王聽かず、卒に榮公を用ひて卿必ず衰へ敗れむと、厲王聽かず、卒に榮公を用ひて卿必ず衰へ敗れむと、厲王聽かず、卒に榮公を用ひて卿必ず衰へ敗れむと、厲王聽かず、卒に榮公を用ひて卿必ず衰へ敗れむと、厲王聽かず、卒に榮公を用ひて卿

上と爲して政事を用ひしめたり、 「字解」 榮夷公、榮は國の名なり、良夫は字なり、名終といふ、芮良夫、芮は國の名なり、良夫は字なり、名終といふ、芮良夫、芮は國の名なり、良夫は字なり、名を伯といふ、卑、衰微なり、載、成すなり、怒、怨み怒るなり、上下、天地なり、頌、詩經周 顯 思文 の 篇なり、なり、所は汝なり、燕底を指す、何意は衆庶をし て其のり、爾は汝なり、燕底を指す、何意は衆庶をし て其のり、献」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいふ、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいる、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいる、卿士、公卿にしてり、載」周、周道の本を成すをいる、卿士、公卿にしてり、献」周、周道の本を成すをいる、卿士、公卿にしている。

情を表はせり、厲王は之を以て己が合の行はれしも者無く、道路に相會ふ者目を見あはせて其の怨恨ので、正怒りて衞國の巫を召して謗る者を監察せしむ、巫監察して告ぐれば王則ち之を殺すなり、三十四で、巫監察して告ぐれば王則ち之を殺すなり、三十四で、巫監察して告でれば王則ち之を殺すなり、三十四で、巫監察して告でれば王則ち之を殺すなり、是に於ずと、道路に相會ふ者目を見あはせて其の政令に堪へを謗る者解しなり、よつて國人は皆之を怨みて王に許る者が、強虐の政を「講義」 厲王は利を好むのみにあらず、暴虐の政を「講義」 厲王は利を好むのみにあらず、暴虐の政を「講義」 厲王は利を好むのみにあらず、暴虐の政を

用。盗、專、乎、日、彼、之百周、王、利、故。陳、天、來、物、必而其、能、錫、立、也、無 行之、其 以也、厲王不<u>聽</u>、卒以九之、其歸鮮矣、榮八 周,周,烝 以,是 以業 子公謂,王懼、大克、懼 若、之,學、難、雅、配、怨

基本なり、叉天地の萬物を成す所の泉源たり、而るに を専有することを好みて、其れが爲に大難 日く、王室は其れ將に衰微せむか、夫の榮公は自ら利 ことを知らざるなり、さて利とは百物の生ずる所の を親み近けり、大夫の芮良夫属王を諫属王位に即きて三十年の間、利を好み の生ぜむ て祭 めて

道の といふことなからしめたりと、又大雅の詩に曰く、 を立て、以て衆庶をして其 天に配合せり、即ち后稷は利を逼く布きて我が衆庶 ありし后稷を思ふに、其の徳の大且つ美なる彼 弘めて、萬民と共に便とせざるべからざるなり、かく なり、然るに榮公は此の大難に備ふることを知ら や、故に之を專有すれば、之を怨み怒る所の者甚 何れも皆己れ利を專有せずして之を衆庶に布き施し 王は利を布き弘めて之を衆庶に施しゝかば、遂に らむことを懼るべきなり、故に周頭に曰く、彼の きに至らしめて、猶且つ日々恐れつうしみて怨 して神も人も百物も皆其の天性を得ずと云ふこと 人に王たる者は將に利を開き導きて之を天地に布き に教へなば、王の蓮命も其れ能く久しからむや、夫れ るなり、楽公は之を己に爲すのみならず、是を以て さむとすればなり、何ぞ祭公獨り之を專有すべけむ となれば天地の百物は人々皆之を取りて己が用 之を専有すると有らば、其の害毒や少か 、怨み怒る所の者多ければ大難の生すること必然 基礎を成したりきと、この頭といひ大雅とい の天性を充分に盡し得

で、この子に、ない。、不、取、草、取り盡さいるをいた、不、発、一族、多は三なり、一族は一父の子なり、不、参、一族、多は三なり、一族は一父の子なり、下、米、不の字符文なり、國語周語には不の字無し、下、米、不の字符文なり、國語周語には不の字無し、下、米、不の字符文なり、國語周語には不の字無し、下、米、不、参、一族、多は三なり、一族は一父の子なり、京、婦、女、婦は難るなり、水郎はか身の類なり、

王室遂衰詩人作刺、数王之時、

刺れり、の王室遂に衰へぬ、故に 詩人始めて詩 を作りて之をの王室遂に衰へぬ、故に 詩人始めて詩 を作りて之を【講義】 共王崩じて子の 懿王 囏立つ、懿王の時に周

の詩を作るをいふ、【字解】作、刺、刺は諷刺の刺なり、そしるなり、諷刺

王孝王崩諸侯復立懿王太子懿王崩、共王弟辟方立是為孝

立、是為夷王夷王崩,子厲王

胡

王と爲す、夷王崩じて子の厲王胡立つ、是を孝王と爲す、孝王崩じて諸侯復懿王の太子爕を立つ、是を夷爲す、孝王崩じて諸侯復懿王の太子爕を立つ、是を孝王と

導。 教。也、矣、 利,王、所、天 而 王 怒。地 地知,其、公,厲 大將大 之 所難。卑。夫郎。載夫,乎。芮龙也、利、夫、良三 怒。地。 百 之,能,多,物 皆 久。而 乎 不 而 榮 夫 百 公、諫、年、 将-有。物 者夫。備、取。專之好,屬好。也、王、大焉、之,所專、王、利, 使、人、難、何、其、生、利,日、近, 日、近、王、荣、 者以,可,害也而,将是,專多天不

本紀第四

り、甫刑、甫侯の作修したる 刑法の 意なり、尚書にはり、従ふべし、即ち三千六百兩なり、屬、犯罪の種類な声、近は一本に六に作れり、尚書呂刑にも六に作れ一一本に、明本、重きは之 に増すなり、即ち輕きはは罪の輕重によりて 差等を 附くるなり、即ち輕きはは罪の輕重によりて 差等を 附くるなり、即ち輕きはに罪の輕重によりて 差等を 附くるなり、即ち輕きは

呂刑に作れり

物、終必亡、康公不,獻、一年共王

を納るゝに堪へざるなり、況んや汝の如き小身の 汝何の徳ありて之を納るゝに堪へんや、王だも猶之 物なり、然るに今衆此の美麗の物を以て汝に贈れり、 は一族の女三人を用ひざるなり、さて粲とは美麗の行には衆庶に下りて之を虐げざるなり、王の婦官に ひ、人の三人以上を衆といひ、女の三人以上を粲とい 此の三女を王に獻せよ、さて、獸の三匹以上を羣とい ひぬ、康公の母之を案じて康公に謂つて曰く、汝必ず の康公王に扈從す、此の時三女ありて康公に犇り從 共王繁扈立つ、共王或る時涇水のほとりに遊ぶ、密國 女、同姓の三女なり、犇、奔るなり、媒介を待たずして【字解】 涇上、涇水のほとりなり、密、國の名なり、三 王に獻ぜざりき、後一年にして共王は密を滅せり、 必ず亡びむと、されど康 公は三女の 色に惑ひて遂に に於てをや、小身の類にして ふ、王の田獵には羣を盡して取らざるなり、諸侯の 穆王立ちて五 十有五年にして崩じぬ、子の 物を備ふるときは終に

其の罪 さしむ、 吟味することは各刑の如し、淫刑の疑しきは赦して、 する罰金 狀を明かにすべきなり、截鼻の刑の疑しきは赦して、 そも 之をなすにはよくく吟味して其の罪狀を明か 疑しきは赦して、其の罪 光を恐れて軽々しく刑を用ふること勿れ、又墨刑の 獄を聽き治むることをなさいれ、當に敬みて天の 其 りては其の輕重により規定の二千四百 なり、さて又審に吟味すると無くんば、始めより其 6 より彼は るも、之を爲すには きも亦赦すこ と有れ、凡べて疑しき罪 は赦 きなり、 きなり、又審に吟味 の罪に相當する罰金三千六百兩を出さしむ、而し 尚重ねて訊 、而して之をなすにはよくく吟味して其罪 に相當する罰金千二百兩を出さしむ、而して 二千四百兩を出さしむ、而して此 かくくなりとて其の素行を上申すると \mathcal{T}_{L} 又増すこともあるべし、而して其の慎 截足の刑の疑しきは赦して、其の罪に相 刑 の疑 問して其 しきは赦 よくく吟味して然る後に決す して事實明かとなり、 に相當する罰金六百兩を出 の言ふ所を稽へて決すべき すこと有れ、五罰 雨より減 の罪 すことあ 且つ衆人 の疑 にす 重に ずる 威 0

るゝ刑なり、いれずみなり、百率、率は鍔に同じ、鍰な黥辟、黥は墨刑なり、辟は罪なり、類を裂きて墨を入不」疑、不聽の誤なり、尚書呂刑には疑を聽に作れり、行ある者なりと申し立つることなり、訊、問ふなり、 る犯罪 罰に處する犯罪の種類は 一千箇 條あり、劓罰に處すよく吟味して其の罪 狀を明かに すべきなり、さて墨 劇時、鼻を截る刑なり、倍灑、灑は行文なり、倍は百季 り、有い衆、衆人より上申し る犯罪の種類の總數は三千箇條なり、以上の刑法を 條あり、故に五刑の疑しきを 赦して之に 罰金を科 すべきなり、死刑の疑しきは赦して、其の罪に相 り、重さ六兩の 名づけ 百箇條あり 種類は五百箇條あり、宮罰に處する 犯罪の種 る罰金六千兩を出さしむ、而して之をなすにはよく の倍なり、即ち千二百兩なり、臏辟、足を截る刑なり、 て之をなすにはよくく一吟味し て甫刑といふ、又 0 種 簡信、審に吟味し 類は 、大辟の罰に 称なり、故に百率 千箇條あ 一に呂刑とも稱するなり 處する犯罪 て彼 て事實を明にすることな り、臏罰に は平常かくしの素 て其の は黄金六 の種類は 處する 罪狀を 百兩なり 犯罪 明 百箇 は三 か 1-

り、居、處置なり、オクと訓む、兩造、兩は囚人と證人人」とは賢人を選びて之を用ふるに非ずやの意なり、非二其 ふるの道なり、何擇非..其人.、擇は選ぶなり、何擇-む、有國有土、國土を有つ諸侯なり、祥刑、善く刑を ぜざるをいふ、五過、五等の過失罪なり、官獄内獄、官出して其罪を 贖はしむる をいふ、不」服、罰金刑に應 るをいふ、五罰、五等の罰金刑なり、卽ち五刑に處すり、大辟は死刑なり、不ゝ簡、吟味するも五刑に應せざ に入るべきの辭なり、簡信、簡は簡核なり、詳に吟味となり、造は至るなり、師、衆の獄官なり、五辭、五刑 ふ、五刑、墨・則・則・宮・大辟是なり、墨は入れずみな するとなり、エラブと訓む、信は證據 は嘗て同官たりし者を裁きて罪 きを、證據不 、則ははなきるなり、則は足きるなり、宮は淫刑な 内獄は女より取り入りたる為 為る、刑辟、刑罰なり、吁、歎辭なり、ア、一甫侯、穆王の相なり、初は呂侯たりしが 充分の為に各、一等を減じて、黄金を 刑罰なり、吁、歎解なり、 に其の罪を輕くす を輕くすることな 充分なる 何擇と をい

刑、屬 屬、赦、其、其、其、其、無、其、五 百、 其, 罰、罰、罰、簡、審、刑 罰、五 倍 倍 百 不 克。之 千、 宮 劓 倍、 百、五 罰 不 克。之 差、 之 罰 千百 屬 卒さ 李; 、吟味 之 閱 刑 實也 閱 之屬三千、命 屬、 閱 干、 百、 實。實。其 罪 其,其,罪,罪,威,衆罰罪,罪,官臏,劓*黥;惟,之 臏 を明 辟 罰 墨 大辟,辟,辟,辟,熙,疑,有,有,龙, 辟, 之 之 日,罰、屬、 罰 之疑: 赦。赦。赦。赦。稽。赦。

征したり、されど犬戎の

君能く之を禦ぎたれば王何

とのみを

ラグ

と訓

穆王は祭公の諫を聽

刑。安、來、何,百次有 【字解】 不、睦者、睦 は和ぎ 親むなり、ャハも周に服事せざる者あるに至れり、 得て歸りたり、是より後荒服の者來朝せず、又諸侯に の得る所無く、惟四匹の白狼と四匹の白鹿 不陸は和ぎて周に服事せざるをいふ、 辭、 言於 非、其 非、告,法 宜. 簡 與、兩 罰、五 祥 刑

刑,

何,何

敬、非、

其,爾

造

具

師

五.

不派服、

過

五罰に處するまでの科にあらざれば、五過に正し正して金を以て其の「罪を贖はしむべきなり、若し 處置すべきことは如何にせむ、是れ其の宜しきに從 は何ぞや、是れ刑罰を恐れつゝしむにあらずや、當に 害は嘗て同官に在 其の罪を赦免 るに五刑に處する證據未だ充分ならざれば、五罰に らず、而して其の五刑に入るべき辭の 何れに入るべきか、其の入るべき 辭を聽かざる 方倶に至らしめて之を取り調べ、衆の獄官は五刑の びて之を用ふるにあらずや、當に敬むべき所のもの せば、當に選ぶべき所のものは何ぞや、是れ賢人を選 て赦すとにあるなり、故にかいる情質の明かとな 證據充分なれば、則ち之を五刑に處斷すべきなり、而 ふに非ずや、凡て刑獄を決するには囚人と證人と雙 を用ふるの道を告げむ、今爾等百姓を安んぜむと欲 王曰く、ア、來れ國土を有てる諸侯、予れ汝に善く刑 甫侯王に申して 刑罰を作り修 すべ りし者に對すると女よう取り入り きなり、さて五過を行ふときの病 詳に吟味し めぬ べか 又

周本紀第四

>名、名は尊卑職貢の名號なり、讓、譴責なり、セムと む、言、號合なり、法合なり、修、文、文は禮法なり、修り、順は訓と通ず、教法なり、祀は恐らくは 衍文なら 責むるなり、勤、勞なり、ツカラスと訓む、 訓む、告、告げ諭すなり、辟、罪なり、威讓、權威を以て |之順配也、國語に「先王之訓也」に作る、從ふべきな新に立ちて父に 代りし時に 來朝服事すること、先 服すること、終王、天子の新に即位したる時 12 高 祖 0) 祖 以上の 靈を合祀す、王、來朝し こと、先、 て王

享,以, 征、其,自,之,職,大 大畢 伯 而守終純 觀力 幾章 頓范 乎、吾 純 吾、無。日、終 西、 贯、 乃。 予、 也、 犬 、 大 、 展。 必、 犬 、 以,戎 有, 戎, 以,樹。王不氏

> 彼 皆篤實にして、今の君は能く舊徳に循ひて、其の ど敗るうこと無からむや、吾れ聞く、犬戎の國民 まる 天子の命に從はざるといふの理 蓝 務 畢 守ること終始專一 むといひ、且つ將に之に兵を示して威嚇 n せ 伯 を以て來朝し、能く王 必ず能 士のニー るなり、而るに我が 、かくては乃ち先王の 君 我軍 0) 卒 を禦ぐことあらむと、此まで祭公 なりと、故に今王之を征し給 せしより 天子は予れ必ず 事に 教法を廢棄して、王 服して其 現今の犬戎 由 を以て の荒服 せむ 氏 之を 彼の は 8 征 犬 とした 0) 其 ふる 戎が 職 性 亦 伐 0) 殆 職

謀父の るなり、樹敦、樹は立つるなり、 の命に從はざるをいふ、幾頓、幾は殆なり、頓は敗 或 民性の怨篤なるをいふ、純固、純は專なり、固は 諫言 大畢伯士、犬戎の二君の名なり、不享、天子言なり、 敦は篤きなり、樹敦

歸、自是荒服者 逐_ 征之、得四 ·四, 有, 鹿, 不。以

先王の

制

其 れ此

0 如

し、然るに

今犬戎の大

なり、 ら己が 3 不 を 法を適用するなり、即ち日 を序で成すも尚來 貢せざる 者あれば、始めて刑戮 來朝して王事に從は ざれば、則ち天子は自ら德を修 ば、則ち天子は名號を修め正すなり、荒服 物を貢がざ 刑し、月祭の供物を貢がざる者は伐ち、四時祭の め は法令を なり、 て之を教へ論すも 譴責するの法令あり、不王の者に は告諭 には刑罰 貢がざる者は征し、歳祭の て之を待ち、毫も之を責めざるなり、 し、來朝せざる者 て日祭の 要服の 來 て月祭の さて要服荒服の 修め正 供 は を修めて。其 の罪科あり、 る者 者にして 歳祭の 征討 物を貢がざる者あれば、則ち天子は 供物を あれば、則ち天子は すなり、賓服 の備あり は告げ諭すなり、是に於て不祭 尚來貢 王の教法なら、若し 者に 貢がざる者あれば、則ち天子 の不徳を責むるなり 不配の者には攻伐の兵あり 祭の 不貢 は せざる者ある時は、天子 供物を貢がざる者 供物を貢がざる者 法 供物を貢が 者に、 0 令を布 者には 禮法を修め して四 此の五つの 3 の者に 甸 一時祭 の文解 權威を以 服 ざる者 を陳 供 IF. 者 L あ 产物 法 は 0) 0)

內

民をして は己が徳を増 せざること無きなり て近き者 遠征 は其の徳に の勢に 修め 從はざること無く、遠き者は服 つからしむること無し、是を以 自然に 心服 來るを待ちて、

貢する ぐこと、天子は月々に曾 祖高 子は日々に祖考を祭るなり 治むるの地なり、祭、天子川 とし 綏服 千五百里の地なり、而して各圻 方五百里 なり、寰服 男圻・采圻・衞圻の略なり、侯衞二圻は 考しを祭る、貢、天子歲祭の供物を貢ぐこと、天子は を爲す、故に之を以て此の五圻を總ぶ、邦外の外方二 り、畿内は田賦を以て王に服事す、故にいふ、邦外、畿 祭の供物を貢ぐこと、天子 務を以て 王に服事 の外方五百里の地 て遍く てするの地なり、荒服、荒は に相當す、要服、要は要束なり、要束するに交教 毎に賓禮を以て王に服事す、故にいふ、禹貢の 邦内、畿内なり、甸服、甸は田 布き及ばず、故に其の す、放にいふ、 なり、侯服、侯は斥候なり、斥候 は春 、祀、天子月祭の供物を貢 祭の供物を貢ぐこと、 祖を祭る、享、天子四時 荒忽 故 俗に因 侯衛、侯圻·甸圻 なり、政 其の始 なり、服は事 高 りて之を 教院 と終と 祖

の苦痛なり、動性、いたはりあはれむなり、民隱、民郊の牧野なり、動性、いたはりあはれむなり、商牧、商の近ぶなり、訴戴は悦びて、天子と、戴くなり、帝辛、殷の紂王なが、悪三子民」、民に暴惡を加ふるをいふ、訴戴、訴は悅が、悪三子民」、民に暴惡を加ふるをいふ、訴戴、訴は悅が、悪一大人の苦痛なり、

り、故に甸服の者は日々に日祭の 物を貢ぎ、荒服の者は 來朝したる ・ 安服の者は 來朝したる 内の諸國は甸服なり、畿內外の諸國は侯服なり、侯【講義】 さて先王の諸侯及び蠻夷に對する制は、毀。 者 の諸國は賓服なり、 其の供物を貢ぎ、要服の者 は荒服なり、甸服の者は 月々に月祭の 、荒服の者は嗣王の即位又は己 供物を 、夷蠻の諸國 貢ぎ、賓 天子の日 は年 祭の供物を貢ぎ、侯服 は要服 を貢ぎ、賓服の者は の者は天子 巌祭 3 時に 服の者は春 祭の供物を貢ぎ、 なり、戏翟の 嵗 王事に從 供物 3. 0)

つき心を以て之を守り、まごころを以て奉行せり、此事業を修め、其の教 法を正し、朝夕つゝしみ勤め、お其れより以來の王は世々 其の德を 整へ、從つて其のだ。と夏との天子に從ひ事へたり、夏の衰ふるに及び、稷官を弃てゝ農事を務めざりしかば、我が先王のび、稷官を弃てゝ農事を務めざりしかば、我が先王のば、稷官を弃てゝ農事を務めざりしかば、我が先王のが、稷官を弃てゝ農事を務めざりしかば、我が先王のい。と見いる。

り、故に我が周の先王は先づ徳を耀して妄に兵を示 苦をいたはりあはれみて其の害毒を除きたるのみな を妄に動かしたるには非ざるなり、是れ畢竟民 德を慕ひて悅び 戴きて、兵を商の近 郊なる牧野 に暴惡を加へて苦めしかば、庶民之に忍びず、武王 無かりしなり、此の 民を保んじ養ひしかば、神も民 徳を昭にし、其の上に慈愛和暢の徳を加へ、神に事 して紂王を滅したり、是の故に先王は自ら好み の如くして累世徳を修め耀 後文王武王の世に至りて、前代の 時に當りて殷の紂王は大いに民 も皆欣喜せざる て先祖を 王の 光明 めざり の痛 て兵

心に從ふをいふ、緒、事業なり、訓典、教法なり、恪勤、心に從ふをいふ、時、不室以後代々の王の時を指す、篁、匿るいなり、戎狄之間、不室の 封地 の部は戎狄の地に在り、むり、戎狄之間、不室の 封地 の部は戎狄の地に在り、むり、戎狄之間、不室の 封地 の部は戎狄の地に在り、を立つるなり、とゝのふるなり、遵、從ふなり、此の官と強不を成嚇することはなさいりしなり、

汗るゝなり、兵汗るれば民之に狎れて懼るゝ所無きるに之に反して、妄に 兵を動せは 兵に正名無くして 此の如く先王の民に於けるや勉めて民の德を正しく 無きものなり、故に民真に其の兵威に懼るゝなり、而 所となりて子孫世々相繼ぎて天下に君臨し、益、盛大 懐きて威を畏れ しめしなり、故に能 く民の心服する を以て民を修め、民をして利を務めて害を辟け、徳に を製して便利にし、民の利害の向ふ所を明にし、禮法 徳を求めて之を實行したり、故に其 の美しき功徳を を用ひざることを示されたり、而して武王は專ら美 干戈を庫に藏め、弓矢をゆみぶくろに包みて、民に之 王の殷を伐ち給ひし後は兵を用ふるの用無ければ、 に至る、是の故に周文公の頭にもいへることあり、武 如くすれば其の兵に正名ありて向ふ所風靡せざる所 むに先づ徳を耀して妄に兵を用ひざるの證なり、 有して民に耀し たまひ しなりと、是れ先王が民に の夏歌に 、民の生命を厚くし、民の財物を豐にし、民の器具 之に反して、妄に 兵を動せば、兵に正名無くして うたひ陳ぶるなり、誠に王は此の美徳を

丧夏之衰也<u>,</u> なり、其徳、其の字以下皆民を指す、其性、民の生命な 此には弓矢を包むことなり、ツ、ムと訓む、我、武王 周公旦の稱なり、頭、詩の一體なり、天子の功德を稱 なりと、觀、兵、觀は示すなり、觀兵は妄に兵を示し なり、方向をいふ、以文、文は禮法なり 財求は財物なり、器用、日常に用ふる器具なり、郷、方 り、阜、豊なり、財水、水は財と通ず、財は財なり、故に 時邁に在るなり、載、スナハチと訓む、曇、弓袋なり るゝ也、狎れ侮るの意なり、震、懼るゝなり、周文公、 威嚇することなり、戢、藏むるなり、玩、贖なり、けが なり、公は諸侯の稱號なり、謀父は字なり、一説 なる樂章なり、允、誠なり、マコトニと訓む、茂、勉む を指す、懿徳、美徳なり、時夏、時は是なり、夏は大い へ神明に告ぐる樂歌なり、此に引く所は詩經周頌の 務、服 我,事

大戎、西方の蠻族なり、祭公謀文、祭は國號

誠。王太。閔 位 閔? 春 昭 僕文 秋 國 武 子, 之 滿, 之 五 政,道,作、缺; 是, 臩 命。命。伯 道 伯 寧、臩江 刨作 穆

は伯囧を周の太僕正と為すとありて此の文と異れるを関ひ、乃ち伯棐に命じて太僕に國の政を申べ誠るを関ひ、乃ち伯棐に命じて太僕に國の政を申べ誠るを関ひ、乃ち伯棐に命じて太僕に國の政を申べ誠しめて棐命を作れり、是に於て天下復安寧となりね、王なり、伯棐、臣の名なり、繋は古文の囧の字なり、太王なり、伯棐、臣の名なり、繋は古文の囧の字なり、太上なり、伯棐、臣の名なり、襲されるなり、の王位に即く時は齡已に五十になりね、而して周の正道衰微せるを以て、穆王は文王武王の道の缺けた。 「書表」昭王の子の滿を立つ、是を穆王と為す、穆王は伯囧を周の太僕正と為すとありて此の文と異れば、「書の」と称して、尚書の第名なり、

穆王将征,犬戎、祭公謀父諫日、

威,之,利。正。夏、戈,震,而故。使其,其,允,载,是,時 能,之,器 德,王 秦"故。 保,務,用,而 保。 弓 周 世,利,明以,而利 厚。之, 則 矢,文 其 威 先 我。公 王 求。之 頌. 則觀 懿 之 其, 於"德,曰,玩養兵,民學,載,玩養兵, 也,于戢,则"兵、茂",時,干無、戢 而 文,求,也 無、戢 畏修而

朝事あらば始めて 之を動かし用ふ るものなり、此のり、さて兵は平時に於ては之を滅めて用ひず、若し一り、さて兵は平時に於ては之を滅めて用ひず、若し一隻、さて兵は平時に於ては之を滅めて用ひず、若し一隻、
を諫めて曰く、王の犬戎を征し給ふは不可なり、請ふと諫めて
と諫めて曰く、王の犬戎を征し給ふは不可なり、請ふと諫めて
と諫めて曰く、王の犬戎を征し給ふは不可なり、请ふと諫めて曰く、王の犬戎を征し給ふは不可なり、请ふと諫めて曰く、王の犬戎を征伐せ むとす、祭公謀父之

ふ、顧命、尚書の篇名なり、不、任、天子の事に任へざるをい 碩聲、太平を謳歌する の弊 なり、賄息愼之

以申之作康誥, 太子到遂立是為康王康王即 業,卽*

即き、徧~諸侯に文王の業を宣べ告げて康誥を作れ【講義】 太子釗遂に立つ、是を康王と爲す、康王位に

「字解」 康誥、康王之誥の誤なり、

故_ 餘 康之際、天下安寧、刑錯 一成周郊作事 命作、策、畢公 四

罰を措きて用ひざると四十餘年に及べり、康王命じ て策書を作らしむ、墨公をして洛邑の居里を分別し 成王康王の際は天下安らかにして、刑

> 「字解」 定めて保護せしめたり、畢命を作る、 善惡を分ち置くことなり、畢命、尚書の篇名なり、 ひざるなり、分三居里、洛邑の居里を區別して民俗の て民俗の善悪を分ちて居らしめ、以て 成康、成王康王なり、錯、措と通ず、おきて用 東周の郊境を

王道微缺、昭王南巡狩不返、卒、康王卒、子昭王瑕立、昭王之時、 于江上、其卒不。赴告、諱之也、

1-てなり、 て返らず、途に江上に卒しぬ、其の卒せることを天下 に至りて周の 王道少しく 衰へたり、昭王南に巡狩 【講義】 赴げ知らさざるは王者の終を全くせざりしを諱み 康王卒しぬ、子の昭王瑕立つ、此の昭王の時

ふ、赴告、天下に告知するなり、卒二子江上、江水に溺例を誤りたるなるべし、微缺、少しく衰へたるをいる、宜しく崩と書すべき也、然るに卒と貶書せるは義 れて卒したるをいふ、一説に漢水を渡る時に溺 康王卒、康王は賢にして成王と竝び稱せら

常名なり、 は教を垂るゝ人、殘、そこ なふ 也、宗周、鎬京なり、多 は教を垂るゝ人、殘、そこ なふ 也、宗周、鎬京なり、多 は教を垂るゝ人、殘、そこ なふ 也、宗周、鎬京なり、多

命。召公事公率,諸族以相太子、成王將崩懼太子到之不任乃來賀、王賜、榮伯、作,賄息愼之命、睦、頌聲興、成王旣伐,東夷、息愼與正禮樂、度制於是改、而民和

の武夷 以、太子釗,見、於先王廟、申告以、 の武夷 以、太子釗,見、於先王廟、申告以、 る、務在。節儉、毋。多欲、以、篤信、臨。 之、作、顧命、

に臨むに在りしことを以てす、乃ち顧命を作れり、 とは來り賀す、此の時恰も成王は榮伯に 賜 せる折なり、乃ち賄息慎之命を作れり、成王の將に崩ぜんとするや、太子釗の天子の事に任へざらむかと心痛し、乃るや、太子釗の天子の事に任へざらむかと心痛し、乃ち召公畢公に命じて諸侯を率ゐて太子を輔佐して之を立てんとを屬せり、成王既に崩じぬ、二公是に於てを立てんとを屬せり、成王既に崩じぬ、二公是に於てを立てんとを屬せり、成王既に崩じぬ、二公是に於てなって、務めは節儉にし て多欲無く、篤信 を以て民でして、務めは節儉にし て多欲無く、篤信 を以て民でして、務めは節儉にし て多欲無く、篤信 を以て民でして、務めは節儉にし て多欲無く、篤信 を以て民でして、務めは節儉にし て多欲無く、篤信を以てれば、制人に、大平を顧せる。

後子之命、次に歸禾、次に嘉禾、次に康誥。酒誥・梓材、皆尚書の篇 不、皆佚書の篇名なり、康誥・酒誥・梓材、皆尚書の篇 不、皆佚書の篇名なり、康誥・酒誥・梓材、皆尚書の篇 名なり、周公之篇、魯周公世家を指す、

周公行,政七年、成王長周公反, 思, 使, 召公復營, 洛邑, 如,武王 之意, 周公復卜, 申视, 率營築, 上, 北面就, 羣臣之位成正 之意, 周公復卜, 申视, 率營築, 上, 北面就, 羣臣之位成正 之意, 周公復卜, 申视, 率營築, 正, 是, 股遺民, 周公以, 王 合, 告, 作, 多

じぬ、よつて周公は政を成王に反し、北面して羣臣の【講義】 周公政を攝り行ふこ と七年 にして 成 王長

位に就きたり、二月成王豐に在りて召公をして再び 各邑に都を營ましめて、武王の意の如くせむとす、三 月周公復たトひて 吉なりしかば、之を伸べ視して卒 に洛邑に都を營み築きて九鼎を据ゑたり、曰く、此れ 天下の中央にして四方の諸侯より入貢する道里相均 しと、乃ち召誥・洛誥を 作る、成王 既に殷の遺民を洛 邑に遷したれば、周公之に王命を告げて多士・無佚を 作れり、

疑ひて武庚と亂を作して 周に畔く、周公乃 ち成王の しこ國に當れり、時に管叔蔡 叔等の羣弟は 周公の攝政を 【禮を恐るゝを以て、自ら成王 に代り て政を統べ行ひで | 梓平定したり、されど周公は尚諸侯 の周に畔かむこと | 梓本にしたり、されど周公は尚諸侯 の周に畔かむこと | 梓本にしたり、されど周公は尚諸侯の周に畔かむこと | 梓本に

初管・蔡畔」周、周公計之、三年而初管・蔡畔」周、周公計之、三年而初管・蔡畔」周、周公計之、三年而命、次歸禾、次歸禾、次嘉禾、次康誥、酒誥、梓材、其事在。周公之篇、辞材、其事在。周公之篇、治、在於其事在。周公之篇、治、其事在。周公之篇、治、其事在。周公之。治、

を望み北の方縁鄙を望み、叉顧みて有河を瞻て、こゝに此の雒伊二水の 間を 瞻るに、是れ亦商邑の天室に此の雒伊二水の 間を 瞻るに、是れ亦商邑の天室に此の雒伊二水の 間を 瞻るに、是れ亦商邑の天室に此の雒伊二水の 間を 瞻るに、是れ亦商邑の天室に此の雒伊二水の 間を 瞻るに、是れ亦商邑の天室には太行山なり、鄙は 嶽に 近き邑なり、粤、審に愼むの丘に放ち、干戈を伏せ、兵士を收め整へ軍族を釋き放ちて、天下に再び兵を用ひざることを示せり、は太行山なり、鄙は 嶽に 近き邑なり、粤、審に愼むの丘、天下に再び兵を用ひざることを示せり、は太行山なり、鄙は 嶽に 近き邑なり、粤、審に愼むの丘、天下に再び兵を用ひざることを示せり、「たて・ほこを伏せて 用ひざるなり、振、兵、、[聖]、大、たて・ほこを伏せて 用ひざるなり、場、系に收め整ふる、なり、振兵は兵士を退けとゝのふるたいふ、

道武王病、天下未集、奉公懼穆、此、以上、箕子不、忍言、殷、敬問以、东所以上、箕子不、忍言、殷惡以存。武王已克、殷、後二年、問、箕子殷

立、是爲成王、
上、周公乃被齊、自爲質、欲代武
上、武王有廖、後而崩、太子誦代

成せるをいふ、登、登用なり、名民、名賢の人なり、不、「字解」 九牧、九州の長官なり、自、夜、夜 は宵 なり、殷、殷の祭祀 を受け ざる をい ふ、麋鹿在、牧壶鴻滿夜の字の下至、旦 の二字 を 附 け て讀 むべし、不、饗下、農は水牛に似たる鹿なり、なれしか、輩は飛の古字なり、鴻は大鳥なり、兩句の意は世亂れて田野荒廢し、人民流離の慘狀をいへるなり、有、成、周の王業をし、人民流離の慘狀をいへるなり、有、成、周の王業をし、人民流離の慘狀をいへるなり、有、成、周の王業をし、人民流離の慘狀をいへるなり、有、成、周の王業をし、人民流離の慘狀をいへるなり、自、夜、名賢の人なり、不、

に施しで明かにすることなり、 が名民を登用せざるをいふ、賓滅、賓は擯なり、しり 類、名民を登用せざるをいふ、賓滅、賓は擯なり、しり 、名民を登用せざるをいふ、賓滅、賓は擯なり、しり

きなり、斯れ古有夏の居りし所なり、我今南の方三途

居所とするに其の地勢平易にして周圍に險峻の固無

講義】洛水の北涯より伊水の北涯に及ぶまでは、

士を 【字解】 宗葬、宗廟の酒樽なり、分殷之器物、佚書の叔度を蔡に封ず、其の他は次ぎ~~に封を受けたり、 魯といひ、召公奭を燕に封じ、弟の叔鮮を管に、弟の 黄帝の後を祝に、帝堯の後を薊に、帝舜の後を陳に、 樽を班ち賜ひて 分殷之器物を作れり、即ち武王は 篇名なり、褒、贊美なり、 大禹の後を杷に封じたり、次に殷を平げたる功臣謀 の聖王を追思し、其の德を賛美して神農の後を焦に、 營丘に封じて齊といひ、弟の周公旦を曲阜に封じて 講義 封ず、而して師尚父を第一位と為す、即ち尚父を 叔 殷紂ヒに滅びぬれば 度, 於 <u>蔡</u>、餘各 諸侯を封じ、宗廟の酒 以次受 封,

日、告、女、維天三皇。商邑、武王三皇。商邑、武王三 武 邑, 九 牧 所.至, 之

我,求,何,亦西夫,暇不 殷、野、於、其、天、今。 汝に告げむ、さて天が殷の享祀を饗けざること外し、 寐ねられざるなり、弟の周公旦之を案じて王の寝所 それより武王は岐周に歸るも、夜より旦に至るまで 即ち發が て商邑を望ましめ、以て殷の餘民の動静を窺はしむ、 講義 至りて、何故に寐ねられざるかと問ふ、王曰く、我 至るまで大凡六十年に達せり、其の間世 、麋鹿は牧に在り、飛鴻は野に滿て 武王又九州の長官を召して、豳の阜に登り 未だ生れ ざる 前より、天命已に廢れて今

西之佚、粟,南 公。已 歸、墓,展、以,宮 方 行 符 宗 祝 享 祀 、 享 祀 、 享 元 括。百 振 散。姓 貧 弱, 鹿 之 玉, 萌 臺 囚, 事,祠。命。隸之 作。于盟命。財, 武軍天南發 命。財,商 軍- 天- 南 發。 成,乃 封。 宮 之 罷。此 閭. 命, 括、橋 兵,干 命。畢 史之

の善きものを記して武成を作れり、 で西周に歸る、其の歸途行くく〜巡狩し、又殷の政事 で西周に歸る、其の歸途行くく〜巡狩し、又殷の政事 で西周に歸る、其の歸途行くく〜巡狩し、又殷の政事 で西周に歸る、其の歸途行くく〜巡狩し、又殷の政事 で西周に歸る、其の歸途行くく〜巡狩し、又殷の政事 で西周に歸る、其の歸途行くく〜巡狩し、又殷の政事

魯丘而,禹堯農 物,封。成了 封。目。師之之之 後,後,後, 齊。倘 追 班, 公封。父。於於於 奭弟,爲。杞*蓟益焦 首於,帝黃 先 於周 封,是-舜 帝 聖 封。旦,封。封。之之王,作。 弟於尚功後,後,乃分 於於褒。殷 父。臣 鮮,阜、於 謀 陳。祝。封。之 於日。營士,大帝神

大帝。商先佚。兹, 命,於,邑,王, 首、革、是 明 百 祝。公 叔 殷,武 姓,德,日, 受。王 費力 章 末 師 明 拜 顯, 神 水, 聞, 祇, 尙 初,科,命, 稽 孫 定,子武未恭王 首、 季 父、 殄:性, 集, 父, 又 膺是 暴。 更为 廢管尹 再

拜

商

殷

父, 乃

使。之

殷,其

弟

叔

鮮·蔡

左右の は茲 将卒は畢く從へり、毛叔鄭は明 Ŧ. 旣に入城 ふ席 を布き、召公演は幣を供ふるを して 社の 南に立て 水を奉 は、中 り、衛 軍 0)

> 佐け 尚言を繼ぎて日く、天の大命を更るに當りて、先づか て般の の祿父を 武王又再拜稽首 かる虐暴の殷を に天皇上帝に聞えたり、是の時武王再拜稽首す、 亂し荒してしへたげければ、其の れば、其 王は殷の て、天神地祇を侮り蔑にして祭祀せず、 讀みて曰く 師 地を治めしめたり、 尙 の弟の管叔鮮と蔡 叔度とをして 禄父を佐け 地初めて定まれど其の除民未だ集り來らざ 般に封じて其の徐民を附せしむ、され 父は牲を幸る、尹佚は 殷の末孫の季紂は 革め して出づ、是に於て武王は商紂の て天の明命を受けよと、是の 先王の 策に書し 罪惡明に顯れ 商邑の 朋 徳を 72 る祝 絕 尹佚 ど武 T 姓 ち 文 子 時 逐

り、天皇上帝、天の神なり、膺」更、膺は當るなり、更はり、昏暴、みだしあらすなり、章顯、明にあらはるゝな ちすつるなり、仰蔑、あなどりないがしろにするな り、祝は祝文なり、ふだに書きたる祝文なり、珍麼、た ふる水のことなり、弦、籍物の名なり、費、米、贊は佐字解】大卒、中軍なり、明水、玄酒に同じ、祭祀に用 くるなり、采は幣なり、炭祝、筴 に受に作る は 策に同じ、ふだ な

至り、自ら紂を射るに三矢を發ち、而る後に

武王遂に殷の

都に入り、対が死にたる所に

車より下

紂 纸,發,遂. 之 斬,而 及軍典及變期,其,頭,射,妾, 新 後 下 東 、 東 ---發,女.大擊,二白 白之 輕• 劍, 道,旗以,女 皆蛾,常旗,修武剑,皆旗。擊,自,執,以,車,以,社,王 斩。經,已之,射,劒,灰,周 先 及,已以,自 而 以,之,则 武 公 驅、商 乃 玄 殺、至,黄 三。

王,旦,武 紂,出,鉞,武散,北,宝,富。復縣,王 把,王,宫,復,縣,王 大鉞、基

罕旗を 把り、各、武王を夾み、散宜生・太顚・閔天は皆 劒車を奉じ陳べ、周公旦は大 鉞 を把り、畢公は小 りて武王を守護せり、 其の入城式を了れり、其の入城の期に及びて、百夫は 其 けたり、武王已にして都を出でて己が軍營に復れり、 撃ち、玄鉞を以て二女の頭を斬り、之を小白の旗に懸 殺せり、武王又之を射るに三矢を發ち、劒を以て之を 嬖妾の二女の居る所に至れば、二女は已に經れて りて、劒を以て之を撃ち、黄鉞を以て 之を太白の旗に懸けて衆に示したり、已にして紂 の明日には道を除ひ社を修めて商紂の宮に至りて 荷ひて前騎と為り、武王の 弟の叔振鐸 其の 頭を斬 は 儀 を b

墨公、魯世家には召公に作れり、 るはたなり、先驅、さきのりなり、常車、儀 を修むるなり、罕旗、罕は旌旗なり、罕旗 と異なり、立鉞、鐵の鐵なり、修、社、土神を祀れる祠 びるなり、殷紀には武王妲己を殺すとありて此の紀 字解 輕劒、輕呂と稱する劒なり、經、縊死なり、 は前騎 装車 なり、 の把

入立于社南大卒之左右

姓。郊。武武持,衣,紂。日,於,王。王,大其,紂上是。至。武白珠走。 武持,衣*,紂開,武 武 旗,玉,反,武以自,入,王 應, 燔, 登, 馳、師 諸 于 于 之, 皆 新,倒。戰 兵 兵,之 族,火₋鹿 諸 而 臺 **疾死**。之皆 以心 上崩,戰, 畢,畢,武 蒙,畔,以,欲。 於從罪王 72

乗の多きに達したれば、其の 軍勢を牧野に 牧野の 亦答 武 誓已に終りし時、 降、休、商人皆再拜稽 使。秦 臣,百 候の 語,咸 兵 0 商, 會 百 配 3

商

國一商國

王

乃揖諸

侯、諸

侯

燔*其

h

陣所を固めたり、殷の帝紂武王の攻

め來れる

皆戰ふの心無く、心中窃に武王の速に入り來らむと の百姓皆之を郊外に待てり、是に於て武王は群 す、是より諸侯畢く武王に從ひて商國に至れば、 を麾きて戰勝を告ぐ、諸侯畢く武王を て、武王の來る道を開けり、武王の軍勢之に馳せ向ひ 中堅を以て帝紂の師に突入せしむ、紂の師衆しと雖、 と、商人皆再拜稽首す、武王も亦答拜す、 功を祝す、武王乃ち諸侯にゑしやくし を希へるなり、故に斜の師は皆兵器を倒にして 武王乃ち師尙父と百夫とをして必戰の意を致さしめ て商の百姓に告げ語らしめて曰く、上天慶を け死にたり、是に於て武王大白の旗を持ちて諸侯 の藏せる所の珠玉を蒙り著て、自ら火中に投じて 、対敗走して反りて城中に入りて鹿臺の上に登り、 れば、対の兵は皆崩れ立ちて、反つて対に叛きた き、般も亦兵七十萬人を發して武 王の軍を距ぐ、 て其の勞を謝 拜して其 商國 の成 戦ひ 臣

[字解] 軍といふが如し、亟、速なり、揖、手をこまぬきて禮す るなり、ゑしやくすること、休、慶なり、 致い師、必戰の志を示すことなり、大卒、猶 して虎の如く羆の如く豺の如く螭の如くして、我がて忘るゝと勿れ夫子、希くは桓々たる武者振を發揮 天の罰を行ふなり、故に今日の軍略は一時に多く進 を内外より搔き亂せり、よつて 今予發は 茲に共みてを信じ是を使ひ、百姓を あらくしへ たげて商の國家 母の て忘れざれ、又敵を撃つにも一時に多くなさいれ、即 方に逃れたる者を召して、是を崇び是を長と爲し、是 之に報恩を竭さず、其の國家を亂一弄てゝ、其の祖父 て、止まりて其の隊伍を齊へて堅固にせよ、之を勉め ち少くして四 伐五伐、多くして六 伐七伐を過ぎずし て其の隊伍を齊ふるを例とせよ、夫子其 むとを爲さいれ、即ち六歩七歩に過ぎずして、止まり 人の言をのみ用ひて、自ら其の先祖の祭祀を弃てゝ、、 是れ婦人を戒むるの言なり、而るに今般の紂王は婦 れば、其の家は家運傾きて途に盡くるに至るべしと、 時を告ぐる者に非ず、しかるに牝雞晨の時を告ぐ 一族及び同母弟を遺して用ひず、罪多くして四 王曰く、古人已に言へることあり、牝雞は晨 れ之を勉め

れ爾の身に誅戮を加ふることあらむと、爾等以上數箇條の命に 反きて 勉めざる所あれば、其土に使役せむ、之を勉めて忘るゝこと勿れ夫子、若し走せる兵士を暴殺する こと勿れ、之を 捕虜として西夷軍の武威を商 郊に揚げよ、又强 きに乗じて殷の敗

爽、夜の引き明けなり、あけぼのなり、杖…黄鉞」、杖はんや上文の十二月は殷の十二月なるに、於てをや、昧 なり、皆蠻夷戎狄に在る國なり、戈・干・矛、戈は柄のを守る者なり、庸・蜀・羌・掌・微・纏・彭・濮、八國の名大夫は卿に次ぐ、故にいふ、師氏、大夫の兵を以て門を司る官なり、亞旅、亞は次ぐなり、旅は衆大夫なり、 周の二月なれども、此の げ 司る官なり、司馬、軍事を司る官なり、司空、土地民事 は 辭なり、 まねく 1= h は 短きほこなり、てぼこなり、干 「字解】 二月、一に正月 、爾の 注けて指塵するものなり、さいはいなり、塵、さし 、乗…白旄 乗は 大なり、諸侯を るつくなり、

黄鉞は黄金にて飾り なり、遠矣、遠方より能く來れりとて之を努る 干を比べ、爾の矛 即ち遠方の出陣大 親愛したる 執るなり、白旄 時未だ に作 を立てよ、予れ今汝等に 儀なりの 敬語 る、是なり、殷の はたてなり 周の は なり、司徒、文教 **準牛の白尾を

竿頭** E 意、有國家君、家 たるまさかり 朔を用 ひず、況 正月

役。如,焉於七行,姓,崇。不西豺,勉。四步。天以,是。用 答人,之王 以,是、用。 香 伐乃 姦 長,乃 弃。是。惟、古 之 罰, 止 軌*是、維、其 五 伐 齊、 于 信。四 自之 國,弃,索 焉、 日商 是。方 遺》 之 國,使。之 今 桓、七子事今傳多如,伐勉不予暴罪 其 哉過*發虐。逋父 肆》紂 祀, 勉、犇、如、止、不、六維、于 逃。母 其以,熊齊、過、步 共,百是:弟,不

祖先の に今予れ發は茲に共みて天の罰を行は 正しき歌を亂し、以て其の婦人を怡ばしむるなり、 ち壊り、其の祖父母の族及び同母弟を離ち遠け、其 ら天命に戻りて之を絶ち、天地人の三つ よや汝等、此の好期を迭して此の次に し 又其の次に 雅樂を斷ち弄て、みだらなる流行謠 むとす、勉め の正道を毀 を作りて 0

逿、放ち遠くるなり、王父母弟、王父は祖父母の族な命に反するをいふ、三正、天地人の三の正道 なり、離 が今弦に引ける所と大いに異なれり、其婦人、其の鍾 責は勇士なり、千の字一に百の字の誤なりといふ、甲で其に從ふことなり、戎車、兵車なり、虎賁三千人、虎るをいふ、犇、走るなり、遵..文王、文王の木主 を奉じ だらなる流行謠なり、怡説、よろこぶなり、共、つゝし り、母弟は同母弟なり、皆親むべき者をいふ、淫聲、み 愛する所の婦人なり、即ち妲己を指す、絶三子天、天の 誓、尚書の篇名なり、現存のものは偽作にして太史公 士、よろひ著たる兵士なり、孳々、勉むるさまなり、太 くしへたぐるなり、即ち政をみだして民をしへたぐ 【字解】 昏亂暴虐、昏亂はみだるゝなり、暴虐はあらせむとすべからずと、

> 好期を迭すべからざるの 意なり、

【講義】 馬·司 長、及 むなり、夫子、丈夫の稱なり、不」可」再不」可い三、此の る所の有國の大君・司徒・司馬・司空・亞族・師氏、及び 旄の采配を執りて衆 を塵きて曰く、遠 方の出陣 王は早くより商の南郊の牧野に至りて其の軍士に誓 爾, 武 に存ずるぞ西土の人と、武王又曰く、ア、我が親愛す 月 十二年二月甲子 旅·師 の日 遠 の夜 君 の引き明けに、武 洋 漢 司 黄 長·百 徒·司

庸・蜀・羌・家・微・纏・彭・濮の八國の人、爾の戈を學 ふ、左手には黄金にて飾りたる鉞を杖き、右手には白

り、魄、鳴き聲の安定なるをいふ、ゆるやかに鳴く聲り、魄、鳴き聲の安定なるをいふ、ゆるやかに鳴く聲王屋、王の陣所の屋根なり、流、行くなり、飛び去るなり、反るなり、上りしものゝ再び下にかへるをいふ、

孳、戊 千 百 不。徧,彊、王 居、 孳、午 人,乘 畢,告、抱。子 二 孳、午、人、乘、畢、告、抱、子 二無、師以、虎。伐、諸、其、比、年、 庶。孳、午、人,乘 怠"畢,東,賁"乃 矣。樂干,聞。 武渡、伐。三遵。日。器,囚、紂,王盟紂,千文殷。而箕昏 箕 昏 王有。犇、子、亂 遂重 周太 暴 乃乃津,十人用。作,諸一甲 其太 疾 年 士 率*罪 於,師虐 不,是 疵 滋 誓,咸十四戎 人告。會二萬車可或少甚。 之于日,月五三以王師殺。

ま王父母弟、乃斷事其先祖之 紫乃爲淫聲用變。亂正聲、治説 婦人、故今予發維共行。天訓、勉 婦人、故今予發維共行。天訓、勉 婦人、故今予發維共行。天訓、勉 婦人、故今予發維共行。天訓、勉 婦人、故今予發維共行。天訓、勉

【講義】 武王周に歸り、居ること二年にして、紂の怪亂暴虐なる行迹の益。甚しくして、王子の比干を殺怪亂暴虐なる行迹の益。甚しくして、王子の比干を殺怪亂暴虐なる行迹の益。甚しくして、王子の比干を殺怪就疾に通告して曰く、殷に重罪あれば、今之を舉くて、遂に戎車三百乘虎賁三千人甲士四萬五千人を率て、遂に戎車三百乘虎賁三千人甲士四萬五千人を率なて、遂に武市三百乘虎賁三千人甲士四萬五千人を率なて、遂に武市で渡りて河北に上陸す、諸侯も咸來り會す、武王諸侯を戒めて曰く、孳々として怠ること勿れと、武王は福子とと記律を渡りて河北に上陸す、諸侯も咸來り會す、武王是に於て太誓を作りて衆庶に告ぐ、其の言に曰、今般王紂は其の愛する所の婦人の言を用ひて自

知,天命、未,可也、乃還,師歸、人自,上復,于下、至,于王屋、流爲、其色、赤、其聲,魄云、是時諸侯、武天命、未,其聲,魄云、是時諸侯、武天命、未,可,也,及、武王曰、女未,以自,上復,于下、至,于王屋、流爲

ち司馬・司徒・司空等の諸の符節を有てる有司に告げ だ小子は先祖 で曰く、汝等うやくしくつゝしみて信なれ、予は無 て自ら専斷するに非ざることを示せるなり、武王乃 ら太子發と稱せり、是れ文王を奉じて征伐に出で、敢 主を作りて之を兵車に載せて中軍と為し、武王は自 る、東の方に兵威を示さむとて盟津に至り、文王の木 講義 尚父軍中の司令に號合して曰く、爾が衆庶 なれども今弦に先祖の とを總べよ、若し後れて至らむ者は斬らむと、武 を立てゝ汝等の功績を定めむと、遂に師を興す 九年に武王は天の畢星を祭り の功を受けて天子の位に在れば、畢く 有徳の臣を用ふるなり、但 T 武 2 運を祈

り、先功、先祖の功なり、師尚父、太公望のことなり、 くる有司なり、齊栗、うやししくつゝし 津、孟津に同じ、木主、位牌なり、諸節、諸の符節を 【字解】 上祭…于畢、畢は畢星なり、兵を主るの 星だ其の時期に非ずとて、乃ち師を還して歸りたり、 天 興すに當りて之を祝福するの瑞兆たるなり、是の 正色なり、是れ武王が父の文王の大業を繼ぎて兵を 聲はゆるやかなり、さて鳥は孝鳥にして赤は周家 り、故に師を出す時之を祭るなり、觀、示すなり、 り、又飛び去りて鳥と為る、其の色は赤く、其 兵衆の周に與するの瑞兆なりとて、武王は之を俯し は殷家の正色なり く、汝等未だ天命の歸する所を知らざるなり、今は未 の八百諸侯あり、諸侯皆紂を伐つべしといふ、武王曰 て立ち昇り、上より復下に反りて王の陣屋の棟 て取りて天に祭れり、既にして河を渡る、次に火 下の諸侯は氣て約束もせざるに、盟津に會するも 入るあり、 河を渡る時に、河の さて魚は介鱗の物にして兵の象あり、 白 魚の舟中に入りしは是れ般の 中流に白魚の躍りて王の is り、盟な 舟中 あり 時 至 白

號、軍の重き者に號合するなり、楫、舟のかち

を追ひ尊びて太王と爲し、公季を王季と爲す、蓋し周 す、武王は法度を改め周の正朔を制定したり、又古公 しなりと、其の後十年にして崩じぬ、諡して文王と為 王瑞は太王が函より岐下に徙りし時より興れるな

なり、一説に八十九才なりといふ、稱ゝ王、文王に受命十七才にして崩じたれば、其の受命の年 は 八十八才 況んや此は太史公が詩人の一説を記したるまでに於 稱王の事無しとて後世の儒者は頻に之を論辨すれど てをや、正朔、唇なり、 ら王と稱すること敢て難事にてあらざりしならむ、 ・殷周の過渡期に於て前朝に代らむ とする者の自 君たるの年なり、受命の年より 道、道は言ふなり、受命之年、天命を受け +

修為,武 輔、 召 卽* 位,-公 畢 太公 師,且,

武王位に即きて、太公望を師父と仰ぎ、周公

【字解】 左右、佐けなり、緒業、基を始 めしことな文王の基を始めし業を修めね、 を輔 佐と為し、召公畢公の徒は王の軍師を左右して、

王者、號、賞先司 軍,于九 以 斬。日,罰,祖 武、總。以,有 伐, 武 空·諸 朋 年_ 不。王 津。武 定、德、節、敢、自、爲、王 其、臣、齊自、稱、文上 渡。衆 王,祭,木于 栗。專。 功,小栗。 太 子 與,遂。子 流。爾, 興、受、哉 發、主,畢, 告, 予 司 師,先 白 舟 魚楫,師功,無躍,後。尚畢。知, 馬司 奉以親,文事兵, 車,兵, 有,入、至、父立、以,徒王,中

犬戎、昆夷なり、即ち後世の長沙武陵郡の大

となり、受命之君、天命を受けて天下に臨む所の君ななり、獄、訴訟なり、畔、あぜなり、くろなり、祗、まこ【字解】決、平、曲直を決することなり、虞茂、皆地名

山の下より徙りて豐に都を定めたり、は代つ、其の明年県侯虎を伐つ、此の年豐邑を作り、岐ざらむや、予に天命の存するあり、彼れ西伯何をか能ざらむや、予に天命の存するあり、彼れ西伯何をか能がらむや、予に天命の存するあり、彼れ西伯何をか能がらむや、予に天命の存するあり、彼れ西伯何をか能がらいや、とて、之を意に介せざりき、明年に、西伯犬戎を伐つ、其間の下より徙りて豐に都を定めたり、

紀に飢に作れり、形・崇、皆諸侯の國名なり、年に居りし苗族なり、密須・蓍、皆國の名なり、蓍は殷

命を受けたる年に自ら王と稱して虞芮の訟を判斷せ四卦と為しぬ、又詩人の言によれば、西伯は蓋し天即きてより崩ずるに至るまで五十年間なりき、其の即きてより崩ずるに至るまで五十年間なりき、其の即名に至りて 西伯崩じ、議義】 都を豐に徙し、其の明年に至りて 西伯崩じ

奇物の

刑を廢せむとを請ひしに、対は直に之を許したり、 とを得しめ、且つ曰く、予れ元より西伯を捕へむとせ なりと、 四 伯を放免して之に弓矢斧鉞を賜ひて、征伐するこ にあらず、敢て之を爲しゝは崇侯虎の誹に因 西伯是に於て洛西の地を獻じて 在るあり、何ぞ赦さいらむやと、乃ち 紂に炮烙の りし

馬なり、嬖臣、君の氣に入りの臣なり、此一物、美女を名なり、九駟、駟は四頭の馬なり、九駟は三十六匹の 指す、斧鉞、をのとまさかりとなり、倶に武器なり、 の名なり、文馬、毛に文ある馬なり、一説に駿馬の赤 り、歸服するをいふ、有莘、諸侯の國號なり、驪戎、國 字解」潜、誹り告ぐるなり、そしるなり、響、向ふな | 藍縞の身に目は黄金の如きものなりと、有熊、國の

是虞芮之 長、虞芮之人、未見。西 伯陰行善、諸侯皆來 人、有, 者皆 自讓畔民俗皆讓

聞,之, **私取辱耳、遂** 日、西伯蓋。 受命之君、 讓

ざるなりと、 事を聞きて曰く、西伯は實に天命を受けて、此の天下 還して倶に訴訟を譲歩して去れ や、往けば實に反つて唇を取るのみなりと、途に引き 恥づる所なれば、何ぞ往きて裁決を取ることを 慙ぢて相倶に謂つて曰く、吾等互に爭ふ所 は 周人の **芮の人之を見て、未だ西伯に見えざるに、皆自ら心に** 長者に譲りて自ら先んずることを爲さいるなり、 者は皆田のあぜを譲り合ひて取らず、他の民俗 裁決によらむとして其の界に入りしに、周民の耕す 何れとも決すること能はざれば、周に行きて 西伯の りて決するに至れり、或る時虞芮の人に訴訟ありて、ば、天下の諸侯皆來服して是非曲直の平を 西伯によ 臨む所の君なれば、我等は之に歸服 せざるべから 是れより西伯陰に善を行ひ仁を施しけれ りといふ、諸侯此の せむ

其の他太顚・閔天・散宜生・鬻子・辛甲大夫の徒、皆往 ことを聞き、虚ぞ往きて歸せざるやとて之に歸しぬ、 時伯夷叔齊は孤竹國に在りて、西伯の善く 老を養ふ 少を慈み、賢者にへりくだり、日中まで樂々と食せず ひ、古公公季の法に則り、仁を篤くし、老人を敬ひ幼 伯は卽ち文王なり、文王は祖先の后稷公劉の 業に遵 て士を待つなり、此を以て士多く之に歸服す、此 公季卒して子の昌立つ、是を西伯

職成之文馬·有熊九駟·他奇怪 「字解」曰『文王、田の字符文なり、禮下、くり~だる なり、孤竹、國の名なり、 養善累徳、諸侯皆響之、將不一利。 於帝、帝科乃囚。西伯於殷紂。曰、西伯 於帝、帝科乃囚。西伯於殷紂。曰、西伯 於帝、帝科乃囚。西伯於殷科。曰、西伯 於帝、帝科乃囚。西伯於殷科。曰、西伯 大之徒患之、乃求。有莘氏美女・

の徒は之を患ひ、其の君の災を助けむとて、有幸氏 任すれば、是れ將に帝に不利ならんとすと、帝紂之を 諸侯も多く之に歸服せり、かゝる有樣を其まゝに放 て曰く、西伯は近頃善を積み徳を累ねて衆庶を懐け、 力の次第に加はるを知り、之を殷の紂王に誹り告げ 【講義】 時に崇侯虎といへる諸侯ありて、西伯が勢 を介して紂王に獻ぜしめたり、紂大いに悅びて曰く、 の物品とを求めて、之を殷の嬖臣の費仲といへる者 美女と驪戎國の文馬と有熊國の九駟と其の他の奇怪 信じて乃ち西伯を差里に囚へたり、西伯の臣の閔天 の美女のみにても西伯を釋すに足るに、其の他に

髮、以讓季歷

卽 世機ぎに當に與る者あるべし、其れは必ず昌ならむ 此 史を書するに荆に添加したるまでの字なり、文身、入 荆蠻、荆は楚にして後世の吳越の地なり、蠻は北人が 以て世に臨まば其の祚萬世に續ぐべきことを記せり 舎に止まりたるをいふ、其の丹書に敬義仁の 三道を 任、摯任氏の女なり、聖瑞、聖人と爲るべき吉兆なり、 世を昌に傳へむと欲することを知れり、是に於て二 時に聖人となるべき吉瑞あうき、故に古公曰く、我が 【字解】 太姜、古公の妃にして有部氏の女なり、太 為らざるの意を明かにして世を季歴に讓れり、 人逃亡して荆蠻に至り、身に入墨し髪を斷ちて、君と と、故に長子太伯と次子虞仲とは父 が 季歴を立てゝ ち九月の甲子の日に赤き雀が丹書を銜みて昌の産 いひ傳ふ、亡、亡命なり、逃ぐるなり、如、行くなり、 ふ、太姜又少子の季歷を生めり、季歷太任を娶る、 の太任も太姜も皆賢婦人なり、太任の昌を生みし 古公に長子あり、太伯といふ、次子を處仲と

修,古公遺道,篤於行義,諸侯順古公卒、季歷立、是為,公季、公季

り、即ち稼穡の業なり、【字解】 古公卒して少子の季歴立つ、是を必季と爲す、公季は古公の遺道にる稼穡の道を修め、行義を篤す、公季は古公の遺道にる稼穡の道を修め、行義を篤す、公季は古公の遺道にる稼穡の道を

墨なり、

民皆歌樂之、領其德、 室屋、而邑別居之、作、五官有司、

て老人を扶け少弱を携へて、盡く古公に歸して岐下 下の周原に止まりぬ、豳人は其の德を慕ひ、國を擧つ 遂に豳を去り、漆狙の二水を渡り梁山を 踰え岐 ことは子の忍びざる所なりと、乃ち其の從者と 倶に と欲し、人の父子を殺してまでも此の國の君たらむ 立つも差支なきなり、しかるに我の故を以て戦はむ 異なる所無し、畢竟民を利する者ならば何人が君に 君とするも、彼を以て君となすも、君たるに於て何の 旨は、吾が地と民とを欲してなり、そもく一民の我を 是に於て豳の民皆怒りて戰はむとす、古公之を制し 予への、已にして復攻め來りて地と民とを得んとす、 財物を得んと欲す、古公は彼等が欲するまゝに之を とするが爲めなり、今戎狄の攻戰を爲さむとする主 公を載けり、此の時に當りて薰育我狄等攻め來りて 耕種の業を修め、徳を積み義を行ひければ、國人皆古 て曰く、國に民ありて君を立つるは、是れ民を利せむ 古公亶父に至り、復后稷公劉の務めたりし 111

馬・司空・司士・司寇なりといふ、「空解」「后稷公劉之業、耕種の業なり、近山の麓なり、即電粥と同じ、匈奴の古名なり、岐下、岐山の麓なり、即電粥と同じ、匈奴の古名なり、岐下、岐山の麓なり、即電彩と同じ、匈奴の古名なり、岐下、岐山の麓なり、即電彩と同じ、匈奴の古名なり、以下、岐山の麓なり、即の徳をほめたこへたり、

売期卒して子のB 立,子,非差率,公 講 公 亞 立, 弗 子, 劉 公劉卒 权圉公卒。皇卒, 祖立,非子、僕子、 の公叔祖類立つ、公叔祖類卒してヱの皇僕立つ、皇僕卒して子の亞圉立の、皇僕卒して子の亞圉立の皇僕立つ、皇僕卒して子の亞勇立の皇代立つ、皇僕卒して子の差弗立のとは、一次の時職に居 類亞卒、毀立。慶 卒。圉 子,隃 皇 節 子。高立。僕立。 古子、圉毁率、國、 公公立。除子於 亶 叔 高 卒, 差 豳 父祖圉子,弗慶 子の 立立居立。類卒、公立。節

時

は

卽

邠 な

b

詩 經

慶節雅

時と篇

0)

公 國。弱,山,乃 戰。我 所。 日,欲、狄 積、古 乃聞。盡,止。與殺,與爲,有,得,改,德,公 贬古復於私人,其,攻民地之,行,亶 戎公,歸。岐屬父在。戰,立。與,欲義。父 狄 仁, 古 下 遂 子, 彼 以, 君, 民 得 國 復 之亦公豳去,而何。吾,将民財人修 俗,多,於人國,君異地以,皆物,皆后 而歸、岐學、渡、之民與,利、怒、予,戴、稷 營之下國。漆予欲。民之。欲、之,之,公 築。於,及。扶,沮,不,以,民 今 戰 已 薫 劉 城是他、老、踰、忍、我、之戎古復育之 郭古旁、攜梁爲、故,在、狄、公攻、戎業,

時、時は蒔に同じ、ほどこしまくなり、鳥官なり、后は君長なり、農官の長となるをいふ、播、農師、農官の長なり、黎民、衆民なり、后、稷、稷はまめ、稼穡、種をまくを稼といひ、收穫するを穡といまめ、稼穡、種をまくを稼といひ、收穫するを穡とい

后 我 卒、子 不 密 立、不 密 求 年、夏 后 稷 卒、子 不 密 立、不 密 末 年、夏

逃げ走れり、 なり、故に不室は其の官を失へるを以て 戎狄の間になり、故に不室は其の官を失へるを以て 戎狄の間に后氏の政衰へぬ、卽ち稷官を發して農事を務め ざる【講義】 后稷卒して子の不室立つ、不室の末年 に 夏

「字解】 犇、走るなり、戎狄、西 窋 務。雖 卒、子 用,耕在 在 鞠 者有資馬 卒, 1 戎北 子, 狄の地なり、 者、漆 、公 修 立。 度。稷

保歸焉周道之與自此始故詩積民賴其慶百姓懷之多徙而

人歌樂思,其德、

歌樂、召康公が成王を戒めむとて公劉の徳を歌ひし、木を取りて萬の用と爲すをいふ、詩人、召康公なり、樹別ける所によるに、鞠の下に陶の字あるべし、即ち鞠別ける所によるに、鞠の下に陶の字あるべし、即ち鞠別はる所によるに、鞠の下に陶の字あるべし、即ち鞠別はる所によるに、鞠の下に陶の字あるべし、即ち鞠別は多様の

に因り名けて弃といひしなり。 是れ即ち后稷なり、其の初め母之を弃てんとしたるりと思ひ、遂に抱き上げて之を養ひ成長せしめたり、を覆ひ薦きて保護せるなり、姜原之を見て 此は神な

姓姬氏后稷之興在,陶唐虞夏時百穀,封,弃於部號日,后稷別

之際、皆有一令德、

なり、種樹、たねまきうゝなり、菽、衆豆の總稱なり、【字解】 屹、山の時ゆるさまなり、一に吃に作るは非

尚に対

飾無きを以て善しと為すと、而して般は白色を尚べ氏・目夷氏等あり、孔子曰く、殷の路車は質堅くして姓と為す、即ち殷氏・來氏・宋氏・空桐氏・稚氏・北殷姓と為す、即ち殷氏・來氏・宋氏・空桐氏・稚氏・北殷姓と為す、即ち殷氏・來氏・宋氏・空桐氏・稚氏・北殷姓と為す、即ち殷氏・來氏・宗商頌を引きて契の事を記し、【講義】 太史公曰く、余商頌を引きて契の事を記し、

車、輅に同じ、天子の車なり、書詩、書經詩經なり、路【字解】 頌、詩經の商頌なり、書詩、書經詩經なり、路

周本紀第四

踐之而身動如。孕者居期而生 姜原、姜原為。帝嚳元妃、姜原出 姜原、姜原為。帝嚳元妃、姜原出 人蹟心欣然說欲踐之、 一

「講義」 周の后稷は名を弄といふ、其の母 は 有部氏の女にして姜原といふ、姜原は帝嚳の元妃たり、姜原の女にして姜原といふ、姜原は帝嚳の元妃たり、姜原成田野に出でて大人の足跡を見、心に之 を 欣びて踐或日野に出でて大人の足跡を見、心に之 を 欣びて踐或日野に出でて大人の足跡を見、心に之 を 欣びて踐或日野に出でて大人の足跡を見、心に之 を 欣びて踐或日野に出でなった、大二箇月を要した る を以て不祥なりと思ひ、之を狭きちまたに弄てたるに、馬牛不祥なりと思ひ、之を狭きちまたに弄てたる を以て不祥なりと思ひ、之を狭きちまたに弄てたるに、馬牛不祥なりと思ひ、之を狭きちまたに弄てたるに、馬中の過ぐるもの皆之を辟けて踐まざるない、由って之より徒して林中に弄てんとしたるに、其の母は 有部氏

武 而,爲,庚 封、天之 侯 殷,子、政, 祿 之 後,其,殷,父, 爲。後民 以 表。 世、大續。商 諸

に懸けて衆に示したり、又妲己を殺し、箕子の囚れ 【講義】 て死にぬ、周の武王遂に紂の 紂を代つ、紂 で貶して王號を稱せり、是れ帝德の 次第に薄くなべり、是に於て周の武王天子と爲る、其の後世々帝 武庚祿父に地を與へて 、甲子の日に紂の兵敗れたれば、紂は走り入りて鹿 盤庚の政を修め行は 登り、其の藏むる所の寶玉の衣を著、火中に 、比干の墓を立て、商容の間門に旌表し 周の も亦大兵を發して、武王の軍を牧野に距 武王: 此の時に至り、遂に諸侯を率るて 殷の祭祀を續がし めたれば、般の民大 頭を斬り、之を白旗 め、其の 、約の子 投じ

りしを以てなり、さて殷の子孫を封じて諸侯と爲し、

於宋以續股後五 となり、説、悦ぶなり、貶、下ぐるなり、おとすなり、府淇水の南に當る、表、旌表なり、功徳をあらはする「字解】 牧野、殷の南郊の地名なり、今の河南省衞州之を周に附屬せしめたり、 珠之、而,权 焉、 立,蔡 微叔 らはすこ

子,作,

其後分封以國為此太史公日、余以、頌、然 と亂を作して周に叛く、成王周公をして之を誅せし【講義】周の武王崩じぬ、殷の武庚は周の管叔蔡叔 夷 氏 む、而して微子を宋に封じて殷の後に續がしめたり、 宋 氏孔子 氏·空 日,殷 桐 氏 為其為與為人類為 稚 路 次, 車, 氏 爲善、而 姓自 來 色、目

其後

設約の淫

亂は愈。甚しくして止まざるな

師、 狂、竅、諫、爲。乃 約 乃 爲。剖,紂,人與 愈 淫 亂。 不 囚,其,吾得師 此。 器,之,心,聞,不謀,微 奔。殷 箕 聖 以, 遂,子 周之子人,死,去。數、 太懼。心勢、比諫師乃有,乃干不 師. 乃有,乃干不詳、七强日,聽,

> は少師強とは其の樂器を持ちて周に奔れり、近と少師強とは其の樂器を持ちて周に奔れり、近と別とは其の樂器を持ちて周に奔れり、 L 9 奴と為る、紂叉之を囚へて獄に投ず、殷の樂官の 聞けり、試に比干に於て之を見むと、乃ち比干 怒りて曰く、吾れ嘗て聖人の胸には七つの穴ありと かっ る者は君の惡事を見ては死を以て爭ひて之を善に導 謀 り、微子數で練む ずんばあるべからずとて、强ひて対を諫めたり、対 りて遂に殷を 、剖きて其の胸を觀たり、箕子は懼れて佯り狂ひ 周紀には此の字無し、 れど聽 去りぬ、比干は止まりて曰く、人臣 かざりければ、太師 小 師 等 を殺 太師

舞を惡み、將來を恐れて奔りて紂に告げて曰ぐ、上天 紂の賢臣の祖伊といへる者、此の事を聞きて 至人も元龜も敢て吉を知ること無きなり、是れ先王 旣 天は我等を弃て 我 暴虐な 等後 に我が般に下したる所の大命を終へなり、故に 西伯が 人を相けざるには非らざるな る結果にて自ら天命を絶ちしなり、故 飢國 い、安穏に食することあらざ * 伐ちて之を滅 した り、畢竟王が る を以 周 の振

矣、

絕 共 9 何 非を飾りしなり、祖伊其の詭辯に驚き家に反りて日 云 至 U 3 8 . ぞ威力を下して王を滅さいるや、大命何 ぞ 後 率 の命は恆に天に在るに有らずや 々すと雖、我の生るゝや既に天の命ずる りて般に代らざるやと、此くの如く民は王を怨 むことを欲せずと云ふこと無し、 つことあらむやと、所謂知と言とを以て 対は諫む可からずと、 今王其れ奈何にせむと、紂曰く、汝は頻 はざるなり、是を以て現今の 且つ 王は 天 性 を度り 知 我 6 、何ぞ自ら から す 其の言に曰く K E 諫を距 派に天命 皆王 所ありて O) 天 趣, 王に 命 の喪 1-、天 迪"

なり、假人、大人なり、至人なり、元龜、大龜なり、長さ伊、祖己の後にして賢臣なり、斧、惡むなり、訖、終ふ【字解】 飢國、飢の字一に肌に作り、又耆に作る、祖 L 命を絶つなり、虞知、虞は度るなり、迪率、ふみし 尺二寸なるをいふ、トに用ふる龜なり、自絕、自ら天 なり、反、家に歸るなり たが

津、諸侯叛股、會周者八西伯既卒、周武王之東 八百、諸 伐、至 侯 明加

りなり、毀讒、人を悪しざまにいひておとしいるゝこ洛西、洛水の西なり、斧鉞、斧はをのなり、鉞はまさか

、脯、乾したる肉なり、ほじゝなり、差里、地名なり、

肉醬なり、辨、別つなり、道理を分けて陳ぶるな

鬼に作る、意、好むなり、醢、肉にて作れるひしほな

きて内々君の殘虐なるを嘆息せり、之を 黒侯虎が知りて紂王に告ぐ、紂又西伯が己れに違ふ ものと為して之を差里の地に囚へたり、是に於て西伯の 臣の関て之を差里の地に囚へたり、是に於て西伯を赦されんことを請ふ、紂乃ち西伯を赦じれてとを請ふ、紂又之を許し、特に 弓・矢・斧・鉞を賜ひて征伐することを得しめ、西方の諸侯の長と 為して西伯と呼ばしむ、而して費中を登用して政をなさしむ、此の費中の人と為りは善く諛ひて私利を 好 み ければ、般人之に親まざるなり、対又悪來 を 用ふ、此の悪が、
此の費中の人と為りは善く諛ひて私利を 好 み ければ、般人之に親まざるなり、対又悪來 を 用ふ、此の悪ば、般人之に親まざるなり、対又悪來 を 用ふ、此の悪ば、般人之に親まざるなり、対又悪來 を 用ふ、此の悪が、
此の也の人と為りは善く決しいれきずつくる者なり、此を以て諸侯は益、紂を疏んずるに至れり、
か、此を以て諸侯は益、紂を疏んずるに至れり、
ないと為して西伯と呼ばしむ、
のと為して西伯と呼ばしむ、
市して費中を登用して政をなさしむ、
西伯と呼ばしむ、
市して費中を登用して政をなさしむ、
本では、
おいまに、
まいまに、
まいま

す、よつて西伯の勢力滋、大となれり、紂是に於て稍、 由是是 叛* を佐けたれば、百姓多く之を愛せり、しかるに対は途 れども聽かざるなり、又商容といへる賢者ありて政 其の權勢の重きを失へり、王子の比干頻に対を諫む 諸侯之を聞き多ぐは紂に叛き周に往きて西伯に歸服 聽、商容賢 請義 利二 稍失 西伯周に歸りて陰に德を修め 往 者、百姓愛之、科廢之、 歸。 西 伯西伯滋 善政を行ふ、 大、約

り、滋、益、なり、「に徳を修めなば紂の怒を買ふを以て陰に 修むる なに徳を修めなば紂の怒を買ふを以て陰に 修むる なに之をも廢したり、

伊、閩之而咎、周、恐奔告、村日、天及、西伯伐、飢國、滅之、村之臣祖

実なり、辟刑、死刑なり、炮烙之法、銅柱に油を注ぎ、丘、地名なり、長夜之飲、晝夜の別無く打ち續きての酒はだかなり、最夜之飲、晝夜の別無く打ち續きての酒はだかなり、蜚鳥、飛鳥なり、最、一に聚に作る、倮、丘、地名なり、董鳥、飛鳥なり、最大の名なり、伊、満つなり、沙鹿臺、臺の名なり、金舞の名なり、 む、進む中に足滑りて火中に堕ちて焚死す、極めて殘之を熾なる炭火の上に亙し、罪ある者をして行かし り、新淫磬、みだらなる流行謠なり、北里之舞、淫靡な涓は延の誤ならむ、韓子釋名水經の注皆師延に作れ れなり、妲己、有種氏の女なり、師涓、樂師の名なり、 の悪事を言ひくるめること、於、ほこるなり、聲、ほま は 無 手にて撃つなり、飾非、自ら

之,淫,侯。以, 之疆,辨之疾,并脯,鄂侯,而 低,利怒殺,之,而 醢,九侯,歌 侯,新必殺,之,而 醢,九侯,歌 侯,新,龙,龙,村,九侯,歌 西 鄂女三 伯侯不公。昌争。惠九

り、紂又怒りて鄂侯をも殺して脯にす、西伯昌之を聞其の無道を責め、之を爭ひ諫めて陳辨するこ と急な

殺し、且つ九侯をも殺して其の肉を 醢 となす、鄂侯九侯の女は淫事を好まざりしかば、紂は怒り て之を

爲す、九侯に美女ありて之を紂に入る、しかるに此の

酷なる刑なり、

 下の諫を拒ぐに足り、其の言は自らの 非く、體力人に過ぎて無手にて猛獸を撃ち、

非を飾る、其の

講義

は天性能辯にして行動すばやく、

有。炮 其,爲。於 苑 諸 狗 鹿 里 從、於、於、是、於、婦、 侯 間。池、鬼臺、馬 臺 之 舞·靡 有, 烙之 為縣,神,多,奇 之 肉,大 取,物,錢 法 元似。 夜 使 為。最多 野 者、 林、樂、戲、 獸 盈之 鉅 蜚 樂, 宮 紂乃 鳥、室、橋置、盆之 於 男 女,沙 姓 其,廣,粟,稅,淫中,沙益以,聲 重。辟 倮, 怨 丘。 己 相以,中沙盆以,聲逐流,慢,丘火火,實。北 望。 刑,而

と為し 【字解】 資辯、天性能辯なるをいふ、提疾、すばや 無け 聚 錢を多く取り立て、錢を鹿臺に實滿し、栗を鉅橋に蓄 を 至れ 3 T 敬 臺とを擴張し、其の中に多くの野獸飛鳥を放飼す、又 るまで收斂して宮室に充たし、益、沙丘に在る園と高 積し、まだ之のみならず狗馬より珍奇なる 財寶 靡靡の樂とを作らしむ、又賦稅を重くして民より米 從ふなり、是に於て師涓をし 3 下に高ぶ 3 愛 に足 神の念は微塵も無く、唯大いに美女嬖臣を沙丘に 0 め、日夜の別無く打ち續きて酒宴を開きて淫樂す 林の如くし、男女をして保にして其の間に相逐は めて樂みたはむれ、酒を溜めて池と為し、肉を 思ひ、酒を好みてたはれ樂み、婦人を近づけて妲己 れば、百姓は上を怨み、諸侯は之に畔く者あるに し、妲己の言ふ所は如何なることゝ雖悉く之に り、されど みなり、此の如く 、死刑の法を 世 の中 | 対はまだ刑の輕きが故に 反く者あり ありとて入臣に矜り、名聲ありとて天 の者は皆己れの下風に立つ 2 重くして炮烙の刑を設けたり、 全く政事を放棄して 顧ること きの力なり、手格、格は格 て新淫聲と北里の舞と に通 1-至 V

【字解】 偶人、土木にて造りた る人形なり、博、博奕人形を造りて之を天神なりと謂ひ、之と博奕し、臣下をして天神に代りて博奕を行はしめ、天神勝た ざれり、之を高處に懸け、仰ぎて之を射て天を射るといへり、之を高處に懸け、仰ぎて之を射て天を射るといへり、之を高處に懸け、仰ぎて之を射て天を射るといへは、之を辱しめ侮るなり、又革の囊を造りて 血 を 盛めたる時、暴に雷鳴り、之に打たれ て死にけり、子の帝太丁立つ、帝太丁崩じて子の帝乙立つ、帝乙立ちて般道益・衰へぬ、是より後竟に復振はざるなり、「書്教」 帝武乙は無道にして政事を治めざるなり、「書教】 佛人、土木にて造りた る人形なり、博、博奕

なり、ばくちなり、像塚、はづかしめ侮るなり、帝乙長子田微子啓、啓母殿、不得、嗣、少子辛、辛母正后、辛爲嗣、帝乙崩、子辛立、是爲、帝辛、天下帝乙崩、子辛立、是爲、帝辛、天下帝乙崩、子辛立、是爲、帝辛、天下

-

て五輿なり、ければ、天下皆悅びぬ、是に於て殷道復興 れり、是にの禮を爲すこと勿れと、武丁乃ち政を修 め 德を行ひ

「上海」、 「「中国」、 「「中国」

高宗、遂作。高宗 形日、及訓、高宗、遂作。高宗、形日、及訓、西宗、遂作。高宗 形日、及訓、高宗、遂作。高宗 形田、及訓、高宗、遂作。高宗、形田、為、徳、本、祖己嘉。

に高宗形日及び高宗之訓を作れり、復興せしことを嘉び、其の廟を立てゝ高宗と爲す、遂が凶兆の雉の鼎耳にて鳴きしより德を修めて殷道を

なり、訓は高宗之訓なり、散佚して傳らず、て鳴きしをいふ、高宗形日及訓、形は祭の 明日なり、【字解】 祥雉、祥は凶兆なり、雉の宗廟の鼎耳に上り

帝祖庚崩弟祖甲立是為帝甲、武殿復去、亳徙河北、

つ、此の時般復毫を去りて河北に徙れり、立つ、是を帝庚丁と爲す、帝庚丁崩じて子の帝武乙立立つ、是を帝庚丁と爲す、帝庚丁崩じて弟の庚丁市甲涓の正子の帝廩辛立つ、帝廩辛崩じて弟の庚丁す、帝甲淫亂にして殷道復衰へぬ、是にて 五衰なり、【講義】 帝祖庚崩じて弟の祖甲立つ、是を帝甲と爲【講義】

するの意にして徒刑のことなり、築、道普請を為すな相なり、靡は隨ふなり、胥靡は相連繫せられて役に服をいふ、傳險、險一に巖に作る、地名なり、胥靡、胥は百工、百官なり、營求、容貌を繪に畫きて 捜し求むるり、宰は治なり、大臣の長にして即宰相のこと なり、

るといふが如き禮を爲すべからず、若しかゝる片落

禮を爲さば、是れ常道を弄つるを以

て此の

祭祀

に厚薄

るに至れるなり、故に民事を敬みて

3 武丁之を怪みて催れ憂ふ、祖己曰く、王憂ふること勿 ことなり、而して先代の天子皆天 0) る者も亦義を重んぜざるべからざるなりと、武 所の命を附して民の不徳を正すなり、故に人に 善を修めざること有れば、天は既に其の なり、故に民の義を輕 ざるあり、是れ皆民の義と不義とに となせり、故に民に齢を降 く、抑も上天の下民を視給ふは唯義を以て其 るゝに足らざるなりとて、祖己は更に王に れ、かうる怪事ありとも先づ政事を修めなば、毫も 0 無し、故に常の配には彼には厚くし、此には薄 天位を嗣ぎて民事を敬するは、是れ當に然るべ 民を災害し、中途に 雉ありて飛び されば奈何にせば可ならむと、祖己曰く、嗚呼 帝武丁先祖 て宗廟 其の生命を絶つにはあら んじて徳に順はず、罪を改め 成湯 の鼎の耳に登り す を祭る、其 にも永きあり、又永か 0) 因るなり、天の徒 後嗣 0) て鳴きた に非ら 常法とせる 明日に一羽 訓 ざる ざる 常 1 君 3 72

文に錯誤あらむ、の徳を追慕して作りしものゝ如し、是れ恐らく は記り、而るに今此の文に據るに、帝小辛の世に百姓盤庚

日,傅說

是の時徒刑に代りて傅險にて道普請を爲して自ら を天下に求めしめしに、説を傳險の中に得たり、説はして其の容貌を繪に畫きたるものを持ちて、遍く之 を佐けしめしに、殷國果して大いに治りぬ、故に遂に 如く聖人なりき、直に之を登用して 宰相と爲して 丁之を見て是れなりといひ、與に政事を語るに案の 天子の召聘 の食を得つゝありしなり、かゝる卑賤の者なれども を索め視るに皆之に似たる者無し、是に於て百官を と日ふ、故に夢中に見たる所の容貌を以て羣臣百 を觀察せり、武丁或夜夢に聖人を ず、皆宰相をして代りて國政を決定せしめ、以て國 佐の臣を得ざるなり、故に三年の間親ら政令を布 て、復び般を興さむことを思ふ、而れども未だ其 爲す、帝小乙崩じて子の帝武丁立つ、帝武丁 以て其の姓と為し、號して傳説といふ、 佐、輔佐の臣なり、たすけ、家宰、家は に接したれば、都に上りて武丁に見ゆ、武 の小乙立つ、是を帝小乙と 得た り、其の名を 位に即

> り、二年に耿を河水に出られて底に遷り、南庚三年陂に遷り、河亶甲元年に相に遷り、祖乙元年に耿に して成湯の尊稱なり、治、亳西亳にて政令を布きし 奄に遷りしをいる、胥、相與になり、高后 7 をいふ、 至るまでの間に五たび國都を遷せるをいふ、故に湯 ふ、五遷、契より湯までは八たび遷り、其の後盤 て一に般と稱す、故に盤庚より以後は商を般ともい 字解 盤庚とは其の數に入らざるなり、即ち仲丁六 成湯之故居、 成湯の都 な . 6 卽 、高徳の君 ち 西亳 遷

湯の徳に遵ひしを以てなり、是にて四興なり、

たる 巫賢、巫咸の子なり、任、職、此にては宰相の

崩。之爲。崩。弟,祖 侯或以陽 立。子、帝 莫。爭。來 甲, 立,沃,乙 帝 帝 朝和廢, 南 沃甲 祖 崩, 陽 祖 庚,丁,甲,立,子, 代。適, 立。而甲丁是,帝兄是,帝 此更之 之 為。祖 祖為祖 帝 九立。時上 子 辛 帝 辛 丁 崩、之沃 世諸 殷 陽 南 立。 亂。弟衰。甲,庚、立。子、甲、帝 是, 於,子,自是,弟中 弟。祖 帝祖 帝 丁,沃辛 爲。南 沃 是,甲 崩, 子 丁帝 庚 甲

へぬ、さて中丁より以來其の適子を廢して 更に諸甲を立つ、是を帝陽甲と為す、帝陽甲の時に殷道復 たり、是に於て諸侯の朝する者無きに至る、是にて三 0 衰なり、 は位を爭ひ互に相代りて立ち、九世に至るまで亂 及び其の子を立てたるを以て、諸弟及び其の子は 兄たる 是を帝南庚と為す、帝南庚崩じて帝祖 帝祖丁崩じて祖辛の弟たる沃甲 祖辛の 子の祖丁を立つ、是を帝 子の の子 南 庚 或

字解】 比、至る なり、

欲。五,庚 庚 帝 陽 徒、遷,渡,帝 高 甲 盤。 后 無。河,盤 定 南。庚 崩, 成 庚 湯 乃 復之 弟, 處 殷 與 居。時。 盤 庚 成 爾 諭, 民 殷 湯 諸 已立, 之 杏** 先 侯 胥。之都。是, 祖 大 皆 故 河 爲、 臣怨居北帝 定。日,不乃

沃甲 立つ、是を帝沃甲と為す、帝沃甲 祖乙崩じて子の 帝祖辛立つ、帝祖辛崩 崩じて 沃甲 じて

に於て殷道復興り、諸侯之に歸したり、故に太戊を中 遇をなさむとす、伊陟之を辭退して原命を作れり、是 有,伊 宗と稱す、是にて再興なり、 を嘉稱し、之を廟に告げ臣下と爲さずして特別の待 言ふ、故に巫咸は王家を治めて成就する所ありき、よ 伊 つて成艾を作り、又太戊を作れり、帝太戊は伊陟の功 陟,成、陟 復 伊陟は巫咸に告げて其の及ばざる所あるを 興、諸 廟。咸 言,艾, 稱。讓,太 中原原 作。戊

陇[®]宗 赞言、赞は告ぐるなり、巫成、臣の名なり、成 皆逸書の篇名なり、 亶?子, 甲、帝 弟, 居相祖乙遷一 那。

仲

甲時、殷 河亶 壬、仲 甲 立、 復 工是為。帝河 亶甲、河 宣闕、不、具、帝外 壬崩、治 弟,

【字解】 臌・相・形、皆地名なり、形一に耿に作る、書 激に遷し、河亶甲は相に居り、祖乙は形に 遷れり、帝【講義】 中宗崩じて子の帝仲丁立つ、帝仲丁 は 都を 仲丁崩じて弟の外壬立つ、是を帝外壬と爲す、仲 時に殷道衰へぬ、是にて再衰なり、 じて弟の河亶甲立つ、是を帝河亶甲と爲す、河亶甲 書ありしかど今は闕けて具はらざるなり、帝外王崩 丁の

立 河 丁の書あることを知れり、故にしかいふ、 闕、仲丁の書散佚せるをいふ、蓋し太史公は舊より仲 亶 甲 復 興、巫賢 職-乙立、帝祖乙

て般道復興り、巫賢其の職 河亶甲崩じで子の帝祖乙立つ、帝祖乙立ち に任へたり、是にて三 興な

至,是,帝 為,小 康 訓、伊 立。伊 是,尹, 雍 立。為。事,既 己、殷 帝 帝 小 道衰、諸 甲康、帝 康、 弟、太 侯雅康崩、或己崩、弟 崩, 立,子,太 不 溪.

戊帝太戊立伊陟為相、亳有帝雍已崩第太戊立、是為而帝雍已崩第太戊立、是為而帝

「講義」 帝雅己崩じて弟の太戊立つ、是 を 帝太戊と 「講義」 帝雅己崩じて弟の太戊立つ、是 を 帝太戊と 「は、が、女に 本人 立ちて伊陟之に相たり、毫に妖怪ありて れて伊陟に其の所以を問ふ、伊陟曰く、臣の聞ける所 れて伊陟に其の所以を問ふ、伊陟曰く、臣の聞ける所 れて伊陟に其の所以を問ふ、伊陟曰く、臣の聞ける所 によれば、妖怪は德に勝たざるなりと、今かゝる凶變 む、故に帝是れより德を修めなば妖怪自然 に 消滅せ むと、太戊乃ち之に從ひて徳を修めたり、秦の如く妖 怪の桑穀は自然に枯れて何處とも無く消え去りしと 怪の桑穀は自然に枯れて何處とも無く消え去りしと 怪の桑穀は自然に枯れて何處とも無く消え去りしと

て握るをいふ、一本、穀はかうぞの木なり、共生、合生なり、拱、兩手に木、穀はかうぞの木なり、共生、合生なり、拱、兩手に

祥太

の元年に伊尹は伊訓を作り、肆命を作り、祖后を作れ太甲は成湯の適長孫なり、是を帝太甲と爲す、帝太甲四年にして崩じぬ、伊尹迺ち太丁の子の太甲を立つ、関の中王を立つ、是を帝中王と爲す、帝中王位に卽き

すべきことを陳べ、祖后は湯の法度を言へるものな車命祖后、倶に逸書の篇名なり、肆命は政敎の當に爲室の生みたる第一の孫なり、伊訓、尚書の 篇名なり、室の生みたる第一の孫なり、伊訓、尚書の 篇名なり、

大宗、大甲訓三篇、褒帝太甲,稱,太宗、大宗、西姓以寧、伊尹嘉之、

【講義】 帝太甲既に立ちて三年間、伊尹の訓を用ひず、才能暗き上に暴虐の政を爲し、成湯の法に遵はずず、才能暗き上に暴虐の政を爲し、成湯の法に遵はずず、才能暗き上に暴虐の政を爲し、成湯の法に遵はずず、才能暗き上に暴虐の政を爲し、成湯の法に遵はずむしめたり、帝太早起の過失を悔い自ら責めて善道に反れり、伊尹其の 悔悟の態を見て迺ち帝太甲を迎へて、之に政を復し授けたり、帝太甲是れより徳を修めければ諸侯皆殷に 歸服し、官解】 暴虐、あらくしへたぐるなり、遵、順ふなり、相宮、地名なり、攝行、代りて統べ行ふこと なり、太甲訓、尚書の篇名なり、

太宗崩、子沃丁立、帝沃丁之時、

天なり、予は佑けて土地を與ふることなり、有い状、罪 稷をいふ、后、其の子孫なり、帝弗」子、帝は上帝なり、 東郊なり、東為、江南為、淮、東為、淮南為、江の誤なら郊は國都を距る百里の地の稱なり、東郊は毫の都の 、農殖、耕作してふやすことなり、三公、禹・阜陶・后 は孔壁中の真の古文なるやも知るべからず、東郊、

尹、 作成有一 伊尹は咸有一徳を作り、答單は明居を作れ 一德、答單作"明居,

狀の著しきをいふ、

名なり、明居、逸書の篇名なり、民の法を述べたるも のなりといふ、 あるべきとを戒め陳べり、答單、湯の司空たりし人の 【字解】 咸有一德、尚書の篇名なり、君臣皆純一の德

湯乃改正朔易服色上白朝會

改め、服色を易へて白きを上び、朝會には晝を以て行 講義」湯已に夏に代りて天下に王たれば、唇敷を

なり、 に唇數のことなり、王者代れば前朝の唇數を改むる 正朔、正は年の始なり、朔は月の始な り、故

す、帝外丙位に即き三年にして崩じぬ、よつて外丙の の、是に於て太丁の弟の外丙を立つ、是を帝外丙と爲 湯崩じぬ、太子の太丁未だ立たずして卒し いに汝等を罰し殛さむ、汝等罪を犯して 刑を受くるを作れり、即ち其の辭に曰く、維れ三月王自ら亳の東郊に至りて、諸侯及び衆の后に告ぐ、汝等民に功あら郊に至りて、諸侯及び衆の后に告ぐ、汝等民に功あら郊に至りて、諸侯及び衆の后に告ぐ、汝等民に功あらずと云ふこと勿れ、汝の職務を勤め力めて其の績を

とも、 是を以て道を修め民を安んぜざるべからざるなり、 孫に 百姓に作しゝかば、上帝乃ち之を佑けずして其の子して昔黄帝の時に蚩尤といふ者其の大夫と倶に亂を 有りしかば、民乃ち安居することを得たり、即ち水を 故に民に功あらざれば予汝等を罰すとも我を怨むる 曰く、無道なれば行きて國に在らしむること無れと、 南を淮と為す、此の四瀆已に修まりて萬民邑居に安 こと無れとて諸侯に合したり、 てなり、故に先王の言は勉めざるべからず、其の言に て百穀を耕殖したり、以上の三公は咸民に功ありき、 んすることを得たるなり、又后稷は種子を降し播き 治めて東を江と為し、北を濟と為し、西を河と為し、 り、日く、古禹と皐陶とは久し、外に辛勞して民に 地を予へざりき、是れ其の罪狀顯著なりしを以 其の子孫封ぜられて其の國を建立せり、之に反 決して手を怨むること勿れ、是れ皆古より 例 功 あ

作なること已に定説あり、太史公の見る所の此の文、三十字は今の尚書の文と全く異れり、今の 湯誥の僞后の王命なり、湯誥、尚書の篇名なり、而して 此文百【字解】 絀-夏命、絀は黜に同じ、退くなり、夏命は夏

む、犇、走るなり、鳴條、地名なり、

夏師敗績湯遂代,三變,停,厥寶

典寶の一篇を作れり、 て架が保てる寶玉を取れり、よつて義伯仲伯の 二臣 て業が保てる寶玉を取れり、よつて義伯仲伯の 二臣

なり、國の常寶を言へるなりといふ、地の國に至りしなり、俘、取るなり、典寶、逸書の篇名此の國に至りしなり、俘、取るなり、典寶、逸書の篇名の 放立するとなり、三溭、國の名なり、桀走り て

湯既勝夏、欲遷其武不可作夏

を作れり、の地に遷さむと欲す、湯之を不可なりとなして夏祉の地に遷さむと欲す、湯之を不可なりとなして夏祉

ふ、不可、湯之を不可とするなり、夏社、逸書の篇名な【字解】欲、遷、衆議して商の地に遷さむとするをい

天子位平一定海内湯歸至於泰伊尹報於是諸侯畢服湯乃踐

卷陶中 二作、 計、

にすべきこと〉を述べたり、りて夏を伐ちし所以と天下に君たる者は日に徳を新ちて三嵏より歸りて泰卷陶に至 る 時に、中鸓誥を作ち天子の位を踐み、海内を平定せり、さて湯の夏に勝ち天子の位を踐み、海内を平定せり、さて湯の夏に勝

之誥にして尚書の篇名なり、同じ、湯の左相にして伊尹に亞ぐ賢臣 なり、誥、中虺に陶の字無し、尚書には大坰に 作る、中鸓、鸓は虺に【字解】 報、政を報するなり、泰卷陶、地名なり、一本

不有,功於民,勤力乃事,予乃大王自至,于東郊,告,諸侯羣后,毋既絀,夏命、還,亳作湯誥、維三月、

む、我等亡びなば葉王も與に亡びむとて、葉王の速にさらしめ、相率ゐて夏の國邑を割き剝げり、是を以て民衆民相率ゐて和同せずして曰く、是の相何れの時に民衆民相率ゐて和同せずして曰く、是の傳は其れ茲の如か喪びん、予れ女と皆亡びむと、夏の德は其れ茲の如く衰へたり、今朕必ず往きて之を伐たむと、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是日何時喪云云、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是日何時喪云云、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是日何時喪云云、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是日何時喪云云、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是日何時喪云云、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是日何時喪云云、第に亡國の域に達せしむるをいふ、是田何時喪云云、第に亡國の域に要して、第二の徳は其れなの域と、是を以てさらしめ、相率ゐて夏の國邑を割き剝げり、是を以てさらしめ、相率ゐて夏の國邑を割き剝げり、是を以てい、我等亡びなば葉王も與に亡びむとて、葉王の速にさらしめ、相率ゐて夏の國邑を割き剝げり、是を以て

爾尚及一人致天之罰予其

亡びむことを希へるなり、

に是より號して武王と號せむと、桀有娍の大丘に敗で等若し此の誓言に從はざれば、予汝等を辱めて 奴汝等若し此の誓言に從はざれば、予汝等を辱めて 奴汝等者し此の誓言に從はざれば、予汝等を辱めて 奴となし、赦す所なけむと、因つて之を師に告令して湯を作りたり、是に於て湯曰く、吾甚 だ 武勇なり、故言を作りたり、是に於て湯曰く、吾甚 だ 武勇なり、故言を作りたり、是に於て湯曰く、吾甚 だ 武勇なり、故等を作りたり、是に於て湯曰く、吾甚 だ 武勇なり、故等に走れり、

なり、虚、大丘なり、葉、下の葉の字恐くは 衍文 ならめて奴と為すをいふ、師、軍勢なり、湯誓、尚書の篇名を履行せざるなり、偽るなり、帑僇、帑は奴に通ず、辱【字解】 尚、庶幾なり、理、をさむるなり、食ゝ言、前言

の、伊尹湯に從ふ、湯自ら 蛾 を把りて昆吾を伐ち、遂いへる者亂を爲す、是に於て湯師を興し て 諸侯を率して酒色におぼれすさめり、而して諸侯 の 昆吾氏と

是の時に當りて夏の築王は残虐の政事を為

多。 有,有 委, 吾,侯, 罪、天 罪 夏 聽, 尹從湯、 胀, 吾氏 伐。 是"上帝"不"敢" 日、有罪、其奈 言, 正 台 衆、舍.我 之、个女 溪, 小 自地、纸、以 女 子 汝 政, 敢行辈.亂、來」女 不淡泉,正、言, 本にショク 興,師、率,諸 有衆、女 言、夏 伐, 日,夏 氏 割

ざれば、予れ上帝より何を以て罪ある 夏氏を伐たざ 、は行文ならむ、台、我なり、小子、湯自らの 謙離なり、 【字解】 虐政、しへたぐる政事、淫荒、酒色におぼれ といへり、此の如く女等 は既に有 夏は罪ありと言へ 獵を事とし、我が農功を捨てゝ割き剝ぐの政を為す 此の如く罪多ければ天子に命じて之を誅せしむるな て敢て葉が罪を正さずんばあらざるなり、今夏氏は るかとの答を受けむ、故に予れ上帝の命を畏れ敬み とするに非ず、有夏の既に罪多きことは予れ女等衆 極、誅するなり、我君、桀を指す、嗇事、穡事 すさむこと、餓、まさかりなり、格、來るなり、來、恐く り、今又女等有衆は我が君桀は我等を恤まずして田 の言を聞きて知れり、今夏氏の罪有るを捨てゝ誅せ 今葉を伐たむとするは小子の敢て行きて鷽を擧げむ 事なり、制政、民事を割き剝ぐの政なり、 べからざるなり、其れ女等奈何せむやと、 り、然れば愈、天の命ずる所を奉じて有夏を伐たざる に響ひて曰く、來れ汝衆庶、女悉く朕が言を聽け、朕 に葉を伐たむとす、湯衆の誤解あらむことを恐れ之 に同じ、農

旣にして有夏の無道を惡みて 復毫に歸り、北門より 鼎俎を負ひて其の宮に從ひ、滋味を進めて 近寄ると 氏の女の湯に嫁するを幸として其の附き人と爲り、 入る、此にて女鳩女房に遇ひ、女鳩女房の二篇を作り に從ひて素王と九主との事を言ふ、湯之を舉げ用ひ を得、湯に説きて遂に王道を致しゝなり、或人の日 て夏の醜悪を憎みて還る所以の意を述べたり、 て任するに國政を以てす、伊尹湯を去りて夏に適き、 て之を迎へしめ、五度反覆す、然る後に伊尹往きて湯 えて求むる所あらむ 、伊尹は處士なり、湯其の賢を聞き、人をして聘し 伊尹を阿衡と名づく、阿衡湯の賢を聞き、見 とすれども因縁無し、乃ち有幸

なり、處土、土の未だ官に仕へざる者の稱なり、聘、幣 平なり、依り倚りて平を取るの意なり、干、下より上 禹となり、醜、惡むなり、女鳩女房、湯の二人の賢臣な ありて王位に在らざる者をいる、九主、三皇五帝と夏 を備へて賢者を召すことなり、めすなり、素王、王德 に向ひて求むることなり、おかすなり、由、因縁なり かりなり、腰臣、嫁入を送る附き人なり、滋味、美味 阿衡、伊尹の官號なり、阿は倚るなり、衡は

下四方皆入。吾綱。湯曰、嘻盡之 左方、不用。命、乃入。吾綱、諸侯 是,乃去,其三面、祀曰、欲左左、然 之曰、湯德至矣、及禽獸、 之曰、湯德至矣、及禽獸、 り、而して下文の女鳩

聞きて曰く、湯の徳の至りて其の博愛なること、其れ ものは左せよ、右せむと欲するものは右せよ、我が命 禽獣に及べりと、 來るものも皆吾が網に入れといへる者あるを見た 祈りて天より降るものも地より昇るものも四方より を用ひざるものは吾が網に入れと、諸侯此のこ とを 三面の網を去りて改め祈りて曰く、左せむと欲する り、湯曰く嘻かくては禽獸の種盡きなんと、乃ち其 【講義】 湯嘗て外出す、野に網を四面に張りて、神に

【字解】 祝、神に祈ることなり、天下、猶上下の如し、 嘻、歎餅なり、ア、

政を為すものは皆遂に王位に在るべし、勉むべし勉政を為すものは皆遂に王位に在るべし、別むべしなり、湯は夏の方伯と為りて諸侯を征す、郷地の葛伯祭り、湯は夏の方伯と為りて諸侯を征す、郷地の葛伯祭り、湯は夏の方伯と為りて諸侯を征す、郷地の葛伯祭り、湯は夏の方伯と為りて諸侯を征す、郷地の葛伯祭の政の治まるか否かを知るべしと、伊尹曰く、明かなるかな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るかな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るかな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るかな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るかな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るかな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るがな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るがな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道るがな、女の言へることは民能く之を聽かむ、女の道路、進まむ、國に君として民を子の如く愛して善とした。

如し、湯征、逸書の篇名なり、俗…先王居、先王は「字解」 成湯、此の二字符文なり、從…先王居、発王位ののがなると、治不、治否に同じ、王官、猶王位のに從ふといふ、帝誥、逸書の篇名なり、從…先王居、先王は「字解」 成湯、此の二字符文なり、從…先王居、先王は

 賜ふ、契は唐虞大禹の間に與り、其の功業百官に著れ次にして帝嚳の次妃と為り、宗婦と三人行き て 川に女にして帝嚳の次妃と為り、宗婦と三人行き て 川に女にして帝嚳の次妃と為り、宗婦と三人行き て 川に女にして帝嚳の次妃と為り、宗婦と三人行き て 川になら、東はず、しと、是に於て契を生みしなり、契長じて禹と佐け水を治めて功ありき、帝舜乃ち契 に 命じて曰と佐け水を治めて功ありき、帝舜乃ち契 に 命じて曰と佐け水を治めて功ありき、帝舜乃ち契 に 命じて曰と佐け水を治めて功ありき、帝舜乃ち契 に 命じて 同り、之に因つて懐妊して契を生みしなり、契長じて高り、之に関いる。

たり、故に百官是を以て平げり、契卒して子の昭明立つ、昌若卒して子の相土立つ、相土卒して子の貴若立つ、異卒して子の振立つ、報了卒して子の報乙立つ、報乙卒して子の報丙立つ、報万卒して子の報乙立つ、報乙卒して子の報丙立つ、報丙卒して子の報丙立つ、報丙卒して子の報丙立つ、報丙卒して子の報丙立つ、報丙卒して子の表立つ、是を成して子の主癸立つ、主癸卒して子の天乙立つ、是を成湯と為す、

【字解】 殷、一に商といふ、これは殷の祖先の契が始、方官なり、五品、父母兄弟子 な り、五教、五品の教姓、万官なり、五品、父母兄弟子 な り、五教、五品の教姓、万官なり、五品、父母兄弟子 な り、五教、五品の教なり、成湯、湯は王號なり、湯はこかり、百、三人、宗妃、方、成湯、湯は王號なり、湯は武功を成就す、故に贈りしめて商に封ぜられ、其の後盤庚に至り て 殷に遷りしめて商に封ぜられ、其の後盤庚に至りて 殷に遷りしめて、成湯といふ、これは殷の祖先の契が始く之を奪びて成湯といふ、

伯不,祀,湯始伐之湯日、予有,言、徒,先王居、作,帝誥,湯征,諸侯、葛佐,甚,是、人遷、湯始居,亳、

禹正,氏氏 有 命會云 祀* 會、云、孔 男 日。諸自子氏會侯,虞正。繒 征 夏、夏、氏 氏 勘,姓, 稽、江 尋 時,辛 南。時 氏 氏桌 稽、計、貢 學 形。夏 功,赋者 城 備。多。氏 而 氏 崩。矣。傳,斟。褒 也,因,或,夏氏 氏 費 葬。言,小戈

に巡狩 有男氏・樹毒氏・形城氏・褒氏・費氏・杞氏・繒氏・辛氏・封ぜられて國を以て姓と為す、故に夏后氏・有扈氏・ は虞及び夏の時より備れるなり、或人の説に、禹が南 故に學者多く夏小正を傳ふと云ふ、さて貢賦のこと 冥氏・樹氏・戈氏あり、孔子は夏の暦を正しとしたり、 焉 り、因つて之を江南に葬る、故に其の地を命いし、諸侯を江南に會して其の功を計へたる と曰ふ、會稽とは即ち會計のことなりと、 太史公曰く、禹を姒姓と為す、其の子孫分れ 會 者 會計

> 【字解】 して夏の月令を記したるものなり 夏、時、 、夏の 暦なり、夏小正、大戴記

> > 0

平禹於司契長,其帝殷, 之商。徒、日,而 卵,兽"契" 卒。際. 賜,而 百 佐。簡 次 母, 子,功姓,敬,姓禹,狄妃日,紀 子敷。不治、取。三 昭 明 著、氏、五 親、水、吞、人 契 教,五有,之,行,有 興,五品功因,浴。城。 昭百 姓。於 教、不、帝孕、見氏 明 唐在訓舜生支之 卒。百 姓 相以,大封、爲、命、契憧爲、

癸立、是為

す、の發立つ、帝發崩じて、子の帝履癸立つ、是を桀と為の發立つ、帝發崩じて、子の帝履癸立つ、是を桀と為 孔甲崩じて、子の帝皇立つ、帝皇崩じて、子

殺,遂湯已百湯,放,遂而姓 多。帝 不,鳴 歸。夏 百諸 天 邃 條 湯 臺 姓,俟

至。子,周.位。 封於於 和*也、 朝天下湯封夏之後、

にして湯を釋したり、湯是れより德を修めければ、諸 ざるなり、桀迺ち湯を召して之を夏臺の獄に囚ふ、 祀に封ぜられたり、 りと、湯乃ち天子の位を踐み、夏に代りて天下の 臺に殺さすして今此の有様に至らしめしを悔ゆるな に死なむとする時人に謂つて曰く、吾れ途に湯 破れて鳴條に走る、遂に南巢に放たれて死にぬ、 侯皆湯に歸服す、湯遂に兵を奉ゐて夏の桀を伐つ、桀 めず、武威を以て百官を傷害せり、故に百官之に堪 多く畔けるなり、此の時に當りて夏桀は其の德 を朝せしむ、湯は夏の子孫を封ず、其の後周に至りて 帝桀の時は、孔甲より以來天 下の 諸侯 龙

地名なり、杷、國の名なり、澤、ゆるすなり、鳴條、南夷のなり、夏臺、獄の名なり、釋、ゆるすなり、鳴條、南夷の【字解】 武傷、武威を以て傷害すること、百姓、百官 太史公日、禹爲似姓、其後分封

帝孔甲立ちて好みて自ら鬼神に方べ、女色

而

ばるゝことなり、胤、胤國の君なり、胤征、尚書の篇名和氏なり、卽ち天文曆數を司る官 なり、湎淫、酒にお水の北涯なり、五子之歌、尚書の篇名なり、義和、義氏人をいふ、昆弟、兄弟なり、太康の弟を いふ、洛汭、洛

なり、

有,后雌 氏 之。龍 帝 氏, 陶 雌 孔甲立好方鬼神 姓,于 德衰、諸矣畔之、天降龍二 雄 龍 旣-孔 龍氏、受 衰、 甲 食夏后夏后使求、 以,其, 不章之後、 孔 有, 、未得 事淫亂、 甲孔甲 劉 使之孔累學,後,甲學,提

> 美しとし又求めしむ、劉累再び得べからざれば、懼れ愈丁して夏后に食はしむ、夏后之を知らずし て之を り、此の者龍を手懐くることを家龍氏に學べるを以 衰 けしといふ、さて二龍の中雌龍死にければ、劉累之を の劉累の子孫は商に至りても絶えず、豕章 て孔甲に事ふ、孔甲之に姓を賜ひて御龍氏 て陶唐氏既に衰へて、其の後裔に劉累といへる者あ と能はず、且つ未だ龍を飼養する者を得ざるなり、さ 時に天より雌雄の二龍を降す、孔甲之を飼養するこ おぼれい ~ とし又求めしむ、劉累再び得べからざれば、懼れ れば諸侯之に畔きて其の命を奉ぜ n て國政を忽にせり、かくて夏后氏の ざる の後を受 と曰ふ、此

して其の地を劉累の後に授けしをいふ、使、求、再びの後胤の封ぜられし所なり、御龍氏、御は馭するなり、混、馴すなり、龍を飼養する者なり、陶唐、堯帝龍氏、祭は養ふなり、龍を飼養する者なり、陶唐、堯帝龍氏、祭は養ふなり、龍を飼養する者なり、陶唐、堯帝龍氏、祭は養ふなり、龍を飼養する者なり、陶唐、堯帝間氏、祭は養ふなり、龍を飼養する者なり、陶唐、堯帝間の後胤の封ぜられし所なり、殷の武丁祝融の後を滅の後胤の封ぜられし所なり、殷の武丁祝融の後を滅の後胤の封ぜられし所なり、殷の武丁祝融の後を滅の後間の後間の封ぜられり、

むるなり、社、社主の前なり、帑僇、帑は奴に通ず、辱車に載せて行い、之を遷廟の祖といふなり、僇、辱し祖主の前なり、天子親征する時は必ず宗廟の祖主を しめて之を奴と為すをいふ、 となり、御、兵車の中央に乗れる馭者なり、祖、遷廟の むなり、左、兵車の左に乗るものなり、不、攻、于左、攻 治むるなり、左は左乗の務めなり、即ち弓を射るこ

子, 亂, 中之 國,帝 帝 帝日,康歌,昆相胤帝太弟立,往,中康五 少 啓 崩。 崩,立、往,中 子,帝 相之,時,崩,作。義 崩,子, 帝 相 立。子,胤和 帝 中淫是,作。太康廢為五康 立、帝 少 予 崩。康康 康 芒子,立,崩,時,帝子失,

子,子,立,崩,孔帝帝子,甲,厘*不帝 是,立,降 崩。帝 甲、立,帝不降 之,帝不降 之,帝不降 之

洛水の北涯に待ち、其の反らざるを怨み こ五子之歌耽り、羿に逐はれて都に反ることを得ず、帝の弟五人耽り、羿に逐はれて都に反ることを得ず、帝の弟五人 帝芒 帝屋立つ、帝屋崩じて、帝不降の子の孔甲を立つ、是 立つ、帝不降崩じて、弟の帝局立つ、帝局崩じて、子の 予崩じて、子の帝槐立つ、帝槐崩じて、子の帝芒立つ、 ち胤征を作る、中康崩じて、子の帝相立つ、帝相崩じ 是に於て胤國の后王命を受けて往きて之を征す、乃 與に酒におぼれて天時を廢て日の甲乙を聞したり、 す、帝中康の時に天地四時を司る所の義和の二氏相 を作る、太康崩じて、弟の中康立つ、是を帝中康と を帝孔甲と爲す、 て、子の帝少康立つ、帝少康崩じて、子の帝子立つ、帝 崩じて、子の帝泄立つ、帝泄崩じて、子の帝不降

るに兵車の左乗にして其の左の職なる射 殺を治めるに兵車の左乗にして其の命を職り紀れるとしたは誓を作り、乃ち六卿を召して之を申ぶ、啓曰く、ア、軍事を司る六卿及び其に從ふ將卒よ、予今誓として甘誓を作り、乃ち六卿を召して之を申ぶ、啓曰と、ア、軍事を司る六卿及び其に從ふ將卒よ、予今誓をおどしあなどり、又天地人の正道を怠り、棄てゝ常をおどしあなどり、又天地人の正道を怠り、棄てゝ常をおどしあなどり、又天地人の正道を怠り、棄てゝ常をおどしあなどり、又天地人の正道を怠り、棄てゝ常をおどしおなどり、又天地人の正道を怠り、棄てゝ常をおどしおなどり、又天地人の正道を怠り、棄てゝ常をおどしおなどり、及天地人の正道を怠り、棄てゝ常蓮行の徳を相承けて天下に君臨せるに、といるが、おいのではる射殺を治めるに兵車の左乗にして其の左の職なる射殺を治めるに兵車の左乗にして其の左の職なる射殺を治めるに兵車の左乗にして其の左の職なる射殺を治めるに兵車の左乗にして其の左の職なる射殺を治めるに兵車の左乗にして其の左の職なる射殺を治める。

【字解】 有扈氏、扈國の后にして夏と同姓 なり、甘、 「大工でのいる、」、一本のいる、「中国のいる」、「自己のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「自己のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「自己のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「中国のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自己のいる」、「自

孫或は許の國に在りといふ、故に皐陶の子孫を英の地の六縣に封じ たり、其の子薦めて將に政を授けむとす、而 る に會、皐陶卒しぬ、薦めて將に政を授けむとす、而 る に會、皐陶卒しぬ、

任す、それより十年の後、帝禹東に巡狩し、會稽に 至りで崩じぬ、是に於て天下を以て益に授く、三年の喪は皆山の南に居る、禹の子の啓は賢人なりしかば、天下野山の南に居る、禹の子の啓は賢人なりしかば、天下の諸侯は皆意を之によせたりき、故に禹の崩じて益に天下を授くると雖、益が禹を佐くるとの日尚淺きを以て、天下皆益の德を治く知らざるなり、是の故に著侯皆益を去りて啓に朝して曰く、吾が君は帝禹の諸侯皆益を去りて啓に朝して曰く、吾が君は帝禹の居の方なりと、是に於て啓遂に天子の位に即きたり、是を子なりと、是に於て啓遂に天子の位に即きたり、是の故に養命を以て、天下皆益の徳を治く知らざるなり、との古と、といふ、夏后帝啓は禹の子なり、其の母は塗り、日本の女なり、

氏威师五行、怠棄三正、天用剿, (京解) 場、意、屬は附くなり、屬意は意を寄するなり、治、あまねきなり、 (京解) 作, 甘誓, 乃召, 六卿, 申, 之、啓、、 (京解) 場、、 (京解) 場、 (京解) は、 (京解) は、

阜陶卒しければ其の後益を擧げて之に政を

元首を先にして股肱を後にするは禮なり、建哉、治功 均、いふ、拜手稽首、拜手は人に禮して頭の手に至るをいふ、稽首は頭の地に至るをいふ、興事、國を與す 事業 なり、舜又歌曰、舜の字衍文なり、叢脞、瑣細なる事に なり、舜又歌曰、舜の字衍文なり、叢脞、瑣細なる事に なり、舜又歌曰、舜の字衍文なり、叢脞、瑣細なる事に 大きなを確さて大略無きことなり、堕哉、慶れ絶ゆるをい 講のと確さて大略無きことなり、堕哉、という、という、

算びて山川の神の主と為したり、 【講義】 是に於て天下皆禹が度數聲樂に明かなるを

舜の為に九韶の樂を作りたるをいふ、を開きて水を治めたる をい ふ、聲樂、音樂なり、即ちと開きて水を治めたる をい ふ、聲樂、音樂なり、即ち

商均於陽城天下諸族皆去商帝舜崩、三年喪畢、禹辟、舜之子不舜薦、禹於天、爲嗣、十七年而

南面朝天下、國號日、夏后、姓姒均而朝、禹、禹於是遂即、天子位、

をいふ、天下、天下の諸侯なり、【字解】薦、天、天に告げて之をして位を嗣がしむる

六或在許、高、而阜陶卒,封。阜陶之後於英馬、而阜陶卒,封。阜陶之後於英

帝禹天子の位に立ちて皐陶を擧げ之を天に

諧、和ぐなり、 なり、九篇あり すること、祖考、祖先及び父の神靈なり、簫韶、舞の樂 0) 字解」藁、人の名なり、樂 九篇を奏し了れば - 虁、人の名なり、樂師なり、行、樂、音樂を奏率の來り舞ひ、百官も信に和ぎ樂めり、 、來儀、來り舞ひて儀容あるをいふ、 、鳳皇も來 り舞 ひて儀容あり、百

哉、 拜。叢** 良。 哉、 維、 帝 乃 目, 念 庶 更 日、股 哉、 為力 、陟天之 元 陶 肱 興 喜 首 哉、元 候. 明 命、維 日,元 稽 哉、 憲, 股 起,時 敬揚 首 肱

> 無く は安穏なるべしと、又歌ひて戒めて曰く、元首に大略 立ちて衆を率ねて興國の事を為し、汝の法度を慎 を念ひて忽にすべからざるなり、天子は躬親るには帝の歌の如くすべきものなれば、能く 手稽首して大聲を揚げ帝を戒めて曰く、天下を治む 起り、百官の務は廣まらむと、皐陶帝の歌を聞き、 で日 大事なれ、幾微を察して慎むこそ大切なれと、又歌ひ 和ぎ樂みしかば、帝も悦びの餘り歌を作りて曰く、天 皐陶を拜して曰く、然り、汝等皆往きて其の職をつゝ く、元首の德明 て其の天職を敬むべしと、よって更に歌を作り しむべしと、 命を正しくして民に臨むには、時節を失はざる く、股肱喜びて忠を盡さば、元首の治功は盛んに 細事を事とせば、股肱惰らむ、萬事廢れむと、 かなれば、股肱は忠良なるべく 、能く此 ら先に T 0)

肱を先にして元首を後にするは謙 なり、皐陶の歌は 失へば政事亂る、故にいふ、維幾、事の未だ見れざる 講義】陟、正すなり、維時、時節に順 て忠を盡すをいふ、元首、天子なり、帝の歌 察して慎むをいふ、股肱、輔弼の臣なり、 ふをいふ 時 喜哉、 股

百官より鳥獸に至るまで皆太平を喜び

て相

水土の功を成就し、五服を輔け成して五千里の遠き水土の功を成就し、五服を輔け成して五千里の遠きに至り、九州の外の四海に至るまで、咸くに五人の長を置すたれば、各、土功に従ひて其の功績を著しね、惟建てたれば、各、土功に従ひて其の功績を著しね、惟建てたれば、各、土功に従ひて其の功績を著しね、惟建におりと、皐陶是に於て禹の德を敬ひ、庶民をして皆ばなりと、皐陶是に於て禹の徳を敬ひ、庶民をして皆ばなりと、皐陶是に於て禹の徳を敬ひ、庶民をして皆ばなりと、皐陶是に於て禹の徳を敬ひ、庶民をして皆ずなりと、皐陶是に於て禹の徳を敬ひ、庶民をして皆ずなりと、皐陶是に於て禹の徳を敬ひ、庶民をして皆ずなりと、皇はいる。

さんが為に添へたるなり、癸甲、癸はみつのとなり、伊、水無きに舟をやるは理に戻れり、誰れ彼れの差別かのとなり、辛の日に塗山氏の女を娶りしをいふ、壬の今はり、辛の母に塗山氏の女を娶りしをいふ、壬の今はり、辛の母に塗山氏の女を娶りしをいふ、壬のの女なり、辛の日に塗山氏の女を娶りしをいふ、壬のの女なり、辛の日に塗山氏の女を娶りしをいふ、壬の子は下文の癸の字と辛より甲に至るまでの經過の日字は下文の癸の字と辛より甲に至るまでの經過の日字は下文の癸の字と辛より甲に至るまでの經過の日字は下文の癸の字と辛より甲に至るまでの經過の日字は下文の癸の字と辛より甲、癸はみつのとなり、【字解】 丹朱、堯の子はり、慶遊、惡遊なり、世、水行と利用に處せんといへり、

甲はきのえなり、辛の日より四日目の甲の目に往きて水を治めしをいふ、故に癸甲の下に 往の字を添へて水を治めしをいふ、五限名方 五百里あり、故に王畿より東なり、五千里、五服各方 五百里あり、故に王畿より東なり、五千里、五服各方 五百里あり、故に王畿より東なり、即ち九夷八狄七戎六蠻なり、道有」功、道は行きなり、即ち九夷八狄七戎六蠻なり、道有」功、道は行きなり、即ち九夷八狄七戎六蠻なり、道有」功、道は行きなり、即ち九夷八狄七戎六蠻なり、道有」功、道は行きなり、即ち九夷八狄七戎六蠻なり、道有」功、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいふ、苗、三苗なり、道二吾徳一、道は輔けみちびりしをいる。

鳳 晕 舜, までも其音に感じて翔り舞ふ、次に舜の樂たる簫韶 神靈も之に應じて來り、群后も朝會して相讓り、 は音樂を奏して 其の德を 臣 皇 德 來 相 帝舜の徳大 儀、百 明於是 讓、鳥 獸 いに明か 獸 稱へしかば、虞舜の祖 舞、百 となりの、是に於 舞, 官 て 諧,成~至,

廉と ずして善悪を混同して布き施さば其の功無からむ 0 なるべしと、禹曰く、然り、帝若し此 君徳誠に施 ゝを以て皆清 0) 如くなら

辟、違ふなり、匡拂、正し橋むるなり、東、くつらら、未だ詳ならず、索隱曰、於、義無、所、通、即、若しなり、 り、八音、金・石・絲・竹・匏・土・草・木、是なり、來始滑、なり、六律、六律、六君也、五聲、宮・商・角・徴・羽、是な之象、古人の象服なり、文繡、文はあやなり、繡はぬひ之象、古人の象服なり、文繡、文はあやなり、繡はぬひ 人を陷ること、嬖はへつらひて氣に入るもの、不、時、いふ、是れ卽ち四輔の臣なり、讒嬖、讒は惡言を以て 故に轉じて輔佐の義と為す、左右、助くるなり、古人、ちなり、股肱耳目は身體中にて尤も樞要の部分なり、 を疑といひ、後を丞といひ、左を輔といひ、右を列と 時は是なり、是の如くならざるをい 【字解】 休、慶なり、股肱耳目、股はもゝなり、肱はひ 、諺、そしるなり、四輔臣、古の天子に四鄰あり、前、遠ふなり、匡拂、正し矯むるなり、諛、へつらふな

世,水行,舟、朋,淫 帝日、世,若,丹、朱,

于傲。家。維、

り、四日目の甲の日に已に往きて水を治めたり、故にりと、禹答へて曰く、予れ辛の日に塗山氏の女を娶 て妻妾を聞し、以て堯の世を絶ちしが如く 好み、暴にして理に順はず、家に在りて群淫を事とし【講義】 帝舜禹を戒 めて曰く、丹朱が 傲りて惡遊を 啓を生めども予は之を子として慈愛を盡さいりき、 母れ、予は是の如き行ひの者に順ふこと能はざるな 如く私事を抛ちて治水に勤めたりしを以て能く なること

則,也、念、長,里、成、塗

畎澮は と、後,, 畎澮」、後は水底を深くするなり、さらふなり、 木、木を刊りて道を通ずるなり、鮮、鳥獸を新にるなり、橇、そりなり、棒、楊に同じかんじきなり 72 る肉なり、決、川の壅塞を開きて流通せしむるこ 橇、そりなり、棒、梮に同じかんじきなり、栞」 む、襄、陵、襄は上るなり、服、水に溺れ陷 んなるさまなり、懐山、懐

間の溝なり、

臣,命, 右 德、 哉 天 天 有 臣、 民, 重 女类 作 命用、休二 應。慎,方)股, 輔力 作,之,文文 股 肱 位, 以 繡 欲、 耳 帝 安誓 目デ 服 觀, 色,古女人 待。 欲。 明之生左策哉 帝,輔力

同党皆 几 清 善 矣、 臣 、然、帝 卽 不,君

て昭に上帝の命を待たば、天は重ねて 益さば天下は大いに爾に應ぜむ、又爾の意を清 徳の言を出納せむと欲すれば、汝之を聽け、予れ若 服色文繡を制作せむと欲すれば、汝之を よ、余又古人の象服及び日 月星辰を觀察 して當代 ものなり、予れ有民を助けむと欲すれば汝予を輔 なるかな、臣は なる慶を以てせむと、帝曰く、ア、汝は臣なる 止まりとする所の至善に安 も同樣に敬みて予が過を正すべし、しか て之を制すべし、予れ又六律五聲八音を聞 謗ること勿れ 辟は、予を正し矯めよ、汝面前に 禹曰 く、ア、帝汝は汝の在位を 朕が股肱耳目にして離す 、是れ獨禹 んぜよ、又爾が徳を のみならむや て設 命ずるに 慎みて、 すれ 明か べからざる DE ひ退 30 な臣 くし 爾が Ŧî.

なり、行ふなり、贅」道、古人の道を輔くるなり、 つとなり、五刑、墨・劓・剕・宮・大辟、天子の政事なり、天討二有罪、、天命を 7 天命を承けて 奇 怪 な 是なり、底、致す 3 謀 な 有罪を討

浚衆 橇,予、浩 禹,於帝 陸浩; 曰, 畎。庶。山 會,稻、行、行、懷,何,何,謂, 乘,山, 乘 少。之,食,權。車。襄然 定、萬 孳 調川以,行水陵。 有,與决山,行下 禹 亦 孳 昌 稷九 栞, 乘, 民 三字、皇 補。予、川,木,舟、皆 鴻 不。衆 致與 泥 服务 水 足。庶四益 行。於 滔。陶 日,徙、難*海。予,乘,水。天。難。日,

然,此。 也,

て道を通じ、益と與に衆庶に米と鮮しき肉類とを予山行には樺に乗り、九州の山々を巡行して木を栞りには車に乗り、水行には舟に乗り、泥行に橇に乗り、 息らざると謂 ふと、禹答へ て曰く、鴻水天に滔り、浩らむとすと、阜陶禹の言を聞きとがめて曰く、何をか 孳々、孜々に同じ、怠らざることな【字解】 昌言、美言なり、於、歎辭な 浩として山を包み と、皐陶日く、然り、此れ寔に汝の る、是に於て衆民定まりて萬國治まることを得 T 0) 深くさらへて之を川に流し、稷と與に へ、行くし、九州の川を通じて四方の n 不才なれば何をか言はん、予は日に其の 陷れ 其の足らざるを 食物を予へ、少き地方には除りある 、汝も亦美言 り、此の時に當りて予洪水を治めむとて、陸行 帝舜は皐 をいへよと、禹 陶の 補ひ、叉居を 陵に上りければ、下民は皆水に溺 言を聞き了り两 拜 徙 美事なりきと、 して して曰く り、ア、と訓 海に注ぎ、溝 衆庶に 其の 地方を調査し 務を怠ら 調和を記 謂 得難 72

り、鴻水、洪水な

阜陶

尚

言

を續

けて日

<

日に三徳を宣べ布

簡、直、を ひて明かにするをいふ、 强勇なり、 ,而,而 廉、簡はおほ り、章…其有」常、章は明かなり、九德を常、寶、實は思慮を充實にするなり、彊而義、ご 直は梗直なり、たいしきなり、温は温和なり、 擾而 まか 毅、擾は なり、廉は 順ふなり、 廉隅なり、小節のこ 毅は果断 に行 彊は

振日敬宣二六三 致,用,是,毋,九 教邓 哉、 謂, 德 咸, 德, 淫 亮 底% 事, 俊 奇 宋"夜 天 陶 謀, 义 非。在,有。 余未有, 官=國, 其, 罪,人百 五 居"吏 其。肅。 知"女"刑 思言五语富謹施。嚴

义、俊は千人に秀でたる者の稱なり、父は賢才の稱なり、三德の人と六德の人とを合せ受くるをいふ、 かにするなり、有、國、諸侯のとなり、翁受、翁は合す輔くるなり、有以國、諸侯のとなり、翁受、翁は合す り、されど思を盡して古人の道を贊けんかなと、 行 つながら適當に用ひんとを要す、以上吾が言は之を に罪ある者 其 邪淫奇怪の謀を教ふるとなく、又其の人 に非ずし に在りて太平を致すべきなり、又百吏は謹みて民に 此 ら九徳を悉く備へて政事を施せば、天子と爲るべし、 とを合せ受けて之を用ひ、政教を普く天下に施し、自 きて早 輔くるなり、有、家、卿大夫のとなり、亮、宋、政事を明 だ之を 行ひてし かく功績あ らんことを 知らざるな 明かにすれ 夫と爲るべし、日に 字解】蚤夜、蚤は早朝なり、夜は夜遲く迄なり 0 ば其の功績見るべきものあらむと、皐陶曰く、余未 の官に居るは、是を天子の事を亂すと謂ふべし、 へば實行せらるべきかと、禹曰く、汝の言は之を行 如き高德の天子の下には必ず後德賢才の士皆官 くより晩くまで政事を輔け明 ば諸侯 は天の命を承けて之を討伐し、五刑 と爲るべし、三德の人と六德の 嚴に整へで六德を敬みて政 る者の稱なり、父は賢才の稱な か 1-すれ は五 事 故

色色佞人、 へつらふ人な 言葉を飾り 6 此には共工を指す、 色を善 くして内 心 は邪 1= L

8

直_ 柔 德, 有。常 温 立 簡 哉、 廉 治 剛 敬、 彊 Mi

見はる 之を爲さいるべからざるなり、ア、 さて九徳 ずるは難 講義 に過ぎて懼 氣象を缺 徴して きな 阜陶 もの 3 んには、乃ち先づ言つて日 は 6 れ栗 曰く、汝 は 弊あり、故に柔に 九つあるなり、すべ されど人君 一に度量の寛弘の人は むの念に乏しきの弊あり、故 某事を行ひしとに 弊無し、第二に柔和なる者 の言 の如 72 る者 く人を知り して獨立す へ、其 て其 總べて徳の は諸徳を綜 始まる 或は 人の行 人を有力 民 なり * は 其 0 徳な 行 安 為の

> を 故 其 n 或 ば無上の吉事なるべし、 慮の充實 れば其の り、故に質 0 0) 0 弊無し、 義を 0 顧みざるの ば其の弊無し、第七に物事を は溫和の氣を缺くの弊 は に事を治 弊無し 習 3 無し、以上の九德人能く之を行 て果 所 顧みざるの弊あり、故 慣 一に缺 弊無し、第八に剛氣 朴 敢なれ 囚 8 くの 弊あり、故に はれ て敬 あ 九に彊勇の る 質 T 弊あり、 めば其 者は ば其 て決斷力に乏しきの 恭 朴 め 0 兎角事を輕んずる 0 ば 人 あ の弊無し、第五 故に 簡に 弊無し、第六に梗直 其 は り、故に直 の弊無し、第四に事 1= は 不恭に陷 剛に 簡大に 強に 其 て意を て果断なる人 0 力に U L 7-T て思を 為す者 り易き 弊あり、放 義あ 明 に從 細 任 0 かっ T 1= 實 n 溫 T 0 0 あり、 す は思 上下 3 15 を始 ば其 用 3

訥 柔而 栗、寬は度量の弘きを む、事を事とすとは某々 して文なきなり、 事、事、上の事は 柔和 なり、主は恭に同じ、治而敬、治は事なり、立は獨立なり、愿而共、愿は朴 の事を實 辭 1-L せし T 3 ŀ 3 ス

り、九族は高祖・曾祖・祖父・父・己・子・孫・曾孫・玄孫、

一九族、敦は厚なり、序は親

疏の次第を立つるな

如何なり、思、長、長久の道を爲さんとを思ふ也、敦字解】 士、獄官の長なり、大理卿の如し、如何、行ひ

在,已、禹拜,美言,曰、然、長、敦序,九族、衆明亮翼、近可遠

【講義】 皐陶士 と為りて刑罰を司り民の曲 直を治して帝の前に語る、皐陶は其の懐包せる謀を述べて日く、君たるものは其の道徳を信にし、人臣をして謀を破め、長久の道を為さんとを思ひ、厚く九族の次第を修め、長久の道を為さんとを思ひ、厚く九族の次第を修め、長久の道を為さんとを思ひ、厚く九族の次第を的かにして親 疎の 序あらしめば、百官其の化を蒙か其の徳を信に、するに在 るなりと、禹は此の美言をが其の徳を信に、するに在 るなりと、禹は此の美言を辞聽して汝の言ふ所の如しと贊同せり、

之、智、吁、皆、能、皆知、官、若、 知り能く民を惠めば何ぞ謹兜の如き人を憂へ 皆此の如くなすは帝堯と雖難しとせられたり、そも 【講義】皐陶曰く、ア、君たるものゝ務は人を知る 乎有苗,何畏,乎巧言善色佞 又何ぞ有苗を遷さんや、又何ぞ言葉を巧みに を安んずれば庶民之に懐くなり、此の如く能く人 を救ひて之を安 て人を知れば能く人を官に任ずるなり、又民の疾苦 人の善惡邪正を知 に在り、又民を安んずるに在るなりと、禹曰く、ア、 を善くして内心邪なる共工の如き佞人を畏れ なり、ア、と訓む、帝、帝堯なり、黎民、衆民なり、巧言 於、歎辭なり、ア、と訓む、吁、疑ひ怪むの辭 んずるは悪の至れる也、惠至りて民 るは智の明かなる也、智明かに んや、 んやと 颜色 人, 遷、懷, 則

加 流入し、西の方は流沙に被り、北南より風教を及ぼし 時 か が如くするなり、此の如く にして天子の 國より以外 0 地を五服に區別せしめたり、是にて東の方は海に る者は止めざるなり、次の三百里は城郭常居無く、 王畿に近き三百里は之を待つに怠慢にして拘束を 随ひて轉々として處を變へ、恰も水の流れ行く ざるなり、即ち來り服する者は拒まず、去り遠ざ

也、侯服、侯は候ふ也、斥候の事に服する所の地なり、 候する所の地なり、綏服、綏は安んずる也、安んじて として王者の事に任する國なり、諸侯、王者の為に斥 采、事なり、常に王者の事に從ふ所の地なり、任國、時 の稱なり、括、藁なり、栗、米の甲あるものなり、もみ **錘、不を刈る短き鎌なり、よつて鎌にて刈りたる禾穂** は田賦の事に從ふの地なり、總、禾の全きものなり、 地をいふ、甸服、甸は田なり、服は事に從ふなり、甸服 は約束なり、 【字解】 天子之國、王畿なり、即ち王城の四方千里の 者の政教に從ふ所の地なり、揆、度るなり、要服、要 ち穂より藁の本に至るまでの全きものゝ稱なり、 しばるなり、要束して文教に從はしむる

> 服、地荒漠にして 政教達せざれば 其の故俗に從ひて地なり、蔡、放つなり、罪人を放ちやる所の地なり、荒 所の地なり、夷、簡易なり、細判を省きて 治む の流るゝが如く常居無き所の地なり、漸、流れ入るな にして中國の如く嚴正に制せざる所の地なり、流、水 之を治むる所の地なり、蠻、慢なり、之を待つに怠慢 なり、荒いの

天下、天下於是太平治、於是帝錫。禹玄圭以告。成功于り、暨、及ぶなり、散、至るなり、

て四海に至れり、

【字解】 錫..玄圭、錫は賜ふ也、玄圭は赤黑き玉なり、是に於て天下太だ平ぎ治りたり、 を治めたる功を賞し、又天下にも其の成功を告げね、 【講義】 是に於て帝舜は禹に赤黑き玉を賜ひて洪水

然、謀,夷·阜 阿、信。 海 相 阜陶

【字解】 祗、敬むなり、台、我なり、距、違ふなり、朕天下は天子の政教に違はざるべし、む、此の如く天子は我が德を敬みて之を先にすれば、土を賜ひて國を建て姓を賜ひて各、其の宗を立てし

百 甸 服、 百 里、百 五 行、天子の政教なり、 里、服、納、里、天任外 括。賦、子 武,綏。國、 服、納、之 五 總, 服、三 夷 國ョ 衞ル 百 百 以 里、 外 里、諸 服 里、五 粟 外 納。百年,至 百、 族、百. 族、里、 蔡 揆 五 文 服,里、教,服,采 米百 服 南。里、外 外 要

置聲 教、艺.于四海

綏服といふ、其の 中王畿に近き 百里より三百里までは斥候の役を勤むるなり、侯服 以外の 四方五百里を 方五 方五百里を要服といふ、其 衞るなり、是れ蠻夷に近きを以てなり、綏服以外の ざるなり、次の四百里五百里は武術を奮ひて天子 は王者の文教の 王事に任ずるなり、次の三百里より五 は常に王事に從ふなり、次の二百里の民は時とし に不便な 栗を納れ、次の五百里は米を納る、是れ遠き者 が有と為すを以て勞役に服するなり 納れ、次の三百里は藁のみを納る、而して其 ふ、其の中王畿に近き百里の地の となすなり、要服以外の四方五百里を荒服といふ、其 政教を簡易に爲すなり、次の二百里は罪人を流す地 本に至るまでの全きを納れ、次の二百里は禾 百里を侯服といふ、其の中王畿に近き百里の 天子の國より以外の四 れば次第に其の嵩を減ぜり、甸服以外の 中を度りて之を行ひ、盡く之を行は の中王畿に近き三百里 方五 賦 は禾の穂 、次の四 百里までの民 は甸 0 米を己 より藁 百 運送 里は 四

渭、水の名なり、鳥鼠同穴、二山の名なり、 、皆水の名なり、

て河に入る 澗纒の二水に會し、又東流して伊水に會し、又東北し 雒水を導くに熊耳山よりす、東北に流れ

水の名なり、伊、水の名なり、熊耳、山の名なり、澗瀍、二【字解】 維、水の名なり、熊耳、山の名なり、澗瀍、二

栞"於, 旅"是 九川、州, 則,府 交、既 既 正、 败。居、 致 四 九 中 國 慎海 山。

すべく、九州の山々は木を刊り道を通じ、又山祭を爲 州遍く其の恩惠を受けたり、即ち四方の邑には住居 禹は 此 0) 如 して洪 水を治めたれ ば、九

> じて納め、慎みて其の制を超ゆることなく、皆上中下 定まりて正しくなり、財寶年貢は其の地の等級 穀は甚しく修まり、四方の土地は夫々美悪高 溢の患無く、四海の者悉く京師に會同し、金木水火土 し、九州の川 の三等の階級 0 壅る所無く、九州の 々は源を洗 に則りて 賦を京師に 致すや うになれ 澤 には既 ふが如く除 に関を築きた き去りけ 1-の品 應 决

なり、三壤、上中下の三等に別ちたる土地なり、上中 り、滌、原、滌はそゝぐなり、水源を開き除き洗ふが如栞は木を伐りて道しるべとなすと、旅は山まつりな 陳澳に通ず、四方の住居し得らるべき地なり、菜族、 【字解】 攸、同、遍く恩惠を受くるをいふ、四奥、奥は となりい 帝王の都とする 下に又各上中下の三等あれば、實は くして壅塞なからしむるをいふ、六府、金木水火土 所を中と為す、故に中國は京師のこ 九等なり、中國、

禹は已に水土を 平げぬれば、天子は諸侯に り、溢れて滎水と為る、此より東して

講義」流水を導く、東流

して濟水と為り、河に入 陶丘

の北に出

會,于

なりといふ、東陵、地名なり、池、溢るゝなり、匯、彭鑫【字解】 沱、水の名なり、醴、水の名なり、一に陵の名 彭鑫澤に會す、此より東して中江と爲りて海に入る、 地に至る、此の地より東方に溢れたる水は北流して 水と為り、又東して體水に至り、九江を過ぎて東陵の 梁州の汝山より江を導く、東に分流して沱

北會一方文又東北入一方海、水出。陶丘北又東至一方、又東近流水、東為濟、入一方、洪為、然 東

> で、叉東して 荷澤に至り、叉 東北に流れて 汝水に會 し、又東北して海に入る、

名なり、 水の名なり、洗、溢るゝなり、榮、水の名なり、陶丘、丘 の再成せるもの、稱なり、濟陰の陶丘なり、荷、澤の 【字解】流水、河東の王屋山より發する川なり、濟、

于海、 道淮自桐柏東會于泗沂東入

【字解】 淮、水の名なり、桐柏、山の 名な り、泗沂、二沂水に會し、叉東流して海に入る、 講義 水の名なり、 淮水を導く に桐柏山よりす、東流して泗水

道滑自鳥鼠 漆狙の二水を過ぎて河に入る、 して灃水に會し、又東北に流れて涇水に至り、東し 講義 東 北至于涇東過漆沮入于河 渭水を導くに鳥 同穴東會,于豐又 鼠同穴の二山よりす、東流

道。 【字解】 三危、山の名なり、れより南流して南海に入らしむ、 水至一三危、八十南 雍州の黒水を導き て三危山の下に至り、此

大 雅, 東, 道, 草 「字解」 三危、山の名なり、 道…河積石、至.于龍門、南至.華陰、道…河積石、至.于龍門、南至.華陰、 東至..砥柱、又東至..于盟津、東過… 東至..砥柱、又東至..于盟津、東過… 東至..砥柱、又東至..于盟津、東過… 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入... 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入... 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入... 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入... 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入... 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入... 大陸、北播為。九河、同為、逆河、入...

此より北折し降水を過ぎて大陸澤に至り、又北に分湊に至り、又東して雒水の北涯を過ぎて大邳に至る、 り、華陰より東折して砥柱山に至り、又東して盟津の國に入りて龍門に至る、龍門よ り南し て華陰山に至【講義】 河を導くに功 を積石の地 に起し、此より中 に入れり、 て九河と為り、九河又合同して逆河と為りて渤海

道…河積石、河を道くに積石の地より始め

なり、 布くなり、分るこなり、為、自然になるをいふ、逆河、ぐるをいふ、大邳、山の名なり、大陸、澤の名なり、播、の北に在る湊なり、過、大川が小川の在る所を流れ過 しをいふ、華陰、山の名なり、盟津、孟津 九河の合して一大河と為りしものゝ稱なり、海、渤海 に同

八二年 匯 澤 為 彭 蠡 東 為 北 江 八 東 匯 澤 為 彭 蠡 東 為 北 江 八 東 匯 澤 為 彭 蠡 東 為 北 江 一 入 一 方 江 東 匯 澤 為 彭 蠡 東 為 東 為 著

(字解) 漢水と為り、又東して蒼浪の水と為る、それより三流 り江は分れて 三道と為りて 震澤に入り、途に北江と 江に入り、東に回るものは彭鑫の大澤と爲る、彭鑫よ 水を過ぎて大別山に至り、大別山の南 爲りて海に入る、 梁州の幡家山より養水を導く、東に流れて に回るもの

幡冢、山の名なり、瀁、水の名なり、漢・三滋、

一鳥鼠

山

より太華

名なりといふ

夏本紀第二

あり 城 の太行山常山 Ш の二山より王 より太嶽に至る一 より碣石山に至りて海に入れ 一屋が山 脈 1-至る一脈あ あ り、又冀州の り、又冀州 南方の る一脈 の北方 砥柱析

砥柱析城王屋、三山の名なり、太行碣石、二山の名な山龍門西河を踰ゆるをいふ、壺口雷首、山の名なり、即ち梁、江岐、二山の名なり、踰三子河、河は西河なり、即ち梁、口・砥柱・太行・西傾・熊耳・嶓冢・內方・汝山 をいふ、 (字解) 水を通ぜしこと、九山は 道二九山、道は導なり、九州の山脈に隨ひて 九州の山脈の起點たる汗・壺

荆 方·桐 傾朱 国·鳥 鼠。 柏, 内 至。 至"于 負毛, 道, 太 華、熊 淺 至。耳 之

【字解】 西傾朱圉鳥鼠太華、四山の名なり、熊耳外方至り、九江を過ぎて豫章の敷淺原に至る一脈あり、 幡冢、山の名なり、内方大別、二山の名なり、桐柏負尾、四山の名なり、負尾 は尚書に陪 尾に作る、 道 に至る一 の荆山に至る一 山に 脈あり、梁州の汝山の 至る あり あり、又荆 あり、梁州 豫州 熊耳山外方山桐 州 南より 幡家山 の丙方山より大別 荆州の 導きて 柏 衡山 山 荆 1 h

于流 九 沙;= 川弱水至一一一合黎、餘波入

[字解] 講義 り、餘波、あまりの水なり、流沙、水の名なり、 黑·河·瀁·江·沇·淮·渭·洛 て流沙に入るなり し流沙の東なる合黎水に至らしむ、其の餘波は溢れ 海に注ぎしことを記す、雍州 道山九川、九川 是より九州の大川を導きて或は下流 は 九州 、是より、合黎、水 の弱水 の大 川なり、 を導きて西に流 0 即ち 一に地 名な 或 弱

上れば龍と爲るといふ、故に龍門と名づく、上れば龍と爲るといふ、故に龍門と名づく、若し之を

織皮、昆合·析支·渠搜·西戎即序、

【字解】 織皮、毛布なり、昆命・析支・渠捜、西戎の三で秩序立ちて京師に貢獻するやうになれり、西戎なり、禹の水普請の功顯れて、かゝる邊境の戎ま【講義】 毛布を 貢するあり、此は昆命・析支・渠捜の

の國名なり

道、九山、汗及、岐、至、于荆山、踰、于 城至、于王屋、太行常山至,于碣 不入、于海、

山に至る一脈は河を踰ゆるなり、冀州の壺口山雷首州の山脈を記すなり、雍州の汧山より 岐山に及び荆脈に隨ひて水を決して海に注 ぎたり、故に是より九脈に隨ひて水を決して海に注 ぎたり、故に是より九脈に隨ひて水を決して海に注 ぎたり、故に是より九脈に隨びて水を決して海に進入を入れる。

入于渭、亂于河、

なり、西傾山地方の民の京師に至らむとする者は桓鐵・矢の根石・磬の石、及び熊・熊・狐・狸の皮、毛布等 京師に運漕するには潜水に浮び、それより沔水に 至水に因りて此の梁州に來るなり、さて梁州の貢物 を 得るやうになれり、陀水涔水の源も旣に開けぬ、蔡山は惟れ梁州なり、汝山幡山の山間の地も旣に耕作し 三等相雜 るまでは山を踰え、沔水より渭水に入り、河をよぎり 第七位なり、賦は下の中にして下の 上と下の下との を致す迄平げり、其の土は青黑く、田は下の上にして 蒙山も旅祭を行ふべく平治し、和夷の地 て達するなり、 東の れり、貢物は黄金の美なるもの、鐵・銀・剛 方華山の南より西の 方黒水に至るまで B 耕種 の績

いふ、驪、純黑の色なり、三錯、三等相離れるをいふ、いふ、和夷、地名なり、底、績、耕種の成績をいたすをなり、旅平、旅は山を祭ること、平は治功の成りしを「幡は二山の名なり、蘞、種をうゝると、蔡豪、二山の名「学解」 華陽、華山の南なり、汝幡、汝は岷に通ず、汝

す、終南山と敦物山とを治めてより鳥鼠山に至る、此り、弱水既に西に流れて合黎に至り、涇水は渭水の北り、弱水既に西に流れて合黎に至り、涇水は渭水の北、諸義』 西の方黑水より東の方西河迄は惟れ雍州な【講義】 西の方黒水より東の方西河迄は惟れ雍州な

を賜はりて之を納むるとの意なり、大龜、大さ一 きたるくみいとなり、入賜、常に用ひざる品なれば命 り、立練、薄赤に黑みがいりたる幣なり、残組、珠を貫 寸を大龜といふ、踰、こゆなり、水路通ぜざれば陸上 を車馬にて運搬し然る後復水路に從ふをいふ、 ふるを以て、之を重んじて包みて はこに入るうな 尺二

河。荆, 壤污 都。州、道,伊 墳塩 統 統 共

雅・湿・潤ンカン 導きて明都澤に入らしむる やうにし たり、其の土は 塊無し、されど下土は墳ちて疏し、田は中の上にして 第四位なり、賦は上の上と上の中と相雑れり、貢物は に水停りたり、又荷澤の氾濫する時には其の餘波を の四水は 皆既に河に 入りぬ、榮播の澤も既西南荆山より北河水迄は惟れ豫州なり、伊・

あり、而して此等の貢物を京師に運漕するには雒水 又臨時に命を承けて磬石を治むるやすりを貢ぐこと 漆・絲・枲・細き 萬布・麻布なり、其の 篚は 細綿 なり、

磬錯は磬を治むるやすりなり、 纖絮、細綿なり、蘑錯、錯は玉石を治むるやすりなり、は疏きなり、綿紵、絲は細き葛布なり、紵は麻布なり、 の餘波を導きて明都澤に入らしむるをいふ、壤、塊無 覆ふなり、入らしむることなり、即ち荷澤氾濫せば其 【字解】 伊雒瀍澗、四水 の名なり、榮播、榮は澤の名に浮び直に河に達するなり、 きなり、ハラ、グと訓む、墳爐、墳はうごもつなり、塩 なり、播は水の溢れたるものなり、一に波に作る、被、

土、涔、華 理* 西 既道、蔡蒙 馬鹿?ロシ · 砮· 磬、熊·熊·狐·狸·織 惟し 旅 夷 底 流績, 織錯、績、蒸江皮,黄、其、沱 判衡、二山の名なり、江漢、二

一水

0

名なり

朝、

に至りて京師に達するなり

え、夢の に放道に流れ通ぜり、雲の地は卑濕に に非ざれば、此も命を賜は 種の木等なり り、賦は上の下にして第三位に在り、貢物は孔雀 水びたりの と爲り、甚だ地勢の宜しきを得たり、 て此等の となり るとと つる石・朱の類・箇いと稱する美竹・矢幹に中つる なり、江 羽・旄牛の尾・象牙・犀革・金・銀・銅・礪・砥・矢鏃 までは陸上を車馬にて運搬 篚は薄 を上りて、何時にても命の下りし 、又九江 爲す、其 地は稍高くして耕作し得る所あり、 で江 貢 どろ地なり、田は 赤に黒みがか 物は江・沱・涔より漢 水 がは此 而し より産する大龜は の他に包みて匣に入れたる菁茅あり とは此 より南は衡 0 て箘簵楛の二物は三 州界に於て りた り次第 州 下の中に * る幣と珠を貫きたる綬 し、又雑 水に渡り、それより に納むるなり、而し 常に 通 九道に分 南までは維 沱湾の て海 用ふべきも 節には獻上す して第八位な 水を經、南 て土漸く 國より其 其の n 一水も已 て九江 注 荆州 土は 翡翠 间 0 中

宗、朝は て僅に土を見るのみなり、夢爲、治、夢は名なり、雲土、雲は江北に在る地なり、地 るに譬へていへり、九江、江水の此の州界にて九道しとなす、百川の海に注ぎ入るを諸侯の天子に朝 中つる一種の木なり、致二貫其名、其の名とは箘簵とり、丹は朱の類なり、箘簵、美竹の名なり、楷、矢幹に 柏はこのてがしはなり、礪祗、といしなり、 江、是なり、基中、中は 鳥江・蚌江・鳥白江・嘉摩江・沙江・畎江分れ、叉東にて合して大江となる迄の 楷との目録な といひ、精きを砥といふ、経丹、経は と爲る木 澤となりし 二地は禹の時未だ澤とならず、殷周 地なり、地勢差高くして耕作し得る所あるなり、 を得たるをいふ、沱涔、沱は江の 0) 3 節は献上致すべしとの意なり、包極、包みて匣に 來朝 なり、幹は なり、 の朝なり、宗 6 此の 純、幹、括、 柘の木なり、栝は、檜の木なり、 毛刺ある あた 録を上りて 何時にて 柏、純は椿梢に同じ、琴材 は尊きなり、百川 ·沙江·畎江·廩江·隄江·窗 るなり、甚だ地勢の宜 8 別名なり、湾は 0 矢鏃と為す石 1 の世に至りて大 間をいふ、即ち 江南に在 勢卑 此 は 粗きを礪 も入用 宗 水 を 此 0 3

美石竹箭及び象の牙犀の革孔雀翡翠の羽旄牛の尾等して第六位のものを雑ふ、貢物は金銀銅の三品より CK は江に沿ひて海に出で、又淮水に入りて泗水に通じ、 れば貢せざるなり、以上の貢物を京師に運漕するに 如 **篚は錦なり、其の一包は橘と柚子となり、而して此り、南海の島民は萬布芭蕉布等の草衣を服せり、其** 包は上より命を錫はれば買し、若し命を錫はらざ 生 て第六位のものを雑ふ、貢物は金銀銅の三品よりて第九位に在り、賦は下の上にして第七位なり、而 ゆ、其の土 < じ、其の 水運開けて大水退き去りけれ 草は少くしてのび生ひ、其の木 は水びたりのどろ地なり、田は下の下に 大小 は 竹 高 旣 くて

品、金銀銅なり、瑤琨、皆 美玉 なり、歯草羽毛、歯は象り、篠なり、矢竹なり、矢、少く して長きなり、ワカシウ、篠なり、矢竹なり、天、少く して長きなり、ワカシ中江北江なり、震澤、太湖の名なり、竹箭、箭は小竹な 後河に達するなり、 太陽に隨ひて其の居を遷す、故にいふ、三江、南江子解】彭鑫、澤の名なり、陽鳥、鴻鴈の屬なり、鴻鴈 牛の尾なり、島夷、南海の 革は犀の革なり、 初は 島民なり、卉服、卉は衆

しなり、包、つゝみものなり、橘柚、たちばなとゆずと易し、故に織の字を添へて其の織物なるを知らしめ ざる 包は上の命をたまはりて貢し、若し命無ければ貢せ なり、錫貢、錫は命を承くるなり、たまはるなり、此の なり、詩經に具錦の 及衛陽が 砥'羽治,九 卽ち葛布芭蕉布 齒 、 卉服、 語あり、貝 の如きを 水の流に順ひて行くこと、 いふ、織貝、貝 字にては貝類 て作 榦"赋 或 涔璣 珠 新 括 上 土 宗 於 組、 貢。柏 下 夢 。于 は 3 に誤 錦 衣 0) 服 名

師に運漕するには淮水と泗水とに浮び河に通ずるなあり、其の篚は黑の細繒なり、而して此等の貢物を京り出づる浮灣と、淮水、の上に住む民の漁る珠と魚と

なり、浮磬、此の浮は水上に浮ぶことにあらず、水中 を備へたる雉なり、驛陽、驛山の南なり、孤桐、一本立 底、致すなり、埴、黏土なり、漸包、漸は秀で長ずるなの名なり、都、尚書に豬に作る、水の停まる所をいふ、 0) とは此の五色の封土を分ち與へて、其の國に主た 0) しむることなり、羽毗、羽山の谷なり、夏霍、五采の羽 と為さしむるなり、故に諸侯に茅土を錫ふといふこ を分ち白茅にて 苴みて 之に興へ、以て其の國々の して将に諸侯を封ぜんとするときは、各、其の方の 赤、西方は白、北方は黑、上を冒ふに黄土を以てす、而 なり、天子の社は廣さ五丈にして東方は青、南方は り、包は叢り生するなり、土五色、太社の封に用ふる は鯀を極したる地なり、藝、種をうゝるなり、大野、澤 石浮ぶが如く見ゆるより浮と名づく、聲は樂器の 桐なり、琴瑟の材と為すなり、泗濱、泗水のほとり 淮沂、二水の名なり、蒙初、二山の名なり、初 社

名なり、即ち泗水の水中に浮ぶが如く見ゆる石を以て作りたる。磬なり、漢珠を出す貝なり、泉、古文の曁蟾は蚌の異名なり、眞珠を出す貝なり、泉、古文の曁蟾は蚌の異名なり、漢珠、淮水の上の民なり、蟾珠、

江服。品、海、基、 泥布。居、田、其、三 海 **佐**織 、江 琨 淮 下、賦 貝、其包橘。 成、天多人。下、其、震 州。彭 上木澤 鑫 林、錫、黄、卉、毛、島、夷、卉 雜、喬定、都、 貢、其、竹陽 、箭 金 塗·既-所

に注ぎ入り、震澤も定りて震ひあふれざるなり、此のに至れば鴻鴈の屬此に止まるなり、三江も夫々皆海維れ揚州なり、彭鑫澤は既に治まりて水たまり、冬月

して墳り、三方の海濱には廣いに治まれり、濰水も淄水も旣 萊夷の地は放牧に適せり、其の篚は山繭絲なり、而しの谷より出づる生絲・あさ絲・鉛・松・怪石等あり、又 て此等の貢物を京師に運漕するには汝水に浮びて濟 四位に存す、其貢は鹽・細葛・一切の海 なり、東表の て九州に於て 第三位に在り、賦は 中の上にし 東は海より西は岱山 地の 側夷は 功を き潟 に導きぬ、其の土は 用ふること少 に至るまでは維れ あり、田は上 産物及び岱 青州 T て既 F 第

實 下鹵、此の四字行文なり、絲、精細の葛布なり、海物維の名なり、潟、潮のさす鹵地 なり、かた、ひかた、厥田 【字解】 111 玉 T 水に通じ、それより河に及ぶなり、 桑を食ふ蠶の絲なり、やままゆいと らざるもの、をあさなり、怪石、石英・水晶等の 1: 、錯は雑るな 似たるものをいふ、畲絲、畲は尚書に麋に作る、 種に非ざるをいふ、岱畎、岱山の谷なり、枲、麻 略、功を用ふること少きをいふ、潍淄、二水 り、海産の魚類貝類藻類の種 々相雑 如く b

泉魚其篚玄潭陽孤桐泗 于 賦、 土、羽 河-中, 赤 中、貢 藝, 埴 及 維 神神 野 維 纖縞、浮于淮 濱 水、 旣 浮 都。 五 漸 包、本 色、 淮 羽 其,原 夷 畎? 田、底 泗 蝮 平,治, 通、珠、翟、中、 其,蒙

り、草木は秀で長じて叢生せり、其の田は上の中に たり、故に蒙山羽山の谷 土の五色なると、 て第三位に在り、 耕種に適せり、其の土は とを得、大野澤も既に水たまり、東原も平か 間は維れ徐州 講義 る雉と、曜山の南に生する一本立の桐と、泗水の濱 東の方海・北の方泰山 なり、淮沂二水の 33 賦は中の中にして第五位なり、貢は 谷に産する 五采の羽を備 色赤く 間に在る山 水治ま より南 質ねばりてうごも 田も種 の方淮水迄の りて大水減 を動うる になりて

びるなり、田は中の下にして九州に於て第六位に在 ポコとうごもてり、草は茂り木はズキ~~と長くの 乾きたり、是に於て民の水難を丘に避けた 狙の二水も會同し、桑土は 既に蠶を養 ふに足るべく 河を通じて之を海に導きの、雷夏は既に澤となり、雅 は河の末流に在るを以て其の水難殊に甚しければ九 ること十有三年にして後始めて八州 平土に居る とを得たり、沈州の 土は色黑くしてボ 賦は第九等の下の下の割合に取るを以 如何となれば 此の地は水害甚 しければ 濟水より 黄河までは 維れ流州なり、此の と同じく る者は皆 て正しき ・賦を取 州

らる、やうになりしを以てなり、其の貢は漆と絲となり、其の篚は文ある織物なり、此等の貢物を京師になり、其の篚は文ある織物なり、此等の貢物を京師に運漕するには濟水澤水と黄河との間なり、九河、徒駭・太史。馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津、是なり、雷夏、東・馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津、是なり、雷夏、東・馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津、是なり、雷夏、東・馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津、是なり、雷夏、東・馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津、是なり、雷夏、東・馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤との間なり、九河、徒駭・太東・馬頬・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤との間なり、北河、徒駭・太東・馬頼・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤といふ、蘇、真は正しきなり、風は第九等の下下の割合に取るを以て正しきなり、風は第九等の下下の割合に取るを以て正しきなり、風は第九等の下下の割合に取るを以て正しきなり、地、後、長きなり、風・個の八州と同じく賦を出さるべくなりしをいふ、篚、圓形の竹器なり、ハコモノと訓む、株文、文ある織物なり、

右。衞 陂、隄を 至。旣 川 其 禹 ふなり、 既上于 。之 碣如 便 築くなり 獄 口,利、治,禹 E 地 覃 既上, 為, 錯, 懷 梁。行2 の宜 致,及,自功,岐、冀 功,岐 夷 既一州 至, 田、 違はざるをい 皮服、夾 修始 中、常 太 衡 潭。原,州 ~ 山

山 蹇の時より 已に 出する所と山 詳細 て其の巡廻するに先づ冀州 は既 岐山に及ぼし、既にして太原の ざる 禹乃ち行くし なり、よ 川の通行に便利なる所とを視察す、 都 3 して記録に記 せし所の つて、先づ 地質の宜しくして貢 地 より始む、さて冀州は 壺口 載し 方なれば、貢物賦 山 あれば、此には 地 より治 を修 かて・ 物 0 T

> に通じ、 冀州 嶽 位 0 に朝するなり、 右にして一先が海に入り、それより又河 來貢す、其の途次に 通じ、大陸澤も既に爲りぬ、鳥夷の民は一に在るなり、常水と衞水との水運も旣 ものも雜れ 天子に奉る所の 至るまで掘り割 0 0 南 土は色白くして質に塊無きを以て、其のまで掘り割りて水を通ぜしめたり、さて 至 h b 田は 懷 ものは上の上なり、 碣石山を南に 0 地 中の中にして九州に より 土功 を起し 見又西に見 民は皮服を以 されど に開け て衡 を溯りて都 ては て之を 水 T 河

錯、極上に第二等の賦のを起すこと、衡潭、二水の 鎮なり、 名なり 役の數 【字解】 名なり、常は本恆なり、漢の文帝の諱を避けて常とな るに碣石山を南に 見又西に ゝなり、鳥夷、東北の民なり、夾右、鳥夷より都に上 、碣石、山の名なり 、陽は山の南なり、覃懐 は既に記載しあるをい 太原、地名なり、嶽陽、 旣載、冀州は堯 一水の名なり、壌、塊無きを の都とせし所なれば貢物 雑れるをいふ、常衛、二 見て右にす、故に 嶽は太嶽にして冀州 夾右と 小水の

食少調有餘相給以均諸侯、卑濕、令"后稷予、衆庶難,得之食、

布き治め、九州の山々を行き廻り、木を刋りて夫々山を募り集めしめ、衆多の人夫を從へて、九州の水土を 泥を進むには橇に乗り、山を上下するには棒に乗り、 し、陸を行くには車に乗り、水を渡るには船に乗り、 とも溝域を通ずる費用は客まずして民に水利を便に 供物は豊潔にして孝を之に致し、己が宮室を卑くす \$ と十三年の外しきに及び、縦ひ家門を過ぐるとある が失敗を贖はむとて、身を勞し思を焦し、外に居るこ 次第したり、禹は先人の洪水を治めむとして、其の功 の名を表記し、高山大川 ぬ、禹是に於て諸侯と百官とに命じ て人民より役徒 【講義】 禹乃ち遂に益 と后稷 と共に帝舜の命を奉 を測量し、事を行ふに四時の宜しきに從ひ、以て九州 常に準縄と規矩と の成らずして遂に誅 を受けしことを傷み、己れは父 け、禹は司空と為り、益は虞と為り、弃は后稷と 、敢て門に入らず、己が衣食は薄くすとも、鬼神の を離さず、至る所に於て平直方圓 を定めて其の祀 禮の差等を 為り

> 侯に片落なく豐凶を平均にしたり、 に得難き所の る所を調査して少き方の者に足し與 濕地に種うべきものを予へしめ、又后稷 き、九州の山々 境界を劃し、九州の 食物を予へしめ、食物少き時は除りあ を 度りたり、又益をし 道を通じ、九州の T 澤に隄防を築 しめ、以て諸 をして 衆庶 衆庶

溝減、田間に通ず るみぞなり、小を 溝といひ、大を減を刊りて表記 と為すを いふ、父鯀、此二字衎文なり、 といふ、減は古文の漁の字なり、橇、音ゼイ、形船の をいふ、準縄、準は平を爲すもの、みづもり、縄は直 下る時は前方を長 の釘を數多附けたる履物、山を上下するに蹉跌せざ 行くもの、そり、権、音キョク、楊に同じ、裏に半寸許 くにして兩頭少しく起れり、泥上を踏 敷土は九州の水土を布き治むることなり、表、木、木 はし、矩は方を爲すもの、さしがね、載。四時 爲すもの、すみなは、規矩、規は圓を爲すもの、ぶん る為に著くるものなり、上る時は後方の釘を長くし、 に同じ、傅、土、傅は尚書に敷に作る、分ち布くなり (字解) 百姓、百官なり、人徒、役徒なり、人夫といふ くす、かんじき、左右、常に用ふる みすべらし -

忽にすべからずと、禹 水害を除 功績を成就 し、此の事たるや至大至難の任なれば、之を勉めて 譲る、禹日 きて土地を平か せむと、舜 く、已に 女に 拜稽首して契と后 稷と皐陶と 曰く、ア、然り禹に命ぜ にし以て美帝の 命じて司空たらしめたれ 遺業を續ぐ

業なり、居、官、官は司空の官なり、視、其の事に當る【字解】 堯之事、堯の遺業なり、即ち洪水を治むる事 ば、往きて爾の事に當るべしと、

為り紀と爲るなり かくて倦まず和ぎ ひ、身は之を量りて出 の徳は事に違はず、其の仁は親むべく、其の言は信ず 、身は之を量りて出せば其の動作威儀は度と爲る、く、聲は之を量りて出せば其の高下疾徐は律に協 稱可為為,以親人、 馬の人と為りはすばやくして克 出、其、敏等 產言、給空 事を行ふを以て、事々に皆綱と 綱、律、不 く動む 爲。身。違、紀、爲。其,

> の大なるを綱といひ、小なるを紀といふ、まざるさまなり、穆々、和ぐさまなり、綱紀、典章法度は量るなり、此の句上文の聲と身とに係る、亹々、倦 字解 に同じ、すばやきこと、稱以

澤,載。乘,溝食,外功木,侯禹 度。四橇波致十之定百乃 不高姓。 時,山陸孝,三 遂-行。于年、成,山 興 令、開、乘、乘、鬼過《受、大人 益 盆,九棒草车一种。家**;川,徒,后 禹 以 予州,左水鬼。門,乃 稷 宮不勞傷傳奉 行。 庶。九繩,乘,室,敢,身,先 土、帝 稻,道,右。船、致、入。焦。人可以被,規、泥費,薄。思。父。 致、入,焦、人行《命,費,薄,思,父·山,命。 矩,行於衣居。縣·表。諸

試み用ふべしと、是に於て堯は四嶽の言を聽して鯀だ鯀より賢なる者あらざるなり、故に願くは帝之を 水勢浩々として山を包み陵に上りて其の災害久しきさて帝堯の時に當りて鴻水氾濫して天にはびこり、 撃げて鯀の事業を續がしめたり、 以て公平なりと為せり、是に於て舜は鯀の子の禹を 跡の功狀無きを視察し、乃 ち鯀を羽山に 拘禁 て天子の政を統べ行ひ、天下 を巡狩して 鯀が治水の を用ひて大水を治めしむ、而るに鴻水依然として息 なりと、四嶽曰く、今在朝の臣に等級を附くるに、未 き善類を毀れるを以て此の大任に就かしむるは不可 て可なりと曰ふ、堯曰く、鯀の人と爲りは上の命に負 大水を治むべき者を求めしに、群臣四嶽皆縣を まず、其の功績遂に成らざりき、是に於て帝堯は更に の鯀とは皆帝位に在ることを得ずして人臣たりき、 に及びければ、下民皆之を憂ふ、堯是に於て能く此の ひ、昌意の父を黄帝といふ、故に禹王は黄帝の玄孫に しめたり、されど天下の人皆舜が鯀を誅せしとを を求めて舜を得たり、舜登用せられて帝堯に代り 孫なり、而して禹の曾祖父の昌意と父 薦め

字解】 夏、禹が始めて封ぜられたる國なり、後に天下を有つに至り遂に之を以て其の國號となす、文命、に同じ、祖父の 父なり、ひいぢ ゝ、鴻水、鴻は大なり、れど太史 公は 放勳重華 文命を以て堯 舜禹の名と為れど太史 公は 放勳重華 文命を以て堯 舜禹の名と為れど太史 公は 放勳重華 文命を以て堯 舜禹の名と為れど太史 公は 放勳重華 文命を以て堯 舜禹の名と為れど太史 公 (学解) 夏、禹が始めて封ぜられたる國なり、後に天下を有つに至り遂に之を以て其の國號となす、文命、下を有つに至り遂に之を以て其の國號となす、文命、下を有つに至り遂に入る。

に居らしめむと、皆曰く、伯禹を司客と爲さば堯帝の曰く、能く堯帝の遺業を成就する者あれば、司室の官【講義】・堯崩じぬ、舜代りて帝と爲り、四嶽に問ひて其、往「視」「翔「事」。矣、

人の稱、五帝德帝整 他、年 との意なり、書映、尚書の殘缺せるをいふ、有、間、、古文、五帝德・帝繋姓を指す、近、是、聖人の説に近、の稱、五帝德・帝繋姓、大戴禮及び孔子家語の篇名ない神に同じ、高位高官の人をいふ、先生、學を敎ふる の經過せるをいふ、戦、迭に同じ、散りうすなり、 他書の 説なり、即ち帝徳帝繁等の書を指す、 雅馴、正しく穏當なること、薦 の人をいふ、先生、學を教ふる 0 書の首と為す

曾之意之夏 大支昌父,禹夏 孫意日。名。本 而之帝日、紀 意帝父,顓文 顓 日,項,命, 黄 顓禹 父 頊 帝頭之 縣之 皆孫 禹之父, 不,也者父,日。 得禹 黄日。鯀 在之帝昌縣

講舜死之用、於,治、願,可,縣 堯 滔音帝 學。天治、攝是水,帝四可求、天。位。 縣,下水,行,帝九試,嶽堯能,浩為。 禹,以,狀子乃而於,等。縣,水,懷非臣、 而舜乃之求水是之,爲,者,山,當, 續"誅,縣,巡 更 息、聽有,負、臣 陵。堯 縣為於符。得,功四費,命四下之 之是,羽行。舜,用嶽於,毀。嶽民 冬業,於,山。視,舜不用、縣族,皆其。鴻 是以縣登成,縣,者不日,憂,水

官の人々及び凡ての學者は之を言ふことを難れり、事蹟を言へる 文章は基だ穩當を 缺けり、故に高位高のことを載せて其の 上を省けり、且つ百家 が黄帝のしき以前よりせり、然 れども尚書に は唯堯より以來

講義』太史公曰

く、學者多く五帝を稱ふること久

見寡聞の者の為に道ひ難きなり、故に余諸子百家の 思を深くして心に其文意を知るに 非ずんば、固に淺 の説によりて補正するをを得るなり、故に學を好み れど其の軼せる所は乃ち時々帝德帝繁等の如き他書 ば二篇に表見する所の記事は皆虚妄にはあらざるな 其の文によりて五帝德帝繁姓を發明すると章かなる 書を幷せて論次し、其言の尤も正しき者を擇びて五 り、尚書殘缺して外しく年載を經て讀むべからず、さ 初より之を信ぜざら むとせるなり、之を仔細に ものあるなり、顧ふに學者第之を深く考證せずして 處に至るに、其の地の風敵は固に他と殊れり、此等の り、其の間長老の各、往々黄帝堯舜の徳を稱讚せる を過ぎ、東の方は渤海に漸り、南の方は江淮に浮び せずと雖、余嘗て西の方は空峒に至り、北の方は す所を離れざるものあれば、此の二篇は蓋し聖人の ことを總括するに、其の事蹟の帝德帝紫の二篇に記 るなり、此の如く今の學者は多くは堯以前の事を信 に至る迄、儒者の中には 或は之を事實として傳へざ **义孔子の傳へたる 所の宰予問・五帝德及び** に近かるべしと思ふなり、予又春秋國語を觀るに、 觀れ 涿

天子の賓客たるの資格を以て天子に見ゆ、天子も亦 丹朱も舜の子の商均も皆疆土を有ちて先廟を奉祀 之を臣とせざるは敢て天子の權力を專にせざること す、其の服装は 禹是に於て天子の位を踐みたり、さて堯の子の 元通りにし、禮樂 も天子の如くにし、

事を統べ行はしむるをいふ、以ゝ客、天子の賓客の資【字解】 薦"於天"、天に告げ之をして代りて天子のを示せるなり、 格を以でするの意なり、

帝 堯, 國 自 黄 顓 爲。 陶 頊, 章明德、故 至舜禹皆同 氏、姓、 高陽、 舜, 帝學, 爲有 姒 氏契為 黄 爲高 帝,姓、病爲。而。 有異態 商、禹、辛、姓、爲、帝

> 姒氏、禹本は姫姓なり、禹の母修已薏苡を吞みて禹を孫なり、後に姫水の上にて成長す、故に姫に改む、姓【字解】 同姓、同じく姫姓なるをいふ、黄帝本姓は公 生む、因つて似と改めしなり、 す、夏は本姫姓なりしが後に処氏と改む、契を商と為 と為し、帝嚳を高辛と為し、帝堯を陶唐と為し、帝舜 を有處と為し、帝禹を夏后と為す、而して氏を別に せむが為なり、故に黄帝を有熊と為し、帝顓頊を高 す、姓は子氏なり、奔を周と為す、姓は姫氏なり、 て其の國號を異にせるは、各、其 の明徳を明か に福別

黄帝、其 然。太尚史 言之、孔 及帝 書獨載義 繫 子, 儒 所,不傳,雅 者 鹿東瀬等 馴,以薦。來 以多, 乘, 稱, 而, 五 宰予 不傳、 紳二而 問·五 余 帝, 先 帝 生 難言矣 南,西,德

氏

蒼梧之野、葬於江南九疑是為,踐、帝位三十九年、南巡狩、崩於

【字解】九疑、山の名なり、

瞽叟、夔夔唯謹、如、子道、封、弟象、舜之踐、帝位、载、天子族、往朝、父

爲諸侯、

郷に往きて父の瞽叟に見ゆ、其の狀蘷々として唯謹【講義】舜の帝位を踐むや、天子の旗を車に載せ故

子, 祀, 朱, 歸, 亦, 天, 服, 舜, 之, 乃, 子, 其, 子, 然, 讓, 於 舜, り、封、弟象、孟子に「封、之有庫」とあるは是なり、「字解」朝、訪れ見ゆるなり、夔々、和き敬ふさまな 天十 朝、訪れ 然心讓心 · 弗臣、示不敢。 · 服、禮樂如之、 商 後舜 子。年 均、皆 見ゆるなり、夔々、和ぎ敬ふさまな 禹 亦 踐.如 有天疆子 舜,崩。省、 專以,土,位,堯,也、客,以,堯,子。 乃 見。奉。子 天 先 丹 畢,

りしが如くす、されど諸侯は商均に歸せずして禹にの喪畢りて禹亦 舜の子に譲る、恰も舜が堯の子に譲めて天子の事を統べ行はしむ、十七年にして崩じぬ、三年天子の事を統べ行はしむ、十七年にして崩じぬ、三年、議義】 舜の子の商均亦不肖にして帝位を嗣ぐべき

五帝本紀第

72

b

方は交趾・北餐、西方は 戎・析枝・渠廋・氐・羌、北方はして四方各五千里を隔つる所の荒服の間は勿論、南 天子に奉ずるの義 むき違ふとなし、唯禹の功のみ大いなりとなす、九州 四海の內皆帝舜の 山戎・發・息慎、東方は長・鳥夷に至る迄を撫で鎮め、 の諸侯は各其職分を以て朝廷に りて百官親み和げり、龍は賓客を主りて四遠の人來 を主りて百工 功を致 せり、益は虞を主りて山澤開け の事情を誤らざるをいふ、辟、開くなり、司徒、文教を いふ、伏、平伏するなり、得、實、民上を欺かざれば其 にしりいたいくとは蓋し皆虞帝より始まりしなり、 字解】大理、獄官の 朝せり、十二の諸侯の命行はれて九州の民敢 し、鳳凰は來り翔ぶ、此の の樂を興して帝舜の徳を頭し、地は珍異の物を り、弃は稷を主りて百穀是れ茂れり、契は司徒 名山を開きて道を通じ、九澤を疏通し、九河の 伯夷は禮を主りて上下皆讓れ を防ぎて九州を定めたり、是に於て九州 功を戴けり、是に於て禹は乃ち九 を失はざるなり、叉王畿を中心と 長なり、平、判決の公平なるを 如く天下の帝德を明 來貢するに、皆其の 6 水を てる かっ 之、年五 舜年二 主る官な 九招といふ、

流

して

水害

0

招

荒服といふ、之を五服といふ、故に荒服の四方相距 里を侯服といひ、侯服より又五百里を綏服といひ、 沈。淮・渭・洛、是なり、方五千里、王畿を中心として四適符、是れなり、九河、九川に同じ、弱・黑・河・淺・江・ 九澤、大野・彭蠡・震澤・雲夢・榮陂・荷澤・盟豬・豬野・口・砥柱・太行・西傾・熊耳・幡冢・内方・汝、是れなり、 が舜の十二枚にそむきたがはざるをいふ、披山九山なり、辟遠、そむきたがふなり、句意は禹の九州の民 服より又五百 里を要服といひ、要服より又五百里を 方に五百里づつの地を甸服といひ、甸服より又五百 披は山邊にそひて道を通ずるをいふ、九山は浒・壺 韶なり、虞舜の樂の名なり、簫韶を 九たび奏す、故に こと五千里なり、荒服、前條に詳なり、九招之樂、招は り、九州、揚・荆・豫・青・ 3

八、堯崩、年六十 十、以孝聞、年三十、堯 十、攝行天子事、年五

尚不善をなす者あり、故に善者と不善者とを分ち、不皆與れり、獨三苗の民のみは前に三危に遷したるに、は、進む、一きのは、進めよと、是に於て遠近の衆功は、進む、一きるのは、進めよと、是に於て遠近の衆功は、進む べきものは 進めよと、是に於て遠近の衆功は、進む、一たび調査して始めて 退くべき者は退職を引き、ア、汝等二十有二人、各職務を分擔し続き。

不善者とを分ちて遠け居らしむること、「字解」 二十有二人、其誰々なるか詳ならず、或はいら、時に順ひ天の宜しき所を視て事を 行ふべし とのり、時に順ひ天の宜しき所を視て事を 行ふべし とのり、時に順ひ天の宜しき所を視て事を 行ふべし とのり、分北、分は分ち析くなり、北は遠ざくなり、彦はい善者を更に他に遷し遠けたり、

功、益主。虞、山澤辟、弃主、稷、百穀禮、上下咸讓、垂主。工師、百工致、、理、平、民各伏得。其實、伯夷主、此二十二人、咸成。厥功、阜陶爲。此二十二人、咸成。厥功、阜陶爲。

虞

帝

異 之東、析至。其山,莫。賓 物,功,長枝鳳於,鳥渠 職,通。敢,客,茂。 於鳥 荒 九 來 辟 是.夷、廋。服. 貢、澤,違、人 氏"南。不决。唯 四 羌,撫、失、九禹 海 翔汉乃 北、交 厥,河,之 興。之 下,九 內,山 阯 咸 戎 北 宜,定,功,牧 明德、皆 招 方 九為行、親 發息 之 發五 戴, 州,大、而和、 西、千 各 披*九 自致舜慎戎里以九州

て民各、心服して 其の事情を欺かざれば 悉く其の實したり、皐陶は獄官の長と為りて判決公平なり、よつ【講義】 此の二十二人の者威夫れ (其の功績を成

を受納するに必ず信實なるべしと、しきは出し、悪しきは諫めて之を還し入れ、上下の言のじて納言た らしむれば、夙夜に謹 みて朕が命の宜百官を振ひ驚すことを畏れ 忌む なり、よって今汝に

(字解) 長、言、歌とは詩の言に調子を附けて聲を長く引ける 永きに依るとい より商角徵羽と次第に清く短くなるなり、故に聲は をいふ、大抵歌の聲は長くして濁れるを宮と爲す、其 ものとの義なり、聲依、永、聲とは宮商角微別の五音 を意に改めたるならむ、志は意の行く所なり、即ち詩 栗の態なるをいふ、詩言、意、尚書に意を志に作れ 二月の音氣をいふ、此律によりて五聲を 和ぐるもの とは意の趨く所を言ひ表したるものとの義なり、歌 は是なり、疑らくは後人後 漢の桓帝の諱を避けて志 とするをいふ、典樂、音樂を掌る官なり、穉子、國子な 心を清く明かにして物慾に掩はれず、よく三禮を事 廟を掌る官なり、静潔、靜は清きなり、潔は明かなり、 、即ち公卿大夫の子弟をいふ、栗、謹み深くして戰 なり、八音、念・石・絲・竹・匏・土・革・木の八種 三禮、天事地事人事の禮 ふ、律和、弊、律は六律六呂にして十 なり、秩宗、郊

の樂器より發する音をいふ、諧、和ぐなり、倫、五聲の型なり、孟子萬章に「金聲也者、始』條理」也、玉電振之」也者、終』條理」也」とある理に同じ、撃、石拊、石、撃は也者、終』條理」也」とある理に同じ、撃、石拊、石、撃は立く撃のなり、折は輕く撃つなり、石は磬なり、潜に和げば他の七音は容易に和げ得るを以てなり、設に石のみを云ひて他を省けるなり、百獸、諸の禽獸なり、讒説、人を惡しざまに言ひ譏ること、殄篤、殄は絶つつなり、偽は便。程南譌・の譌と同じく爲の字の誤にして行爲のことなり、矜為とは善き行爲を傷け絕つの意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、衆、衆臣なり、納言、喉舌の官なり、即ち下の意なり、まれば、五聲の

陟遠近衆功咸興分北三苗、時相天事三歲一考功、三考絀舜曰、嗟女二十有二人、敬哉惟

あらむやと、四歳皆日

舜又曰く、ア

、四嶽、能く朕が三

倫、依、虐、教、夷、秩曰、舜神永、簡、釋讓、宗、伯曰、 舜 日,敬 蒙,維夷為,靜以 潔,汝,禮,

夙 石、百 律。而子 人 振率。以,和,無。但。驚,舞,和、聲,傲、而 除,舜 薆 八 詩。温、 率。以,和《無》直。龍、夜。 音言寬然,直,能,意,而以,哉 哉,歌,栗、夔,維 日、於、予 股? 擊,毋、長、剛、為、靜石,相言,而典潔 畏忌 爲納言 讒

說

ア、伯夷よ、朕れ汝を以て秩宗と爲さむ、汝夙夜に敬 く、伯夷こそよけれと、舜曰く、 一體を典る者 拊,奪,聲,無,樂,伯為,皆 聲を和ぐるなり、故に八音よく和げば、五聲の理は調子を永く引くに依つて調ひ、六 律六呂は以 態あるべし、又心剛健なれば從つて人を虐ぐるの みて 恭敬の念少し、故に胸中 寛大にして謹 み深く戦栗の になすべし、又胸中寛大なれば物事に大まかにし 面折するの缺點あり、故に心正直にして顔色を 曰く、汝の讓りて賢者を推し進むる はさることなが と、舜又曰く、龍よ朕は彼の讒言の善行を絶ちて 獸に至るまで皆其 りと、夔曰く、ア、予大磬を撃ち小磬を拊てば諸 ふこと無くして、神も人も之を聞きて皆和ぎ樂 し、歌は詩の言に調子を附けて長くうたひ出し 易にして傲るべからず、又詩は意の趨く所を言ひ表 にすればあなど りおろそかにするの 失あり、故に あり、故に剛なるとも虐ぐるべからず、又物事を して之を戒めて曰く、人は己れ正直なれば他の と爲す、又變を以て典樂と爲して國子に教へしむ、而 ら、汝宜しく此の官に居るべしとて乃ち伯夷を秩宗 正直なれ、又心を清明にして物慾に汚されず、能 禮を事とすべしと、伯夷之を蘷と龍とに譲る、舜 の調に感じて率る來り舞ふ 溫和 非を 0 簡

失

罪を明かにすれば、能く民をして信服せしめんとて すをいふ、姦軌、凶惡なる者なり、 子なり、不、馴、馴は順ふなり、猾、夏、中國を侵 じ、たねまくなり、五品、五常なり、即ち父・母 行きて其 * 【字解】奮。庸、奮は明かにするなり、庸は功なり、拜 と、是に於て益を虞と爲す、益拜稽首して朱・虎 獣を治むるとに順はんと、四縁皆曰く て共工と為す、舜又曰く、誰か能く予が上下の草木鳥 んと、四嶽皆曰く、垂こそよけれと、是に於て垂 皇陶を士と為す、舜又曰く、誰か能く予が工に 稽首、首を地に べしと、遂に朱・虎・熊・熊を以て其の輔佐と為す、 | 宅は遠中近の三居と爲すべし、此の如くして其 きて其の官に居れとなり、而して汝の讓る所は聽舉げて其の人を得たるを首肯する解なり、往とは いるなりとの意を含めり、稷、農官なり、時、蒔に同 諸臣に譲る、舜曰く、往けよ汝虞と爲りて和 ば、各其の居る所に差等を附~べ 五 刑 0 疑は 附けて禮 しきも するをいふ、然往、然とは他 のにて 流罪にすべきも 内より聞を起すを 、盆こそよけれ し、而して其 を以 順は 熊 4. 0

姦といひ、外よりするを軌とい

流刑にすべきものをいふ、有、度、度は尚書に宅に作て刑するをいふ、五流、五刑の疑はしきものにて當に 治 するは、五つ通りの差ある筈なれども、其の實 居、五度は尚書に五宅に作る、五刑を寛めて流放 即ち刑を處するに輕重の中正を執て心服せしむるを 長なり、五刑、 すは非なり、朱・虎・熊・羆、四臣の名なり、 なり、朕虞、虞は山澤を掌る官なり、朕は舜自ら ふ、工、共工の略稱にて共工は百工を掌るの官なり、 し、次は九州の外に流 近の三居に すべしとの 意なり、即ち大罪は四裔に流 る、是なり、流放せられたる者の に曝し、天子の同族は旬に適きて人の知 るをいふ、三就、大罪は屍を原野に曝し、次罪は市 いふ、五服、五刑を吟味して各、其の罪に服從 大辟とて死刑に處するなり、服、從 り、四に宮とて男は勢を割き女は幽閉するなり、五に り、二に劓とて鼻を截るなり、三に剕とて足を刖るな へる語なり、之を連文にし 水官の共工と異なり、上下、上は 一に墨とて し、次は中國の外に 額を て朕虞を以て官名 傷けて墨を入る 居場所なり、 は 原なり、下は しむ れざる所 ると せ 遠 >

舜は禹以下の

朱虎熊熊舜曰、往矣、汝諧、遂以, 以,日,流、汝舜垂,誰,有,作,日, 益,下 親、 教,五在品 以,臣以,上是舜五軌,寬不

に謂つて曰く、誰か能く功を明かにして養帝の遺業 を美くする 者あらば、官に任じて 其の事を相けしめ 者に職を分たんと欲し、四嶽 賊姦執內外に跋扈す、汝士と作りて之を正すべし、而 天子の同族は 甸に適 き人の知れ ざるやうに 刑すべ るには、大罪は屍を原野に曝し、次罪は市朝に曝し、 して士と作りて五刑を處するには輕重の中正を得 徒と為す、舜又曰く、皐陶よ今や蠻夷中國を聞し、寇 始めて飢ゑ苦めり、汝稷に后と爲りて百穀を布き蒔 るべしとて馬を司空と為す、舜又曰く、寿よ今や庶民 れど汝には若かざるべければ、汝往きて此の官に居 拜稽首して稷と契と阜陶とに譲る、舜曰く、汝餅退し て、民をして服する所あらしむべし、又五刑を處斷す て之を敷くには寬にして急にすべからずとて契を司 るなり、汝司徒と爲りて敬みて五数を敷くべし、而し きて民に食を與ふべしとて奔を后稷と為す、舜又日 て稷契と皐陶とに譲れるは、寔に其の人を得たり、さ し所なれば、慎重に慎重を重ねて勉め勵むべしと、禹 を平げよ、此の事たるや堯帝の時より頗る難しとせ べけむと、舜曰く、さなり、嗟禹汝司空と爲りて水土 以て土地民事を掌らしめば、必ず堯帝の功を美くす んと、四嶽皆對へて曰く、伯禹を擧げて司空と爲し、 、契よ今や百官親しまず、父母兄弟子の五品順は

3

目,謀,未 有, 儿 牧 於, 辟 論。 几 服、 帝 時 通、至, 於 12 德,方, 文 遠,耳 祖-用等

佞

蠻

夷

の年老いぬれば、舜に天子の政を代り は盆、舜の德の 雨の如き非常 に、天下丹朱に歸せずし 講義 ・値・益・彰祖の十人にいる・皇陶・契・后稷・位すく舜の代と為りしが、禹・皇陶・契・后殺・位する。 得 じぬ、三年の しめたるなり、政を攝 T る者なるに、未だ夫々分擔の職務あらざりき、 事を用ふること二十年に 於て四方に巡 舜は 人の の變に遇ふと 喪畢 天下を授くるに足ることを知れ 行 りて位を堯の子の 丹朱に讓 かる 狩す、さて舜が擧 してより八 大山 8 0 心迷はざりけ して堯は政を代 より已に皆學げ 麓 に入りて、烈風 年にして堯遂に 統 げらる ~ 伯夷・夔・ めた れば、堯 とこと り、堯 b りし

> りて其 行ひ づ堯の とす、故に四門を開 故 1-長官に命じて堯帝の徳 舜は て佞りを 文祖 此 に至 等の 遠けしめたり、かくて蠻夷 5 人々 放し 四 1= 嶽に て四 謀りて第一に徳 務を分 を論贊し、又 方の 視聽を 疏通 悉く 厚徳を民に を布 而 率あ かむ T

帝の 耳目、視聽なり、十二枚、十二州の長官なり、帝德、堯の職務なり、文祖、堯の太祖の廟なり、辟、開くなり、 字解 徳なり、 大麓、麓は山口大の徳に服しぬ、 足なり、 ふるとなり、分 り、辟、開くなり、

讓,汝為,之 舜 平司事水宏者 謂 四 使 與維美 居, 是 勉功,相影 陶 哉 舜 日, 日、然、 禹 嗟"伯 首、禹

檮杌といふ、當時鯀の性之に似たり、故に世人之に此 の異名を附けしなり、三族、渾沌(離兜)窮奇(共工) 檮 り、話言、善言なり、檮杌、頑凶にして放縦なるさまを 氏惡言を飾れり、故に世人之に此の異名を附けしな 飾、あがめかざるなり、窮奇、常 行窮まりて 諂諛を好 開明を好まざる故に世 人之に 此の異名 を附けしな 四邊に遷して四門に凶人の無くなりしを言ふなり、 者を以て充すに至れり、偖四門開けたりとは、四凶を みて前の三凶に比へたり、されど舜が四門を開放し き、又縉雲氏に不才子ありて、飲食を貪り、貨賄を貪 み、途に人に向ひて奇異の行をなすをいふ、當時共工 る、天下之を稱して饕餮といへり、天下の人之をも惡 言を知ら 世の賢者を賓禮し、四凶の族を流し四邊の地に遷 て山林の怪物を禦がしめしかば、四門は開けて賢 、毀、言、毀は敗るなり、言ふ所信を敗るをいふ、崇 かるに 堯の時に 至るも 堯は之を 去ると能はざり 世々世に害毒を流すを以 開通せざるさまなり、灌兜が凶惡を好みて世の 帝鴻、帝嚳に同じ、凶慝、凶惡なり、慝は惡、 ず、天下之を稱して懤杌といへり、此の三族 て世人之を憂ひと爲す、

に世人之に此の異名を附けしなり、比上之三凶、 に世人之に此の異名を附けしなり、比上之三凶、 に世人之に此の異名を附けしなり、比上之三凶、 に此へしなり、賓三子四門、賓は嬪に同じ、客をあひ に此へしなり、賓三子四門、賓は嬪に同じ、客をあひ に此へしなり、賓三子四門、賓は嬪に同じ、客をあひ しらふなり、四門を開放して衆賢を賓禮するをいふ、 しらふなり、四門を開放して衆賢を賓禮するをいふ、 といひ、食を貪るを餮といふ、當 時三苗 之に類す、故 に世人之に此の異名を附けしなり、比上之三凶、三凶 に姓へしなり、賓三子四門、賓は嬪 に同じ、客をあひ しらふなり、四門を開放して衆賢を賓禮するをいふ、 といひ、食を貪るを餮といふ、當 時三苗 之に類す、故 怪物にして、よく人を惑するのなりといふ、 怪物にして、よく人を惑するのなりといふ、

子は孝にして、五常の教遍く行きわたり、中國の太平 布かしめしに、父は義に母は慈に兄は友に となりしのみならず、外夷の邊に至るまでも皆其の 得ざること無きなり、又八 元を擧げて五 教を四方に め かっ 、以て百事を揆らしめしに、皆母を以て其の次序を 能はざりき、舜 0) 世 に至り八愷を舉げて 土地を主 3 だ之等を學 げ 弟は 用 恭

すなり、后土、地なり、揆、度るなり、五教、五常の教な なるをいふい り、即ち父は義に母は慈に兄は友に弟は恭に子は孝 堅・仲容・叔達是なり、 化に霑ひたり り、高陽氏の八愷は 字解 、而して舜の八元は詳ならず、濟、成すなり、隕、墜伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季 狸是な 、元は善なり、八人の善き才子なり、高辛氏の八元 八愷、愷は和 内、中國なり、外、夷狄 而して舜の八愷は詳ならず、八 蒼舒・隤皚·檮蘇·大臨·龐降·庭 なり、

鴻 有,

> 人也、 饕,食,堯-謂,才 餐於飲 堯 御網網 四 標為 未 能、机 於流。惡。冒蓋去。此 教 之, 訓ス 凶, 此, 貨雲 族、 四 族,之,賄, 氏。世 遷三天有憂話于凶下不之言 之,言, 至"天 舜謂,才 裔。賓。之,子于下

悪み、惡言を崇め 飾る、天下 之を稱し て窮奇 といへへり、又少皥氏に不才子 ありて、信義を 敗り、忠直をを隱し、好みて凶惡を行ふ、天下之を稱して渾沌とい 頭氏に不才子 ありて、数へ論すべからず、善 昔帝鴻氏に不才子ありて、正義を掩ひ、

拔 り、分、財を分配するなり、宮、室なり、鄂、愕に同じ、 なり、打、ふせぐなり、匿空、拔穴なり、實、填むるな【字解】 絲衣、細葛の布なり、倉廩、米穀を納る、藏 たり顔なり、よつて象と其の父母とにて 舜の財を 父に謂つて 元來此の を知らず喜びて舜は已に死にたるものと思へり、象 おどろくなり、鬱陶、思ふ所甚しくして氣分の伸びざ らむといへり、かゝる事件の後と雖、父に事へ弟を愛 安否を憂ひて氣分も為に伸びざるなりと、舜之を善 愕きて悦びざれども、さあらぬ態にて曰く、我は舜 之を見るに、象なりき、象は舜のまだ死せざるに打ち とは父母に予へむと、象乃ち舜の室に止まり居て其 分配せむとす、是に於て象又曰く、 じて舜を五典百官に試みしに、是れ亦皆治まりぬ、 すること彌、謹めり、是に於て堯は益、其の聖德に感 の琴を鼓けり、舜琴の聲を聞き 誰なら むとかへりて 上より土を下して井 一女と琴とは象の所有とせむ、其の他の牛羊と倉廩 に解して、さなり、爾の真情は塞に友悌の義に近か りたり、しかるに瞽叟と象とは途に之 を塡めたり、舜よつて投穴より 事を謀りしは象なりとて、し 舜の妻たる堯の

の美名を成して其の祖先の名譽を隕さいるなり、して世之を八元といふ、此の十六人の一族は世々皆其て世之を八元といふ、此の十六人の一族は世々皆其といがば、世は其の利を得て太平となれり、世この八は『講義』 背高陽氏の代に才子八人ありて天子を輔佐【講義】 背高陽氏の代に才子八人ありて天子を輔佐

によれば九夫 なり、邑、聚より稍大いなる村落なり、周禮の郊野法 9 即ち三十六夫の 舜、內 、窳はいしまなり、陶器の焼き損じをいふ、聚、村落親戚、舜の父母及び弟を指す、苦窳、苦はゆがみな を井と 村落 行なり、即ち外にての 為す、四井を邑となす、とあり、

叟,共置,後乃上,予,堯 以,逢,牛乃 象,象,下。空,瞽 喜。土,旁,叟 廩弟羊,賜。 兩 以,實。出、又 笠, 瞽舜, 井,舜 使 自, 叟 舜_ 與 叟 尙 衣、 **父**為舜既舜,扞。從 下 母已從入。穿京而 復 與, 分。死,匿深*井,下,縱欲琴 於象室聲舞云。八次次,第一是一日,出,里穿、得,焚、之,築。 象字聲舜去,火,殺為 日。本去、與井,不紫廩,使倉。 舜謀。瞽象為死舜舜。廩

武 復 舜,琴,凜,妻, 舜,事,正舜 予,堯, 五 瞽 德 往 父 二 典叟陶見 母女 之,象 官弟,曰。象乃皆彌然。鄂此, 乃舜思其倉

琴とを 【講義】 其の後瞽叟は又舜をして井を穿らしむ、舜亦危險な 糜に上りて壁を塗らしめ、瞽叟は下より火を放 り、然るに父の瞽叟は尚復舜を殺さむとし、舜をして て飛び下り之を打ぎ去りて死せざることを得たり、 用意したりき、由って 笠を以て鳥の 廩を焚きぬ、舜は豫め此の事あらん かと二つ ることあらむと察し、豫め拔穴を井の側 きて旁より出でむとせり、舜は父の命 既に穿り入ること漸く深き頃、瞽叟と象とは 賜ひ、又舜の 堯は舜の聖徳 を認め 爲に米倉を築き、牛羊 、乃ち舜に 兩翼の如く 細 面に 奉 を予へた 井 設 0 布と 共に 笠を * け 5 T

三年成都、三年成是、三年成是、

の側 を垂 薦めて此の者こそ真に天位を踐ましむべき後繼者と 時には孝行の名天下に聞えたり、其の後十年經ち して遠ざからず、父母の要求することあれば、常に と爲るべき者を 四嶽に問ふ るに際會す、即ち帝堯は將に位を讓らむとして天子 き、又かゝる危險なる父母なりと雖、決して之を疏 て子たるの道を失はず、兄弟仲よくして弟には慈み されど舜は父母に順ひて其の心に適はむことを希ひ りしに、舜の父の瞽叟はかたくなに、母はひずかし ることもありき、舜は此の如くにして家計を援けた 壽丘に作り、叉時に乘 じては負夏に到 りて利を益す に耕作し、雷澤に魚 漁し、陶器を河濱に 燒き、什器を 、弟はおごりたかぶりて、皆舜を殺さむと欲せり、 に在りて其の命に從ふなり、故に舜の二十歳の 舜は冀州の人なり、まだ若かりし時は、歴山 れば、流石 時には、恰も朝廷にては頻に有徳者を求む の親子も之を殺すことを得ざり 、此の時四 嶽は皆虞舜を

河濱に陶器を焼きてより皆舜の技巧に習ひて 苦 織い の上の人は皆其の漁の場所を譲り合ひしといふ、又 畔を侵略せしが、舜の耕すやうになりては皆其の び弟に事へて、甚だ婦道を行ひたりき、又堯の九男 済に居て內行彌 ~謹みければ、堯の二 女も己れ帝女 邑を成し、三年にして都を成しゝなり、 れば舜の居る所一年にして村落を成し、二年にして あらざるやう になれりといふ、此の如き高 徳の人な を譲り合ひしといふ、又雷澤に漁してよりは、雷澤 なり、叉舜の歴山に耕さいる前は、歴山の人皆他 は舜と與に なりといふ貴顯を以て、敢て驕らず、よく舜の父母及 らしめて其の外行を觀察す、舜は帝の二女を娶り、婚 せて其の内行を觀察し、其の九男をし なすべけれといふ、是に於て堯は其の 處りて皆益と其の交誼を篤くしたりと 二女を舜に て舜と與に處 の人

益するをいふ、子道、孝道なり、内、内 行なり、即ち家切の家具を什 器什 物といふ、就、時、時に乗じて利を人家常用の器具は一に非らず、十を以て數ふ、故に一人家常用の器具は一に非らず、十を以て數ふ、故に一人家常用の器具は一に非らず、十を以て數ふ、故に一人家常用の器具は一に非らず、十を以て數ふ、故に一人家常用の器具は一に非らず、十分、内、及器

帝舜

りとも自ら其の罪を 引き受けて 弟を囘護ひ、父とにの懸からざらむこ とを欲せり、又假合 僅少の過失 母と弟 殺さむとするを以て、舜は之を避け逃れて父に惡名 けることあらざるなり、 然るに父の瞽叟は後の妻の子を愛して常に舜を 意 舜の生母死にたれば、瞽叟は更に妻を娶りて とに順 より舜に至 して 子の 弟を生めり、象の性は傲慢に 底人たりき、舜の父の瞽叟は盲なり、 窮蟬より帝舜に至るまでの間の五世 ひ事へ、日に手あつく謹みて解りなま 項といる、韻 るまでは 七世を經過せり、而し 項の父を昌 して 意といふ 悌順なら

の父は盲目なり、故に名と為す、懈、おこたるなり、す、瞽叟、瞽は目無きの稱なり、叟は長老の稱なり、舜て帝號となしゝ也、重華、目に 重瞳 あり、故に名と為り、即ち舜はよく德を行 ひて堯帝の道に循ひしを以り、即ち舜はよく德を行 ひて堯帝の道に循ひしを以り、即ち舜はよく德を行 ひて堯帝の道に循ひしを以く、即ち舜は忠(雲経、黄は國名なり、舜は帝 號なり、風俗通

冀州之人也、舜耕歷山、

漁電

澤-陶》 欲夏河 堯用,二 欲舜,父 篤。舜, 舜 耕。成一 差,以,女,咸,聞,得,不母。壽 二觀,妻,薦,三郎失,嚚,丘, 女其舜,虞十,求,子弟就, 甚 澤,山。 有, 不外,以,舜,而常道,象。時.

に中國とは京師のことなり、

き有様なれば、舜は是れ、實に天の命ずる所なりと思 獄訟する者は、丹朱に行かずして舜に行き、賞め歌 ど諸侯の朝覲する者は、丹朱に行かずして舜に行き、 ひ、遂に京都に行きて天子の位を踐みたり、是を帝舜 者は、丹朱を賞め歌はずして舜を賞め歌へり、此の如

は才の人に如かざることをいふ、權、經の道に反すれり、故に上に凡てといふ、不肖、肖は似るなり、不肖と 八年、舜紀を案ずるに、始めて舜を舉げ事を用ひしめ らむとするの意なり、胖な、降は避く 繼ぐは常道なり、而るに賢者を求めて 禪るは權道 ども而も道に合ふをいふ、所謂權道なり、即ち父子相 めてより崩ずるまでの 八年とを 合算したる 年敷な しより政を攝せしむるまでの二十年と、政を攝せし 【字解】 薦…之於天、舜を帝位に即かしめんとする こと、中國、帝王の都とする所を天下の中と為す、故 ことを天の神に推し進むるなり、即ち帝位を舜に讓 、ハカリテと訓む、之、行くなり、謳歌、賞めうたふ るな な

辠,欲,而瞽

順殺,生學、事、衆、富、衆、富、舜、象、而

與有愛,弟、小後,

舜,

母、

死

瞽

叟

及後母

謹

窮 蟬 H-7 句 以至常 昌意 望、句 以, 蟬、望、 舜至《父,父,皆舜。日,日, 微 微為庶 康、敬 世 顓 矣、 項 自從 顓 妻, 更. 人. 子, 娶, 舜, 項, 篤, 受, 常。妻, 父 窮 父,日,日,日,日,

【講義】 虞舜は名を ふ、句望の父を敬康といふ、敬康の父を窮蟬といふ、 いふ、瞽叟の父を橋牛といふ、橋牛の父を句望とい 重華といふ、重華 の父を瞽叟と

四四四

歌。舜。南。之人。堯丹舜。不。樂。悲者獄諸喪而日。朱則足。以。哀、不。訟。俟畢。卒。終則天授。思,如 足,以,哀、辟"舜, 授。思,如。位,播 謳者朝舜授。不天下、天堯。喪。凡 歌、不、觀、讓、舜、以、下、得、下、堯 丹之。者辟。以、天病、其於、知、母、十朱、丹不、丹天下而利。是子、三八而朱之。朱、下、之丹而乃丹年、年 年、年,政, 崩。之, 方 莫, 百

而丹於堯 病,朱. 丹權,朱四 歌、之,朱南崩,而得。朱、授。之 利其病舜不 舜,舜.而河三 謳,之,之年一利,授,授,省,學,姓 足らざることを知れり、故に權りて舜に授けむとす、ざる前、堯は子の丹朱の不才にして天下を授くるに 母の喪に遇ひし如く、三年の間四方に音樂の聲 ぐるもの無くして常義の徳を思へり、堯の未だ崩ぜ にして崩ぜり、帝堯の 譲らむとす、さて堯の位を避くること凡て二十八 りて天子の り、其の後二十年にして年老いたりとて舜をし 位,日, 病みて樂まざらむ、然るに之を丹朱に授くれば、天 焉、天 民は苦み病みて 丹朱獨其の 利を得ん、此の二者 授くれば天下は其の利を得るも、丹朱は定めて 是,也就 堯の位に立てること七十年に 政を行はしめ、遂に之を天に 為、夫 帝 舜、後 崩ずるや百官悲み歎くこと 之。中國、踐、天子 して舜 薦めて

を撃

て何とて一人を利せしむることを

成り行くとも、終に

天下の民の病めるを見

せんやと、卒に

にか決せむ、堯自ら斷じて曰く、假令我が子は

授くるに天下を以てせり、堯崩じて三年の喪星

舜は位を丹朱に譲りて南河の南に退きれ、され

假 典刑、象は法なり、典刑は常刑なり、法は常刑を用ひ流すなり、決 川とは卽ち水害を防ぐことなり、象以! 京師に 揚・豫・梁・雅・幽・弁・營是なり、決、川、決は水を導き 奏上するをい の諸侯來朝するをいふ、告以ゝ言、地方の民情治績をの明年には西方の諸侯來朝し、又其の明年には北方 とい の治績とを試 の諸侯來朝し、其の明年には南方の諸侯來朝し、又其 はざるの b 雁を執 るをいふ、肇、始むるなり、十有二州、冀・兗・青・徐・荆 なり、民を治めたる b 五 執りて自ら 致す所以のものを いふ、にへなり、五器、 端五 、雁は いふ、特牛、牡牛なり、群后四朝、四方の、生時は父といひ、死 ぬれば考といひ、 令大罪を犯すとも常刑以外の極刑に處せざるをい のとなり、士の執る所たり、雉は死して其の節を失 る、 E 來朝するを に同じ、祖禰、祖は祖父なり、禰は父のとな 義に取 を知りて は ふ、明試以、功、諸侯の奏上せる所と其 群集して其 る、為、摯、摯は執るなり、致すなり 功あれば車服を賜ひて之を賞す 5 行くの رکم 卽ち 0) 義に取る、一 類を失はざるの義に取 巡狩 0 ひ、其の廟を禰 明年には東方 一死、死したる 諸侯の交、

ふ、流宥...五刑.、 まなるなり、百姓不〉便、百姓は百官なり、不便は不安罪するなり、工師、大匠卿なり、淫辟、みだりてよこし 作…贖刑、金は黄金なり、贖はあがなふなり、意不善に撃つ刑なり、教刑は教官の不勤者を懲す刑なり、金 不勤者を懲す刑なり、扑作』教刑、扑は、榎の楚にて官刑、鞭は革のむちにて撃つ刑なり、官刑は官吏のて五刑に當る者は寬めて流罪に處するをいふ、鞭作」 罪とは共工・讙兜・三苗・鯀を罪したるをいふ、 なり 終は身を終 告残は人の為に止むを得ずして害を作すとなり、 を出さしめて其の罪を贖はしむるをいふ、害裁過赦、はあらざれども、其の為す所の結果惡しき時は、黄金 夷狄の如くにするをいふ、三危、山の名なり、極、拘囚 はあやまちなり、怙終賊刑、怙はわざし爲すとなり、 墨・劓・剕・宮・大辟是なり、幼少老耄蠢愚の して苦むることなり、四辠、皋は古の罪の字 、三苗、 國の名なり、變、其の形と衣服とを更めて るまでなり、賊は人を害ふことなり、刑は 流 は流罪なり、宥は寛むなり、 罪を犯 なり 五刑は 金、

堯立七十年得舜二十年而老、

天子に見ゆる時に執る所の 祀れる古の聖賢 を其の上に加へ燒 とは畢星をいふ、望山川 侯なり、班、瑞、班 は五色の 族苦を ・子は白・男は玄なり 神を祭るを 水·河·淮 第五 なり は五 るとなり、歳二 を 會す 序 問 月なり 0) 師 嵩 玉なり、 第 40 あ 嶽 ふると 靈をい る所の 秩 3. 水。 四 雨 山 b 0 き、以 星を 山山 は順 師 中 長 なり 、巡狩、天子の 濟 3 、は、分 73 ふ、揖三五瑞、揖 拿 信の玉にして公 礼比 111 水なり 十二次をい b 序 は公侯 9 は て天を祀 きより 一月、舜 を立 岱宗、岱 つなり、改め 、四嶽 、故 五 嶽 とは 山(南) 風 が差の 以伯子男 四瀆 順 2 師 6 3 ると 一は泰 諸侯 五星 とは 次 75 群、恆 三公の 帛、纁と玄と黄とのる時には瑞といひ、 鈞を 為し 黍 かっ に起原す 斛 進 位 射華鍾 陰 12 卑 氣節 法 さい りなり 0) なり 3 0) 六を呂 旅 百粒 にて寸尺丈引と為す、量はますめ 別 分 から は音律な 嘉(冠 世子 石と為す、五禮、吉(祭禮) は 如 及 あ 月 度は 中式の の重 、是より十進法 b b し、合い時月、正、日、合は協 ぼ 鉄兩 とい して六律は黄鍾・太簇・姑洗 、單位 大小 は支 婚)なり、五 もの さに 5 と雁 卽 斤 ふ、六呂 一斤と ひ、 秬 H そ 鈞 ち 0 さしなり、分寸尺丈引の 黍 音律に十二あり、陽六を律とい 執 0 起原す、而 との 帛なり 之を陳列する時 石 龠 五嶽 0 甲乙を協 5 0 は 為し、三十斤を 玉、 横の 牲 附 别 1-は 中 五. を三公に なり て合 林 あ 庸 式 諸侯の 立端に同 廣さに b 鍾·南 0) して二十 0 区 升斗解と為す、衡 秬黍 君 卿 正すとなり、律度量 四 位 は 世子は は羔を執 呂·應 じ、諸侯 起原す 瀆 黄 0 は ·ุ質·夷則 なり、龠合升斗 四銖 鉄 千二百粒 を諸侯

は飲む

る

75 1-

b

五

瑞

0

諸侯が

邊

廣野等

神、山

あ

ま

<

群 II 華 7

b

は岱

山 四

山

西西

瀆

は

0)

名なり

遙

に望み

祀

3

鍾·太呂·夾

り、四

に比

別

あ

5

是より十

箕星をい

雨師

司

中

غ をい

司

命とは

文昌

0 月

0

、辰と

は

B 口

0)

は

星·辰

。司

中。

命

風

は蒼

は赤・ 下な

伯は黄

四

嶽

配

る諸

、柴、山なり、柴、なり

を積み性

なり

は長

なり

王

5

ふ、ニ

の之を執

執

b

大夫は

る、二生、

纁を執

釣と為し

四

を 中

は

0) は 0 積

終

を受け

より 侯

年

0

T

玉を諸 0

に分ち

與ふ

0

地

巡

7

民 後

0) 五

b

卽

山

111

も位

0)

望

秩、望は

遙

望み 神

祭

3

て流放 撃げ 8 を執 者は 處するなり、 事を爲して終身改めずして人を賊ふ者は正規 失によりて罪を犯したる 者は之を ととと 所と、 0 罪を犯すも を防ぎたり、又刑法は專ら常刑を用ひ 賞せり、舜は又始めて天下を十有 在る大川に限防を築きて水を疏通せしめ、以 を進 に試みしに、果して働りて邪なり 為に止むことを得ずして患害をなしたる者及び過 順重 て鴻水を治めし なりと戒 め、堯は之を不可なりとせしに、强ひて之を工 き者には には に處し、官吏の不勤者には鞭刑を作り さず るに成 地方の りし者には **扑刑を作り、心不善にあらずして其の** 慮欽みた 此の め むりと難、常刑以外の たり、 るべ 黄金を出さしめて刑を贖はしめ、 如く刑法を設けたり 事 く静にして疾く急ぐべからざ 量すべき 實 めんとせしに、堯は不可 る上に飲み冤罪な 前 7 車服を下し 1= を明 記 L 者には五刑を科 かっ たるが如く、灌兜は共 1-赦免し、故意 き、又四 州 賜ひて其 調 と難 刑に處 、假令非 に分ち 查 からしめ、刑 、刑を司 一續 、教官 民 なり は鯀を つて水害 成績 の刑 せずし 各州 するこ 常 に悪 功 3 3 1-人 功 大 0) 0)

皆其の 為し なす、 東夷 遷し 山に放ち を試 服とを變 ざるなり、此 養帝に て の風俗に みしに、是亦其 て庶民を苦めたり、是に於て舜は巡 一在、明かにするなり、瑤璣玉衡、塘は利を用ふるの公平なるに心服せり、 西 るに て南壁の風俗に變ぜしめ、三苗を三危 奏し請ひて、共工 戎 0) て北狄 0 嶽 變ぜしむ、此の 風俗に 時 の强 三苗 0 0 ひ 變ぜしめ、縣を羽山 風俗と等しからし 功績無かりき、故に百官安か て試 は江 を幽 3 淮 荆州 んことを請ひし 四凶を罪に處 陵に流し、其 1= 在り め、灌兜 狩より に拘禁し 數人 の形 して天下 かっ ば、之 山 を祟 と衣 亂

天を祀 【字解】 方歲星)火(南 星) 土(中央鎭星) 是なり、類...上帝.、 り、後世の 横へて璣を窺ひ、以て天文の運行を觀測する 正すなり、七政は日月と五星となり、五星とは て飾りたる磯を運轉し、玉を以て管としたる横簫 り、磯は機なり、衡は横にして横簫の ふ、上帝は天の神なり る常祭を郊祀といふ、臨 渾天儀の類ならむ、齊二七政、齊はとこの 方熒惑星)金(西方太白 時に天を 類は祭の名なり とな 星)水(北方 は祭るなり、 6 るを類 器械 美珠 美珠 木(東 する 1

刑 可,力 師。 共

兜,流。數、故。不 淫 共為。百可、辟、日、惟工、亂。姓嶽四*不刑 危-於 嶽 工,亂,姓 四 變、山.于於,不 疆。嶽 皋" 而 是.便.請,學, 陵。舜三試縣,以,歸,苗、之,治 變、陵一舜 戎 下 蠻 變 而 在, 試, 鴻 工 之事 言。江 遷北 水, 狄於 堯、 服。 羽 淮 而 放,帝、荆 無,以, 以,于讙請,州、功爲、果、工、欽、

ず、故に先づ天體を して、日月五星を齊へ正し、以て政の大 堯に代 觀測 T す 天 る所の 子 0 玉衡を明 本を 明 から かっ

して、編く其の地方の政事を奏上せしめ、其の言ふ

れば之を諸侯に還し、其の他の を引見し、四時の 域に在る名山大川を順次に は堯の終を受けてより後五年の二月に東方に巡狩し 巡狩し、其の間の四年には 群后四方より 変るべ 狩を終へしことを報ず、かくて 天子は五 り歸れば祖父の廟に至り牡牛の姓を供へて無事 北に巡狩す、而して其の禮は皆東方の り、五月に南に巡狩し、八月に西に巡 を以て摯と定めたり、而るに諸侯 公の孤と 見ゆる摯の制を定む、即ち諸侯は五玉、諸侯の 改めて舜をして親しく之等に瑞を班ち與へしむ、舜 瑞を飲め、吉月日を擇びて、四縁の群牧を見えしめ、 將に位を舜に禪らむと欲するを以て、先づ諸侯の五 川の へ正し、律度量衡を平均にし、五禮を修む、又天子に T. 泰山 より遂に上帝を祭り、 神を祭り、遍く丘陵墳行の群神を祭れり、又奏は 1 附庸の君とは三帛、卿大夫は二生、士は 登り柴を焼きて天 氣節・月の大小・日の 甲乙などを 潔齊して六宗を祭り、遙に 神を祭り、東方諸侯 望祭し、遂に東方の ものは還 の五器のみは 如くす、巡狩 狩し、十一月に 歳に一たび 3 世子と 10 禮 君 1= 3 畢 死 長 境

乃在。璿璣玉衡以齊。七政、遂

り、疏遠、帝系に縁遠き者なり、隱慝、世に隱れて未だり、疏遠、帝系に縁遠き者なり、隱慝、世に隱れて未だを母なり、こと、と、ひずかし、かたまし、傲、驕慢なり、み、妻はめあはすなり、二女は堯の二女にして娥皇と女英となり、衡っ下二女於嬀汭」、の二女にして娥皇と女英となり、衡っ下二女於嬀汭」、の二女にして娥皇と女英となり、衡っ下二女於嬀汭」、の二女にして娥皇と女英となり、例っ下二女於嬀汭」、の二女にして娥皇と女英となり、例っ下二女於嬀汭」、の二女にしむるをいふ、五典、五常の教なり、時、是なり、序、順序ありて整理すること、賓、償なり、資客を調べのほとりに居らしむるなり、女、汝なり、三年、四門に賓してより後三年なり、譲」於徳」、徳に於て堪へ門に賓してより後三年なり、譲」於徳」、徳に於て堪へ門に賓してより後三年なり、譲」於徳」、徳に於て堪へ門に賓してより後三年なり、憲、常、情なり、資客を調けなり、是ないか、大祖、堯の始祖の廟なり、古るやうになりしをいふ、大祖、堯の始祖の廟なり、首人を祀りたるか詳ならず、攝行、代りて統べ行ふこ

刑,有以,禮,狩、巡死,量東至,四 辯。類。 鞭,二言,五皆 符。為。衡,方,於 嶽 作。州,明。歲。如。八 摯。修。 岱 君 諸 長宗、牧、 官决武之一。初,月一如,五 神 刑,川,以巡歸。西五禮, 瑞, 月。吉 川,東月 溪 巡 日 日,山 贖五十告。牛、巡南一度見狩見川、

帝位 其 應。 之を己の居所たる嬀汭に置きて婦道を己れに行はし 果して天 子と為り得るかを二女に於て 5 を盡し、且つ此等の かっ **虞舜は盲者の子にして父は頑固にして繼母は心歪み** り、されど其の人と爲りは如何と、四嶽對へて日 け 者ありて今は民間に在りて高 にても、又は世に隱れ 、舜二女を娶り、義を以て二女の 、其の二女の娥 る家族の れと答 の名を虞舜とい しと、是に於て衆皆堯に ある者なれば たり、堯之を觀で其の所置を善しと為し、乃ち舜を かだましく、弟は驕慢にして兄に從はざるなり、 、堯日 へて日 に上らるべ 一く、然れば貴顯 3 るなりと、堯日く、吾れ先づ之を試み ふ、堯曰く、さなり朕 在 登用すべければ、其の人を擧げ薦む 皇と女英とを舜に妻せて舜の 0) ふ、此の るとも、舜は能く家内を和 如 人々をして き闘 て未だ著れ の族にても、帝系に縁 ば必ず帝位を辱しむ 奏して、弦に 俚 者こそは帝の意に協ふ 徳の聞えある人あり、 も夙く之を聞 して徳 善に進めて姦惡 ざる者に 心を整へ下し 未だ妻無き者 3 觀察せ ても、 き及べ げて 遠き者 3 何 むと 德 むと なり とて 3 カジ ~

代りて 汝こそ 是れ 非ずして之をうくるを悦ばず解退し之れを他の 其の位に の言ふ所に 門にて諸侯群臣を迎へしめしに、四門の やを觀察 に受けぬ、さ り、是に於て堯は遂に舜を聖人なりと思ひ、舜を召し に、暴風雷 堯は尚之を 諸侯は勿論遠方の 賓客に至 る迄皆舜を敬ひ尊べり に於て帝堯は老衰し る人に譲れり、正月の て曰く n て慎 亦規律 たり、次に偏く百官の中に入らしめて試みしに、 、汝が事を謀れること至れり盡せり、而して其 統べ行はしめ、以て天の命ずる所に叶ふや否 實に 帝位に登るべき 徳ある者なれば、宜 3 て五. せ 即くべしと、されど舜は 雨に遭遇すると雖、行き過ぎて迷はざるな b して 試みむとて舜を山林 Œ て文祖とは堯の 常 しく整へり、次に上償と為して四 功績 0) 教を ければ、舜に命じて天子の事を ありしこと已に三年に及べ 朔日に舜は遂に堯の終を文祖 和 げし 太祖を祀れる廟なり め 川澤に入らし 未だ以て其の にい 其 0 賓悉く和ぎ 教 能 德 5 b あ

字解 、鄙俚にして德無きこと、貴戚 庸」命、天命を承けて天子の事を 貴題 3 0) 族な

あれば、先づ試に用ひて其の功顯れざる時に始めて不」可、用而已、退くべしと雖、其の才能に惜むべき所不」可、用而已、退くべしと雖、其の才能に惜むべき所

命,老祖德可以林侯官五 命文不績為川遠 時。典, 舜。祖、懌。三聖、澤。方 序。五 攝者正年召暴賓 賓,典 行。堯,月矣舜,風客 於能 天大上女。日,雷皆四 子祖日登女雨。敬、門。乃 之也舜帝謀舜堯四徧 政,於,受,位事,行,使、門 以是終,舜至不舜,穆百 觀。帝於讓。而。迷、入,穆。官 天 堯 文 于 言 堯 山 諸 百

は八十 四嶽朕 朕 欲す、 が位 有餘の 天子の を踐みて天子の 、汝等の中に能く天命 位 高齢とな 位に在ること を譲 5 事 むとて b を統 ねれ 七十載の長きに達し、今 を承 ば、早~帝位を退 治 け用 かべ ふる者 しと、四嶽皆 あれ

聚、庶民の遍く集まることなり、僻、心の邪なるをい るの 開けて物事に達するをいふ、吁、其の然らざるを歎 ふ、共工、共は洪に通ず、水を治むる官の名なり、旁ざるをいふ、かたくなゝるなり、凶は爭認を好むをい ふ、ひがみなり、漫、天、漫ははびこるなり、天は天下 ふ、共工、共は洪に通ず、水を治むる官 なり、罪惡の天下に廣まれるをいふ、 なり、ア、と訓む、頑凶、頑は德義の經に則ら すっ

而已堯於是 用不成、 毀,使。 族、不 治者、皆日、 山, 襄 陵、下民共 聽嶽用縣九歲功 异, 贯, 裁, 武, 武, 不可用。命

て、浩々として山を包み陵に裹りて、下民は其の憂に つて日ふに、彼の湯々たる洪水は 已に天にはびこり【講義】 甍又洪水の氾濫するを憂ひ嘆きて四嶽に謂

> 嶽背鯀ならば能く治めむと答ふ、堯曰く、鯀は上の命 る者あらむや、者しあらば登用して治めしめむし、四 堪へざるなり、今の時に當 りて能 く此 の洪水を治

いふ、异哉、异は巳の煩文なり、止むなり、退くなり、り、族は類なり、鯀の性衆と和せず善類を傷害するを 言を聽して鯀を用ふることとなしぬ、鯀は此の 大洪後に退くるとも可 ならずやと、是に於 て堯は四嶽の されど其の才能に情むべき所ある者なれば、先づ試 り、負い命、上の命に違ひ背くこと、毀、族、毀は敗 上るなり、陵は大阜なり、鯀、臣の名にして禹の父な なり、懐山、懐は包なり、ツ、ムと訓む、襄、陵、襄は なり、洪水天に漫るとは其の大洪水たるを形容せる をいふ、湯々、廣く盛 なる さまなり、滔、天、滔は漫るて此處にては四方の諸侯を分掌する所の羲和の四子 (字解) 功成らざりき、 水を治めむとして 九巌を經過したれども、遂に其の に之を用ひて、畢に其の用ふべからざるを見て、然る ずと、四嶽皆曰く、さらば之を用ひずして退くべし、 **命に違背して善類を 毀敗せ る者なれば、用ふべから** 嗟、嘆く解なり、ア、と訓む、四嶽、官名にし るなな

帝籍

月と為す、此の如くして十二四日月相會すれば、日 自然に温かなるをいふ、以、閏正…四時、大陰曆にて三り、民室に入りて媛かなるをいふ、氄毛、細毛生じて T 0) に三歳に滿たずして一箇月の餘を生ず、由つて三歳 月の進み早きを以て十一日弱の差を生ずるなり、故 周天を一匝する なり、然るに此の 十二箇月の中には して周天を一匝して叉日に逐ひ附くなり、とを一 三度と十九分の七を進む、故に月は二十九日半强 箇年に一度の閏月を設けて四時の氣節の調和を整ふ 冬至のことなり、星昴、昴は白虎の中星なり、燠、煖な 在は察するなり、伏物、蓄積藏伏したる物なり、口短、 るとをいふ、即ち周天 の度は三百六十 五度と四分 ・に三度の閏を設けざれば、春の氣節に夏の月至る 四時を正すなり、筋、整ふなり、 現象となりて四時皆成らざるなり、故に閏月を以 にして、日は一日に一度づつを行き、月は一日に十 の閏を設けざれば、正月の氣節に二月となり、九 は 箇

丹朱開明、堯曰、吁、頑凶不,用、堯堯曰、誰可,順,此事,放齊曰、嗣子

解、似.恭.漫.天、不可、不可、用、善、善、其用、不可、可用、善日、共工善言其用、又日、誰可者、灌兜日、共工旁聚

2 已に天下に漫りぬ、故に亦不可なり とて遂に 子の如く集りて、大いに其の功を布きたりければ、之 堯又群臣に誰か此の天下の政事に順ふべきぞと諮 けて物事に明達なれば、之に位を譲り給ふこそよけ に害を成さむ、表面は恭敬に似たれども、其の罪惡は ども、心中邪悪なるを以て、之を用ふれば定めて天下 を用ひらるべしと答ふ、堯曰 誣を好む者なれば、兎ても之を用ひられざるなりと、 の事に任ふべきぞ、あらば 登用して 位を嗣がしめむ けたり、 ふ、灌兜奏して共工こそよけれ、彼の政を行ふや庶民 【講義】 と答ふ、堯之を然らずとして曰く、朱は顔にして爭 いふ、放齊といへる臣奏して嗣子の丹朱は才 堯は天子の位を 譲らむとて、誰か 此の天子 ~、共工は善~言語すれ 之を退

【字解】 此事、天子の為すべき政事なり、開明、才智

の實は しかば、百功皆興りて天下は益~太平となりぬ、 たるのみならず、信に百官を整へて、各其の職 の閏月を設けて四 まるなり、又一歳は大凡三百六十六日と言ふと雖、其 に籠居して暖まるなり、鳥獸は細毛生じて自然に なる冬至と爲し、以て仲冬を正 は、白虎の て義和の四人に命じて、四時を正し民に時を授け 一歳に十一日弱 中星 0 易が昏に真南に見るゝを以て正 時の 調和を計 を餘すなり、故に三歳に一度 せり、其の民は り正せり、此の如く に任ぜ 皆宝 暖 確

す、故に東作といふ、日中、春分のことなり、春分には 順序を立てゝ亂れざらしむるをいふ、東作、耕作のこ ては導き送るの意なり、便程、別ち序づるなり、即ち 導くなり、東方にては導き迎ふるの意にして、西方に 夷、東表の地なり、陽谷、日の こと、義仲、東方を主る官なり、周禮の春官の如し、郁 り名づく、授…民時、民に五穀を植うる時節を教ふるに天といふに同じ、其の 元氣昊然とし て廣大なるよ を掌るの官なり、昊天、昊は廣大 義和、義氏と和氏となり、共に世々天文地理 耕作の始め は春(五行 にて東に配す)に於て 出づる なるなり、昊天 所の稱なり は單

更り生ふるをいふ、おひとこのふ、和叔、北方を掌る なり、星虚、虚は玄武の中星なり、夷易、平易なるを の如し、西成、秋月に物の 易るをいふ、和仲、西方を掌るの官なり、周禮の ふ、希革、夏期には鳥獣の羽毛の希少となりて改まり が田に在るの肚丁に因 にして心宿のことなり、一に大火ともいふ、因、老弱 をいふ、日永、夏至のことなり、星火、火は蒼龍の なり、カサネテと訓む、義叔、南方を掌るの官なり は乳化すること、微は交接することなり、中、重ぬる となり、殷、正すなり、析、分れ居るの意なり、字微、字 中の柳・星・張の三宿が、昏に ればなり、星鳥、星は南方の し、秋分に夜中と記したるは の官なり、周禮の冬官の如し、便在、便は辨つなり、 し、南譌、譌は爲の誤字なり、南爲は南方の耕作 南交の下に曰:明都:の三 字ある べしと、さもあ 禮の夏官の如し、南交、交阯のことなり、鄭玄 晝夜の時平分なり、故にいふ、而して春分に日中と記 ふ、暑氣退きて人氣の平易となりしをいふ、毯、毛 り就きて農 成るをいふ、夜中、秋分のと 朱鳥の七宿にして、其の 、春は陽にして秋は陰な 眞南に見る >といふこ 事を助くるを 中星 秋 、周

の中の鶉火(柳・星・張の三宿)が昏に真南に見るゝをとからしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、而して春の氣節を察するには、朱鳥の七宿からしむ、雨に見るゝを

氣平かにして 過し易し、鳥獸は其 外に行きて農事に從はす、鳥獸は兒を乳化し、又交尾此の氣節の民は老弱は内に在り、肚丁は之に析れて 以 籠の備を辨ち序でしむ、而して冬の氣節を察するに 幽都といふ、和叔幽都に至り、財物を蓄積藏伏して冬 り、次に重ねて和叔に命じて北方に居らしむ、其處を 氣節を正せり、此氣節の民は暑熱漸く退きぬれば、人 南に見るうを以て正確なる秋分と為し、以て仲秋 て秋の氣節を察するには、玄武の中星の虚が昏に真 るを導き送りて萬物の成就せるを辨ち序でり、而し 其の處を昧谷といふ、和仲昧谷に至り、敬みて日の入 はるなり、次に重ねて和仲に命じて西土に居らし 農事を助くるなり、鳥獸は 其の毛羽を希薄に 改め易 節の民は老弱共に田に出でて壯丁に因り就きて其の 確なる夏至と為し、以て仲夏の氣節を正せり、此の氣 察するには、火(心星)が昏に眞南に見るゝを以 序でて、敬みて民に農を致さしむ、而して夏の氣節を らしむ、義叔交趾に至り、南方の耕作營爲の事を辨ち するなり、次に重ねて義叔に命じて南方の交趾に居 て正確なる春分と爲し、以て仲春の氣節を正せ 羽毛更り生ふるな -

にするを以て萬國從つて和合したり、
にするを以て萬國從つて和合したり、
にするを以て萬國從の大いなることは雲の天を覆ふが如く、
なるは天の萬物を涵養するが如く、方でとも騙らず、貴けれども慢らず、黃冠と士服とを富むとも騙らず、貴けれども慢らず、黄冠と士服とを富むとも騙らず、貴けれども慢らず、黄冠と士服とを富むとも騙らず、貴けれども慢らず、黄冠と士服とを信し、九族既に親睦になれば、次に百官の才能を別ちにして其の職に就かしむ、百官各其の職を昭かにしてするを以て萬國從つて和合したり、

に向ふが如きをいふ、如、雲、雲の 天を覆ふが如く 高なり、一代の功を致しゝを以て名と爲す、如、天、天のなり、一代の功を致しゝを以て名と爲す、如、天、天の【字解】 放勳、放は 致すなり、勳は一に勛に作る、功

下は、 下は、 下でであるといふ、不、 一部で、 では別のでは、 の名なり、 は、 の名なり、 のでは、 ので

顔色は和ぎて郁々たり、其の徳は高くして髪々たり、を迎へ送り、鬼神を明かに識りて之に敬み事ふ、其の は陳鋒氏の女を娶りて放動を生み、又城警氏の女を を得しむるやうに諭し、日月の運行を推し數へて之 物を取りてほど~~ に用ひ、萬民を 撫で教へて利益 惠ありて信義あり、身を修めて天下服從し、土地の財 に順ひ民の急を知りて之を救ひ、仁ありて權威あり、 ことを知り、心明かにして微なることを察し、天の道 りとぞ、位に即きてより普く徳を施して物を利し、決 さて高辛は生れて神秀靈異にして自ら其の名を言 位に即く、此の高辛は顓頊よりいへば同族の子なり ず、其の間は顓頊之に代れり、而して高辛に至り又帝 極といひ、蟜極の父を玄囂といひ、玄囂の父を黄帝と いふ、故に玄囂と蟜極との二人は帝位に即くとを得 T 行へるを以て其の德澤は天下に編く、日月の照す て其の身を利することを爲さず、耳敏くして遠き 廉なるを貴べり、帝嚳は既に此の如き中正を執 動作は天時に順ひ、其の衣服は 至る所として悉く從服せざると莫し、帝嚳 辛は黄帝 の曾孫なり、 士服を着て公に 高辛の父を嬌

是を帝堯と為す、崩じぬ、よりて其の弟の放勛立つ、娶りて摯を生む、帝嚳崩じぬ、而して摯代りて立ちし

「字解」 曾孫、孫の子なり、ひまご、ひこ、族子、同族の子なり、此にては即 ち高辛は高陽よりいへば従兄の子なり、此にては即 ち高辛は高陽よりいへば従兄の子なり、此にては即 ち高辛は高陽よりいへば従兄の子なり、強にいふ、迎送、曆を作りて豫め弦望晦朔を推し算ふるをいふ、迎送、曆を作りて豫め弦望晦朔を推し算ふるをいふ、其色、顏色なり、相々、和げるさを知るを迎ふといふ、其色、顏色なり、相々、和げるさまなり、巖々、高きさまなり、八世、大之義、天の道なり、地之財、土地より産出意するを送るといふ、其色、顏色なり、相々、和げるさまなり、最々、高きさまなり、故に之を用ふ、紙、古文の既の字なり、執、中、中正を行ふことなり、

ふ、依、 以 3 心に依 るには して來り服從す 大いる 八小神祇、大は、動静、 動静、 時五 では行 りて尊 神祇、大は五嶽四 、動静、動は鳥獸 心 行 を正 當 の氣を理 れば 平 直 鬼 則ち義を制し得となり、治、氣以にして謹み敬ふべきなり、此の るをい かなり、屬 の.義 制は 鳥獣の類 めて萬民を教 を制 古文 秋 時 瀆 は 1= を し得 は 0 刑 順 指し、小は ななり 制な 從 8 ひて 13 £ 行 、静は の意、 なり、 り、鬼 へ導くをい ふが 事 を行 卽 四遠皆平 草木の 如きを 神に 神 事 類

支 高 於,不囂,辛,帝 顓得父,父,罍, 項。在"日,日,高 爲,位黄蟜。辛 族至,帝、極、者 黄 高自蟜 高辛玄極。帝 卽,囂父,之 與日,曾 生,帝 而位、蟜玄孫 高極囂也

弟

放

而

為帝訾帝日服色而之,身,義身、靈, 摯氏, 嚳月, 也郁; 迎撫而知, 聰自, 堯、立。女、娶、所士、郁、送、教、天民以言, 不生陳照。帝其之,萬下之知,其 擊鋒風譽德明民,服急,遠,名, 帝氏,雨、溉量炭素鬼而取。仁。明。普。 嚳女所執,嶷神,利地而以施 崩。生、至、中,其,而 誨、之 威、察。利。 放 莫。而 動 敬 之,財,惠 微,物, 摯動,不偏。也事。曆,而而順。不 立。代。娶,從天時之日節信天於 是,立, 嫩。服、下、其,其,月,用。修之其

字解】 西陵、國の名なり、降、天子の子下りて諸侯

と爲るをいふ、

帝顓頊高陽 黄帝之孫、

動靜 交誠。依,知,意 趾 以 西、祭 神-養,子 之 物、大小 濟和以材,也于北洲以靜 流至,義,任。淵,者、沙、,于治,地,以,黄東、幽氣,載;有,帝 之神、 日至。陵以時,謀之月,于南、教以疏孫所蟠至。化、象。通,而

天而

木于潔 莫不.砥* 顓 爲一帝 頊 崩流而 屬、帝 一支囂之孫高辛立、馬帝顓頊生子,日,窮

帝顓 項高陽 は黄帝の孫にして昌意の子な

> 而して其の次は窮蟬立たずして玄囂の孫の高辛立てなり、帝顓頊子を生めり、窮蟬と名づく、顓頊崩じぬ、 小の たるを以て鳥獸草木は勿論、五嶽四濱丘陵墳衍流沙を渡り、東の方は蟠木に至りて、遍く德澤を 北の方は幽陵に至り、南の方は交趾に至り、西の方は 地 至るまで、四海悉く平定して皆來り順はざるは無き め心を誠にして祭祀を行ふ、又天下を安撫せむとて、 制し、四時五行の氣を治めて萬民を教へ導き、身を潔 じて百般の事を知れり、叉材 7 の宜しき所に從ひて適當の種子を播ゑ、天時 性静に奥ゆかしくして深き謀あり、物事 神祇より、凡て日月の照す所の遠き四邊の地 事を行ひ、鬼神に事ふるの心を以て尊卑の義を 物を成長せしむる 順 通

【字解】 顓頊高陽、顓頊は名にして高陽は 天下を有り、是を帝嚳と為す、 地、土地の宜しきに應じて種子をまくをいふ、載、時 以、而と通ず、養材、材物を成長せしむるとなり、伝名と為しゝなり、靜淵、靜にして奥ゆかしきをいふ、 り、項は正すなり、即ちよく天人の道を專正せしより つ號なり、蓋し其の起りし地名なり、さて額は專な

正妃,生,二子,其後皆有,天下,其 陵之女是為,嫘祖,嫘祖為,黄帝 大黃帝居,軒轅之丘,而娶,於西 黄帝二十五子,其得,姓者十四

其の孫にして 昌意の子なる高陽立つ、是を帝顓頊とはの孫にして 昌意の子なる高陽立つ、是を帝顓頊とは、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳ありる、之を昌僕といふ、昌僕、高陽を生む、高陽聖徳あり、其の孫にして 昌意の子なる高陽立つ、是を帝顓頊とは講義】 黄帝に二十五人の 子あり、其の中にて姓を

景雲の のものは衣食住 3 り、叉天子の實と爲すべき鼎と神策とを獲たり、 を雲師と為す、又左右の大監を置きて萬國を監 る所に於て とを證せしめたり、而して涿鹿 こと無きなり に在るなり、而して人生安危の陽の數を明かにし、死生安危の めし 天地 策を推し數へて豫め氣節朔望を知 に會して各其持てる符を合さしめて命に差は 方は葷粥を逐ひて中國に入らしめず、叉諸侯 登り又岱山に及び、西の方は空桐山 さて其 と雖、就中黄帝を推して尤も盛 登り、南の より 山川の かば、萬國咸和ぎ平げり、而して萬國和 瑞ありければ、官の名は皆雲を附け、其の長官 他所 ・力牧・常先・大鴻等を任用して民を治 師 施政の大綱は天地四 鬼神を祭りて封禪するとは古來 兵を營所の守 に 方は長江に至りて熊山 即ち東の より外なきなり、故に四時 遷り徙 5 方は渤海 衞 來 と為したり、黄帝 して常の居處無く 山の下に都を定 繋り 道を説き明か 時の大法に順 0 漫まで至り 大なりと為 るとを發明 湘山 に至り、又雞 7 大 に登 いな 平の 宜 0 9 にす すな 帝 ざる を釜 る所 此 治 には 九 12 皇 後 せ Ш 心 時

火を 轅を稱して黄帝と名づけたり 當りて黄龍地螾 別害無く、且つ山よりは金玉の 德澤に化せられ、又日月星辰 の恩澤は遍く廣く行き渡りたり、かゝる高徳の 徳化するのみ 1 めしかば、天下太平國土安全となりぬ、此の時代 力耳目を惜まず勢り勤め、河川に隄を築き、山 禁じ、材物をほどしに用ひ 順 0 百 ならず、鳥獣蟲蛾 穀草木を布 の如き土徳の瑞兆見れしを以て、軒 き種ゑし 1-如き珍寶を出す程 災異無く て民に其の むい まで かっ 3 其 T 利を得 土石 萬 0) 其

得 多、稱美の語なり、獲"寶鼎」、は秦山に封じ、亭々山に禪 營衞、軍營を守る者なり となり、 粥、匈奴の古名なり、符、諸侯 ふ、空桐雞頭、皆山の名なり、熊・桐、二山の名なり 【字解】。披、開くなり、寧居、安居に同じ、岱宗、岱は 泰山なり、宗は長なり、泰山は五嶽の たりといへり、此處には神 する所の稱なり、此にては 涿鹿之阿、涿鹿は山の名なり、阿は山曲なり、 封禪 、封禪書には せしなり、與、許すなり 0 策 わり 一時 の二字 禪書に據るに黄帝 ふなり、邑、 的の都となし 長なり、故にい を略した 寶鼎神 るも

民の安危なり、熊羆貔貅貙虎、熊はくまなり、羆はとなり、鹿」四方、度ははかり見るなり、四方は四方の育なり、張」五種」、藝は植うるなり、五種は黍・稷・菽・麥・といふ、炎帝、炎帝の子孫なり、侵陵、おかし平ぐることいふ、炎帝、炎帝の子孫なり、侵陵、おかし平ぐることいふ、炎帝、炎帝の子孫なり、侵陵、おかし平ぐること 代 、實從、賓は從ふなり、德に懷きて從ふを 時 朝貢獻せざる諸侯をい を指す、不享、享は

物,玉,蛾、難、紀、牧 焉國雲 師涿 旁 時₋幽 常 獲,和*師、兵,鹿 勞 動。羅。播》明先 寶而置*爲。之 百之大 德 心日 鼎,鬼 左 營 占。鴻,迎、神 之 衞,遷 力 右 月 穀 瑞 死以日,山"大 耳星艸 官 故 目,辰 木,生治,推,川監,名。往 之、民,策對監告 淳 水 化。說"順。學、禪 于 以,無。 用、波 存天風與萬雲常 鳥 火 石 獸 亡 后為國,命。處 地 材金 蟲之之力多萬爲以

賊徒平 ぎぬ 天下 道路を通じなどして未だ一日も安居する n ば 其 順 軍を退け去りて民を安んず、又山はざる者あれば、黄帝親ら征伐し、

畏れ 轅の將に與らむとする時は神農氏八代の後裔極問 代にして、其の治世は漸く衰運に向へり、由つて諸侯 長じては物事に手あつくして さとく、成人 となりて 已にもの言ひ、幼年の頃より才智勝れてすばしこく、 諸侯あり 貢獻せざる 所の諸侯を征 伐したり、諸侯は其の勢に ふることを演習して戦争の準備を為し、以て朝廷 に於て軒轅は民の疾苦を救はむとて、先づ干戈を用 り、されど神農氏は之を征服すること能はざりき、是 は天子の命を奉ぜず、互に相侵し伐ちて百姓を苦め は耳さと~事理に明白にして旣に聖域に 達せり を備へ、まだ幼弱にして言ふこと能はざる時に於て ひ、名は軒轅といふ、生れながらにして神の如き威靈 7 皆來り て服從す、而るに此の 時蚩尤といへる T 最も暴虐を逞しくして歸服せざれども、 少典國君の子なり、姓は公孫 とい

帝と為す、

となくっこと能はざるなり、此の時に當りて炎帝の之を伐つこと能はざるなり、此の時に當りて炎帝の主な修め兵を整へ、五行の氣を治め四時の節を和げてを修め兵を整へ、五行の氣を治め四時の節を和げてを修め兵を整へ、五行の氣を治め四時の節を和げてを終め兵を整へ、五行の氣を治め四時の節を和げてるを察し、乃ち熊・熊・貔・貅・貙・虎などの猛獸に戦をるを察し、乃ち熊・熊・貔・貅・貙・虎などの猛獸に戦をるを察し、乃ち熊・熊・貔・貅・貙・虎などの猛獸に戦をるを察し、乃ち熊・熊・貔・貅・貙・虎などの猛獸に戦をあを察し、乃ち熊・熊・貔・木と阪泉の野に戰ひ、途師を諸侯より徴し集めて蚩尤と涿鹿の野に戰ひ、途師を諸侯より徴し集めて蚩尤と涿鹿の野に戰ひ、途間を済いて、此の時に當りて炎帝の之を伐つこと能はざるなり、此の時に當りて炎帝の之を伐つこと能はざるなり、此の時に當りて炎帝の之を伐つこと能はざるなり、此の時に當りて炎帝の之を伐つこと能はざるなり、此の時に當りて炎帝の

世の衰へしことをいふ、即ち炎帝の時に非ずして其が、蓋し普通人のまだ言ふこと能はざる時を指す、非ず、蓋し普通人のまだ言ふこと能はざる時を指す、心の如く威靈あること、弱、幼弱の弱にして弱冠の弱にして成靈の成霊

解の名、管子、春秋時代齊の 桓公の 臣管仲のと、此に「ない鬼にては其の年を指す、韓詩、前漢灌嬰の詩經のと、此處にては其の年を指す、韓詩、前漢灌嬰の詩經のと、此處にては其の年を指す、韓詩、前漢灌嬰の詩經のと、此處にては其の年を指す、韓詩、前漢灌嬰の詩經のと、此處にては其の足らざる所を補紀せし所以なり、と、此處にては其の足らざる所を補紀せし所以なり、と、此處にては其の足らざる所を補紀せし所以なり、と、此處にては其の足らざる所を補紀せし所以なり、 告、王位に昇りて天下に法令を發し告ぐ、春秋緯、讖では其著書をさす、夷吾、管仲の名、仲は字なり、昇而解の名、管子、春秋時代齊の 桓公の 臣管仲のと、此に 恰も 緯學者の手になる書物の名、漢代の作なるべ は 通紀といひ十 黄帝の時に當 序命といひ七 る、黄帝より司馬 は は循飛紀といひ八は回提 四 疏佗といふ、蓋 は 合雒とい ひ五は 遷の史記已 し末紀の疏佐 連 通紀

五 帝 帝 者、 本 少 紀 典之子、姓公孫、名 第

於教治、族暴,享,於,伐、轅而日, 贵 熊五成莫諸是暴 阪 之 氣,歸、能,俟軒虐。時 師,作。泉 羆 齊辕。 貔° 藝2 軒 神 伐。咸,轅 百 不野。貅。五轅。炎來,乃姓,農用。三貙種,軒帝賓習而氏 帝賓習。而。氏,敦神 貙*種,軒 敏 靈 成。弱 而 聰 其帝四振矣,最征能相 明、 幼, 鹿。帝志,戰,方,兵,諸為、不征。侵

古 一. 歲 帝 日,紀播 于 後 無 仡 間,紀、囘六-提日,分、獲 提日,分獲王紀九為聯耶 年 亡矣、 日, 十 四二 序 頭 凡,故_ 紀、 錄。佐、九。命 紀、 春 日, 秋可, 合 紀、 凡,百 禪 維ラ En 緯-通 紀、 七 稱、論、何、之 日, 五 自,豈.昇,前 五= 萬 七 循 龍 六 紀、 萬 開 飛 日, 日,紀 闢 也九 連 百 疏八通日,世 至"無"但 千

が王 に無 管子 至 9 を あ 全 び 皇氏已後との年代は久遠にして其の 古より太山に封ぜし者七十二家ありしと云ふと雖、 1-ちし者の號なり、されど圖書に是等の事蹟を記 氏·渾沌氏·昊英氏·有巢氏·朱襄氏·葛天氏·陰 く帝王無くして經過したるものとも思はれざる 由 らざれば、 れて十紀と為り、世の代りしと七萬六百世 る迄は、凡て三百二十七萬六千歲を經過し、 觀て盡く 禪せし者一 懐氏等あり、蓋し是等は皆三皇より 已來天下 を有 其の十紀とは 故に春秋緯には、 が識れ れば 位 懐氏ありといへり、然れば則ち無懐氏の前 無き也、而して韓詩には 備に 昇りて天下に令を告げたるものか、古 八皇氏より已 央氏·卷須氏·栗陸氏·驪連氏·赫胥氏·尊盧 る所の者は唯僅に十有二家のみにして首 識ると能はざりきといへり、管子に 姓王年代及び都は何處なりしかは知る 萬有餘家ありしと云ふと雖、仲尼 論ずべからざるなり、 一は九頭紀といひ二は五 開闢より春秋魯の哀公十四年 後に五 古より太山に封じ 龍氏·燧人氏·大庭 間の王者は されど其 龍 も亦 は之 と天 梁甫 誰 氏 間

n 五 何 T 0) を以て火德の王たり、兄弟十一人ありて熊耳龍門等 たりといふ、地皇氏は十一人なり、天皇氏に繼げる 元と爲す、兄弟 十二人、各一萬八千歳づつ 世を治 萬五千六百年を經たりといふ、 T T て太平に治まれり、此の王は開闢第 Ò 各城邑を立つるに至る、凡て一百五十世。合して四 九州に長と為れり、此の時に至りて人文漸く開 山に興れり、是亦各一萬八千歳づつにして代を讓 一行の首なる木徳の王なり、歳は甲寅の歳を以て紀 谷口を出でて天下に王たりしなり、兄弟九人分 り、人皇氏は九人なり、雲に乗り又六羽の鳥に駕 の作為する所無けれども、其の俗自ら王化に霑ひ 、其の 頃は開闢草創のとなれば、王者は無慾にし るありて、其 王とな 一の王者 1 なれ け め

にては上元太初の歳にして甲寅の歳なり、雲車、雲と提格といふ、故に攝提とは寅歳のとなり、而して此處等を指す、澹泊、無慾にしてさつばりしたると、頭、人等を指す、澹泊、無慾にしてさつばりしたると、頭、人といふに同じ、攝提、大歳星が寅の方角に在る歳を攝といふ、故に攝提とは寅歳のとなり、圖緯、圖は 河圖【字解】 開闢、天地の開け初めなり、圖緯、圖は 河圖【字解】 開闢、天地の開け初めなり、圖緯、圖は 河圖

り、 意なるべし、九州、冀·兗·靑·徐·揚·荆·豫·梁·雍是な 一、羽、六羽の鳥にて日中にある鳥ならん、故に日輪の 大羽、六羽の鳥にて日中にある鳥ならん、故に日輪の いふに同じ、之れに乗るより車の字を添へたるなり、

甫_者、萬 不紀、英 皇, Min 栗陸 自人 葛 渾 大 韓 庭 已 天 沌 氏·昊" 氏·栢 皇.已 來 氏 氏 以*知。 陰 子章 有, 有 為, 英节 餘 連 有, 家、 自,古 日,古 王 氏 氏 下,氏 氏 有 者 赤赤" 中 無 五 年 封。尼封。代 太親,太所 山。之,山。都。 懷 龍 之 巢 胥 號, 氏斯 氏朱 氏·卷 氏燧 氏·尊 但 不,禪、之心 載 盖。 襄 須 人 廬 能、梁處,籍 氏 氏 氏 氏 ---

ば、其の後胤繁昌して此の如く後世に至るまで、それ霸權を振へり、蓋し聖 人神農氏の德澤廣 大なりしか賢相と為り、齊と許とは相列りて諸侯と為り、中國にれり、周室の時に當りて甫 侯と申伯とは 竝に周王のれ

一説 三皇照開 之初、君臣之始、 一説 三皇明開 之初、君臣之始、 一説 三皇明 開之初、君臣之始、 一説 三皇明 開之初、君臣之始、

> 世長東亦姓萬合九駕。各十八 歲、泊 起。無 州、各立城员 -攝 四萬五千六百 千 羽-八 歲、 人 地 興 於 皇 十二人、立

【講義】 一説に三皇とは前の伏羲女媧神農に非ずして天皇氏・地皇氏・人皇氏を謂って三皇と爲すといて天皇氏・地皇氏・人皇氏を謂って三皇と爲すといて天皇氏・地皇氏・人皇氏を謂って三皇と爲すといるぎるべし、故に今梦に其の説を併記することとならざるべし、故に今梦に其の説を併記することとならざるべし、故に今梦に其の説を併記することとならざるべし、故に今梦に其の説を併記することとならざるべし、故に今梦に其の説を併記することとならざるべし、故に三皇とは前の伏羲女媧神農に非ずししぬ、さて其の説によれば、天地開闢の初に當りて天とが、

德澤廣大故其祚 室。 為, 之 一諸侯 後、並 甫侯 霸。 申 伯 於 爲王賢 胤繁昌久長 中 國、蓋 聖 相 人,齊 压-

炎帝を生みたり、炎帝は首に肉角ありて牛首の如く ひ、有嬌氏の女なり、少典の妃と爲り神 知らざりしかば、帝自ら木を斲りて耜を爲り、木を ければ姓を姜といふ、此の王は火徳を以て天下に に耕作を教 て来を為りて、鋤 てに附けたり、此の時代の民は未だ耕作する術をでれば炎帝と號し、火を貴ぶ所より火を以て官 を めて田に報 異なる相貌ありしといふ、姜水の上に生長 得て穀食を始めし 炎帝神農氏 は受姓なり、母の名は女登とい へたり、故に神農氏といふ、是に由りて ゆるの祭を行ふことを教へたり、 鍬を用ふるとを發明し、始めて かば、歳 末に種々の農産物 龍 威應

當時 を嘗 申・呂等の國あり、是皆姜姓の子孫の治め の女をめとれり、其の名を聽該といふ、之を妃と為 ち此の神農氏のことを云へるなり、神農氏は奔水氏 徙りたり、王位に即きて百二十年にして崩御し、長沙 是等は何れも諸侯と為り、或は分れ て四岳の官とな に代れり、其後に州・甫・甘・許・戲・露・齊・紀・怡・向 む、凡て八代五百三十年にして黄 帝軒轅氏與りて之 帝の哀を生む、哀は帝の克を生む、克は帝の楡問 もいふ、禮記に厲山氏の天下を有てると云へるは、 傳には烈山氏の子を柱を 日ふと稱せり、亦 厲 に葬れり、さて神農氏は本烈山に起りしを以て左氏 したり、初は陳に都を定めしが、後に曲阜といふ地 なりき、又遂に庖職氏の八卦を重ねて六十四卦と の事を發明したるが、皆萬民の喜びて便利とする所 れば各其の家に 人に日中に市を爲し、貨物の有無を交易し、夕方に 薬といふもの有るに至れり、又五弦の瑟を作り、又人 自ら赤色の鞭 め 未 だ疾 試みて各種の 病 を以て山 を療治する方法を知ら 退くことを教へたり、此の如く種 楽を製せしかば、始めて世に醫 野の草木を鞭ち、始めて万草 ざり し地にして かば、 山氏と 12 卽

では木土水火金の順にして上なるもの下なるものに方は木土水火金の順にして上なるもの下なるものに打ち勝ちて 王となるなり、即ち、秦の水は周の火に克ち、漢の土 は秦の 水に 克ちしが 如きをいふ、金木輪ち、漢の土 は秦の 水に 克ちしが 如きをいふ、金木輪ち、漢の土 は秦の 水に 克ちしが 如きをいふ、金木輪りて復本の 所に來る をいふ、頻、重ねての意なり、智の工作、智謀 刑戮なり、五色、青・赤・黄・白・黑 なり、舊物、まだ天柱折け地維缺けざる以前の狀態をいふ、まだ天柱折け地維缺けざる以前の狀態をいふ、まだ天柱折け地維缺けざる以前の狀態をいふ、まだ天柱折け地維缺けざる以前の狀態をいふ、

名。以生。 炎 嬌 用 官為炎 氏 帝 以, 断, 姓, 帝, 之神 女,農 教,木,火人 姜节 教,木,日,長,妃,母, 耕、爲、炎於感。日, 神女 故、耒、帝、姜 號、耒,以,水。龍。登、

火,因,而

有

十克,女,有,柱,烈百十而 五 草神 年。克 日,天* 亦 山。二 四 退,"弦 木農 生、聽 下, 日, 故。十 卦。各之 而 帝誠是厲左年,初,得、瑟,嘗、於, 戲 軒 榆爲也山 轅 氏崩。都其教百 罔,妃,神 氏 氏、稱、葬、陳、所、人、草、作 興。凡,生。農 禮烈長 後- 遂- 日 怡·向·申 焉、八帝納。日山沙居、重中有祭,其、代哀,奔厲、氏神曲八為醫以, 哀水山之農。阜、卦,市,藥 後 氏子,本立,爲、交叉 生。氏 有,百 州三帝之之日,起一六易,作、鞭

の功績 造ることをなさず、多くは前代の に王た 將に天下を覆さんとして先づ大洪水を起して山上の 7 大にして 三皇に 充當するを以てなり、故に庖犧氏 五行の金木等相運り周りて復初めの木に還りしなら り、蓋し考ふるに庖犠氏の後日に五六代を經 説に女媧 氏も亦木德を 以て天下に 王となれ は載せざるなり、父此の王は五行の運行を承けずし 易の繋解に古の列撃の功を舉げたる中に女媧氏 の創作に 力を以て諸侯 て王たりしを以て其の德を五行に配せざるなり 人首なり、神聖の德 諸侯 木徳に継ぐに復 せし して特に此 の高大なりといふは天地の破壊せるを舊體 係る めしこと 女媧氏 して女希氏 の旗頭となりたれども未だ王た 氏といへる者あり、 B も亦 され 0 なり、それは女媧氏の 木徳を以て王た は唯笙簧を作り かり 女媧氏を擧げたるは其 庖 どかいる勢權 人養氏 とい か と同 ふ、此の王は制 ば 庖職氏に代 じく風姓に 政 智謀刑戮に任 りし ある諸侯なれば、 を踏襲したり、其 のみなり、故 なり、さて 末年に當り 0 度 りて天 して蛇 功績 過 りとあ を革 ること 0) 下 身 其

如く圓く成りて舊物を改めず、天下太平となりたり を濟ひたり、是に於て地は平かとなり、天は全く蓋の 柱の折けた なりね、是の時に當り女媧氏 維持せる綱も亦缺けて、天地 は天を支ふる柱なるに、之が折けたれば從 に觸れしかば、不周山は忽に崩壊したり、此の 木にまでも達せし 女媧氏没し を立て、蘆灰を聚めて大洪水を止 工氏は戰利あ る視融は之を鎮定せんとて共工氏を討伐したり、 て神農氏作れり、 るを補ひ、鼇の足を斷ちて地 らず、大い めたり、是に於て火の に怒りて此度は は は傾き全 五色の め、以て 石 く晦冥暗黒と 冀州 を錬 頭を不周 の四方の綱 神とい 不周 5 て地 の災 T Ш 3

6 b, り、瓢を匏と爲し、其の中に大は十九本、【字解】 革造、改め作ること、笙簧、笙は < P に孔ありて吹けば簧 の管を環に立て並ぶ、管毎 ウ、シ 毎に鼓動して音を發す、シタ 即ち相生と相克となり、相生は木火土金水 帝世相承くるを五行の運行に配せり、之に二説 ヤウノフ エ、簧は紙 で鼓 中に大は十九本、小は 動して音を に簧ありて律を異にす、 の如き薄 、五運、五 き金葉なり、 發するなり、 樂器の名な の連 の順 行な

神

德、

女

媧。

氏

機[∗]姓、 立、蛇

號身日,人

女首、

希有。

於,極,五山。祝以,末高。環。蓋。不氏 沒、是聚色,崩、融强,年而周,宓 承,無。 戰。霸。也 克。而不不不 諸 三 復 犧 五 地蘆石,天 平*灰,以柱 之 天以補。折線勝。不侯皇始後一惟成。此天地而王,有故特已日,作 作"成"止天,地 而 不洛斷維怒。以共頻學。經女 改,水, 麓, 缺, 乃水, 工。木量女數 舊以,足,女頭,乘、氏王,媧,世,亦 觸、木、任、也以,金木 物,濟,以媧 女翼立,乃不乃智當,其木德。不 媧州,四鍊,周與刑其功輪王,載。

史記第 卷

又文書契約の制を作りて結繩の政に代へ以て民に便 天地人の三 の皮を互 0 なの 與へたり、又始 徳に感通 象を人の あやもやうと 才を観察して始めて八卦を畫して能く神 に取換ふるを以て結婚の禮と為したり、 身に 、能く萬物の情に適合して治めたり、 取 8) り、遠くは萬物に取 て嫁入り嫁取りの儀を定め、 地 0) 方位高 低等を觀察し、近 り、此の如く

明

< 0)

題史等あり、皆風姓有一年にして崩ず、 天神を祀り以て範を後世 とをいへるなり、都を陳に奠む、東の **冷篇には孟春其** 年にして崩ず、其の子 の神は太倬 の後胤 の帝王に垂る、王と爲り十 なり 孫春秋の時に任宿・須句・ といへ b 方太山 亦此 の皇 に登りて

太韓、韓は四神の如しと 【字解】 を約束するをいふ、結繩之政、太古未だ文字あらざり なり、契は約束なり、木を刻み其側 萬物の情意に適合して治むるをいふ、書契、書は文字 震・巽・坎・艮・坤是なり、類二萬物之情、類は同じなり、 勢をいふ、即ち山川丘陵池澤等なり、八卦、乾・兌・離・ あやなり、地之宜、宜は義なり、地の 川高卑の類なり、文、外表に り、象、天象なり、日月星辰 り、故にいふ、繼、天、天位を機 たるを以て其の位は東方に在りて日の大明に象れ 弘なり、畢竟治世 時の政をいふ、即ち大事には大縄を結び 如しといふことなり、即ち至極至大の尊就なり、 皇、天なり、君なり、大なり、美なり、光なり、 明なり、 0 一に昊に作る、庖犠氏 君の徳 澤の の屬なり、法、地形なり、山 見れたる ぐなり、大人、神人な 弘大無邊なる猶 に文字を書して事 義とは 形象模様なり、 は木徳の王 土地の形 小事には

て龍師

とい

へり、又三十五

弦の瑟を作れ

り、さて庖犧

として官名に悉く龍の

字を附けたり、されば又號し

き目出

度きもの

72

る吉瑞ありしを以て、龍を此上無

り、此

の代に當り龍馬

の圖を負ひ

て河水より出

7

今の次第を記せり、故に易の紫鮮傳には帝·震に出

||行の第一なる木德の王にて春の時に行ふべき政

いへり、蓋し震は方位にて東に當り、五行にて木

る、故に此の皇のことをいへるなり、又禮記

0)

月

性を養ひ

て之を庖廚にて料理

し天神地祇及

び祖

先の

叉犧

民皆之に歸服す、故に宓(伏) 犠氏といひしなり、 を教へて肉食せしめたり、かゝる聖智の君なれば庶

に供へ祭るとを教へたれば又一に庖犧氏ともい

又鳥獣魚鼈を

捕獲する網罟を作りて、民に狩獵漁業

益

三皇本紀

於物畫地則人於繼。

宿一是帝弦以,犧綱,須年。也出。之龍,牲,罟, 娠し、遂に庖犧を成紀といふ處に生みたり、庖犧 嘗て雷澤に往きて神人の迹を 履み、之に威應して 妊天位を繼ぎて王となれり、母の名を華胥といふ、華胥 【講義】 なりしといふ、成長して 聖人の徳ありて 貌は常八と異りて頭部は人なれども體軀は蛇の 富む、即ち天を仰ぎ視 を俯し視ては山川高卑の形勢を觀察し、偏く鳥獸 ては日月星辰の現象を觀察し り、姓 春太春春師。庖 先代燧人氏に 之秋,山其,令,作。猿。宓。 胤 時。立,帝、故。三、有,犧* 創制 也有,一太易十龍 代的 如 任十峰稱。五瑞 0)

此の外衞颯の史要、劉知幾の史通、蘇轍の古史贊、呂 標註史記讀本百三十卷 同

纂釋史記讀本百三十卷

同

廣部鳥道 安藤定格

の中には別に史記の部ありて各、有益なる評論あり、 商権、銭大昕の二十二史考異、趙翼の二十二史箚記等 祖謙の十七史詳節、倪思の史漢異同、王鳴盛の十七史

測義 評 林 ---Ti. 百 百 + 卷 卷

彙評

百

+

同 iii 朋

史記 史記 史記

百

+ 四

卷 卷 卷

+

文

決

解

字

法

卷

史

記

註 補 論 輯

史

記

表 正

+ ----卷

悉 卷

疑

問 + 補 IE. 文 評

_

史記 史記 史記

菁華

錄

卷六卷

卷

史

記

記 記

書 本 箚 測

JE. Æ

譌三

毛 記

誤

----卷

卷

記

卷卷卷

史

註

百

+

記

天官書

證

+

吳鄧 芊 邵 徐汪程 方 林 克范增 子 儉 泰 田 星 元 永 伯 龍增 民 峜 鄉 桐 補越 補隆

> 史記 史記 史記 史記 史記

補

正

五五

卷卷

辯 助

誤

史記

律 雕

曆

補

正

史 記

題二

士

卷 卷

記 碑 致 辩 糾 文 列 傳 助 本 語 謬 評 文 解 稿 衡 + ----一卷卷七 H. 卷 卷 卷 卷

史記 記 律六 雋 史記 抄 + + 卷卷 九 集解索隱正 卷

記

Ti. 卷同 同 同同同 同同同同 同同 H 同 H 本

皆川 香川 松 佐 古 齋塚 中 同恩 井 崎 田 本 H 田 地 永 允 玉 秀敬 保 文 維 武 德 積 伯 煜象虎 周 明 矩 約

史記 史記

五

卷

義林 新論

同 同 同

太史公史記問

0) 相 0 いで出づるも、これによらざるものなし、

初とし、 代 記 順 0 に排列す 、歴代之を試みるもの多く數十家あり、左に 解は宋(六朝)の徐廣の音義裴駰の 集解を以

T

史記 史記

音三

史記

音義

史記註百二

同

史記索隱三十卷 集解八十卷 我十二卷 十卷 + 卷 卷 卷 同 同 同 同 同 同 同 (六朝) 劉伯 王元 馬 子 誕 莊 感

> 同 同

史記

地名二

司 同 史記音義三十

同

史記註百 史記 史記 史記題評百三十卷 史記纂訓百二十卷 正傳 名臣疏 iF. 義 卷 九 三十四 卷 卷

卷

朋 同 同 同 同 同同同

史 監 史記 史記考要

評抄

本史記 記

選要

余有丁 唐順之 張之象 何孟 幸春 雕

なり、

駒、 之れ 算び 史記 \$ 代に至りては學者之れを尊び註解义は 講ぜるより 0 類山陽等最も名あり て士大夫 を喜ぶもの 0) 朝時代は 我 國 家、就中皆川洪園 に傳 見るも其古くより既 の必修書たりき、足利 唐の 多く 來 せる 影響 、瑞仙 は、下道真常 をうけて漢書 は 恩 講 心田仲任、 解をつく に渡來 備 が之れ 時 中 しと共 代 せる 文評をつくる 井履軒 n 1= h を知 を大 至 1 徳川 b 之れ 岡 僧徒 る 伯 * 時

豐本の 亦異同 せり 詳ならず、神宗の 0 次に史記 ありて其 太宗 0 註を合刻 貞 索隱、張守節 0 あ の三皇本 刻 0 淳化 0 h り、其の 後 する 刊行 種類 |本?)を祖とし史公自 明 明 年 代に 0) 間 もの 1-紀を卷首に 數 二元豐年 本文 0 7 つきて略叙 稚 至るまで 正義を各本文 あ 刊 種の 隆·李 のみなりし 本 b 中 を以 多さに の刊 或 光縉 補入 刊行絕 は別 T せ 本 最 至れ 0 令 一序傳 ん、史記 は 12 か又註 初 定本 評林 えず に刊 に接 6 な 、或或 本は とせ 順序に 0 其 行 本な す 刊行 0) する は L ことは前 るより 順 以 h T より、 司 本(元 合刻 は宋 序 8 Ĺ B 0 馬 カコ 0)

> 本の重 州 統等の 乾道、淳熙 學者多く之れ 刊行は二 應熘 諸 な 杭州 諸刊 る 刊 鍾 、蜀等の 一種あ 8 本 南 0 1= 人傑、萬卷樓、汲 本あ り、左に表示す、 を 9 よる 諸刊 明 あ り、清に在りては 1 に在 葉山 本あ n 至 ば n b り、元に在りては 宋 房等の 6 ては葛氏 古閣 に在 而 6 諸刊 武 F て前 -德、 英殿、江 は 陳明 本あ 述 南監 元 以 施 6 至元、中 外其

覆刻で)——活字板——嵯峨本 宋元豐刊本——元至元彭寅翁刊本——朝鮮本

(前で解

活字板 和九年 ふ、我 國 とは 中 記刊行の 活字に 刊す る所なり、 T 嚆矢な FI 行 せるより h に之れ 4 2 そ 、吉田 嵯峨 本 庵 とい 完

八尾 8 せしもの 0 宋 板は > ◆(明、汪諒の刊本、蓋宋本) ◆(明、汪諒の刊本、蓋宋本) 刊 紅 寛永十三年 行 せ 屋板 るもの は寛文十三 なり 都 條 一年京都 0) 評 八 林 尾 0 助 紅 左 屋 門の 紅屋板 八尾板 刊行

中、八尾板最も盛に行はる、是より後史記を刊行する以上我國 に翻刻 せし活字板、八 尾板、紅 屋板三種の

0

做 . [72 3 3 せ 大 3 0) め 0 3 る 後 位 ならず、文學上 な 世 置 0) を占むるも 文 3 そ 1 ば E 史 に於て 記 0) 皆 は なり 叙 史 事 8 學 文 亦 Ŀ 0) 叙 1-祖 於 事 文 T の宗 Œ 史 學 とし 0) 習 祖 摸

傳 來

終 ず 末 佚 斬*の て王 中 9 9 孫 、范升は は 0 せ 武帝に建 記 孝元孝 明 る 通 撰 史 碩 成 は 國 延侯楊惲 帝 せ 儒 0 遷 IJ 漢 れどもの王鳴成 * 劉向 h の 0 後に 史記 成 (件す) 稱揚 鳴盛 傳 詔 歿 以 二帝 ・揚 補作 を受 其の 後、 0) 來 至り 姑く之を措く 併せ 班 雄 頗る疑義あり 後漢 經義 將 0) 孝 け 固 劉向 は T 頃 書 相 景。 て十 史記 も亦 遷 他 は之れ に違 を祖 1= 年 に褚 を以 孝武 至 0 表、 其 を 篇を亡 門人馮一 戸 6 述 小)、孝 に反 0 も亦 三王 删 せ て良史 0 ては學者 孫(率を當時の碩學 經 る三十 h 之れ 本 宣皇 に違 增入 世家 商 T 紀、 h + 7 は 0) を 帝の時、遷の知 帝 せ 禮 餘萬言 推 天 之 史 才 H るを責 3 不に宣 樂 稱 事 n あ 者 記 所 りとな 0 あ 兵 とない る者多 あ 重 續編 王 め、楊 策·傅 b 江 V 視 布 せ 漢 外 7 せ せ の最

楊愼 び 馬貞 S 評 な 衰 所 子 是 上に置くものあるも、こは後人の所定にして信據すべからず 、一司 傳を最初に置けり、後世正義を刊行して老子傳のみな伯夷傳の、 て (二子は 共に支宗の 時の人、唐の天子は李姓なるを以て同姓なる のれども、司馬・貞の 索際、張守節の 正義を以て 冠となるれども、司馬・貞の 索際、張守節の 正義を以て 冠とな なれ 史記 多 年 至 b 、呂 3 杜鎬 1 あ b ~ 3 n ・唐順 を史 集 ず h は 9 注 8 T E 一祖謙 宗の 0 0) 亦 は 解 め 清 明 鳴 金 E て大成 73 1= 三皇本紀 研 0 記刊 元以後 黄 如きは 朝 之·何孟 代 n 盛 肅 韶 究大 b 嚆矢となす 徐 1= から に至り 、凌稚隆·李 震 L 廣 趙翼 行の 注者 あ T せるも 始 b 8 眞 之れを親寫 春·王鏊·王世 史記 始 を撰 8 張 t 亦これ 德 は 7 王元威(中宗の人 鯆 は は文章 とす、當代に於ても亦史記を 、裴駰 玉 0) を校正 漢書と共 H W 史實 にし 王應 繩 光 て補 0 縉 十二卷 江 上より より 亦 其 推 此 せり て史記 L 集解をつく 樾 0 貞 に士士大 評 稱 0 h 葬で之を 史 1.t 考 林 諸碩 、又歐陽修、 と研 を始と を撰 評論 其 潜 注 は 坤等 (i) 夫必 解 諸 究 學 す 雄 t 論 卓 とは 亦 0) 太宗淳化五 FI る者 n 6 は レナ 絕 な 完備 讀 す 評 0 刻 6 其 少し 註 蘇洵 是 50 3 隱 、唐 多く せ の最 餘人 書と 釋批 も 稱 一方 n 包 h 父 質 3 0) 3 (= 40 3 せ

朋 茅坤

ども窮らず、之れを攬れども竭きず、丙家を蘊藉 屈 萬代を包括する者は、司馬子長の文なり、 宋以 來、渾々噩 一々、長川大谷の如~、之れ を探 n

叉曰く、

千里來 備はらざる なり、風 按を結ぶの處 り其 、史公 せんと欲するの處は、便ち正練中に於て一縷を 斷 くが如し、自ら手を下し難し、此れ皆太史公のみ を起すの なるは、則ち又千年以來絕えて無き所のもの 言 、の至を得る所にして後人の及ぶ所に非ざる 龍到頭只 隻簡 0 調の道逸、摹寫の玲瓏、神髓の融液 記 其 處を追ふ可し、中に於て 所なきが如し の文を讀め を識 0 一穴 二二千言の文を讀 る可く、後段を讀めば便ち前段 を求むるが如く、其の ば、蜉蝣襞 前段を讀 城中の生 めば、堪 一句一字を損 めば便ち 種 、情事の 奥の家 後段 形

朋 0 世貞日く

紀は己を以て 太史公は文に聖なるもの **尚書を釋く者なり、其の文** 行にして か、其 の文數 端あり、 帝王

> 以上 文章は其の優越 客・游俠・貨殖・諸傳は寄する所を發するなりすなり、其の文核にして詳に 婉にして調多 文宏にして壯なり なり、其 虚 文精嚴に て肆なり、 は己を以て戦國を損益せる者なり、其の 一諸家の評誠に其の肯綮を得たり、宋の蘇轍、遷 なり、春秋諸世家 の文暢にして雑なり、儀・秦・鞅・雕春秋諸世家は己を以て諸史を損益 して工篤く磊落にして感慨多し、 劉項紀信越傳は聞 なる志氣の發露なるを以て此の絶調 、河渠·平準·諸 く所を志すなり、 ・諸書は見る所を志 文雄に せる 其

を得たるを説 趙間 太史公天下を行りて ざるな を爲ること 0) る奇氣あり、これ豊嘗て筆を執りて此の如きの 貌に溢れ の豪俊 きて、 其 を學ばんや、其の氣其 と交游せり、故 の言に動き其の文に見れて自ら知ら 周 3 以に其の 四 海の 文疎 名山大川を覽、 の中に充ちて其 夢にし 婚 文

史記 とい 文法を學びて史を作れり、又唐の韓愈・柳宗兀二文宗 へるは、誠に能 0) 文は 此の 如し、故に歴代の く其の心を知るものといふべし、 史家 は皆其の叙次

と、能く史記を讀むものといふべきなり、

の四長をあげて日く、

寡くして功を成す こと博し ち人君强臣 てなるか、 爲して後の史をして及ぶなからしむるは是れを以 爲すの利を得るを樂しみ、直にして寛なれば則ち |君中國禮義の貴きを知り、微にして 切なれば則 1 て切なり(中略)、噫。隱にして彰なれば則ち善を 人過を悔ゆるの漸あり、簡にして明な して彰に、直にして寛に、簡にし 事制 0 患たる を知る、力を用 、、其 の能く春秋の機を て明に、微に れば則 ふること

宋の呂祖謙又曰く

文學上の價値

馬才子曰く、 と支那數千年また 之れあるなし、宋のの神に入ること支那數千年また 之れあるなし、宋の以古今獨步と稱せらる、其の筆力の勁健にして摹寫次に史記の文學上に於ける價値を見ん、史記の文章

絕壁 窮りなきが如し、 驚く可く愕く可く以て心を娛ましめ に泣くが如し、雄勇にして猛健 介量を見ざるが如し、妍媚にして蔚紆なるは、靡曼 深なるは、煙波千里太虚 を含混し萬壑 風怒逆し號走して 横撃するが如し、停蓄に 子長の文、其の奔放にして浩漫なるは、在瀾警波陰 為す、是れを以て變化出沒、萬象の四時に供はり 正人君子の 千軍萬馬 感憤にして め人をして悲しましむるもの盡くとりて文章と の攀跨すべからざるが如し、曲重温雅なるは、 として春粧の濃きが如く、秋飾の薄きが 0) 傷激なるは、貞女の 容貌の如し、凡そ天地の間 馳騙するが如し、斬絶峻拔なるは、斷崖 恨を なるは、龍跳虎躍、 呑み忠臣の 人をして憂 を呼吸し 、萬物の變、 如し、 7 m

巴蜀、邛、筰、昆明、(以上四川省

(直隸省

九江、汶、泗、(以上安徽省

會稽、(浙江省

姑蘇、彭城、(以上江蘇省

九疑、沅湘、(以 齊、魯、泰山、琅邪、勃海、鄒嶧、鄱 上湖南省 (以上山東省

朔方、(蒙古) 楚、(湖北省)

黄海、揚子江、淮水の流域、

答なれば深く) り蒙古 これによりて之れをみれば司馬遷は殆ど支那全國よ は 度を以て取捨して正確 分なる史籍により苦辛して資料を收拾し公平なる態 後の正史は多くは官撰になり、而も之れに及ぶ能 ず、其の正史の冠冕たる亦此にあるなり、 萬里長城 0))を傳へたる功績 部を 周せ の史實 もの は實に偉とすべし、史記 (筋のみならず、電入脱簡 なり、獨力を以 て不 (1)(1)

遷を論じて曰く 後漢の班固 其の著漢書に於て

所

を序すれば則 論 心ぶれば ずれ は はま 其 るところなり、 0) は 即ち勢利を崇んで賤 則 是非すること質 ち黄老を先に ち處士を退け して六 る聖人 て姦雄を進め 貧を羞づ、これ其 に終れ 經を後に 5 、貨殖を し、游俠 大道

老の學に通じ刑名の學を習ひ儒墨 す、心を虚しくして冷く材料をとり、其の信すべきに 欲し 圍 以前は之れを傳へず、項羽を本紀に列し、孔子を世家 ば後世の史家が儒教的見地より史をみこ自ら其の範 よりて直書し、以て一部の史記をなせり の識見卓拔公平にして、少しも成 に加へ、子貢を以て孔子輔佐 なるもの 卓絶にして眼光の燃犀なる、早く史なるも るものは此の り史なるものを解釋し且つ自ら其の業を伸ば と、何ぞ其 を狭くするが て故らに其の瑜瑕をあげ之れを護るのみ、 て正史の冠冕たる所以なり、宋の蘇老泉、 なるかを知る、故に筆を黄帝に起し の言の淺薄なるや、 如き狭隘な 如きことなし、是れ史記の價 るものに非ず、遷の の主腦となすが 固 はもと儒教的見地 敗を以て事 の學に深 、放に遷は黄 如き、其 値あ さん T 如如 史記 史な 3 其 見 何

諸侯より英雄偉人一技に秀出せる士に至るまで

記し る所は太古 8 司馬遷の史記は此の闕陷を滿さんが爲に著されたる るや、太中大夫陸賈時功を録して楚漢春秋を作れり、 たるもの 初より秦の始皇天下を統一するに至る迄の事を記 づる所を録した 後春秋の時に至るまでの帝王公侯卿大夫の祖先の出 共に左氏傳・國語の b 左丘明また一書を著して其の闕を補ふ、國語是れな を以て史書の なり、其の み、總史としては些の價値なきものなり、 て此の間になれる史書は れ三皇以後漢初に至る迄の歴 叙述を主としたれば史書として充分の價値あり、 、是れより楚の檮析晉の乗は亡びて存せず、春秋と の三子之が傳を作れ のにして、支那に於ける總史の嚆矢たり、其の記す たるものなれば、時代史・部分史として見るべき の黄帝より今代(司馬遷の時代)に及び、 國策あり(作者不明)、漢の天下を一 公羊穀梁二傳は義理を説 價値なし、左氏傳は之れと異なり事 3 もの み獨り著はれたり、此の後黃帝以 世本あり(作者不明)、戰國 り、左氏傳・公羊傳・穀梁傳是 一時代又は一部分の事を 史の略沿革なり、而 くを主とする 一統す 而

にして亦正史の冠冕なり、而も其の上に出 づる能はず、故に史記は 正史の嚆矢して漏 さず、後の正史をつく るもの皆之れに倣ひて網羅し傳へて 殘す所なく、禮樂刑政 貨殖の沿革亦記

漢初 帝に至り五經博士を置き盛に天下の遺記を集めしも 二、史實の正確、漢は 著作の資料を舉げて左氏傳・國語・世本・戰國策・楚漢 するにも甚困難を極めしものなり、後漢の班固 亦未だ悉~世に出です、されば司馬遷が史記を編纂 籍甚乏しく、惠帝挾書の律を除くと雖未だ集らず、武 河渠書・齊世家・蒙恬列傳・自序傳等によりて其の遊 聞の資料に資すべきものを收拾したり、 を得たるは明なり、又好んで平日四方に 太史合たりしかば朝廷の秘密文書よりも幾多の をあげしものにて、此の外六經論 春秋の數種に過ぎずとせり、こは せる地名をあぐれば左 の諸子雑記などは悉く参考したるもの 漢は秦火の後をうけたれば載 孟を始めとし先奏 其の主要なるも 今五帝本紀. 遊び逸事 なり、 傳

龍門、梁、(以上山西省空洞、汭、(以上甘肅省

照)より成る

り、之れに本づきて作りたるものなり、一、本紀 帝王の事跡を編年體に叙述したるもの

二、表 史上の事跡を一目の上に瞭然たらしむる

一、書 禮樂刑政天文貨殖の沿革史なり、之れは

四、世家 諸侯王の事跡を編年體に叙述したるものなり、此より先き既に世家の一體あり、諸

五、列傳 英雄豪傑學者文人忠臣義士循吏姦人よ

記が正史の祖と稱せらるゝは主として之れによる、此の體裁は紀傳體と稱し歴 代の史皆之れ による、史

事實とを得るに苦しむを以て、左丘明・公羊高・穀

最古の史乘なり、されど語の簡約

なるため其の

史學上の價値

一、正史の祖 正史とは紀傳體の史にして司馬の正確、論斷の公平の三項に分ちて叙述す、

史記の史學上に於ける 價値は之れを 正史の

もに亡びて傳はらざれども書經の堯典・舜典は實に 史官ありて左 史は言を記し右 其の一部なりといふ、此れより後三代に至りては各、 相といふ人よく三墳五典を讀むと見えたり、今はと 春秋時代までは存せしものにて、左傳に楚の左史倚 り、三墳は三皇の書にて五典は五帝の書なり、これ ず、抑も支那にて歴史 く史記以前の歴史の沿革につきて説 褒貶の意を 寓して世人を匡戒す、是れ 蓋し現存する になれる史なり、孔子魯の史記によりて春秋を著し 遷の創作にかゝる、之れを叙ぶる にあたりて は少し の楚の檮杌、晉の乗、魯の り、春秋以後は諸侯の國亦史官あり、孟子にいふ所 正史とは紀傳體の史にし の最も古きものは 春秋は皆其の國の史官の 史は事を記すとを掌 かざるべから 三墳五典な は

を述べ 下は監密 放 贖ふに足らず、交友教ふ者なく左右 家 意鬱結する所あり、工其道を通ずるを得ず、故に往 り、詩三百篇大抵聖賢 3 そ げ せず、遂に腐刑にかいれ することの深きを知るべし、是に至り其の り、孫子は脚 T 獄に下せり、遷獄に下る を聞き、書を上りて之れを救解す、帝大に怒り捕 财 の急に れて呂覽を傳へ、韓非は 逐せられて離騒を著し、左丘は明を失ひて國語 演べ、孔子は陳蔡に厄せられて春秋を作り、屈原 ばなり、僕以為らく國士の風ありと、以て其の推服 んと欲するなり 深く惟ひて曰く、夫れ詩書の 1-、此れ余の罪なるか、身毀れ T て來者を思ふ h 徇せんことを思へり、其は素 蓄積する所あ To に至る迄、天下の 遺文故事殆 ど之れ く人に下り、常に奮つて身を顧みず、以 を臏られて兵法を論じ、呂不韋は なり、取 なりと、是に於て上は黄帝 (憤を發するの作なり、これ 與 西伯は り、乃ち喟然として歎じて日 も家貧にして 貨賂以て自ら 秦に囚はれて說難・孤憤あ に從 て用 **髪里に拘は** ひ分別 ひられずと、退き 親近亦為に 譲る はれ あり 其志を逐 罪に陷る 蜀 を網羅 て周易 小より 1= T ~ 遷 南 T 國 儉

て叙次す、史記是なり、

是れ L 子)の時なることは推知し得らるゝも、 征 脱稿の賜ならざるかを推知せらる 記の脱稿も亦再任前 り、これより見れば再任は征和一・二年の頃にし 賢臣の義を述べて其の任官の非を責めし 寵せられたり、其の年月は詳ならざれ したることを知り得べきのみ、 るより T の暇、史記の添 文によれば、其の時は (五七〇)友なる益州の刺史任安が遷に かは得て知る能はず、たい現存せる史記 知る能 和三年(五七一)以後は中書令として官務 より先き遷は 見れ はず、從つて其の歿年 ば削正を全うせずして未定稿 削修正に從事せしならんも 刑せられて後、中書介となり、 なるべく、從つて再任 旣 に史記は脱稿 も孝昭 っなり ども、 其の 書を與 居 に答へたる のま (孝武 何年 其 をつ b 0 8 征和二年 誤謬 0 亦 へて古 なり くす て史 る な 南

體 裁

本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳(以上目次參史記は黄帝より漢の孝武皇帝までの史にして、十二

n

を論じ春秋を作る、學者今に至るまで之に則れ 世に至り衰微せり、夫れ孔 り泣きて曰く h 下の遺文故 ば汝必ず太史とならん、太史とならば吾 太史となりて論載せずんばこれ天下の史文を廢する 麟以來四 て功名を虞夏の世に著はし天 官の事を掌りしも、後 に上り最も貴重の官なりき、故に太史公の所には天 h 始まり、君に事ふる に中し、身を立つ るに終る、名を 欲する所を忘るゝ勿れ、且つ夫れ孝 後世に揚げ以て父母を顯はすは孝の大なるものなり て未だ果さず、將に死せんとするとき遷の手を取 りて海 て天下の文書は先づ太史公に上り其 に仕へて太史公となる、太史公は位 學び、易を楊何に受け、道論を黄子に習ひ、孝武 祖 余甚之れを懼る、汝其れ 之れを念へや、余死せ は世 内 一統す、其の間明主賢君忠臣義士あり、余 一餘年而して 諸侯相兼ね 史記放絶す 々周 事畢く備はらざるなし、談は著史の志あ 、余が先は周室の太史なり、上古より曾 の太史なり、父を談といふ、天官を唐 子舊を修め 廢を起し詩書 0 丞相の上にあ 一副書 に事ふるに 論著せんと h

h

抽讀し、孔子の意を稽へ詩書の源を會し、左氏傳・太史令となれり、是に於て石室、金匱(幾書の脈)の書 其 居延の地に至らず、匈奴急に其 急に陵の軍を圍む、陵の軍僅に五千人、以て當 利に從ひ往きて之れを征せしむ、匈奴兵八萬を以 ち五六四)にして偶、李陵の事に坐し縲紲 と、談元封元年(五五〇)を以て卒す、後三歳に に報ゆるなきを以て遂に出でて降れり、帝 陵を招降す、陵食乏しく救兵到らず、面目 も朝廷許さず、陵且戰ひ且退き連戰八日還 匈奴を殺すとも亦萬 餘人に及べり、陵援兵 らず、兵つき矢きはまり士卒死するもの過年、而し る、初め武帝の匈奴を撃つや、李陵をして大將軍 を以てし、大に其の文 語・戰國策・世本・楚漢春秋等によりて、接するに後事 奇士に ふ悉く先人次し と、遷首を俯し涕を流して曰く、小子不敏なれ 、深く其の人と為 の籍を削り妻孥を收捕せり、遷 して、親に事へ 給ふ所の舊聞を りに服す、日く、陵は を論次す、後十 て孝、士に の路を 交 も陵 論じて敢 は 年(天漢三年即 絶 と俱に郎 3 ち追撃 自ら守るの 0 を請 -以て陛下 りて未だ に幽せら 信あ 闕 るに足 して遷 かず 6

史記解題

名 義

史記はもと太史公書といふ、故に自序傳に、 凡そ百三十篇、五十二萬六千五百字、太史公書と為

始めて史記と稱せり、故に隋書經籍志以後の書目に は皆史記と著録せり、 記といひしは蓋し三國に始まる、三國志魏志王肅傳 後漢書ともに太史公書とい ひ史記 といはず、其の史 りしかば之れをとりて其の著書に命ぜしなり、 づくる例なり、此の書の とあり、古人の著書は多くは其の姓又は官を以て名 作者司馬遷は太史公の官な

史記の意義に 就ては唐の 張守節の言之れ をつくせ

古は帝王、右史ありて言(帝王の言)を記し、左史あ 述

卽 く命名したるものならん、 史公書は史官の 記錄を集大成 せるものなるより、此 ち史記とは 右史左史――史官の 記錄の義なり、太 と曰ふ、(史記正義卷首) りて事(帝王の行事)を記す、言を尚書と爲し、事を 春秋と爲す、太史公之れを兼ぬ、故に名づけて史記

知るべし、 國志蜀志張裔傳に「博く史漢に涉る」といへるを見て 史記は叉略して史といふ、此れも亦三國に始まる、三

作

せらる、使を奉じて巴蜀の地を征し邛筰昆明の地を朔三年(五三五)二十歳にして天下を周遊し郎中に拜 史記は前漢の司馬遷の著なり、遷字は子長、孝景帝中 元五年(紀元五一六)を以て龍門(山西省河東道絳縣) に生まる、年十歳にして能く古文を誦す、孝武帝の元

		孝武本紀第十二	孝景本紀第十
		第十二···	第十一:::::
•			
1 1		(目 錄 終)	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

-

五帝本義第一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	炎帝神農氏	女媧氏一	太皡庖犧氏	三皇本紀	註解參考書類	傳來	文學上の價値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	史學上の價値	體裁	作者	名義	史記解題・・・・・・・・・・・・・・・・・	
呂后本紀第九	一高祖本紀第八	項羽本紀第七	秦始皇本紀第六	秦本紀第五	レ周本紀第四	殷本紀第二	夏本紀第二・・・・・・・・・・・・・・・・・	帝舜	帝堯	帝嚳	帝 顓	黄帝	

史記第一卷 目錄

3 は當 出版 部 0 竊 1 自 5 誇とする所 な 9.

せ

大正八年五月

早稻田大學出版部

N

3 9 L 是 史 n 記 借出 國 出 字 版 解 部 を 0)" 大 巨 成 資 を せ 投 3 所 U 以 多 年 な 90 を 費 講 述 7 ř. 者 は 來 漢 何 文 人 界 8 1-企 昌 令 名 せ

嘖 嘖 た 3 四 敎 授 1 L 7 其 分 擔 左 0 如 し。

本 紀 表、

八 書 本 大 學 敎

+

授

桂

村

菊

池 湖 晚

香

松 平 康

國

等 は 3 制 度·法 網 羅 律 せ 風 ろ 俗 者 音 な れ 樂 0 ば 沿 古 代 革 0 よ 社 9 會 治 古 水 史·經 代 0 文 濟 史·古 化 を

牧 野 藻 洲

詳

1-

代

0

5 未 0 ~" \$2 だ 甚 3 た 貴 だ 稀 3 0 重 觀 和 な 0 記 な 解 9. 3 書 述 1 老 世 た 非 見 家 3 ず。 ず。 1-0 如 拘 此 故 3 5 時 1-は ず 1 讀 其 今 當 日 h 極 9 に 7 7 7 必 甚 難 史 要 だ 解 記 な 興 な 全 3 味 3 部 部 から あ 分 0 3 爲 和 は 8 に 解 之 却 0 を 7 を な 岩 閑 讀 n 成 封] ど む

B

8

す

曆

制

夫

文

學

史

記

0

八

書

七

列

傳

下

同

+

列

傳

上

目

同

+

世

家

せ

壁 和 況 に 3 0 2 漢 史 の に 天 な 大 文 記 基 n あ 出 解 な 永 才 h 書 B 成 ば 3 を 0 久 6 に 3 し。 文 前 坊 を を 修 眞 に 故 な T L 間 以 義 以 價 3 牽 然 む 文 に T を T T 學 古 以 0 發 强 0 3 3 は 史 群 稱 通 行 附 1-1-上 界 -3 人 3 讀 せ ぜ 籍 史 は 述 0 論 な 0 會 な 5 3" 老 記 必 書 和 珍 < ず 5 0 0 註. 3 參 すい 界 ず 解 3 0 如 寶 今 3 其 8 照 本 此 Lo 0 書 釋 1 3 8 0 完 女 史 L 文 書 尙 體 を 0 せ Po 記 部 施 尠 幾 1-を 故 5 ほ 制 全 評 は 選 之 多 に な 老 1 かっ を 3. 利 2 ナニ 林 5 0 錯 33 以 を 於 3 1 考 す 簡 10 解 9 3 T 8 軼 和 礼 T 衍 3 證 例 學 況 5 す 8 解 せ ば 0 字 史 B を ٤. 校 文 書 3 h 1-決 3 記 殆 經 脫 事 3 書 P 拘 L に B L 字 望 8 は、 其 E 5 7 古 於 7 0 に 之 誤 之 ず 孟 雷 來 偶 他 T 於 む な を g. 浪 1-を 史 字 殆 8 然 3 T 0 記 計 顧 校 ど 杜 全 0 個 に 7 -B 註 訂 散 非 朝 撰 部 釋 3 冷 人 皆 7 ず 釋 ず。 を な 1-書 す 黑占 埶 に そ を 誤 於 夕 5 書 あ 瓦 3 せ 0 3, n ch 脫 0 に 3 3 此 創 T 6 非 又 完 非 3 3 本· 書 意 B

千 記 5 0 を 忽 暗 n 0 は 5 3 良 祟 古 3. H 史 よ ち 人 哑 3 1-廉 0 本 拜 記 喜 に 吐 豫 0 9 3 頗 風 啦 軌 出 外 せ 接 を 讓 H 0 W 0 姿 史 3 範 6 本 文 忽 L 人 覺 2 面 あ 所 た T 外 を 章 ち 7 に 多。 典 H 9 3 善 史 著 愕 親 迫 諸 陳 以 あ 0 多 3 す 高 2 から な 古 3 L 3 9 平 9. 今 G. 辯 人 今 < を 樊 1= 忽 祖 聶 日 を 每 獨 其 見 を ち 本 政 噲 は 要 動 尙 日 我 步 懼 事 30 紀 2 1 陳 平 ほ を は は せ せ 必 が 3 2 は ず。 3 家 ず 賴 稱 忽 見 故 寬 機 樊 0 傳 之 1-山 ち 親 1 仁 に 噲 風 せ 老 見 由 戶 陽 5 沙 L の 0 姿 ----3 讀 れ < 部 語 3 3 誦 0 氣 面 あ 韓 り。 ~ な 3 如 自 其 紙 目 0 を 0 L り。 書 然 3 柳 5 話 史 上 出 あ 歐 史 記 9 2 3 已 1-勇 B \$ せ 記 後 蘇 聞 動 史 な 特 む 老 ば 者 記 1-1-讀 3 同 0 n 等 能 < 口 を 著 史 U 執 を 氣 叙 0 3 0 は が め 記 者 文 は 筆 大 3 如 ば 見 已 3 す に 刺 は 其 直 項 章 を 文 5 < 3 せ 稀 なる 文 嗜 豪 5 羽 各 客 1-9 1 人 む。 有 文 章 讀 B 1-本 な 廉 7 を 音 傳 借出 叙 0 0 L 亦 1 紀 U 頗 大 家 是 時 す 史 2 之 7 は か 1-

其 率 史 挾 史 則 L 聖 3 3 3 楊 記 ち 游 人 墨 叙 雄 む 3 亦 耐: 記 n 宜 事 渾 者 0 其 勢 俠 1 ば 會 申 0 文 韓 獨 2 固 利 繆 記 0 雅 を な 敢 變 健 雖 章 を 序 5 事 9 陋 T を n 崇 ず 擅 化 8 は を す 90 試 0 5 說 3 精 其 古 自 B に 筆 h n 4 1 せ 1-文 今 白 で ば 得 T 貨 は 大 獨 入 千 章 賤 則 道 後 3 傳 3 L 殖 所 9 歲 1 步 貧 ち を T を 漢 3 ^ 微 多 處 論 論 對 7 な 0 司 0 破 7 羞 U 9. 稱 馬 士 ず 天 漏 30 下 L 班 穿 老 女好 1= 7 せ 遷 づ。 n 固 荒 5 ち は 5 於 退 人 均 0 ば は 0 1. L 善 7 秹 30 大 2 け 則 壯 刺 日 9 1 < 3 墨 3 擧 客 を 史 T ち n 智 形 痕 斂 史 其 姦 黃 た が 游 才 遷 者 を 記 蔽 俠 尙 め を 雄 老 は 90 如 を 離 ほ T 激 を 其 3 安 0 は を 叙 n 淋 再 史 賞 3 進 先 是 温 は 幸 す 實 非 T 漓 拜 に 時 非 0) せ 1 8 神 た 1= 所 貨 2 す 事 3 せ 3 凡 0 に、 30 對 3, 1-7 學 蹟 3 な 殖 3 0 張 齊 六 寫 を 1 9 を 者 大 3 2 を 良 す 覺 を 7 述 經 ~ 0 天 B 1-多。 得 異 3 0 を 驚 才 3 大 ず。 は 妙 論 是 n 後 頗 1= 切 倒 は、 盖 張 ば 非 を に 3 な n せ

見 馬 置し 事 史 を 5 初 史 た を 大 遷 興 以 項 H の 3, 上 5 8 書八 卓 以 敗 嚆 0 T に 0 3 T に L 見 史 取 淮 7 同 矢 試 0 な 本 め 至 記 步 何 た 事 捨 9 た < み 紀 h る 事 9, が 蹟 變 7 1 我 世 せ 3 から 女 を 八 に 改 事 3 2 から 8 家 で、 爲 書 局 す 實 史 共 亦 8 特 大 列 1-0 律 1-學 に 1 限 1 そ H 1-傳 别 記 支 於 書 せ せ 5 0 よ 永 本 L 1 1 那 7 儘 9 表 5 8 < 史 7 h -7 漢 3 0 文 れ の を 見 修 0 等 種 漏 書 化 た に 記 せ 如 n 史 如 の 0 2 L 3 史 非 述 ば 以 年 ず。 3 0 3 部 經 倫 門 表 陋 ず す 歷 模 8 F 習 理 濟 F 2 史 範 亦 歷 を ~ 表一 而 を 2 史 餘 雖 は 之 代 分 を 3 2 L 打 歷 等 年 治 に 官 作 8 な T T B 破 濁し 史 0 以 歷 據 撰 3 9 史 れ 0 1 記 2 前 興 史 に 3 n 0 は 7 上 儒 多 述 敗 之 90 歷 私 0 0 0 L B 教 混 往 記 7 以 史 撰 1-事 0 0 外 に 同 端 時 事 著 則 何 史 添 蹟 な L 違 た を 1 -35 者 90 を 5 n ~ 儒 開 舵 切 史 3 た 在 0 8 る黄 教 け 道 記 之 史 4) 9 1 0 的 7 3 7 德 社 は 1-記 瞭 僻 は 司 治 觀 則 修 伙 會 總 0

た は 3 初 史 勿 學 3 記 論 史 1-記 0 往 誤 時 如 0 を 如 に 傳 3 於 名 3 3 著 古 7 3 1-1-今 8 對 獨 絕 過 L 步 對 3 ず。 T 0 1-尙 名 有 文 其 ほ 3 章 全 7 部 2 7 部 完 1 1-な 壁 て、 及 文。 0 ~ 章 和 支 3 解 家 那 和 書 0 Œ 解 な 理 史 0) 想 3 0 如 は 典 噶 3 は 大 型 矢 2 冠 現 正 聖 せ 冕 代

代

0

大

缺

陷

2

謂

は

3

3

~

かっ

3

ず。

時 史 3 人 す は 者 な 刺 代 9. 記 に 3 h L 切 答 所 から 之 よ 爲 T 部 史 百 は ----總 記 を に 分 9 太 網 著 以 + 古 史 0 前 事 卷 羅 技 0 せ 3 黄 L 3 L を 0 は 能 記 著 7 帝 者 T 今 見 殘 1-述 よ 1-せ ま す 傑 1 3 た 9 9 3 所 借 1= 3 出 7 ~ 支 干 代 過 左 せ かっ な ぎ 氏 年 < 3 に 那 5 ず。 者 及 に 3 傳 前 法 國 制 傳列 N 於 n 前 語 漢 帝 け ば 經 1-司 戰 時 馬 0 濟 至 王 3 治 代 紀本 總 遷 國 太 3 史 策 史 水 文 諸 史 0 普 部 で 史 0 公 侯 0 樂 記 善 王 嚆 分 如 司 風 家世 史 3 馬 2 矢 は 英 な た 此 7 は 遷 俗 り。 曆 3 雄 缺 見 何 0 豪 著 悪 制 陷 3 n 夫 す 傑 其 3 8 2 1 所 記 補 文 な 女女 3

發 行 要 旨

は 閣 的 字 過 故 1 3 9 專 及 ぎ に 8 1= 書 0 T 籍 註 史 攻 ば 0 束 は 1 記 漢 0 3 洵 ね は 國 釋 0 漢 3 に 5 今 字 書 學 學 偶 は 和 は n 0 は 隆 者 然 却 註 盛 解 何 W 初 2 ぞ 1 2 T 釋 學 期 0 偶 雖 Po す。 非 本 に に 0 非 8 3 幹 用 は 存 容 書 3" 漢 す 他 る 近 1 な な 時 籍 n 供 文 易 3 9. 1= 1 漢 に ば 研 B せ 其 變 殆 究 之 籍 5 0 U は を 極 然 國 5 れ に 字 國 用 斷 解 T 3 L は 釋 浩 1-解 字 を 1 自 片 瀚 書 爲 過 5 的 す 國 0 字 註 漢 に 3 なな の 2 き 註 廣 釋 能 ず。 2 3 1. 文 は から 釋 3 7 な る 0 註 解 3 爲 0 行 3 に 然 漢 釋 釋 3 な 未 は 至 3 杜 が 9 だ 籍 9 に 書 3 其 撰 爲 曾 は 曩 現 行 1 今 代 は を 或 T に な 0 極 90 部 史 至 g. 補 に n め、 記 高 助 在 或 分 n

史記國字解 發行要旨





史 記 圈 字 解





DS 748 S745 1919

v.l

Ssú-ma, Ch'ien Shiki kokujikai

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



解字國記點